



奉天藏書

各務文庫

1500
628

登錄和 196095 新
昭和 17. 3. 31

昭和 17. 3. 31
各務繁尾 印刷所

昭和 17. 3. 31
各務繁尾 印刷所





H. Kite



孰慮
斷行



昭初七子中於

邦彥



邦 漢 蘇 之 法 引 立 之 事 亦 蔭 社 運 益 增 調 上 位
返 巨 身 波 難 多 亦 嗚 呼 小 陳 若 其 此 程 萬 矣
亦 幸 在 予 系 之 五 午 亦 因 之 增 淡 伴 伴 去 育 育 肉
僅 七 以 時 後 會 之 滿 場 一 致 厚 榮 亦 成 之 見 予 身 以 後
契 此 七 尚 多 事 之 致 予 亦 小 有 之 畢 竟 各 修 智 識 尚
情 亦 亦 亦 之 深 之 氣 佩 之 事 之 不 能 申 也
今 回 暫 渡 半 日 休 息 之 在 別 以 理 由 而 去 之 通 之 程 之 事
情 亦 亦 亦 之 所 在 時 之 其 亦 亦 亦 之 內 容 亦 亦 亦 之 諸
般 之 設 備 完 事 之 用 一 井 以 之 查 西 海 意 稱 之 亦 亦 亦 之 諸
多 身 亦 亦 亦 之 融 及 一 日 以 之 聊 園 亦 亦 亦 之 亦 亦 亦 之 諸
外 之 亦 亦 亦 之 亦 亦 亦 之 亦 亦 亦 之 亦 亦 亦 之 諸
相 帶 下 中 亦 亦 亦 之 亦 亦 亦 之 亦 亦 亦 之 亦 亦 亦 之 諸
華 獨 教 亦 亦 亦 之 亦 亦 亦 之 亦 亦 亦 之 亦 亦 亦 之 諸
俄 本 紙 上 之 亦 亦 亦 之 亦 亦 亦 之 亦 亦 亦 之 亦 亦 亦 之 諸

大正九年一月

早稲田社

日作以也長 壽多又威

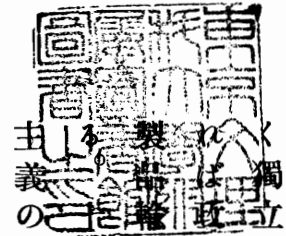
印 尚 意 標 各 位

獨立自尊
細心大膽

誠實努力
仁俠報恩

為新

緒言



我國綿業が他の諸工業に比べ、一步先じて、世界的産業として強固な基礎を築き上ぐるに至つた重要な理由として、當業者の間に克く獨立自由の精神のあつた事が特筆されるべきであらう。即ち動もすれば政府の保護に依頼するが如き事なく、原料の輸入、紡績經營、輸出についても、自力によつてその進展を計つて行つた事である。九世紀英國綿業が世界に覇を唱ふるに至つたのも、當時自由主義の濫觴が、ランカシア綿業地にあつた如く、我國でも、政治中心の東京と離れた我大阪に、綿業の隆盛を見るに至り、その當業者を一貫する精神が、この自由獨立にあつた事も決して偶然でない。私は畏友故喜多又藏君を偲ぶにつけ、彼こそ正しくこの尊き精神の權化であり、その精神の發揮がこれ丈け、我國綿業の對外發展に貢

献し得たか、惹いては我國商權の擴張に寄與し得たか、を憶はざるを得ない。茲に物した君の傳記は、云はゞ君の精神活動の發展史そのものに外ならぬ。

君は明治二十七年齡十八歳にして、日本綿花株式會社の人となり爾來卅八年、君の生涯は全く我社を中心として捧げられたと云つて好い。君即ち日本綿花會社である。従つて君が傳記は又以て我社發展の記録である、我社創立以來既に四十年當初は棉花買付を使命として生れたものであるが、我國綿業の發達と共に、綿糸綿布の輸出をも併せ行ひ、其後雜貨の取扱並びに各種附帶事業にもその業務を進展せしめた、その間時勢の變化に伴ひ、波瀾萬丈、實にあらゆる困難と曲折を経て、今日に至つてゐる。總ては皆之君の血と涙の結晶である。君の偉功を稱ふるは、又他にそれ／＼その人があるであらう。只予は、君がその後輩に残されたる尊き精神的財産を以て、

無上の喜びとする。それは外でもない、一昨年我國に來朝した英國綿業使節がその報告の一節に、語つた左記の日本人の長所そのものである。

『日本の國民は一種の驀進力を有してゐる、而してこの力は協力一致の國民性により鼓吹せられ、この國民性が日本をして他國民には堪え難しとする多くの危機を克服せしめた。又彼等は投機師の有する感覺よりも確實性のある一種の創造力と決斷力を豊富に存する國民である……』

本書はも／＼右の如き君が我社への尊き精神的遺産を記録せんとする意味に於て作られた我社の内部的勞作に外ならぬ。即ち君が偉大なる精神活動を経とし、日本綿花株式會社發展史を緯とし、只忠實に史實に基いて作られたと云ふ迄である。即ち之の編纂に當つても、總て之を社内に求め、大岡取締役を主任として、之に中井、

濱野の二社員をして補助せしめたに過ぎぬ。云はゞ全くの素人作であり、所謂巷間に見る傳記に比しては、其編纂技術、社會的興趣等自ら遜色なき能はぬであらう。乍去幸に山本達雄男、中橋徳五郎閣下よりの御題字、大方諸彦よりの尊き數々の追憶文御寄稿、さては故人舊知の方々より賜りたる種々の資料、而して加之右編輯諸君の熱誠、是等は相俟つて僅か數ヶ月の短日月に而かも豫期以上の大作を茲に成し遂ぐる事が出來た、右各位の御芳情に厚く感銘する次第である。

×

×

×

×

君逝いて既に一星霜。曾ては世界を駈廻つた君の英靈も、今は靜かに高野の山に眠つてゐやう。併し君の殘された潑刺たる企業家精神は、君の薰育を受けた若き人達の精神を通じて踴躍してゐる。總て事業は精神である。この書を通じて君に此喜びを傳へ得る事を私

は無上の光榮とする次第である。

昭和八年一月

日本綿花株式會社取締役
社長 南 郷 三 郎

凡例

- 一、本傳は年代順を基礎に叙述を爲したり、但し關係會社並支那問題に關する事項は便宜上別に獨立して記述を爲したり。
- 一、史實の根據を明かにする爲め、繁を厭はず故人の書翰を引用したり。
- 一、本傳の裝幀には故人が織緯商工業に關係深かりしに因み、特に故人の關係淺からざりし兩毛整織株式會社に依頼し、綿糸、人絹の經糸に、生絲、人絹の緯糸を配したる交織地を用ひたり。
- 一、背及扉の題字は遺墨中より拾ひ集め繼ぎ合せたり。
- 一、御惠送を忝ふせし追憶文はA B C順位に採録したり。
- 一、資料の蒐集ミ一般記述等については、大岡破挫魔主ミして之に當り、編輯、年譜、校正、雜務等については濱野恭平主ミして之を擔任し、中井榮三郎又資料、編輯等につき援助を爲したり。
- 一、尙對支問題の記述は主ミして前社員長野勳氏の勞作に據れり。
- 一、逸話篇中の挿繪は我社員山中巖、水野彦三兩氏の厚意に成れり。

昭和七年極月

以上

編纂委員 識

年譜

一、修養時代

年 齡	年 號	事 項	日本綿花會社關係事項
一 歲	明治十年	○九月 十一日奈良縣南葛城郡葛城村大字鳥井戸喜多長七郎三男に生る	
十四 歲	明治二十三年	○郷里を出で大阪市南區雙谷義兄松原恒治郎氏宅に寄寓、大阪商業學校に通學す	
十六 歲	明治二十五年		○十一月 十日日本綿花株式會社創立し資本金壹百萬圓、社長佐野常樹氏
十八 歲	明治二十七年	○三月 大阪商業學校卒業 ○十一月 日本綿花株式會社に入社、月給十圓支給せらる	
二十 歲	明治二十九年	○一月 大阪商業學校同窓會委員となる ○七月 孟買派員を命ぜられ廿三日神戸出帆 ○八月 廿七日孟買着	○一月 佐野社長辭任 田中市兵衛氏社長に就任 志方勢七氏常務に就任 志方常務米國視察さる

二十九歳	明治三十八年	<ul style="list-style-type: none"> ○五月 廿二日香村てい子と結婚 ○八月 十日在上海次第正藏氏逝去 	<ul style="list-style-type: none"> ○五月 神戸出張所開設 ○十一月 北清進出を重役會にて決議す 孟買取引を従來のガダム商會の外ヴォルカート商會とも取引を開始す
二十八歳	明治三十七年	<ul style="list-style-type: none"> ○此年綿糸支那輸出に努力す 	<ul style="list-style-type: none"> ○四月 馬場義興氏入社、漢口支店長に任命 ○七月 漢口支店開設附帶事業として堅締鐵卷工場を起す
二十七歳	明治三十六年	<ul style="list-style-type: none"> ○五月 二日神戸發上海、漢口に出張 ○六月 十日歸阪 ○六月 廿七日博愛丸にて志方常務と上海に出張 ○七月 支配人を命ぜらる 	<ul style="list-style-type: none"> ○七月 上海支店開設
二十六歳	明治三十五年	<ul style="list-style-type: none"> ○五月 歸朝す ○三月 卅一日三池丸にて孟買發香港西貢、清國楊子江沿岸視察、綿業販路調査の上 	<ul style="list-style-type: none"> ○會社開業後滿十年
二十五歳	明治三十四年	<ul style="list-style-type: none"> ○一月 十五日三等上席係長申付けらる ○十月 廿五日神戸發四度渡印す ○三月 卅一日三池丸にて孟買發香港西貢、清國楊子江沿岸視察、綿業販路調査の上 	<ul style="list-style-type: none"> ○一月 竹尾社長辭任田中常務代つて社長に就任 ○五月 山田稔氏米國出張員となる

二、活躍時代

二十一歳	明治三十年	<ul style="list-style-type: none"> ○五月 和泉丸にて孟買出發 ○六月 十日歸朝 ○十月 河内丸にて神戸出發 ○十一月 コロンボ、忠竹林經由、七日孟買着 	<ul style="list-style-type: none"> ○十月 田中社長、志方常務辭任 竹尾治右衛門氏社長に就任 田中市太郎氏常務に就任
二十二歳	明治三十一年	<ul style="list-style-type: none"> ○十二月 五等手代外國係孟買主任を命ぜらる ○十二月 廿九日鹿兒島丸にて孟買出帆 	
二十三歳	明治三十二年	<ul style="list-style-type: none"> ○一月 二十五日歸朝す ○九月 孟買出張員を命ぜらる ○十月 十二日神戸出帆佛郵トンキン號にて渡孟 ○十一月 五日着孟 ○十二月 三十日孟買出帆英郵船ヘニンヌラ號にて埃及に向ふ 	
二十四歳	明治三十三年	<ul style="list-style-type: none"> ○一月 十日亞歷山港に着 ○二月 二日歷山出發、十六日歸着、埃及棉買付エゼントを撰定 ○四月 十一日孟買出發 ○五月 初旬大阪着 	

三十歳	明治三十九年	<ul style="list-style-type: none"> ○五月 上海漢口へ出張 ○六月 六日歸社 ○七月 廿四日長女登志子嬢出生 	<ul style="list-style-type: none"> ○一月 漢口に棉實工場設置に決定す ○三月 山田紕育出張員歸朝 ○七月 重役會にて資本金百萬圓を倍額二百萬圓に増資決議す ○十二月 十二日東京出張所開設中村利三郎氏を代表者とす
三十一歳	明治四十年	<ul style="list-style-type: none"> ○當時大阪市北區本庄横道町に住居す 	<ul style="list-style-type: none"> ○二月 山田穆氏、山川萬吉氏上海、漢口經由印度に向ふ ○五月 事務所を今橋四丁目九番地に移轉 ○五月 廿二日孟買出張所開設 ○七月 山田穆氏を孟買出張所長に任命
三十二歳	明治四十一年	<ul style="list-style-type: none"> ○此年上海支店蹙跌を來し奮起社運の挽回を圖る 	<ul style="list-style-type: none"> ○八月 一日田中社長出發渡上 ○九月 田中社長歸路長崎にて客死、志方勢七氏常務取締役就任 ○十一月 田中市兵衛氏取締役社長に就任
三十三歳	明治四十二年	<ul style="list-style-type: none"> ○一月 二女はる子嬢出生 ○五月 上海、漢口に出張 ○六月 廿三日歸阪 ○十月 日本棉花同業會會長に就任 	<ul style="list-style-type: none"> ○十一月 十四日現在の大阪市北區中之島二丁目十番地の新築事務所に移轉す

三十四歳	明治四十三年	<ul style="list-style-type: none"> ○十月 一日日本棉花株式會社取締役就任 ○十一月 三女滿濤子嬢出生 	<ul style="list-style-type: none"> ○十月 山田穆氏取締役就任兼支配人を命ぜらる ○此年米國テキサス、フォートウオース市及紐育市に出張所開設
三十五歳	明治四十四年	<ul style="list-style-type: none"> ○一月 日本棉花株式會社取締役常務に就任 ○五月 九日出發上海、漢口、北京、天津、濟南、青島、大連、營口、奉天、安東、朝鮮經由 ○六月 十七日歸朝 	<ul style="list-style-type: none"> ○一月 南郷三郎氏監査役就任 ○九月 廿日青島出張所開設 ○十月 一日天津出張所開設
三十六歳	大正元年 (明治四十五年)	<ul style="list-style-type: none"> ○九月 北區堀川町の新宅に移轉 	<ul style="list-style-type: none"> ○九月 香港出張所開設
三十七歳	大正二年	<ul style="list-style-type: none"> ○六月 長男又太郎君出生 ○六月 大阪莫大小紡織株式會社監査役に就任 ○七月 廿二日出發米國、英國、印度埃及、歐洲への旅に上る ○十一月 四日米國フォート・ウォース市商業會議所にて日米親善の講演をなす ○十二月 廿四日ルシタニア號にて紐育發 	<ul style="list-style-type: none"> ○五月 四日大連出張所開設營口、鐵嶺、長春に出張員を派す ○十月 十日甲谷陀出張所を開設 ○此年綿布取引を開始す

<p>三十八歳</p>	<p>大正三年</p>	<p>○一月 十六日孟買着、内地及蘭買を視察 ○四月 八日孟買發埃及、歐洲視察 ○六月 廿七日シベリア經由歸朝</p>	<p>○八月 奉天、ハルビン、長春、營口鐵嶺に出張所を開設す</p>
<p>三十九歳</p>	<p>大正四年</p>	<p>○四月 大阪商工會議所議員常議員に就任 ○四月 廿九日出發、青島、上海、香港、漢口、天津、大連視察の上 ○六月 廿三日歸朝 ○六月 大阪莫大小紡織株式會社取締役 ○六月 大阪莫大小紡織株式會社取締役 ○此年大阪高等商業學校前校長加藤彰廉氏代議士立候補應援に盡力當選</p>	<p>○三月 テキサス米國出張所をテキサス日本棉花會社とす ○六月 廿四日資本金二百萬圓を五百萬圓に増加決定 ○七月 一日船場支店を開設 ○十二月 朝鮮棉業株式會社を買収す</p>
<p>四十歳</p>	<p>大正五年</p>	<p>○三月 廿八日大阪海上火災保險株式會社取締役 ○六月 南洋護謨拓殖株式會社取締役 ○六月 南洋護謨拓殖株式會社取締役に就任 ○六月 廿四日日本棉花株式會社取締役に就任</p>	<p>○三月 同上 ○六月 同上 ○七月 同上 ○十二月 同上</p>

三、全盛時代

<p>四十一歳</p>	<p>大正六年</p>	<p>○四月 大阪市教育會に入會 ○六月 五日日本棉花株式會社取締役社長に就任 ○七月 中外貿易株式會社(資本金二百萬圓)を設立し取締役に就任 ○九月 廿九日出發上海、漢口、天津、視察の途に上り ○十月 廿八日歸社 ○十月 日本棉花同業會會長を退任 ○十一月 二男豊治君出生 ○十二月 日本海員救濟會特別終身會員に列す</p>	<p>○六月 六日、木浦出張所を設く ○六月 九日中外貿易株式會社を創立 ○八月 裕元紡織を支那人及大倉と合辦經營す ○八月 中華滙業銀行に出資す ○此年羊毛及生糸の取引を開始す</p>
<p>四十二歳</p>	<p>大正七年</p>	<p>○二月 一日出發朝鮮視察 ○二月 十二日歸社 ○三月 日華製油株式會社監査役に就任 ○五月 大阪高等商業學校同窓會委員長に當選 ○六月 七日出發朝鮮に出張 ○六月 十六日歸社 ○六月 十五日朝鮮製油株式會社取締役社長に就任 ○七月 十五日朝鮮棉花株式會社取締役に就任 ○七月 十九日日華紡織株式會社創立</p>	<p>○二月 一日英領印度にカラチ出張所開設 ○四月 十五日横濱出張所開設 ○五月 資本金五百萬圓を千萬圓に増資す ○七月 南米出張所開設 ○七月 廿五日蘭買出張所開設</p>

四十三歳	
大正八年	
<p>○七月 取締役に就任 廿二日東亞興業株式會社監查役に就任</p> <p>○八月 墨國海産開發の墨國興業組合(資本金米貨廿五萬弗)創立に参加</p> <p>○八月 天王寺小宮町新宅に移轉</p> <p>○十一月 一日大阪結核豫防協會評議員となる</p> <p>○十二月 一日臺灣紡織株式會社取締役社長に就任</p> <p>○十二月 三日巴里平和媾和會議隨員仰付けらる</p> <p>○十二月 十日天洋丸にて横濱出發</p>	<p>○六月 ハーブルに歐洲出張所を開設</p> <p>○十一月 十五日名古屋出張所開設</p>

四十三歳	
大正八年	
<p>○十一月 任 中華企業株式會社取締役に就任</p> <p>○十一月 任 日本工業俱樂部に入會</p> <p>○十一月 懷德堂にて「戦後の大阪商人」講演</p> <p>○此年 日印協會理事兼大阪支部長に就任</p> <p>○此年 大阪綿布商同盟會評議員に就任</p> <p>○此年 個人事業として丸喜商店を開設し左の諸事業を統率す 雜貨部 資本金 六萬圓 南洋部 同 十萬圓 染色工業部 同 三十萬圓</p>	<p>○一月 丸喜商店事業中に紡織工業經營案を決定し同工場を猪名川に置く</p> <p>○二月 鈴政式織機株式會社創立取締役社長に就任</p> <p>○二月 猪名川紡織工場を猪名川染織所と改稱す</p> <p>○二月 嚴君長七郎氏逝去</p> <p>○三月 大正製麻株式會社取締役に就任</p>
<p>○三月 資本金一千萬圓を五千圓に増資す</p> <p>○六月 中村利三郎氏取締役に就任</p> <p>○十一月 李浦出張所を設く</p>	

四十四歳 大正九年

- 三月 猪名川染織所資本金を九十萬圓に増資
- 四月 日華製油株式會社取締役社長に就任
- 七月 猪名川染織所資本金を百萬圓に増資
- 八月 日本絹摺株式會社取締役に就任
- 九月 喜多合名會社を設立(資本金五百萬圓)し丸喜商店の事業を繼承する外更に株式會社紀ノ川製絲所(百萬圓)及び葛城園農場を經營す
- 九月 勳三等に叙し旭日中綬章を授けらる
- 九月 株式會社朝日精米所監査役に就任
- 十月 猪名川染織所の色染部操業開始す
- 十二月 猪名川染織所の織機三〇六臺紡機七、二二二錘操業開始す
- 此年 輸出綿糸組合常務執行員代表者及綿糸布總解合實行常務委員となり綿業界反動混亂善後策に盡力す
- 此年 百貨店株式會社にはや(資本金三千萬圓)の設立を發起したるも財界不況に遭遇し之を中止す

四、反動時代

四十五歳 大正十年

- 一月 廿七日日本工業俱樂部評議員に當選
- 四月 輸出綿糸布同業會會長に就任
- 四月 大阪商大基本金委員長に就任
- 六月 朝鮮に視察旅行をなす
- 七月 廿六日東亞製麻株式會社取締役に社長に就任

- 三月 濱松出張所開設
- 三月 プレイメン、ハンブルグに獨逸への棉花賣込機關メンカ・ゲセルシヤフトを設立
- 十二月 リオン出張員を派遣す
- 十二月 シドニー支店開設す
- 十二月 スラバヤ支店開設す

四十六歳 大正十一年

- 一月 廿三日日本工業俱樂部理事に就任
- 二月 十六日日華生命保險株式會社取締役に就任
- 三月 日本火災保險株式會社取締役に就任
- 四月 夫人同伴上海、漢口、濟南、天津、青島の視察旅行に上り五月歸阪
- 五月 廿五日旭絹織株式會社取締役に就任

- 十二月 廣東出張所開設
- 此年 倫敦出張所を設く
- 此年 伊太利にも棉花賣込機關を設置す

○此年 南洋群島に於て採收の樹皮を以てロープ製造の南洋織緯株式會社を創設したるも原料採收難の爲め兩三年後解散したり

		<p>○六月 大分セメント株式會社監査役に就任</p> <p>○八月 日本經濟聯盟に入會理事に就任</p>	
<p>四十七歳</p>	<p>大正十二年</p>	<p>○一月 中外貿易株式會社を解散す</p> <p>○二月 合資會社金剛商會(資本金十萬圓)を設立す</p> <p>○三月 十九日東華紡績株式會社取締役任に就任</p> <p>○三月 大阪市教育會特別會員に推薦さる</p> <p>○五月 南洋協會に入會</p> <p>○六月 一日華製油株式會社取締役社長に再度就任</p> <p>○七月 十九日蠶糸業同業組合中央會特別議員を囑託せらる</p>	<p>○二月 歷山出張所開設</p> <p>○六月 山川萬吉氏取締役任に就任</p> <p>○十月 濟南出張所開設</p>
<p>四十八歳</p>	<p>大正十三年</p>	<p>○一月 十日港灣協會正會員となる</p> <p>○二月 大峯鐵道發起人となる</p> <p>○二月 中日協會評議員に當選</p> <p>○三月 日華紡績株式會社取締役社長に就任</p> <p>○五月 二日帝國經濟會議貿易部議員に任命さる</p> <p>○九月 二日泰安紡績株式會社取締役社長に就任</p>	<p>○八月 人絹取引を開始す</p> <p>○十月 漢口に泰安紡績を創設廿四日開業式舉行</p> <p>○十二月 日華紡績は寶盛紡績公司を引受け喜和紗廠と改名す</p>

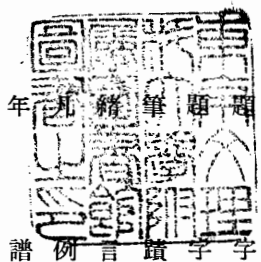
		<p>○九月 震災後生糸貿易措置に付き奔走す</p> <p>○九月 十一日發朝鮮視察をなし廿一日歸阪</p> <p>○十月 十四日發上海、漢口、青島方面視察に上り</p> <p>○十一月 十三日歸阪す</p>	<p>○四月 西貢出張員を置く</p>
<p>四十九歳</p>	<p>大正十四年</p>	<p>○四月 一日母堂永眠さる</p> <p>○四月 十五日發長女登志子嬢同伴上海、香港、廣東を巡遊さる</p> <p>○六月 大分セメント株式會社取締役社長に就任</p> <p>○六月 在華日本紡績同業會委員となる</p> <p>○六月 金剛商會の資本金を二十萬圓に増資す</p> <p>○八月 廿五日二女はる子嬢永眠さる</p> <p>○十月 二十日日本無線電信株式會社創立と共に取締役に就任</p> <p>○十一月 社團法人大阪工業會に入會</p> <p>○十一月 印棉運華聯盟會創立に盡力す</p> <p>○十一月 廿一日發上海に出張</p> <p>○十二月 三日歸阪</p> <p>○十二月 廿八日辻紡績株式會社取締役社長に就任</p>	

<p>五十四歳</p>	<p>五十三歳</p>	<p>五十二歳</p>
<p>昭和五年</p>	<p>昭和四年</p>	<p>昭和三年</p>
<p>○此年 日本綿花更生案を立つ</p> <p>○九月 阪神打出新宅に移轉</p> <p>○十月 日本綿三綾輸出組合監事に就任</p>	<p>○二月 上海に出張す</p> <p>○六月 金剛商會資本金を四十五萬圓に増資す</p> <p>○六月 九州に出張す</p> <p>○十一月 上海に出張す</p>	<p>○六月 日歸阪 陛下大阪行幸の御陪食の榮を賜り東アフリカ棉作事情御下問に奉答す</p> <p>○六月 金剛商會資本金を三十萬圓に増資す</p> <p>○六月 大分、若松に出張す</p> <p>○六月 廿九日南洋協會評議員となる</p> <p>○八月 二日日華經濟協會創立と共に副會長に就任</p> <p>○十月 二日港灣協會評議員となる</p> <p>○十一月 御大禮に際し正六位に敘せらる</p> <p>○十二月 九州へ出張す</p> <p>○此年 米穀調査會委員に任命さる</p>
<p>○六月 六割減資を斷行</p> <p>○十二月 瀧川儀作、野田吉兵衛兩氏監査役に就任</p>	<p>○六月 日置保彦氏取締役に新任</p>	

	<p>五十一歳</p>	<p>五十歳</p>
	<p>昭和二年</p>	<p>昭和元年 大正十五年</p>
<p>○五月 六日發上海青島大連視察廿四</p> <p>○四月 日濠協會創立に付評議員となる</p> <p>○一月 山口慶治氏を養子とし長女登志子と縁組</p>	<p>○一月 三品取引所棉花上場に盡力す</p> <p>○五月 十一日法政大學にて國際貿易に關し講演をなす</p> <p>○五月 廿四日商工審議會委員被仰付</p> <p>○十月 大阪汎太平洋俱樂部に入會</p> <p>○十月 廿三日發上海漢口に出張</p> <p>○十一月 十六日歸阪</p>	<p>○三月 十一日發朝鮮、光州、木浦に出張廿一日歸阪</p> <p>○四月 阪和電氣鐵道株式會社創立に付取締役に就任</p> <p>○五月 廿五日全南道是製絲株式會社取締役に就任</p> <p>○六月 ベル一棉花株式會社取締役に就任</p> <p>○九月 有恒俱樂部創立と共に第一次理事長に就任</p> <p>○十二月 廿六日兩毛製織株式會社監査役に就任</p>
		<p>○六月 朝鮮製油を日華製油株式會社に合併す</p> <p>○十月 加藤末雄氏取締役に就任</p> <p>○此年 モンパサ出張所開設 鄭州出張所開設</p>

<p>五十五歳</p>	<p>昭和六年</p>	<p>○四月 三十日日本綿業俱樂部理事に就任 ○六月 阪急對瀧川氏の阪國バス事件を仲裁す ○九月 大阪對支經濟聯盟幹事に就任 ○十二月 大阪放送局にて「英支關係に大問題と吾綿業界」を放送</p>	
<p>五十六歳</p>	<p>昭和七年</p>	<p>○一月 廿二日病床に就く ○一月 卅一日午前二時五十五分溘然長逝す ○二月 特旨を以て位一級を進め従五位に敘せらる ○二月 五日阿部野葬儀場にて社葬す ○三月 廿七日高野山地藏院境内の墓所に納骨</p>	<p>○三月 監査役南郷三郎氏取締役社長に就任 ○三月 武内和吉氏監査役に就任</p>

喜多又藏君傳目次



寫 眞 (一)

山本達雄男
中橋徳五郎氏
(二)

修養時代

姓 系 と 故 郷……………一

大阪商業在學時代……………六

日本綿花會社へ入社す……………八

日本綿花株式會社創立の事情……………九

孟買派出員に拔擢さる……………一八

旅 の 感 傷……………二〇

自重と決意……………二二

簡易生活を營む……………二三

寄合世帯時代……………二四

改進の建策……………二六

國辱に憤慨す……………二六

福島大佐の單騎旅行に感奮……………二九

殺風景の孟買正月……………三二

金の有難味……………三三

仕事好きの苦惱……………三三

憂國の氣慨……………三四

第一回の歸朝……………三五

遠大の抱負と妻探し……………三六

親心と子心……………四〇

新聞雜誌への投書……………四一

自重と修養……………四四

孟買回漕機關撤廢意見……………四七

同……………上……………(一)……………五〇

同……………上……………(二)……………五〇

兄の慰安に答へて志を述ぶ……………(一)……………五一

同……………上……………(二)……………五一

大悟徹底……………(一)……………五二

同……………上……………(二)……………五二

養子の拒絶……………(一)……………五三

同……………上……………(二)……………五三

社内改革の叫び……………(一)……………五三

同……………上……………(二)……………五三

歸朝を喜ばず……………六四

素人日本料理の實驗……………六六

二度目の歸朝……………六七

三度目の渡印……………七〇

三度目の孟買生活……………七三

高等教育の必要力説……………七五

埃及渡航……………七六

埃及見物……………(一)……………七八

同……………上……………(二)……………八〇

同 上…………… 八三

奉 公 の 熱 意…………… 八四

日綿内閣改造と君の拔擢…………… 八五

同 上…………… 八八

活躍時代

初 陣 振…………… 九二

肝 膽 相 照 ら す…………… 九三

綿糸取扱と對支發展…………… 九五

第二年目の作戰計畫…………… 九六

印棉の惡評と必死の挽回策…………… 一〇四

支 那 へ の 進 出…………… 一〇七

支配人に昇任(明治三十六年)…………… 一〇八

取扱商品と事業の擴張…………… 一〇九

日 露 戦 争 と 所 觀…………… 一一〇

米棉定期の苦き體驗と自制…………… 一一三

献 身 的 努 力…………… 一二五

漢口支店の開設と活躍…………… 一二六

三品受渡品の大量輸出…………… 一二七

夙に出商業の必要に着目す…………… 一二八

内部の結束と部下養成…………… 一三〇

隣邦人との親善に努む…………… 一三三

二百萬圓に倍額増資…………… 一三六

孟買支店の開設…………… 一三四

外商横暴の打破と積荷保護…………… 一三五

大阪築港利用の先鞭…………… 一三六

對支經營の大方針…………… 一三九

會社状態と將來の發展方針…………… 一四一

同 上…………… 一四二

同 上…………… 一四三

同 上…………… 一四四

同 上…………… 一四五

同 上…………… 一四六

上海支店蹉跌の警鐘に驚く…………… 一四七

上海缺損と陣容立直し…………… 一四八

更生努力	一四九
日本棉花の新築移轉	一五一
取締役に昇任す	一五三
重役に昇任後の覺悟	一五五
腕の牙え	一五七
上海利益の送金と今昔の感	一五九
實力主義の鼓吹	一六一
所謂福紡株事件の真相	一六二
北支への進出	一六四
綿布類取扱の開始	一六五
世界一周旅行(大正二年)	一六六
米國南部に於ける生活	一六八
米國南部に於ける感想	一六九
米國南部に於ける獅子吠	一七三
米棉包装の「パッチ」廢止	一七六
米國東部への巡遊	一七七
紐育より印度へ	一七八

印度より歐洲日本へ	一八二
歐米印行脚繪葉書通信	一八三
支店長會議と君の訓辭	一八七
歐洲大戰爆發と善處	一八九
紐育棉取閉鎖と君の豪膽振り	一九一
貿易會議と感懷	一九三
戦時保険補償法案に對する意見	一九五
南北支那の視察(大正四年四月)	一九五
日信紗廠の賣却	一九七
テキサス日本棉花會社の設立	一九八
五百萬圓に増資す	一九九
船場支店の開設	二〇〇
副社長に當選就任す	二〇一
我社株式騰貴に自省を促す	二〇三
日本棉花週報の發刊	二〇四
All One 主義	二〇五
南米進出と君の機敏	二〇六

全盛時代

志方社長の辭任……………二〇八

君の日本綿花社長昇任……………二一一

兩親を奉侍して支那視察……………二二二

十割配當……………二二五

二十五週年に際し社員に訓示……………(一)……………二二六

同……………上……………(二)……………二二九

同……………上……………(三)……………三三〇

新入社員を警む……………三三三

生絲取引の開始……………三三五

媾和使節隨員に撰ばる……………三三六

日本希望條項を提出す……………三三九

平和條約の調印……………三三一

巴里滯在中の一所感……………三三三

勞働問題に努力す……………三三四

精米業に着手す……………三三五

媾和事務以外の活動……………三三八

佛領印度支那棉花栽培意見……………三三九

國際勞働會議代表委員の沙汰止み……………三四四

印度視察と訓示……………(一)……………三四五

同……………上……………(二)……………三四九

同……………上……………(三)……………三五二

歸朝と拜謁の光榮……………三五三

媾和會議所感並我社支店巡察所感……………(一)……………三五五

同……………上……………(二)……………三六一

同……………上……………(三)……………三六四

平和樂觀の灼熱相場を警戒す……………三六六

五千萬圓に大増資……………(一)……………三六九

同……………上……………(二)……………三七〇

同……………上……………(三)……………三七九

大増資後の感懐……………三八一

新陣容の整備と訓示……………(一)……………三六二

同……………上……………(二)……………三六四

綿業界救済の對策に就て……………(一)	二六七
同……………(二)	二六九
綿業界の自治的救済と君の努力……………	二九二
叙勳の光榮に浴す……………	二九三

反動時代

第五十七期不成績と我社の態度……………(一)	二九五
同……………(二)	二九九
志方相談役の逝去……………	三〇〇
石井某の失敗と君の迷惑……………	三〇三
支那巡察と日支親善に努む……………	三〇五
支那棉業觀(大正十一年六月)……………	三〇九
棉花定期取引提唱……………(一)	三〇九
同……………(二)	三一〇
社員の心得に就て……………	三一一
關東震災と我社の損害……………	三一二
生絲二港問題に對する君の態度……………(一)	三二八

同……………上……………(一)	三二八
同……………上……………(二)	三三一
支那内地に棉花荷作工場を設備す……………	三三三
泰安紡績開業式に參列す……………	三三四
支那視察觀(大正十三年十二月)……………	三三五
支那に棉花栽培を計畫す……………	三三六
王正廷氏一行を歓迎す……………	三三七
和田豐治氏と肝膽相照す……………	三三三
經費節約と能率増進に就て……………	三三五
大正十三年末の所感……………	三三八
大阪商議會頭立候補の真相……………	三四〇
東阿弗利加への發展……………	三四三
第六十八期決算と覺悟……………	三四四
支那への休養旅行……………	三四七
社員を激勵す……………	三四八
御陪食と御下問奉答……………	三四九
緊縮方針を力説……………	三五一

大缺損と大減資……………三五

寺田某の提訴……………三五

大減資と整理に就て社員に訓示(一)……………三五

同 上……………(二)……………三五

同 上……………(三)……………三五

同 上……………(四)……………三五

最後の支那旅行と社員の代理旅行……………三六

濠州取引と我社更生の意氣……………三七

更生に對する確信と努力……………三七

ラヂオ放送と最後の獅子吼……………(一)……………三五

同 上……………(二)……………三九

同 上……………(三)……………三九

臨終と葬儀……………三九

追悼會……………三九

關係會社と諸團體

一、奉安紡績株式會社……………三九

二、日華紡織株式會社……………三九

三、辻紡績株式會社……………三九

四、裕元紡織會社の合辦……………三九

五、東亞製麻株式會社……………三九

六、阪和電氣鐵道株式會社……………三九

七、旭絹織株式會社……………三九

八、全南道是製絲株式會社……………四〇

九、朝鮮棉花株式會社……………四〇

十、秘露棉花株式會社……………四〇

十一、日華製油株式會社……………四〇

十二、遠州織機株式會社……………四〇

十三、南洋の諸企業……………四〇

十四、墨國興業組合……………四〇

十五、中外貿易株式會社……………四〇

十六、金剛商會……………四〇

十七、丸喜商店と喜多合名會社……………四一

十八、百貨店と貸事務所經營を企畫す……………四一

私生活

尤、其他の關係會社銀行及團體……………	四一五
恩義を忘れず……………	四一九
寄捨數十萬金に上る……………	四二二
親孝行……………	四二三
兄弟思ひ……………	四二四
東郷元帥の人格に私淑す……………	四二六
社交につとむ……………	四二九
敬神と運勢判断……………	四三〇
異性に對する態度……………	四三一
趣味と嗜好のいろ／＼……………	四三三
同窓會の爲めに盡力す……………	四四〇
財界の仲裁役を志す……………	四四六
相視會の由來……………	四四七
君の爲人……………	四四九
家庭……………	四五二

逸話

社員の自尊心を尊重す……………	四五五
庖丁の腕の冴へ……………	四五六
居睡料一千圓也……………	四五七
學者は跣足……………	四五八
又しても床屋で失敗……………	四五九
支那顯官を居睡りで待遇ふ……………	四六一
火事と聞いて便所入……………	四六二
健啖アメリカ印甸人を驚かす……………	四六三
仆れた動物に同情の涙……………	四六三
細心のいろ／＼……………	四六四
社員、喜多社長を隨行さす……………	四六五
ホウカイ節が畫材となる……………	四六六
戎さんとの奇縁……………	四六七
飛行機の綽名……………	四六九
眠りながら物を視る……………	四七〇

生酔ひの本性を憐む	四七三
目刺で御飯七杯	四七三
斯心ありて事業は育つ	四七四
斃れて後止む	四七五
席を譲つて立ちん坊	四七五
我身を抓めつて人の痛きを知る	四七六
風呂焚の役を勤む	四七七
眞先に田中家へ年頭の禮	四七八
社員家族はドウして居る?	四七九
忙中、社員の家族を見舞ふ	四八〇
偽宗教信者になる氣になれないよ	四八一
故社長の口説上手	四八二
動かざる事大盤石の如し	四八三
鋤燒御相伴の受難	四八六
薔若たる並木の由來	四八六
支那名士の御兩親招待	四八七
ア、支那人はドウした?	四八八

振つたマラソン振	四八四
門出の祝膳に心で泣く	四八五
對支問題の其意見	四八五

一四六

講演の遺稿

埃及紀行(英文)	明治三十三年二月	一
歐米視察談	大正三年七月七日	二七
ロイド保険に就て	大正三年九月十日	三一
對支貿易事情	大正四年十月一日	三六
故和田豊治氏を憶ふ	大正十三年八月	四七
惜春記	大正十四年八月	五三
支那問題について	昭和二年二月十六日	五九
重要視すべき日印貿易	昭和二年六月五日	六六
世界的綿業都市としての大阪	昭和四年六月	九六

追憶

喜多君を憶ふ	阿部房次郎	一
--------	-------	---

喜多又藏君を追想して……………	安宅彌吉……………四
故人を憶ふ……………	忠田嘉一……………六
近代的ビズネスマン……………	福井菊三郎……………八
追憶……………	藤山雷太……………
追憶の記……………	福本元之助……………三
震災當時の思出……………	原富太郎……………四
憶喜多君……………	橋本喜作……………五
追憶……………	今井五介……………元
敬慕する先輩……………	今西與三郎……………三
ヘル―棉花の恩人……………	井上雅二……………三
感謝の言葉……………	加藤彰廉……………三
巴里平和會議に於ける喜多君……………	木村銳市……………四
ウイスキー・ソングの想出……………	兒玉謙次……………六
綿業界の大恩人……………	宮島清次郎……………元
明朗玉の如き喜多君……………	森平兵衛……………三
喜多君を憶ふ……………	森川照太……………三
故喜多又藏氏に就て……………	武藤山治……………三

追憶(來信)……………	奈良武次……………三
有恒俱樂部と君……………	成瀬隆藏……………三
喜多君を憶ふ……………	野村徳七……………三
述懐……………	岡實……………三
新聞記者を良く理解した人……………	小川壽夫……………三
故喜多社長と主義……………	山東圓次郎……………三
商傑喜多又藏君を追悼す……………	佐藤曆次郎……………三
支那通の實業家……………	澤村幸夫……………三
中支開發の偉勳者……………	白岩龍平……………三
哭喜多又藏君……………	庄司乙吉……………三
喜多又藏君を憶ふ……………	副島八十六……………三
四十有餘年間の親交を追懐して……………	杉山金太郎……………三
パリで會つた喜多さん……………	高石眞五郎……………七
喜多又藏君を憶ふ……………	(故)武居綾藏……………七
在鑑照於神明……………	瀧川儀作……………七
孟買時代の交遊……………	高柳敬勇……………八
述懐……………	田中久吉……………三

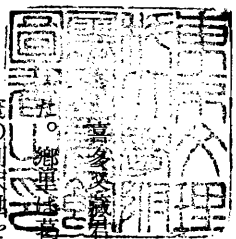
故喜多又藏氏の追憶……………	上田彌兵衛……………	八三
所感……………	八木與三郎……………	八四
偉大なる人……………	山崎一保……………	八五
人情美の喜多君……………	山本顯彌大……………	八六
恩人喜多氏の思出……………	瀬崎喜八郎……………	八七
感激の旅の憶出……………	近藤宗治……………	八八
朝鮮製油と社長の憶出……………	牛丸喜一……………	八九
追憶……………	袁蔚……………	九〇
In Memorium……………	Sir Purshotandas Thakordas ……	九〇
Late Mr. Kita—an appreciation……………	Dwarkanadas Tribhovandas ……	九〇
My Memories of A great man—Mr. M. Kita……………	B. F. Rowe ……	九一
In Memorium……………	Harry B. Webber ……	九二
In Memorium……………	A. Mayhew ……	九二
In Memorium……………	W. W. Campbell ……	九三
悼弟……………	喜多大藏……………	九三
○		
あゝがき……………	大岡破挫魔……………	

修養時代

修養時代

(明治三十三年迄)

姓系と故郷



喜多又喜多氏は明治十丁丑年九月十一日を以て大和國南葛城郡葛城村大字鳥井戸喜多長七郎氏の三男として生れた。郷里葛城山麓の僻陬ではあるが葛城山即ち金剛山の青巒を後に負ひ、葛城川の清流に臨んだ傾斜地で、一寰の別天地を爲した山紫水明の境である。

喜多家の系譜は遠く武内宿禰に出で葛城襲津彦の後裔である。本姓は紀氏、元伊豫國越智姓喜多氏なりしが、中世芝氏を稱し後又喜多氏を稱した。

中興即ち鳥井戸喜多家の初代は長九郎良業(寶曆十三年歿)と云ひ、之より農業の傍ら代々酒を醸し質を營み又里正を勤めた。長右衛門良昭(文化七年歿)長右衛門良堅(文化十五年歿)を経て長九郎良顯に至つた。

長九郎良顯は即ち又藏君の祖父に當る人である。其父良堅は百姓ながらも學問を好み、和漢の造詣も深く大に家運を振興した人であつたが、比較的短命であつた。良顯は幼にして父を喪ひしも長じて家業を受くるに至り、能く箕裘を紹ぎ益家運を隆昌ならしめ以て喜多家をして地方に重からしむるに至つた。資性溫厚篤實、神佛を崇

敬し、能く貧を恵み困に施した人である、曾て私財を捐て、大師堂を其邑妙相寺の境内に建立寄附した事もあつた、年四十の頃不幸にして失明したが能く天壽を保ち明治十七年七十七歳にして易簀された。

其子長七郎良進は即ち君の嚴君である、弘化二年の出生であるが、前記其父長九郎失明の爲め安政六年十五歳にて家督を相続した、資性聰明にして且つ剛毅果斷であつた。時偶々明治維新に際し大に時勢に見る所あり、副業たる質商を廢し酒造業を分家に譲り、専ら力を公共事業に盡し以て地方の開発に努めた。政治的方面には曾て



嚴母 君堂
喜多長七郎氏
多長七郎氏

奈良縣堺縣大阪府等の府縣會議員となり、明治廿三年初期帝國議會開設の際には衆議院議員候補に推されしも固辭して受けなかつた。實業的方面には明治三年開拓御用掛を拜命し、廣漠なる阿田野（大和國宇智郡）を開墾し二百餘町歩の果樹園を創設し、又南和鐵道（高田、五條間）の敷設に力を盡して以て地方の交通を便にし其他大和銀行、大和物産會社等各種の事業を創立又は關與した。多年是等の公共事業に盡瘁し殖産興業に勵精なりし廉を以て、遂に綵綬褒章を

下賜せられ其善行を表彰せられたのであつた。氏はながく政治公共に盡した功績は多かつたが、惜しいかな理財の道に敏ならざるものがあつた、壯年の頃高野山大徳院の許可を得て銀札を發行したこゝがあつたが（所謂當時の私立銀行）偶々明治維新に際し銀札の廢止に逢ひ、之が引換の爲め（所謂銀行の取付）殆んゞ資財の半ばを喪ひ、一大打撃を被つたのである。又後年日清戦後の經濟界の動搖に因る株式暴落の爲めにも尠からざる傷痕を蒙つた事があつたが、此時既に又藏君はやゝ頭角を顯はして居たので同君の力に依つて支持せられ、以て事なきを得たのであつた。

長七郎氏の夫人即ち又藏君の母堂政子は、紀伊國妙寺町齋藤傳次郎氏の二女であつて元治元年に入嫁し一女五男を擧げられた、性質温順、容姿端麗にして頗る慈愛に富んだ賢婦人であつた。

此長七郎氏夫妻は共に身體強健、長壽にして比較的多幸なる生涯を送られた。又藏君の孝心に依り盛なる金婚式を擧げ、又は晩年老夫婦相携へ支那内地を漫遊された事なきもあつた。長七郎氏は大正九年二月七十六歳にて永眠せられ、踵いで同十四年四月夫人政子は七十九歳にて長逝せられたのである。

長女（君の姉）うの子は大阪市南區鰻谷仲之町松原恒治郎氏に婚嫁した。寡黙にして貞淑なる婦人であつたが不幸短命にして二女を擧げたる後、明治二十九年三月三十二歳にして病歿せられたのである。

長男（君の長兄）長左衛門氏は幼時泊園書院の薰陶を受け師範學校に學びし事あり、身體壯健資性潤達、主として農園を經營し是れ亦父に劣らざるの企業家なりしも、惜しむべし其事業概ね失敗に歸し、殊に晩年其唯一の

嗣子奈良縣立御所農學校々々長農學士長右衛門君の病歿せし以來は爲めに健康を損し、昭和四年四月六十一歳にして病死せられたのは寔に嘆かばしい次第である。

二男大藏氏（君の次兄）は少壯東京美術學校に學びしも不幸にして大患に罹り、半途にして退學し、數年療養の末遂に健康を恢復せしも爲めに廢學し、郷里に於て酒造業を營み、後出版して攝津製油會社の幹部社員たりし事あり、大正六年又藏君が紀北地方の有志と相謀りて、妙寺製絲會社（後の紀の川製絲所）を設立するに當り、其常務取締役として赴任し、多年其職に在りしも、昭和五年都合に依りて引退し、今尙ほ妙寺に幽居、養痾の爲め閑日月を送つて居られる。氏は大象と號し、國語漢文に深き趣味を有し詩歌を嗜み又美術の鑑賞を娛しむるに當り、而して六人の同胞中今は唯一の生存者となつて居られるのである。

四男騎兵少尉正藏氏（君の次弟）は東京高等工業學校を卒業し、上海楊樹浦なる上海紡績會社技師長として赴任在職中、明治三十八年八月十日街上にて落馬負傷し、享年僅に二十七歳にして異域の鬼となつたのは惜しむべきの至りである。氏は頭腦明晰にして最も數理の學に秀で、資性磊落頗る豪傑の風あり。將來有爲の青年なりしも誤つて其好む所の乘馬に殉するに至りしは數奇の運命とやいはむ。將來の片腕として期待せし次弟に、先立たれた君の落膽は一と通りではなかつた。

五男邦藏氏（君の末弟）は早稻田大學商科卒業後某會社に就職せしも、幾許ならずして悪性の脚氣を患ひ、久しく病牀に呻吟の末明治四十四年七月は亦二十八歳を一期として夭折せられた。此邦藏氏の在學、就業、及び病



小學校時代

向つて右より二人目喜多藏氏

氣の療養等は父母に代つて君は一切之を擔當し深き友情を盡せしも、其効なくして早世せられしは惜しむべく君の爲めにも重ね／＼の打撃であつたのである。

さて前記列擧したる父母兄弟を有する家庭に於て長七郎氏の三男として呱呱の聲を擧げた君は、幼にして穎悟學業も群を抜いて居た。明治二十三年十四歳にして葛城高等尋常小學校を首席で卒業するや、將來商賣人として一身を立てむ事を志し、大阪に遊學すべく先づ父に乞はれたが許されなかつた。併し君の望都の念は益募るのみ

であつたので、意を決して慈母にすがり再び懇請止まなかつたのであつた。君の切なる希望はひし／＼と兩親の心を動かして終に許可を得たのであつた。君は飛立つ許りに喜んで旅装も軽く青雲の志を抱いて一步郷里を踏み出した。旅先の心得なき諄々こ説き聞かせ前途を勵まして見送られた御兩親の瞳には慈愛の露を宿してゐられた。君は男々しくも徒歩暗峠の險を越へて八尾に出で、八尾より汽車に塔じて大阪港町驛に下車し、其令姉の嫁ける鰻谷の縁家松原恒

治郎氏宅に寄寓したのであつた。

大阪商業在學時代

松原家に腰を落付けた君は、日々物珍らしげに市中見物に忙しかつた。流石に大阪は日本商業の中心だ、其繁昌振りを眼のあたり眺めた若い青年の心臓には烈しい鼓動を感じた、茲に君は愈商業によつて立身出世の途を講じようとの強い信念を堅めた。それには先以て新らしい商業教育を受けるのが時代適應だ云ふので、當時江戸堀にあつた大阪市立商業學校に入學することになった。

今日から見るに無論程度の低いもので豫科二年本科二年の四年制度で、所謂今日の甲種程度位のものに過ぎなかつた。

時の校長は府吏板原直吉氏の兼任で教頭には有



大阪商業在學時代——喜又多藏氏

名な簿記學の泰斗下野直太郎氏（最近まで東京商大教授であつた）であつた。下野氏は簿記の外英語を擔當し主任教授であつたが、其峻嚴さには生徒一同相當惱まされた。

當時同級生であつた人々の内、杉山金太郎氏（現豊年製油會社長）村田由藏氏（現日清紡績專務取締役）宮本清三郎氏（前富士紡績常務）故友野欽一氏（元三井物産會社監査役）田村順吉氏（前旭紡績專務）古館九一氏（現杵島炭坑專務）大岡破挫魔氏（現日本綿花取締役）堀内吉郎氏、故岩本榮之助氏（大阪公會堂寄附者、中途退學）等があつた。君は始め義兄宅より學校通ひをしたのであつたが、學友ミ親むに従ひ學友ミ共同下宿を便した、明治二十五年頃には學友杉山氏ミ常安橋畔のボート業者森川に下宿した、當時ボート熱旺盛の時であつたのでボート練習には誂へ向であつた、君は餘暇には能くボートを漕いだ、ボート以外に君は又川口方面の散策を好んだ友人を引張り出しては川口の出船入船の壯觀を打眺めるのを何よりの樂みとした、蓋し此時早くも君の心の底に他日海外雄飛の夢を書いて居つたのであつたらう。

君は同期生二十九名中での最年少者であつた、七歳も年長の學友も居つたのに此若き小柄で、丸々とした美少年の君は、多くの年長者に伍して何等ひけを取らぬのみか、明治二十七年三月の卒業期に於ては、僅か數へ歳十八の身を以て、第二番の優秀な成績を以て目出度業を畢へたのであつた、君の才學非凡なることは既に此當時に顯著したのであつた。

卒業後親戚の紹介を以て、有力な大阪の朝鮮貿易商布長事五百井商店に入った、君は入店に際し、父君からいろ

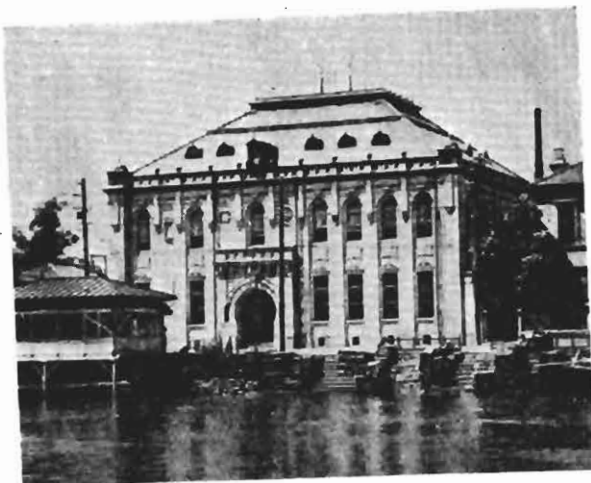
く處世の心得を言ひ聞かされたので、深く之れを心に銘し、仕事大事に大に精勵したのであつた、處が其店型なるものが向上に燃へて居る君の満足を買ふには不充分であつた。君は早くも失望した、到底長く一生を托する處にあらずと看破したので、數月の後熟慮退店を斷行するこゝまゝなつた。

日本綿花會社へ入社す

君が五百井商店を辭したことを聞いた卒業當時の校長成瀬隆藏氏（現三井合名會社理事）は、大に君の身上に同情し、種々斡旋する處あり、遂に日本綿花株式會社に入社するこゝまゝになつたのである、之れが君一生の綿業界振出しの序幕となつて切つて落されたのである。時は明治二十七年十一月日清戦争も酣の頃であつた。爾來三十有九年即ち君が昭和七年一月三十一日突如冥府に入るに至るまで、全生涯を日本綿花株式會社の爲めに傾注したのであつた。英國の大政治家ヂスレリーは云つた、

『成効の秘訣は、たつた一つある、それは目的を立てたら永久に變へない事だ』

君はヂスレリーの此言葉其儘を君一生の信條として、最初に志した綿業界に終始一貫努力奮闘を辭せなかつたのであつた、君が堅忍不拔の氣象も、剛膽不屈の勇氣も、緻密圖謀の周到も、君の處世をして最も有効適切ながらも迅速に展開向上せしめ、君は齡不惑に達せずして早くも綿業界の寵兒となり、武藤山治氏をして綿業界のナボレオンと推賞せしむるに至つたのであつた。



現在の本日本綿花株式會社

實に君も日本綿花株式會社は、所謂異身同體とも稱し得べき、切つても切れぬ深い因縁につながれ、日本綿花株式會社の歴史は、即ち君一生の歴史也と云ふも敢て失當でないを信するのである。そこで君の傳記を編むに當つては、勢ひ日本綿花會社の歴史を記述し、順次同社との關係を展開し行くこゝまゝ君の傳記其儘なることを信するものである。

日本綿花株式會社創立の事情

我邦紡績事業が猶未だ幼稚の域を脱せざる時代に於て、其原棉供給者には當時内外棉會社のみであつて、到底需要者を満足せしむべくもなく、勢ひ神戸在留の外國商に倚るの外なき有様であつた。然るに彼等外國商は當時頻りに商館風なるものを吹かし、此幼稚なる紡績業者に對して其壓迫を加ふるこゝまゝ殊に甚だしく無暗に暴利を壟斷して居つたが、其機關設備の無い悲しさには日本紡績業者も涙を吞んで彼等の跳梁を忍ぶ外に術がなかつたのであつた、併し識者は永く斯る状態に屏息すべくも

ない。果然當時の重なる紡績會社攝津、平野、尼崎、天滿の四當事者は憤然立つて、棉花輸入の自給機關として日本棉花株式會社の創立を圖つたのが、明治二十五年十月の事であつた。

其當時の設立趣意書は左の如きものであつた。

日本棉花株式會社設立ノ旨趣

綿物ノ需要ハ世運ノ開進ニ從ヒ愈々多キヲ加フルコト古今ノ通觀、内外ノ實相ナリ。頃年來我國綿糸紡績ノ業頻リニ起リ、既ニ製造工業ノ上乘ニ達シ、海外輸入ノ綿糸ハ之ヲ排却シ昨二十四年ノ如キ之ヲ輸入最多ノ年即二一十一年ニ比スレバ無慮六割四分許ヲ減ゼリ。(二十一年四千七百四十三萬九千六百二十九斤) 是レ國家ノ爲メニ洵ニ賀スベキ所也。然ルニ其原料タル棉花ニ至リテハ尙海外ニ仰カザルヲ得ズ、即棉花ノ輸入ハ綿糸ト反行シ一進一退其程度相等シキノミナラズ、年ヲ追ヒテ將サニ大ニ増進セントス。誠ニ廿四年ノ輸入ヲ以テ二十一年ニ對照セバ幾ンド三倍ノ多キニ至レリ。(廿一年一千五百九十五萬四千三百三十二斤、廿四年六千一百一十三萬三千八百六十八斤) 其進歩ノ速ニシテ且大ナルコト實ニ驚嘆ニ堪ヘザルナリ。

眼ヲ轉ジテ内外棉花産出ノ實況ヲ察スルニ、其量曾テ減却セザルノミナラズ(其筋ノ調査ニコレバ明治以前ハ五百八十七百四十六貫二千八百六十三貫トナル、而シテ二十年後ノ調査ハ未ダ完カラズト云フ) 翻テ増加ノ徵アリト雖モ、其需要ハ更ニ浩大ニシテ明治二十年ニ於ケ

ル國內ノ産綿ト輸入ノ綿類ト合算スレバ明治以前ニ對シテ無慮二倍半餘ノ割合ヲナシ、内國ノ供給ハ竟ニ以テ需要ニ應ズルニ足ラズ、況ンヤ我棉花ノ品質ハ紡績ノ用ニ適セザルニ於テチヤ。世ノ重農論者或ハ曰ク外國ノ綿種ヲ移植シ之ガ培養ニ勉メバ其缺ヲ補フニ足ラント、是レ或ハ然ラン。然レ凡嘗テ經驗スル處ニヨレバ移植ノ後年ヲ經ルニ從ヒ其質漸ク變ジテ遂ニ其功ヲ奏セズト。惟フニ風土氣候天然ノ制限ハ人力ヲ以テ之ヲ奈何トモスベカラザルモノアリ。且縱ヒ論者ノ言ノ如クナラシムルモ三、五年ヲ以テ能ク其正鵠ニ達スベカラザルコト更ニ辨テ俟タズシテ明ナリ。

此ノ如ク棉花ノ需要ハ自然ノ進運ニ從ヒ一年ハ一年ヨリモ多ク、而シテ我内國ノ産出ハ自然ノ制限ニ因リテ之ニ伴フコト能ハズ。是ニ於テカ外國ノ供給ヲ須ツハ是レ理勢ノ免レザル所也。殊ニ近來紡績ノ業勃然トシテ隆興シ其需要俄ニ多キヲ加ヘリ、昨二十四年ノ外國貿易年表ニヨレバ、輸入棉花ノ量實ニ六千一百一十三萬三千八百六十八斤(生綿ハ三割三步三厘餘ノ繰綿ヲ出スモノト看做シ換算セリ) ニシテ其元價八百九十九萬九千二百五十一圓餘トス。之ニ運賃其他諸費ヲ加算スレバ一千萬圓ニ出ヅルコト必然タリ。而シテ今ヤ紡績業ノ擴張ヲ謀ル者尠カラズ。其設計ノ錘數ハ無慮十萬本ニシテ之レガ爲メニ要スル棉花ハ少クモ一ヶ年二千五百五十餘萬斤ヲ減セズ。即チ其輸入ハ基年ヲ出デズシテ蓋シ八千百六十一萬斤餘ノ巨額ニ達スベシ。

内國ノ産出既ニ其用ニ應ズルニ足ラズ。外品ニ供給ノ道ヲ索メ圓滑便捷ノ法ニ由リ廉價ヲ以テ之ヲ購入スルハ其全國ノ經濟ヲ利スルヤ大ナリト謂フベシ。殊ニ紡績及其他ノ綿業ニ從事スルモノニ在リテハ得失ノ繫ル處實ニ

此ニ外ナラズ。設シ一旦供給ノ道澁滯シ若クバ其價直非常ノ騰貴ヲ致サバ當事者ノ困頓スルノミナラズ其影響ヲ社會一般ニ及ボサズンバアラズ。是レ豈漠然ニ付スベケンヤ。方今棉花ヲ輸入スルモノ三國曰ク支那、曰ク印度、曰ク米國其他諸國ヨリ來ルモノハ僅々算フルニ足ラズ。而シテ支那棉花ノ輸入ハ既ニ年餘ヲ經テ其業程略々定リ又將來増大ヲ要スルノ景況ナシ。之レニ反シテ印度及米國ノ棉花ハ近年始メテ回漕シ來リ我が時好ノ愈々細糸ニ傾クニ從ヒ、駸々トシテ増進ノ勢アリ。是ヲ以テ本邦ノ人往々眼ヲ此ニ着ケ其賣買貿遷ヲ經營セントスル者亦漸ク起ルト雖尙未ダ需要者ノ望ヲ充タスニ足ラザルノ觀ヲ免レズ。且若シ今日之ヲ置キテ顧慮スル所ナクンバ彼ノ外人ハ立ドコロニ機會ニ乗ジテ大ニ爲ス所アラントスルコト必然ノ情勢ナリ。果シテ然ラバ手數料若クバ他ノ諸費ノ得喪ハ姑ク論外ニ舍クモ、此必須商品ノ集散交通ヲ左右セラレ爲メニ不測ノ害ヲ蒙ルノ虞ナキコト能ハズ。其品質ノ撰擇ノ如キモ亦常ニ需要者ノ意ニ適スルヲ得ザルハ今日ニ微シテ知ルベシ。是レ吾人ガ茲ニ此會社ヲ設立スル所以也。會社既ニ立ツトキハ廣ク内外ノ商況ヲ察シ交通ヲ便捷ニシ取引ヲ圓滑ニシ以テ紡績及其他ノ綿業ニ裨補スルノミナラズ全國ノ經濟ニ於テモ亦將ニ大ニ利スル所アラントス。今ヤ吾人進爲ヲ要スルノ時機ニ會ス。冀クバ四方同感ノ諸彦幸ニ此舉ヲ贊成セラレン事ヲ。

目録見要件

一、當會社ハ明治二十三年法律第三十二號商法ノ規定ニ準據シ株式組織トナスコト

一、當會社ハ内外國棉花ノ賣買ヲナスヲ以テ營業ノ目的トナスコト

一、當會社ハ日本綿花株式會社ト稱シ本店ヲ大阪ニ置キ内外樞要ノ各地ニ支店又ハ代理店ヲ設クルコト

一、當會社ノ資本金ハ一百萬圓トシ之ヲ二萬株ニ分チ一株ノ金額ヲ五十圓トナスコト

但資本金額四分一迄ハ重役ノ協議ヲ以テ必要ノ都度募集スベシト雖其他ノ拂込ヲ要スル場合ニハ株主總會ノ決議ヲ經ベシ

一、當會社株式ノ半額即一萬株ハ發起人ニ於テ之ヲ引受ケ他ノ半額ハ廣ク募集スルコト

明治二十五年十月

日本綿花株式會社發起人

池田仁左衛門	糸谷忠藏	伊藤九兵衛	岩田惣三郎	本俣利一郎	富村三郎	岡橋治助
--------	------	-------	-------	-------	------	------

赤	平	廣	木	佐	福	山	野	浮	中	田	竹	金	龜	川	岡
城	野	岡	原	野	本	本	田	田	村	中	尾	澤	岡	上	崎
友	平	信	忠	常	元	治	吉	桂	利	市	右	仁	德	利	榮
次	兵	五	兵	樹	之	兵	兵	造	七	兵	衛	兵	太	助	次
郎	衛	郎	衛	樹	助	衛	衛		郎	衛	門	衛	郎		郎

而して明治二十五年十月十一日設立願書を、時の大阪府知事山田信道氏に提出、越へて二日、十月十三日附を以て『願之趣聽置く』との同知事よりの許可があつた。

依て同年十一月十日創立總會を開催し左の通り初代役員の顔振れが決定した。

同	同	監	同	同	同	同	同	取	社	末	末
金	田	査	富	野	龜	末	池	締	長	吉	吉
澤	中	役	村	田	岡	吉	田	役	佐	平	勘
仁	市		三	吉	德	勘	仁		野	三	四
兵	兵	治	郎	兵	太	四	左		常	郎	郎
衛	衛	助	吉	衛	郎	郎	衛		樹		
							門				
							門				

社長佐野氏は外務書記官（元農商務書記官）を罷めて實業界入りをされたのであつた。佐野氏は明治二十二年七月九日外務大臣の命を奉じ、當時大阪紡績會社副支配人川村利兵衛氏、三重紡績杉村仙之助氏を従へ印度に渡航し、大日本紡績聯合會の爲めに、同國棉産地及紡績業の事情を具さに調査し、有益なる報告書を齎らして同年末歸朝した人で、當時に在つては印度綿業に關する新智識の第一人者であつたのである。

佐野氏社長に就任するや、一日も早く海外の取引先を撰定するの必要を感じ、同氏は同年十二月二十一日社員と共に印度及埃及地方綿業視察及取引方法畫定の爲めに出發、翌年五月十一日歸阪したのであつた、此時に於て

孟買 英商 ガダム・バイテル商會

歴山 獨商 アンドレ商會

の二社を日本綿花會社の取引先に撰定したのであつた。

斯くて實際眞の海外取引を開始するに至つたのは明治二十七年一、二月の交であつた。従つて明治二十六年六月三十日に終る第一期間の取引高は僅かに

日本線綿 十三萬五百六十二斤 此代金二萬四千三百一圓廿四錢一厘

外國線綿 三百卅二萬五百六十三斤 此代金六十五萬四千九百五十二圓五十錢九厘

に過ぎなかつたに不拘、猶且つ左の如き好成绩を挙げ第一期より些少なながらも株主配當を成し得たのは奇蹟でも云ひ得やう。

第一期利益金九千二百八十六圓五十錢六厘

内

金九百二十八圓

金一千五百圓

金一千圓

金五千圓

金八百五十八圓五十錢六厘

役員賞與金	積立金	配當金	後半期繰越高
		(一株ニ付二 十五錢ノ割)	
			以上

當初當會社は假事務所を大阪市西區靱北通四丁目七番屋敷に設けたが、翌明治二十六年十月二十三日、現在の事務所々在地の一部たる中之島二丁目拾番拾壹番屋敷無慮百二十三坪を購入して、木造事務所の建築を爲し、明治二十七年七月二十九日工竣りて新事務所に移轉したのであつた。

佐野社長は明治二十六年十月十三日上海綿業視察及支那綿取引方法畫定の爲め渡支、同年十一月十日歸阪し、

一社員を上海に派出、支那綿取引に従事せしめた。

一方印度綿取引に就ては、前年社長に隨行した光吉社員を其儘孟買に残し、ガダム商會の間に介在して取引の圓滑を圖らしめたので、支那綿、印度綿取引上相當の成績を擧ぐるに至つた。

佐野社長は就任以來銳意社業の進展を企圖されたが、明治二十九年一月一身上の都合で辭任せられ、田中市兵衛氏代つて社長に新任を見たのであつた。當時の常務取締役は志方勢七氏、取締役兼支配人は池田仁左衛門氏で夫々新社長を補佐されたのであつた。

支那綿、印度綿、埃及綿取引に就ては既に手配が整つたのであるが、米國綿取引に就ては未だ本國商人との直接取引關係が出来て居らぬので、明治二十九年七月二十三日志方常務は社員一名と共に米國に向はれたのであつた。志方氏は米國着後當時シカゴ市に在つた高峰讓吉氏及紐育郊外に在つた河野次郎氏（後社員に採用、現に國際企業社經營）等の助力により、正金銀行紐育支店長の推奨を得てフィラデルフィヤ市「マクファデン兄弟商會」を我社のソール、エジエントに探定されたのであつた。之れぞ我國に於ける米綿直輸入の嚆矢であるのである。志方常務が其目的を果して歸阪されたのは、同年十一月十九日の事であつた。

明治二十七年六月印度綿取引の進展に資する爲め、従來臨時に滯孟せしめた光吉社員を都合により招還し、新に常駐の派出員を派遣する事に議一決し、社員間に其候補者を物色の結果、遂に白羽の矢は、最も若年の君に立つたのであつた。

孟買派出員に拔擢さる

日本綿花株式會社が、原綿供給の目的で紡績會社に綿花商との縁故者によつて、創立された事情に就いては前

に述べたが、紡績初期時代に於ては其太番手原料たる印度綿の輸入が、其最も重要にして且つ有利なるものであつた。

日本綿花株式會社は、印度綿輸入の爲めに、夙に孟買に於ける一流の綿花輸出商英人ガダム・バイテル商會（明治二十九年十月一日單にガダム商會に改稱）に直接取引を行つて居つた。そして之れが取引の助長に連絡上の便宜の爲め、特に派出員を同商會内に派遣して居つた。當初此重要な任務に就いたのが、光吉社員であつた、同氏は語學に堪能で而かも相當材幹ある仁であつたが、遺憾せん商賣道の心得薄く、本社當局を満足せしむるに至らなかつたので、明治二十九年七月當時の田中老社長、志方常務は熟議の末同人を大阪に招還し、代ゆるに白面黃嘴の一青年社員喜多又藏を以てすることに決定したのであつた。

其時君は入社後未だ二年足らずで、外國課の一隅に、電信に一般通信事務を管掌して居つた一下級社員に勿論驚月給十二圓に過ぎなかつたのである。其齡僅かに弱冠に達した許りの君が、多くの儕輩を抜いて一躍此重任に倚るべく拔擢の光榮を擔つたのであるから、此一事によつて如何に君の天資英邁にして、夙に有爲の材幹を具備して居つたかを明かに證し得ると思ふ。

斯くて君は明治二十九年七月二十三日奇しくも志方常務の米國視察に同日に、盛大な歡迎裡に喜び勇んで、英船「オスポルン」號の客となり、懐づかしき神戸の港を西へ船出したのであつた。大志を懐ける君が高く聳ゆる六甲山脈を仰ぎ見つ、神戸港頭を離れて遠く印度洋へ志したまきの、君の胸中の高鳴りが如何に強く響いた

かは今より想像に難くないのである。

けに大和の海無し國に生れた、若き血に燃へた未丁年の君が、一舉遠く太平洋を乗り切つたのであるから、壯志勃勃意氣天を衝くの概があつたと思はれる。一ヶ月有餘の長旅びに於て、見るもの聞くもの悉く君の鋭敏な頭腦を如何に強く刺戟したかは、後年君が世界的雄飛の跡を見ても、能く推し測り得ることなのである。

當時君が香港に寄港したとき、其港の風物は慥かに君を引き附ける或物があつたらしく、「流石に其名に背かぬ香ひの港ぞかし」を君は葉書便りを書いて居るのである。

新嘉坡、古倫母に異様の腫みを見はりつゝ航海三十六日目の、明治二十九年八月二十七日一路平安、目的地たる孟買港に到着したのであつた。

旅の感傷

君は孟買着後取引先の、「ガダム・バイテル」商會へ日々通勤の身となつた。正直で純な君は本社重役より受けた重大な使命を一日も早く完全に成し遂げんことを、若き功名心は輝いた。大きな獲物を求めんことをあつたが、期待は意外にも裏切られんことを感知したのであつた。

「ガダム」を大阪本社との間に、直接交換された電報の内容は、當然直ちに君の手に明示されるものと、一圖

に思ひ込んで居たのに、一向そんな親切な様子も見えず、何んだか他人扱ひの冷遇振り、所謂敬して遠ける如き態度しか受取れぬを見た君の胸中は不平と不安の二重奏をかなでたのであつた。

思ふ事心に任せぬ旅の身には、一入旅愁を感ぜずには居られなかつた。

君は當時郷里の父君に、次の如く聊かホームシック的な、心細い氣分を洩らして居るのである。

『夜分なきは殊に無聊を覺へ、時々故郷の夢なき見申候節は、一種異様の感に打たれ、始めて外國に居る人々の心中、能く相分り申候』

自重と決意

君は今の儘であれば一年が二年滯孟した處で會社の爲めにも、將た一身の爲めにも面白くない、寧ろ大阪に引揚げた方が増しではあるまいかと、一時思ひ詰めたのであつたが、弱年ながらも流石は君である。

待てよ、己れはこんなに氣を弱くするのでは



孟買渡航當時——喜又多藏氏

なかつた、已れは會社の重役、兩親、友人等に夫々堅い決心と強い信念を以て、進んで大任に當つたのだ、何、之れしきの事で、へこたれてたまるものか、石の上にも三年の譬、假令如何なる艱難辛苦が湧いて出やうと、之れを耐え忍び、之れに打勝つ勇氣あつてこそ、初志を貫徹する所以であつて、それが會社の爲めでもあり、又一身の爲めでもあるのだ。

と健氣にも思ひ直して、ジツミ押し耐へ、形勢の好轉を圖るの途を講じよう決心した。此時家嚴に送つた君の書面には

『只々此上は専心勉強、他日成功を遂げ神戸埠頭に再び皆様に會見仕候空想のみにて日を暮らし居候、兎に角小生は孟買滯留者中、殊に九年前日本人の始めて孟買に参り候者の中、最も若年者にて、又同級生中外航の嚆矢者にて、幸に皆様の眷顧を得居候故、此機會を外してはこの考へも有之候に付、萬更らの馬鹿は不仕何卒此邊御安神願上候』

と一轉して、鐵の様な堅い決心と、強い信念を示して居る。

其後明治三十年正月元日家嚴宛てに送つた年賀状の一端にも

『孟買は熱い辛いと承知で來たわたし、踏出すからにや何處までも、遣り通さにや歸りやせぬ』

端唄作り替へを記して益々其決心の堅固振りを示した。

柵櫃は双葉より香ばしとかや、實に君は一青年時代に於て、早くも其非凡なる材幹の閃めきを見せて居る。

簡易生活を營む

君が孟買赴任當時の給料は一ヶ月僅かに十二圓であつたことは前に書いたが、孟買滯在手當が此外に印貨一百留比(當時約五十三圓)支給された。如何に若年の君は云へ、苟くも日本の一有力綿花會社を代表する派出員に對し、このやうな少額の手當では、到底其面目を保持し得べくもなかつた。君は孟買着後、紡績聯合會孟買派出員の山崎知遠氏と共に下町コラバにある下等のホテルに寧ろ事實安下宿屋に同宿するを餘儀なくされた。當時日本郵船會社孟買支店支配人であつた谷井氏は、そんな安宿に下宿されては日本人の體面に關するから、匆匆他のより良きホテルなり、借家なりに移轉して呉れと特に忠告した程粗末な生活振りであつた。成程そうでもあつたらう。三井物産、正金銀行、日本郵船會社等の社宅は、何れも山手の住宅地に堂々構へられ、玉突きを始め圍碁、將棋、花加留多等娛樂設備萬端整へて有つて、何不自由なき紳士生活なるに反し、日本綿花會社の派出員たる君は何等娛樂機關にも恵まれず、夜間の休養時には僅かに同宿の山崎氏と種々の談話に耽るか、讀書するかで時を費すの外は無かつたのであつた。三井、正金、郵船なきに遊びに行かんに、遠方の事で馬車代(往復二留比)の奮發は君の懐では容易の事では無かつた。又散歩なき氣温高き此地では、愉快に出来る筈のものでないで、汚穢しいホテルに蟄居するより外致方も無かつた。日本に居つた時の様に、手軽に芝居其他の慰みを爲し得るでは無し、浴衣がけの夏の宵のそとろ歩きに、涼風を滿喫するなきの氣輕さも味ひ得ない。而も湯風呂

代時留在買孟



向つて前列左より
喜多又藏氏
西卷氏(正金)
渡邊氏(三井)
金萬書記生
高道氏(正金)
中列左より
左端?
曾根伊作氏(三井)
野間領事
川嶋氏(正金)
兒玉謙次氏(正金)
川畑敏太郎氏(三井)
後列左より
庄司乙吉氏
故三木氏(正金)
青木清太郎氏(正金)
間島與喜氏(三井)
市川氏(三井)
横島氏(正金)
中桐氏(綿織器械商)

は一回四安(約二十錢)を要するので
百度近くの熱氣に滿身汗みぎろになつ
た汗臭い疲れた身體を、度々湯浴する
快味に耽る事も出来無い、風土の關係
上水代はりに飲むソーダ水さへ、腹一
杯飲むか飲まぬかの辛抱に氣を配りつ
ゝも、一ヶ月ホテルの支拂ひだけで、
百五十留比に達せずには濟まされな
かつた、如何に辛抱強い君も、此收支の
合はぬ勘定には悲鳴を擧げるの外な
かつたのである。

寄合世帯時代

君は着孟々々金錢問題に觸れるこゝを快しませなんだが、さりとて此儘では毎月喰込み一方なので、遂に君は



命令を仰いで欲しい、然らざれば我輩の要求を許可して貰ひたいと搦手から迫つた、君の持前の強い押しの一
手は、此時代から應用され始めたのであつた。
君は自分の要請が當然許可されるものと見越して、其返事待つこゝに、腹を決めて安宿を引揚げ、コラバ
橋花現物市場附近にあつた一借家の、四階の一アパートメントを聯合會の山崎氏と共に借り受けて、明治二十九
年十月、其處に引移つたのであつた。君が一生涯を通じて、機敏に大膽に、活躍した其性格は既に業に當時の

青年時代に早くも胚胎して居つたのであつた。

果せる哉、君の申出は妥當のものにして、重役は快く承認したのであつた。

君の此新世帯にはゴア人一名(クック)土人二名(ボーイ)を使役して、男やもめの簡易な寄合世帯を始めた
のであつたが、兎に角生活の變化に多少の可笑味を感じたらしい、其當時故郷の父君宛てに

『乍我一ト廉の世話人間と相成候様被考、心中密かに面白くも又可笑しくも有之申候』

と述懐して居る。

君は此粗末な借家から、事務室の在る「フォート」の「ガダム」商會迄十四、五町の處を毎朝鐵道馬車で通勤

午後五時に歸宅するのが例であつた。君は月手當を増加しては貰つたが、何分物價不廉の爲め家賃と食料等に、ザット百七十留比もかかり、餘程節約せねば遣り切れぬので、自ら交際等も控へ目になさざるを得なかつた。それで夕方歸宅後の君は、時々同館の山崎氏と大言壯語閑を遣る外、孤影悄然として籠城生活を試みるの止むを得なかつた事は氣の毒であつた。尤も住宅は前面「バック・ベイ」の内海を控へ、遙かに海岸に突出せる「マラバールヒル」のブル住宅地を一眸の中に收めて眺望絶佳、生れて始めての海邊住ひに、せめて心を慰めて居つたのであつた。

夜分なき退屈凌ぎに、山崎氏と大聲揚げて歌の稽古に耽つたもので、御蔭で大抵の歌の文句だけは、暗誦出来たは凄腕だが、肝腎の節廻しが皆目分らず、よい加減の自己流節は振つて居るではないか、時々山崎大夫が義太夫らしいものを唸るに、君は傍らで太きなステッキを小脇に三味線代りして囃し立て、互に顔見合せて呵々大笑した喜劇なき、時々演じたは何んも朗かな珍妙さではないか。

改 進 の 建 策

君が孟買着後取引先ガダム商會の行動に、嫌らない事情は前に述べたが、君はツクづく自分の立場の面白からざるに想到し、色々考へた末、ガダム商會が直接大阪本社に打電引合ひするのを廢めて、大阪本社と自分との

間に直接電信往復を爲すことに改むるこそ、自分の使命を果たす上に、必要の段階だと思つたので、君は明治二十九年十月二十八日附で、時の本社支配人岡田勝行氏に建言して、其必要を力説したのであつた。斯くすれば市場の成行を按じて、ガダム商會に臨機の指値をなし得る爲め、從來の如く甘味を彼等に奪ひ取られる憂少なく自然派出員の經費位は優に稼ぎ出し得るに云ふのであつた。君が孟買着後日尙淺きに不拘、早くも此卓見を申請し商才を揮はんこせしこは、如何に君の手腕が夙に卓越して居つたかを推知するに足ると思ふ。

本社への建策は不幸にして容るゝ處もなかつたが、月日の立つに連れガダム商會の態度も漸次改まり、外人の意志も次第に疎通するやうになつて、明治二十九年の暮頃には、大體圓滑に運ぶやうになつて、君の仕事も追々面白く立行くやうになつたので、君も安心して會社の爲めに努力奮闘を續けたのであつた。

君は當時の本社幹部が優柔不斷、消極的に傾いて居たのみならず、最も重要な印度棉産地さへ、まだ足踏みせぬのを常にもさかしく思つて居たが、遂に君は岡田支配人に對して、明治三十年四、五月迄に是非一度印度視察に來られるやう大いに勸説に勉めたのであつた。其時君は

『孟買にて矢張人間の住む處にて、左したる健康上の懸念も無之候』云々
 と皮肉つて居る。

君は實際統率者たるものが、其所管區を親しく視察してこそ始めて適切なる指導を爲し得べきものだ堅く信じて居つたのである。君が後年日本綿花會社常務及社長として其位地に立つや、勉めて各支店所在地の實地視察

を試み、殆ど寧日なき有様であつたことは、君の持説を實行したのであつて、従つて其世界各方面に散在せる支店、出張所に對する指導は概ね其緊背に當り、能く部下を統率信服せしめ得た所以であつた。

國辱に憤慨す

明治二十九年頃の、孟買在留日本人は正金五名、三井物産五名、領事館二名、郵船會社二名、紡績聯合會一名、日本棉花一名、都合十六名に不過、尤も此外に所謂醜業婦の一群及其關係のもの計四十名有つたが、君は此状を目撃して憤慨に不堪、明治二十九年十月二十八日附、嚴父宛ての書面中に

『正業者の數誠に少なく、我商權の不振は嘆すべき事勿論なるに、他の方面にて尙更憤慨に堪へざるは、醜業婦三十名許りも在留し居り、之れに附隨せる親方なるもの、及び醜業婦等唯一の樂みたる一軒の飲食所を加へて、合計四十名以上に達し居り、誠に國家の爲め切齒扼腕仕るべき事に存候得共亦憐れむべきは無智の田舎娘が、外國にさへ行けば、金が落ちてども有る如き考へを爲し、惡むべき水夫上りの者等に誘拐せられ、あたら一生を又救ふ可からざる境涯に沈め、少なくとも十年は異域の碧眼奴に弄せられ居る事に御座候。彼等の大部分は各處を經廻り、遠きは「ザンジバル」即ち亞弗利加に及び、新嘉坡近在を本據とし、正業者の足跡をも入らざる地方に困難を嘗め、我國體を耻かしむる事誠に筆紙に盡すに忍びず候、乍併是れ只表面上の理論のみ、

假令日中右様侃々論難するの輩も、夜は彼女等に戯れ居候は各地一般にて、殊に當地の如き何も爲すこともなく、在留民の少なき場所にては、○○如き○人さへ、其巢窟を見舞ひ居り候、實に論難すべきに相違なきも事情亦許すべきものたるべきか』云々

盛んに硬論を唱へる一方、同情論をも述べて居る處が面白い、蓋し君も亦事情止むを得ざる渦中に投じ、風流才子の轍を履みたるものか。

福島大佐の單騎旅行に感奮

明治二十九年十二月三日當時有名なる福島大佐が、孟買に着かれた時の模様を故郷に通信して居るが、痛く君の感奮を促したのであつた。

『福島大佐は昨年十月發途、埃及、土耳其、小亞細亞近傍(第一區)、ビルマ、印度地方(第二區)及波斯裏海沿岸(魯領)ターケスタン(第三區)の旅行を終られ、一昨朝當孟買に歸着、領事官舎に宿泊中なるが、又々明十二月六日當地出發、暹羅、安南、東京(第四區)を経て明年三、四月頃歸朝の由、昨夜は領事官舎にて山崎聯合會派出員及小生二名招待に預り大佐と會食の榮を得申候、御旅行中の話種々承り、御困難の狀を拜聞仕り轉々感慨の情に不堪、小生等如き蛆蟲輩は益々努力國恩に酬ひずては不相濟と相感じ申候。

大佐は性質仲々緻密に被爲涉其紀行の如き甚だ精細を極め感服の外無御座候。軍事上の御偵察は勿論なるも其他萬事に心懸けられ、日記には雨、晴、等の天氣模様より行程は謂ふに不及、所感なる項中に面白かりし事馬鹿氣た事、憤慨に堪へざる事、苦しき事、愉快なりし事等一々月日まで御記載相成居候、御旅行中は大抵騎馬（此度は借馬なりし由）なりし趣にて其内、日射病、熱病、胃加答兒、腸加答兒等にて御困難遊ばされ候由殊に波斯砂漠中日射病に罹られたる節は最早生命は亡物に御覺悟相成りし模様にて其時の事相聞候節は暗涙に咽び申候。

御旅行中到處の名所にては其地植物の花木被相集。金花集に名付け書物に貼付有之候中に珍らしきもの有之候。大佐の御話にては各三部宛有之三部は皇子に御献上相成之に地圖及説明を附し聊か宮様方の御参考に致され候御考の由、之等は英雄の胸中閑日月に申す事ならんに乍蔭考居候。

大佐の身體の健康なる、孟買も平氣にて歩行被致、服裝に御頓着なきには小生等大に耻入候。此回は前旅行より餘程御困難被致候由、夫れかあらぬか、少々御瘦せ相成候様見受け、髯なきには白霜相交居候、併し非常の元氣にて昨夜も印度飯を大椀にて六杯、何の苦もなく換へられ、食後酒々をこして、久振にて日本飯を食ひ、喉まで詰めたれば、苦しいこ小供の謂ふが如き口調にて被話候。

昨夜は日本料理にて、膳部一切調ひ居り鶏肉の××焼頂戴、久振りにて日本に居る心地致候。

大佐旅行中馬具、水入、食器等拜見候、随分是等は日本にて新聞種に相成可申候。小生も孟买来ればこ

そ、大佐なきに一堂に會食するの光榮を得、大に面目を施し申候、身若年に候得共、一社を代表致居候故、領事等の好遇を辱ふし居申候』云々

大佐の雄志堂々たる國士の態度、其緻密なる性格、生命を眼中に置かずして探險に邁進された勇氣、皇室に對する奉仕の忠誠振、身體の強健に其健啖振、等悉く希望に向上に燃へて居る君の心線に、異常のショックを與へ之れが將來君の出世上に、これ程多大の影響を與へたかは推察に難くないのである。

君が後年商策を練るに、如何に用意周到で有つたか、生命の有らん限り如何に全精力を日本綿花會社發展の爲めに傾注したか、布袋然たる健全體の持主として平素一、三人分の食量を平氣で平らけたこと、國家本位に商權擴張を主張した事等何れも、君が若年の當時、大佐にあこがれたもの其物を、君は身躬ら之を實踐したと云ひ得るであらう。

殺風景の孟買正月

君は明治三十年の正月を異國で迎へた。而かも生來始めて不愉快極まる正月なのであつた。屠蘇もなければ餅もなく、浴衣掛けて、まづい洋食を嚙つて新春を迎へた殺風景加減には、流星の君も故郷戀しい氣持がしたらしい。其翌三十一年の元旦にも同じ體驗を繰返した。

『不相變殺風景にて、屠蘇組重を祝ふに非ず、七五三繩、飾葉、雜煮餅の設けあるに非ざれば、一月元旦も雖、何等新年らしき心地不致、僅に鳩の壽喜焼に澤の鶴一瓶を神酒代りに喉打鳴らし、腹肥やせしに過ぎ不申、哀れ果敢なきは天外一孤客の状態に候』

ミ、日本の友人に悲鳴を揚げて居るのである、今日の孟買では日本内地に變らぬ正月儀式の御馳走に舌鼓を打ち得るのであるが、時の力の變化こそ實に恐ろしいものである。

金の有難味

君は明治二十九年八月二十七日孟買に着任以來、對ガダム折衝、印度事情通信、自己修養等セツセミ働き研いたのであつた。ガダム商會との取引も漸次圓滑に進捗するようになり、日本綿花會社の成績も良好の方で、廿九年下半年には兩三年來持越しの損失を補充した上、尙一割配當を爲すこゝが出来たので、田中老社長、志方常務も孟買棉に對する君の努力に満足され、特に鄭重なる謝狀を兩重役より載いて面目を施したのであつた。

そして其時の賞與金、給料等で同社の株券一百株を買取つて貰つた、君は二十一歳自力で株式會社の株主となり得たことを喜んで、ツクツク金の有難味を感じたのであつた、其當時君は此事實を故郷の父君に申送つて

『努々浪費相慎しみ此上の貨殖を念み致し可申、何卒御安神有之度候。尙御手許に御遊金も有之候はゞ、日本

綿花株券御買取を御勧め申上候、非常に好望なるは小生大保證仕候』云々

ミ早くも君一流の貨殖法を發揮して居るのは面白いではないか、君は爾來益貨殖の方法に注意したが就中君の一生涯を托した日本綿花會社に其資力の大部分を傾倒し、同社の最大株主として絶大の活躍をなしたのであつた。

仕事好きの苦惱

滿身是れ活動の化身のように生れ來た君には、孟買派出員の仕事の分量では迎も我慢が出来ない。明治三十年四月三十日君は日本の一社友に

『小生當地來着後、在勤様は從前ミ毫も變り御座無く、頻りに本社に愚見を陳述致し居るも、一向何たる返事にも不接、其張合ひのなきには實に閉口の外無之候。本店内の幹部を見渡した處、外國貿易の事柄なき、頓ミ熟知致居候向きも不見當、爲めに萬般不整頓勝にて夫のみ遺憾に存居候小生は如何に孟買の熱帶地ミは云へ會社が小生に對し經驗ミ新智識を得る丈けの仕事を爲さしめんには何年にも在留の精神に御座候得共、會社幹部は一向夫等に心付かず徒らに在勤せしむるのみにて、日々之れぞミ爲さん事もなく、汗水流して俊寛の二の舞を演じ居るミ一般にて、誠に我ながら慚愧に不堪候。近頃の如き様にて尙本社斷乎たる處置を爲さざれば小生は本年末歸朝申出度相考居候』

又曰く

『兎に角商賣の不活潑、仕事の閑散、悪病流行、礫金の時候、寡居の無聊等皆々小生の念頭に一種の苦痛を與へ申候、夫れで謂はぬは謂ふにイヤ、優るの主義にて沈黙せるも、會社有司は頓こ夫等に心付かぬにや、四、五週も手紙を寄越さざる程の始末にて、喜多又藏の經驗上、斯る不愉快極まる生活を送り候事、實に未曾有に御座候』云々

鬱勃たる胸中の苦衷を洩らして居るが、君が若年より安逸が大嫌ひで、我れに仕事を與へよこ叫ぶ處は、實に常人の眞似し難い處ではないか、つくづく今日の世相を眺めて感慨無量を禁じ難いものがある。

憂國の氣慨

明治二十七八年日清戦役の結果は、眠れる獅子を驚かせた、歐米列強も迷夢を醒ました、日本帝國の威勢隆々たるを見た列強は心中快からず淺ましくも干渉の手を延ばして遂に遼東還附を餘儀なくせしめたのであつた、日本朝野は憤慨したが當時の國力如何も致方がなかつた、君は當時英國の支配下に立つ憐れなる印度の姿を見て居つたので、強食弱肉の世界相につくづく痛憤を禁じ得なかつた、明治三十年四月三十日附で日本の一友人に次の書信を寄せた、

『近頃東洋の風雲、西米の葛鬪につき貴見如何、實に萬國公法、條約國の好誼なんぞ唯々表面的の口實にして矢張強者弱肉を咬ひ、尙飽き足らざるの所作のみにて、日本帝國の將來亦案ぜられ候』云々

ミ痛嘆して遙に一片憂國の氣慨を洩らしたのであつた、君が後年實業界に活躍するに當り常に此優勝劣敗の通則を忘れず、通商云はず事業云はず、其覇者たらん志した信念は蓋し夙に如上の社會相に強く心を打たれた或るものがあつたからだと思ふものである。

第一回の歸朝

君は事務打合の爲め明治三十年五月和泉丸に搭じて孟買を出帆、六月十日日本に着いた、茲に於て君は取引發展策につき平素の所懐を腹藏なく述ぶる處があつた、勿論君は實地體驗の結果ミ他の同業者の行動に照して其最も適切なる改進黨を案出したのであつて頗る緊背に當つた卓説であつたので、重役側は相當之れに動かされたのであつたが、如何せん當時社員幹部の要職を占めた連中が所謂實務上りの悲しさ、君の獻策に對する充分の理解に乏しく、却て喜多の若輩何を生意氣なミ云はん許りの態度で一向取り上げようとする誠意を見せぬので、君の折角の積極的發展策も殆き容るゝ處ミならなかつたので、君も可成失望したのであつた。併し最近の印度事情の説明だけは如何に頑迷無智の幹部連ミ雖も相當啓蒙の利益を享受したのであつた、君は環境の不利を認めたので

當分延期の外なしに諦め、居るこゝ四ヶ月にして同年十月六日神戸出帆の河内丸で再び歸孟の途に就いたのであつた。

君は歸途コロンボよりユチコリンに渡り、同地にて遙に 天長の佳節を奉祝した後、南印度鐵道線によつて南印度の大勢を車窓より瞥見しつゝ、十一月七日無事孟買に歸着したのであつた。

今回本社に打合せの結果、孟買事務所は明治三十年秋より出張所と改稱され、事務取扱権限も従前より餘程擴張されたので、次季よりは可なり働き甲斐ありとて、君は鳴る腕をさすつたのであつた。

遠大の抱負と妻探し

明治三十年の初夏、一時日本に歸つて來た君は公私共に相當多忙を極めた、元氣横溢の當年二十一歳の君は社務と共に社交方面にも可なり忙しく暮らした。淋しい印度から晴れやかな賑はしい浪華の巷に歸つて來て見れば青春の血を湧かす色々の面白い遊びに耽るのは事情止み難い人情である、君が愈日本を跡に再び孟買へ志したとき、船中獨り靜かに歸朝中の行跡を顧みて、一種の淋しい氣持を感じずにはゐられなかつた。ア、あんな馬鹿けた遊びをするのではなかつた、詰らんこゝをやつた、今更慚愧に堪へないよ、流石に理智に明るい君は、早くも將來の身の爲め改むべき採るべき途を考へたのであつた。大望を抱く身には早く身を堅めて眞面目に奮闘すべ

きであるよ、賢くも思ひ至つた君は其儘ぢつこ心の奥に秘めて置くにたえず、胸中に浮んだ直感を郷里の長兄に打明けて其贊助を得ん事を欲したのであつた。それは君が孟買歸着後間もない明治三十年十一月十六日のこゝであつた。

『(前略) 小生日本綿花會社に入社後既に足掛四年に相成、幸に昨夏田中、志方兩氏の厚遇を受け、特に孟買派出の重命を受け、赴任後最早年餘を打過申候、同窓中には僥倖を得しと羨まるゝ丈けに小生心竊かに兩氏に感銘罷在候。尙一方には徒らに責重く小生の鈍才其職に非ざるを認識致居候得共此機會を見外してはこの考より日夜勵精致居り、爲めに本年歸朝の際、割合評判良く、再渡の節も業務取扱権限は擴張せられ、一方にては定めて新聞紙上にも御承知相成候通り、昨年我社積送綿中品質劣等のものありしとて苦情百出、夫れをば挽回せではこの本社方針より、一方ならぬ重責を帯居り、此季節丈けさへ經過候得ば小生の名譽も相揚り且つ得意先の氣受けも宜しかるべく、此處兩三年の行動は、實に小生の一生涯中の如何を卜するに足るべき位置に相立ち居り大に喜び居候、此責任の重きと共に手當も前より相進み月給〇〇〇〇圓の支給を受け、滯孟法の如何によりては相當の貯蓄も不可能に非ざるべく、外に給料、賞與金の一文をも手を付けずして、本社に貯蓄有之候もの、今は一年平均小〇圓相残り居候様の次第にて先々御安神被下度、又孟買にては小生一人の滯孟にて不愉快、無聊等の點より考ふれば一日も難忍候得共前陳の事情及一人なるが爲め却而一身に經驗致す事多きが爲め出来る丈けの忍耐以て他日を相待居候次第に御座候。

父上の御話にては今二、三年相立ち候得ば退社獨立營業の基礎を作れこの事にて一應御尤に被相考候得共是迄の會社事情と他者との關係なきより見て此處數年間は退社の儀到底相叶中間敷、否小生は一度日本綿花會社を切盛りする丈けの地位に進まずば決して退社致さざる決心に御座候間、大兄より宜敷父上に御相談被下、當分は小生の身體小生に御委せ被下度、小生も父兄の手前毛頭愚擧も不致、身の爲めなれば、假令瘴熱の地たる孟買に十年居ることも敢て辭せざる心組に御座候。

小生は己れが將來を一過すれば實に面白き様の感も浮び申候、而して茲に貴案を煩はしたきは行末小生身體の處置に御座候、是れ大に考ふべき問題にて、只ウ、カ、ク、ミ其日を暮らし、囊中一錢の貯へさへ無く、嫁らんとするも妻を得ず、遊女を相手とし平生を過ごし候様にては、小生の遺憾此上も無之候間、小生今より之を心掛け淵瀬に陥らざる様仕度存念に御座候、希くば兄上此點に御注目被下、後日小生の妻たるべきものを、今より御心懸置被下間敷候哉、餘り我れ乍ら、呆れ返りたる申條にて、或は兄上に對し生意氣千萬の様相聞へ候哉も難測存候得共、敢て小生は今日婚せんとするに非ず、若し此等の事相定まり居候得ば、或は一方に向け徒費候事も無之、大に身の爲め宜しかるべきか、親友山崎君も大に茲に注意を相與へ、小生も是迄の經過上大に其必要を感じたる様にて、且つ近頃少々社會の如何なるものやを知り、少し許り老成つきし爲め大兄迄申上げではこの情止み難く一筆候譯柄に御座候。小生は敢て他家に養子たるを望まず奮勵一番無一文より成り上がり度精神なれば、先きに財産有るを欲せず、又都鄙の別を問はず、美醜を不論、要するに一生を托するに足れば此

上なき事と相考居候。

斯る事直接兩親にも云ひ出し兼候間唯大兄迄御相談的に申述候、大兄若し小生の考へに惡しき點あれば御遠慮なく指摘御訓諭被遊度且つ不得策との御思召なれば努々他人に御口外下され間敷様願上候。

此點に就ては他に申上度事情も有之候得共如何にも申上兼候間大要を摘み小生の性質上一旦思ひ立つては謂はずに居られざる氣より無禮をも不顧貴慮相煩申候』

之れが當二十一歳の青年社員たる君の抱負の一端を披瀝したものとしましては、如何にも老成振つた意見だ。君は裸一貫から大に働き出そうと云ふ意氣の強い處は實に見上げたものだ、此獨立自尊の堅いノ、決心と忍耐こそ君が立身出世の金科玉條であつたのだ。君は終始一貫此強い精神で押し進み、如何なる艱難辛苦に遭遇することも、君は泰然自若、自己の力で之を乗り切るべく、常に勇往邁進を辭せなかつたのだ、明治四十一年の上海支店の蹉跌にビク、こもせず、銳意挽回に奮闘して、早くも兩三年間に社運好轉を招來して、社礎を打堅め得たこと云ふ如き殆んゞ人間業とも見へざる程の鮮かさを示したのも、全く君の持前の獨立自尊の精神を痛快に發現し得た賜に外ならぬと思ふのである。

昭和五年の日本綿花會社大缺損は餘りにも大きかつたが、君の大々の決心による挽回更生の大事業は、不幸其中道に於て君の瞑目に遭遇し、之れが實現の端緒を見たに過ぎざりしを遺憾とするも、君の殘せし主義方針は、何等の變改を見る事なく、同僚によつて繼承せられ、其目的の遂行に着々活動を續けられつゝあるのである。

親 心 に 子 心

明治三十一年の頃印度にはベスト猖獗を極め其慘狀頻りに新聞紙上に顯はるゝ爲め、君の御両親は一方ならず君の身上を氣遣ひ、命あつての物種だ、そんな危険の地で何時までも奉公するでもあるまい、出来る丈け早く歸朝の出来る様、内々運動するが宜しからんとの、子を思ふ切なる親心の有難さを、萬里異郷の空で、君は如何に深く感銘した事であらう。併し君としては豫てより身命を賭して、やつて来て居るのだ、今更ベストに恐れをなすこともないのだ、君は會社の爲め、自分の爲め、一生懸命の働きを爲し、將來の運命を開拓せんとの志望で胸一杯なのだ、御両親の情けある御言葉には實に感泣の外はないが、此際さうしても親の忠告に従ふ譯には行かぬ恐らく両親にしても、自分の今の氣持を充分諒解して下さつたら、無理にも歸れどは云はれぬであらうと、かう心に決めて君は明治三十一年三月十五日附で、次の返事を父君に呈したのであつた。

『歸朝の儀成丈け早く出来候様心掛け方懇々御訓示難有感佩仕候、乍去男子立志出郷關、業若し成らずんば死共歸らずと申候譯も有之、青年輩の常套語敢て信用も出来不申候得共又々玩味候點も有之、小生は一旦會社重役に盟ひ將來に希望を存し遙に首途せしものが、聊かの事情の爲め、挫折候も小生一身上に取り遺憾此上もなく且つは友人等の手前何んもなく裏耻敷、殊に會社都合も漸次緊要の地位に相進め呉れ、小生目下建築中の議案なごも重役會議を通過するの機運に相向ひ候旁々事業も餘程面白く相成可申、斯くなれば幼年時代の綿花會

新聞、雜誌への投書

社をして黄金時代に移らしめ、完全なる孟買支店を設置し、支配人の椅子に坐り候迄は、イ、ツ、カ、ナ、歸朝不致決心に有之、今暫くの處、小生の身體は小生に御委せ被下度願上候、小生は唯々將來の夢想より且つは行々小生の名聲發揚仕度精神にて右様のこゝ申上候次第、敢て父上の御忠告に譯なく相背き候事萬々無之、赤心より出づる衷情の一端不惡御聞届け願度候』云々

君が志鐵石の如く、ベスト何の其の、酷暑何の其の、初志を貫徹し、相當の地歩を作り上げる迄は、イ、ツ、カ、ナ、歸朝せずとの健氣なる決心、二十二歳の青年としては、實に見上げた覺悟、此不撓不拔の精神こそ偉大なる君の將來を築き上げたのである。

君の堅き決心動かすべからずと見られた御両親は此上再び君に歸朝を強ひらるゝ事もなく打過ぎた。
斯くて君は、ヤ、ツ、ト、安心して、益々會社の爲めに働き、傍ら一身の修養を一日も怠らなかつたのであつた。

君は明治二十九年始めて印度に渡航するや、其見聞する處、世人を裨益すると思ふもの二、三に止まらないと感じた。それもそうであらう。日印貿易の開始後未だ幾年も立たない當時だ、印度の事情が母國の人々に、能く分らないのも無理のない事であつた、自分は幸ひ此地に派遣されて來てゐるのであるから、其所見を時々新聞雜

誌に投書して同胞に知らせる事にせう、そうすれば自分にしても文章練磨上に得る處少なくないし、蓋し一舉兩得の策だも考へた、併し自分は今、會社の社員なのだ、こんな事をして果して差支ないのであらうか、純情な若い君は一寸躊躇した、其揚句故郷の父君に其是非の判断を乞ふたのであつた、父君答へらく

『閑暇もあれば、敢て差止め間敷も、苟も會社より多大の給與を受け居る身なれば、飽迄會社の爲め盡力致さずては相濟まざる次第故、此邊篤志熟考、成るべく之を見合はせる方然るべく思ふ』云々

流石に昔堅氣の父君の注意に逆ふべくもなく其儘見合はせたのであつたが、君は其翌明治三十年春、一時打合せの爲め歸阪した際、時の平野紡績取締役金澤仁作氏は、君に望むに歸孟後、時々印度事情を、大阪朝日新聞社に投書することを以てされたので、君は我意を得たりと許り之れを承知して、歸孟後間もなく明治三十年十二月三十日附で、始めて印度棉花商況等の通信を大阪朝日新聞社に送つたのであつた、尤も豫て父君の注意もあつたので勤務先と姓名とを載せず無名通信の條件附であつた。

至孝なる君は之れについて一言の釋明を父君に爲し置く義務ありと信じて、

『近頃寸暇を見計ひ新聞紙、雜誌等へ投書の事を始め申候、是れ一見貴意に反する如きも、決して會社の利益を害する如き事には相成不申候間此儀御安神被成下度、先達も小生の通信、大阪朝日新聞に單に孟買近信と題し、記載有之候を見受け申候、其節同社より爾後詳細通信の事依頼致來り候、他日追々新聞紙上に御目にかゝる事と存候、小生も近頃随分無聊勝なれば、斯る事でもなし時を空費せざらん事に勉め傍ら、文章を練磨し且

つ知己を作らんも存居候』

當時、君は英語も勉強し、翻譯物にも指を染めて居つたが、其中にも當時東方亞細亞商業視察員として、英國政府より派遣されたベルナム卿の公にした東洋商業視察報告は、大に君の注意を惹き其要領を翻譯して日本の新聞雜誌に投書したのであつた、其報告書の中に『日本紡績事業の將來』と云ふ一項があつた、其要領は

一、支那は原棉の産出と低廉の職工を得るににより紡績工場を自國內に設立して、自給自足の途を講ずるは必定なる事

一、日本政府の金貨本位實施は對支那との爲替變動による不利を増したる事

一、故に日本紡績業の將來は對支輸出不利に傾く關係上、餘り好望と云ふを得ず

素より今日より見れば、大した意見とも思はぬが、當時日本の紡績業は、未だ搖籃時代であつたときであるから、斯業者に取つては他山の石として、相當注意を惹くものであつた。

尙ベルナム卿は一般日本商工人の缺點として

日本商人は契約を履行し能はざる國民なり。

日本商人は全く信用を重んぜざる國民なり。

日本製造業者は目前の利益に眩惑して粗製濫造の弊あり。

日本が臺灣併吞の結果、英國對臺灣貿易の將來に悪影響を及ぼせり。

等色々日本人の痛い處を突いたのであつた。

君が業務の餘暇を以て、一片國家を思ふの念、切なるものがあつたことは、斯かる君の行動にも其片鱗を窺ふことが出来るではないか。

自重と修養

君は、明治三十年の夏一時歸朝して業務を打合はせ、多少得る處はあつたが、到底君を満足せしむる底のもの無かつたことは前にも書いたが、本社の幹部連が相も變らず、時勢を先見するの明なく、其日暮らしの無方針で、因循姑息の態度を續け居るには如何にも君ミして堪へ難い思ひをせざるを得なかつた、明治三十年の暮、其共鳴せる本社若手新進組に宛て、

馬鹿らしや氣苦勞で越すか年の暮

明年も勝籤引けや綿花殿

鬱勃たる不平を十七字に洩らす一端、會社の前途に幸多かれも祈つたのであつた。そして翌三十一年四月には、流石の君も仕事の不足で、孟買勤めが幾分厭やになつた氣味もあつて

『僕は何がなしに孟買を去りたくなつた、去つて米國に遊び大に手腕を揮ひ度くなつた、敢て僕は煩を避け熱

帶地を嫌つてゝはない、孟買に汗水流して働く丈けの甲斐の無いのを認めるからだ』云々

ミ友人に書き送つて居るが、之れは素より本氣ではなく、軽い意味で、そんな氣持のした事を率直に親しい友に洩らした迄のここに過ぎなかつた。無論君はそんな事を本社重役に持ち込んだのでもなかつた、寧ろ君は如何なる不平も、大きな將來の目的の爲めには、之を耐へ忍んで行かねばならぬ云ふ健氣な覺悟を据へて居つたのだ。果然君は其翌五月二十四日附で、同じ友人に、かう言つてやつて居る、

『先般一寸申上候不平に就き懇篤の御諷言難有拜聞仕候、御説の通り當時我等の境遇敢て公然不平を鳴らすは實に愚極まり、小生も別段他者には不申上、唯々貴兄へ近況通信の傍ら其心緒の一端を申上げたるのみ、世の所謂若氣の氣性を暴露し、却て世人の嗤笑を招くの蠢愚は學ばず候、御安神被下度候、貴兄も隨分言ふに言はれざる御憂憤も有之候由、相察候得共希はくば成るべく丈け尻尾を出さず、表に洒々落々難忍を忍び以て他日の成功を期し、俱に々手を取り實業壇上に立ち、眞個の改明事業の實を擧げ候様の基礎相作り候様日頃御心懸被下度祈上候、小生は今日不平を言ふの愚を知り亦己れが實業界の經驗、智識、年輩等を考へ、マダ嘴青く暇あれば勉強もし、他を見做ふの位置に有るを熟知致居候間、以來は是非其方針にて進行仕度、當時はガダムにて彼等は如何に事業をマネージせるや否等傍觀し、以て他日の素養を作らん精神のみにて日夜相暮居候、希くば貴兄若し同感なれば當時君の前後に横れる細事は毫も意に介せず、「サブスタンシヤル」に得る利益をさて置き、「アブストラクト」の智識を收得せられん事を祈上候。

僕も會社にて生育ち、今更不平を唱ふるは、實に綿花會社に對し不相濟の儀なるも、唯仕事に氣に入らず、又何度陳情するも本社にて頓んじ其邊氣付き呉れぬのが一番苦しいよ、僕仕事さへ我思ふ通りにさせて呉れたら、孟買に十年以内滞在するは、何じも思はぬよ、公私共随分ツライが遠き將來に於ける又藏を考ふれば、夫丈は辛抱せざるまいよ、ガダムの支配人なごも過去十五年も滯孟し居る奴さ、其他凡て西洋人は皆永年滞在、而して後、相當の地位を得るものにて、小生も夫れでナク、チャ眞のマネージャーにはなれぬ、又價値なしと思つてるよ。

何にか僕に遣るテ、有り難いネ、併し僕は食料品ナンドはイランよ、若し遣る氣があるなら、書物をネ、君が讀んで後郵送して呉れ、併し其書物も小説、但し文學上のものは厭だよ、

健康は心配して呉れるな、厭な孟買に相違ないが、住めば都の心地もし、又非常に馴れて來たから、萬々一病氣にかゝる事は、無いから安心して呉れ、僕の食量、聞いたら君喫驚するだろう」

何んじ云ふ友情に満ちた涙ぐましい手紙であらう。朋友相信じ相激勵し合ふ心緒の美しさよ、君が修養第一主義雖伏十年の必要を高唱するあたり、實に之れが僅かに數へ年二十二歳の青年の言じ信じ得ようか、堂々たる六尺の壯男をして正さに慚死せしむべき概があるではないか、須らく青少年の世に處する、正さに君の如き決心を覺悟を學んで可なりと深く感ぜずには居られない。

孟買回漕機關撤廢意見 (一)

日本の紡績會社が始めて印度綿を使用したのは、明治二十四年大阪紡績會社であつたが、其成績良好なので他の紡績會社も續々之れに倣ふ事になつたので、當時日印間の海上權を把握して居つた彼阿汽船會社は、印度綿運送の爲めに暴利を獨占したのであつた。此の如きは日印貿易の發展上、甚しき障害なりと慨嘆して立つたのが、先覺者澁澤榮一翁であつた、翁は印度の豪商タ、氏に謀る處あり、又紡績聯合會主腦部を氣脈を通じ、相提携して日本郵船會社を動かした結果、明治二十六年十月紡績聯合會の名に於て、日本郵船との間に印棉運送に關する約定書二十ヶ條を締結したのであつた、其要領は

- 一、三週一回、汽船を孟買に回漕、一年間五萬俵の綿花を日本に輸送する事。
- 一、運賃一噸十七留比し、内四留比を期末に荷主に割戻す事。
- 一、契約期間を一ヶ年とし、毎年更改の事。

と云ふのである。

始め孟買回漕事務所は前記日郵との約定條項に基いて、明治二十六年末に設置し、各紡績の取引先にして孟買に開店せる、三井物産と日本綿花とが、各月交代して事務を處理したのであつたが、斯くシツパーの自治體に委かすことは、紡績聯合會側に取りて不利益の點ありとの理由で、明治二十八年五月之を紡績聯合會の手に收め、

益は考へられない、況んや日本綿業界も相當苦難時代に遭遇して居る今日、回漕事務所經費の負擔を意せざる如きは策の得たるものと思はれない、極言すれば己れの懐中を他人に預けて其取戻の爲めに可なりの經費を使ふやうな結果にしか見られないのである、尙此外間接の損失即ち積荷遅延に伴ふ金利、倉敷、保險其他の諸經費の負擔は勢ひ棉花業者にして之を値段其他の上に轉嫁するの止むを得ざる事情にある事實を輕視するにせば紡績業者の爲めに惜しまざるを得ない、予は棉花業者より離れ、一介の日本國民としての立場から公平に判斷して、斯業發達の上に一掬の涙なき能はざるものである』云々

ミ云ふのであつた。

孟買回漕機關撤廢意見 (一)

如上の如き君の根本的改革意見は不幸にして紡績業者の容るゝ處ならなかつた、然し多少當事者を刺戟するだけのことは有つた、即ち時の紡績聯合會委員長佐伯氏は上京の上、種々郵船會社と折衝を重ねられた末、臨時船若狭丸を任立て、滞積せる荷物の一部を積取り、急場を凌ぐ事になつたからだ。

然るに實際の事情として該臨時船の差立てに際し契約運賃率の外に更に一噸三留比の補助を聯合會より出すこと、この條件附だミ云ふことを後で知つた君の憤慨は、實に一方ならざるものがあつた、

「一噸三留比ミ云へば、一俵五、六十錢に相當する、之を出す位の良い氣前があるなら、始めから運賃の協定に躍起になつて契約するにも及ばぬではないか、こんな悪例を開いたなら、來季以後に於ける聯合會の足元を見透かされ、頗る不利の立場に陥るを免れないではないか、我々綿屋に多少共有利な條件を今後に期待し居ることも、恐らく水泡に歸しはせぬか否かは對等の契約改正さへ覺束ない立場になりはせぬか、我々は今日まで随分不利を忍んで來たのであるから、此上尙も同一状態を繰返へされる事は全く忍びないのである、我々綿屋として重大な關係を持つ運賃問題其他の要項の取極めを、獨り聯合會の手中に委すことは甚だ懸念に堪へないものがある』云々

君は聯合會が、何故に契約の運賃率によることを突張らなかつたかミ、君一流の強硬論を主張して憤嘆したのであつた。君は其翌明治三十二年一月、社命を以て大阪に歸着するや、本問題の善處につき、斯業關係者に大いに説く處があつた、然るに紡績聯合會員中、孟買船線の真相につき、能く其實情に通ずるものゝ少なきを見て、君は少なからず喫驚した、當時既に二年後の三十四年四月まで郵船會社と回漕契約を結んで居つた聯合會に對しせて聯合會と郵船の兩者が、打解け相談の上、双方不都合なきやう、契約の改訂を希望したのであつたが、紡績業者は唯々運賃の値上げを恐れて觸らぬ神に祟り無し態度で、一向氣乗りしないのに、君も最早此上はミ諦らめをつけて仕舞つたのであつた。

兄の慰安に答へて志を述ぶ (一)

病弱の故を以て止むなく郷里に起臥中の次兄から、悪疫流行の孟買に萬里の孤客となりて、奮闘しつゝある君の身の上を案じて色々慰めの言葉を戴いた君は、深く兄の芳情を感謝しつゝも、次の男らしい返書を認めたのであつた。

「……………御同情ある御書面忝拜見仕候、以御蔭無事消光罷在候間御安神被下度候、先頃の當地は悪疫流行、氣候不順等にて實に厭やかな心地致候、彼の暴徒の一揆は市中に白晝血を流し、引續き同盟罷工は、全く商業の運轉機關を休止して、薄氣味悪く感ずる際、頻りに歐人は黒死病に斃れ、知人中其厄に遭ひたるもの随分多數にて一時は實に孟買も厭やに相考へ得共、喉元通れば熱さを忘る道理にて、近頃は何かも感ぜざるやう相成申候小生近頃心付申候人間而かも日本にて保守的小膽的に教育せられし者は一應外國に放遣候事隨一の策に有之小生等も先年兩親の御膝下に起臥致居候當時は心神大いに相違せるを我乍ら發見仕候近頃少々大膽に相成候様相考へ、人間至る處青山有り敢て焦慮するに足らず食は孰れに至るも求むるを得ることも相分申候、さればにや假令熱地且は悪疫絶間なし云へば日本人の多くは往くを欲せざる孟買も今は却而心地宜敷ヨシヤ、何年滞在するも聊かも苦痛を覺へず存居候、御書面より考ふれば随分厭やに恐ろしき處、不自由なる孟買に相違なく悪疫流行の最中風邪に罹り、事務所も缺勤し獨り四層樓上に獨居し、語るに友無く苦を分たん人もなく夜陰

安眠するを得ざる時を考へ見ればサモ、寸刻も居難き心地仕候得共、此處は立身の地、大丈夫事を爲さんご欲せば人を頼む可らずを頭腦に浮ばせ人間の生死是命也、今若し死すにて何の怨む處やあるべき、死を以て事に従事する大和男の本望なりご諦めては却つて苦も直に消へ去り此身大いに壯快を覺へ候心地仕候、此頃は西國立志論を素見仕り大いに人を頼るべからず假令親戚否父兄迎も決して夫れが補助を目的し居る可からざるを悟り申候

斯く悟り來るご人の肥馬に跨り酒林に出入する毫も羨やむ心地もせず我汗水たらして終日働き得たる賃銀にて太平を歌ひ、一椀の酒を傾くるの愉々快々なる實に筆紙に盡し難し、兎に角人の一生は大抵定まるもの、何處までも人の足にかちり付き人の福を享けんごするの野人の考は更に無之、己れに苦しければにて家人に其苦を分たん心更に無之、己れが欲する處に出で、己れが欲する事を爲さんご日夜相考へ居候呵々(明治三十一年四月十五日附)

兄の慰安に答へて志を述ぶ (二)

又君は其翌月引續き次兄にあてゝ次の手信を發して居る、

「何人に不拘働くは第一の良藥にして、ヨシヤ、家に百萬の資産あるにもせよ朝夕散步運動不致ては遂に健康を

害するものに有之候、御家業に御就き相成らずとも御運動だけは是非殊に貴兄の御病症に取りて最良策に有之べく候、小生も大いに其必要を感じ近頃は朝夕三十分乃至一時間宛は孟買海濱にて愛犬徳と共に散策致居り、従て大いに身體の健全を覺へ、爲めに食事も殊の外旨しく相進み日々一封度半の牛肉一人にて何の苦もなく喰盡し候様にて大々の宜しき事ミ確信、近來は夫れ丈け遣らでは何にか氣が濟まぬ心地仕候、

御承知の通り小生も近頃ではド、ウ、ヤ、ラ、コ、ウ、ヤ、ラ、故郷に無心も云はずして自活出來候様相成、申すも耻數薄給の身の上ながら朝夕晩菜如何にツ、マ、ラ、ナ、キ、場合も是れが己れの瘠腕より得たるものと思へば誰れに遠慮なく大口をも開かれ且は晝時事務所に用事を濟まし歸寓後晚七時の食事に備へる一酌のウキスキー、ソーダの美味得も言はれず候、孟買は毎々申上候通り如何にも不愉快の場所にて又藏の今日此頃の身體の流汗且は汗坊の模様等御覽あれば實に憐れ至極ミ御考へあるべく、其他萬事の困しさ或は貴兄御胸中の憂悶ミ比較し敢て下らざる様確信致居候得共此孟買が己れを養ひ呉るゝ場所ミ思へば更に厭ミは相成不申、住めば都ジャミの心浮も致、是の何にかあらんミ存じ至つて安樂に暮され異域の獨居今は却つて故地に齷齪するより宜しき様存候、浮浪孤客の心情又々御一笑遊ばされ度候呵々』(明治三十一年五月二十五日附)

君は明るい自分の心境を述べて、何等懸念に及ばざることを明らかにするに同時に、病弱の兄を激勵して氣を引立てんミ試みた、兄思ひの優しい心根を床しく思ふのである。

大 悟 徹 底 (一)

君の若くして老成の觀ありしは、獨り君の思想のみではなかつた。君は生理的にも早熟者であり、二十二歳位迄は可也艷種を蒔いたものである。處が君が明治三十年秋、日本より孟買に歸つた頃から、君の心境に一轉機を見たことは前に述べたが、斯くて君は從來の道樂氣分を一洗し、只管自己修養に餘念なく、餘暇には勉めて有益な書籍を涉獵研讀するのを樂んだ。

君は大阪の學友に一書を送つて曰く

『色界の運動は漸次廢止の覺悟に御座候、近來は女の顔より留比の顔が好きにて留比さへあれば有益なる書籍も思ふ儘に手に入り候間追々モンスーンの閑散期にもなることゝて此期を利用し精々讀書に日を送り度相期居候、一時はズ、助にて書冊を見るも懶く感じ候得共今日にては一頁にても讀めば讀む程味を覺へ申候、我々の境遇にて美人の膝に戯るの時に非らずミ一旦心付き候ては實に一刻も無駄に暮らすこと第一社會に對して濟まず又我身の前途を他ミ比較し大に一ミ思案せずは叶はずミ相考へ申候』(明治三十一年春)

君が心機一轉、益々意志を鞏固にして向上發展の途を辿るに至つたことは、或は君が西國立志論に讀み耽つたことなき、青年期の君の心線強く刺撃し鼓勵したものかミ想像する。

君は同年五月大阪の他の一友に書を寄せて曰く

『毎々申上候通り、孟買に於ける日本人の戯樂は、彼一方面あるのみなるが、小生は近來寧ろ食傷したる心地にて、夫等に見向きも不仕、將來までも此種の運動全廢は請合ひ難きも、漸次敬遠方針に仕らん精神に有之候、斯くて小生は無聊を慰する爲め、近來辭書を友とし、翻譯物に従事致居候』(明治卅一年五月十日附)

大 悟 徹 底 (二)

君は其後四ヶ月を経て次の如き書面を友人に出して居る。

『僕は近來大に悟道を得てネ、朝七時半から一時間宛毎日英語教師の處に出懸けてるよ、九時の朝飯が濟んでから新聞でも見てオツフィスに往つて、歸へつて晚には種々雑多の書物を繕いてる、昨日なきはバンク・ホリデーで皆八八はや玉突をやつてるが僕のみ内でコッ、コッ、遣つてるよ、オマケに僕は會社の置土産になるかッリヤ、知らんが一寸遣つて殘して置きたいものがあつて頻りに夫れを遣つてる、兎に角僕は必ず君等に忠告がましく言ふ丈けの事はして居る積りさ、

併し僕が此間讀んだ書物の中にネ

『Learning more books makes him more doubtful for every direction』

と謂ふ一句があつて、實に然り感服して居るよ、即ち僕は今日氣は矢竹にはやりながらも益々疑多く實に困

つてるも此難關を越さずには我輩碌なものになれまいと諦らめてる。』(明治卅一年九月十六日附)

君の將來の立身出世が決して偶然ではなく、實に青年時代より一と通りならぬ修養の苦辛慘愴に因ることを、ツク、感じさせられるのである、而かも君は夙に友人に對する情誼厚く、屢々苦言を呈して其向上發展を激勵するのが常であつた、而して君は君自身公言して憚らざる如く、己れの修養を積む事を怠らず、友人に忠告がましく言ふ丈けの行爲は日常實踐して居つたのである。

君が餘暇を研學に没頭して居る内、其内容に幾多の疑問を起すに至つた、讀めば讀む程妙に分らなくなるのであつた、君はこんな疑ひは半可通の致す處を考へ附いた、それで充分徹底的に研究することが此難關を突破する所以に信じて、爾來一入勉學に身を入れたが、是れが君の將來にどれ程大きな効果を齎らしたかは蓋し推測するに難くないのである。

養 子 の 拒 絶 (一)

明治三十一年の春頃、大阪船場の百萬長者と稱する藥種商の外に縁家筋と二つの養子談が持ち上がった、そこで君の父君は一應成行きを詳報され、異存なくば縁家の方を纏めたいような氣持であつたようだが、君は豫て獨立獨歩の方針を抱いて居つたから如何なる養子談にも全然耳を傾くる餘裕を持た無かつた。

そこで君は養子反対意見を堂々父君に述べたのである。

『小生が豫て胸中に抱持せる愚見は定めて御承知に可有之、即ち獨立獨歩敢て他人の手を籍らず、己れが頭腦且つは鈍腕を以て、實業界の波瀾に投じ、苦辛を嘗めたる末、外國貿易を以て身を立て、少し社會に信を置かるゝの人物も相成、生後今日迄非常の御厄介相掛けたる御兩親の鴻恩に相酬度精神に外ならず、先々今日迄の結果は、餘り惡敷は無之、同級生中にも成績敢て譲り居らぬ積りに御座候、兎角現今は田中志方兩氏の御引立は乍申、綿花會社孟買出張員たるの榮を擔居り、此順序にして進みなば或は我希望の千萬分一にも達し得べきか三日夜喜居候次第に御座候、勿論奉公する程、實業界に馬鹿らしき事は無之、幾萬の資金を掌中に握り營業するの愉快さは今更申迄も無之小生の目的も實に此點に有之候事論を俟たず候處なるも、經驗、資金の兩立するに非れば斯る望も空望に不過、其素養を作る傍ら資金を得るの方法に出づるこゝに誠には必須にして平生夫れのみ心懸け候爲め通常人の餘りに欲せざる孟買に唯々諸々苦を忍び只管他日の成功のみ注目致居候次第に御座候、然るを是迄の素志を一變し、他家に養子たる事如何にも不本意にして豫て母上より斯る話ありたる毎に御斷り被下べき様申候事にて、人間の此世に生れ來るの原理又其處に可有之と確信仕候、又今日ヨ、シヤ、狂けて養子談を小生に於て承諾せんじするも同社との行懸上或は左様致し難き點も有之る様相考候、そは抑も小生が孟買に來れるは田中志方兩氏に一方ならざる御引立を蒙りたる爲めにて、他重役との宣誓も永年會社に力を盡し決して業を變じ若くば會社を出て他に職を求むる如き事有之間敷筈にて、今日此事を申出候事如何にも徳義

に相背き候様獨り懸念致候、而して小生己れが目的を達するに或は本社に今暫く在勤仕、會社殊に田中志方兩氏の恩に酬ゆる事小生將來に取り實に得策にして又綿花會社の現境より考へ候ても今暫らく此地に踏止まり微力相盡候必要且義務に有之候如く相察し候。

會社が小生を待遇する現在は一の書記に過ぎ不申候得共今後小生の心懸け一つにてヅ、立身を得らるゝの餘地も有之、又此儘にて在勤せば其報酬して他日歐米をも社務を帯び漫遊するを得るなるべく、又給料手當等の點より考ふるも割合良し申候より外無之、今日の儘こするも一年孟買に在勤せば〇〇圓以上の餘裕も出來候次第、孰れの點より推究するも今日養子こなるべき事或は不得策と相考へ候、近來は知己も年一年増加、當地取引先間にも非常に珍重せられ、又本社にも左程疎んぜられず此割なれば決して我希望も蛇足に終らざるべく必らずや到達せられ候様確信罷在候、或點より考ふれば養子こなり數萬の富を掌握するこゝに大に宜敷様なるも之れ大丈夫の取らざる處にして又一時の利を得んこして生涯を(編者曰く五六字不明)落せしむるこゝに往々有之候、養子の弊害に就ては多々有之一々之を申上候迄も無之候間差控へ候、即小生は飽迄我所信に據り彼岸に相達し度望みにて斯く申せば小生も適當之(二字不明)生の列に入れり御考へあるやも難測候得共小生は左様の者には更に無之此間長左衛門兄にも申送り候通り今日の薄給尙且養家にて得る數萬の富に優れるこゝを確信、ヨ、シヤ、今日養子こなればこゝに財産を我存命中に得るや否やを知らざるも小生は寧ろ養家にて得た資力よりも苦辛の未得たる薄資コソ望む處に御座候。(中略)小生も年齢若きのみならず平生は前陳の目的にて相進

み三十歳前後に至り己れの確乎たる能力も出来、又少し基礎たるべき財産を得たる後結婚致度存念にて今日其必要を認め居不申候、以上の次第に付然るべく先方へ御断り願上候云々」(明治三十一年六月八日附)

養子の拒絶 (二)

尙又養子談につき左の反対意見を長兄宛てにも送つたのであつた、

『俗諺にも申候通り小糠三合あれば何んこやらこの事も有之兎角其日を立て、ド、ウ、ナ、リ、コ、ウ、ナ、リ、借、金、も、せ、で相暮らせ候事なれば他家に入り御嬢様の機嫌を取り小心翼翼と渡世候事如何にも難忍、就ては昨年再渡の際にも母上にまで養子談有之候節は可成御断り被下度様申上置き候次第に御座候、小生は將來の又藏の○質を兼々相考如何にもして綿花を本業として行々には無一文より少々は社界の信用を措かれ候迄は成上り度精神にて、シヤ、我望にして貫徹せずとも生涯を我手に米粟を得、夫れに據つて衣食仕度様考居候次第に御座候、今日小生を養子として貰ひ受けんとするものは、ヨ、モ、ヤ、百萬以上の資産を有する輩にも有之間敷、大抵五十萬若くは其以下の中流人士にて斯る家に入り折角の企圖せし事業をも中絶し、徒らに氣兼ねの思ひをなし己れ精勵の結果豪富者の列に入るも世人は皆是れ養家の賜なりと貶するなるべく、又通常大阪流の商家は逆も小生の氣質又は今日我抱負を充す處に非ざるべく、旁々相成るべくは御断被下度願上候、愚存には金固より他人の手に在るに非ず腕

次第取次第にて小生が今日の境遇、さらに將來の望にして到達するを得ば十萬百萬強ひて獲るを得ざるに非ざるべく、假令養子となり數十萬の財産を一時に掌握せんより困苦精勵の結果夫れより得たる一錢の金こそ我身に取ら嬉しかるべく又小生の望む所に之候、小生は敢て壯言大語するには無之候得共今日會社より得たる二十五圓の俸給は養子となり得る二十五萬圓より優に價値あるものと存居候。

小生は斯る考へにて奮勵不愉快の孟買も敢て懶しませず風雲の乘するある迄は假令十年を要するも敢て介意せず、滯在の決心にして他日大に爲すあらん事を期望致居り幸に父兄にして我所存丈け御嘉納有之候得ば終生を前陳の方針にて相進度考へに御座候得共、父兄にして御意見を異にし養家必ずしも悪しからざる理由を御説明相成小生にして夫れに屈服候か但しは夫れが喜多家の爲めに大に宜しきの理由ある御話なれば小生必らずしも我意を貫かんことを欲するものに無之、如何にも仰通り可致候」(明治卅一年五月廿五日附)

次に次兄大藏氏宛てにも次のように書き送つた、

『養子談御通知有難存入候、卑見は長兄にまで今便申上置候御聞取相成度候、兎に角現今の喜多又藏無一文貧乏人には相違無之候得共あたら花の蕾の生涯を僅に十萬や二十萬の金子にては安賣不申御安神被下度候』(明治三十一年五月二十五日附)

獨立獨歩自立の精神に燃へた若き君の氣焰の何ぞ夫れ痛快なるや、養子となりて一時に數十萬の財産を握らんよりは寧ろ自ら困苦精勵汗の力によつて得たる一錢の金こそ嬉しくも亦望む所なりと喝破するの處、何ぞ夫れ讚

嘆に値ひするの大文字ならずや、君の將來をして偉大なる實業家たらしめた其原動力は、正に此獨立自尊の輝かしき精神の發露の結果に外ならぬを斷言するに憚らぬのである。

社内改革の叫び(一)

君は明治三十年一時歸朝の當時、重役に對して意見を述べて置いて置いたが、餘り手答へがないので、君は明治三十年渡孟後、更らに左の意味の意見書を本社重役に提出したのであつた。

一、出張員の業務取扱権限を擴張し、萬事取引先(ガダム商會)に對し容喙するの實力を附與せしめん爲め派出員の地位を資格を進められたき事。

一、阪孟間棉花取引上に關する諸般の改善進捗策。

一、印度内地の原棉産地を來季に於て視察旅行せしむる事。

一、數年後愈々本社詰め決定の場合には、埃及綿産地を経て歐州諸國の視察並に米國綿産地の視察を爲さしめ歸朝せしむる事。

君は此建議案にして重役の容るゝ處ならずば萬事休矣、君は明春には是が非でも辭職歸朝の臍を堅めたのであつた、君は斯る堅き決心のみに良き返事を待つて居る内、本社の内閣がぐら付き出した、之を聞いた君は

此機會に於て社内部改革の必要を支配人宛てに喝破したのであつた。

「……………御通信の摸様にては、本年上半期總會には多少重役の顔振れに異動を免れ難き趣、池田氏退社後重役の御力にて今日漸く社礎も鞏固の域に進みつゝある折柄、此凶報に接するは誠に心惜しく奉存候、我社の今日ある常務及貴臺の御盡瘁の結果なるは勿論なるも亦田中社長並に市太郎様の御心配の其大に成効を助けたるは事實にして、其方々に交迭を見る千恨萬嘆の外無之候。併し時勢上會社の前途を考へ致方なきものご諦むるものゝ、希くば市太郎氏丈けなりとも取締役の地位に御就職被下、益々本社をして泰山の安きに致されん事小生畢生の願に御座候。

マヤー氏近來神戸に支店設置計畫の儀をホノメカシ、爲めに少々御配慮の旨御書面に相見へ申候乍併是れ只同氏の空言に相過不申、迎も實施の事覺束なく、ヨシヤ彼れにして從來膠漆も膏ならざる本社を措いて支店を開設するも我社は毫も痛痒を感じざるべく、過去數年間日本行棉花は我社が首席を占め夫故、取引先たらん事を望居候商社孟買に多々有之、ガダムにして絶縁せば相當の取引先を見出す事蓋し容易なるべくご確信仕候、我社刻下の急務は要するに内部の整理統一を全備し消極の方針を變じて積極的ごし反對商を打破するの御精神あらんご寧ろ必須なるべきかを相考へ申候、現在の本社先輩諸氏如何なる御妙案を藏せらるゝか、且次綿季に對して亦如何なる御胸算を抱き居らるゝか、席末小生の窺ひ知る處に非ざるも、日本國に於ける綿業の困難痛苦の狀次第に加はり紡績は品質評定の議を建て、反對者陰に畫策せるに心付かずして、一時の隆榮永遠に連

續するものご誤視し、事務上の進捗を圖らず、徒らに賣女が客の歡心を得んごする如く、小心翼翼以て得意先の好意を求めんごして、酒食以て唯一の良策ごする如きは果して本社將來に取り利害如何、一考を要すべきものかご奉存候。

最早今日にては、舊綿季をも終りたるものご見て差支なかるべく、就ては次季に對する御考案は如何、貴見の程是非御洩被下度候。小生は既に小生丈けの愚存は致居候得共、如何せん我思ふ丈けの事を爲し得べき權能にて無之、孟買出張員は如何なる程度迄働くを得るか、我自身さへ分り不申、空々漢々以て時日を送り居候次第にて、斯る出張員も尙本社に取り利益なるべきか、大に疑はしく存申候。小生は今の儘にて來季も滯孟せよごの御命令に候得ば、是非に不及、歸朝願ひ出で候より施すべき策無之、毎々苦情のみ申上候如くなるも、其邊宜敷御推考被下何んごか御裁決被遊度切望の外無之候、就ては前便愚存の一端丈け田中、志方兩氏に申上置候、貴臺よりも宜敷御助言被下度願上候。

社内改革の叫び(二)

昨日大阪電報によれば他社我社より安賣せり、されば取引出來ず何故相場電報せざるかごの御詰問に相接候得共電信の往復は是れ元ご本社ごガダム間、直接御懸合ひの筈ならざるか、今日迄に其變更を申請せし事幾度な

るか難圖程なるも毫も小生の意見にして採用せられしに非ず現今の喜多は一昨年見習ごして來孟せる當時ご少しも變り居らざるに非るか、サルチ不都合の場合のみ小生を責むるの心意チト分り兼候、尙其他本社より時々完全なる通信無之(品位評定及び運賃問題云々の如き今に片信だにも不接)昨年十月以後重役若くは支配人よりの訓令書前後唯二回に過ぎざる位にて小生より伺ひ出でたる件も碌々返事なきのみか、當路者御閲讀も成し下されざる程の有様にて當地に滞在せるもの果して本社御意嚮の通り萬般執務出來得べきや否や、御一考煩はしたきものに御座候、小生は來孟後既に二星霜を經過候得共、今に確然たる資格を享有致し不申、偶々心付きたる事も權限外なれば差控勝にて、若し獨斷事に從ひ却て本社 of 忌憚に觸れ候哉も知れざればごて、萬事傍觀的ごし後日不行届ごして叱責せらるゝ如き、實以て馬鹿臭く、且は心細き心持被致候、希くば貴臺是等の點に御着目被下小生が申條にして相當なれば御採用可被下、若し不可なりご御考附きの點は遠慮なく、御叱咤被下次季よりは熱苦難堪孟買も愉快に滞在出來候様被成下度夫のみ切望の外無之候』(明治卅一年七月八日附)

言々句々君の肺腑より出で、會社發展の爲めに社内の大改革を叫ぶ、君の悲壯激越なる意氣には岡田支配人も定めて感激しつゝも亦色を失つたごころであらう。

歸朝を喜ばず

君は明治三十一年七月十二日大阪本社より、突然一應歸朝せよごの電報を受取つたが、弗々新棉期の取引を必

要する場合に臨んで、早急歸朝することは、會社の爲めに不利益だと思へた君は、此理由の下に特に歸朝を必要とする大きな理由の明示なき限り此際の歸朝は見合はしたいと思返事したのであつた。

大抵の人が苦熱の印度から故國への歸朝をあれば一も二もなく喜んで承諾すべきを普通にするのに、君は平素會社を思ふの餘り、一身上の利害を第二義に見て前記の如く反對意見を申送つたのであつた。

實は本社重役にしても、是非歸朝を必要とは思へなかつたのであるが、君の手厳しき建議案に對して、何んにか話を付けやう位の輕き意味であつたらしい、隨つて強ひて君の歸朝を迫るだけの事もなかつたので、君の意見のまゝ、歸朝は取消しに終つたのであつた。

片々たる孟買の一派出員が、苟くも本店の命令を拒んだかの如く見ゆる事は、一見上長を蔑にした不穩當の行動のようではあるが、君の眼中何等自己本位の我執なく、一に會社本位に立脚した忠誠其物の發露に外ならない事が明らかであつたので、無論問題もならず済んだのであつた。

君のかうした自信の強さ、我慾を離れた誠心振りだが、相手の心肝に映じて何時も君の運命開拓の助けになつたのであつた。

素人日本料理の實驗

明治三十年頃の君の「コラバ」借宅住ひ當時から弗々馴れぬ日本食の手料理を始めた、時々可笑しなものが出

來て苦笑を禁じ得なかつた事もあつたらしい。君が二度目の渡印後は不相變「コラバ」の借家で日本料理の調理に忙しかつた、明治三十一年四月廿一日附で友人に次のように洩らして居る。

『西洋料理には少し厭いた、近頃日本食をやつて居る、寡世帯にも馴れた、料理方をやるのは隨分骨が折れる時々妙なものが出るよ、併し味ないものでも日本食なれば甘く食べられるよ、會社から送つて呉れる罐詰を抜き日本酒を片手に一杯やるまきの愉快は大したものだ、酒の愉快は必ずしも美人の膝の場合のみではない、獨り居るも結句氣樂さ、くだらぬ奴の話相手をするではなし、浩然の氣を養ふには獨居に限るよ、僕の好きな罐詰は松茸、昆布卷、貝類、福神漬などで之れ日本酒さ』

君は獨り住ひではあつたが、無聊を感じる時々、友人を自宅に招き入れて手料理の日本食をつまき、四方山の話に花を咲かすのを無上の樂とした、君が始めて渡孟した折から特に親しく交はつた紡績聯合會出張員山崎氏が明治三十一年日本に引揚げた時には深く名残を惜んで知人数名を誘ひ合せ一夕送別の宴を自宅に張り、自ら特殊の腕前を振つた素人日本料理を饗したのであつた、其時の献立は次のように流石に立派なものであつた。

茶碗蒸、スマシ汁、鯛刺身、蠣三杯酢、鰯鹽焼。

如何なる仕事にも熱心なる研究者であつた君の事であるから、恐らく調味加減も可なりのものであつたらうと思ふ。

君は同年九月二十一日附で孟買生活の一端を次のように郷里の父君に通信して居るのである。

「孟買に年一年と馴れ候に随ひ、事情も相分り例へば食事の如き、豫て洋食のみより不相協に存居候處、近來日本の野菜物即ち大根、蕪、胡瓜、筍等扱ては烏賊、章魚、鯨などの海産物を買ふの途をも相分り、又從來召抱へ置ける料理人の、日本食調理法の一端丈け習熟爲めに時々壽計、刺身、吸物等の御馳走も出來申候、御一笑相成度候。

熱帶國の難有さ、茶草物、果物等には不自由不致、日本にて近頃の筍等は一寸不思議物かぞ存候、青豌豆、二度成、胡瓜、芭蕉實、椰子實、蜜柑等は年中有之候。

印度人は妙な人種にて烏賊、章魚、鯨、鰻等は一切食事不致、爲めに投値同様にて安價なる上、實に我々嗜好に相適し申候、是等は毎朝マーケットにて魚屋が前日獵場にて得たる魚類を、一籠にて持參、之を仕分け致候節、謂はゞ捨物に相成候ものを拾ひ買の事に御座候。

伊勢海老なきも有之、此間は尺餘の大海老を買取申候。

小生が在孟後一番不思議に存候は彼の鯨に御座候、印度人が何魚かは知らずに、一尋餘も有之候鯨の子を捕獲し市場にさらせしも更らに買人なく、持て餘まし候處に出逢ひ、馴染の魚屋にて頻りに買取り呉れ強請候間、大枚八安（即ち日本貨三十錢）にて引取、大に在留日本人中に分與候事に御座候、全身捨て處なき鯨が僅に三十錢はヨモヤ日本には有之間敷に存候。

乍併其他の洋人士人向きの魚類は至極不廉に御座候。

亞弗利加より日本の橙よりの蜜柑到來仕候、一個二錢位、其美味得も謂はれず候、葡萄は近日出廻り可申、西瓜は一、二月後市場に出で可申候』

藝は身を助くるこかや、君が大正八年五月一日巴里の宿屋で、勞働者總ストライキに出逢ひ、クックも罷業したとき、君がスキ焼の手料理に肉切りの見事な腕前を見せたのは、此時頃鍛へ上げた腕の覺へであらう。

又君が印度人不向きの捨物同然の魚類を廉く拾ひ買ひして日々旨しく之を食膳にのほせたり、或は印度人が持て餘ましの鯨の子を素早く捨値に買取つて廣く之を在留日本人に振舞つて其美味に舌鼓を打たせたなきの手腕は全く君の機智に敏捷の然らしむる處で後年君が日本で持て餘ました雜牌綿糸二十手を安く買渡つて支那市場に有利に處分したり、他人の持て餘ましの事業を廉く引受けて有利に之を更生せしめし如き君の素晴らしい商才振りこ全く其揆を一にするを思ふものである。

二 一度 目 の 歸 朝

明治三十一年十月大阪本社に重役の更迭が行はれた、田中老社長、志方常務引退され、代つて取締役竹尾治右衛門氏社長に、田中市太郎氏常務に就任された、其結果として多少人事の異動が行はれた、君は外國係孟買主任を命ぜられて本社轉勤の内命に接した。

そこで君は豫て印度内地の棉産地視察の希望があつたので、本社の許可を得て歸朝前に素志を果たすことにした、同年十一月二十二日より二十日間、内地樞要の棉産地行程三千五百哩に亘りて巡察の途に就き、十二月十一日無事目的を達して孟買に歸着したのであつた、始めて中央印度棉産地の風物に接した君は、其廣漠無邊の版圖に農産物の豊饒さを驚嘆するに同時に、多大の専門的智識を獲得したることを喜んだ。

斯くて君は智囊を肥やし、十二月二十九日孟買出帆の鷹島丸に身を托し、勇んで大阪本社に向つたのであつた、君は今度歸朝の上は豫ての建策を一舉に解決せんもの、日綿の印度に於ける今後の大發展の夢を載せて印度洋の高浪を蹴り行くのであつた。

三 度 目 の 渡 印

君は明治三十二年一月日本に安着した、そして新しき任務に就いた、同時に君が豫て建議せる事項の必須にして我社今後の發展に利益多き理由を親しく述べた、新進の田中常務は勿論君の意見に共鳴する處あつたが、左りて其全部を容るゝには猶可成の距離があつた、乍併君の平素最も必要と見做せし本社に派出員間の直接電報往復の一事——換言すれば派出員の地位の向上に權限の擴張が承認さるゝに至つた事は慥かに君の満足する處であつた。

斯くて今後孟買派出員の行動敏活を期し得ることを相俟つて、本社幹部連の動作も亦機敏積極的なるの必要を力説して重役始め幹部社員の注意を喚起するところあつた。

而して君は更らに得意先なる紡績各方面に亘つて印度棉取引に對する意志の疎通を圖るに努力するに同時に、今度我社の採つた取引方法改善による利便を高調して今後一層の愛顧を祈望するところあつた。君は外國係孟買主任として熱心に執務したのであつたが、愈新棉期の切迫と共に新に孟買出張員の任命を必要とする場合となつたが、此重任に堪へる適任者は遂に君を措いて他に見出し得なかつたので、君は又しても同年九月孟買出張員を命ぜられたのであつた。

今度こそ愈腕の見せどころ明治三十二年十月十二日君は勇んで佛郵トンキン號の乗客となつて神戸を出發したのであつた、十一月五日孟買に安着した君は、一層本社に對する責任の重大を加へた事に想到して、一日も安息を許さず、着後直ちに從來ガダム商會との間に、鬱積せる諸苦情問題の懸案解決交渉に着手したが、君の熱心なる努力は有利解決の緒に就くを得たのみならず、買附品は幸に値上りのチャンスを得たので、本社も大に満足の體なるに同時に、君の得意も亦思ふべきで、昨年迄不愉快勝ちに執務した君も、今や晴れやかに渾身の勇氣を智囊を搾つて、一意日綿發展の爲めに奮闘を誓つたのであつた。當時父君宛てに

『従前とは違ひ此度は在留資格も揚り、本社との賣買約束一切、小生の手にて致候事故、随分苦勞も有之候得共結局將來の爲めなれば大に喜んで働居候、又取引先西洋人も馴染の仲にて、萬事本社對ガダムの事件好都合

に相運び喜び居候事に御座候、小生も今度は我身將來立脚の地歩を圖らん爲め、死力以て會社に盡す覺悟に御座候間御安神被下度候」云々

と申送つて居る、君が大々の決心の程も察せられるではないか。

三度目の孟買生活

君が孟買第三回目の生活振りも不相變眞面目至極のものであつた。

『着後婦人は一切禁物に致居、其代り讀書に飲酒(ウキスキー、ブランデー)に身を入れ居候、僕は背は低くても酒は能く飲むよ、背丈は一向延びんが併し體重は勿驚百二十九封度、腦と腹にはどんな物があるか、五尺〇八分の身體如何なる大望に抱負しを持つてるか、僕は知らず。

十二月一日(明治三十二年)よりガダム商會附近に寓居を構へ、領事館書記生と同居致居候、今度は御蔭で話相手が出来て淋敷無くて仕合せに存候、三層樓上の陋屋なれども、住めば都にて五時過退社後イーヂー、チエヤーに横臥し、一グラスのウキスキーに當日の憂さを晴らし居候、今度の家は少々張込んで室内の裝飾を施したから少し住心地良くなつたよ。

孟買の風土病も云ふべき黒死病其足跡を絶たざるも、毫も意に介するに足らず、思ふ儘働き思ふ儘氣樂に

遊び居、聊かも御懸念に及び不申候』

と友人に書いて居る、今度云ふ今度は君も愉快に執務し、大に働き甲斐のある境遇に置かれたので、長い間の辛抱が漸く酬ひられたことを君も満足に思つたらしく、君の自信と決意の程が右の文面中に躍如たるを見るのである。

高等教育の必要力説

君は夙に高等教育の必要なるを痛感して居つた。君が晩年母校を商科大學に昇格すべく不屈不撓の運動を續けたことも當然の行動と思はれる。

明治三十二年十二月廿日附を以て君は孟買より故郷の父君へ次弟教育上につき左の書面を發して居る。

『邦藏殿(末弟)今後教育の御方針御定相成候様なれば御洩願度候、本人さへ商業従事承諾候様なれば實業界に入るの前、高等商業學校を卒業爲致被下度小生畢生の願に御座候、小生も是迄の經驗上若し商界に入るの志有るなれば是非高等商業學校若くは以上の學校を卒業爲致候事必須の事なりと存居候、ソハ商界の事勿論學藝の巧拙如何によるものに無之候得共最初地位を得るの點、商界に入りたる後の渡世の難易等より推究し是非今後は高尚の學問を修めしものゝ勝に歸するは必定に御座候、唯今にては高商は將士、大阪及其他の尋常中學相

當校は下土養成所との觀有之、而して夫等の卒業生は凡て斯る階段に相成居候、今日にては大商出身にて小生如きは割合宜しく参り居候得共他はツ、マ、ヲ、仕事を致居り御参考の爲め前以て卑見開陳致候事に御座候、高商には外國留學、外交官受験等の特典有之候のみならず卒業後は直に入社先の如何により外國在勤も出來可申旁々其利益する處非常に多く吳々も同人を商賣人みなさん御考へも御座候得ば高商校に入學せしむるの御方針樹立被下度候、尤も高商卒業には年限多く學資も割多く相懸り候得共是れ一時の話にて遠き將來を考へては、斯る些事に御頓着なきこそ利益も存候、入らぬ話には御座候得共父上にて御許しさへあれば小生に於て同人出京後の監督は勿論、學資も都合出來候場合に限り支出差支無之候』

而して、君は又右末弟に對して、同じく商業學の研修を勸むる處あつた。

『本年四月には四年級に上進被遊候に付ては御卒業期も遠からず、其後の御方針に對する愚見御尋被下左に一通り卑見開陳仕候。

御承知の如く小生は一小棉會社小僧として當地に在勤致居候事故、事々物々小生の双眼に映するは商事的の事のみ、他の職業に就ては頓々存不申亦自分も左程注意致し居らず候得共外國貿易面白き仕事は無之様被考貴殿さへ御異存なくば高等商業學校に御轉學、十分に最新の商業學の素養御蓄へ相成、而して後實業界に乘出し候事或は貴殿御將來に取り得策ならざるや乍憚御氣質より打算し相考へ申候、即小生は貴殿に今後商界へ御顔出相成様御勸告申上候、左すれば小生も他日携手渡世出來、此上もなき事ながら人夫々に長短所あり、強

て斯々斷言候儀は誠に至難にて、貴殿萬一他業に御就事の御精神なれば己が望の儘に御勉強相成度者に御座候、申す迄もなく、何事にもせよ輕々數目的を度々變更する程一身に取り不利益なるは無く、一旦之れ相定め候上は是非にも終始此御精神ならでは相成不申、篤く御勘考父兄共相談の上何れかに御決心煩度者に御座候小生一個として前陳の如く商賣を御勧め申候事にて其商人も普通のものを意味候譯けには無之、高等の學問智識を修められ、否英獨商人を凌駕するに堪ゆる最新の商人に可相成様御心懸願上候、父上より過日貴殿が醫學の御望も有之旨通信有之候得共小生は少々賛同致兼候、萬一商業を措いて他に入らんとの御思召なれば寧ろ法學部に入學の方現今の我邦形勢より講究し宜敷様に相察候、小生當時の目的は人の頭に立ち一身を安樂に相送り度積りにて、先づ第一に智識技藝を修練し一面人生衣食住の原動力も謂ふべき金錢の貯蓄を爲さんきて、日夜苦心罷在候事にて、貴殿も其處に御着目の上一身の方角を定め、不撓不屈苦境に際して折れず、一時の不愉快を能く耐へ、以て他日成功の秋を圖るの御精神必須かき存候、兎に角御決定の上は御一報相成度待入候。

御中越の英辭書一部今郵送届申上候、御参考も相成候得ば仕合に存候』(明治三十三年二月廿八日附)

弟の將來の方針に對し縷々其修業の指針を教へ導かんとするの眞情紙面に流露たるを見るのである、實に君は弟思ひの好々兄さんであつたのである。

末弟邦藏君は君の勸説に快く共鳴して早稻田大學商科に學び、大成されたのであつたが惜哉不幸夭折された。

埃 及 渡 航

明和三十三年十一月五日孟買に到着して三度目の印度生活に入る。君は大阪本社よりの命令にて埃及亞歷山港に出張することになった、即ち埃及綿の取引先が約定荷物を積出さぬので其談判を外に新に適當の取引先を撰定することの二つの大きな役目を帯びての事であつた、そこで君は同年十二月三十日英郵船ベニンシュラ號で孟買を出發、翌三十三年一月十日亞歷山港に到着したのであつた、君は早速アンドレー商會に對して強硬な態度を以て値合金の支拂を要求したのであつたが、何分相手は薄資でもあり相場にも負けて居るので到底充分なる支拂能力なきを確めた後、止むを得ず相當讓歩して曲り乍らに解決をしたのであつた、一方新取引先の撰定については百方調査の上夙に信用厚きプラシタ商會を握手して代理店契約を締結したことは君の御手柄であつた。君は以上の二大役目を着後僅々十日を出でずして夫々片付けて仕舞つたのであつたが、其電光石火的の機敏な活動振りは早くも當時に顯はれて居つた、其頃君は左の通信を郷里の留守宅に寄せて居る、

『小生今回來歴要件は従前の取引先の荷物不渡を受取る事及新取引先撰定の二に有之、中々重大の事のみにて大いに苦心、殊に受渡の談判には骨折らせ申候、其取引先は兄弟姉妹組合の一小商社にして本國は獨逸なれば事至極面倒なりしも幸に二件共落着仕候。(以下中略)』

何か日本に送り収益のものがなご探し廻り候得共頓見當らず、唯名物の巻煙草、當地最大工場にて百本入六十箱程買入、近々試賣の爲め大阪向け送附の積り着後二、三箱、在阪友人より送附爲致可申、値段は大阪着一本三錢位(口錢なし)試送の結果ア、フ能くば小生歸朝後の一仕事に致度積りに御座候、一本三錢は中々高値にて或は不結果なるかも難圖候得共歐洲にては、*ド、シ、ハ、*賣行き居り、日本にても上流社會には相當需要可有之一度味を知れば中々止められぬは埃及煙草に有之、小生は今回送附の巻煙草凡てに (M. Kitta) の我名前を入れ申置候、百五十圓の投機^レ旨く往けば重疊^レ今より樂しみ居候呵々

小生歸朝の途次棉産地を一巡り廻り、首府カイロに至り夫より駱駝に乗り三角塔上に上らん豫定に候、^レピラミッド^レにては撮影の筈に付一葉御送附可申上候、右巡覽後ポートセツドより彼阿郵船にて蘇士運河通過歸孟の途に就き可申筈に候』(明治三十三年一月十九日附アレキサンドリヤ發)

君が忙中に於て何がな有利有益の面白き商品の發見もがなご鵜の目鷹の目で環境に注意を拂ひ遂に埃及シガレットの日本輸入に着目、直ちに之れが實行に着手した其滿々たる商賣氣の發露——而かも夫れが當年二十四歳の青年であつたことを思ふべき、如何に君が若くして貿易の權化たる素質を具へてゐたかを推知し得るのである、後年君が其秀でた實業の大手腕を縦横に發揮し、遂に世界的貿易の大家として盛名を歌はるゝに至つたことは蓋し故なきに非ずと思ふのである。

我社は十數年來巻煙草の原料として日本葉煙草を埃及國に輸出して居るのであるが、君が明治三十三年の昔に於て埃及シガレットの日本輸入を志した^レ云ふことゝ照し合せて如何にも奇しき因縁の存在を考へずにはあら

埃及見物 (一)

ない。

明治三十二年十二月三十日孟買を發して埃及に向ひ約一ヶ月を埃及出張に費した君は、埃及所觀を孟買歸着後明治三十三年二月二十七日附で郷里留守宅に報して居る、

「小生は歴山を明治三十三年二月二日出發カイロに三日滞在、ボートセツドに五日の夕方着、同地にて乗船、七日朝解纜、蘇士運河通過、亞丁十二日着發、孟買に十六日歸着仕候。

歴山——カイロ間汽車にて百卅一哩、三時間半を要し首府カイロに着せしは二日正午にて、直にプリストル・ホテルに投じ、午飯後馬車にて案内者引連れ十哩を隔てしギゼの最大三角塔を見物に出掛け申候、ピラミツド(三角塔)は茫漠千里見渡す限り白砂連なる大沙漠の門戸に聳へ居候、來て見れば其廣大なる坐ろに往古埃及文明を追想せしめ候、三角塔其實四角の建築物なので三尺四方の大石灰石を幾萬もなく積連ね四角形を爲せる石造物にして登るに従ひ細小になり下層の廣袤五十三萬五千八百二十四平方呎、高さ四百六十呎(七十五間強)の大建築物なれば遠方より見るも其四角なる事相分らず、サモ三角狀を爲せる觀あるを以て三角塔(日本にて誤譯せしものならん、英貨二志を投ずれば土人三名前後より附添ひ其絶頂に登るを得べし、頂上よりは右に大沙漠、左にナイル河を見るを得べく遙かにカイロの市街を望見し其壯觀天下に比敵するものなきこの事な



明治三十三年二月一日
埃及ピラミツドの前に立てて喜ぶ多藏又氏

るも三尺に餘る巨石を攀ぢ上るは容易の業に非ず、獨行の小生、遺憾ながら其舉を廢し僅に内部を窺ふに止めたり、平地より四十呎を上り内部に通ずる入口あり、土人案内者一名蠅蠅を以て道を導き、後より一名附添ひ三呎四方の隧道を行くこゝ大凡十間、道を轉じ三角塔内部の王室に略々三十間上り往くなり、王室は昔時帝王の「ミイラ」を埋めし石棺を安置せし處、二十疊敷以上もあらん、高さ(室内)三、四間、周圍は三間以上もあるべき花崗石にて積み上げられたるものにて今は石棺を残すのみ「マゲネシウム」礦を焚き、室内を見れば如何なる人も其偉大に驚くならべし、蓋し往古埃及帝王は其遺骸を不朽に残さん爲め「ミイラ」を作り斯る三角塔を建設其内部に納めたるものにして納骸後は入口を密閉し、後世人の容易に發掘せんを恐れ、故さミ複雑なる道を作り又は他に類似の石室を設けたるも、他は凡て開放何人も其内部に入るを得、而して何時斯る建築を爲せしやは學者間の互に争ふ所にして其何時如何に發掘帝王「ミイラ」は如何に成り行きしやは何人も知る所に非ず(因に記す三角塔は總計十四、五

埃及に存するなり)

三角塔を出で駱駝の背を借り沙上に數千年來の突立せる石佛「スフィンクス」を尋ね候、距離三角塔より半哩、寫真師あり記念の爲め其「スフィンクス」の前に撮影別葉送附申上候、駱駝の口手綱を持てるは馬方、左側に驢馬に跨れるは案内者アリハザンニ申す埃及人に御座候。

埃及見物 (一一)

翌三日はカイロ市中著名の「モスク」即ち回々教徒の寺院、古カイロ市中の見物に目を暮らし、四日は豫て耳に狭みたる土耳其風呂に入湯、小生の生後身邊に附着せる垢を洗ひ落し直に馬車を驅て博物館に赴く、埃及古代の美術品を品により、時代別けし幾萬もなく陳列したるには驚嘆仕候、重に石物にして或は石棺或は彫刻或は石像、ミ併列し古代婦人の裝飾品、織物、器物、貨幣等順序良く集めたるは、慥かに古代文明の一斑を窺ふに足らん、又藏の念頭に今猶去らざるは「ミイラ」の蒐集室にして古墳墓若くは塚より發掘せしもの(中に五、六千年を経たるもの)數百を集め、色こそ失ひ居るも、形は依然として存し(毛髪、齒なきは其儘)居るには我等は敬服の外なし、午後には帝宮城及其他の名所舊跡を尋ねたり、此日駝鳥園に於て千四、五百の駝鳥一園に集り生後數日を経しものあり、二十五年以上まで飼養し或は砂上に卵を暖め居るもあり、馴れたるは一

聲の下に土人踊の真似をなすなき、蓋し他國に見る能はざる所なるべし。

「カイロ」市の東を通じ流るゝは音に聞へしナイル河也、源を三千哩奥のウガンダに發し一時間六哩の速力にて靜かに流下、河口に達するは三、四月の後さかや、六月以後氾濫し九月頃より減水するは毎年期を一にし減水後兩岸には沃土を殘し置く、農夫は此泥土を採り駱駝を以て我田園に運搬、之れを唯一の肥料として散布するなり、由來埃及は降雨最も少なく農作物の成熟一に此ナイル河灌溉の恩澤に據るものにして無數の運河は網の如くに通じ種々の器械を以て田野に灌水せる様、實に一奇也、巨大のナイル河は一千里の上流まで小蒸汽船を通じ、流す泥土に田野をして世界唯一の豊沃土たらしめ、棉花、小麥、砂糖、其他の果實を産せしむ、舟楫沃土は是れ埃及古代文明の魁たらしめし所以にして此大河の埃及に及ぼす關係甚大にして埃及の消長ナイルの如何による云ふも誣言に非ざるべし、左れば政府の其出水の計量又は灌水に費す經費莫大にして予輩は埃及人の天恵を羨ますんばあらず、然れども憐れむべきは國民游逸に耽り政令途に出でず歌舞、賭博の盛なるは意想外にして赤髯奴は其隙に乘じ國內を蹂躪す、赤色の新月旗は徒らに其用を爲さず、亡國の末路亦憐れむに堪へたり。

沙漠には數十の「キャラバン」即ち駱駝隊商の往來するを見る、實に奇觀也。

埃及見物 (三)

カイロは人口六十萬、亞弗利加一の大都會、埃及政府の所在地にして市街は清潔、電車馬車を通じ當時は年の最良氣候にして歐米客の避寒及舊蹟探究の爲め來る富客、引きも切らず、彼等を收容するに足る旅舎五六あり、予が滞在中是等の族宿滿員せるは、如何に埃及の良國なるを證するに足らん。

ナイル兩岸は處々舊蹟に富む、降雨稀少なれば空氣乾燥轉地療養に好適の場所たり、數十を乗するに足る游船(蒸氣船)は毎週二、三回河上に向け出帆す、第一瀑布までの行程五百哩、往復日數廿日運賃五十五磅(五百圓)其愉快思ふ可し、予は社用出張の身の上なれば時日、經費の空費を爲す能はず滞在三日にして遺憾ながらボートサイドに向け出發、要するに埃及の美を探らんせば五、六十日を要すべし而して物價は不廉(一日滞在宿料十六志即ち八圓)數千金を有せざれば其目的を達するを得ざるべし他日成功せし秋、必遊を約して出發せりボートサイド向け旅行中棉花主要産地(二字不明)ジダに小生が今回取引先に撰定せしブランド商會の棉繰、荷造工場を見る、歐商の隅々まで盡せる様を見、心密かに我社現狀に比し聊か美耻の情に堪へず。

船待の爲めボートサイドにて「ホテル・コンチネンタル」に宿す翌日彼阿最大郵船印度號は來る、直ちに乗船、運河を過る、蘇士運河は沙漠を掘割つたものにて延長八十七哩、通過時間十六時間を要す、其地中海と紅海を連絡せしは一千八百六十九年即ち今より卅一年前にして其成功者佛人レセツプ氏の偉業は千歳に朽つるの

期なかるべし。

予が乗船印度號は濠洲航路にして、總噸數八千噸上中等客五百名以上を運ぶに足る(下等客は積まず)當航一等客約二百八十名、食時一堂に集まる様は蓋し通常人の意想外ならん、客中孟買知事にして赴任の途にあるノースコート卿夫妻あり、卿を年頭こして歡樂會なるものを組織し毎夜假裝舞踏及素人芝居を催ふし、晝時は乗客等も思ひくく西洋遊戯をなし、船員は其對手をなし、客をして毫も無聊の念無からしむ、其周到驚くに堪へたり、亞丁にて其姉妹船なる亞刺比亞號に轉乘歸途に就く、

予が此往復五十日其間商業上は勿論一般洋人世事に就て經驗せし事尠ならず而して埃及の舊文明國を社費を以て見物するの機を得たるは幸の極なり、永世綿花會社を恩こし予の記憶を去らざるべし、唯憾むらくは予の第一埃及行の主眼たる前取引先違約の損害金を満足に得る能はざりし事のみ。

右は埃及紀行の一斑に過ぎず候云々」

新進氣鋭にして感傷に富める年若き君が古代文明國の跡を尋ねて、或はピラミッドの偉觀に驚き或は古代美術を讚嘆し、或はナイル河の恩澤を讚美し、或は亡國の末路を憐むなき、感慚無量を禁じ得ず興味津津たるものあるを覺ゆるので、冗長を厭はず茲に採録した次第である。

(編者曰く君の英文埃及紀行は後出遺稿篇中に収録せり)

奉公の熱意

明治三十三年二月二十八日附孟買より大阪の社友宛て

「御仰の通り埃、米、時を同ふし此失敗を見る、本社の不幸、田中氏の御配慮被思遺候、此分ならば本年上半期の計算餘り好結果を見る様には考へられず、一方同業者〇〇〇の勢を見ては誰れの心中ミても難堪事なるも俗言に雨降つて地固まるこかや、一時の苦痛何のその、心靜かに他日を圖るこそ本社の責務なるべく、此際貴兄が赤誠以て本社に盡すの御志、小生も至極同感共に社の爲めに奮勵し、同時に我々青年の將來を卜するに當り最好機會を存候、愚存に據れば明治二十六年の失敗は社の内部、今度の蹉跌は外部に胚胎し即ち本社は此兩度の難局を打超へ候儀にて今後は漸次好轉するなるべく、小生は乍不及一身を賭し本社に盡す積り、傍ら田中氏の鴻恩に酬ひ度き覺悟相定居候」云々

當時我社は米綿、埃及棉の取引先が相場暴騰の爲め、約定荷物の積出を爲さず、之れが爲め多大の損害を蒙るを餘議なくされたのであつた。随つて我社の立場は、頗る苦境に置かれて居つたのであつたが、幸に君等の如き一意奉公の熱意に燃へた若手社員存在によつて、能く頽瀾を未倒に防ぎ得たことを多きするのである。

日綿内閣改造と君の拔擢 (一)

君は明治三十三年四月、本社に轉任を命ぜられた。數年住み馴れた印度の地を立退くこゝは、君にも相當執着心があつたらしい、

『今度孟買を出發せば、何時又來孟の機に遭遇するや測り知れず、既往數年孟買に據つて生活せし小生、何んだけか心惜しき心地するも亦一奇に御座候、或一派の人等の所謂ホム、ム、シ、ク、なるものは、何處を鼓いて出る事やら小生には一向會得出來不申候』

こ當時父君宛てに、不相變氣の強い處を見せて居る。

同年五月初旬日本に安着した、歸り着いて見れば日本は多事多難だ、義和團の蜂起で北清一帶の形勢が頗る逼迫し、六月頃には愈出兵となつて、財界の混亂眼も當てられず、不景氣風は忽ち日本の天地を蔽ひかぶせた、殊に綿業界は去二、三月の頃、稀有の大活氣を見せたゞけ其反動も亦一段甚しく、綿糸價最高より三十七、八圓ベシゴール綿十五、六圓、米綿約二十圓方何れも暴落云ふ徹底振りで、斯業者間に倒産者續出、有名な守山の三品大失敗が其導火線となり、石井、友垣の失敗となるなごの慘劇を見た程で、當時紡績業者の狼狽其極に達し紡績聯合會は總會の決議を以て政府に救済運動を試みた程の悲惨振りであつた。

歸朝後間もなく、此暗澹たる綿業界の有様を打眺めた君の胸中、果してどんな感を抱いたであらう？

君は其時斯業者の餘りにも、慌だしい舉措を遺憾に思つた、當時三品に立會停止を要求した聯合會の態度を面白くなく感じた、況んや政府に救済運動を試みた態度を最も苦々しき事に思つた、君は前にも書いた通り「スマイルス」自助論に私淑して居つたので、他力本願は大嫌ひであつたのだ。

君は本社に歸つてから、能く社内の様子を見るミ、舊態依然たりで、苟も幹部らしい働きのある人も見受けられぬので、これでは非常時に處する亦難い哉の感を爲したのであつた。そこで君は種々改善策について献策を試みたのであつたが、二十四歳の下級社員の悲しさ、寧ろ生意氣な書生論位にしか顧みられなかつたのも一應無理はない、今回の歸朝には相當の希望を抱いて歸つて來たのであつたが、こんな有様なので流石に辛抱強い君も多少會社の將來に不安を感じ始めずには居られなかつた、そこで君は自分の將來を最も迅速に且つ最も有利に展開し行く爲めには、此際どんな方法を探つたら良いかミ首を傾けたのであつた。

君が歸朝後に受け持たされた仕事は、外國課事務の一部で、謂はゞ社内に於ける通辯方兼翻譯係ミ云つたようなもので、これミ云ふ權限のある仕事ではなし、商賣の實地經驗を得る機會もなく、從て實業界に知己を求むる望みも薄い、こんなことでは折角の本社勤務も頗ミ面白くない、翻て肝緊の商務係の内情を見るミ、不相變因循姑息引込思案で、何等一定の營業方針らしきものもなく、其場限りいゝ加減に御茶を濁ごし行くミ云ふ有様で、而かも色々の情實が蟠まり、迎ても内外綿や三井の同業者の進取的なるに比すべくもない、これでさうして社運の隆興を期待し得よう、今や營業部の刷新は急務中の急務である、自分は此際外國課を離れて營業部に代りたい



——年四十三治明

前列右より三人目 喜多又藏氏
四人目 田中太郎氏

そしてウ、働いて見たいミ、かう決心をしたので遂に此事を田中常務に訴へたのであつた、そして若しか自分の欲する程度に於て、諒解を得るこゝが出来ないようなら萬止むを得ない、自分は終生を會社に託すべく又田中氏の御恩を報すべく、忠誠を抜んでた積りであつたが、憾を吞んで斷然退社の覺悟をしようミ、君は爰に悲愴なる覺悟を決めたのであつた。

斯うして居る内にも、綿業界の形勢は益々面白からず、紡績會社は奈落の底に沈み行く有様で、綿屋の店には閑古鳥が鳴いて居つた、この時我社の竹尾社長は一身上の都合で社長を辭任されたので、明治三十三年の暮には我社の立場は相當多難に見受けられた。

窮すれば通ずで此行詰つた状態を、何んミかして立ち直さねばならぬミ、重役連が鳩首對策を考慮した末遂に少壯有爲の田中常務を社長に押し、此際に善處せしむるこゝに、衆議一決したのであつた。

聰明にして意氣旺んなる田中市太郎氏を社長に戴いた我社は仕合せであつた、爰に積弊打破、社内改革の

烽火は揚げられた、人材登庸の端は開かれた、支配人代理の要職にあつた某上席係長の辭任となり、君は一躍其後任に拔擢されたのであつた、不遇を嘆じて居つた君の身の上に一朝にして此好運が廻り來たつたのである、君の實力を見抜いて此英斷に出でた田中社長の眼識は流石に偉い、爰に我社隆興の種は蒔かれたのである。

日綿内閣改造と君の拔擢 (二)

君は豫て事務上の實權を與へ呉れし重役に要望して居つたに過ぎなかつたのが、更に此希望を上越して營業上の實權を握る身に俄に押し上げられたのであつたから、一時は寧ろ意外にも感じ、又不安にも感じたが、併し愈腹を据へて最善を盡すの決心を堅めたのであつた。當時君が孟買の一社友に洩らした次の一文は、明らかに其邊の消息を傳へて居る。

『自分は高給を望まず、又地位ある名稱を望まず、唯商賣上事務上の實權を與へ呉れたし、平素請求致居候次第なりしに、突然主席係長に就任せよとの命令は、實に意外にて、我身の如き若輩菲才到底其任に當らず、餘人の誹議も如何があらん、又餘り分に過ぎ失敗せずと案じ、一度は辭退仕候得共是非共の御思召にて、遂に承諾致候様の始末に御座候、而して小生は在來如き遣方は厭なり、出來る丈けの事は決行仕度、就ては其條件として、賣買課、外國課支配の權を握り、飽迄所信に従ひ、眞逆違へば免職を覺悟し、將來勤務の決心に

有之候。

小生が就任に際し、最も憂へたるは先輩の○○、○○、○○、三君の操縦策なるも、今後小生さへ事務を敏活にするを得、一面老年者に對する待遇を相當になすに於ては、毫も心配なき積り、何れにせよ日々蔭の苦情は可有之の豫期致居候、乍併夫等は一切意に介せず、遣り通ふし度存居候。

○○、○○、○○の若手諸君は、幸に小生を援助し、今後共々會社の事業を革新すべき様申呉れ居、小生も是等諸君の後に立つこそ千萬力に存候、其忠告と協力により、身に餘る重職を無事相勤め度と相期居候。

小生就職後即ち二月一日(明治三十四年)以降に對する會社營業向きについては、田中新社長より、委任せられた權限内に於て、ドシハ、遣り通ふす覺悟に御座候』

君はつくづく責任の重大なるを痛感し、非常の決心と覺悟を以て、愈晴れの舞臺に活躍し始めたのであつた。君は此時漸く數へ年二十五歳を算するの壯者であつたのである。

活
躍
時
代

活躍時代

(明治三十四年以降大正五年まで)

初陣振

營業の支配權を握つた君は、着々所信に向つて邁進した。唯時勢の可ならざるものがあつたので、劈頭より好成績を擧ぐるに至らなかつたのは致方がない。

君は米棉成績の擧らざるは、米國事情に暗い爲めである、出張員を出して此缺陷を救はねばならぬと、早速適任者を物色し始めた。此選に當つたのが後年君の好女房役として長く扶け合つた山田穆氏其人であつたのだ、氏は明治三十四年五月に米國に向けて出發した。

其他社内部の配置振に注意して夫々陣容を新にした。尤も老幹部連にまで手を染めることは時機尙早として遠慮をしたが、夫れにしても從來緊張を缺いだ彼等の心持を此際何んぞか引締めさせる必要ありと感付いた君は、身躬ら難局に當り諸般の指導精神を以て、日曜祭日と雖頓着なく、朝は早くより夜は遅くまで一意専心努力奮闘の好模範を示すこゝにしたので、流石頑迷なる老幹部連も漸く覺醒し始め、從來だらしのなかつた態度を一變して相當の緊張振りを發揮するに至つた。

従來社員に對する論功行賞の基準が頗る曖昧で、各自不平の種であつた事は、事業成績の擧がらない一つの缺陷である。信じた君は、就任後始めての決算期たる三十四年上半年より斷然賞罰明示の方針に出で、賞與金の分配並昇給等平素の働き振を按じて公平無私に決行したのであつた。

而して營業の方針としては、米棉埃及棉に主力を注ぎ、従來兎角不評判であつた印度棉の取引に就ては、取引先ガダム商會との意氣投合を見ざる限り、當分消極主義により、自重して大過なきを期することにして、老練の同業者三井、内外の間に伍して徐々其新たに進むべき途を開かんことを期したのであつた。

斯くて社内の陣容も餘程改善され、得意先に對しては出来る丈けの勉強振りを示すことになり、君が上席係長としての初陣振は内外共に先づ好評を博した。

是れこそ前途輝かしい活動の第一線に立つた雄々しい若い君の姿であつた。

肝膽相照らす

君が上席係長に就任以來、營業上最も力を注ぐべきは、在外各店を預り居る各主任との間に、意志の疎通を完全にし眞に一致協力異身同體の實を擧ぐるにありしたが、就中米棉取引助長の爲め、三十四年春紐育に出張した同僚山田氏との間には、今後綿花會社の發展の爲め特に其必要を痛感したので、君は其心の底に秘めた氣持を折りに觸れて氏の許に打明けたのであつた。

三十四年新米棉取引の結果は、取引先ネヴィル商會との間に行違を生じた結果、端境期に重視された早積約定品延着の爲め、我社は非常の迷惑を蒙つたのであつた、勿論當局者は多大の責任を感じざるを得なかつた、當時孟買へ一時出張中の君は、通信によつて右の事實を承知するや、直ちに紐育の山田氏に一書を飛ばして、心から慰め激勵したのであつた。

『米棉遲着につき御申越拜承、豫て貴兄不注意の爲めに無之は小生能々承知致居候既往は最早詮方なく、唯要は來季積出方法の如何のみ、其邊十分に貴方面にて御講究相願度候

萬事失敗は經驗の母、不意の損失は次回收利を意味するものに有之、事々物々注意を怠らず如何なる苦痛不快に逢ふも事させず、笑つて之れに當り、其内に將來を慮る事大丈夫否眞個の商人の探るべき方針なるは最早謂ふを要せず、而して我社の盛衰如何は田中社長の施設如何にあるは勿論なるも、亦社長の手足を以て働きたるある我等の頭脳手腕に待つは申迄もなき事存候、否小生は餘り烏滸がましき申分かは不存候得共、極言せば我社の將來は我等に依つて解決せらるゝ問題に自負致居候、就ては如何にせばベスト、ミーンズなるや、又本社のため利益なるやを論據さし、私人間の個人的感情に傾着せず、以て大目的に直進の考、仰ぎ希はくば貴兄も生涯棉商たる精神にて、綿花會社——田中社長——我等の前途を圖られ度筆の序に御願申上候、斯る議論は所謂釋迦に説法なるは、萬々承知致居候得共、唯小生胸中の抱負希望を、信ずる貴兄に洩らし、幸に所説一致協力事に當るを得ば、小生の愉快之れに若くもの無之候』(明治三十五年一月二五日附)

君は不意の失敗は人生有り勝ちの事、敢て意に介するに足らず、唯此失敗の経路を能々吟味して再び前轍を踏まざるよう後車の戒めをなすこそ賢けれ、友人を激励して共に大目的の完成に協力奮闘せん事を、誓言する君の誠心を籠めた友情の切なるものあるを、寛容を激励の崇高なる人格に對し、心あるもの誰れも感激せざるものがあらう。果然山田氏は君の見上げた態度に感泣した、爾來益親交を続け終始渝らず相扶け合つて、我社の發展に多大の力を盡されたのであつた、

尙又君は其後明治三十八年四月五日附を以て、在米山田氏に再び左のような事を申送つた。

『前回當地御出發後我社内部も餘程進化仕候、豫て申上候通り、我社は田中氏志方氏を主とする會社也、而して田中氏が大阪に於ける立脚點云ふも過言に非らず、乍去遺憾なるは兩氏は勿論他重役諸氏一般商工業には幾多の御經驗有れども、我社が今日爲しつゝある處の仕事、身躬ら御執務相成候方は一人も無之、幸に我等重役諸氏の恩顧を蒙り、漸く一は身の修業、二は會社の爲め、可及的献身的奉職を爲し、未だ諸氏の満足を得る能はざれども、ド、ナ、リ、コ、ナ、リ、其日を過ぎし居候次第に有之、此處に我等の一層注意すべきは、如何にして重役殊に田中氏の満足を買ひ得るかの問題に有之、小生は持論として、我社をして關西に於ける第一流の貿易會社に致度、若し成功せば田中氏は勿論其餘澤を蒙りて、我等の將來も地位收入等段々世間に重視せられ候様相成可申、小生は日夜夫れのみ苦心罷在慾目かは不存候得共『今に見よ』的内々決心も有之、此點は別けて貴兄の御同意相願度點に御座候、重役方は我等にして忠實に働き、事業擴張の傍ら利益を擧げなば、何等面

倒の事も有之間敷、必要なれば株金拂込若くば増資も出來候積り、將來發展の餘裕存する事丈け御承知相願度候。

貴兄○○氏の御關係は、謂はずもがな、又小生不肖をも捨てられず、今日迄引立を蒙りたるは一に市太郎様其人の御蔭也、一死報恩の義務の存するは、小生内心覺悟罷在、兎に角小生は貴兄と共に我社の中堅となり、田中氏の慾に申さば股肱の積りで相働き度、今更謂ふも烏滸がましきも、筆の序に貴兄の御贊同を得るに同時に、將來會社の都合により、内外其居處を異にするに、君は僕は恰も一身同體の如く相働き度切に希望仕候』

斯くて君と山田氏との間は、益々親密を加へ、互に相敬愛して、眞に肝膽相照らすの觀があつた、日本綿花會社の大發展は蓋し偶然ではない。

綿糸取扱と對支發展

君が上席係長となつた三十四年頃から、綿糸取扱開始に就て、田中社長を始め重役に謀る處あつたが、兎角談が煮へ切らぬ内、君は印度棉取引先ガダム商會を重要なる折衝を爲す急用が出來て、三十四年十月二十五日神戸發四たび渡印を餘儀なくされたのであつた。君は十一月下旬着孟後ガダム商會に對し取引改善を値引懸案の解決につき必死の努力を續けたが、幸に相當の結果を得たので、君は三十五年三月三十一日孟買出帆の三池丸で歸途

に就いた。出發前君は田中社長より

「歸朝の途次、香港より西貢に出で、西貢棉取引先を揀定せよ、夫れより更らに、上海漢口に立寄り綿糸販路事情を調査せよ」

この命令に接したのであつた。豫て對支發展を念こした君は大に喜んだ、其時の君の氣持は故郷の父君に宛てた左の書信に明かである。

「上海漢口にて綿糸賣行事情精査せよこの儀重役會の希望なる趣なれば、小生は香港にて乗船を捨て、更らに西貢往復用事取片付けたる後、上海に寄港、夫れより長江筋視察を爲し、歸阪可致候、長江筋は日清貿易に志すものゝ是非共一應視察致し置くべき必要有之候事、豫々相考居候處今回歸途を幸ひ巡視相叶候事、小生の幸福する處にて、一日も早く綿糸輸出業開始、以て綿花會社支店開設、以て小生在社中の一功績に仕度希望を抱く同時に、我身一個に取り、將來何かの用に相立て度目論見罷在候」

當時君が如何に將來の對支活躍の計畫を心中に書いて居つたかを想察するに足ると思ふのである。

斯くも多く支那視察に期待した君に對し、意外にも田中社長の第二命令は到着したのである。即ち會社の都合上今回は支那視察を見合はし、一路直行歸朝せよ云ふのであつた、君の失望や知るべしである、此時君は考へた、店の都合云ふた處で、別に大した事でないに決まつてゐる、恐らく社中に之を妨げる或る手が動いた爲めに外なるまい、そんな事で會社發展の門出を阻止されてたまるものか、よし、己れは斷乎支那視察を敢行する、

と奮然意を決した君は、田中社長に對し堂々左の抗議的陳情をしたのであつた。

「抑も今回支那視察談は偶然に出でたるに非ずして、重役會議の結果斯くは御命令相成候旨前々來の書面にて承知致居、小生亦刻下の形勢より相考へ、是非共會社百年の策を爲すには、其大々の必要を相認め、自然自己の感情を打捨て其事に當り度、隨つて調査要領等香港迄通告の儀豫て申出置候次第、如何に朝令暮改は本社の特色とは申しながら、餘り會社意志の薄弱なるには今更喫驚の外無之候、貴臺始め重役諸氏一度其必要を決議しながら、間もなく反對の意見を御抱持相成る事も有之間敷、小生の邪推にては會社内創業以來一隅に踞れる所謂無智定見なき元勳者流の反對に妨げられ、斯る結果を來したるには非るか、左れば小生は會社の爲め遺憾極り無く、本社の前途又寒心すべきものなるを大に想ひ起し、小生は綿花會社の爲めに、衣食する身重役諸氏の御命令は飽迄遵守、水火の苦痛をも敢て辭せざる處に御座候得共、會社業務執行上に關し將重役命令處理上に對し、社内一部の有害無益の反對は、毫も今後念頭に相懸不申覺悟、餘りに烏譁がましき申條かは不存候得共、綿花會社の事業は、勿論社長其他重役諸氏の御命令如何に據れども其命令實行の責は我等にありて、所謂元老連中の干與する處に非らず、又彼等は綿業の今日より論じ、到底物の役に立つべき奴輩に無之、社會は是れを認め小生亦彼等を見下し居る敢て適當に非るを確信罷在旁々小生今度歸朝の節は其積りにて相進可申豫め御含願度、不幸小生の鈍才、貴臺等の信を買ふを得ずば、潔よく進退を決し度考に御座候、辭或は過言以て貴臺の意に逆ふや難測候得共小生は會社に盡す熱心より、會社將來を考慮し、今にして本社多年の病根を絶たす

ば遂に不治の難症に陥り、反對商に蹂躪せらるべき杞憂衷心より斯くは申出候次第不惡御思召願上候。

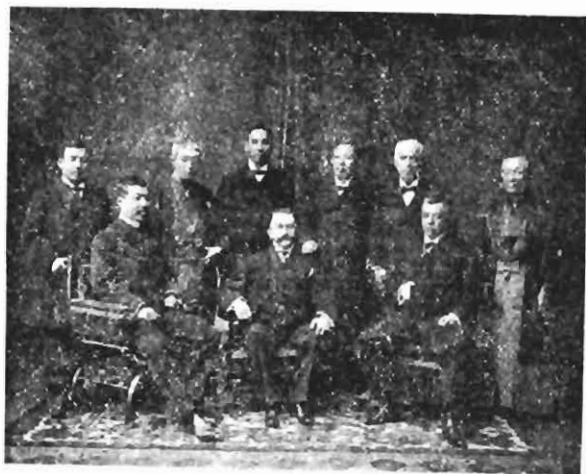
兎に角小生は豫定通り三池丸にて香港迄罷出づべく、其節重役より視察中止歸朝の公訓相達し居候得ば唯々奉命可仕乍併漫然社内一部の無根據理由より出でたるを、確められ候節は、小生は豫て御命令通り巡視を遂行歸朝可仕、其邊不惡御含願度候』（明治三十五年三月十四日附）

何ぞ其意見の堂々たるや、何ぞ其會社を思ふ至情の熱烈なるや、理路井然四邊を壓するの慨あるを見た社長始め重役連は君の熱情に感激する外はなかつた、元々君の長江視察を差止めたのは別に大した理由あるではなく、單に一日も早く歸朝せしめて事務を執らせんこの意味に外ならなかつたのであるから、君の意見は尤もなりまして再び反對訓令を出さなかつた、そこで君は豫定の如く悠々長江視察を敢行し、五月初旬涼しい顔をして大阪に歸つて來たのであつた。

之れこそ我社の將來に於ける支那發展に並に君の一生涯切つても切れぬ對支那諸經營の楔機が、正さに此時に胚胎したのであつた。

第二年度の作戰計畫

君は三十五年五月歸途支那長江筋の視察を終へて、印度より歸任するや、當時打合の爲め歸朝中の山田米國出張員と、次期の作戰計畫につき熟議する處あつた。印度に於ては今村新出張員と、親しく孟買に於て、同じく新



(明治三十三年)

向つて前列左より

中田市太郎氏 ヤマハ氏 尾治衛門氏

後列左より 喜多藏氏

三目方七勢氏 五人目岡徳太郎氏 六目野田吉兵衛氏

棉期の作戰に對ガダム商會との折衝秘策等につき協議を重ね、萬違算なきを期したが、愈々新棉期の初頭に於て、君は重ねて所懐を兩出張員に陳述し、以て所期の好成績を收めん事を熱望したのであつた。

『新棉季に入るに當り前季諸成績を概説し、聊か參考に資せん。』

近時我邦紡績業は、製産過多輸出少額等の事實より、糸價は製産原價だにも及ばず、本年下半季見込實に暗澹、頗る戒心を要し、爲めに昨今斯業者間に印度棉運賃割戻金を、輸出獎勵金に充當せん計畫を以て、臨時總會を催すに立至りたり、左りながら各自事情を異にせる諸會社行動常に一致を缺き、從來種々の救済策も皆實行の運に至らず、今回提案果して總會の通過を見るや否疑はしく、又假令多數決を以て決行するとしても、其永續如何は蓋し難問にして、兎に角多數の小會社所々に散在する以上は到底性質に於て最良なる問題も實行は無覺束、結局は優勝劣敗を見て差支無かるべ

し、而して多年打續きたる斯業不振は、遂に小會社若くば第二流以下の諸工場の存立を許さず、近頃合併又は買収の着々實行されつゝある事實を見て、尙今後此形勢は續々相示し、近き將來に於て關西諸紡績の三、四大會社の下に纏めらるゝも計り難し、斯る合同の成立したる曉こそ、紡績業者は爲さん欲する處に従ひ、ドシ、改良又は販路擴張するを得るなるべく、其時に當つて我邦紡績の基礎樹立すべし云ふも過當ならざるべし、此合同合併の我社將來に取り如何なる影響を與ふるや否やについては先便詳説せる處の如し、(編者曰ふ武藤山治氏は明治三十四年の募紡績大合同論を著して紡績業者に警告したり)我邦紡績業の現況如上の有様なれば、各社は競争の結果製糸の改良經費節減原棉仕入の大に注意を要するものたるを覺るゝ共に、各社の棉商に對する態度年々變化を來し、原棉買入の方針は

第一、品質、積出共に確實なる商社に先約を爲し、若し荷着の場合、意に満たざる荷物ある時は遠慮無く苦情を持出す事、

第二、阪神在荷は、各紡績をして大に心丈夫ならしめ、若し約定期品にして荷渡品成績悪しきものは次回約定を全然手控ゆる事、

第三、各紡績會社は著名棉商と特約を爲し、本社對〇〇〇紡の如き約束を、漸次締結の上、注文を發するの傾向ある事、

要は品質を第一に置き、確實なる買約を爲す方針を採り居る一方、棉屋に取りては、

毎年同業者激増の結果、各社許す限りの勉強を以て得意先に接し、或は代金支拂期日を延ばし、或は相場其他狀況を日々詳報するゝ共に、可及的歡心を買ふに汲々とし、特に〇〇〇會社の如きは苦情裁定を迅速にし、微細の本國市場變動さへ通知を爲し、一般得意先に、同社が一定の手數料を以て商賣せるを標榜して無事受渡を了したる荷物に對し數月以後孟買又は米國にて幾何の値引を賣人より收受せし故返却する等の通知を發し、眞實各社に對し正確なるを覺らしむる等

而して紡績會社側にては、近來本國諸報告を重視し、數年研究の結果、大に外國事情並に品位鑑定に意を注ぎ其買口又は苦情の持込鹽梅等實に驚くべき進化を示せり、

粗惡品又は積遅れ其他の苦情裁定に對しては、同業者に於て孟紐兩取引所に連絡を通じ、其判定を請ふを得るゝ同時に、對事者双方意向にて、第三者を裁定人とし、其結着を速にする等數年前の如き胡魔化主義(?)を以て彼等を遇する事能はず將來本社が採るべき唯一の主義は、

1、誠實誠意の取引を爲し、得意先に接し、約定荷物は品位積出共に契約の主旨に背かざる様、又苦情の場合迅速相當の要求を入るゝ事、

2、本社及本國との通信を敏活にし、同時に積出地取引先及本社とは恰も異體同心營業の必須にして、假初にも其間に懸引を行ふ如き遣方には、遂に反對商の爲め切り入れ、遂には時勢遅れを悔ゆるに立至るべし、

近頃〇〇一派の紡績増加、夫れが爲め得意先を蠶食せらるゝの傾きあるは事實なるも、本社にて前陳二項さへ、首尾克く貫徹せしめなば、強ひて〇〇にて恐るゝに足らず、〇〇〇〇其他の大阪諸紡績會社且つは尾勢地方紡績等大に賣進むを得べき餘地充分にして其本社利益の源泉共謂ふ可きは

是等取引先をして、満足せしむべき品物を賣渡し、専心夫等諸會社との連絡を保全するにあるべきも、其果して目的を達するや否やは二君出張員が取引先との關係を密にするに同時に、品位積出等督勵聊か本社が外國取引先に對し、毫も懸念を要せざる丈は、出張義務として常に注意を要すべきものにして若し本社にして是等に十分信頼するを得ざる取引振なれば、自然得意先に對し、腰弱く漸次商賣衰退の基となるべきは今更謂ふを俟たざる也。

然り、本社將來の地位は有望、而して勢力範圍亦〇〇〇〇に譲らず、通信の敏活は優に取引高を増すを得べき見込十分、随つて利益を擧ぐる蓋し難事に非るも、若し

品質先方の意に満たざるか、積出約定に違ひたる時の値引等現出せば、折角本社が豫想せし純益も夢想に終り、一分の手数料は、散々得意先の叱責を受けたる上、豫想利益數倍の損失に終る事往々にて、是等亦出張員諸君の、絶間なき注意を要するもの也。

本社三十五年上半期成績を摘録すれば大略左の如し

印度當期輸入總數 四三、九四〇依此純益三七、八六七圓

米	國	棉	同	角	一七、四〇〇依
				丸	六、八〇〇依
			同		四一、三九五圓

にして印度棉の割合利益多きは、船積、品質共に順序能く相運び、爲めに例年の如き値引を支出せざりし爲め、米棉の利益の大部は手持棉暴騰の結果を知るべし、元來米棉相場の變動甚敷、而して船積不整の爲め危険多きも、一方に利益の幅廣きを意味するも、印度棉に至りては然らず、年と共に激増する同業者の競争は益利潤を

低下し、其反比例に苦情の機會多く、餘程の注意警戒を爲さざれば、印度棉取引の困難なるは特に孟買出張員に警告する處也、

終りに臨み、出張員諸氏の最も注意を要すべきは餘の儀に非らずして、本社取引先間の意志疎通を圖り、一方にては常に積極主義を採り、成るべく商賣を促す方針にて、一時の通電本社回答なきより、早く取引困難を推斷し、跡電信を差控ふる如き事無き様、換言すれば種々の本國事情に着目、落ち無く夫等を本社に通ずるに同



明治三十五年 (當六十二歲)

時に、取引の機會を造出するの心掛け必須なるを御承知願度、左れば本社にて何處迄も同業者と競争、二君の敏腕と相俟つて、次季も目出度打過ごされ候事かご推察、此處に一書拜呈致置候』(明治三五年九月五日附)

君の對次季作戰準備は、斯の如く用意周到に整へられたのであつた、即ち君は誠實——敏活——正確——熱心協力——積極各主義を眞向に振翳さして驀地に敵陣に打込んだのであつた、何んぞ其武者振りの雄々しさよ、君の部下統率其宜しきを得て、三十五年下半年期決算は、純益金八萬二千餘圓を公表し得たのであつた。

印度綿の惡評と必死の挽回策

前記の様に米印棉夫々出張員を督勵した甲斐もなく、印度棉丈は相變らずの不評判に、君も少なからず失望したのであつた。印棉のソール、エジエントたるガダム商會との取引は、既に十年の長きに及び、相當苦き經驗を踏んで來て居るに不拘、今猶品質の苦情續出に手を焼くようでは、隱忍に隱忍を重ねて來た辛抱強い君も到底堪へ切れるものでない、殊に君は印度棉のイロハから習ひ覺へた關係にありながら、其印度棉の取引が巧く行かぬとあつては、自己の面目丸潰れで、惹いて會社に對し、社會に對し、全く相濟まぬ譯けである、責任感の強い君は、いたく之を遺憾とした。夫れで君は、孟買出張員に對して、手厳しく其邊の消息を洩らすと同時に、次季即ち三十六年度こそは如何にもして名譽恢復の手段を講ぜずば、身も立たなければ、會社も立たず君は最後の覺悟を決めた。即ち君はガダム商會に對する永年の情誼を重んじ、今年彼等を鞭撻して其最善を盡さしめ、

其結果如何を見て縁を切るか切らぬかの斷案を下さんものと、君は詳細の事情を述べて彼等の反省を促すと同時に、孟買出張員へも必死の協力によつて名譽挽回の學に出でん事を熱望したのであつた。

當時君が出張員に對し、申送つた書面の一節には

『來季取引はガダム及我社の信用を回復せざる可らざる最も大切の時期に際會す、極言すれば十年來の兩者關係の永續又は分離を決定すべき試金石也、就ては別紙の通り來季孟買棉取扱方針につき詳細指示申上候間、何卒本社意志の存在する處を玩味し、一日も早くガダムと交渉を遂げ、十分先方の諒解を御求め被下度、萬一方の頑迷尙本社要求を容るゝ能はざる如くんば、乍遺憾我社は得意先の厚情に對し且つは社業將來に取り到底ガダムと從來如き相互ソール、エジエント方法にて取引繼續不可能なる事情、十分先方に納得出來候様御説明相願度候、要するに來季は、君と僕とが共々一死を賭して迄是迄の失敗を取返さねばならぬ、僕は心中多大の決心をするに同時に君にも之れを要求する。第一我等の此決心、第二ガダムの頑迷打破の二事纏らねば、孟買棉取引も亦々失敗を繰返すの外ある間敷か、

我社が是迄ガダムの遺方に如何に隱忍したかは御承知の通りに候、十年來の情誼を重んずればこそ、今度云ふ今度も、誠意を盡して彼等の反省を求めて居る譯けで、我社が此處迄勤めれば我社としては十分義務を盡し居る事と確信致候、此好意が尙以て先方に分らぬようなら、最早本社の自衛上、他に取引先を撰定するか、支店を開設するか二途に出づる外無之候、僕は其節は直様再渡、死すまで會社の爲めに今日迄受けた汚名を雪

がん覺悟に有之候」(明治三十六年八月卅一日附)

君が孟買棉取引改善に對する意氣の何ぞ夫れ悲愴なるや、君は生命を賭して名譽恢復を圖らざれば、男の一分が相立たず、堅き決心を示して出張員を鼓舞激勵する處、正さに討死覺悟の勇將武者振ひを彷彿せしむるものがあるではないか。

實に君は右の如き對印度策を決定したのであつたが、果してガダムが我切實なる希望に副ふ改善の實を擧げ得るや否や、君は人知れず心の底で危んだのであつた、それで當時君は米國出張員山田氏に宛て、

「來季孟買棉取引の結果、孟買支店の開設を急にする様相成可申やも知れず、而して其場合は勢ひ小生一時又々出馬候様に相成候ごも被相考候、孟買に不限、清國にも小生出稼の場合、本社にて小生に代り執務する人は誠に貴兄を措いて他人に無之」云々(明治三十六年十月一日附)

次季印度棉の成績又も不良の場合を豫想して、君自身渡印を覺悟し、夫れに必要な下準備を講じたのであつた。

時日は過ぎた、案じた明治三十六年の新棉季取引は、幸に相互緊張注意の結果大體に於て、從來の如き大失態を繰返へすに至らなかつたが、さりて十分名譽恢復までの程度の成績でもなかつた、要するに多少の向上は認め得たので、對ガダム問題も幾分緩和され、兎も角當分現狀を繼續する事になつたが、沈思熟考の末明治三十八年度よりは新に瑞商ヴォルカート商會ごも取引開始を斷行し、ガダムご相並んで引合を爲すごに改め、之れが

爲め印棉取引上に新味を加へ、漸次我社の信用を回復するに至つたのであつた。

支那への進出

君は平素考へた、日本綿花會社は、棉を賣る許りが能ではない、棉を買ふて之を糸に紡ぐ紡績會社から、其糸を買ふて外國に輸出の役目に當るごは、所謂持ちつ持たれつ、双方の義理合であらねばならぬ、斯くしてこそ兩者間を密接に結合して、圓滿有利の取引を爲し得る所以であるご、夫れで綿糸の對支輸出の開始は一日も猶豫ならずご考へたのであるが、尙も新事業を創めるに當つては充分其調査を密にし、輕舉事を誤る如き事なきを期する君の性分ごして、君は明治三十六年五月二日再び上海漢口兩市場の視察にご向つたのであつた、慎重に調査觀察の結果は愈々素志斷行の必要を認めたので、君は六月十日歸阪するや直ちに重役會に諮りて上海支店急設の議を異議無く可決せしめたのであつた。

而して君は席暖まる暇もなく、同月二十七日志方取締役ご共に、開店準備ご披露を兼ねて、三たび上海に向つたのであつた。

斯くて懸案の上海支店開設は七月末に實現したのであつた、是れこそ君が對支經濟發展の第一歩であつたのだ。當初支店長の任に就いた小笠原氏が、能く君の意向を受けて大いに活動したご、偶々對清爲替暴落に遭遇し、綿糸の輸輸出頗る好都合に傾いた事が、意外の仕合せごなつて、支店創設後僅々一ヶ月を出でざるに其綿糸取引高

壹萬貳千俵の多きに達した程の好成績を示したのであつた、開業後一、二年間は經費損は免れぬと覺悟して、かゝつたものが、少額ながら初年より利益を計上するこゝが出来たので、豫て消極派の老幹部連も君の鮮かな手腕に敬服沈黙せざるを得なかつたのは君の痛快に感じた處であつた。

君は進んで上海支店の一事業として、明治三十八年六月綿綿工場華昇花廠を買収經營せしめ、又支那人と合資にて九千錘の九成紡績の建設經營に當らしむる外、莫大小、蝙蝠傘、賣藥等の雜貨委託販賣機關として小賣店を開設せしめ、棉花の産地買付けに従事せしむる等着々として發展の途を講じたのであつた。

尙又支那開港場にして、綿業に密接の關係を有する諸港に、支店、代理店、取引先等の設備と連絡を整へる必要を感じ、漸進的積極方針を以て、此前途有望なる老大國の要所に、商業網を張らんことを庶幾したのであつた。

支配人に昇任

君が明治三十四年正月上席係長に拔擢せられて以來二ヶ年半、其間君は日夜想ひを練つて、會社内部の整理より營業の進展につき、諸般の施設に當り、着々其効を奏したのであつた。年若き君は斯くて重役の信用を博した、君が上海支店の開設を終り明治三十六年七月上海より歸阪するや、重役會は君の功蹟を認めて支配人に登庸を決議した、滿二十六歳の支配人は當時の珍であり、麒麟兒として斯界を聳目せしめたのも無理は無い。

取扱商品及事業の擴張

君の當初より抱いた對清經營策は商工併進主義であつた。而して我社をして關西一流の大貿易會社に仕上げたい理想であつた。夫れで創立當時定款に定めた營業の目的を變更するの必要に迫られ、其結果として明治三十七年一月十六日の總會に於て

- 一、棉花綿糸其他物品の間屋に關する商行爲
- 二、棉花、綿糸其他物品の販賣に關する商行爲
- 三、操綿に關する商行爲
- 四、保險、運送其他商行爲の代理行爲

會社の目的を以上の如く擴張することに定款の變更を決議せしめたのであつた。

斯くして取扱商品及事業は俄に擴大せられ

- 上海支店、棉花、糸、布、の外、綿線工場、紡績工場の經營、莫大小、蝙蝠傘、燐寸、賣藥、肥料等の取扱
- 漢口支店、棉花糸布の外、豆粕工場、棉實粕工場、棉花鐵卷工場の施設、肥料、食料油、木蠟、茶種、燐寸等の取扱、船舶のチャーター等、保險會社代理店引受、

等の如く漸次各種類に及び業務益々好轉を見るに至つた。

日露戦争と君の所観

明治三十六年日露關係緊張を告げた。時の小村外相は機密嚴守主義を固持したので、益々四千五百万同胞を迷はしむるものがあつた。併し今度云ふ今度は、日本帝國の威信上、如何にしても一撃膺懲を敢行せずば相成らずに敦圉く強硬論者が、次第に擡頭して來たのであつた。

此年の暮には米棉は大不作で、ミッド四十三圓に吹上げ、綿糸も石藏三品買占で十二月限百二十八圓テフ空前の珍値を顯はすなご、一般不景氣に似ぬ活況振りを見せたが今や外交暗愴として手を翻せば雨となり、手を蔽へば雲となるが如き危険極まる場面を眺めつゝ、此大相場に際會した君の心中頗る動く處のものがあつた、併し君は明治三十七年正月勿々一年の計を考へた、日露關係が益々切迫したことは既に御用船の借上四十隻以上に達し諸般の戰鬪準備が窺かに進められつゝあるに徴して之を推知するを得べく、今や破裂は單に時期の問題のみ、斯る折柄浮かミ石藏輩の尻馬に乗る如きは大の禁物なるも、さりて日本軍人の威力を信する以上、日本帝國の勝算を思ふの時又濫りに委縮主義に傾く可くもないこの信念の下に、君は慎重事に當つたのであつた。

明治三十七年二月八日日露は愈々火蓋を切つた、而して開戦の結果は日本海軍の大捷報となつて世界を震撼した、日本は狂喜した、民人安堵した、日本は不景氣ながら商賣は出来る、株券市價保合ひは實に感激に堪へない日本の立場であつた。

日本海軍の連勝は、北清以南の制海權を我掌中に收め得た所以であつて、對長江取引は先々平氣に行はれ、日本未曾有の大戦争に直面しつゝ、君は百十圓以上の綿糸に強氣を張り得るの愉快を高唱したのであつた。

君は明治三十七年二月二十七日孟買出張員に對して左の通信を爲して居る。

『日露戦争開端後今日迄我帝國海軍の勇壯能く東洋に於ける制海權を掌中に握りたる如きは、實に天晴れの手際にて、國民をして鼓舞せしめ、一般商況をして恰も平常同様に爲すこゝを得せしめたるなご、偏へに御稜威と軍人の忠誠の致す處と誠に感激の外無之候』

株券は勿論綿業界其他は、今日迄の戦勝により毫も傷けられず否×××××神武以來の大戦争なるに不拘、内地不景氣なる爲め需要少なきにも不拘、能く取引所にて20s百十五圓内外の高値を維持せるが如く、實に我等の豫想以上にて、海戦捷報以來上海商賣は平常の如く取引出來居り候、

紡績業者の内原棉仕入潤澤の會社は、殆ど平常同様操業罷在候、乍併是等は誠に少數にて全國會社を通算せば夜業休止、休日増加等にて製産額を平時より減少せる事、小生の見込にては必らず三月中に四割方に相上り可申こ被存候、此生産減退及本國棉花高値なごは現在糸價即原棉に比し割安なる糸價の今後騰貴を示すこゝを得る餘地あるを意味する也而して戦争は結局日本の勝利に終始するは必定と信する結果、自然的に今日戦事なるにも不拘、糸價の前途に對して、強氣を保持するの外無之、隨つて我國紡績の近かき將來に對し、餘り悲觀的の推測を爲すこゝに、蓋し誤れり云ふの外なかるべし、

紡績業の前途如前述暗鬱たるものに非ざる也、乍併原棉常に糸價より割高なれば其操業たるや蓋し困難なるものにて、糸價の前途假令強氣説當れりとするも、平常の如く全運轉は覺束なしを見るこそ至當に存候
紡績業者の操業短縮は原棉使用高の減退を意味す、左りながら御承知の如く孟買より日本行今日迄の輸入高實に少數なれば、假令紡績にて製産額減退するにせよ、今日迄の約定高且つ阪神在荷にて、總體に觀察を下せば、四月中旬迄の使用綿を支ゆる能はざるべし、さればにや近頃現物も相當値段にて賣行申候、昨日日本社賣値ヒンゴリー三十一圓五十錢、ベンゴール二十八圓二十五錢の如き最近孟買來電にては餘程値段も双方接近せる様子に有之、爲替にして都合さへ付かば、三月は可也の商賣出來可申かき存居候」云々
日本としては古今未曾有の大戦争裡に、悠悠商策を練り得る餘裕を持つ事は皇威に我勇敢無双の日本海軍の賜も、滿腔の感激を捧げた前文を読み、當時日本全國に湧き返へる萬歳の歡聲を追想して感慨無量の外はない。

米棉定期の苦き體驗と自制

明治三十五年度より三十六年度に掛けて、紐育米棉定期市場に大立者が顯はれた。ダニエル、ジェー、サリー云ふのであつたが、彼れは明治三十五年度に於て、大いに儲けた勢に乗じ、翌年度亦定期市場に活躍したのであつた、明治三十六年九月一日十二仙四分三の相場は、彼れの賣叩きによつて、十月六日には九仙半迄叩き込まれた、處が爾來漸騰の足取りに變じ十二月七日には十二仙半、十二月末には十四仙、翌年一月廿五日には十五仙四

分一、二月一日には十七仙四分一、殆ど底値の倍額に暴騰したので、突込賣りを續けた彼れも、到頭兎を脱いで、三月十八日破産の運命に陥つた、君は支配人就任後間もなく、此波瀾重疊の間に身を投じたのであつた、腕を振ふは正に此時に許り、君は餘りに高走つた投機相場を眺め、早晚一に反動あるものと睨んで、中途賣建てを斷行したのであつた、處が意外にも調子外れの十七仙以上に持ち上げたので、之れに辟易した君は、此際の深入りは禁物と諦らめ、遂に煎れ退きの止むなきに至り、可也の痛手を蒙つたのであつたが、流石は敏捷聰明な君だけあつて、夙に米綿定期建玉の倍數を孟買サツタ市場に買繋いで置いたのであつた、米棉高に連れて奔騰した印

度棉の利益は大したもので、歸する處米棉定期の損失を償つて餘りあらしめたのであつた。當時米棉定期の一方のみを眺めた人達は、日本綿花の大損失と許り、一時噂を立てたのであつたが、寧ろ知らん印度棉に於て之れを相殺して尙餘裕綽々たるものあらんとは、而かも上海支店の開設により數萬の豫期せざる利益を收受し得たので、明治三十七年上半年も純益十餘萬圓を計上し得るの成績を挙げ得たのであつた、當時君は米國出張員に、こう云ふてやつて居る、

『米棉定期一時の蹉跌に氣を取違へなき様に祈入候、商賣否我社の今日の舞臺は、餘程前年とは相違致居り、世帯も大きく〇萬圓内外は、ド、チ、ラになつても、聊か心配に不及、而して本年上半期は僅かに三ヶ月を過せしのみ、後三ヶ月は實に近來に無き變動（棉花、綿糸共）有之候見込、細工は流々仕上げを御覽遊ばせ、小生は今日迄の電送金唯紐育に一時預けし致す位に考居候、

米棉賣繋ぎと同時に、小生は安全策として、孟買を倍數丈け買取置候、是等近頃續々入荷七、八圓切りは利益有之、當業者間には我社の大利益を賞讃せらるゝ心中丈けが少々苦敷存候阿々」

君は慥かに米棉定期市場に苦き経験を嘗めたこと丈けは間違ひないのだが、例の敗けず魂は容易に屈する風なく追證の電送金は一時預けの心持だミ嘯くあたり、君の豪膽不敵なる其性格振りを明かに示して居るではないか。而して君は米國出張員に左の通り申送つて居る。

『米棉取引は年々困難也、乍併其間益々趣味を加へ來り候様に存候』(明治三十七年二月八日附)

『何れの國を問はず、相場の変動原因は等しく、又取引所の手合振りは多少異同あるも、夫れに依つて生ずる利害及懸引法は凡て相同じ、本年我社定期失敗は一見馬鹿臭さき様なるも買占テフ、害虫の顯はれたることなれ敢て落膽するを要せず、何卒次期新棉取引に乍此上注意早晚復舊の期可有之ミ存候、

定期を利用するは時々必要に可有之乍併本社本業は米國より棉花を輸入するにあり、左れば其輸入業に隨伴する保險的の繋賣、又は買戻は不致ては相成不申、否此利用方法を、程能く研究不致ては、反對商を壓倒拮抗も難致ミは存候得共、定期相場割安又割高なればミて、買賣玉を相建て、其間相場高下甚敷ミて、遂に此種賣買が主格ミ相成候様は御互に制禁可致ミ小生は存居候』(明治三十七年五月十八日附)

君が羨に懲りて鱈を吹くの弊に出でず、失敗は成功の基ミ常に信念して、失策に落膽することなく、其失策の依つて起る原因を究め、之れを後日の鑑ミなして、失敗を再びせず否之れを善用して失敗を取返へすのみか、却

つて利益を擧げんこと、力強き敗けず魂——燃ゆるが如き鬪争心の存在こそ、實に君をして偉大なる成功を齎らさしめたものと思ふ。

尙君は兎角投機好きの相場師のやうに世間から誤解を招き易かつたのであつたが、君は主義ミして決して普通一般の相場師のやうに無暗に相場を張るやうな不謹慎の事をせなんだことは、君の前文を読めば能く夫れが諒解されると思ふのである。

献 身 的 努 力

君の精力絶倫にして、日曜もなければ、祭日もなく、又夜もないこと云ふ働き振りは、夙に發揮され、君が明治三十四年上席係長ミして就任以來、此調子で夜を日に繼いで奮闘したものであつた。

君は明治三十七年五月十八日附で山田米國出張員に左の通り通信して居る、

『漢口支店開設準備の爲め忙敷く、而して同店間に使用の暗語典編纂に小生は朝八時前より夜八、九時迄執務夫れが爲め兎角失禮勝宣敷御推察願度候』

君は是より先、明治三十六年十二月二十六日附で、上海支店長に申送つて居る、

『上海支店が來季採るべき方針の一つは電信料其他經費の輕減につき出来る丈けの注意を拂ふべき事である、電信料は語典の改善によつて大いに輕減し得べきは勿論に候間本社は目下其起稿中、就ては豫て要求致置候貴

店の特に必要とする暗語文句の注文至急御提出相成度候』

即ち知る、君は上海漢口兩店用として適當なる電信暗語典の編纂につき、身躬ら其衝に當り、約半年間朝は早くより夜は遅く迄特に恪勤奮闘に當つたのであつた、當時君は支配人に就任して居つたのであるに不拘、經費節減の必要を痛感の餘り、自ら進んで語典改正の衝に當つたことは、如何に君が新開の支那各店の成績向上を念じしたかを推知し得て、實に其涙ぐましい献身的働き振を嘆賞せずには居れない。

漢口支店の開設と活躍

漢口が上海に亞での重要な地位を占めて居る事を夙に認めた君は、豫て漢口支店開設の時期を狙つて居つた。偶々上海支店開設の翌明治三十七年には、日露の開戦を見たのであつた、日本としては未曾有の大戦争であり先行果して如何に成り行くか、俄かに逆睹し難き状態であつた、此際世人が消極方針に傾いて自重を事とするは、普通の事であつたが、君は早くも戦争の結果を樂觀し、皇軍の大勝利を確信して居つたので、一般氣迷ひの今日こそ、我々は機先を制して大いに活動し、着々優越の地盤を開拓せざる可からずとの見地の下に、重役連を美事説破して、明治三十七年七月廿五日を以て斷然漢口支店の開設に着手し、先づ棉花綿糸の取扱ひを開始したのであつた、時の支店長は當時支那通として令名あつた馬場義興氏であつた。

當時漢口棉花は相當日本に輸出されたが、何分水の含有が甚だしいのが傷であつた、それで之を餘り強くプレスして荷作りするに、含水の爲め纖維を損するので漢口唯一の平和プレス工場——強力のプレス工場での、荷造りは運賃のセーブには結構であるが、品質を損するの點で考へ物であつた、そこで我社は此點に着目して、餘力の強くないプレス工場の建設によつて、漢口棉花取引に一新機軸を出すべく、直ちに棉花の集散地たる漢陽の地を探んで、適當の設備を整へたのであつた。果然我社の漢口棉取引は、他の追隨を許さざる特徴を發揮して長く優越の地歩を占め得るに至つたことは、君の着眼の凡ならざるを示すものゝ一つである。

此外製油、製粕事業の頗る有利なるを認め、明治三十八年六月先づ漢陽に支那式豆粕工場を開設し、亞で漢口居留地内にも第二豆粕工場を建設し、越えて明治四十年三月には漢口居留地に棉實製油工場を建設するなご、君の商工併進主義は着々武漢の地に實施されたのであつた。

日露戦後の好景氣に乗つて施設された是等の事業は、幸に所期の發展を遂げ相當の成績を示し、一時數千噸の巨船を傭入れて我社の荷物を満載し、日本に積送るなご花々しき活動を長江の中樞に試みた我社の旺盛振りには一時斯業者の目を聳たしめたのであつた。

三品受渡品の大量輸出

明治三十六年上海支店の開設後、君は綿糸輸出につき、常に深甚の注意を以て畫策に當つた、就中二十手格落品即ち所謂雜牌二〇物の大量輸出につき、最も興味を以て其引合に勉めたのであつた。

當時屢々試みられたる石蔵、芦田等の策士連の三品買占めの結果として、其受渡品の肩代り若くば委託取扱等は、君の最も得意として秘密裡に商策を練つたものであつた、君は

『斯る三品受渡品を一手輸出取扱をなさば、相當利益を擧げ得る以外に、店の「シ、ニ、セ」には好適に有之』

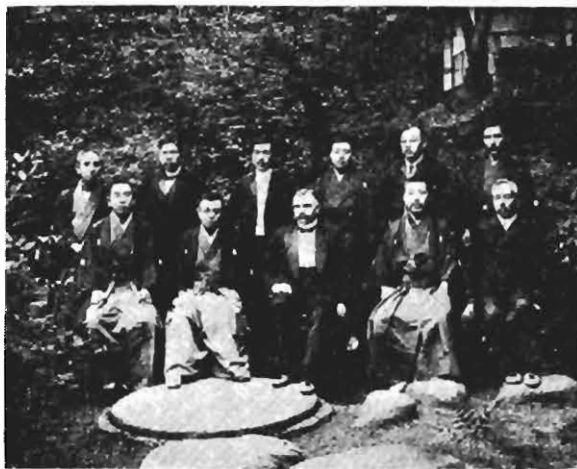
(明治卅七年四月十六日附)

上海支店長宛てに激勵して居るのである。

所謂雜牌二十手なるものは、其品質の上より、日本の織屋には殆ど不向きで、唯三品受渡用に供せらるゝ特種のものであつたので、此種のものが日本市場に停滯することは、所謂投機者流の逆用となり紡績業者としては、甚だ好ましくぬ事なので、雜牌物の支那輸出は紡績業者の福音であつたのだ。君は此點をも能く諒解して居つたので、雜牌物に力を入れることは、紡績業者を喜ばせる所以であつて、惹いて日本綿花の信用を増進する結果となるので、一層注意を拂つて之れが取扱ひを奨励したのであつた、果然雜牌二十手の輸出に於ては、當時より嶄然群を抜き日本綿花の努力は能く紡績業者に認められ、綿花の取引も好影響を受けたのであつた。

夙に出商業の必要に着目す

日本は東洋の一小海國である、原料の資源が豊かでない、製品の消費量も多いことは云へない、之を世界全局の上より見れば結局大した量とは云へないのだ、夫れで日本本位に貿易をやるだけでは、到底大きな仕事が出来る筈



(明治三十一年八月時代)

つ前中今馬 列市村興 左市九郎 右市九郎 尾後喜 右治多 衛左藏 門左藏 氏志一 氏人一

はない、苟くも貿易業者として立つからには、須らく世界を股にかけて縦横無盡に濶歩するの概がなくてはならぬ、彼の英國が日本と同じく一小海國でありながら、一大貿易國として世界に其覇を稱ふるに至つたことも、主として此出商業を重視した御蔭に外ならないのだ。我々は是非共此出商業に大いに力を注いで、外國相互間の貿易仲介をも敢てし、以て大日本帝國の將來の發展を企圖せねばならぬ、君が早くも明治三十六、七年の頃此理想の下に畫策を怠らなかつたこと云ふ事は、實に君の炯眼炬の如きものがあるではないか。

即ち君は明治三十六年に於て漢口棉花を英國ガダム商會の手を通じて、英國市場に紹介せんことを試みたのであつた。續いて印度棉花の支那輸出、印度綿糸の支那輸出、印度棉の歐洲輸出、米棉の歐洲輸出、米國棉の支那輸出、米國棉の印度輸出、亞弗利加棉の印度輸出、支那綿糸の南洋、印度輸出、印度ジュートの米國及支那輸出、蘭貢米の歐洲、南洋及支那輸出、支那桐油の米國輸出等、後年夫々其取引を實施して君の理想の

實現に努めた。

而して歐洲には特に、中間貿易助長の主旨を以て獨逸ブレメン市に「メンカ・ゲゼルシャフト」の一別働會社を組織したのみならず、「リバプール」、「ロンドン」、「ハーブル」、「ロツターダム」、「ハンブルグ」、「ミラン」等には其目的遂行機關として、必要に應じ社員を特派し又常置出張員を置いたのであつた、其外必要の場所には夫々代理店を設けて廣く商業網を世界の要所に張つた、従つて我社の出商業による取扱額は無慮數千萬圓の多きを算するに至つた。

出商業は他に幾多の商社も之を營むもの漸次多きを加へ來り、日本の貿易史上に逸す可からざる重要なものたるに至つた事は國家の爲め大いに慶賀すべき一事である、現に昭和二年の調査によれば、當年日本の貿易總額約四十億圓の内、所謂出商業によつて、外國相互間の仲介によつて得たるもの實に六億圓の多きを占むるに云ふのであるから、中々大したものではないか。

内部の結束と部下養成

君は支配人に就任以來、益々自己の責任の重且つ大なるを自覺するに同時に、日本棉花の地位を向上發展せしめんが爲めには、さうしても僚友の協調援助に俟つ必要なる事、並に各戰鬪の第一線に立つ有爲の部下養成の均しく緊要なる事を痛感した君は、勉めて僚友間に意志の疎通を期し、相倚り相扶けん事を冀つたのであつた、

此意味に於て君は最も信頼する長友山田米國出張員に對し

『日本棉花もドウヤ、物になり相に相成候、此間に處する途は、日本棉花を近かき將來に於て、關西に雄視すべき一大貿易會社とし、田中社長の名聲を揚げ得るやうに爲さんには、謂はずして貴兄、○○○君及小生等の義務たるべく、夫迄には事情不疎通の爲め或は由なき故障の爲め、怒つたり、笑つたり、種々様々の事も可有之候得共、其處は御互に短氣を出さず、唯々會社發展に熱心の餘りの行き掛りと思ひ直し、各自分擔せる仕事に精勵候事に致度』（明治三十六年十月一日附）

と述べて社内結束の必要を力説して居る。

而して一方新進有爲の、専門學校卒業生を詮衡して、明治三十七年以來、四、五年に亘りて若干名を採用し、其養成陶冶に勉むるに同時に、既に相當社會的地位を爲したる二、三の人々をも網羅して、君の理想的發展に資せんを試みたのであつた。

偶々日露戰爭の勝利は、日本實業界の活況を誘ひ、對外發展の趨勢は愈々濃厚になつた、君は此機に乗じ其養成せる適當の部下を清國を始め印度米國等に夫々配置して、益々事業の擴張を圖つたのであつた、

斯くして年一年好成绩を擧げつゝ、明治四十一年に及んだ。

隣邦人との親善に勉む

君は夙に長江沿岸地方の前途益々有望なるに矚目し、上海漢口兩支店の發展に就いては常に注意激勵を怠らなかつた。そして兩支店の地盤を固め當局者の地位を發揚せんが爲めには、單に支店擔當事務に纏礙するのみでは到底其目的を達し難く併せて兩地に於ける一流の支那紳商との間に、勉めて交際を求め親善を圖り、相共に有利なる共同事業の計畫に參し、公私共に出来る丈け親切に熱心を以て種々の便宜を圖るに勉め、徳を以て彼等を招き敬慕せしむるよう常に留意す可く、上海漢口兩支店開設後機會ある毎に強く此點を高調したのであつた。

『近頃〇〇物産〇〇氏の成功を謂ふもの多し、彼れの成功の最近原因は、要するに〇〇一派を範絡〇〇紡績を手中に收めたるに由る、蓋し此策は最も巧妙にして小生の兩三年前より唱道せるもの也、我社も將來の發展上有力なる支那人を巧みに手に入れ候事大いに必要に存候に就ては貴兄も御同意なれば其主義にて〇〇〇〇一派を我社に引附くるか但し又〇〇〇〇一派を結託するか若くば他に良商社を撰定するかに御注目相願度、切に希望仕候

適當の事業に對し我社投資は不及ながら小生相勉め可申、場合によりては資本金の増資も相叶ひ可申候』

(大阪、明治三十八年十一月八日附)

上海の幹部宛に右の所信を述べて居る。

君は夙にこんな意見を持つて居たから、君が屢々支那商況視察に出掛けたときも、決して君は通り一遍の視察に満足しなかつた、必らず地方の紳士紳商に出来る丈け廣く接觸して知己を求め、智識を交換することを怠らなかつた。其結果君は支那各地に於て有力なる多數の支那交友を得るに至つた、——政治家もあれば紳商もあり企業家もあれば畫家もある云ふ風で多方面に知人があつた。大正八年ヴェルサイユの講和會議に支那を代表した全權王正廷氏と豫て舊知の間柄であつた君は我國全權と王氏との間を取持つに最も都合であつたので、君は兩國全權間に種々斡旋する處あつた、其結果の如何なりしものなるやは云ふ迄もない、是れ畢竟君が持説として常に隣邦の重なる人との交際を勉めた賜で、之れが世界の晴れの舞臺に大いに役立つ機會を得たのであるから當時君の得意や推して知るしである。

二百萬圓に倍額増資

君が我社の支配人に就任後、日露戰役を経て、本邦事業界は戰勝の好影響を受け、就中紡績業は益々進歩發達を示し原料の消費も大いに増加し、綿糸の生産も續いて激増、自ら我社の取扱數量も亦増加するの大勢にありたる外、君が明治三十九年五月閑散期を利用して上海漢口に出張し、具さに商工業の實狀を視察したる結果、更に大いに長江方面に力を注ぐの餘地綽々たるに着眼し、上海漢口兩支店の施設と運用をして一層完備せしめん事を欲したるに加へて、從來印度取引に對して採り來つた外人エージェント取引主義にては、最早得意先の希望を満足

せしむるに足らず、是非明治四十年を以て孟買に支店開設を斷行せざるべからざるの氣運を看破せし等の事情を綜合して此際資本金の充實を是非共必要と認められた。君は支那より歸來重役會に諮りて其賛成を得、明治三十九年七月二十日第二十七期總會に資本金百萬圓を倍額二百萬圓(四萬株)に増資の案を附議、異議なく之が可決を見たのであつたが、當時株主に示された増資理由は左の如きものであつた。

『近年棉花綿糸本社取扱高増加の爲め一層資金を要するのみならず、當會社が清國に於ける諸般の設備も亦今後擴張の必要あり、是等に伴ふ資金を支辨せんが爲め本案を提出したり、』
 云ふのであつて、君の積極政策が漸次具體化し、ある事を物語つて居る。

孟買支店の開設

豫て我社の懸案であつた孟買棉買付直營は愈々明治四十年度より實施することに、明治四十年一月廿一日の重役會で決議したのであつた。而して之れが主任としては、數年間米國に出張して米棉取引に貢献少なからざりし山田穆氏を任命した。氏は同年三月任に赴き出張所の創設に當つたのであつた。越へて七月二十日の總會に於て孟買支店開設を決議したので氏は初代支店長として大いに盡力した。

先づ明治二十六年以來久しくソールエジエントとして取引を續けて來たガダム商會の特約を斷り、内地の綿産地に出張員を出して買付けに従事せしめ、一方コラバの土人棉花取引所の會員となりて、現物先物何れも自由

に直接買付けに着手したのであつたが、聰明なる山田支店長の拮据經營の功空しからず、業蹟月に揚がり年に伸びて我社が永年印度棉取引に對して嘗め來つた苦痛を漸次解消したのみか、兩三年後には豁然同業者間に其頭角を顯はす程の威力を發揚するに至つたので、久しく之れが改善に頭を悩ました君も、始めてホット、快心の微笑を洩らすを禁じ得なかつた。爾來印度棉取引額は長足の進歩を以て有利に行はれ、我社の重要な金庫として重きを爲すに至つた。

外商横暴の打破と積荷保護

明治三十八年阪神地方に稀有の霖雨が降つた、偶々棉花殊に米棉の見越輸入の多かつた時期に遭遇したので神戸埠頭の混亂は名狀すべからざる有様であつた、倉庫の収容力が不充分なので残された棉花や雜貨類は埠頭に山をなして雨に曝らされたのであつた、腐敗損害の夥しきに上つたことは當然である。

此惨めな苦い體驗に惱まされた荷主側がぢつとして居る筈がない、大なる被害者として我社の當局たる君は奮然立つたのである、君は棉花に關する限り其損害の因つて來る根本的原因——缺陷が何處にあるかにつき早速調査考究を爲したのであつた、其結果として米棉積取の任に當つてゐた外國汽船會社の横暴を不親切振りを發見したのであつた、外國汽船は其積載の米棉が神戸に入着するや密接の關係を有する外人ステヴェディアに其陸揚取扱一切を委せて陸揚げ後の品傷み、不足等については全然責任を回避して顧みざるのみか、陸揚費用として過大

の諸掛を荷主に要求するなき、言語道斷の横暴振りを發揮して居つたのである、此不合理極まる外國汽船會社の態度に對し君は少なからず憤慨したと同時に、今回の雨濡腐敗損害の賠償につき嚴重なる交渉を開始したのであつたが、狡猾なる彼等は言を左右にして陸揚後の如何なる損害に對しても責任を負ふの義務なきは荷物沖取條件の明かに示す處なりと、木で鼻を括つたような挨拶であつたので、君は憤懣措かず屢々渡り合つたのであつたが一向埒が明かなかつた、そこで君は考へた、今後斯る無理解で横暴な外汽に荷物の陸揚げを委すことは以ての外で將來非常に不安な危険の脅威を感じずにはゐられないから、須らく着荷は荷主側で本船直取りを實行して荷物の安全を諸掛軽減を圖るに若くはなしと云ふのである、茲に於て君は日本棉花同業會の力によつて之を解決するのが最も適當と考へたので、棉花同業者の諒解の下に此方針を以て外國汽船會社に火蓋を切つたのであつた、先づ以て陸揚費半減の交渉を持ち出したところ、果して先方は全然問題にならずと勿ね付けた、そこで然らば止むを得ないから荷主側の團體で自身船側取りをやる事にするから左様御承知ありたいと高飛車に挨拶して夫々準備を整へ決然として實行の氣勢を示したので、始めから馬鹿にして居つた先方も俄に狼狽し出した、之れは仕舞つたに許り遂に先方の軟化となり従前の半額にて當分取扱はせる事に一先づ落着を見たのであつたが、此交渉の指導に當つたのは主として君であつたのである。

尙續いて陸上倉庫設備充足の必要につき、君は屢々同業者と協議を重ね此際是非共此目的の達成に向つて邁進することに決し、其結果として日本棉花同業會は其總會の決議により明治三十八年十二月を以て棉花の陸揚、

出、記號及員數の仕別及び陸上に於ける一切の荷役並に其保管事務一切を擧げて専ら之を東京倉庫會社に委ねべく、次の條件を基礎として契約を締結したのであつた。

一、日本棉花同業會々員が神戸に輸入する棉花は凡て之を兵庫新川に於ける東京倉庫株式會社構内に陸揚し、其荷捌の取扱方を東京倉庫會社に依托する事、但し印度棉花に限り之を他所に陸揚する事を得

一、東京倉庫は兵庫新川以西沿岸の地に於て面積凡そ五千坪の地域内に建坪三千坪以上の上屋又は倉庫を新設し且つ貨物の陸揚荷捌に關する相當機關を設備し専ら日本棉花同業會々員の輸入する棉花を收容する事、

一、貨物の輻輳に因り前條の地域が狹隘を告ぐる場合は東京倉庫は成るべく近傍の空地を利用して其收容に力

むべき事

一、東京倉庫は明治三十九年五月末日迄に所定建物の内凡そ二千坪を竣成し其餘の建物及諸機關は同年十二月末日迄に完成すべき事、

之れに依つて東京倉庫は着々所定の倉庫の建設及び附屬諸機關の完成に當つたので、明治三十九年以後に於ては棉花の陸揚收容も順調に進行し、其前年に嘗めた慘禍を繰返さざるに至つた事は、君の建築に其力強き後援が大に與かつて力ありしを信じて疑はざる次第である。

大阪築港利用の先鞭

大阪の築港は時の府知事西村捨三氏の立案によつて明治三十年十月起工、千數百萬圓の巨資を注入したもので偶々日露戦役に際し軍需品の發送上大に利用されたのであつたが肝心の海外貿易に對しては其陸上設備並に海陸聯絡設備等不完全の爲め明治三十八年頃迄は殆ど利用の時期に達して居らなかつた。

然るに明治三十八年神戸港に於ける驚くべき滞貨と其雨曝らしによる莫大な損害を蒙つた荷主就中棉花業者は之が善後策として神戸港に於ける陸上設備の改善充足につき前記の如く東京倉庫會社と契約を締結したのであつたが、更らに一步を進めて考へた事は由來神戸港に陸揚げする棉花の内其大部分は更らに船を以て大阪に轉送せられて大阪方面に於ける紡績會社の消費に充當せらるゝ關係にあるのであるから、大阪方面行きの棉花は之を神戸に陸揚げせず、本船にて直ちに之を大阪港に輸送陸揚げする事に依つて一は神戸港に於ける荷物のコンジエーションを避け一は諸掛を節減するを得ば一舉兩得の方法であらうと、そこで君は大阪築港利用の案を立て、之を同業者（内外棉、三井物産大阪支店）は勿論紡績業者（大阪紡、大阪合同紡、攝津紡、福島紡、西成紡）に諮つたところが、何れも君の立案に大賛成であつたので、爰に大阪築港利用會なる共同組合の一團體を組織することに成つたのが、明治三十九年の始め頃であつた。而して故谷口房藏氏と君の二人が其常任幹事として、故山邊丈夫氏が其總代として種々斡旋したのであつた。

大阪築港の陸上設備は不完全ではあるが徒らに其完備を待つべきではない、不完全ながらも早く利用の途を開く事が先決問題である云ふ事になつて、同年四月より印度棉の大阪港直輸入を實施することになつた、斯くて其第一船として四月十一日大阪港に入港したのが、印度棉花三千五百俵（内日本綿花の分一千九百俵）を搭載した英船ネザートン號であつた、之れこそ大阪築港利用の阪孟間航路の初航船である云ふので、大阪築港利用會は之を紀念すべく同船乗組員一同及び朝野の名士數百名を大阪ホテルに招待し、該船の歓迎會を兼ね築港利用祝賀會を開催したのであつた。

本船の荷揚げに就いては大阪倉庫會社責任の下に富島組が築港棧橋備付けの起重機を借入れ利用する事によつて滞りなく完了したのであつた。

亞いで第二船サンドン、ホール號は明治四十年一月印度棉五千二十七俵（内日本綿花二千七百八俵）を搭載大阪港に入港云ふ如く、漸次大阪築港利用の増加を見たのであつた。

其後大阪市當局に於ても櫻島方面に上屋及び倉庫並に棧橋の設備をなし、西成鐵道を櫻島埋立地迄延長、海陸聯絡を圖つたので大阪築港利用の機運益々増進し、神戸港と相俟つて貨物集散の重要港となるに至つた次第である。

對支經營の大方針

明治三十六年上海に明治三十七年漢口に夫々支店を開設以來、君は機を見て更らに北清、南清地方に進出せん

事を狙つて居つた、上海漢口の支店長は北清に對しては急進派であつて、明治三十八、九年頃之れが實行を主張して止まなかつたのであつた、君も勿論其趣旨に對し敢て反對する理由も無かつたのであつたが、君は上海漢口兩支店の基礎確立が先決問題であつて、是れが未だ満足すべき開拓を見ざる時期に於て、北清に支店を開設するは尙早を免れず、須らく先決問題を解決するに勉むるこそ、我社將來の運命を進展せしむる所以なりとの自説を固執して決して輕々に着手しなかつた、君は此主旨を闡明せんが爲め明治四十年四月を以て、左の通り上海、漢口兩支店に當時の大方針を指示したのであつた。

『本社が上海に支店を置いて以來、對清經營の大方針としては、先づ長江一帶に於て、確乎たる基礎を設けたる後、南北清兩方面に於て、更らに設備を施さん考へにて、秩序的擴張主義を採り今日に及びたる也、

擴張は謂ひ易く行ひ難し、否無意味の擴張は難きに非るも、本社株主を満足せしめ得べき有利的擴張は、要するに本社が社會に受くる信用を、擴張に伴ふ資金の充實、必要人士の補充等と相俟ち、並行するに非れば、早晚失敗に終るものを見て過當に非るべし。

今や本社は、上海及漢口兩地に於て、四工場を有し、之れに固定せる資金約三十有五萬圓、外に兩支店に要する各種流動資金を通算せば、常に百二、三十萬圓以上、時として百七、八十萬圓の巨額に上る事あり、而して兩支店附隨社員備員亦多數、夫等を通じて熟考せば本社當局者共に協力戒心するに共に、此際に當り確定不動の大方針を樹て、本社財産の安固、収益の確實を圖るこそ、刻下の最急務たるべき也。

一、一般商取引は凡て確實注文によるべきものに限り投機的若くば思惑賣買は一切爲さざるべき事

一、工業經營亦然り、眞の賃仕事流にて相進むべく、若し收支償はざれば斷然休業の覺悟にて經營すべき事

一、固定資本以外の資金に對して、爲替變動の危懼は必ず避くべき方針を採るべき事

本社意見及方針は以上の如く定められたれば、今後兩支店共必ず右方針の下に進行すべし、或は營業方針餘りに堅く到底漢口等の商習慣と相容れず、自然商賣困難との非難あらんかなれども、不確なる債權を財産と見、若くば普通商道以外の危険を犯してまで商賣せんとする如き本社意志は毛頭無し、否夫れが爲め商賣縮少せば寧ろ本社の本懐とする所也』云々

君の健實なる營業方針は、以上の説示に十分に明白であるが、何分血氣に逸る少壯幹部をして、其誤りながらん事を期する爲めには、屢々彼等に警告注意するの必要を認め、君は機會ある毎に之を繰返へしては、彼等に訓諭怠らなかつたのであつた。

會社狀態と將來の發展方針 (一)

對支經營方針については、前項の如く指示したのであつたが、君は更らに會社各方面の幹部に對し、全局的の方針を説示するの必要を認め、偶々明治四十年下半年期末に於ける我社の現状を基礎とし、之れが説明と共に今後に處すべき方針を詳説するの可なるを思ひ、君は滿腔の所懐を述べて、各主腦の注意を喚起したのであつた。

『我社の現状——即ち財産、取扱業務の範圍、及其勢力に就ては、我社第三十期營業報告書に明示の通り、財産としては資本金二百萬圓此内拂込金百二十五萬圓諸積立金八十萬圓及約三萬圓の繰越金にして、此内約四十四萬圓は地所及建物並什器、工場器械代等の固定資本に屬し、二十一萬圓は有價證券に化し、其他は凡て流通資本也、而して固定資本及有價證券の實價に至つては、現に時價よりも遙に低位に見積りある故、其見積額よりは裕に十萬圓以上の増加を見得べしと存候、

業務としては棉花及肥料雜穀の直輸入並綿糸雜貨の直輸出に加ふるに、上海に於ては、綿繰工場、漢口に於ては棉花プレス工場、豆粕、棉實粕工場を經營し、之れが機關としては、本店の外三支店(上海、漢口、孟買)四出張所(紐育、東京、神戸、鎮江)を設立し、猶業務の發展に伴ひ、今や尙一、二出張所設立の必要を感じつゝある位也、兎に角日本に於ける、棉花直輸入業者として、棉產地諸國に涉りて、相當の設備と連絡を保ち恐らく〇〇〇〇を除きては他に匹敵するものなく、隠然本邦實業界の一勢力を保有するものなりと確信罷在候抑も我社は明治二十五年攝津、平野、尼崎、天滿の四紡績當事者が其所要原料の輸入機關として創立せられたるものにて、總て我社が取扱ひたる業務は、只單に棉花輸入の一たりしも、時勢の進歩は、我社をして遂に綿糸をも取扱はざる可らざる機運に向はしめし事御承知の通りに有之候、爾來業務の發展に伴ひ、上海漢口二支店を設け、神戸、東京、鎮江に出張所を置き、更に時勢の要求に促されて、綿繰工場棉花プレス工場、豆粕、棉實粕工場を建設するに至り、近くは孟買出張所を支店組織に變更するの域に進み申候、如斯數年間に於ける

我社の進歩は隨に秩序的にして、其間「綿花」てふ勢力の扶植、換言せば老舗の資格は、漸次出來上り候得共、其擴張に連れて、自然的に資本金及社員の数は、増加せられたるに共に、一方に於ける經費の膨脹も亦驚くべき額に上り居、差引利益の比例到底往年棉花部一筋の時代に及ばず、重役株主が此點に就ての不満尠なしとせず候、乍併經費の膨脹は、一面業務の進歩を意味するものとすれば、當に喜ぶべき現象と稱し得べく即ち過去數年間に於て、清國に投じたる固定資本は、其經營寧ろ播種の時代に屬し、未だ利益の成果を見るに至らざりに因る事と存候、凡そ何事に不拘、新事業を起して直ちに利益を收むる事は、名聲手腕共に備りたる大人物にして、猶且難事とする處に有之候、況んや我々若輩に於てをや、而かも大なる失敗を招かずして、先々此處迄漕ぎ付け今や漸く收利の時期に達し候事は、拙からざる成果なりと小生は心竊かに喜び居る次第に有之候、

會社狀態と將來の發展方針 (一一)

扱昨今日本に於ける棉花商の狀態たる、同業者間の競争劇甚にして、其結果委託賣買の範圍を脱して、思惑賣買を試みざれば到底業務を經營する事能はず、即ち萬一を僥倖せずんば、口錢を得る事能はざる商内振りと相成申候、由來棉花は天産物なるが故に、年々豊凶は難免、之れに乗じて投機者流の思惑賣買を試むるは蓋し不得處、既に其本末に於て、多少投機的商品の意味を含み居るも、其相場の變動餘りに甚しき爲め、其一進一退極めて嚴密なる注意を施し、尙且充分なる結果を見る能はず候、殊に過去兩三年の紡績事業の盛況は、其製

糸の先物賣買流行し、之れに連れて、棉花の安値交換的賣買行はれたる等、棉花業者としての困難一方ならず候、然るに我社創業後數年の利益若くは既往兩三年間紡績事業の有利なりし最高潮の利益を捉へて、其原料供給者たる棉花業者を賣めらるゝに於ては、酷の甚しきものあるを覺へ申候、

今左に我社事業を各支店出張所に區分して説明すれば

新設孟買支店に於ては、モンsoon中、相當の取引をなし、爾來秩序的進歩を遂げ、慥かに孟買綿業界の有力者たるを認めらるゝに至り申候

紐育出張所に於ては、本店との連絡圓滑にして、本邦への米棉輸入は、斯界の第一位に列し、殊に社員が深く内地産地に出張棉花に關する諸般の事實を研究し、新智識を獲得せし事、將來我社業務の經營上多大の利益を相成申候、

上海支店に於ては、棉花、雜貨の取扱高を高め、分行をも設立し、漢口支店と相呼應して、成績の見るべきもの尠なからず候、漢口支店に於ては、漢口棉輸出は亦斯界の第一位に列し、而も其品質に至つては、同業者の凡てが、不良の爲に紡績側より、猛烈なる苦情を受けて、大に苦しめる間に於て、能く圓滿に其受渡を完ふし、豫期の利益を失はざりしは、偏に我社獨特のプレス工場の賜なり可申候、

猶豆粕工場は一日三千枚近くの製産額に達し、需要は單に本邦のみに止らず、南北清にも歡迎せられて、今や一、二、三月分を先約し、跡注文に應じ切れぬ程の盛況を呈し居候、棉實粕工場も、未だ創業日猶淺きが

故に、自然十分の功を奏し兼居候得共、漢口に於ける有力なる一事業にして、將來囑望すべきものなるは申迄もなき處に有之候、

如斯上海漢口よりの、本邦向輸出貨物の多數に上り候爲め、汽船を備入れ、神戸、門司、横濱、は固より、大阪、四日市等へも寄港せしめ、隱然我社の勢力を扶植致候事、決して尠少には無之候、而して此勢力を利用して近き將來に於て、大なる利益を獲得せんことを御座候、

會社狀態と將來の發展方針 (三)

抑も日本に於ける、棉花商たるべき資格の必要條件としては、適應の資本金及紡績業者との、好連絡健全にある事は申迄もなき事に有之候得共、又一方に於て、當事者其人を得る事こそ、極めて肝要に有之、而も其營業區域が遠く數千哩に分立致候事故、其間同一人の如く巧妙なる活動、圓滿敏速に意志の疎通を要し申候、換言せば「金ご人」この併立其宜しきを得ざれば、事業の成功は期し難き儀も存候、是れを既往數年の我社成績に徴し候得ば、前述の如く重役株主の、十分満足を得る丈けの好成績を挙げ得ざりし事遺憾千萬に有之候、是れは前述の如く止を得ざる事情の有りは乍申、第三者より唯單に事實として毎半期發表致候成績のみを根據として、種々の批評を受け候得ば、當事者たる我々に於て、無能よりする結果なりも非難せられ候も、恐らく答辭なかるべしと存候、と申すは米棉印度棉は別段資本を卸さず我社の信用を以て、荷爲替を取組み營業致居候

得共、清國に於ては之れに異り、既に尠なからざる資本を卸し、其設備に於ても既に相整ひ居候事故、事業の進歩は左る事乍ら、若し公平に批評せしめ候得ば、今少しく利益の擧げ得ざる事は無かりしものを被存候、即ち修養時代を脱して、成熟の域に進み居るものなるが故に有之候、尤も本年は綿糸の不況なりしより意外の打撃を蒙りたる事は事實に有之候得共、是れも亦、周到なる注意を以て、事に當り候得ば、確かに或程度迄に救済し得たる事ならん信じ申候、若し果して今日の如き状態の下に、其業務を經營するの外、手段なしとすれば、乍遺憾擴けたる手も縮めねばならぬ事と相成可申候、

會社状態と將來の發展方針 (四)

元來我々の素志たる、既往數年に於て、今日の如き業務の發達を遂げしと等しく、將來に於ても亦此趨勢を保ちつゝ愈益發展せん事を期するものに有之候、而して我社の隆運に伴ひ、自己の好運命をも拓かんとするものに有之候、左れば此志望を達せんには、多々益々利益を擧ぐるに一方適材を涵養する事急務と存候、然るに今の時に於てすら、一部株主間に、我社の成績如何を云爲せられ候様の有様にては、前途の事測り知るべくも存候に付、是非共此際奮勵一番株主全部を満足せしむる丈の好成績を示し、求めずして資本を投ぜしめ、招かずして人を來らしむべく仕向け候事最も肝要の儀と存候、如何にして好成績を擧ぐべきかは、是れ貴下等と共に寸時も忘れざる研究問題に有之候得共、要するに本支店が協力一致し、堅忍不拔の志を以て、即ち献身的

誠意を以て、局に當るの外無之候、乍併若しも本支店出張所全體を通じて、其一部に誠意の缺くる、若くは平和の缺くる處あらんか、千丈の堤も蟻の一穴より潰るゝの喩へ、到底豫期の發展は難望儀に有之候、況んや我社取扱業務の範圍割合に廣汎なれば、時として意外の中傷を蒙る事無しとも不限、又意外の誤解を招かぬとも不限候に付、局に當るものは一層の誠意と一層の注意を、怠るべからざる儀と確信罷在候、

例之棉花業は、事業の本來上多少の投機的(惡意に謂はば)意味を含み居候即新棉の市場に出づる前數月に於て盛に賣買し得られ候事、畢竟其設けられたる定期市場を利用するが爲めにして、我社が綿糸業に就て、三品市場を利用するに毫も異なる處無之候、即三品取引所は綿糸取引の機關として設けられたるものに有之候、即之を善良に利用することは、局に當るものゝ技倆も存じ居候、然るに喬木風に疾まるの喩に洩れず、我社が最近兩三年間に於て、意外の發達を示したるより、同業者間に於ては、固より我社と利害を異にするもの若くは嫉妬の眼を注ぎ居候もの即我社の活躍に心平ならざるものは、機會だにあらば、我社を中傷せんものと企て居候折柄、昨年末より本年始めに當り、彼の上海筋注文を三品市場に取次ぎたるより、忽ち「日本棉花は三品市場に投機を試み而も大失敗を招けり」なき有らぬ噂を流布致候爲め、新聞に、輿論所に注意する處となり、惹いて金融上にも尠なからぬ故障を起さしめ申候、若し夫れ三品市場に賣買を試み候事が投機事業なりとせば、先物約定の手持綿糸を賣繋ぐ事も、上海市場への端賣物を買埋めたりとする事も出来申間敷、此意味よりせば三ヶ月若くは六ヶ月先物の賣買なるものが、凡て投機的ならざるはなし、然るに對紡績、對糸屋なる場合に於て

は、何人も怪む處なくして、獨り對三品市場の場合に於てのみ、投機を疾呼致候事誠に不可解千萬に存候、况んや其賣買の大部分が單に取次ぎたるに止まるに於てをや、愚も亦甚しき儀に存候、獨り綿糸のみに止まらず、棉花の先約に就ては如何、是亦投機たるを免れず、而かも一點怪しむものなきに非ずや、故に偏見者流の所謂投機なる分子を除きたらば、我社は一も其業務を經營する事能はず云ふも亦過言に非ず候、故に三品市場に賣買を試み候事は、寧ろ當然の事に屬し、彼の綿糸業者に非らずして、三品市場に輸贏を争ひ若くば我社が、堂島市場に勝負を決する事は、意味に於ては霄壤の差違に有之候、而かも世は一も二もなく、混同視し、意外の疑念を我社に懸け候事遺憾は遺憾ながら、現に我社重役間に於ても、意外の誤解を起され候様の事情に付、是亦無理ならぬ事に存候、畢竟世は猶未だ海外事情に通ずるの深からざるより起り來る偏見にても申すべきか、尤も我社重役各位は市内第一流の紳士にして、換言すれば關西に於ける、實業界の重鎮たるを失はず候、而かも周圍の事情は、我社重役諸氏をして、海外を踏破し、親しく其風物に接するの餘地を與へず、又我社業務の陣頭に立つて、親しく我々を指導せらるゝ餘地をも與へず、旁々善きにつけ悪しきにつけ、思ふの餘りに懸念せられ候事は、固より其處にして、我々は深く感謝する處に有之候、乍併我々が經營致居候手段は、敢て重役の方針に悖り居る次第にても無之、又得意先なる紡績業者には善意に解釋せられ居候事故、我々に於て、熱誠渝らざる以上は、如何なる中傷をも早晚氷解するの期有るべきを確信罷在候、只今回の如き中傷誤解の起りし事は、我々が一點心に疾しからざるより、物に頓着せざりし其虛に乗ぜられたる一事は憤恨措く能はざる

處に有之候、左れぎ熱誠に注意を以て、本支店相呼應し、着々進行候得ば、如何なる中傷をも、功を奏するに餘地なく、順風に帆して、彼岸に達し得べしと確信罷在候、

會社狀態と將來の發展方針 (五)

前陳の如く今や、市場は腕次第に相成申候、換言すれば、資本に設備の世の中相成申候、故に之れが完きものは勝ち、之れに缺ぐるものは敗れ候、彼の〇〇系若くば〇〇系の如きは随つて薄らぎ行き候間、活動する上に於ては、寧ろ一人の樂有之候のみならず、同業者間に於ては、此二、三年間、見越安賣、若くば糸綿交換商内にて手痛き失敗を蒙り居候事にて、大に懲りたる模様も有之、且紡績業者も、資本に設備の完全ならざるものに對しては、自然疎隔するの傾向も生じ來り候、即夫等の事情こそ確かに我社を幸ひするものに有之候間、今の時こそ奮發するの、一層價値有るものと信じ申候、依て契約條件を勵行し、品質良好のものを提供致し候へば、期せずして彼等は我々に傾くべく候、又綿糸、肥料、雜貨等は、既に基礎鞏固に經驗亦乏しからず候得ば、十分の好果を得るの至難の業には無之候、斯くて本社が現に關係せる各方面に於て、當事者各自が此意を體し、部下を督勵し、秩序を保つて、確實なる商内振なる事を關係取引先に示し候得ば、我社の利益を挙げ候事は是亦至難の業には無之候、

兎に角我社の利益は即ち重役株主の利益にして、延いて諸君の前途に光明を與ふるものと存じ候、即苦樂を會

社に共にするの心懸けこそ、切に希望する處に有之候」(明治四十一年二月五日附)

諄々説き去り、説き來る處、悉く君の肺腑より迸り出づる熱誠と眞情の流露であつて、一讀懦夫をして立たしむる底の概があるではないか、殊に日本綿花の當局を、世人が思惑師の如く誤り傳ふるの點につき、極力其妄を辯じて、何等無謀の誹りを受くべき理由なきを喝破するあたり、眞に君の眞髓を表白するに足るものと思ふ。

君は其性豪膽にして覇氣に富み、其爲す處太つ腹の事多く、之れが兎角一部人士に誤解の種を生んだのであつたが、其實少壯時代より思慮綿密事を行ふに苟もせず、其一たび意を決するや電光石火的に活躍するを常としたが、左りて決して投機的に盲動するが如き、淺慕な考への無かつたことは、前掲の部下を戒め諭した取引指針中に明かに之れが實證を把握し得るではないか。

平素から周到な注意を以て、部下の正導に腐心至らなかつたにも不拘、親の心子知らずか、明治四十一年初夏、日本綿花の致命的大事件が上海の一角に爆發したのであつた、幾分不安裡に警戒して居つた君も、其餘りに意外な、大きな、穴の明いて居る事を始めて聞かされた時、一時啞然として驚き悲しみ悔しさの三重奏に、唯々茫然自失の外はなかつた、正直にして人を信する事の厚き君の心事として全く同情せずならぬ痛恨事であつたのである。

上海支店蹉跌の警鐘に驚く

君は前記の如く過去兩三年來機會ある毎に、部下の指導善處に最善の注意を吝まず、漸次所期の發展と名譽とを獲得すべく猛進したのであつたが、不幸事志と違ひ君の待望はまなま裏切られたのであつた。即ち對支發展の源泉地たる上海當局者の行動其規矩に準ぜざるものあり、權限外に資金の濫用固定を敢てし、爲替相場に大思惑を試むる等、内密裡に非違を冒かして、盲進を續けたのであつた、無爲替荷物に對する賣上金の濫用により、本社に對する電送は遅延するのみであつた、銀塊相場崩落の思惑違ひに因る巨額の損失隱蔽の遂に不可能の時期が來た、實に明治四十一年初夏の頃の曝露であつた。

本社の調査員が上海に急派された、取調べの結果、不當の投資貸金支出、無謀の投機等による數十萬圓の損失が、慥かに事實として確められた時、マサカ斯く迄の大損はさ聊か疑つて居つた君の萬一の期待が外れた時の、君の落膽振りには、實に慘めの極みであつた。即ち君は其當時上海特派の一幹部に次の如く所感を洩らして慨嘆して居るのである。

『誠に思へば夢の如し、人間一生朝露の如しは、能くも申されたり、乍去小生は上海支店內情毫も知らず、常に虚欺の報告を受け、謂へきも、書けきも相手は無視して反對の方面に走る、懸け離れの貿易は、合棒に斯る悪意ありては全く致方なし、神ならでは支配も出來申すまじ、本社劇務の傍ら、上海に對しては常日頃、今

日の如き失態ありてはご案じ過ごして、公私共に機會ある毎に注意に注意を加はへ置きたる事が仇となり、相手から仇を以て返へされ、重役からは疑はれ、無能、不行届を叱責せらる。是程割の悪き立場は無之誠に情けなき次第に存候

嗚呼思へば思ふ程實に残念千萬也、恰も道樂息子が湯水の如く消費せるご一般、何等の成果なくして綿糸五千俵以上の無爲替荷物を、黄浦江に投せしご等しき有様、會社重役、社員、株主等に對し何共相濟不申、頭の上る處もなし、夫れも小生承知の上の事なれば、諦らめも出來やうが、全く相手にしてやられた寢耳に水の出來事、夫れが平素十分注意する丈け注意を爲し盡し、其揚句の果てが今度の憂目ごありては、全く泣くに泣かれぬ馬鹿らしき、腹立たしき、悔やしき、唯々御憐察を乞ふの外無之候』(明治四十一年八月八日附)

是程の大損を、全く知らずに居たごは、聰明な君にも似合はぬご、或は君も同じ穴の貉ではあるまいかなご、一部の重役、一部の幹部社員扱ては世間の一部からも、一時異様の眼を以て睨まれたのであつたが、元々公明正大、會社の爲めご許り、一心不亂に奮闘を續け來つた君にして、そんな大それた事の有りさうな筈がないので、その事は明治四十一年八月一日賀茂丸で、特に渡支された田中社長一行の調査結果により、何等關係なき事實が明白にされたので、一時不利な立場に置かれた君も、漸く浮び上つたのであるが、去りて支配人ごしての責任に至つては、素より免るべくもない、君は當然職を辭して其不明の罪を謝せんごしたのであつたが、豫て君の手腕を信じて居つた得意先や、取引銀行方面から、君の身上に對して、翕然たる同情が湧いて來て、君を此際辭職

させるのは酷であるのみならず、會社更生の爲めにも甚だ不得策であるごの忠告が、會社重役に對して致されたのであつた、勿論重役にしても同じ考へで有つた處から、君の引責辭職は許可されなかつたのみか、却つて踏止まつて社運挽回に一肌脱けごの至極同情ある重役會の決議であつた、君は深く之れに感激したのみならず、自分の大に恩顧に預つた田中社長が上海よりの歸途明治四十一年八月三十日長崎に於て客死された悲劇に、人一倍氣の毒に感じ、何んごかして、其深い恩義に酬ひねばならぬご、堅く心に期したのであつたから、君は此際毀譽褒貶を外にし、身命を賭して、是が非でも此信賴に答へなければならぬご、一大雄猛心を揮ひ起したのであつた、一時四面楚歌裡に懊惱した君は、斯くして再び捲土重來の策戰を練る勇者ごして、商戰場裡に馳驅したのである。

上海缺損ご陣容立直し

明治三十四年一月以來社長の重任に凭つた田中市太郎氏は、上海缺損問題の重大性に鑑み、病を押して之れが眞相の踏査ご善後策の爲め、八月の酷暑期を上海に渡られたのであつたが、風土の變化は一層健康を損はれ、其歸途長崎に於て客死の不幸に遭遇せられたのであつたごは前に述べた通りである。

田中社長は華城財界に夙に重きを爲した田中市兵衛氏の嗣子であつて、明治三十一年十月田中市兵衛氏が日本綿花會社々長を辭任ご共に田中市太郎氏は入つて日本綿花常務取締役就任せられたのであつた、而して明治三十四年一月社長竹尾治右衛門氏辭任の後を受けて、氏は社長に昇任されたのであつた。

氏は夙に實業界に身を投じ、始め露油會社に従事せられ、明治三十一年日本綿花會社に轉ぜられたのであつた。天資聰明にして才氣あり、豁達にして溫雅、風貌貴公子の風あり、當時大阪財界に於ける若手實業家として令名が有つた、それが二豎の冒かす處となり、一朝旅中に倒られたのであるから、當時の事情を知れるもの、誰れも一掬同情の涙を注がざるは無かつたのである。誠に此好社長を失つた日本綿花としては、恰かも盲人の杖を失つた感があつた、君にして見れば夙に氏の引立を蒙つた身として、又今回の上海事件に責任を痛感せる立場からして、突如社長客死の訃報に接して、全く慈親同様の強きショックを感じ一時茫然自失、餘所の見る眼も氣の毒な程の悲嘆振りであつた。理りにこそ思ふ。併し君は長く女々しき態度は取らなかつた、君は重役會の決議によつて依然支配人として其最善を盡すべく激勵せられた時、君の意衷は自力更生の焰に燃へた、鐵火敢へて辭せざるの慥を示した、而して君は田中社長亡き跡の常務取締役志方氏の下に、必死の努力を以て起死回生の商策樹立を期したのであつた、亞いで明治四十一年十一月十六日開催の臨時株主總會に於て田中市兵衛、竹尾治右衛門兩氏を取締役に加はへ、田中市兵衛氏は、老軀を提けて社長に就任せられ、爰に役員の新陣容を整へて、上海支店蹉跌後の社業克復に當るこゝになつて、日本綿花會社の第二危機は救はれたのであつた。

明治四十一年下半年第三十二期營業報告書に顯はれた上海支店缺損の顛末を參考に記すれば次の通りである、
 『當期損益計算書ニ計上シタル上海支店損失金ハ、金七十八萬二千六百九十圓七十八錢ノ巨額ニ上リ誠に遺憾ノ極ミナリトス、由來對銀貨國貿易ハ、極メテ煩雜至難ナルモ昨年來銀塊ノ暴落世人ノ意想外ニ出デ、其差實

二十一片以上ニ及ビ、商況爲メニ沈衰、約定品ハ圓滿ニ引取ラレズ、清國樞要地ヲ通ジテ金融逼迫シ農作思ハシカラズ、人氣ハ衰ヘ商家錢莊ノ破産蹉跌頻出各國商人ノ清國ニ從事セルモノ、多少ノ損害打撃ヲ被ラザルハ殆ド皆無ト云フベキモ、當社が今回受ケタル損害蓋シ異狀ニシテ其主要原因銀價ノ崩落ニ存シ資金ノ回收未ダ抄取ラザル内ニ、此慘禍ニ遭遇シ、約定品ノ解約不引取等ニ因ル諸掛損害其他不測經費増加等種々ノ原因相重リテ斯クハ巨額ニ上リタルモノニシテ今之ヲ株主各位ニ報告スルニ當リ當事者ノ苦衷誠ニ語句ニ盡ス能ハズ、唯一致協力一日モ早ク恢復ヲ期スルニアルノミ、』

前期繰越益金外に諸積立金合計三十七萬餘圓を損失填補に繰入れ、猶且金四十萬圓餘の損失を次期に繰越すこととなり、拂込資本金百二十五萬圓に對して、約三割の缺損繰越しに當つて居る、日本綿花會社としては、慥かに致命的痛手を受けたのであつた。

更 生 努 力

君の對支經營は商工併進主義であつた、又支那紳商と握手合辦の必要をも認めたのであつた、明治三十六年上海支店、翌三十七年漢口支店を開設するや、着々此方針の下に部下を督勵して、夫々施設を進めたのであつた、上海には繰綿工場、紡績工場、雜貨販賣分店、漢口には豆粕、棉實粕壓搾工場、棉花鐵卷工場等棉花糸の本業以外に副業を經營したのであつた、是等の諸設備に百數十萬圓の資金固定を免れなかつた揚句に、上海支店蹉跌で

數十萬金の損失を蒙つたのであるから、日本綿花の臺所は勢ひ火の車を廻す外はなかつた、それで更生第一策として資金充實が急務中の急務であつた、乍併新株拂込の如きは言ふべくして行ふ可からざる境遇にあつたから、君は本業以外に固定せる資金及滞貸金の整理回収を急いだ、上海綿線工場や、不用土地の賣却は着々進捗した、上海の紡績工場も賣りに出したが良い買手の無いので一時見送つた、漢口豆粕、棉實粕工場も賣却又は合辦の手段を講じたのであつたが之れも恰好の相手が見付からず其儘沙汰止みに終つた、上海の雜貨販賣の機關分店は早速閉鎖された、夫れやこれやで上海漢口兩支店の業務は縮少され、社員は淘汰減少されて經費節減が出来た、一方商品に對しては、出来るだけ手持を減じ、流通資金の圓滑を圖るに勉め、斯くして資金の調達と業務の刷新を期し得て、徐々整理の實を擧ぐるこゝになつた。

君は上海事件の發端以來、大體跡始末の纏りの付くまで、重役會を始め各關係先との間に立つて、交渉の矢面に當つたのであつたが、其間の苦心慘憺振りは、逆も筆紙に盡し難きものがあつた、君は明治四十一年の暮に、在孟買の山田氏に次のやうな書面を出して居る。

『申歲も愈々今日限りに御座候、誠に元日以来碌な事なし、實に人生有爲轉變測り難し、回顧すれば、ようぞ命長らへて、今日まで來たなき、我れながら不思議に存候、會社の失體誠に話にならず、海外萬里異域の地に御在勤の貴兄其他諸君の御勉勵も會社全體の損益に何等の効果なく、定めて働き甲斐なき事と御考へ相成り候半と存じ、恐縮千萬に存候、

事件以來の波瀾は實に意外千萬也、人情の薄きも多少相怪申候、乍併恩人亡社長に對し、何事も忍耐せでは相成らざる我身、ヂツト耐へて酒も飲まずに苦しい瀬戸を経過仕候、田中氏在らばと、謂ひたき事もあり、周圍の中傷攻撃を我身に引受け、中々一時は辛き事にて御座候ひし、上海の不始末今以て會得が往かぬ我身、貴兄は定めて不審の事や多かるべし、事情知らしたしと、筆取りたる事幾度！書かうとすれば長くなる、ツイ延ばし／＼して今猶失敬せる有様、是れは來年五、六月君が歸つた時、緩々御話し可致事として失敬する、僕は其節の話しを今より楽しみに致居候、君も精々多くを考へて歸り給へ、云ひ度、相談したい事が澤山有るよ、男泣きに泣かされた話しを！田中社長御死去前後の話やら死にたいと思ふた我身が耻を構はず、日夜辛苦、會社も一日も休んだ事なし、〇〇が殆ど掻き廻しつゝある間に、新棉季の準備其他爲せる苦衷思へばヨウゾ命が續いたものだよ、僕は大略〇〇君を通じて〇〇家に説明した積り也、乍併僕の腹中の都ては、君ならで外に謂ふ人が無いのだ、又藏の善悪は、其時に御判断相願度、夫迄の處、コ、ナ、話を抜きにして、男伊達に精一杯働きませうよ、』云々

又同じ年の暮に上海に在る、社の幹部へ

『今日一日は申酉の分れ目也、誠に四十一年は何たる悲惨なる歴史なりしか、實に幾年の命を縮めたるや難測候、勿論僕は自己の責任とて、因果應報致方なしとするも云々』

君の嘗めた苦辛の程は、能く々推察同情し得られるのであるが、流石平素頑健を以て誇つて居つた君丈けに、

割合に、健康丈けは、さして損はれなかつたらしい、同年十二月八日附で編者の一人にこんな手紙を寄越した、
 『其後酒は不変一滴も飲まず、酒止めたら、身體が瘠せるかと思つたが、今以て達磨たり、さる〇〇様曰く
 夏以來周圍より攻撃され乍ら平然(?)たるは感心だささ!、今日迄は無難に経過せり、願れば能くも越せたり
 針の山に存候』云々

逆でも常人では堪へ切れない大苦痛を耐へ通して、難局打開の中心に身を投じ得た事は君自身卓越せる實力の
 自信を有して居つたのは勿論ではあるが、併せて頑丈な體格の持主であつたことが、又君を成功に導いた一要素
 たるを疑はぬのである。

君は斯くして、努力に努力を續けたのであつた、天は遂に自ら助くるものを助くるのである、其結果は着々々
 して事實に顯はれ來つた。即ち

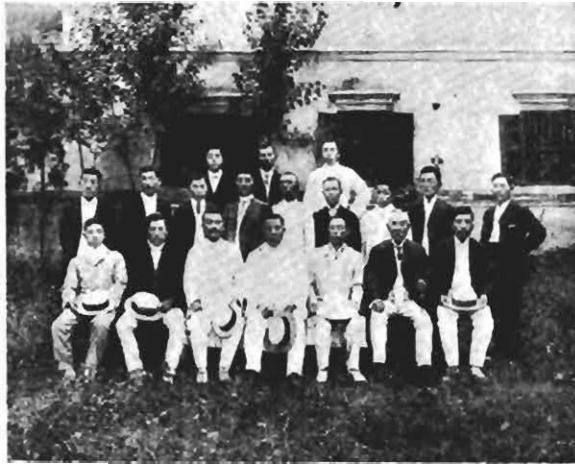
更生第一期明治四十二年上半季

利益金 二十五萬五千三百七十三圓四十一錢一厘

更生第二期明治四十二年下半季

利益金 十八萬四千四百二十一圓六厘

の好成績であつて、此二期間の利益通計金四十三萬九千七百九十四圓四十一錢七厘となり、一年前の缺損繰越金
 四十萬四百十五圓二錢七厘と差引殘



(明治四十四年)

於漢口前列中央喜多又藏氏

金三萬九千三百七十九圓三十九錢也
 の利益を後期に繰越す程の鮮かさを示したのであつた。

君は此機を逸せず、各支店幹部の意思疎通を圖り、協同一致の實蹟を擧げんが爲めには、親しく彼等を一堂

に會し、誠意を披瀝して今後採るべき方針につき懇談する
 の必要を痛感して、明治四十二年夏、各支店長を本社に招
 集し、七月二十一日より三日間に亘つて、更生大策につき
 論議を重ねたのであつた。

其結果、各支店長は君の悲愴なる決心と覺悟並に其更生
 時代に處する卓越なる意見方針等に共鳴して、何れも君の
 健實穩當なる統率下に、一糸紊れざる協力奮闘を誓つて、
 各自其任地に歸つたのであつた。

君の輝かしい猛闘振りも、各店の一致協力も相俟つて、
 益々著しい効果を擧げた、即ち明治四十二年十二月七日附
 で孟買山田支店長宛にこう書いて感懐を述べて居る。

「當下半期(明治四十二年)も來る廿五日で締切る、純益

十八、九萬圓の間なるべし、尙明年上半期の利益豫算は、既に取引出来居るものにて、相當残り居り、十五萬乃至二十萬圓は最早鍋に入れた心持で、從容迫らず働き稼ぐ内に大丈夫なりと信じ居候、嗚呼思へばゾットする去年の此頃！

我社此頃の模様——勿論マダ不具者也、健全體云ふを得ざるも、損金丈け返へせば兎も角一人前也、——財産は三十九年、四十年の現在に及ばざるも、事業其者は印度に、米國に、將た清國に健實なる發達を遂けつゝあり、上海支店當期の利益の如き、從來の經驗苦辛に對する報酬にて、此處迄に整理した上海支店長の効蹟非凡なるべきも、何に致せ實體は餘程進歩せる筈、而かも當局者其人を變へず、若し夫れ故市太郎社長の御在世にもあらば、如何に我等が前年謝罪旁御詫旁報告するに力を得て、社長も歡ばるべきに、油繪の御肖像のみにて、何等張合ひもなく、唯々暗涙に咽ぶのみ、噫、』

斯くして業務は愈々順境に進捗し

明治四十三年上半季	利益金	二十六萬一千二百餘圓
同	下半季	三十萬八千六百餘圓
同	四十四年上半季	同
同	下半季	三十二萬三千餘圓
同	四十五年上半季	同
		四十五萬一千三百餘圓

各年期年一割二分の配當を行ひ得たのであつた、而して爾來一層の進運を示し

大正元年下半季	利益金	四十九萬八千八百餘圓
二年上半季	同	三十二萬八千三百餘圓
同	下半季	同
同	三年上半季	同
同	下半季	同
同	四年上半季	同
同	下半季	同
		四十八萬八千九百餘圓

以上の如き好成绩を擧げ、年一割五分の配當を續け來たつたのである。

日本綿花の新築移轉

明治三十九年九月本社所在の隣地二百四十五坪を買收、此處に事務所新築の議を決して片岡(安)技師に囑託し、豫算十萬圓を以て石造本館の二階建設に着手したのが、明治四十年五月であつた、そして、其建築中假營業所を同年五月十二日東區今橋四丁目舊酒造火災保險會社跡に移轉したのであつた。

斯くて新築は進捗したのであつたが、偶々上海支店蹉跌の不幸を見た爲め、止むなく一時作業中止の外なく、

亞いで賣却處分の議さへ生じたのであつたが、其後上海整理一段落となり、社業挽回を目ざして甦生の意氣を揚げるに共に、此賣却談は中止となり、再び工事を續けることにして、明治四十二年秋漸く完成を見るに至つたのであつた、而して同年十一月十四日此處に移轉の後は一層すがくしい氣持で、上下協力一致、日夜甦生策に奮闘を續けたのであつた。幸に君の時運に乗じた機敏にして誠實なる取引振りは、着々成功を齎らし、爾來年々好成績を挙げ、能く短年月間に、上海大缺損を補填し得たのであつた。

取締役に昇任す

田中市太郎社長が、明治四十一年八月上海より歸途長崎に客死後、奮然老軀を提けて、其後繼社長に就任された田中市兵衛老社長には、爾來社運の挽回に最善の勞苦を吝まれず、幸に順調に業務の進行を見るを得たのであつたが、何分御老體の事にて僅か半月の御患ひに、明治四十三年七月二十五日、敢へなく鬼籍に入られた、關西の財界等しく哀悼の情を表したが、更生途上にある我社としては、一入痛惜の外は無かつた。

田中老社長亡き跡の、我社内閣の構成は、一問題であつた、之より先、本社創立以來取締役として本社のため多大の貢獻をされた取締役野田吉兵衛氏が明治四十三年一月十四日逝去されたので、取締役の補缺は都合二名になつたのである。

當時我社の状態は、君の采配其宜しきを得て、更生の意氣天を衝くが如き觀があつた、明治四十三年の初春、

日本内地の綿糸市場は、一時米棉崩落で慘憺たる不振を呈し、一般に人氣沮喪の状態であつたが、其際君は見る處ありて綿に糸に大いに強氣で突張つたのが美事圖に當り數十萬圓の大儲けをやつたこの大評判で、二年前の缺損時代ミ打つて變つた有様であつた、事實當時の成績は大いに良好であつて我社の財産状態も餘程見直したのであつた、即ち明治四十三年六月末に於ける我社財産の状態は實に次の如きものであつたのである。

拂込資本	一、二五〇、〇〇〇・〇〇	固定資本	
前期繰越	三九、三七九・三九	本社	一八三、〇〇〇・〇〇
当期利益	二六一、二四四・八八	什器	一三、〇〇〇・〇〇
		上海工場	二六七、九四六・二四
		漢口工場	二七八、〇〇〇・〇〇
		流通資本	
		清國各店	三五〇、〇〇〇・〇〇
		本店	四五八、二九八・〇〇
合計	一、五五〇、六二四・二七		

一、五五〇、六二四・二七

一、五五〇、六二四・二七

以上の如く會社の目醒しき更生振りを示しつつある際老社長の物故になつたのであるから、此際の後繼者として食指を動かした候補者は、決して二、三に止まらなかつた、二年前には殆ど振向きもしなかつた人々までが、

俄に色氣を示すなき實に有爲轉變の世の中は乍中、如何にも淺間敷感せずには居られない。

一體株式會社は、大株主の移動によりて、忽ち經營の當局に異動を來すの慣ひである處から、田中老社長亡き跡萬一株式の移動を生ずる様の事ありて、意外の人物が舞臺面に顯はれるやうの事ありては一大事と許り、君は可なり神經を悩ましたのであつた、其結果として若し株式の譲渡が止むを得ない事情にありとすれば、是非之を從來の關係者一派で引受けることにするのが、會社の爲めにも自分等の爲めにも仕合せになる云ふ立場から、さうしても此際の新内閣組織には現重役中の志方氏を社長に擧げ、業務には商務に明るい人を社員中より撰任して貰ふ事が、更生後の會社に善處する最も適當の案と君は信じたのであつた、そこで君は極力此方針の貫徹せんことに努力したのであつた、

『今度は小生も覺悟致居候、會社を固め會社と共に運命を共にするは吾人の希望なれども、重役會にして若し我等の希望を容れられざるやうなれば、止むを得ず自分は勇退して小規模の綿屋でも開店致度存居候

日本綿花と我輩離る可らざる因縁也、一昨年 of 失敗畢竟吾人の責任として一死を賭してまで戦へるは君御承知の通り故市太郎社長に酬ひ、株主に謝せんが爲めのみ、爾來幸に時利なるに際し不幸又もや田中老社長を喪ふ、而して萬一其所有株券を會社に縁故薄き他人に賣放たれ、他人取つて代る如き事あらば從來我々の苦勞も屁一つに終らん、我等は新しき資本家の下に又々苦みの一よりやり始めることは到底忍び難き事に存じ候、

是れぞ小生今回大決心の理由に有之、貴我相互今更綿屋は止められずとすれば、假令重き苦しき負擔とは知

りつゝも此際我々に於ても精々多數の株券を田中家より譲受けて、己れから働くテフ、精神でやるの外なしと存候、然らずば五十年一生として残り僅かの貴我の生命、夢の裡に有耶無耶に過ぎ去り申すべくも存候』

(明治四十三年八月四日附)

と莫逆の友山田氏に申送つたのであつた。斯くして同年九月十四日取締役互撰の結果志方勢七氏社長に當選就任されたので君の第一希望は達せられた、而して同年十月一日開催された臨時株主總會に於ける取締役二名の補缺選舉には、君と山田氏の兩社員が當選し何れも常務に就任する事に決定したので、爰に君の第二希望も達せられ力強き新進の内閣が組織されたことは正に一層我社の前途に光明を與へたのであつた。

君入社後片々たる一社員より十有六年間献身的努力奮闘の功績が、今日漸く酬ひられたのであつたが、當時の時勢として資本家的重役の幅を利かせし際、社員より一躍常務の重職に拔擢選任されたことは異數であつて畢竟君及び山田氏の技倆拔群なるを證するものである。

重役に昇任後の覺悟

君が多年の耐忍と健闘に酬ひられて、常務取締役に昇任したことは、勿論君の満足した處であつた、併し君は之れと同時に、一層責任の重加した事を深く意識したのであつた、當時君は同僚山田氏に次の如く書き送つて居る『愈々取締役に立つ、世間に對しては志方氏を中心とする會社の如きも、事實貴我兩人の會社も同様なる

べし、從來の被傭は今日以後反對の地位に立つ、正に夫れ相應の覺悟無かる可からず。

斯る會社の重役として立つ、我輩こそ十數年精勤の結果勝ち得たる地位なれども世間では之を何んぞ見る、或は貴我如き若輩の名前を出すことは我社の估券を下ける事になるかも知れない、無論之れは疑問だが詮する處世評や他人の思惑なごを苦にせず成行に捨て置き、協力奮闘、他日凡ての人をして、説明せずとも彼等自ら成程、綿花は立派なる會社、さ知らずく渴仰する様に致度、夫迄は重役社員何の區別やある、唯々働かんのみかなだ、神は誠實働けるものに幸ひするさかや、働かば、五百萬、一千萬圓の會社にならんとも限らない、◎さへ出来れば世間に遠慮なし、斯くて世界に跨り、關西に於て模範的貿易會社の實を擧げて、亡き恩人に酬ひばや、

我等の目的は夫れのみ、生くるも死すも、夫れ迄也、さ近頃小生は覺悟仕候、

釋伽に說法なれども、此機會を利用して愚見申上候』云々(明治四十三年十月一日附)

何んぞ其覺悟の健氣なるや、其意氣の勇壯なるや、其目的の大望なるや、君は此堅忍不拔の精神を一貫して、事業の達成に終始したのであつた、宣矣年一年業蹟擧がり、十年後の大正九年に於て、天下の耳目を聳動した五千萬圓増資の、大活躍期を現出するに至りし事や。

腕の研へ

上海蹉跌後僅々二年にして、會社の更生に成功し、會社の聲譽を回復したる君は、明治四十三年十月論功行賞によつて一躍常務取締役後の重任に擧げられたことは、既述の通りである。

君が更生の當初に於て採つた強氣の商策は、美事所期の成功を齎らした、更らに其翌明治四十二年に採つた商策も、同じく強氣であつたが、是れも亦同じく成功を勝ち得たのであつた、其翌四十三年又大勢は君をして強氣の有利なるを思はしめた、三年越の強氣觀は又々圖に當つた、君の評判は大したものである、強氣の當り屋として君の辣腕は斯界を驚かした、強氣で當つた君は後日終始一貫強氣屋の如き誤解を招いた事は、君の爲めに氣の毒である、君は勿論積極主義の人であり且つ綿屋としての立場上、勢ひ買に勇なるが如く常に見られたので有つたらうが、君の性格は慎重商機を按じて後、其思ふ處を斷行するのであつて、決して強氣萬能の如き不見識の商策は採らなかつたのであつた。夙に明治四十三年の秋、山田同役に宛てた書面中に見るも、此邊の消息を知り得るのである。

『其後の日綿は先々順調、毫も心配御無用に存候、當期利益〇〇萬圓確實は既に御通知済の如し、小生は多分新米棉、印度棉計算を別にして尙且〇〇〇萬圓純益敢へて空想で無い様子、或は事實さ相成可申哉も難測さ小生のみ楽しみに致居候、

既往二年は強氣で成功、同じチヨボーが三年も続くべき筈なし、先々弱氣で注意するが至當と思ひ、先般來其方針で慎重に遣つて居つたが、ドウも其後内外の形勢急變、到底、弱氣を許さずテフ積りにて、心機一轉の結果、今日迄誠に好都合に參り居候、乍去綿に比較して常に綿糸が割安也、双方共騰貴はすれども、兎角棉花の方が凄敗、目をつぶつて綿を買ひ、綿糸の上りを待てる人は好かれぬ、綿糸を高く値待ちせる人は、常に棉花が買遅れ、縮める手は伸びず儘、置いて往かれる有様、何分米棉の高値は馴れ居るも、今年印度棉の奔騰は蓋し稀有にして、今日來電カンガム十一月卅五圓七十五錢、而かも買ひ悪い有様、今日迄の日本買入總高十二、三萬俵位(内當社買約〇萬〇千俵)に過ぎざるべく、若し夫れ愈々機熟して買ふ時は、ドンナ相場が出るかも知れず、最低通州卅一圓が今日卅六圓テフ、相場、尤も綿糸も當月百四十一圓九十五錢迄騰貴、立馬十六手大百四十圓テフ、恐らく攝紡帳面に無き相場なれども、未だ紡績には引合はぬと見へて買進まず、紡績の話に怖氣さし、高値馴れ賣氣ある綿屋は、到底引かされ通し、唯六暗と勸める、謂はど今日賣れぬが蠻勇的に買進む人こそ、常に勝利テフ、恐らく我社開創以來、未聞の商況、コンナ苦しき年はホンニ氣骨のみ折れて壽命が縮まる心地仕候

此意外に六ツかしき年、大事を踏まば終りまで拱手傍觀より外無かるべきも、蠻勇的に調子能く進まば、又々反對に面白く儲かる年かも知れぬ、ソレ、四、五十萬圓位は何んだか眼前にぶら付く心地がする、勿論高値は買ひ悪いが、ドーセ、必要なる棉花故、其處迄出さねば賣人なき場合、イヤ能く々の場合は賣れる譯け、遣り

難いが當分外國に於ける奔騰相場に連れられて、我々も走つてぞ見んこの方針にて駈廻り居候。

ドーセ、十二月中には一度瓦落あるべし、否其瓦落こそ玉の仕入れ時、さうぞ夫迄に一杯仕事して、そんな崩落に空手に出合ひたいなき小生は夢想罷在候、

如御説結局は高かるべし、グード五十圓は來年の普通相場かも知れず、『云々(明治四十三年十一月八日附)』

君は市況の大勢を按じて強氣もやれば、弱氣もやる、臨機應變、勇敢に遣つてのける一例として君の前文を掲げたに過ぎぬ、之を讀んで居るミ、綿高の製品安の狀況が、何んだか、昭和七年夏頃の様子に似通つて居る様な感じがする、製品安を尻目にグ、ハ、ク、突つ走つた原棉を躊躇なく買進んだ人々の成功した様が、丁度明治四十三年の時の有様に酷似し居り、歴史は繰り返すの感に堪へない、君をして更らに一ヶ年生延びせしめ得たならば恐らく機到れりミ許り、巨腕を振つて大々的に活躍、善處したであらうミ、今更君の亡きを淋しむのである。

上海利益の送金と今昔の感

明治四十一年上海支店失敗後の上海事業は、不得止縮少の外は無かつたが、併し其本業たる綿糸棉花の取扱ひは決して消極に流れなかつた、否綿糸の如きは其最も主力を注ぐべく重視したのであつた、即ち君の着眼點は「日本の紡績は支那輸出に重きを措かざれば到底利を見る能はず、自然我社が綿糸輸出に力を入れる事は、如何に彼等に好印象を與ふるや難計、棉花賣込みにも好都合なるは謂ふを俟たず、故に上海としては能く此點を了解し益

々必要なる綿糸消費地に於ける實狀を研究し、眞個の綿糸輸出業者たるの資格を獲得、紡績業者をして、十分敬服せしむる様心掛けざる可からず、而して我社の技倆が日本綿糸販路開發に勉め各種製糸を遺憾なく清國に於ける各地方當業者に紹介するを得ば、一層鬼に金棒ならざるなしとせず、支那は十六手、二十手又は洋造り注文に限らず、中糸でも、細糸でも、和造りでも、太番手でも買ふのである、吾人の熱心如何にて、今日以上賣擴める事難事に非ず、此趣味ある仕事に對し、日綿其先驅となり飽迄奮闘せよ』と云ふのであつたから、上海支店の之れに副ふべく努力したことは一と通りでなかつた、果然其結果として明治四十三年下半年の上海支店利益は優に〇〇萬圓以上に達し、巨額の電送金を本社に爲し得たのであつたが、此時に於ける君の感慨は實に無量のものがあつたらしい、

『支那より電送金を受けたる最後は四十一年失敗の際、爲替率に頓着なく回金を促した事が最後で、哀れ長江沿岸に投げ捨てたる金額約〇〇萬圓、其後整理の順序として先づ借金を返済し、第二支店内部勘定の整理を遂げ今や此電送に接す、支那を損所と見做し、極端なる消極説を持し、再度西に向つて商賣するなテ、重役方針に對し、其後今日迄來る貴我等の苦心如何許り、時に口角泡を飛ばさん許りに議論を重ね、互に面を犯して痛論せる此結果に有之、小生は一入興味を感ずると同時に、此好調を如何にしても、故田中社長に報告したく存じ、思はず暗涙に咽び申候』云々(明治四十三年十二月六日附)

之れが上海當局者に送られた感慨にあふれた書面である、君は會社状態の良くなるに連れ、常に思ひ出すのが

故田中市太郎社長の事であつた、海山の大神を受けた同氏が、上海失敗後間もなく、苦悶裡に他界されたのを、非常に残念に思ひ続け、此著しい更生の姿を一と目見て貰ひたかつた、何時も涙ぐむものであつた。

實力主義の鼓吹

君の努力は以上の如く我社の更生をして順風に帆を上げしめた、こうなるに世間は五月蠅いもので、明治四十四年初春頃の新聞紙上に、意外の中傷記事が顯はれたのであつた、即ち我社が糸綿買持品の値下りで大損を招いたと云ふのである、處が事實は損失處か反對に多額の利益を攫んで居つたのである、君の巧妙機敏なる商策は到底他の端倪するを許さないものがあつた、一見損失の如く看得るものが、事實損失で無い處に君の巨腕の値打がある譯けだ。

斯る誤報は君の一生中屢々傳へられたのであつたと同時に、新聞紙上で彼是謂はれるやうになつた事は、一面君の勢力の伸張と我社の異常なる發展を意味するものと謂ひ得よう。

遠く海外に多くの支店を有する我社の如きにありては、新聞紙上の誤報は往々支店員を迷はするの恐れなしにしないので、君は斯る場合には、詳しく本社の内情を通知して、其妄を解くのが常であつた、そして世間の中傷に頓着なく、我社としては唯々實力主義の發揮に、脇目も振らず努力奮闘に勉めよと激励する事も亦常であつた。『今や我社の綿業界に於ける位地は自賛知らねど、上海漢口に於ては吾人第一の強敵たる〇〇を凌駕し、孟

買、米國に於ても設備は凡て彼れに對等、取扱高に於ても殆ど彼れの壘を靡するに至り、是れ全く諸君の御盡力に依る事深く感謝に不堪、尙御互に益々奮勵努力して吾人の地位を愈々高むる事に致度、殊に最近三品市場に於ける彼我の動勢は、各紡績をして我社に對する同情を増す丈、彼をして同情を失ふ位地に立たしめ居候次第に付、此機會を利用して益々我社の Prestige を發揮する様勉め度、就ては單に相場の勝敗の如きは勝つも負けるも時の運、斯の如き事は度外に附し、永遠に競争場裡に於ける優勝者たるには、兼々申上候通り實力主義の外無之、飽迄設備を完全にし、吾人の取扱品たる棉花、綿糸の販路を擴張し行く事が、吾人の責任に有之候間、諸君も十分其覺悟を以て、我社の大方針たる實力主義を以て、綿業界に雄飛し、有終の美を完ふせん事を望入候』(明治四十四年三月十一日附)

各支店に通告したのであつたが、君の實力主義充實の方針は、終始一貫して渝る處なかつたのである。

所謂福紡株事件の真相

明治四十四年春豫て取引關係の淺からざる福紡當局者の爲めに、同紡株二萬六千株を擔保に金額百一萬四千圓の字形割引を爲した事があつたが、期日に至り支拂はぬので、質權設定證書に基き右株券全部を其儘債權に辨濟充當の手續を履んだ處、意外にも先方は我社が同社重役一部と共に謀して株券横領を企てたるもの曲解し、横領起訴の方法に出でたる事が抑も本事件の發端である、君は一時刑事被告人として裁判廷に立つを餘義なくしたの

であつたが、何等惡意なかりし君は、正しき法の裁きの結果告訴取下示談解決の事となり、結局期日を延期して其支拂を受け、株券を返還して其落着を見たのであつた。

事情は以上の通りで、無事に済んで仕舞へば、大した問題でもないのだが、當時君の心情に決心を語る左の書面を掲げる、



明治四十四年(當三十五歲) 重體 喜多又藏 氏

『福紡問題の大意は別信の通り、本社として別段法律上手落なく、我輩個人として何等君と密約無く、又同君行動を助くる如き事したる覺へ更に無し、尤も我輩代表者として、重役會決議又は法律家の意見を徴し、最安全に認めたる手段を取りたるのみにて、何等横領等の形跡なきも例の〇〇〇〇東京〇〇〇〇〇〇は君の平素惡評に乗じ、

私行を發き、公人として取りたる我輩の行動を、私人として情を知りて行ひたるもの、如く曲解し、株券横領罪テ、刑事被告人として、我輩を告訴、馬鹿らしき事限りなし、〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇は曲筆小生を誹毀せるも、我輩は今が會社の大事の時、怒つて諸君に迷惑になつてはならぬと、周圍よりする誤解、訾言を一身に

引受け、何時かは解けんテ、考へにて、極めて冷靜に執務仕候、我輩の行動は〇〇〇及知人間に大満足を受けたる様子、御安神被下度候

四十一年を追想せば、今回如き屁の合羽、而かも個人ならざる會社取締役としての事なれば、假令一時起訴せられ、收監せらるゝも厭はざる決心にて候ひき、御笑草に右書添へ候』(明治四十四年八月十二日附)

是れが在米山田氏宛てに送られて居るのである。

流石商賣に掛けては膽斗の如く随分思切つた藝當を遣る君ではあつたが、刑事被告人にして檢事の前に立つたときは、假令無實の告訴であつたにせよ、随分薄氣味の悪い厭やな感じがしたよき、時々懷舊談に耽つては當時の感懐を洩らされるのであつた。

北支への進出

豫て懸案として其時機を狙つてゐたのであつたが、幸に上海、漢口兩支店が順調に發展を遂げ、兩地に於ける日本綿糸の大部分が我社の手で供給され、揚子江の沿岸蕪湖、九江、鎮江等の各港にも我社の Θ マークの綿糸が多數見られるこ云ふ盛況は明治四十四年頃の状況であつたから、是れからは愈々北清方面に手を延ばすの機運に迫られたのであつた、併し愈々店を置くこ云ふには、一應其方面を實地視察の必要ありとして、君は明治四十四年五月九日大阪を發つて、長江沿岸を経て漢口より北清に出で、滿洲及び朝鮮を視察して六月十七日歸社したが

其結果として九月天津及青島に愈々出張所を出し大いに活躍するこに決定したのであつた。

綿布類取扱の開始

日本に於ける紡績業は駁々として發達を遂げた、綿布は綿糸と共に重要な輸出品として注目せらるゝに至つた、對紡績關係に於て密接の親善を期せざる可からざる我社として、綿布及綿製品の取扱を開始し、一層紡績業者との關係を親密にするの必要なるは謂ふ迄もない事である。そこで滿洲支那方面需要地の状況を精査して後、大正二年四月愈々綿布類の輸出取扱に着手する事に決定したのであつた、早速其販賣機關として新に出張所を滿洲大連市に設置した。之を本據として牛莊、鐵嶺、長春等にも出張員が配置された、當時滿洲に輸出された日本綿布類一千萬圓、日本綿糸三百萬圓云ふ、今日より見れば大した金額ではなかつたが、夫れでも夙に滿洲市場は英米品が殆ど獨占の姿であつたのを、日露戦争後日本紡績に於て輸出綿布組合を組織し、鋭意輸出の進展に力を盡し、英米品を漸次驅逐するに至つた御蔭で、其苦心は一こ通りではなかつたものである、幸に紡績業者の團結によつて發展の機運を招致し得たのに乘じ、棉業商人も續々滿洲市場へ乗出し、後れ馳せながら我社も大正二年を以て、其仲間入りをしたやうな次第であつた。

君の世界一周旅行

明治四十一年上海失敗の後、數年間會社の更生に寢食を忘れて努力奮闘した甲斐あつて、會社の状態は、メキメキ、ミ恢復良好化したことは、既に説く處の如くであるが、數年後の君にして數年前の失敗を振り返るべき、ヤレ、レの感なくんばならず、爰に君は一息入れる爲め本社の劇務を離れて一時海外旅行——世界一周に氣を抜かんともの考へたのであつた。そこで君は同役の山田氏に米國より本社に移つて貰ひ、常務一切を同氏に託し、大正二年七月二十二日エムプレス・オヴ・ルシア號に搭じて先づ米國に向つたのであつた、其旅程としては米棉の産地たる米國南部に約三ヶ月滞在研究後、紐育より一路印度に向ひ、印度に約三ヶ月滞在、夫れより引返へして、埃及を経て歐洲視察後、シベリヤ經由、歸朝のプログラムで約一ヶ年の豫定であつた。

此大旅行こそ實に我社の海外施設に一大進展を見るの機會を與へたのであつた。

米國南部に於ける生活

君は大正二年七月廿二日神戸出帆後海陸無事、晚香坡、シャトル、タコマ、ポートランド、桑港經由八月十四日我社のテキサス州フォートウォース出張所に安着したのであつた。廣漠たる平野中の農業都市である丈けに、自ら其生活は單調無味を免れないのは止むを得ないと同時に香氣な事も想像し得るのである。年が年中、夜を日

について働き通しに活動した君が、一朝此香氣生活に入つたのであるから、君にしては却つて苦しい修養であつたらしい。

同市より日本の一友人宛に左の通り通信した。

『フォートウォース市着後頑健御安神被下度候、ビューセツト、サウンドを見たる時は、誠に奇麗なる國この考へも有りたれど、此地に着いては、實に乾燥無味、何等耳目を楽しましたるものにては無之、唯廣大無邊の農國この感想のみ、米國も東部を見ざれば語る能はず存候、

米國式は事物皆多少趣を異にし、印度製の我輩に不似合なる事多く、時に失策もあり、不自由も感じ候、乍併一日一日馴るゝに従ひ、苦にならず、米國出發印度に向ふ頃は幾分高襟になり居るかも知れぬ心地仕候、着後兩三日前述のテキサスは中々酷暑烈敷、時に印度以上に御座候、如御案内本年は早天打續き綿作萎縮せ居位にて、一寸手古摺候得共、元より覺悟の上の渡米にて必ず御想像程には無之存候、

毎日小生はオフキス出勤が最大樂しみ、外は時間を極めて寢食せるのみ、在朝の時なき思ひ出しては、時寄一種淋敷感念浮び來り候、又箱根にて君等と清遊せし事なきの感じは當分夢にも無かるべし、乍併隨分今日迄勝手せし我輩なれば、コンナ位の不自由は、寧ろ良き懲戒なるべし、其積りで香氣に過ごし居候、妙な事申上候様なれども氣心なきは妙なものにて、日本を出發以來紅燈に全然近寄不申、夜分なきは極めて靜肅端坐罷在候、乍我不思議と思ひ候程に御座候、コンナ調子で一年も過ごし、歸朝後尙變らずば、貴兄獨特の品行論の聽

講も出来る資格も可有之に存候、』云々（大正二年九月十一日附）
越へて一ヶ月後には、左のやうなこゝを一友人宛てに出して居る、

『米國に居る小生如何に暮せるか御尋ね被下恐縮に存候、此種の思ひ遣りは畢竟貴兄ならでは小生は獨り感心致居候、成程日本での事、時寄思ひ出しては、如何にも米國が窮屈千萬、亞米利加なまりに通ぜざる小生は、會話折節困難、殊に來着の始めは、孟買以上の熱さ、夫れが濟んだら今度は長雨、不愉快な氣候を辛抱せば、楽しみでもあるものなら、まだしもなれども、事實は綿は上る、商賣はなし、ホ、ンに何んたる不運かと思ふの念頻りなりしも、日を経るに従ひ、是迄厭み思ひしこゝが、耳に馴れ、眼になれ、次第に米國風の宜しき點なき、見出し來る心地仕候

表面の米國は結構なれども、裏面は随分如何はしき事多き様にて、是等は世界を通じて同様なる可し、旅の耻かき捨は申すものゝ、テキサスに居る我輩は、兎も角表面の體裁を保たねばならぬ、かき捨て終らずして、我のみならず、跡の人にも影響する譯けで、夫れを思へば馬鹿は出來不申、之れが香港扱ては孟買なら衰へたる我輩にて尙君の雄姿を慕ひつゝ幾分の活動も遣つても見せるがこ大いに感居候、現在を悲觀して耻の搔き捨てども出來る位なら、まだしも耻もかゝず、愚圖々々毎日、單調無味の生活を繰返せる程、衰れるもの無かる可し、其邊哀れみ御思召面白き御通信渴望此事に存候、』云々（大正二年十月十日附）

米國南部に於ける感想

南部生活約五十日にして君は左の如き感想を書いて居る、



大正二年
米國南部多喜
喜多藏又
喜多藏又
於此

『久振りの好天氣、陰雲霽れて秋日和、今日の日曜日は誠に心持が良い、

僕は先達一週間程南部テキサスを山川君と二人で旅行した、先月末より北部テキサス及オクラホマを小林君と（近頃日本より來られた尼崎紡績小寺源吾君も同行）週り歩いた、何處に往くも廣い國だ、山なんぞ見たくもない、處々に町は有る、町と町との間は何にもない云ふても然りだ、此廣漠たる原野には、未だ開かず草茫茫と生へた

儘で捨てある土地が中々多い、耕作地には小麦、棉花や、黍や、果樹が植へてある、不耕の地には牛や馬や、豚なきが無數飼つてある、

此原野でありながら、謂はゞ田舎でありながら、電信や鐵道の交通機關は勿論、瓦斯や氷なき、僕等から見るに、贅澤ミ思ふ程に完備して居る、

假令ば紐育の棉相場の如き、何處に往くも直ぐ分る、町ミ名のつく處は大抵新開地のせいでもあらうが、道幅廣く、又コンクリートで固めてある、自動車は何處にでもある、夫れに乗つて廣々とした原野、西側に樹木の植へてある廣き道を疾走する愉快は、逆でも日本では見られない。

日本の様に狭い國、山川野原ミゴジャ／＼の處では、箱庭的の風景を見るより外ないが、往つても往つても廣き野原、通ふのは百姓が荷馬車のみ野道、サンフラハー其他秋草の花が咲いて居る、平坦の處に空氣は乾燥して居る、ソ、ヨ、／＼吹く風の肌心地能き、東より昇る太陽扱ては落つる夕陽を眺めて居る時の心地は、何んもなく氣が大きくなる、日本ミは丸で趣を異にした日本では見られぬ好感は實に愉快である。

僕も米國には大分馴れて來た、英語も餘程耳馴れた、宿屋に往つてもまごつかぬ様になつた、是れまでの不自由も無くなつた、追ては東部紐育の大都會に往つても大丈夫ミ此頃思ひかけた。

僕の前途は遠い、來月から東部米國を歴遊印度埃及及歐洲ミ中々長い、時折日本も思はぬじやない、去りながら豫定の旅行をせねば歸れぬ身の上、儘よ凡てを忘れて仕舞つた、唯毎日米國人に成つたような氣で暮してゐる、

米國は表面七面倒な國で、裏面は随分暗黒の様である、都會ミなるほぎ、ひぎい様である、

米國は幾多の州に別れて居る、州々で勝手な法律がある、坊主の勢力が存外えらくて州に依つては表面丈けにもせよ、妙な法律がある、其内我等に不便な酒で、テキサスでは毎晩九時半過ぎには、如何なる處でも賣らぬ、殊に此間旅行したオクラホマ州の如き、英語のドライステートミ謂つて、アルコールの這入つた酒、飲料は一切賣らさぬ、一週日の旅、一滴の酒も飲めぬ譯け、ホテルの食堂も皆が氷水で咽喉を鳴らして居る、尤も相手は無し、社員ミふざける譯けにも往かぬ、此不自由が僕に最も良い、眞實飲みたくもなく、飲まず誘拐物もない、社宅で晩に一杯飲むウキスキーが非常の樂みで、身體のよいのも日本の様な不規則な生活をせぬ故でもあらう。

テキサスは空氣乾燥して居る故に、割合に鼻もよいようだ、尤も詰つたら例の醫師さんに洗つて貰つて居る、尤もいびき丈けは止まぬミ見へる、時折之れに失敗する、此間も可笑しいのは、オクラホマからチカシャに往く汽車中である、哩程四十哩もない處だが、オクラホマを出て十哩を往つた、ウキートランドミ云ふ小驛で、エンジンに故障が出来て動かぬようになった、汽關車を呼びに遣る間、汽車は野立の姿、待てミ中々來ない、乗客はボツ／＼苦情を謂ふ、飯時になつて喰ふものなく、食堂車も無ければ皆困つて居る、此間に三時間はたつた、其内山陽式の一等車（晩は寢臺になる奴さ）の一隅で我輩、誰れ憚らぬ高いびき、外人は顔見合はして居る、ボツ／＼苦情を謂ふ奴もあり、色々批評して居つたさうだ、されミ御本人一向御構ひなし、同行の小寺小林君も大に極りが悪くて困つたさうだ、其時車掌の言ひ方が振つてる、此車は寢臺事故、晝寝た處で皆苦情

は謂はれない、併しアノ人は中々感心、獨り退屈もせず、呑氣に遣つてる、アレダカラ肥へられるのだらう、

こサ、

アメリカの南部の田舎汽車は大抵遅れる、又一日に一回か二回しか通はぬ、乗客より荷物が大事、後れても會社は平氣なものさ、

今晚は社員一統スキ、燒の晩である、日曜で外人の下女は居らない、浴衣で極めて氣樂に飯を頂戴する晩である。(大正二年十月五日附)

米國南部農業地の光景が、能く書かれて、アリノミ眼に見へるようだ、君一流の觀察と感想中々に面白い。殊に日中大きな軒聲でヤンキー共を驚かした一喜劇は如何にも振つて居るではないか。

米國南部に於ける獅子吠

大正二年十一月四日君は招かれたテキサス州「フォートウォース」商業會議所定時總會席上に於て大要左の如き演説を試み愛嬌を振蒔く間に衝天の大氣焰を吐き聽衆三百五十有餘の地方實業家に深甚の感動を與へたのであつた、其翌朝の「フォートウォース、スター、テレグラム」『フォートウォース、レコード』『ダラス、モーニング、ニュース』等の新聞紙は争ふて之れが記事を掲載し、中には君の肖像畫を挿入するなご大に日本紳士の體面を擧ぐるに勤めた、是れ實に一私人の面目たるに止まらず時節柄之を大にしては日米國交上多少の貢獻を

なしたこころ思ふ、

『司會者並に滿堂の諸君

私は今夕此の盛宴に列しまして、滯米所感の一、二に就き諸君の御靜聽を煩はす機會を得ましたのは非常に愉快と思ふ所であります、併し何分着米以來三ヶ月経つや經たすの今日でありますから私の本業以外の事物に亘りましては觀察が徹底しない云ふ諷りを免れぬ事を恐れます、

楮當國の富源の莫大なる事に就きましては豫て屢々耳にして居りましたが、今實際其境に臨んで見ますれば餘程最負振りの積りである私の想像を遙かに超越して居る事を悟りまして實に驚くの外ありません、

諸君、諸君の郷土は實に土地廣く物資豊かにして、且人材に富んで居られます、此無盡藏の寶庫を着々開發利用し行かれる諸君の潑刺たる元氣には私は上陸以來深く感心して居る次第であります、此の進取的氣象は米國到る所の空氣に瀰漫して居りますが、此の堡都市には殊にそれが顯著である様に感じます、

西部「テキサス」州は日夜駸々として其面目を革新しつゝあります但し此の堡都市は實に此の經濟的大活動の中心點であるこころを認めます。

私共が其本部を茲に設置したのは非常に仕合せでありました、幸に萬事都合に参り居りますは全く當市實業家各位の厚き御庇護に據るこころ大に感謝の外ありません、諸君にして我が社の存在を許容せらるゝ限り今後共永く當市を去らざる覺悟でありますから此上共宜敷御愛顧を祈ります我が日本は二十年來多少共米棉の

輸入を試みましたが、其先鞭を着けたものが我日本棉花會社であつたことを報ずるを愉快とします、當初は専ら李浦より間接に日本へ廻漕して居りましたが其後直接米國より取寄せることに變遷致しました。

我が日本の紡績は此の二た昔の間に長足の進歩を遂げまして今や二百三十萬(外に五十萬増錘中)の紡錘は晝夜を通じて運轉し、年に約二百萬俵(三百斤入)の棉花を消費するのであります、右の内百五十萬俵は此れを印度、支那、其他に仰ぎ残り四十萬俵は當國より供給を受けることゝ成つて居ります、今後は追々細糸紡績が流行することゝ考へますから自然彼の毛足の短少なる印度棉の消費を減じて次第に米棉の需要を増加すべきにより米棉は數年を出でずして五十萬俵に上ることゝ考へます、即ち此の數量は「テキサス、オクラホマ」兩州の産額を合したものと約一割に當る次第であります、此の兩州は地理上當然日本に對する棉庫の役を勤めて貰ふ位置にあることゝ従來輸入米棉の殆んゞ全部此の兩州より來りしは事實でありまして今後逐年其數量を増加することゝ考へます、

私共が當地へ店を置きました目的は棉の生産者ゝ消費者との距離を短縮せんが爲でありましたが、若し幸に從來の努力にして日本紡績業者並に當地の棉産者諸君に多少共貢獻した所が有れば本懐であります、由來米棉が日本の紡績業者の嗜好に投じつゝ今一息充分に消費せられざる理由は蓋し運賃が割高であることに因るのであります、米國の内地より汽車汽船に依り大洋廻し日本迄の運賃は英百斤一弗三十五仙にして印度棉の日本迄の運賃に比し約四倍に當つて居ります、此の費用が低くなれば夫れだけ米棉の使用高を増加する次第であ

りますから、私共は常に此邊に工夫を凝らして居る譯であります、本年は海運界の不況を利用して汽船二艘を傭入れまして「ガルベトン」より「スエズ」經由にて日本へ直航させることに致しました此の船は十一月に一艘、十二月に一艘我社直買の棉花各一萬俵許を積込んで出帆する豫定であります。

右の問題に重大なる關係を持つて居る事で非常に興味多き重要事件が諸君の目睫の間に展開されて居ります、其れは外でも有りませぬが「パナマ」運河の開通であります、換言すれば東洋との水路に捷徑が出来ることとあります、此れに依つて我日本に此の「テキサス」州間の距離の短縮します結果、運賃の安くなりますのは勿論、惹いては其開通後久しからずして、米棉を満載したる日米商船が盛に太平洋を來往することゝなるであらうと想像します

是れに就きまして今より豫め諸君の御一考を煩はして置きたいとあります、夫れは此の運河の開通に依りまして單に棉花のみと云はず、凡そ何品に拘らず東洋との貿易に絶好の機會が生まれる事とあります、從來對歐貿易は随分巨額に上つて居りますに不拘一方東洋との通商に至つては此の「テキサス」州の人士から兎角閉却せられて居る様であるのを遺憾とします、本運河開通を機會に米日兩國共に義務として十分此の邊の事情を研究して盛に直接通商の途を開きたいものと希望致します。

舊日本が「ペルリ」提督に依つて世界に紹介されて以來米日兩國の親交は嘗て變はらず、通商年を逐ふて盛大に赴きつゝあり、日本は米國の援護を徳として深く感謝して居ります、尙將來一層の親善を希望するより外

は無いのであります。

凡そ國際貿易の成立は相互の利益を基礎とするので此利益さへあれば人種上の問題などは吹飛ばされて仕舞ふのであります、左れば當市の有力な實業家諸君にして、進んで此の運河開通の絶好機會を利用し大に力を東洋直接貿易發展上に致さるゝならば蓋し其効果や豈啻に商業上の利益のみに止まらざるべきを確信します。

終りに臨み繰返へし諸君の御引立を感謝し、併せてフォートウォース市及市民諸君の萬福を祈ります。』

米棉包装の「パッチ」廢止

君はテキサス滞在中、色々米棉の研究を遣つたが、其内の一つは、從來米棉の包装に、八封度位の「パッチ」を各俵に縫着して日本に輸出して居つたのである、是れは要するに米棉の風袋を總量の六分引きとする習慣に則り、棉花業者の利益を保護するの趣旨に出たものであつた。

併しながら能く考へて見れば、態々風袋を重くすることは、直ちに運賃を夫れだけ餘分に支拂はねばならぬ結果になる、又「パッチ」の代金も餘分な費用となるのであるから、風袋引の目方を「パッチ」なしの實量標準と云ふ事に、紡績業者の諒解さへ得れば、何も別に「パッチ」を附着して、無駄な運賃や、無駄な「パッチ」代を支拂ふ愚をなすに及ばぬではないか云ふ君一流の實際論から出發して、段々紡績業者と話を進めた結果、都合克く話が纏つたので、我社は率先して大正三年頃から「パッチ」附着の手數と諸費用を省く事に改めたのであつた、其後同

業者も之れに倣ふことになつた、尤も數年前より見本抜き穴を其儘で積出しては、缺斤が多くて困る云ふ理由の下に、二封度位の小「パッチ」で、見本穴を徹ふことに改正したのである。

一見何んでもないことのように見えるが、之れが年々何十萬否何百萬俵と大量に輸入される米棉運賃の節減と失費の節約になるのであるから、之を積算する中々大した金額を節約する結果になる譯である、君が斯く微細の點にまで注意して棉業關係者の利益は勿論、廣く國家經濟上の利益を擁護するに努めたことは大に多きべきであること信する。

米國東部の巡遊

米棉内地買付の本據フォートウォース市を中心として、滞在約三ヶ月間、君は附近の棉產地一帯に亘り屢々行動して熱心に調査研究を續けた、又日本への直接積出港たる「ガルベストーン」、「ヒューストン」等の連絡状況をも具さに視察したのであつた、君は例の巨軀に汗だくを厭はず棉產地到る處の主なる棉仲買店を訪問しては、色々事情を探究するを怠らなかつた熱誠には、御供をした社員が「へ、へ、へ」になつて大分閉口した云ふ話である。君が斯く苦心して集め得た材料が如何に當時の商略を決するに有力であつたかは謂ふ迄もない。

君は私的生活こそ無味乾燥を、吃いたのであつたが、併し米棉取引上に關する諸般の實地經驗を、十分に體驗することを得て、從來自ら稱して印度製と云つて居つた君が、之れに米國加工を爲し得た事は、所謂鬼に金棒で

之れが將來我社商策の決定上されだけ多大の貢献を遂げ得たかは、推察に餘りある次第である。

君は斯くして米棉に關する智囊を肥やして後、同年十一月五日フォートウォース市を出發し、東部の視察をなしつつ、紐育に向つたのであつた、其經由する處は、「リットル、ロック」「メンフクス」「ニューオリンス」「セルマ」「メリヂアン」「モンゴメリー」「サヴァナ」「オウガスタ」「アトランタ」「シャーロット」「ワシントン」等の都市であつた、忙しき調査を遂げて紐育に着いたのが同年十一月廿二日で、「ヴァンダービルト、ホテル」に投宿、疲れを息めたのであつた。

紐育より印度へ

君は紐育を中心に、費府、市俄古、ナイヤガラ、ボストン等にも足を延ばして、滞在一ヶ月間に調査を見物を遣らうと云ふのであるから、其忙しいこつたらない、君は紐育に着後一週間にして一友人に書を寄せて曰く

『小生如豫定去十一月二十二日當地に安着仕候、近頃は日前極めて短かく、紐育は廣し、愚圖々々する内に、早や一週間經過、而して何等是れぞ見聞したる事無之、氣のみあせり居候、成程 Greater Newyork の自慢せる程有之、萬事豫て聞き居たる以上に、小生如き田舎者の膽を奪ふ事多く、唯々驚き入る外無之候

小生今回漫遊の大目的は、如何にせば最も安全に綿屋の商賣が出来るか、夫れのみ到る處で研究致居候も兎角忙がしく思ふに任せざるは残念、只管焦慮罷在候』（紐育 大正二年十一月廿八日附）



大正二年十二月二十日 喜多又藏・日置保彦 觀瀨川 右側 向

公私多忙の一ヶ月を東奔西走是れ日も足らず活動した後、同年十二月二十四日午前一時當時世界の最大速力船と稱した巨船「ルシタニヤ」號で渡英の途に上つたのであつた、同月二十九日夕、倫敦に着した君は、滞在一日にして、同月三十一日大晦日に佛國馬耳塞に直行、大正三年正月元日同港着翌二日該港發彼阿郵船マルモラ號搭乘、亞丁にてサルセツツ號に轉乘、一月十六日印度孟買に安着したのであつた。

印度視察に約三ヶ月を費し、夫れより埃及に引返し、歐洲を見學して、西比利亞經由六月中、歸朝のプログラムで進行したのであつた、中々の大旅行である。

印度より歐洲及日本へ

一月十六日孟買に着いた君は、ゆつくり息む暇もなく、同月二十六日には印度内地の主なる棉集散地即ち

アコラ、アコート、カラシヤ、オムラワチー、ダマンガム、アルヴキ、ヨートマル、ワルダ、ナグプアー、
 甲谷陀、蘭買往復、ダーヂリン往復、ガヤ、ベナレス、ラキノー、カウンプール、エタワ、アリガ、チャンド
 シイ、ダンダラ、アグラ、デリー、ジエプール、バウナガー、ワドワン、ヴキランガム、アーメダバッド、ブ
 ローチ、パレジ、シユラツト

等約四十五日間を費して、夫々視察を遂げて歸孟したの
 が三月十日であつた。

大正三年三月十日
 印度ダージリン植園に於て
 喜多又藏氏



君は我社の内地設備が各地に亘つて手廣く且つ十二分
 に行き届いて居り、酷熱を物ともせず、日夜刻苦精勵せ
 る従業社員の働き振りを、我社勢力の著しく増進せる實
 状を見て、非常に満足したと同時に、君が明治二十九年
 我社の一出張員として、始めて印度に渡航した當時の事
 を追想して、轉た今昔の感に堪へなかつた云ふが、全
 く感に打たれるの外はない。

殊に同年は豊作の上に、金融關係にて土人商の内地買
 付振はず、内地相場常に孟買市場より割安に仕入れられ

而かも我社出張員都てが熱心努力の結果、レコード破りの大買付を爲し得たる事は、君をして一層の大満悦を感
 ぜしめたのであつた。

大正三年二月
 印度チャンドニ於て
 前列右より二人目喜多又藏氏



大正三年三月に於て
 向つて前列中央喜多又藏氏



君は此上にも良かれかし、今後の計畫を當局者に授けつゝ、同年四月八日孟買出帆の佛船「ヴキンド」

シオタ」號にて埃及に向つた。埃及に約一週間滞在後伊太利「ナポリ」に渡り、羅馬を経て、瑞西に入り、佛國に出で、巴里見物後「ロンドン」に着いたのが五月十三日であつた。倫敦、李浦、「マンチエスター」等に二週間



大正三年印 度スラトツに於て
×印 喜多又藏氏



大正三年孟買に於て
右 喜多又藏氏・左 近藤宗治氏 向つて

を費し白耳義、獨逸に赴き、漢堡「ブレメン」、伯林を歴遊、露國「モスコ」を、六月十五日發、最急行にて、西

比利亞經由「ハルピン」、長春、鐵嶺、營口、大連を経て大阪に無事歸着したのが六月二十七日であつた、梅田驛頭數百人大歡迎の萬歲聲裡に不相變肥へ太つた、日に焼けた——一向疲れた模様もない、ニコく顔の君を迎へたのであつた。

歐米印繪葉書便り

一ケ年間に亘る世界一周旅行中君は到る處で留守宅、親戚、知人等へ數十枚の繪葉書短信を爲すこゝを怠らなかつた、其筆まめな勉強振りには、其繪葉書を貰つた人々の驚嘆措く能はざる處であつた。

其短信は場所々で君の直感を記したので、之れを通覽するこゝ、謂ふに謂はれぬ妙味を掬する事が出来るので、編者の一人に宛てたものを、左に列記して見るこゝにした。

(ガルヴェストン港 大正二、九、十七) 本日當地見物に参り候、米國第一の棉花港、流星に諸設備完全に驚入候、目下碇泊船四十餘隻有之候、是より「ヒューストン」「サンアントニオ」「オーステデン」を経て「フォートウオース」に歸る豫定也

(フォートウオース 大正二、一〇、八) 半解の小生より米國事情を申上候も野暮、其代はりに「ウォールド、オルマナツク」一冊別送致置候間御暇の節御讀過願度候

(大西洋上ルシタニヤ號 大正二、一二、二七) 忙しき紐育にはイヤ、ハヤ、疲れはて候、滞在正味二十日、今か

ら思へば何を見たのか頓ミ考へ付かず、大西洋の五日は良い蹴延ばしにて候、謹で新正芽出度御迎歳を乍蔭御祈可申候

(ラングーシ 大正三、二、十一) 當地安着、一ミ通り見物仕候、僕は當地將來有望ミ思ふ、ローヤル湖より



モナコ國モカシノ大賭博場
町ロカテンモ國コナモ

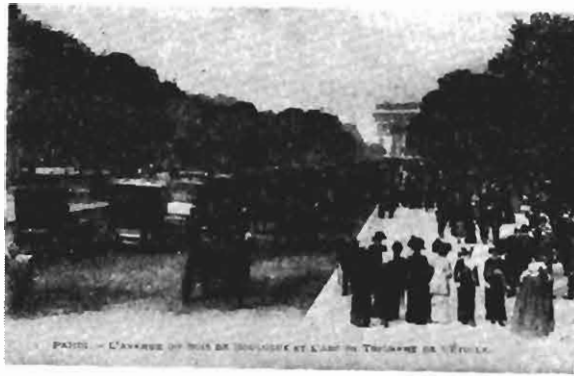
金塔遠景中々宜敷候

(印度ダージリン 大正三、二、十九) ヒマラヤ山麓かに天下第一品、寒い々、ストーヴ焚てるよ、

(印度エタワ、大正三、二、廿六) 木下君の案内で「ガヤ」「ラキノ」「ベナレス」「カウンボーア」を経て當地着仕候、君は此邊知るまいが餘程變つてるよ、

(埃及アレキサンドリヤ 大正三、四、十九) 昨早朝安着、歴山港の十五年間に變化せしには驚入候、氣候思ひの外涼敷、誠に氣持宜敷候、

(伊太利ネーブルス 大正三、四、廿五) 本日安着、當地の博物館大に珍也、明日「ボンベイ」に往く、伊太利は大に變つてるよ、



巴里の午後の六時

(モナコ國モンテカロ 大正三、四、三〇) 此繪は「カシノ」大賭博場の光景也、所謂歐洲紳士淑女も假面を脱けば實に卑敷奴等ぢや、

(瑞西國ルガノ 大正三、五、二) 伊太利より今夕當地着、當スブレンジツド、ホテルは、ルガノ湖畔にあり水清く、山は新緑滴るが如し、昨今藤、つゝじ、あやめの眞盛り、中禪寺にでも来たやうな心地致候、

(瑞西ルサン 大正三、五、四) 實に奇麗な所だ、今や櫻の眞盛り、周圍のアルプス皆雪だ、當ルサンの周圍に圖の如き Funicular Railway 七つあります、明日ヴォルカート本店をウキンタールツールに向ふ積り、

(瑞西ツーリヒ 大正三、五、五) 何處に往つても瑞西は奇麗だウキンタールツールからラインハート君ミ自動車にて當地へ来た(二十哩)向ふに雪のアルプスが見へる、左右には湖水が有る、走る野原には梨、林檎の花盛り、野邊は一面に虞美人草、葦、蒲公英が日本ミ較べてドウデスナミ云はぬ許りの亂れ咲、其間を茶褐色の大きな牛連が牧童に追はれてはハッリハッ、

(巴里 大正三、五、十一)「巴里の午後六時」の光景は圖の通り、
 (マンチエスター 大正三、五、二三) 町は穢いが成程盛んな商工業地だ、
 (リパブル 大正三、五、二五) 是れから愈々東向く、やがて日本だ

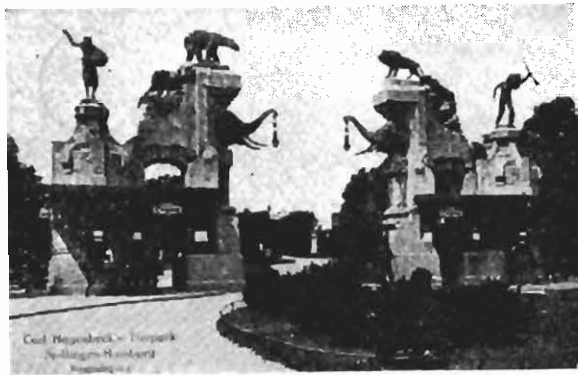
(漢堡 大正三、六、二)

毎日忙しい事である、歐
 洲存外寒い、九時でも明
 るい、皆麥酒能く飲むよ、
 ハーゲンベック動物園存
 外つまらない、

(ミュンヘン 大正三、六、

五) ミュンヘン麥酒は本場
 でなければ分りませう
 よ、寺尾隆一君ご當地で
 面會した、

(イルクツク 大正三、六、



漢堡ハーゲンベック動物園



スイヤリバカイル湖畔鐵路

十五) バイカル湖畔鐵路圖の如し、全部復線の落成は恐らく一兩年を出でざる可し、日本の覺悟如何、モ一暫らくで御目にかゝれる、楽しんで居申候

支店長會議と君の訓辭

君の歸朝を機として、大正三年七月五日各支店出張所會議を開催したのであつた、君の爲した訓辭の大要は左の如きものであつた、

昨年より本年にかけ、天下多事、市場大變調の時也、綿糸價は暴落に次ぐに暴落を以てし、經濟界は殆ど恐慌の様を呈せり、此難局に處し、我社をして時運の奔流外に超然たらしめたのみならず、紡績業者との關係益々親密を加へ、好成績を擧ぐるを得たるは、留守幹部と各店主腦との協力一致、大局に善處せし致す處に深く感謝に不堪、予は約一ヶ年の旅行中幸に頑健、能く其任務を果たし、今日再び諸君と無事相見ゆるを得たるは誠に欣喜の至り也。

予の視察せしは主として米、印二國にして急行列車的なる上、見物もせざる可からずと云ふ次第で、觀察行届かざる事多く、我ながら其不満足を考へ居り衷心慚愧に堪へず。

歐洲は唯見物したりと云ふに止まり、社務上に就き論すべき事少なきも、米印兩國に於ては深き印象を得たり、兩國に於ける我社の勢力愈々大いに、信用の基礎益々強固なるを見たるは頗る快心の至りにして、是れぞ

劈頭第一に報告せざる可からざる處也、是れ一に當局の處置其宜しきを得たるの結果に外ならずと信ず、
 パナマ運河は本年中に開通する豫想にして、米棉取引上に變化を與ふるは勿論なれども、主として地勢上我
 國はテキサス、オクラホマ産棉を使用するは、當然にして、唯從來太平洋廻り海陸連絡運賃高率なるを以てパ
 ナマ運河開通の曉は、是等連絡鐵道は、勢ひ競争の爲め、現行運賃率を、運河經由汽船運賃と其平衡を保つ點
 まで引下ぐる事必定なるべく、自然パナマ運河は、我等に此間接利益を與ふるの意にして、多分該運河による
 輸送を激増するものにあらざるものゝ如し、何にせよ運河開通の爲め棉花原價の低下するゝは無論にして大い
 に慶賀の至り也、

印度にては内地出張所の全部を視察し、遠く蘭貢にも足を延ばせり、印度棉は本年稀有の豊作なりし上、土
 人銀行破産し、金融逼迫の爲め、土商の買付非常に減じ、内地相場は孟買より安く、我社内地買附の激増を見
 るに至れり、内地にては我社のみならず、他店日本人も多數の買付を爲せるを以て、日本人に對する感念に、
 好變化を誘致したる爲め、到る處大歓迎を受け、實に愉快を感じたると同時に、内地に於ける我社の勢力の意
 想外に發展せるに驚けり。

埃及は十五年目に行けり、第一に感じたるは、英國が少年月の間に、能くもあれ丈けの改善を施したりと云
 ふ事也、「アスアン」に大規模の DAM を建造し、棉產地擴張と棉の生産増加に勉め居り、其發達驚くべきもの
 あり、近時此種「ダム」の擴張計畫ありと承知せり。

今後我社營業方針として特に言ふべき事なく、唯從來方針を一層健實に確守することを希望するのみ也、年
 により事情を異にするも、各地に多數の支店、出張所を有する我社の方針は、常に周囲の情況に應じ、最も安
 全と思はるゝ範圍内に於て飽迄漸進的積極主義の行動に出で、決して消極退嬰的に出づるを許さずと知るべ
 し、云々

歐洲大戰の爆發と善處

歐米亞五萬哩の大旅行を済まして、六月二十七日歸阪の後、一ヶ月半またゝぬ間に、歐洲大戰争が爆發して世
 界を震撼したのであつた、全く足元から鳥の立つ如き不意打を食つた世界人の狂驚は無理もない事であつた。經
 濟界の周章狼狽の様は極度に達した、何にもかにも慘落に慘落を重ねるのみであつた、棉花は僅かの間に百斤十
 二圓以上、綿糸は一俵三十圓方の棒下けで惨めなものであつた。

棉花の暴落は戦争の爲めに英國と歐洲大陸の需要閉塞氣構への爲めであつた。

日本としては獨逸が青島を租借して頑張つて居る關係上、東洋の天地も平穩安閑たるを得なかつた、戦事保險
 の必要が起つて來た、荷爲替取組みも銀行が躊躇し出した、何やかや次から次へミ面倒な問題が捲き起つた、自
 ら貿易は一時休止の外なき有様であつた、商品は益々慘落するを免れなかつた、此混亂不安の時期に際して貿易
 業者の立場は頗る苦境に置かれたのは當然の事である。

殊に對支關係は日支政治懸案解決後の纏れで、大正四年支那各地に起つた日貨ボイコットの爲めに甚だしく惡化を免れなかつたのである。

併しながら、歐洲大戦争による本邦への影響は、最初豫想した程の事もなく、我國が聯合國に加擔して、青島の獨逸根據を破壊陥落し、支那海に於ける制海權を掌握した事によつて、東洋の不安を除去し海運の危險一掃されたため、排日ボイコットにも不拘、綿糸及び綿製品の支那輸出の増進を告げたるに、歐洲向き軍需品取引の激増を見たるに加へて金利安による株式及米價の漸騰するあり、紡績、造船、海運、染料、鐵器械等の工業及び貿易も非常の利益を擧げ得るに至り、惹いて國際バランスも同年末の出超一億五千萬圓に上るの順境を呈し、爲替決濟の困難も漸次緩和されたのであつた。

要するに歐洲大戦の突發は、最初一時大いに人氣を沮喪せしも、間もなく意外の好影響を受くるの立場に變じ、大戦が永引けば永引く程、我國としては漁夫の利を占め得べき好位地に導かれたのであつた。

機敏なる君は、絶へず大勢の趨く處を見見洞察するに努め、以て機宜の對策を定むるに専念した、大戦中幾多の難關に遭遇したのは勿論であつたが、能く之れに善處して、大過なく業務の進捗を期し得たことは、全く君の深慮遠謀畫策其宜しきを得た爲めであつた。

紐育棉花取引所閉鎖と君の豪膽振り

まさかと思つた歐洲戦亂が、多くの人の豫想を裏切つて、突如其幕を切つて落すや、世界經濟界は忽ち一大修羅場化したのであつた、殊に最も密接の關係を有する米國市場の混亂は實に名狀すべからざる觀があつた、紐育棉花取引所の如き滔々激落して、七月三十一日に至りて閉鎖を餘儀なくせられ、十仙半にて納會の慘めさであつた、

閉鎖當時取引所に於ける建玉は、恰かも季節に入る前だったので一般に多く、閉鎖後其建玉減少につき種々の方法が講ぜられたるも所期の効果少なかつたので、愈々最後に「コーボレーション・シンデゲート」が組織され種々の困難を排して遂に紐育の十五銀行より百五十萬弗の資金を借入れ、投機的性質の建玉全部を九仙にて、「コーボレーション」にて買取り、七仙半迄の危険を「コーボレーション」に於て負擔し、七仙半に下る事ありし場合には、直に七仙半にて他の「シンデゲート、ムムバー」は各取引申込割合を以て「コーボレーション」の残玉全部を引取る事になつた、斯く準備萬端を整へて漸く十一月十六日に至り再開する事になつたのである。再開の結果に就て、相當憂慮されて居つたのであつたが、存外好結果を得て、市場は始めて平時の状態に復歸したのであつた。

我社としては歐洲戦争以前、相當多額の新棉取引が出来て居つた關係上、之を紐育やニューオリンス取引所に

買繋いであつた、それが戦争開始と共に激落を告げて、相當追證據金を送つて居た矢先、取引所閉鎖に遭遇、現物も亦大瓦落を爲し買手皆無き云ふ慘憺たる光景を呈した、此時の我社の定期値下差金實に〇〇萬圓以上の巨額に上り、萬一、紡績會社で荷受けして呉れずば、さうなる事か心配されたのも無理からぬ事であつた、一方紐育の定期ブローカー等は我社の建玉に對し値合金を執拗に請求して來て、其應接に違あらざる程であつた、紐育出張所の當局者は頻りに氣をもんで本社に訴へるのであつた。

此時に當つて君の採つた態度は泰然自若斷然ブローカー連の要求を拒絶し、頑として動かなかつたのである、君の理由とする處は

『取引所は今閉鎖して居るではないか、閉鎖中には公定相場の有りやうがないではないか、公定相場の無いものに値合金をさうして要求し得るか、要求の出来ない性質のものに、我々は應ずる義務がないではないか、「コーポレーション、シンヂゲート」は勝手に相場を作つて居るので、何にも取引所の作つた相場でないではないか、便宜上に作つたシンヂゲートの相場なるものは、何等取引所に於ける行爲を左右し得る権能の有り得べき筈はないではないか、我々は斯る不合理なる要求には斷然應ずる事は出来ぬ、我々としては取引所が再開して公定相場を建てさへすれば何時でも差金支拂ひの用意を有す』

難局にあつたブローカー連は、我社の強硬な態度に面喰ふと同時に多大の不滿を抱き、非常の劍幕を以て我社出張員に迫り、難詰して止まず、果ては我社の信用を傷つくる如き不謹慎の言動を敢てするに至つた。

之れが日本に傳はつては、反對商の乘する處になつて盛に悪聲を放ち中傷するので、新聞や輿信所にまで怪しまれる云ふ始末で、君の態度に對する批難攻撃も、我社信用の疑惑もは、實に言ふ可からざる苦しい立場に置かれたのであつた。

併しながら君は毅然として此難關の打開に身命を賭したのであつた、取引銀行や得意先に對して、己れの信する處を開陳して充分諒解を得るに勉め、ブローカー連の横暴を壓迫に對して、最後迄自説を固守して斷然譲らなかつたのであつた。

斯くして十一月十六日再開に至る迄對抗の儘打過ぎたのであつたが、再開後の市場平時に恢復するを俟つて、漸く圓滿解決を見るに至つたのであつた。

君の當時に於ける態度は、紐育に於ける棉花取引所仲買の巨頭連を向ふに廻しての大芝居を打つた譯で、豪膽斗の如き君でなくば到底演ぜられぬ藝當であつて、今尙紐育の昔語りになつて居る、云ふ事である、

貿易會議と感懷

大正三年十月、時の農商務大官大浦兼武子は、時局に際し貿易の發展を期し及我商品の聲價を發揚するの方策に關し

一、貿易發展上、金融交通其他に於て障害を認むべき事項並其救済方法如何

二、東洋、南洋、濠洲、米國、其他交戰國以外の諸國に對し、我貿易を擴張する方法如何

三、貿易の好況に伴ひ發生の虞れある粗製濫造及賣崩の弊害矯正の必要ありと認む、其方法如何の諮問を爲す爲め、全國知名の實業家廿六名に對し十月七日農商務省に參集を促したが、當時君も大阪方面五名中の選に入り此貿易業者諮問大會に出席したのであつた、丁度三日間に亘つて論議され、君は堂々其蘊蓄を傾けて意見を吐露したのであつた、歸來君は所感を述べて曰く

『色々他の人の意見も傾聴したが、餘程立場々々に依つて觀察が丸つ切り違つて居るやうに思つた、特に感じた事は帝都に近い處の人々は、政府とか政黨とかの人々に關係して、只金を儲ける位の事で、自分の思ふ事を十分言ふ事が出来ない、矢張商賣となるに、阪神の方がえらいと思つた、帝都なり、名古屋なりの人は、ドウも Trade に云ふ觀念が薄い、阪神の人は世界を相手に商賣して行つて、自分の腕で自分の幸福を作り上げて行かうと云ふ意がある、夫れから、爲替、保險、交通、電信等につき色々意見を徴せられたが、皆んな今日の状態で結構であるに云ふやうなのが多数だつたが、實際の處我々商賣人は現に保險等に大いに不便を感じて居るやうな譯けで、斯る見解の相違を見たのは遺憾であつた、』云々

君が夙に實力主義に立脚して活動し、官憲や政黨なきの威力を借りやうなきの他力本願主義を排斥した事は、前に記述した通りで、今回の貿易會議に於ても矢張此見地の下に何等憶する處もなく、自分の思ふ處、感じて居る處を、堂々述べて、一般の視聽を惹いたこの事であつた。

戦時保險補償法案に對する意見

歐洲大戰の結果として、我政府は外國の例に倣つて War Risk Indemnity Act 即ち戦時保險補償案を公けにしたのであつたが、君は之れに對し三つの缺點を指摘して政府當局に提言する處があつた、

第一 若し此保險の附けてある貨物に危險があつた場合に、其保險金は何時拂はれると云ふ事が明瞭でない事
第二 事件の種類に依つて保險會社と政府とが見解を異にする場合に、果して保險會社が補償法案通りに政府から保險金の支拂を受ける事が出来るか疑問である事、

第三 此補償法案は保險會社が辨金を支拂つた後、政府が正當であるに認められた時に、保險會社へ補償金を支拂ふものであるから、若し政府が補償して呉れぬ場合は、其辨金の返戻を荷主に請求する場合も起つて來るので、其間多少の危險が伏在するに云ふ譯で、外國の保險會社や銀行は其保險狀の効力を認めない事斯る實際的の批判は、君の平素の經驗に立脚して居るので、頗る緊肯に當るものであつた。

南北支那の視察

大正四年四月二十九日約二ヶ月の豫定を以て南北清視察の途に上つた、先づ門司より西京丸に搭じ、五月五日

青島に着いた、當時偶々對支外交關係は所謂廿一箇條問題の交渉行詰により事態頗る急迫を告げ、今にも國交斷絶の破目に陥らんとする矢先であつたのであつた、斯くて五月七日には愈々最後通牒が發せられた事を知つた君は、北清を最初に視察するの豫定を、急に變更して、五月八日青島より榭丸で上海に南下したのであつた、上海に着いたとき、其前日の五月九日に幸に廿一箇條の調印が無滞濟んだと聞いて一と安心したのであつた、勿論支那人側は相當物情騒然を免かれぬものがあつたが、兎に角一週間滞在、視察に内外紳士との交驩を果たし、五月十六日平野丸にて香港に向つた、廣東方面をも視察後、同二十七日靜岡丸にて香港出發再び上海に引返へし、夫より長江沿岸を廻りて六月七日漢口に着、數日間忙しき視察と交驩に費して同十二日鐵路北上、北京天津を経て大連に出で、六月二十日の嘉義丸で歸朝の途に就き六月二十三日、五十六日目に無事歸阪したのであつた。

日支懸案の解決は表面喜ぶべきに似たれども、納まらぬのは支那の民衆で、屈辱外交として民心動搖、各地排日の風潮を誘致するの止むを得なかつた、漢口に於ても五月十三日暴徒蜂起、在留邦人に多大の損害を與へ、越へて同十八日には同地の我社工場内に暴徒の一隊闖入して狼藉を働くなき、在支の我社支店、出張所は相當不安を感じ居る際、君の親しく現地視察に逢ひ、非常に心強く感じたと同時に、將來の善處方針の指導に預るを得たので、益々會社の爲め、國家の爲め、萬難を排して我社の支那經營に奮闘せん事を誓つたのであつた。君自身排日區域を親しく巡視激勵に勉めた其心事に對し、部下一同が水火を辭せず身を抛つて最善を盡すべく感奮興起したことは、誠に故あるかなと思ふのである。

日信紗廠の賣却

明治四十一年上海支店蹉跌以前に、得意先の支那人と九成紡績と云ふ小紡績を、合辦經營したのであつたが、當時整理に當り、支那人の持株を我社に買収、之を日信紗廠と改稱、我社一手の經營に移して數年を経過したのであつたが、何分總錘數九千六百錘の小紡績なる上、其機械の半數は古機械であつたので能率上らず、之れを改良擴張せんには多大の資金を要し、我社としては棉花綿糸の本業に要する資金の夥しき折柄、紡績改良資金に多額を注ぎ込むことは、理論上、將た經營上よりするも得策でないのみならず又得意先たる紡績會社の感情上より見るも採る處でないので旁々大正五年二月を以て、之を支那人祝蘭紡氏に賣却したのであつた。

當時上海には邦人經營の紡績は其數極めて少なく、日信紗廠以外には内外綿會社あるのみであつた、尤も三井經理に係る上海紡績と云ふのがあつたが、是れは支那人と英國人の株主により經營せられたものであつたから、邦人經營のものは云ひ得ない、此時頃から東洋紡績、尼崎紡績等が分工場設置計畫中ではあつた。

我社が明治四十年頃、上海に於ける紡績業の有利に着眼し、事業を開拓したことは、慥かに君の一雙眼であつたと言ひ得やう、唯上海支店蹉跌の不幸により、充分其利益を獲得するの設備を充足するの機會を逸して、之をムザク、支那人に讓渡するの外なかつたことは、事業家たる君の立場として、少からず残念に思つた事であつた。

テキサス日本綿花會社の創立

我社の米棉産地直買機關としては明治四十三年新棉季に於てテキサス州フォートウォース市に置いたのが始めて、爾來我社出張所として直接買付けに従事したのであつたが、日本會社支店として彼地に於て登記すれば、税金其他訴訟上に不便不利が少なくない理由の下に、大正五年三月之れをテキサス州法によつて、一獨立會社に組織を變更し、資本金米貨拾萬弗とし、名稱を The Japan Cotton Trading Company of Texas 即ちテキサス日本綿花會社と改稱するこゝになつた、其株式全部は我社之を所有し、表面上別個の會社なるが如きも、其内實は從來の出張所と何等變らず、唯取引に關する諸帳簿其他之を全部更新して新獨立會社と取引するこゝになつた譯である、我社のテキサス州に於ける勢力は三井、江商等と共に地方人より夙に注目を惹いたものであつたが、歐洲大戰の進捗に連れ、從來歐洲より東洋、印度、南洋方面の廣大なる區域に供給した綿製品が、歐洲よりの供給閉塞の結果として日本より其補充を仰ぐ事となつたので、日本紡績業は頗る好調となり、原料は高値を厭はず買進むテ、狀況であつたから、米棉取引高の如き未曾有の活況を呈し、我社は勿論他の日本商社も、大活躍をなすに至つたので、大正五年度に於ける成績は刮目して見るべきものがあつたのである、果然テキサス州の日本各商社の活動に對する世評は囂々たるものがあつて同年十月二十四日フォートウォース、レコード新聞に左の記事を載せた程であつた。

『十月中此地方に出廻つた新棉の殆ど全部を日本商社は買渡へた、店員一同夜を日について働いて居る、土曜の夜も、日曜の夜も、娛樂せず況んや日曜日の日中は無論大車輪で働いて居る、綿は十九仙半のレコード振りを示して居るが、日本商社は能く需給の状態を承知し、まだ、ズン、騰貴するを見て、怯めず臆せず買進み、歐米紡績業者の鼻をあかして居る、日本は世界綿製品製造國として第一流に伍せんの大抱負を持つて居り、同時に米棉の一大消費者たらんに冀つて居るのである、加州でも日本人は大發展をやつて、一大勢力を握つて居るのは事實である、彼等は到る處周囲の環境に順應して、どんな事でも遣り遂げる弾力性の持主である、何んぞ驚くべき、賢明な商賣上手の褐色人種ではあるまいか、御用心々々』云々

二段抜きの記事を掲げて驚きもし、怯へもし、幾分嘲けり氣も見へる、一體米國人は何んでも世界一を誇りたがる己惚根性の強い人種だけに、他國人のえらい處を見せ付けられると、何んだか自尊心を傷けられるやうな氣になり、癢にさわつてたまらないので、相手を抑へやう抑へやうにかゝる、加州の日本人發展を見ては未だ恐ろしく感じて、移民法の制定なきをやつた、日本が滿州と握手しやうとするに、不戰條約なきを盾に、日本を抑へやうなき試むる、要するに自分の優越感を維持したい許りの仕業だ、日本商社がテキサス棉花の買付けに大車輪だからとて、こんなに新聞紙が大がりで騒ぐもないものである、又當時テキサス州では

‘Johnson grass, Jimney and Japs are taking the country (Texas.)’

(テキサスにはびこるものは、しこ草と、乗合自動車と、日本人だ)

なご巷間では、はやしたものである、ヤンキー氣質が能く現はれて居ると思ふ。

五百萬圓に増資す

我國棉業の發達に連れ、我社の業務も愈々發展を辿り、到底從來の資本金貳百萬圓にては時勢に順應するの施設を爲し難き事情に因り、二倍半の五百萬圓に増資すべく大正五年六月二十四日の臨時株主總會に諮り、満場一致之を可決したのであつた、當時總會の議案に示された増資理由

『追年我國棉業の發展に伴ひ、我社棉花綿糸及綿製品等の取扱高亦著しく激増し最早從來の資金にては不充分たるを免れず此趨勢に應ぜんが爲め更に諸般の改善施設を要するに益々資金増額の緊急なるを信ず』
と云ふのであつた。

明治三十九年七月資本金百萬圓を二百萬圓に増資後、丁度十年間を経過して今回五百萬圓に増資を見たのである、此間明治四十一年上海蹊蹠事件の突發により、一時我社の存廢を議せられたる程の苦難時代に遭遇したるに不拘、能く此難關を突破して却つて其事件後八年にして此増資の吉祥を見たことは、主として君の敏腕の結果によりたる事を疑はないのである。

船場支店の開設

資本金も愈五百萬圓に増資が出来たので、業務擴張の第一歩として、内地向綿糸布及び朝鮮、臺灣向綿糸布賣買を專業とする船場支店を、市内東區南久太郎町二丁目の所謂糸屋街に大正五年七月一日より開設したのであつた、其後業務が次第に發展の緒に就くと共に店舗増築の必要を感じ、之れが完成を俟つて、大正七年五月一日より増築事務所に於て、營業に従事するに同時に、從來本社内に於て取扱つて居た輸出向綿糸布一切並に輸出絹糸をも從來の内地向と併せて全部之れを同支店に於て取扱ふ事にしたので、爾來、船場支店は綿糸綿製品の大手筋として斯界に重きをなすに至つたのであつた。

副社長に當選就任す

我社の業務は年を追ふて擴張せられたので之れが統率の便宜上新に副社長を置くを可なりとし、大正五年六月二十四日の臨時株主總會に諮りて定款中に副社長を置き得ることに改正したので、其當日直ちに副社長を取締役の互選により選出したところ、君は全員一致を以て副社長に當選就任したのであつた。

此結果從來君の統督して來た一切の業務の内、營業方面の事を山田常務の直接監督に移し、君自身は主として日常の總務一切、金融關係及關係諸會社の事務並に社交方面の事を管掌分擔する事に定めたのであつた、無論君は營業の事についても大局の指導を吝まなかつた事は申す迄もないのである。

爾來君は餘力を我社以外の諸事業にも及ぼし、同時に幾多社交方面にも活躍し得る便宜を得たので、君の多忙

な生活は、此時頃より一段ミ繁忙を加へ、同時に我社は益々榮へ、君個人の信望も亦相連れて、愈々向上するに至つたのであつた。

我社株券の騰貴と自省を促す

大正五年六月上半期決算は、我社創立以來レコード破りの利益であつた、そこで普通配當一割五分の外に臨時特別配當一割五分合計三割の配當をしたのであつた、畢竟歐洲戦争の好影響を受けて、紡績業の發達に連れ我社取扱綿糸布の海外輸出も相當有利に行ふこゝが出来た爲めに外ならぬ、而して我社は此機に乗じて五百萬圓に増資を決定する事になつた、旁々我社の存在も相當世人に認めらるゝようになつて、五十圓拂込の株券が同年七月始めには、二百五、六圓の高値に騰貴したのであつた、君は之を見て内心喜びに堪へないミ同時に、亦自省の念を忘れなかつた、即ち同年七月七日我社内の講演會席上で左の如く社員を警めたのであつた、

『一體人氣ミ云ふものは妙なもので、少數の人に知られる許りでは、株の如きものは、上る事が非常に困難である、然るに世人一般が之を認めるようになるミ、忽ちにして大に騰貴し、それが當然の騰貴以上に上り過ぎる事がある、之れは即ち世間の買被りであるが、我社の株の値の上つた事なごも、此買被られたこゝを免れな
いかの感がある、例へば増配の如きも臨時特別のもので、後期に至つてさうなるか分らない、又考へようによつては株の値の高くなつた事は即ち會社が世間から買被られ、重役が買被られ、更に社員諸君も亦買被られて

居る事だらうミ思ふ、乍併世人が考へて呉れる程吾人は値の有るものでせうか、自分で自分の事を考へて見て、社會から買はれて居る程の價に相當するものミ思ふ事が出来るでせうか、於茲予は諸君に申上げたいです、ごうか爾後は大に自己を反省し、内容の充實をはかり、相互に責任を以て秩序を亂さずして「デスチネーション」に向はれたいものだミ思ひます、予は近き未來か遠き未來かは分らないが、兎に角此大に買被られた事に報ひるよ様に、此買被られた事實を後に至つて矢張買被つて居たのではないミ、世人から思はれるよ様に、此際緊禪一番大に努力し二百五、六圓を投じて株を買ふ人々をして、永久に喜ばしめるよう、したいものミ思ふのであります』云々

日本綿花週報の發刊

専ら内地向綿糸布取扱ひの目的を以て開設した船場支店としては、内地各地方に散在せる多數の御得意先に對し、原棉及製品の成行を詳報して其参考に資するの必要を認め、大正五年七月一日を以て其機關として『日本綿花週報』菊倍版四頁物を毎週一回發行して配付するこゝにしたが、これは從來他の同業者中で出して居つた單に相場附けに類するような淺薄のものでなく、相當力を入れた權威あるマーケット、レポートであつたのである。此編輯については君は常に係員を督勵して懇切に指導を吝まず、時々しては自己の抱負は勿論、時々重要な時事問題に對して堂々意見を紙上に述べ斯業者の参考に供したのであつた。

斯くて此小規模なる週報も次第に當業者方面に重寶がられ、六頁より八頁に發展し、永く大方の愛顧を受くるに至つた。

我社の All one 主義

君は能く我社の各店一致 All one 主義の必要を折に觸れ、時に臨んで鼓吹した、大正五年の秋當時富士瓦斯紡績社長和田氏が支那視察に行かれたとき、我社各支店の働き振りが、同氏の目に留まり、歸來此事を第一に君に話されたので、君も心から大に嬉しく思つた、そこで大正五年十二月四日社内の講演會で、左の通り述べ、益々我社各店協力勤勉の實を示したいと希望したのであつた。

『先般和田氏は或る特殊用向を帯びて上海に行かれたが、夫れは不成功に終つたらしい、其序に漢口、北京、天津を廻つて先頃歸朝された、歸られるに直ぐ我大阪本社に立寄られたが、生憎拙者上京中であつたので、東京に着かれるに、又直ぐ私を招かれて言はれるには、流石に日綿の支店は何處に行つても能く遣つて居るが、殊に漢口支店では感心させられた、自分が朝早く日綿の店に出掛けるに、支店長以下皆がサツサ、事務を遣つて居る、其處で用事を済ました後他店に行つて見るに、まだ誰れも出勤して居ない云ふ有様である、夫れに日綿支店は支那人街の相當不潔な處に置かれてあるに不拘、社員は少しも不平がましい風もなく、眞面目にせつせと働いて居るのを見て、流石は日綿だ感心した、これでこそ競争場裡の勝者たり得るのだ、君は良い

部下を持つて羨ましいこの話であつた、私は此事を聞いて實に何んにも云へぬ嬉しき感激を覺へたのでありました。

豫て我社は All one 主義で、同心協力奮闘するの美風を養つて居る次第であるが、是れが和田氏の眼に映じたのは、當然には云へ誠に嬉しく感じます、我社各店が此 All one 主義を永久に持續する精神さへあれば我社の基礎は全く大磐石であらうと思ひます、そこで今期の成績も引續き良好で仕合せですが、將來益々隆盛に遣つて行くには、何うしても此主義が最も大切な事で、我社も過般増資を遣り、未拂込株金もあり、積立金もある、段々資本が豊富になるに共に事業も大に發展せねばならず、一方棉花綿糸の前途は益々多望であるから、其間に處して着々進んで行くには、何うしても此 All one 主義でなくてはならぬ、此意味からして我社は我社の一定主義の下に社員を子飼ひし、能く其主旨のある處を始めより呑み込みしめ、所謂棉花型にはめたい云ふ考へなので、従つて假令他所に居つて何にか一藝覺へて居る人でも、之を社員に採用する事は出来る丈け避ける方針を取つて居るような次第であります、それだから青年社員には始めから多きを望まず、否手習料を出して見習ひをやつて貰つて居る積りである、そして漸次熟練して行く内に知らず／＼根強く棉花主義に固め、有用の人材に作り上げる方針を探つて居る我々の考へを申上げ、和田氏の話に關連して爰に諸君の御諒承を願ひ置く次第であります』

君の人材養成主義は眞に會社も榮へ社員も伸びる云ふ共存共榮の本旨に合致するもので、兎角近頃の世相が

自分は月給だけのこきを働かさへすれば、それで義務終れりとするような勤勞階級者を往々見出すこは邦家の爲め慨嘆すべきこきで、こんな事では駄目であるこ君は夙に此弊害を見抜いて如上の如き方針の下に、絶へず社員を鼓舞激励した所以であつた。

南米進出と君の機敏

歐洲戦争の長引くに連れ、我邦の海外貿易は益々振興したのであつた、我邦商業の中心たる大阪も歐洲大戦以前迄は朝鮮、支那、臺灣位を相手とするのが、一般商人の關の山であつたものが、歐洲大戦後、歐米人の競争に忙がしく、對外貿易に手廻り兼ねる虚に乗じ、漁夫の利を得るの立場に置かれた我邦人は、個人商店云はず一舉世界貿易へ立ち上がったのである、夙に世界貿易に留意實行し來つた我社として、人後に落ちざるの進展を企つべきは當然である、果然君は大正六年の劈頭南米進出を窺かに決行したのであつた。

之より先、濠洲羊毛は軍需品の關係上、他國への禁輸となつた、濠洲羊毛を唯一の原料と仰いだ當時の本邦毛織會社の困惑は一と通りでなかつた、之を見て取つた君は南米アルゼンチン産の羊毛輸入に眼を着けたのである。當時我海運業も世界的に發展し南米航路の開始さへ見た折なのである。

我社は當時羊毛の取扱は着手してゐなかつた、併し我邦の毛織工業は將來必ず大に發展すべき運命にあり見た君は、此際羊毛取扱開始をなすの好時機なりと信じたので、大正五年の暮急遽議を決して翌六年匆々社員を

北米經由南米に急行させたのであつた。

當時正月休みを箱根宮の下奈良屋に滞在してゐた君は、左の書面を南米出發途上の大岡社員に寄せたのであつた。

『旅券も心配なく下附愈明日遠航の途に上らるゝ由拜承同慶に不堪候、小生は不取敢横濱埠頭まで御見送申上候後歸阪の積りに御座候、前途中々長の旅也幸ひに一路平安七、八月頃又々御機嫌克御歸還梅田に再會今より相待可申候、今回の御渡米唐突の際取極め候様なれども豫て南米計畫を夢み安井君を特派し爾來機會の至るを待居るの際偶々笠戸丸の初航吾人の決心を促し、羊毛に第一着をつけたしこの覺悟を定め、併せて豫て懸案たる漢口桐油の米國に於ける需要の將來に關する取調べを執行致し候次第、而して我社の着手如何一に貴兄の斷定的報告により相定め度積り、何卒其御考へにて行路各地にて十分得心の往くだけ御取調相願度、尙羊毛は試験的の買積みさへ實行の決心なる事先達申上置候通りに有之、自然其結果存外多額の損益に關係ある次第に有之候間使命重大と御舎の上可然御善處相成度候』云々

大正六年一月四日 宮の下にて 喜多生

時は猶獨逸の武裝船が南米東海岸の沖に出沒して、聯合國の汽船を脅かし、同航路の危険夥しかつたので、社員は萬全を期し紐育より巴奈馬運河を通過して南米西海岸を智利に南下し、智利よりアンデス山脈を越へて亞爾然丁に急行したのであつた。

プエノス、アイレス府に到着するや、逸早く羊毛の買付に着手した、又ウルゲイ國産の羊毛にも手を着けた、斯くして買取つた羊毛數千俵は大坂商船の直航船によつて日本輸入の先鞭をつけたのであつた。

日本の毛織會社は毛布其他の軍需品製造に追はれながらも、原料不足を啣つてゐた折柄であつたので、君の計畫は正に其圖に當り、數十萬圓の巨利を博するを得たのであつた。未だ何等の經驗を有せずして取扱開始の劈頭此好成绩を挙げ得たことは全く君の機を見るに敏なる商業的巨腕の賜であつたのである。之れにつけても、そゝろに思ひ浮ぶごころは昔し紀の國屋が紀州より海路蜜柑船を仕立て、江戸上りを敢行した機敏と勇氣、そして一舉大儲けをやつた故事の似通ひである。

志方社長の辭任

同氏が我社に役員として關係を持たるゝに至つたのは、明治二十九年一月十七日であつた。入社された當時は創立後五年目で成績も未だ思はしからず、創立以來の損失は拂込資本金貳拾萬圓に對して十三萬一千圓に上つて居つた。當時池田仁左衛門氏が常務として整理の局に當られたが、事甚だ困難で、僅か一ヶ年にして辭任されたのであつた。同氏は其後を享けて等しく常務として、田中市兵衛社長の下に盡力下さつた譯けで、同年夏には視察と取引先の調査を兼ねて遠く米國に使ひされ、豫て取引先の懸案を解決し、又新に確實なる取引先を定めて歸朝された事情については前に記した通りである。卅一年十月田中社長の辭任と共に氏も亦常務を辭し平取締役

なられ、越へて三十六年上海支店の新設に際しては、其要務を帯びて上海に赴かれたのであつた、而して四十一年上海支店の失敗より、我社が大損害を蒙り最も悲境に沈淪したる際、田中市太郎社長病死の不幸に遭遇し、我社の前途混沌として、世上にては今にも我社の破産か自滅か取沙汰ある程の慘めさであつた時、田中市兵衛氏が敢然再び老軀を提けて社長の重職に就く事を肯んぜらるゝや、氏亦奮然として立ち、再び常務就任を快諾し、老社長を援けて難局に身を投ぜられたのであつた、此鬱勃たる意氣を以て、當時支配人として令名あつた君が能く心を協せ、一意社運の隆興に精進された結果が、克く頽瀾を未倒に廻らし得て、隆々たる社業の建設に成功されたのであつた、之を當時より回顧すれば其恢復の行程餘りに迅速且つ鮮かで、殆ど奇蹟とも思はるゝ事蹟であつた事は、所謂天祐の然らしむる處とも謂ひ得べけんも、而かも志方社長の功勞亦多大なりし事は言ふを俟たない事である、我社として此大恩は永く忘る可らざるものと思ふ。

然るに同氏は大正六年五月十九日を以て後進に途を開きたいとの理由で突如辭任を申出でられたのであつた、當時の我社は幸に基礎も鞏固で、同氏辭任の爲めに會社の信用に影響する事もなかつたので、重役會に於ても快く之を容るゝ事になつた次第である、尤も同氏は相談役として引續き、會社の重大事項に關與し下さつたのであつた。

全
盛
時
代

全盛時代

(自大正六年
至同九年)

君の日本綿花社長昇任

大正六年五月十九日我社志方社長の辭任を見るや、之れが後任社長につき六月五日重役會互選の結果、君選ばれて社長の任に就く事となつた。

君は入社以來二十有三年にして、社長の重職に擧げられたのである。此間に於ける波瀾重疊の歴史を顧み、如何に君が苦心慘愴せしかを思へば、其今日あるは當然過ぎる程當然である。

越へて六月九日、君は我社支店長會議席上に於て述べて曰く、

『志方社長の後任として不肖其任に就く事になりました、自分は此身に餘る重任を引受くるに至つたのは、一同僚諸氏の懇切なる同情によつたので自ら確信ある譯ではない、一方に於て有力なる同業増加し競争は益々劇甚となり、他方に於ては所謂成金連の活動あり、此間に於て歐洲戰爭は何時終結を告ぐべきやも知れず、斯界は波瀾重疊前途の成行逆路し難い状態に置かれて居り、果して能く其任を盡すを得るやを疑ふ、而かも此重任を引受くるに至れるは、重役諸氏、社員、得意先等の愛顧により、全く同情の致せる處で、此同情により

何んさかして、會社創立の趣旨に背かぬよう、又得意先の同情に悖らぬよう、成るべく諸君の意見に聽き、事に當る考へを持つて居るのである、此意味に於て今後諸君に於ても遠慮なく意見の開示に預りたい。

重役間にも申合せたのだが、今後は申す迄もなく、何事も一層綿花式に悖らぬよう、十分の注意を以て精力の續く限り、會社事業發展の爲めに、大車輪となつて奮闘を辭せない考へである、今日の時勢、今日の事情に於ては、遣方次第にて必ず成功し得べく、近き將來か遠き將來か知らないが、多少名を知られた會社となるよう期待する次第、不肖ながら誠心誠意を以て事に當る考へ故、何卒其含にて指導援助を願ひたし、諸君の意見は出來得る限り之を尊重すべく、何卒意見を有せられる方は遠慮なく申出願ひたい、斯くて諸君の意見を尊重する一方、又本社主義方針をも尊重し、相互に協力一致奮勵、我綿花會社をして益々偉大にして、有力なものたらしめん事を熱望する次第である」云々

君が何等功に誇らず謙讓の態度を敢爲進取の意氣を示し、社長就任後の頼もしき大抱負の一端を吐露されたことは、強く幹部社員の耳朵に響き、一同感激に浸つたのであつた。

是れから後の數年間こそ、眞に君の大活躍期であつて、炯爛眼を眩する許りの全盛時代を現出したのであつた。

兩親を奉侍して支那視察

大正六年六月五日社長に就任した君は、此機に於て我社と取引關係の密接なる支那視察をなし更に大に發展の

方途を講ぜんものこ、同年の秋長江及北支視察の途に上つたのであつた。



向 君父
つ 長 母
て 七 堂
右 郎 政
端 子 又
翁 氏 藏 氏

大正六年十月

於漢口

渡支紀念



上之處來二十八日朝神戸出帆熊野丸は當時既に満員にて一旦斷られ候得共色々交渉の結果漸く今朝に至り切符發候、擬渡支日取早速御通知可申

先是、君は豫て孝養を盡して居る御兩親を一度支那見物に御案内申したいとの念願があつたところから、當時高齡ながら御壯健であらせられた御兩親に、今度の機會に御件申しては御相談されたのであつたが、幸ひに御兩親にも御都合宜しこの事で、愈同行されることに決定したのであつた、君は九月二十三日郷里の御兩親宛に

『拜復先日は折角の御光來に何の風情も無御座候段萬々奉謝上候、擬渡支日取早速御通知可申

行承諾致し來り候様の次第にて御返事延引仕り誠に申譯無御座候
 即二十八日朝神戸出帆熊野丸便に確定仕候間左様御承引被遊度尙出發後の日程大體別紙の通り相定め申候間
 御覽に入れ申候、但し都合にて多少變更致候候も不計候 云々」

尙又九月廿六日附にて次兄大藏氏宛て

【(前略) 小生儀愈別紙旅程の通り明後二十八

日神戸出帆熊野丸便渡支の事に決定仕候而して
 此度は兩親を奉侍しての旅行に有之候得ば特に
 萬般注意可致候間乍憚御放念被遊度候、歸阪は
 多分十一月初旬に豫定罷在候 云々」

斯くて君は豫定通り老親を奉侍して先づ上海に
 赴き、漢口、北京、天津の順路にて視察を終り、
 夫より奉天に出で、同所より急用のため君のみ一
 人朝鮮經由直行十月二十六日歸阪したが、御兩親
 は他の案内者により大連、京城等御見物の上、君
 より數日遅れて無事歸阪されたのであつた。



大正六年十月十日於漢口
 後列左より
 喜多又藏・喜多氏・喜多長七郎・喜多彌吉堂
 前列右端より水津・翁・喜多氏

君が忙中を厭はず當年七十三歳の嚴父七十一歳の母堂を奉じて支那各地の名所舊跡の御案内を申上げたこ
 んが到る處大評判になつて、君の崇高なる人格をたゞへざるはなく、殊に君を知れる支那人連中何れも其孝心の
 篤きに感激して益々君の高風を仰慕するに至つた云ふことであつた。

十 割 配 當

歐洲大戰中の餘澤を受けて、本邦綿業界は意外の大活躍を呈するに至つた、その庇蔭で、我社の成績も幸に未
 曾有の好成績を挙げ得たのであつた、偶々我社創業滿二十五週年に相當して居つたので、之を記念する爲め紀念
 配當を行ふ事になり、普通、臨時特別を併せて都合十割のレコード破りの配當を行つたのが、大正六年下半期第
 五十期の決算期であつた、即ち其内譯を示す左の通りである、

一金三百二十七萬四千九百五十六圓四十七錢也

大正六年下半期純益金

外に

一金二十一萬五千二百四十圓四十三錢也

前期繰越金

合計 金三百四十九萬百九十六圓九十錢也

内

金五十六萬圓也

準備積立金

金四十二萬圓也	配當準備積立金
金四十二萬圓也	別段積立金
金五萬圓也	退職社員慰勞積立金
金二十五萬圓也	役員賞與金
金三十一萬二千五百圓也	配當金
金三十一萬二千五百圓也	臨時特別配當金
金九十三萬七千五百圓也	滿二十五週年紀念配當金
金二十二萬七千六百九十六圓九十錢也	後期繰越金
以上	

右に對する君の所感は、次項に掲げる社員への訓示に詳かである。

二十五週年に際し社員への訓示 (一)

大正六年十二月七日社員一同を會議室に集めて次の訓示を爲した。

「諸君、當社も本月を以て創立以來滿二十五週年に達し、去五日第五十期決算總會を開きましたが、其結果は利益金三百廿七萬五千圓を計上し、株主に對しては十割の配當を可決せられました、是れ我社有史以來未曾有

の事蹟でありまして、時勢の然らしむる處は乍中、畢竟創立以來既往二十五年間先輩役員及社員諸氏の苦辛によりて培養、蘊蓄せられた精氣が鍾つて、茲に發したのであつて、諸君と共に誠に御同慶に堪へないのであります、而して今度社員一般に對し、昇給及賞與金を發表致しましたが、豫て重役會の希望もあり旁々聊か所感を述べ、且つ社員諸子に對する希望を一言致したいと存じて、御多用中斯く諸君に御集りを願つた次第であります。

回顧致しますれば、我社は明治二十五年十月、二十五人の發起人によつて、目論まれ、同年十二月一日會社成立開業の運びになつたのであつて、本月を以て實に滿二十五週年を迎へる事になりました、當時の資本總額は、金百萬圓、拂込金十萬圓とし、株式二萬株の内半數を發起人に於て引受け、半數を公募して成立されたのであります、先頃偶々當時の設立趣意書を一覽致しましたが、夫れによります「近來我邦綿業の發達著しく、棉花の輸入總額八百萬圓に上り、一方印度糸の驅逐に成功したるにつき、益々我紡績業は發達すべく、輸入棉花の總額一千萬圓に上るも遠からざるべし」と云ふ意味であつて、此等の數字が我社設立の基礎であつたのであります、又我社設立の主要目的は、當時棉花の輸入は全然外國商館の手にあつて、現金取引の慣習であつたのを、此等の羈絆から脱して、直輸入取扱を爲すに云ふ事にもあつたので、攝津、尼崎、天滿織物、平野の四紡績會社の有志聯合して本社設立を發起するに至つたのであります、此等の數字及事情を二十五年後の今日より見ますれば、御同様實に今昔の感に堪へませぬ、今日我社としては、印度棉、米棉、埃及棉共總て

直輸入の開祖たる名譽を永遠に誇るこゝが出来ると共に、拂込資本金は未だ五百萬圓に充ちませんが、會社の資産状態は優に一千萬圓を以て數へ、一ヶ年取引總金額は約二億圓に達するに立至りました。此我社二十五年間の經歷を按じて見ますれば、實に一の日本綿業發達史を叙するこゝ等しきもので、極めて興味ある事であり、而して右二十五人の發起人中現存せられるは僅に五人のみであり、又創立當時の重役中依然今日まで二十五年間勤続せられるのは、實に末吉取締役一人であつて、他は悉く逝去せられて今日の樂みを俱に煩つ事の出來ないのは、誠に遺憾に堪へない次第であります、尙現社員中、今村、山下、藤田の諸氏等は最も古く、予は創立に後るゝこゝ二年、明治二十七年十一月入社し、以て今日に及んで居るのであります。

會社創立後二十五年と申しますと、如何にも古い歴史を持つたように聞へますが、是れを人生に譬へるこゝ、漸く所謂定命の半に達して、専門學校を卒業した許りの壯年に比し得べく、之れより活動の本舞臺に入る年頃であつて、今迄は修養時代であつた事になります、會社も是より大に活動の時代に入るのであります、我等現時の當局者は、こんな鞏固な基礎の上に立ち、且つ百業駁々として展びつゝある、時勢の潮流に乗するこゝが出来ると極めて幸福なる地位に立つて居るのでありますから、往事を回顧して念一たび茲に至る毎に、前業の偉大さを深く感ずるこゝ共に、我等の使命として將來益々大なる献身的努力を以て、此等事蹟に對つて、酬ゆる處あらん事を堅く期する次第であります、諸子亦大に之を念させられて一層の御精勵あらん事を切望に堪へませぬ。

二十五週年に際し社員への訓示 (二)

次に當期利益金に就て一言致しますれば、此度の發表利益金は、實は我社有史以來の「レコード」であり、併し此金額は我社に取りてこそ、甚だ多きが如く考へられますが、是れを他社に比較致しますれば、未だ必らずしも其多きを稱ふるに足らないのであります、此期に於きましては、各事業も咸な一體に相當の利益を擧げ就中船舶業者、紡績業者、金物業者等時局の好影響によつて、多大の利得があつたものが多く、又同業者中投機的方策によつて、同じく非常の利益を収めたものがありますから、此等のものと對比したならば、我社の利益を以て或は少なしとも見る事が出来ず、乍併斯様な専ら時局の影響にのみよるもの、及び投機業者等と我社を同日に論ずるは、未だ我社を知らざる輩なりと申さなければなりません、我社の決算が喧しく世評に上つて居る事は、誠に結構であります、是れ必ずしも利益金多かりしのみではなく、他同業者の決算に先立ちて發表したと云ふ事が、多く其因を爲して居る事と思ひます、而して世評の中に我社は此期こそ突飛的な十割配當を發表したが、向後果して之を持続するや否や、又予が社長就任初期の決算に於て莫大な利益を發表した事に關し、區々の評あるを耳に致しますが、併し前期の利益金は予が社長就任と否とに不拘、決算上當然の結果として表はれるのであつて、又配當率としては、創立滿二十五週年紀念として特に六割を加へ、普通二割、特別二割と共に合計十割と稱し、故らに驚異の眼を瞠るのであります、此等の疑問に對しては、單に

普通配當二割繼續の自信ある事のみを以て應ふれば足るのであつて、所謂社長就任初期問題の如き、偶然の事情を結び付けるは、全然僻見を申さねばなりません、而して吾々の努力によつて、幸に相當の成績を挙げ得ますれば、普通配當の外、特別配當が或は二割となり或は五割となる事もありませう、是れ畢竟時の成敗に拘るのであつて、今日より強ひて之を論ずるは、大なる間違であらうと存じます、兎に角此期十割配當は二十五週年紀念が主要な理由でありまして、單に儲かつたから配當したと云ふに過ぎませぬ、序に申上げて置きますが、從來二十週年もか、何週年もかの時には、株主へ紀念品を贈呈して居ましたが、今度は紀念配當のみで、別に紀念品は贈らぬ事、株主總會で決議になりましたから、左様御承知を願ひます。

二十五週年に際し社員への訓示 (三)

我社普通配當は前々期に於て一割八分であつたのを、前期より二割に引上げ、而して予は唯今之を繼續する自信ありと申上げましたが、我々役員は諸子と共に我社の本分を堅く守り、最も堅實に、誠意誠實を眞向に振りかざして、大に奮闘したならば、配當二割の成績は、難事ではあるまいと信じて居るのであります、諸子も深く此れに御留意を願ひたい。

又世評の中に「前期は幸に商略適中して這般の大利益を挙げたが、若し商略齟齬せば果して如何」と冷語を放つものもありますが、我社は素より問屋業者として立つ以上は、本支店共商賣種として、相當の手持品が必

要であり、且つ手持品ある以上は、市價の値上り、値下りによつて、當然計算上のリスクを負担する事となりますが、是れは商賣の性質として誠に止むを得ぬ次第であつて、我社は前に申上げた通り、終始一貫堅實の方針を嚴守して居りますから、斯界の波瀾に際しても、甚だしく利益を擧げない代りに、甚だしい損失も蒙らぬ譯合ひで、前期に於ける利益は、畢竟既往二十五年間養ひ來れる精力と、人の和を以て、奮闘事に當つた賜に外ならないのでありますから、當期以後に於ても、今一層の努力を以てせば、前期同様、否、より多くの利益を擧ぐる事は敢て至難ではあるまいと思ひます、是れ一に人の和、即ち諸子の力に俟たなければ、ならぬのですから、呉々も從來通り協力一致、克く綿花式に働いて頂きたいのであります、茲に予は「人の和」と云ふ事を繰り返へして申上げましたが、是れ大に我社の天下に誇る處であります、如何に資産状態が良くとも、信用ありとも此「人の和」が整はなければ、事業の成績は擧らないのであります、我社の取締役全部及び社員の多くは、我社の株式を所有し、其合計數が、總資本金の六割を占めて居り、即ち役員、社員は、其財産信用並に名譽の全部を、會社に傾注し、上下一致して經營に當る事云ふ事、形式は一株式會社の役員、及使用人に云ふ名義にはなつて居りますが、實は資本主であつて、そして營業主、當事者自身であります、是れ我社の最も誇りとする處であつて、先刻來屢々「人の和」として申上げて居るのは是れを云ふのであります、此實質此信念に伴ふ堅實な努力が凝つて今日の成績を結晶せしめたので、決して偶然ではないのであります、次に偶々「日本綿花は老いたり、活動せず」などの酷評を聞きますが、此れに就ては吾人大に説があるのであります、他の

所謂新進の同業者等が、盛に花々敷投機商賣をやつて居るのに對し、我社は、ごこ迄も前に屢々申上げた通り、所謂華を去り實に就き、最も堅實な方針を守つて、現に先般綿糸布界未曾有の大波瀾を極めた時の如きも、我社は單り此渦中に投ぜず、市場の熱狂を冷眼に見送り、自己の所信に向つて着々地歩を進めたものですから、世評に上る處の成金たらざる代りに、大して過誤なきを得たのであつたが、同業者の嫉妬的批評を以てしたならば即ち「老いたり」、「活動せず」ミなるのであらうが、予は斯る意味に於ける「新進氣鋭」、「活動」を好みませぬ、寧ろ之を避けつゝある事を諸子に對し告白する事を喜ぶものであります、又右の酷評を好意的に解釋致しましても、他同業者の新進者流は、一から十まで悉く我社施設の跡を追蹤せんミするものであります、即ち我社が多年辛苦して、溝渠を整へ荆棘を拓いて布設せる軌道を、一氣に奔るに過ぎないのですから、常に新機軸を以て彼等より一步先きに歩みつゝある我社ミは、其經營の輕重、難易は到底比較にならないのであります、之を他から見れば模倣者の進行早きが如く、先達の我社遅きが如きも誠に止むを得ぬ次第だミ存じます、是れ乍併我社が常に斯界の「リーダー」ミし「オーソリチー」ミして、推されつゝある所以であります、我社は不斷の努力ミ奮闘ミを以て、彼等の追蹤を許さざる確信を持つて居ります、現時及將來に於ける本邦大綿業の前途は、同業者間排他的の狹量を脱し、自己の進路は、宜しく自己に於て開拓し、新なる計畫を樹立して猛進すれば夫れで宜しいのであります、區々たる他の追従模倣者なき敢て意に介せずして可なりです。

さうか我々は他の追従を許さない所謂綿花型の堅壘に據り、大なる決意ミ大なる努力ミを以て積極的活動に

終始し、以て益々我社の隆昌ミ光榮ミを贏ち得たいと思ふのであります 云々』

新入社員を警む

花やかなりし大正六年我社が記録破りの配當をやつた跡の極月十日のこみ、君は社内講演會の席上で、新入社員に對し經濟界の現状を説明した後、處世上の心得につき諄々ミ説き聞かせたのであつた。

『今度新に社員になられた方、又新に入社されて間もない方もありますが、御存知の通り近時の本邦經濟界は、或部分には非常に利益を擧げた事業ミ人物ミがあり、或部分では寧ろ困難をして居る事業ミ人物ミがありまして、經濟の秩序利益の分配が、非常に不平均になつて居ます、一體さうすれば金が出来るか、又成功を得るかミ云ふこゝに没頭して居るものが多い状態であります、然るに我社に入社してドウであるか、或は意外に出づる點もありませう、世の中は外觀ミ内部の事實ミが必ずしも一致せない場合が澤山あります、外觀はいゝが内容が左程で無いミか、内部は充實して居るが、外觀はさうでもなかつたミか、色々な事を考へてウ、カ、ハ、して居る間に、虻蜂取らずになつて、いゝ成績も收むる事が出来ないミ云ふやうな事が、得て有勝ちであります、我社はいゝ方か、悪い方か、見る人々の判断によるの外は有りませんが、當局幹部は先きに申述べました方針に基き、遣つて參る考へでありますから、近く入社された諸君も、入社された以上は規律を守り、先輩に聞き、兎も角日本綿花の社員ミして大に活動して貰はなければなりません、で出身ミか、勢力ミかは全く問題ミせず、

何れの學校、何れの方面より來られた人も皆同様の取扱で、二、三年は同じ進み方をするが、其後は各自の勉強如何によつて、優劣を生じ待遇も變つて來る、高等の學校を出たから云つて、同じ待遇を受ける譯ではなく、自己の働きによるのでありますから、新入諸君に於ても其心掛けで、皆優劣なき働きを示されん事を願ひます、吾社は各方面に爲すべき仕事の色々あり、又之れから爲さんとして居る仕事も色々控へて居りますが、人員の不足の爲め思ふやうに參り難いのであります、さうか早く自己擔任の仕事を覺へ、吾々が人の不足で困つて居る方面へ廻つて大いに活動されん事を希望致します。

近頃各社も人の不足で困つて居るに云ふ事は、新規の人々が自己の地位を得、又進めしむるに全く誂へ向きに出來て居る譯で、我社も今日の状態で行くならば、事業の將來は益々良い方と思はれますから、何卒一日も早く各自の勉強努力によつて進路を開拓されん事を願ひます。

序に規律に就て一言申述べて置きたいのは、吾々は會社を一つの大きなホームに考へて居る、従つて誰彼の區別なく、業務執行に當りては、軍隊同様規律を守られる事を希望します、營業規則の上から、自分の仕事は自分の仕事として、時間を守るに當りては、當宿直を規則正しく守るに當りては、是非嚴格にやつて貰はねばならぬ、又仕事は眞面目にやる外日綿社員として立派な人格に、品位に、規律を守られる事を切望致します』云々

例によつて親切叮嚀を極めたものである。

生糸取引の開始

生糸は本邦輸出の大宗であつて、其輸出如何は本邦國際貸借に大影響を及ぼすのであるのみならず、之れが輸出取引に従事する外國商館今猶少なからざる事は、我社の如き關西に於ける大貿易會社を以て自任するもの、面目にも關するものとして、豫てより君は此取引開始につき食指を動かして居つたのであつた。そこで豫て生糸の海外消費状況につき詳細の調査を行はせて居り、其時機の至るを待つて居たのであつた、昨年資本金を増加して第一着手に羊毛取扱を開始したのであつたが、今や生糸取引開始の時期到來したるものとして、大正七年三月一日横濱出張所を開設し遂に其素志を果たすに至つた。尤も始めは手習の積りにて小口の取扱を爲し、相當の経験を履んで後、積極的主義に出づるを利なりとし、當初は我社と密接の關係を有せし中外貿易株式會社(後出)に委託し、同社の手を経て紐育の我社出張所との間に取引を行はしめたのであつた。約一年の後多少經驗を得たので翌八年十月一日より、我社の直營に移し、爾來多大の苦心と忍耐を以て取引の進展を期し、大正十二年關東大震災後は、神戸出張所に於ても生糸の取扱を開始せしめ、横濱支店と兩々相俟つて益々其取扱の増加に努め、以て今日に至れる次第である、今や各方面に於ける取引連絡も完全に行はれ、我社の健實なる取引振りも、斯業者間に認められて居るので、將來漸進的發展を遂ぐるを疑はぬのである。

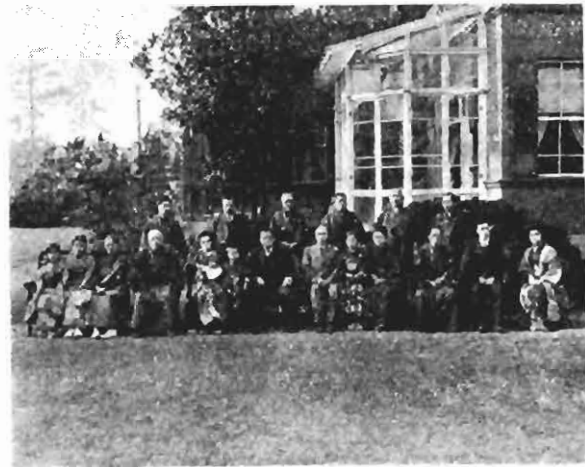
媾和使節隨員に選ばれる

大正三年夏以來、五歳の久しきに亘つて、互に鎬を削つて、人命を殺戮するこゝ八百萬、損傷するこゝ二千二

百萬、財を費すこゝ三千七百億圓と稱せられた實に歴史あつて以來の一大慘禍を逞しうした歐洲大戦も、遂に大正七年十一月十一日を以て休戦を見たのであつた。

此大戦に聯合國側に加擔した我日本帝國は、世界五大國の一員として、獨逸と平和條約を締結すべく、巴里に全權一行を送るこゝなつた。

西園寺公望侯、牧野伸顯子、珍田捨巳子、松井慶四郎男、伊集院彦吉氏の五名を全權委員に任命した我政府は、更らに其隨員として實業界より四名を選んだのであつた、隨員は何れも我國實業界を代表し、其利益を保護せんが爲め、全權委員の



大正七年十二月巴里媾和全權隨行紀念

於大阪天王寺舊邸

×印喜多又藏氏夫よつ向つて左へ
令夫人・嚴君・母堂

諮詢に應ずるの、重大使命を帶ぶるのであるから、其選任に當つて頗る慎重に詮衡されたのは勿論である。

其結果關西實業家の代表として、君は其名譽ある隨員に選ばれたのであつた、當年四十二歳の少壯實業家としての君が、幾多の先輩を凌ぎて此大任に當るべく選ばれたこと云ふ事は、君の材幹識見の非凡なるを認められた證

左に云ひながら、蓋し異數の拔擢と云ふべきであらう。君の他、選任された隨員は近藤廉平男（日本郵船會社社長）、福井菊三郎氏（三井物産會社取締役）、深井英五氏（日本銀行理事）の三名であつた。

君の任命を見たのは、同年十二月三日の事である、突如此選に當つた君は、國家奉公の誠忠を盡すは正に此時にありと決心し、快く御請けするに同時に、あわたとしき旅装に取りかゝつた、十二月七日には忝けなくも御陪食の光榮に浴し、十二月九日には早や牧野全權一行に加はり、同日天洋丸に搭じて横濱を米國へ船出したのであつた。

君は十二月九日出發に際し、社員一同を集めて、左の



大正七年十二月九日

梅田驛出發巴里行紀念

告別の詞を述べたのであった。

「數年に亘る歐洲大戰漸く干戈を收め、平和條約の討議に入らんし、我政府は媾和使節を任命し、又特に民間實業家數名を簡拔して、經濟方面の顧問たらしめんせしが、圖らずも其一員として不肖其選に當りしは眞

に意外とする處、不肖素より其器に非ず寧ろ恐懼に不堪、而かも他方本邦棉業界も休戦と共に大いに戒心を要するものあるを以て、當初は應諾を躊躇せしも、幸ひ同僚始め知友諸氏の激勵もあり、意を安じて遂に此大任に當るに決した次第である。

不在中は山田常務不肖に代り、内外一切の事務を管掌せらるべきにつき、同氏の指揮の下に一致協力して、社務に盡瘁せられん事を切望す」云々

全權一行は、太平洋上屢々重要な打合せに忙はしく、

十二月二十六日布哇を経て桑港に安着した。

翌二十七日、一行は米國政府の特別列車に搭じて、紐育に急行し、大晦日の午後四時云ふに紐育に安着したのであった。着米以來米國々賓の待遇を受けた一行の事であるから、中々の歓迎振りである、随つて一行の多忙



西園寺公望
大正八年一月
大野伸朗

振りは除夜もなければ元日もなかつた、大正八年正月四日紐育出帆に豫定された乗船が、八日に出帆を延期したので、幾分安息を得る機會を見出したのみであつた。

一行を乗せた英船カーマニヤ號は、船足遅々として長航海を續け、一行を倦きくさせて、やつと十七日「リバプール」港に到着、同夜倫敦一泊の上、一月十八日午後九時目的地たる巴里に安着、一先づホットしたのであつた。

日本希望條項を提出す

君は實業家代表の他三人と共に、今回の媾和會議に對する希望條項を我全權に提示して、其主張の實現を期する事が緊要を認め、種々協議の末、左の希望七箇條を列擧して我全權に手交する處あつた、

一、各國際聯盟國は他の聯盟國民の商工業運送業に對

し差別待遇を爲さざらん

A、英領南阿に於ては日本人の居住並びに營業に關し、差別待遇を爲しつゝあり

- B、印度支那に於ても關稅に關し差別的待遇を爲しつゝあり
- C、外國の國際商業會議所又は組合其他の團體は日本人に對して差別待遇を爲しつゝあり
- 二、各聯盟國は商工業運送業に對する戰時中の施設を可成速に撤廢するにこゝ
- A、輸出入の制限及禁止

各聯盟國は休戰後緩和したるも未だ全廢するに至らず、殊に英國の如き最近に至り却つて全く禁止せるものもあり、日本輸出莫大禁止の如き其一例なり

B、外國船舶及航路の抑制

C、外國船積荷の制限

B及Cは今尙印度に於て行はれつゝあり、其目的は英國船の保護にあるものも察せらる

- 三、各聯盟國は關稅に關し母國及國際聯盟の一員となりたる植民地屬領間に特惠條約を設けざるにこゝ、但し若し實行已むを得ずすれば我帝國の不利ならざる様特別に考慮せしむるを要す、

- 四、各聯盟國は其主權又は管理の下に在る運河及び海峽を通過する他の聯盟國船舶及其貨物旅客に對し國民的待遇を與ふるにこゝ

- 六、各聯盟國は船舶の測度乾舷法を統一するにこゝ

- 七、聯盟各國は船舶旅客の檢疫法を統一するにこゝ



佛 國 駐 日 法 領 事 館

の審議會に列席した。

媾和會議と平和條約の調印

大正八年一月十八日媾和會議第一回準備會議開催以來、列國全權及委員は本會議及國際聯盟賠償經濟財政等に關する委員會並各種の分科會議等大小約二千回の諸會議を開き、四月末日を以て漸く平和條約を議決したのであつた。之れに依り、我國は獨逸から山東の利權を完全に繼承し、又南洋獨領の委任統治權を獲得するにこゝになつた、其際日本全權から國際聯盟委員會に對して人種平等案を提唱し、大いに努力する處あつたが、不幸にして其目的を達しなかつた。

議決を見た聯盟規約及對獨逸條約案は十六編四百四十條の老然たるものが作成され、獨逸は割地賠償其他極めて重い制裁を加へられる事になつた、

五月七日此條約案は、佛國首相クレマンソーより、獨逸全權ランツアオに交附せられ、調査回答の爲め十五日間の猶豫を與へられた。

尋で獨逸全權より對案九箇條を提出して來た、君は之れに對する日本全權

六月二十三日獨逸全權は、調印を承諾し同二十八日「ベルサイユ」宮殿鏡の間に於て媾和條約調印を了した、君は此空前の盛儀に参列して面目を施したのであつた。媾和會議中の模様及び君の分擔せし仕事の範圍等に就いては、後掲する處の媾和會議所感中に詳かなるを以て茲に略するこゝにする。

巴里滯在中の一所感

次の如き一所感を社内同僚に寄せた。

『四月二十八日(大正八年)聯合國總會にて國際聯盟も産れ申候、此日不思議に巴里大雪也、無理難産の League 伊太利の引揚より雲行暗澹、其日勞働法案の最後九條即敵國平和條約に挿入すべきもの其後印度の大反對より英國も手古摺、遂に加奈陀總理大臣より修正説を提出せしめ、可決したるもの別紙(編者曰く、別紙略す)に御座候、既に印刷したるものは廢案に相成候間右御承知願度候是れで勞働一段落、跡は華府會議の事、むつかしいを種々奔走、ヤット手に入れた勞働案の「Text」を今日まで郵送せし先きは次の諸氏なり、(編者曰く、氏名略)

印度反對の御蔭で日本多少浮ぶ也、五大強の縁組も考へ物也、否近頃日本も遠慮なくなりし様なりと思はゞ、何時の間よりか、日本抜きの大強、近頃は又伊太利抜きの大強也



大正八年媾和會議當時

巴里に於て喜多又藏氏

青島問題、支那連中のプロバガンダ能く利きランシング、ウイルソンの強硬反對より危く獨逸より支那に返へすやうに、なりはせぬかと思ふ矢先、日本の手強き態度より遂に日本の申出通りに昨夜決定、即ち獨逸より日本が受取り、更らに支那に返へす、是れには條件付きに相成、旭日光輝、五色旗しほむ如き觀あり、尤も是れ

が往かすば償金は直接實際損害のみ、夫れも支拂の順位あり、日本如きは少なく跡廻し也(二億危しだよ)戦費は取れず俘虜收容費取れず、南洋漸くにして委任統治、マア日本としては不満足なるべし、併し僕はつくづく考へた、日本は妥許少くも二十年官民一致合同、働いて實力を貯へるにありだ、國力なくては發言權なく、ありとするも強行力なし、何事も實力だよ、然り(編者曰く、日本綿花會社の事)も實力、日本も實力さ、巴里は本日

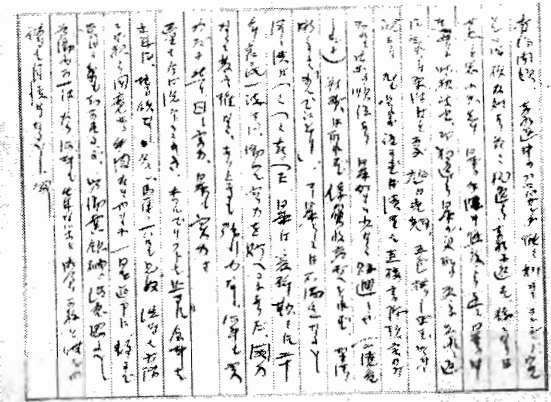
總ストライキさ、ホテルでリフトは止まり、食事は出來ず、地下鐵なし、タキシイ、馬車一臺も見ぬ、僕等は六階に昨夜より用意せる牛肉すきやきに一日を過し申候、靜かで正月の氣持がするが、勞働黨領袖の得意思ふ

可し、労働者が一致したら、何事も出来ない事、御分りかネミ嚙ぞや彼等は自慢せるなるべし、勿々』

(大正八年五月一日、巴里總ストライキの日)

労働問題に努力す

本問題の國際聯盟の議に上るや、之れが我紡績業者の利害に大關係あるので、君は大いに運動して日本工業家の利益保護の爲めに盡す處あつた、ミ同時に其委員會通過後逸早く其内容を大日本紡績聯合會長に通電する外、其案文の寫しを、關係深き知名の人々に急送したことは前記の通りである、是れが爲め我紡績關係業者が其對策を講ずる上に、多大の利便を覺へたミ云ふ事である。君は當時の模様を、社内同僚宛てに左の如く通信して居る。



大正八年五月一日 巴里總ストライキ日當認
社内同僚宛の第一節

『本問題の發生以來、我紡績業に關係深く、小生は陸乍ら大いに盡力致申候、乍併外務省は小生等委員の一人より直接應答を許さず、又何問題に拘らず、内地に報告の場合、一應係に差出すべき嚴命にて、實に今日迄、

本意に委せざりし次第に御座候、愈々委員會も通過後ミて最早斯る遠慮もいらぬ譯、扱ては爰許數日間安井君と共に種々材料相集め、今日發郵致候次第、

第一、電信は長文にて料金も多き譯け乍ら、之をコードミしては貴我の手數一方ならず、平語で約一千圓以上の奮發ミ相成候

第二、今日迄の成行餘程徹底せる筈、慥かに菊地氏には電信料丈けの事は十分御參考ミ相成り候事ミ存候
第三、國際労働組合規則は最初より三、四度も改正々々ミ相成居候、最後決定分我全權並當委員會に五部より持合せなく、不得止前回案ミ比較更正候次第、着後必要なれば聯合會にて一應外務省分ミ御照合の上(勿論間違なければ)増刷願上候

第四、
第五、(編者曰く、都合により省略)
第六、要するに工場法を此儘實行は覺束なし、華府會議の如何により改正可有之候、此際斯業者は餘程大勢を達觀し、能く邦家の爲め労働者を圓滿に導く事必要ミ存候』云々(巴里 大正八年三月三十日附)

精米業に着手す

日本人は米食人種である、然るに其繁殖率が多い爲め、限りある日本領土内の産米量では、到底引張り足らな

い、それで年々數百萬石の外國米の輸入を必要とする、此事實は年を経るに従ひ、益々顯著なるを免れぬことれば、如何にして最も安く外國米の供給を圖るべきやは、日本人として眞面目に考ふべき事柄ではあるまいか。

君は決して採算一點張りの實業家ではなかつた、常に濟世の志を潜ませて居た、従つて其爲す所行ふ所、國家的見地に立脚して行動するの常であつた。

君が日本の基礎工業たる紡績會社の消費する原棉の供給につき、平素如何に多くの關心を持つたか、君は「From Farm to Factory」を「モットー」にして如何に原棉を安く供給し得べきやにつき、不斷の注意と努力とを吝まず、之れが爲めに巨額の設備費を投ずるを意しなかつた事は、印度、米國、支那、阿弗利加、朝鮮等に於ける我社の投資内容によつて、直ちに之を首肯し得るのである、此生きたる事實は如何に君が、本邦貿易の大宗たる綿製品製造の影に隠れて、低廉にして佳良なる原棉の供給に苦心慘憺を極めたかを物語るものに外ならない。

米に就いても君は考へた、何億圓を算する巨額の外國米を日本に輸入しながら、之を精白する工場の所有者は、悉く外國人である、即ち三井、三菱も雖も外國人の工場より買入れて居るのである、大衆日本人數百萬の生命を托する主要なる精白米が、外國人所有の工場でなければ供給が出来ない云ふ事は、日本國民として、大いに考へさせられる問題ではあるまいか、否當然心ある日本人として看過し去るべき問題ではない、我々は元、棉花業者として立つたのであるが、斯る重大なる問題に、今日迄日本人誰一人として無關心である云ふ事は、或は採算上の關係によるかも知れないが、併し從來外國人が相當盛大に經營して居る以上、日本人として出来ない理由

が無い、何處々々まで苦心研究を重ねて、彼等に負けないだけの努力をやれば良いではないか、事業は決して其難易如何や採算の良否等のみに拘泥すべきではない、其事業の必須性如何を考慮することは、獨立國民の義務ではあるまいか、自分として米云ふ商賣は全然素人に過ぎないが又何んぞ遣り方もないではあるまい、我日本綿花會社として將來發展の一つの仕事は、海外適當の米産地に、進歩した大精米工場の經營に任じ、其精米の取扱を開始し、以て出来るだけ低廉に外國米の輸入を圖り、餘力を以て海外市場への進出をも企圖すべきであると思ふ云ふのが君の信念であつた。

君は以上の見地から、緬甸のラングーン精米工場の設備に着目したのであつた。即ち君が媾和會議全權の隨員として巴里滞在中、大正八年二月二十五日を以て、君は蘭貢支店長に左の通り通信して居る。

『精米所につき其後御取調べの模様如何、御出發前申上候通り我國の狀勢は、尠くも蘭貢より一年三百萬袋位の供給を得ざる可からず、而かも是れも日英兩國の條約か但し何かの形式にて是非慥かに受くること絶對必要に有之候、就ては日本人が精米所を買収、新設何かの形式にて蘭貢に設備すること、實に急務に存候、至急御調査相願度、小生着蘭までに、建設場所、地面代其他必要の事項につき十分の調査を終へ、着蘭次第諾否確定出來候までに萬事御取運び置き被下度候』云々

君は媾和會議終了後、印度視察に立寄ることの打合せになつて居たので、其機會に於て、蘭貢に於ける精米所設備を確定したい腹であつたのであつた、然るに君は印度視察に豫定以上の日子を費したので、甲谷陀より新嘉

坡に直航せざれば、媾和全權西園寺侯一行に、新嘉坡にて出會し難いので、止むなく甲谷陀より新嘉坡に直行したため、蘭貢の寄港を見ずして精米所の件も、一時其儘になつたが、併し君の精米所施設の意見は、毫も變る處なく、引續き進捗を見たのであつた。

偶々久しく蘭貢にありて、精米所を經營し、大いに成功した英國人ジョセフ・ヒーフ氏が、功成り名遂けて本國に退隱する爲め、其所有の精米工場讓渡の希望あるに遭遇したので、種々折衝を重ねた末、大正九年の春、遂に之を買収するに至つた。

晝夜作業一日五千石の能力を有し、相當大規模の工場である、爾來今日まで無事操業し、日本、歐洲、南洋、支那等に、廣く販賣されて居る、我社が國家的見地の下に、海外に大精米場を所有し、世界に活步せる事實は、君の遺した大きな事業の一つにして、我社の誇りとする處である。

媾和事務以外の活動

君は媾和會議全權隨員として、經濟専門委員に列し、工業所有權（特許、商標權等）及び戦前の契約の二委員會に、我國の委員として出席し、相當多忙の身なりしに不拘、君は其間我社直接關係の業務につき種々畫策を怠らざりしのみならず、亦我社間接關係の仕事についても、相當配慮し、一日たりとも惰眠を貪る如き事はなかつた。

我社の關係に於て、最も力を盡された事は、米印棉歐洲取引の實行であつた、先づ對佛米棉代理店として「ハール」に代理店を設け、又印度棉に對しては「リユー」に代理店を定め、我社今日の對歐取引の基礎を築くに至つたのである。

又生糸についても、對佛代理店を「リオン」に定めたのであつた。

君は巴里媾和紀念に有意義なる土産を物色した。種々研究の末佛國製の綿糸紡機二萬四千八百十六錘を買入れる事に決定したのであつた、之が後に泰安紡績の創立になつて顯はれたのである。

又日華紡績の爲めに 英國紡機○萬錘買入れの面倒をも見た。

尙君は巴里滞在五ヶ月の間、佛人 Revé Châu を秘書として雇入れ、専ら佛國新聞等を讀ましめ、媾和會議の情勢、各國政界、財界の動き等につき、最新の智識を吸集するに努めた外、大日本紡績聯合會を始め、關係深き先輩知人等に、媾和會議々題の内容、趨勢等につき、其要點の速報に努めたのであつた。

斯くて君は日々忙がしい日を暮らしつ、何等私人としての慰安をも取らなかつたのであつた。

佛領印度支那棉花栽培意見

大正八年巴里滞在中、日本全權より佛領印度支那棉花栽培につき特に君の意見を徵せられ、左の意見書を提出したのであつた。

佛領印度支那棉花栽培につき

第一 西貢棉の概念

西貢棉とは佛領印度支那産棉の日本に於ける通稱にして、又之を安南棉と云ふ、毛足、クラス米棉普通品と大差なきも繰綿は概ね支那人取扱ひに係り、故意に水を注ぎ或は種實を混する等不徳義の所爲ある爲め市價は常にミッドリング以下にあり、

日本に於ては繰綿實棉共賣買せらる、後者は俗に三巴鈴と稱せらる。

西貢棉はカンボヂヤ地方に産し現在の産額大ならず海防河内紡績の需要を充たすに足らざるものゝ如し、乍去如斯産額大ならざるは産出力なきが爲めに非ずして、眞面目なる裁棉の企なきに歸因す、カンボヂヤは由來地味豊穰天恵の穀土也、適當の資本と勞力を投下し、現代的に經營せんか、必ずしも想外の收穫を得ん事難きに非ざるべし。

第二 棉花栽培事業

我邦は毎年米棉五十萬俵、印度棉百五十萬俵を消費するが故に、米印棉作柄不良の時は原料仕入に困難を感

ずる事甚だし、是れ近時棉花自作自給の聲高き所以にして、漸く此理想を朝鮮に實現し、一部の満足を求めつゝあるも、朝鮮によつて我邦紡績の需要を充さんとするは、百年河清を待つが如く、甚だ手緩し、故に此際カンボヂヤ地方に棉花栽培を爲すは、大いに考ふべき重要問題也、

如斯西貢棉栽培は栽培其物が有利なるや否やの問題を離れ、熟慮を要する事業なれば、我邦棉界企業家の賛意を求むる事容易なるも、是れに先ち考ふべきは從來佛國政府が我邦綿業者に對し採りたる方針也、

第三 佛國の安南保護政策

安南諸紡績は海防河内にあり、甘手並に四十手綿糸を紡出す、西貢棉は甘手紡出には可なるも、四十手紡出には困難なるを以て、此不足を補ふべく米棉印度棉の輸入を爲す、該紡績は何れも經營拙劣にして其製糸は到底日本綿糸の競争に堪へざるを以て、佛國政府は、

(一) 輸入日本綿糸に對し英國製品の倍額以上の税率即ち輸入禁壓的重税を課するのみならず

(二) 海防より滇越鐵道を経て雲南に移入さるべき日本綿糸に對してすら、非常に過重なる Transit 税を課し、以て安南紡績に極端なる保護を與へ居れり、されば我邦紡績は安南雲南に二十手綿糸好需あるに不拘、是等重税の爲め販路を絶縁され居る現状にあり、従つて嘗て此地方輸出に猛進を企てたる關西大紡績の如き、終に其絶望を悟り、安南は日本綿糸勢力範圍内にあらず、ミ嘆するに至れり、

我邦識者は如斯佛國保護政策に對し、苦き經驗を有するを以て、安南棉花栽培事業は重要なる大問題と認むるに雖も、現状の下に於ては、投資經營の勇氣あるもの、殆き無しと斷言して憚らず。

第四 佛國政府の誠意を求む

棉花栽培企業の有望なるに不拘、企業家の躊躇する所以は、佛國保護政策が與へたる從來の惡感に存す、故に本企業を誘起せんせば、先づ

- (一) 佛國政府が從來の態度を改め、其證左にして、日本製品に對しては、少なくとも英國製品に對するに同等の取扱を爲すこと
 - 即ち不當なる保護政策を廢止すること
 - (二) 如斯佛國政府が我邦製品取扱に好意を表する事ならば、日本政府に於ても、是れを企業家に保證し、安心せしむること、
 - (三) 愈々意思疎通出來、企業せる場合、産棉の四分三を日本に賣る事の保證を得る事
- 以上の三條件を充たし得ば、棉花栽培企業敢て困難に非ざるべし、

第五 合辦事業は不可也

日本人の企業に外國人の勢力を認むるは將來に惡果を來すもの也、殷鑑近く日支合辦の事業にあり、尤も佛人は支那人と同一に見る事不可ならんも、事業の勢力は、之を日本人の手中に歸するの遙かに優れるに若かず、故に本企業に於ても出來る丈け、合辦を避くるを得策とす。(巴里 大正八年五月二十八日)

當時佛領印度支那にある佛人中、日本接近論者相當にありたる爲め、日本全權の巴里滞在中佛國政府に對し、何等かの交渉を試みられたるものか、推測するも、爾來十數年間、何等有利なる協定に達したるを聞かざりしのみか、却つて佛領印度支那は其後一層關稅の障壁を高くしたが、昭和七年五月十三日巴里に於てタルジュ外相と長岡駐佛全權大使との間に日本と佛領印度支那間の通商條約の調印を見る事を得て、多少關稅の低減を實現殊に綿糸綿布類は從前の率より四割引となり、又一部品種を除く絹及人絹織物は最低稅の適用を受くる事となつたので、之等商品には廣大なる新市場を提供された結果となり、我邦の對佛領印度支那貿易上、大いに有利となりし事に對し、當局官憲の努力を謝すべきであらう、此際望蜀の希望としては、君の意見による日本人の佛領印度支那に於ける棉花栽培企業をして、有利に展開せしむべく、更に一段の配慮を其筋に希望せざるを得ないのである。

國際勞働會議代表委員の沙汰止み

大正八年巴里平和會議に於て勞働問題の聯盟會議に上場さるゝや、故人は逸早くも我紡績界に對する影響の頗る甚大なるべきを憂慮し而かも事の到底姑息の解決を容れざるべきを看破し、當業者の一大研究に一大覺悟の必要を屢次に亘りて力説警告した。茲に於て紡績業者も深く故人の機敏にして有益なる報告を感謝するに同時に夫々對策を講じたのであつた。

右聯盟會議の結果として同年十月米國華盛頓府に國際勞働會議開催の事に決するや、我邦からも政府委員二名の外に資本案と勞働者の各代表一名宛と婦人顧問の一名都合五名を列席せしめる事になつたので、資本案代表としては七月早くも君を委員に推薦の聲が高まつたのであつた、當時大朝紙は澁澤男の談として、

『代表者の人選も中々六ヶ敷きこいで政府でも餘程苦しんで居るやうだ、第一番には會議の席上自由に話し得る程度に語學を能くするものが必要である、そして社會政策や勞働問題、思想問題位は相當に研究して居るものでなければならぬのは勿論である。夫等を綜合して察するに日本綿花社長で媾和委員と一緒に巴里滞在中の喜多又藏氏は工業智識も十分に有る上、勞働問題についても相當に研究して居る云ふから資本案代表として派せられるのではなからうか』云々

然るに君は御用の爲め殆ど九ヶ月間社用、私用共に全く抛擲の有様であつたのみならず、君は巴里滞在中全力

を傾倒して媾和事務に没頭、其過勞の結果として大いに健康を損して居つた、同年四月二十七日附巴里より友人への發信に、

『小生近頃健康不良、例の眠病其後甚敷く唯鼻故に紐育巴里にても其方の治療相受候得共、故障は夫れのみでなさ相也、其後色々佛醫にもつき又最近は三浦博士隨行醫にもつきたるに、結局鼻も治療を要す、然らざれば五年内聾たるべし、内に腎臟の恐れあり、今より手當必要也夫れにはモンスーン期の印度行きは不可、可成靜養歸朝後手當せよこの三浦博士の勸告に有之』云々

云ふ程であつて、成るべく直路歸朝靜養希望もあつたのだが、何分にも豫定の印度行きは萬障を排して實行せねばならぬ事情にあつたので止むを得ず巴里より印度視察に廻り、八月末歸朝したやうな譯で、故人の華盛頓會議の資本案代表のこゝは遂に沙汰止みとなつた次第であつた。

印度視察と訓示 (一)

媾和會議の御用を無事に終へた君は、歸路印度に立寄り、我社の印度に於ける諸設備を親しく視察して後、甲谷陀より新嘉坡に出で、茲に西園寺全權一行の乗船熱田丸に合すべく、プログラムを作つて大正八年六月二十日「アンドレ、ルボン」號で馬耳塞港を出帆「コロンボ」に向つたのであつた、七月八日「コロンボ」に上陸、對岸に渡りて陸路孟買に向ひ、七月十四日孟買着、十七日孟買發「カラチ」、「モントゴメリー」經由二十八日甲谷陀

着八月三日同地發新嘉坡に向つたのであつた。

君は孟買滞在中我社孟買支店員に對し次の如き訓話を試みたのであつた。



大正八年七月印度カラチに於て
×印喜多又藏氏 △印中利三郎氏

「諸君、私の滞在は甚だ短時日にして且途中より聊か腸を痛めた爲めに諸君に充分の會談出來ざりしは誠に遺憾とする處なり。

私が今日迄孟買各所にて見聞せし結果から見ると我が日本棉花が非常に發展せることは我社に對する銀行家の信用並に印度人の態度によりて其事實を認むるを得、殊に「サツール」を始め「アコラ」「モントゴメリ」「ムルタン」には我社所有の工場ありて従前のジン・プレス工場を賃借せる借家時代とは異なりて自己の工場を運轉して大いに活動する様を見て痛快を覺へたり。私は明治二十九年始めて孟買へ來任せし時代と比較して實に宵壤の差ありて轉々今昔の感に堪へざる次第なり。私が在任

の當時取引先たりし「ガダム」社の各社員即ち支配人の「シオン」氏は本年五月孟買にて死亡し、次席の「マ

ヤー」氏は戦争前本國の獨逸に歸りて目下某銀行の「クラーク」を勤め居り其次の「グラント」氏は諸君も御承知の通り今尙孟買に在るも僅かに棉花ブローカーを營みて細々命脈を保つのみ。又「スピークマン」氏は「マシエスター」に在る由なるも所在を知らず。當此間に在りて勢よきは當時最下役の「ハートレー」氏あるのみである。同君は現に孟買の稅務官吏となりて幅を利かして居られる。如斯同社々員は各地に離散し同社其者も既に破産して存在せず而かも元々同社の所有なりし忠竹林、グールドバチ兩地のジン・プレス工場は今日迄は現所有者より賃借をなし居りしも最近此兩工場を買収して我社の所有に歸するに至りしは實に愉快禁する能はざるなり、當時孟買の棉花界に於て大なる勢力を有せしガダム社は悲惨なる衰滅を招くに至りしは實に會社の取引振りが全然誠實を缺き居りし爲めに於て、例へばブローチに對しベンゴール棉を積出しゲルワー棉の約定にオムラ物を以て胡魔化さんとするが如き遣り方にして之れでは到底我が取引先にして安心して取引する事を得ざるを以て我が社は協同計算を以て對日取引を爲すべきことを提議せし時、彼等は傲然として吾々は歐洲人なり君等は日本人に非ずや、如何でか吾々を共同して事業經營に當ることを得んやとの返答なりき。然るに今や果して如何。是れ實に事業に誠意を缺きし爲めに外ならず加ふるに従前は日本商社としては「〇〇」に非ずんば出來ず「世人の思惟せし所のものを吾社はドシ、ドシ、遣り來りつゝあり、即ち山田君が初めて孟買に支店を設立して盛に棉花の買付をなし其後日本の紡績も年々大發展をなすに共に吾が社の内地買付も大いに擴張せられて好成績を擧ぐるに至れり。是れ蓋し努力に誠實の賜に外ならず信ず、印度に於ける棉花の買付は「〇〇」に

非ずんば出来ず」この世人の誤謬を我が社が打破して今日に至り其他の各社も吾社に追従し來りて爰に我國の綿業界の大なる發展を援助せる譯なり。されば綿業界に於ける先覺者は實に吾が社なりと吾々は自負し居れり。實際に於て又吾が社の國家に貢獻する所決して尠少に非ずと自信し居る次第なり。

而して歐洲に棉花の取引を開始し度しは豫て米國出張所より希望ありしが戦前に在りては時期未だ到らず聊か躊躇せし處なるが今回私の在佛中に取調べたる處によれば存外安心して且日本よりも樂に取引が出来る事を發見し、殊に吾が日本棉花の名が歐洲に於て意外にも能く知られて居るには寧ろ一驚を喫したる程にて現に私の滞在中に米棉一萬俵以上の取引を見たる次第なり。印度棉も亦此歐洲取引を開始する事に決定し此間より支店長及當局者も打合を爲し居る譯なり。歐洲に於ては既に佛蘭西の「ハーブル」に出張所を設置し奥村正太郎君を主任とし、外に田中徳藏君と共に同地に駐在する事になり、其他和蘭の「ロツテルダム」及伊太利の「ミラン」西班牙の「バルセロナ」にも追々出張所又は取引先を設ける心積也。如斯我社は之を世界的に取扱ふことになるを以て印度に於ても棉花に關する設備を完全にするには最も緊要の事項なりとす。尤も英國政府は印度の綿業に對して如何なる方針を執るや明かならずと雖も我社は緊喫の事業は着々進行してやる心組なり。

棉花に對しては右の如く積極的に進取すると共に印度に對する綿布も亦戦後と雖も大いに有望なるを以て充分力を入れて遣る考へなり。殊に近來の如く印度よりの輸出爲替の困難なる時は之を援助する爲めに日本よりの輸入を盛にする必要あり又綿布取扱には特種の智識經驗並に設備を要する譯なるが今回私の滞歐中にマンチ

エスターを視察して實際日本は大いに遅れて居る事を今更ながら感じたり、日本は漸く金巾が製織出来る位にして「ドーチー」さへ未だ製織不可能なり。マンチエスターは之等は勿論の事晒物、毛物、ピロッド等非常に精巧なるものが製織せられ、又見本の如きも實に驚く計り能く整理せられあり又世界到る處に販路を有し之等には「エゼント」を設置して眞に十俵二十俵といふ如き確實なる眞需要によりて儲けつゝあり。日本は戦時中綿布によりて大いに儲けたるは事實なり、恐らくはマンチエスターが儲けたるよりも多く儲けしならん。左りながら其儲け方は言はゞ投機的に儲けたるものにして一時的と謂ふべく之を以て眞の商内とは云ひ難し乍併幸にも戦争の爲めに兎に角販路が擴張せられたるを以て吾社に於ても綿布は大いに力を入れることに決定し豫て計畫せる大阪の築港倉庫は最早落成し今は機械の据付中なりと思ふが、此倉庫によりて従來苦情の多かりし加工品若くは小機業家の製品を一々嚴重に検査し、又荷造改装等をなして全くマンチエスターと同様になし各店をして遺憾ならしむる様にする筈なるを以て各店も充分此倉庫を利用して綿布業の發展を期すると共に綿布の取扱は吾社の「サイドビジネス」に非ずして全く本業にして本、支店共に大に之に力を注いでもらいたき希望なり。

印度視察と訓示 (一)

棉棉花に對しては米印共に設備を擴張し、綿糸布に就ては益々取扱の規模を大にするにせせば自然多額の資本

を要する譯なり。現在吾社の資本金は一千萬圓内八百七十五萬圓拂込を了り残り僅かに百二十五萬圓にして積立金は八百萬圓あり、之れは追々三千万圓にもしたき希望なり。又前記未拂込の百二十五萬圓も可成早く拂込を取りたき考へなるが今の處合計一千七百萬圓より二千萬圓になるこゝ遠からざるべく而かも一方會社の財産は充分低く見積りあり、内容は大いに充實し居る次第なり。今後益々資本金の充實と共に印度には大いに力を入れ、或方針の下に相當の資金を固定に用ひたしと思ひ居れり。又米國にても「テキサス棉花會社」は資本金を五十萬弗にして着々發展しつつあり、紐育の生糸は仲々六ヶ敷い様なるも遣り様にては左して心配なく遣つて行ける積りなり。

以上の如くにして設備、資本金融の聯絡は大體に於て調ひたるが、次に要するものは申す迄もなく「人」なり、即ち人々が良く働くこゝいふ事のみ唯一の必要事項として残るなり、凡そ「人」が事業經營上最大且最重要なるこゝは今更爰に繰返して事新しく申す迄も無く、諸君は遠く家郷を離れて海外の事務に従事して居る事故諸君の身に就き凡て自分が後見して行く考へなるが爰に諸君が大いに考慮を要するこゝは株主は果して諸君に何を要求するやに在り吾社は株式會社なる故に諸君は亦株主の要求を顧慮せざる可からず。

株主の第一要求は「成績」其者に在り、故に吾々は常に此點に留意し成績を擧ぐるこゝを先づ以て努めざる可からず。即ち諸君は相和し相勵まし古き人は新しき人を良く愛撫し經驗の未だ淺き人は經驗の古き人に隨ひ協同を以て事に當り、各自は人一倍よく働くこゝいふ精神を以て會社の成績を擧ぐるに努められん事切望に堪へ

す又諸君は印度に來りては或程度の困難缺乏には堪へ得る忍耐力を持たざる可からず。新しき人にして印度に來るや否や大きな顔して吾は「サーブ」なりこゝいふ様な考へを持たぬ様注意する事肝要なり。實際今日諸君の生活に私が孟買に駐在して居りし時代の状況は實に非常なる差あり、今は自動車もあれば又自用馬車もあり、時代の進歩は申しながら昔は漸くヴィクトリヤか又は電車によりて馳け廻りしなり。然るに今日日本人が全然電車を利用せざるこゝは大なる考へ違ひなるべし。思違ひなるべしと思ふ。既に倫敦にても、紐育にても、自動車馬車は愚か、電車に乗るこゝさへ困難なるこゝ多く大部分徒歩による事常なり。素より土地の違ひ氣候の異なるものは有れども左りて印度に在りては「斯々々せざる可からず」にて電車さへ利用せざる遣方は在孟買邦人全體の考へ違ひなるべしと思ふ。三井は如何、江商は斯の如しこゝいふ様な他人のこゝに頓着なく吾々は⊙式の勤儉努力を以て吾々の責務を果したしと希望する寔に切なり。

印度視察と訓示 (三)

尙又諸君が印度人雇員に對する點に就ても常に十分の注意を拂ふこゝ肝要なり、一體印度人を遇するには威壓的ならざる可からず云ふ考へを有する者あれども私は此點大いに疑義を抱くなり。畢竟日本人を遇するこゝ印度人に對するこゝは一にして其國人情には差違なきものと思ふ、殊に孟買の如く多數の土人を使用する所にては彼等をうまく利用し得るこゝ否は事業上に多大の懸隔を生ずる事は申すもなきなり。私が諸君に希望するこゝ

こは彼等に對しては決して侮蔑の眼を以て眺むるこゝなく、威壓の態度を以て臨まず時には茶話會の如きものを開きて彼等の希望も聞き又不平にも耳を傾けてやるこゝいふ寛量を示し一方諸君は大いに勉強して力量に於ては決して彼等に劣らぬ事を示し以て恩威並び行はるゝ様に心懸けてもらひ度し。

又内地出張員も特に此點に注意を拂ひ、彼等を押へ付けて使用するこゝいふ事無く又徒らに感情に走り其能力の適否を深く察する事なく誠首する如き事萬無之に信するも、若しあらば大變なりと思ひ居れり、兎に角彼等に對するには親愛を以て臨み人情の機微を察し、うまく賺して彼等を使用する様留意を望む。單純に威壓を以て臨むは最も拙にして且誤れり信ず。

尙私の心付きし處を一言せんに今日の商賣は今更申す迄も無く實に世界を相手とする事ゆへ、日常の取引に於て英語の必要なるこゝ益々其感を深くするに至れり。實に英語に堪能なるこゝ未熟なるこゝは非常なる損得あり此事は多く説明をする要なし當茲に力説して諸君の注意を喚起し置く。英語と同時に今後は佛語も大いに其必要を加へ來れり。今回の戦争後佛蘭西は殖民地を増加し其勢力を増大せし事多大也、今後吾が國も佛蘭西國の取引を増大するこゝ明かなれば佛蘭西語も亦大いに奨勵し度し。

以上申述べし如く吾々は實に如此決心を以て業務を經營して行く譯なれば諸君に於ても是非此邊の意義を充分了解し、諸君は大いに勉強して吾々各個人は必ずや他社の各個人に優り、而かも吾々が集合して事に當れば到底他社の隨從を許さざるものある様期せざる可からず。私が巴里に在りて諸種の事物に接して考へた處によ

れば今後日本が強くなるも弱くなるも實に國民の考一に在り下手な懸引のある外交も駄目なれば亦無暗に陸海軍を擴張しても日本は富強なりこゝいふを得ず。日本は國民の勤勉以外に何物もなし吾人は勤勉努力是れあるのみなり。去る大正三年一度歐洲に來り當時矢張り此考へなりしが今日亦依然國民は働くこゝいふ一事のみなり。巴里滞在中特使の高官に此考へを申述べ置きしが私は勤勉以外に何物も眼中に入らざるなり。日本帝國の基礎は茲二、三十年が最も大事なり、吾が綿花會社も勤勉努力を以て今日に至り、今後も亦勤勉努力を以て大いに勝を制せざる可からず。殊に我社の最も重要な財産とも言ふべき社員諸君は大部分は尙春秋に富む人々故是非諸君に訴へて自省を促し、大いに勤勉努力を以て我社將來の發展に資せられん事衷心切望に堪へざる次第なり。

君が二十四年前孟買渡航當時今昔の感ある事より説き起し、傲慢無禮の歐商の憐れなる最後を語り、我社の勤勉努力による發展の經過を叙し、更らに今後一層世界的大活躍の序幕に入るべきを警告し、之れに善處する必要の覺悟と決心を促したる諄々として倦まざる君の訓誨には、並居る社員一同の顔に感激の紅潮を漲らせたのであつた。

歸朝と拜謁の光榮

一ヶ月足らず印度内地を視察に費した君は、大正八年八月三日甲谷陀より新嘉坡に直航したのであつたが、不

幸荒天の爲め、延着を餘儀なくされ、遂に西園寺侯の一行に後れて、新嘉坡を出發、香港にて丹後丸に搭乘、八月二十九日長崎着、同地より陸路大阪に向ひ、天長の



大正八年八月三十一日
巴里媾和會議より歸阪當日・日綿歡迎會
× 印喜多又藏氏

佳節たる八月三十一日午前八時二十二分、數百名の盛大なる歡迎裡に梅田驛頭へ安着したのは目出度き極みであつた。君は直ちに我社の大廣間にしつらへる歡迎會に臨み、臨席の御家族始め我社役員、社員其他一同と共に、紀念の撮影をなし、終つて山田常務の音頭により、祝酒を酌んで先づ 天皇陛下の萬歳を祝し、次いで君の萬歳を唱へ、和氣藹々裡に散會したのであつた。

君の歸朝を祝すべく門前市を爲すの多忙さが、數日續いて後、九月九日公私の用務を帯びて上京され、九月二十日には牧野媾和副使其他と共に參内、忝くも拜謁の光榮に浴したのであつた、之れ獨り君の名譽のみに止まらず、實に我社に其光榮を分つものであつた。

媾和會議所感並我社支店巡察所感 (一)

君は歸來「媾和會議の感想」なるパンフットを知人に配送したが、左に載する處のものは、大正八年十月三日、社内講演會で述べた所感である、能く會議の經過を適當な所感に簡明に叙したのである。

「余は昨年十二月三日を以て媾和全權隨員を命ぜられ十二月九日牧野男爵一行に加はり同十日天洋丸に搭じて横濱を出帆せり余は任命を受けたる當時該地に於て果して如何なる要務を有し如何なる任務に従事すべきやに付ては全然知る所なかりしなり、因つて出發に先立ち親しく外務大臣農商務大臣とも會見せるも不幸にして何等具體的要領を得るに至らず、充分研究すら出來居らざりしものゝ如し聞く所に依れば開戰當時吾外務省に於ては今次の歐羅巴戰爭は少くも半歳若しくは一ヶ年を出でずして終局すべきも見做し戰後の方策に付き調査する所ありしも、不幸にして戰爭豫期に反し四ヶ年間の長時日に亘りしを以て折角の調査事業も等閑に附せられたるに當り昨年十一月突如として休戰條約成立し次で媾和會議を見るに至りし次第なれば吾全權すら恐らく具體的方針なかりし事信ぜらる斯の如くにして只連夜の送別宴に多忙を極めつゝ何等任務の了解を得るに至らずして出發せり、郵船會社近藤廉平氏の如きは余等一行に後るゝこ一ヶ月にして媾和會議に列席せるも尙當時如何なる目的を以て來りしやを知らざるの有様なりき。

牧野男一行は隨員及新聞記者約五十名に及びたり横濱解纜後布哇を經由して桑港に到着せるが恰も吾伏見宮

殿下の合衆國を退去せらるゝに際し御乗車ありし國賓列車の一行を俟てるに搭じ紐育に急行し夫れより直に佛國巴里に向ふ筈なりしも會議列席以前に於て英國政治家ミ會見し親しく意見を交換したしこの牧野男の所存ありし爲め豫定を變更して英國を訪ふこととなり、其後外務省より英國政治家は何れも既に巴里に出發せりこの報を得たるも既に華府政府の斡旋により乗船準備の出來たる後なりしを以て遂に一月八日同港出帆の英船カルマニア號に搭じて英國に向ひたり、海上波荒かりし爲め前後九日の日子を費し十七日「リバプール」港に着し同夜倫敦に一泊の上一月十八日巴里に安着せり、同日は媾和會議第一回準備會議開催され、米國大統領ウヰルソン氏が「リーグ・オブ・ネーション」の大演説を試みたる目にして恰かも之が終了を告げたる午後九時を以て巴里に着したる次第なり、豫め巴里大使館に依り割當てられたるホテルに入れるが當時巴里は尙戰時氣分を脱せざる有様にて夜間の消燈を行へる爲め全市暗黒の中に漂ひ、宿所の待遇も一般に行届かず、砂糖の如き缺乏の爲め代用としてサツカリンを用るバタは缺乏しパンの如き購入に切符を以てし、音楽は禁止せられ、レストラントは夜間九時を以て閉鎖を行ふ等未だ戰時の状態を去る事能はず、而して余のホテル「ホテル、ミラボ」は實業家のみを以て占められたり、我全權委員に於ては會議に對し準備の具體的方針なかりしが故に余等隨員は何等擔當すべき要務を有せざりき當時會議は國際聯盟勞働問題等の討議に忙殺せられ、經濟財政問題に至つては未だ之に觸るゝ隙なくウヰルソン氏は「リーグ・オブ・ネーション」の創設を以て高遠なる理想を實現せしむるに専念せり、されども各會議も議論百出して容易に歸結する所を知らず、佛、白、伊の諸國は速

に經濟状態を復舊せしめ商工業の恢復に付いて希望的苦情を提出すに至りし爲め、財政經濟問題の討究多忙を來すに至れり、余の附屬せるは經濟問題に關する事項にして其初めに當りては政治經濟一切の事務は大使館に於て取扱はれたるが事務の處理進行上不便少からざるを以て「プラスバンド」に於ける有名なる「ホテル、プリストル」を借受け事務所に宛つる事となし、稍整理を見るに至りしも米國に比すれば遙かに及ばざるものありしを遺憾とす、例令ば米國の如き其使用せるタイピスト數は實に約五十名の多きに上り隨時翻譯をなさしめ得たるに反し、吾國は僅かに二名に過ぎざりし状態にありしなり、初め一行の「リバプール」に到着せるに當り、偶々吾日本の五大強國の一員とし、待遇せられ窃かに國力の發揚せるを感じ中心頗る愉快を感ぜるも實際に當りては總ての點に於て英、米、佛に比して立後れの感ありしは余等の最も遺憾とする所なり。

會議は各分課に分れ、經濟は商務省、賠償問題獨逸財政問題は大藏省、海事は海軍省、陸軍省は陸軍に關する項目を分掌せり、而して今回の會議開催地に付ては一般にベルサイユ宮を使用せるが如く傳へらるゝも「ベルサイユ」を使用せるは前後僅かに二回にして何れも「ホテル・トリアノン」に於てせられたるを記せざるべからず、「ベルサイユ」は曩に五月七日彼のタームス・クラブ・コンフェレンスを獨逸に交付せる當時使用せるは六月廿八日媾和條件調印の當時使用せられたるのみにて、他は皆巴里に於てせられたるものなり。

吾國の最高會議に於て主として其衝に當れるは牧野使節にして、經濟は松井大使、財政は珍田大使之に當り西園寺侯之を統轄せり、余等の分掌せる經濟問題は各國擧げて重視せる所なれども、我當局は之に關して豫め

注意を準備を缺きたるものゝ如し。

經濟問題に關する事項は左の八分課會に分れたり。

- 一、不正競争——即ち獨逸のダンピング及偽造商標の取締規定
- 二、戰前契約——戰爭以前の獨逸の契約保險貸賣契約等の處分。
- 三、工業所有權——版權專賣權の所分の如し。
- 四、航 運——船積及ライン河及キャナル通過規定。
- 五、關 稅——關稅を如何にすべきか。
- 六、敵國人財産——敵人財産の處分。
- 七、押收及精算——差押物件の處分。
- 八、條 約——條約破棄に關する件。

右八小分科會は對敵國即ち獨、塊、匈國に對する媾和條件に賦課すべき經濟條項を討議し最高會議に報告するものにして三月初旬より六月中旬に至るまで、數十回開會せられ時としては午前六時より午後十二時に至るまで一日中數回の會合を催したる事あり、列國委員共に熱心其事に當り、議論百出せり、會議參列の資格は五大國代表者、小國五名の代表者に限られ其發言には英、佛兩語何れにても使用するこゝを許したり、従つて列國委員も通譯を伴ひ、之が通譯に當らしめたり、大統領ウキルソン氏の通譯たりしはカピテン、マントーミ

稱する佛蘭西人にしてケンブリッジ大學歴史學教授たり通譯中の一異才にして最も流暢に各條文を通譯し、今次の會議が始めて圓滑に進行を告げ得たるも、氏の力に負ふ所大なるものあるは言ふを待たず（英佛等の出案により小國の議案が五大強國會議に廻されしものは先づ文章を一定のものとして協議したる上分課會の題目にならずして却下さるゝ事あり）斯の如くにして五月七日に至るまで多忙を極めたるが、其後獨逸は媾和條件を保持し一々研究を遂ぐるに共に個々の條件に付きては其實問を許容せられたり「オーストリア」、「ブルガリア」等に對しては右國情に應じ多少の變更を加へたるに過ぎず、獨逸は媾和條項に對して何等議論を爲すこゝを許さず只イ、エ、ス、又は、ハ、の決定をなし得るのみなりしが抜目なき獨逸は遂に條件全部を認容して其局を結ぶに至りたり、會議の形勢は巴里にありし余等に比し諸新聞紙上諸君の却つて了知せられし事なるべし信ず、今次日本の媾和會議に於ける成績に付きては世上兎角の批評あり或は成功と言ひ或は失敗と稱せらるゝも、余の見る所を以てすれば曩に余がバンフレットとして發表せる『媾和會議の感想』中にも述べたるが如く大體に於て成功なりと言ふを妨げず信ず、然れども今回の媾和會議より得たる教訓も稱すべきは吾國は五大強國の一員に列したり、雖も其媾和會議に於ける事項は多くは二、三大國の決定に依るこゝ少からざるの一事之にして畢竟日本が五大強國の一員に列せるは東洋に於ける特殊の地位並びに國民の現存を認められし結果に外ならざるも幾分買被られ居れるの氣味なきやを疑ふものなり、日本は事實に於て絶對に大國の列に入り大國たるの實を擧げざるべからず、大國の列に加はりて克く自己の地位を維持し之を傷けざらむとするには又實に非常なる奮

闘努力を必要とするや固より論を俟たず、今次の媾和會議に當り最も克く成功を納めたるものは實に英國にして英國は委任統治の下に「カイロ」より「ケープタウン」に至る鐵道敷設又印度に至る「バグダット」鐵道の管理をも實行するを得るに至れるなり、之一つに總理大臣たるロイド、ジョージ氏の外交政策成功の結果なりと言ふべきなり。

今回の媾和會議に於て自ら案を具し、又最も公平なる主張を一貫の態度を持ち克く成功を勝ち得たるものは英國にして余の竊かに感嘆措く能はざる所なれども、而も米國に至りては其外交方針の頗る傍若無人にして自ら自己の權利を主張する場合に當りては他國の事情如何を顧慮すること極めて薄く、日本が此間に處して全く遺憾なき主張を一貫するに付ては少からざる困難を感じたり、吾國に於ける政府反對黨は西園寺侯及牧野男に對し外交の失敗を批難して已まず、されど、吾日本國民は始より媾和に對して何等具體的希望條件を明示せず、同時に吾使節一行に對して何等の輿論的要求もなせることなかりしを思はざるべからず、日本は元來小國なるが故に其國本を商工業の發達に置くを最も必須の事柄と爲すべく、従つて媾和其ものに對して餘りに重きを置かず、又強ひて獨逸に對して不利益なる條項をも提出する處なく、將來英、米、佛の關稅政策に對して最も周到なる注意を拂ひたり。

媾和會議所感並我社支店巡察所感 (二)

目下の吾國情を察せずして、近來歐羅巴より歸朝せるものは歐洲の新思想を宣傳し、種々勞働問題を議論せり。雖もコハ畢竟吾國商工業界の根底を危くするものと言ふも過言ならざるを信ず、我國に歐洲交戰諸國とは互に其國情を異にし英佛の如き戰爭の遂行上戰時多數勞働者の徵發を必要とし、又之を行へる爲め彼等の要求は假令多少の不條理を以てするも之を認容するの已むを得ざるの状態にありしも、而も其結果戰後の今日に於ても勞働者をして最少の勞力を以て最大の勞銀所得を保たんとするの弊風を生じ、一個の過激なる勞働問題となり、世に現はるゝに至りし者にして、畢竟歐洲は戰爭の結果、氣風著しく荒漲せるに當り、偶々此間に伴生したる無暴の言論を以て、之を新思想なりと認し、直に之を我國に移し、却つて之をリードするの途を知らざるが如きは抑も其智識觀察の意外にも淺薄なるを語るものと言ふ可きなり、予は茲に我邦の學者を攻撃して快むるものに非ざるも、我國の學者が實社會の事情に疎く、淺薄誤謬の觀察を以て歐洲の弊風を迎へ、之を以て社會改善と思惟する如きは、予の最も遺憾とする所也、然るに一方社會の指導機關を以て任せる新聞紙の如きも、其營利販賣政策上の立場より、多數迎合の説を唱へ、深く根本に横はれる正邪の事實善惡の結果を究めずして、一に勞働問題を論議し、勞働者紛議を誇大して益々社會人心を煽揚するが如き、又予の採らざる處也、人を人として、我を我として、勞働問題如何を決定するには、先づ英國其他に對する、通商條約決定後

に於て、之を解決するも遅からず信ず、若し歐洲の誤れる弊風を是認して、勞働時間の短縮、賃銀の騰貴等
 英米諸國に相距るこゝ、遠からざるに至るの場合を想像せんか、吾製品は印度に於て、英國品との競争不可能
 となり、英國品の賣行良好たるべきは勿論、更に英國にして保護政策を以て、印度に保護關稅政策を採るが如
 き事あらんか、戰時中我國の擴張せる販路を喪失するのみならず、我製造工業品の競争は絶對に不能に終るべ
 し、今日國際聯盟條約の批准は未だ終るに至らず、勞働問題の如きも、各國の國情に應じて、例外規約の認め
 られたるものある場合、勞働問題は暫く之を放棄して、其間自國製品を海外に擴張するを急務に信ず、之を今
 日に見るに、勞働問題に對する我國論は、歐洲の如く歸一せず、資本家も勞働者も宜しく日本將來の國是の商
 工業にあるを考量し、國家も亦國是を定め、戰後の經濟方針を確定して後、勞働會議に臨むべきを、至當の順
 序、至當の措置なりとするも、不幸にして勞働會議の早く既に目睫の間に迫り、之を如何にもする能はざるは
 予の特に遺憾とする所也。

次に南洋諸島及山東問題に關し、我國に於ては議論少なからざるも、予の所見によれば、南洋諸島の如きは、
 經濟上の見地よりすれば、全く價值に乏しく、従つて生産的事業を起すも收支償はざるべく、又之を防備の點
 より見るも、其非常なる大事業たるは云ふを俟たず、故に該占有を主張するものは、唯其五百四十平方哩を、
 戰時占領せるの故を以て、之を領有管理せんとし、今後日米戰爭惹起の場合を豫想して米國の通路中斷の、楔
 子たらしめんとするにあるのみ。

山東問題に關しては、始め支那使節陸徵祥の我一行と共に巴里に赴かんとする希望をすら、ほのめかせし爲
 め、此機會に於て我國は寺内内閣當時に於ける意志の疎通、感情の融和を圖らんとする意嚮なりしが、不幸に
 して支那青年政治家顧維鈞及び王正廷兩氏共に米國仕込の人にして、非常なる排日黨なりし爲め、遂に目的を
 達するに至らず、加之兩委員は支那が獨逸に對し、宣戰を布告するに同時に、獨逸の支那に於て、有せる總て
 の權利は、當然支那に復歸せるものにして、妄りに日本が山東に對する獨逸の權利を、依然として繼續するは、
 非當の措置なりとなすにあり、され予の所見を以てすれば、コハ青年政治家の謬見に基くものにして、採る
 に足らず、我國は歐洲戰爭勃發後一週にして山東を占有せるものにして、英佛の如き當然日本の權利繼承を是
 認せるに不拘、二ヶ年後に於て獨逸に宣戰せる支那が、卒然として獨逸の權利を恢復する事を得べきや謂はれ
 なき也、之れ實に支那の外交方針の、全く失敗に終れるを示すものにして、幸に日本の要求せるが如く、權利
 を獲得したるものは、一に我全權委員必死の努力たる賜たるに同時に、政府當局の力にして又實に背後に於け
 る國民の力に云ふの外なかるべし。

茲に於て日本は、山東の政治權を支那に還附するも、經濟上、船渠管轄權、專管居留地、又は共同居留地の
 設定、鐵道の共同管理、鑛山探掘、警察權等の利權は舉つて之を繼承するに支那は自ら誤謬の見解を持して、
 徒らに條約の調印を肯んぜずと稱し、或は漫りに日貨排斥を煽動するが如き、愚も亦甚だしき言はざる可から
 ず、斯の如き事情を謬見に基けるボイコットは必ずしも恐るゝに足らざるのみならず、特に彼の「ベナン」に

於ける、日貨排斥の如きは、全く其裏面に於て、排貨の動搖に乗じ、當時の米騒動を惹起し、米を略奪せんことをの擧に出でたりと稱せらるゝにあらすや、又馬來半島に於ても、支那人は表面、日本商店より買取をなさざるも、而も日本商品は、支那印度商人の手を経て、明らかに賣行きつゝあるの事實を示したり、思ふにボーコットは克く目的を達せず、日本品賣行には、大なる影響を及ぼす事、能はざりしと雖も、兎に角日支間の關係は、右の如き各種の事實の爲め、極めて圓滑ならず、將來と雖も其親善の實斯くの如くんば、得て遂に望むべからざるを恐れる。

媾和會議所感並我社支店巡察所感 (三)

要するに予は、今回の媾和會議に於て、滯歐九ヶ月中二ヶ月を英國に、一ヶ月を瑞西に、五ヶ月を巴里に、經過せるも、何等爲す所なかりしは、予尙かに慚愧に堪へざる所、其間安井、奥村兩君の常に能く予を援助し種々の煩勞を採られし事は、予の深く感謝措く能はざる所也。

今回媾和會議に列し、特に感ぜるは、語學の研究、會話の必要にあり、予は不幸にして、全然佛語の智識に乏しきも、亦幸にして無事會議に列し、多大の不便を感じざりしものは、夙に兩君の力にして、今後の商工業に従事し、海外に發展するには、英語の必要大なるは勿論なれども、亦佛蘭西語學の研究も益々重きを加ふるは云ふ迄もなし、諸君に於ても益々此點に顧みて、語學の研究に進むを要すべく、之れが爲めにする便宜も、

助力は予の喜んで計らんご欲する所也、予は米國、印度に於ける本社各店に於て深く感ぜるは、不幸にして今日支店諸君の語學に對する研究が、不足せるの一事にして、之が研究を爲す事なくんば、幾年の長日月を、海外に經るも語學智識の發達すべき望みなかるべし、尙予は同一の事を諸君に繰返へす次第なれども、綿花會社はオ、ル、ワ、ンにして安りに新思想に驅られ、亦之れが爲め捉はれざらん事を希望して止まざる次第也。

尙予は今回歸朝の途次、印度に立寄り、「コロンボ」にて中村支店長、齋藤、八木兩氏に會し、夫より汽車にて、「サツール」、「マドラス」を経由し孟買に入れるが、途次「サツール」に於て齋藤君、小山君、「グンタカル」に於て瀬川君、宮城君、「ツリチノポリ」に於て山道君に會したり、孟買着後更に「アコラ」に至り内山君に、「カラチ」に於て有山君に會し、歸途「モントゴメリー」に立寄り、親しく實地視察を遂げたり、惟ふに我社エジエンシーの數は、甚だ少なからざるに共、其内地に於て使用せる、使用人の數も亦多數に上れるを以て將來如何にして印度人を、巧みに使用すべきかを考量し、其措置を誤らざらん事は、予の希望に堪へざる所、誠に印度人は支那人と異なり、日本人と融和し、又尊敬の念を持せるが故に、印度に棉花事業に従ふものは、出來得る限り、益々印度を研究し、巧みに之を利用するの要あるべし、今回歐羅巴取引も次第に恢復を告げ、再開始を告ぐるこゝなれるを以て、當社は新に佛國「アール」に出張所を開設し、奥村君其衝に當り、田中徳藏君之を補助し、又近く和蘭「ロッテルダム」に於ても、エジエンシー設置の進行中にて、現に故スタイマン氏の令弟を煩はし、手續中にあり、何れも米印棉を歐洲に販賣し、漸次擴張發展を爲すべき考へなるが、

歐洲方面に於て、支店出張所の開設するに連れ、語學の必要一層重きを加ふべしと信ず。

終りに望み、一言すべきは、予は西園寺使節の乗船、熱田丸を新嘉坡に擁し、一行と共に歸朝の筈なりしが、フグリー河に依り、「カルカッタ」に至る百二十哩の旅程に、長時間を費し、殊に印度洋上の風波荒く、豫定の時日より遅れて新嘉坡に入りし爲め、熱田丸は既に出帆し、遂に一行と共に歸朝する能はず、丹後丸にて無事歸朝せり、其間三度颶風に遭遇し、又「モントゴメリー」に於ては、百十三度の暑熱に遭遇せるも、幸にして無事なる事を得るに共に、今期成績の極めて良好なるを聞くを得るは、予の窃かに感激に堪へざる所、幸にして、今後益々積極的の方針を以て進み、豫て會社の向上を圖らむ事を希望に堪へず」

平和樂觀の灼熱相場を警戒す

數年に亘つた歐洲大戰も大正七年十一月突如休戰條約成立し、亞で巴里の媾和會議となり、大正八年一月以來各國全權の間に數月に亘つて論議せられ、四月末を以て漸く平和條約を議決したのであつた。而して此條約は五月七日を以て獨逸全權に交附せられ、六月二十三日獨逸全權の調印承諾となり、愈々六月二十八日を以て媾和條約調印を了し大團圓を告げたのであつた。

世界各國市場は媾和會議の推移に多大の注意を拂つたのであつたが、大體に於て樂觀人氣市場を壓し、一般物價滔々として上騰を續けるの大活況を現出し、同年七月に於ては、米價は戰前の十二、三圓に比し、三倍強の

四十二圓、其他の食料品亦大抵戰前の三倍強、石炭に至つては戰前の五倍強、綿糸は戰前の百三十圓に比し五百五十圓以上六百圓に實に四倍半、綿布は粗布戰前四圓五十錢が十六圓に約四倍、棉花は約三倍の高價を顯はせしに徴して、略々當時の熱狂状態を想察し得べしと思ふ、此時政府は物價調節、輸出制限策等を持出して、市價の抑壓を講ぜんせしも、恰も燒石に水の觀ありて効果擧がらず、却て十一月には一段の狂騰を呈し、綿糸七百圓以上の未曾有の珍値に吹上げたのは、皮肉も亦甚しき云はざるを得ない。

君は六月二十日馬耳塞を出發、印度に立寄り内地視察の上、八月三十一日無事歸朝したのであつたが、到る處經濟界の大活況を目撃し、殊に日本着後の大隆盛振りには君も全く驚異の眼を見張つたのであつた。

餘りに熱狂に過ぎた市場の大勢を靜觀し、其恐るべき反動を考へた君は、大正八年十一月八日社内講演會に於て、左の如く社員に警告して、此際大に慎重の態度に出づべき事を注意したのであつた。

『本日の三品相場は、史上未曾有の高値即ち當十一月限最低七百一圓最高七百十圓五十錢、前場大引七百十圓五十錢、先四月限最低六百八十五圓三十錢、最高六百八十六圓三十錢、前場大引六百八十六圓三十錢にして午後立會中止テ、驚くべき熱狂相場を現出し、原棉相場も綿糸布相場の開きが、非常な値幅を存するに至り、其程度の餘りに甚しい爲め、製品の暴利呼ばはりされる事も亦止むを得ないと思ふ、併し内地の購買力の旺盛な事も亦驚くべきものがあつて、斯る高値のものが、ドン、ドン、賣行を見る有様から推すに、當分反動もなさそうに見へる、されど此張り切つた相場は、何れは一度崩壊を免れぬのは當然である、唯其時期の問題であるが、

將來此不幸なる大反動期が實現し、パニックの襲來を見る如き場合の結果を考へて見るに、悚然として、戦き恐れざるを得ない、恐らく雷に糸屋の蒙る損害のみに止まらず、近時投機的傾向に連れ、設立された幾多の新會社、新工場の蒙る影響の結果は、全く慘めなものあるを豫想せざるを得ないのである、更に一面綿糸布相場が斯の如き状態を以て、天井知らずの昂騰を演ずるに於ては、逆輸入も行はれる事にならう、加之政府も物價調節策として輸入税を撤廢し、或は更に一步進めて輸出の制限を實行するが如き事にも立至れば、我帝國の綿業は、爲めに甚しく壓迫を蒙るに反し、恰も他國の紡績織布工場を獎勵するの結果を生じ、遂に多年の苦辛、多年の努力を以て、築き上げた事業其物をも破壊せらるゝに至り、國家の爲め頗る憂慮すべき事態を惹起せざる可きや、實に寒心に堪へざる事柄なりと思ふ。

現下經濟界の事情正に以上の如くなりませんが、吾政府は或は最高相場を公定し、或は先物取引期限の制限をも實行するに至るや又測り知る可らずと思ふ、世上偶々斯る物價調節策は、現政府にして到底能く爲し得る處に非ずこの見解を主張するもの、無きにしもあらずと思ふが、予は既に述べたる如く、今日に於ける棉花、綿糸布の値開きの、極めて不自然に置かれ、甚しき暴利なりと稱せらるゝも已むなき状態の下に於ては、現政府にしては徒らに拱手傍觀の態度を採り、自然の成行に放任する事を得るや否や疑問なりと思ふものである。茲に於て我社は慎重に善處を心掛けねばならぬ、益々健實の方針に着實の態度を以て、克く此間に處し、苟くも將來に對して誤算不用意の無からぬ事は、最も必要とし急務と信する次第である、従つて我社としては

此際調子に乗り過ぎざらん事を警めて、小心翼翼の態度を持して居る次第だが、世上往々にして我社の斯の如き態度を評して、或は惰眠を貪れるもの、或は又當年の意氣を失へるもの、酷評するものあるに至つては、其眞相を究めざる皮相の見解にして、一笑に堪へざるに共に予の遺憾とする所である、諸君にして若し眞に經濟界の事情を解し、吾社獨特の立場の方針を了解し、吾社の一員たり我家族團の一員たるを思はゞ、健實の精神を以て會社の方針を諒解し、益々各自の業務に精勵せられん事を切に希望する次第であります、』云々

五千萬圓に大増資 (一)

對獨平和條約成立後の世界經濟界は、見る／＼活氣横溢、物價は天井知らずの昂騰を始め、事業界に云はず、商業界に云はず、造るもの、商ふもの、殆ど悉く巨利を博せざるなきの大活況を現出し、媾和當年大正八年末より大正九年初頭に掛けて、其絶頂期に達したるかの觀があつた。

我社は大正七年六月資本金五百萬圓を倍額一千萬圓に増資したのであつた、其後の商盛に物價高き企業投資は流動資金の充實を必要としたので、其株金拂込は矢繼早に行はれたのであつた、即ち

大正七年七月二十七日 第一回四分一拂込

大正八年一月十八日 第二回四分一拂込

同 年七月十日 第三回四分一拂込

大正九年一月二十六日

第四回四分一拂込

に由つて、資本金一千萬圓は全額拂込済みとなったのであつた。

此間我社は、世界大勢の好調に乗じて、好成績を挙げ得たるに同時に、時勢の進運に伴ふ丈の諸設備を圖るに勉むるは勿論、本業との關係を有する諸種の傍系事業の着手に當る等、非常の膨脹を敢てしたのであつた、従つて流動資本の外、固定に要する金額も多大に上つたものである。

君は夙に世界雄飛の壮志を抱けるもの、此世界に動く經濟界の一大跳躍期に臨んで大に考ふべきあるは、素より當然の事であらねばならぬ、君は辯和會議を終へ印度を廻りて歸朝するや、益々我社各方面に亘りての設備充實を要するを痛感するに同時に、君の素志を延ばすの機會正に此時にありし許り、資本金を一躍五倍の五千萬圓に増資するの案を心に決したのであつた、乍併斯の如き老大なる計畫の實行に就ては、慎重の態度を採るの當然なりしして、君は同僚の外、先輩、取引銀行其他主なる得意先の意嚮を夫々聽取参考に資したのであつたが、歸する處幸ひに何れも賛同の意を表されたのに君も安心して、愈々最後の腹を決めつ、役員會に諮りて大正九年三月一日臨時株主總會を招集、本案を附議確定するに至つたのであつた、當日君が株主總會席上で述べた増資理由は次の通りである。

五千萬圓に大增資 (二)

「今次會社當事者が増資の必要を認め、從來の資本金壹千萬圓を五千萬圓に増加せんとするの案を具して、臨時株主總會の議に附し其承認を求めんとするに至れる所以のものは、全く時代の要求に順應して遺憾なきを期せんとする微衷に外ならず。

第一 諸物價空前の騰貴

戰時及戰後に於ける世界的物價の一大騰貴を告げたる事は著敷き事實也、吾國の物價が獨り此圏外に立ちて其安定を維持せんことは固より免れ能はざる所、現に日本銀行調査物價總平均指數の示す所に見るも、戰前たる大正三年一月に於ける一三〇より本年一月に於ける三九八となり、其間實に二十割以上の騰貴率を以てせるが如き明に這般の消息を語るに足るものなしとせず、偶々吾社取扱商品中の主要項目たる棉花、綿糸布の如き、世界的主産業の原料品若しくは製造品にして、戰時中に於ける一大軍需品たりし關係上、特に顯著なる騰貴を告げ今尙騰貴を支持しつゝあることは又事實の證明する所なり。

	戰前	現在	騰貴率
棉	百斤	四〇〇〇 ^円	一三五〇〇
花	一捆	一四〇、〇〇〇	六八〇、〇〇〇
綿	一捆	四〇〇〇	一三、〇〇〇
布			四五割〇

即ち棉花は二十割、綿糸は三十八割、綿布に至りて四十五割、の騰貴をなせるを見る斯の如き状態なるを以て吾社取扱數量が戦前と今日及今日以後に於て何等増減なきものと假定するも之等諸品の騰貴に相當せる多額の資金を必要とするや論なき所なり。

第二 吾社取扱數量の増加

吾國は戦時に於て遠く歐洲交戦舞臺の圈外に立てるに共に、世界的物資供給不足の結果として、綿糸布の對外輸出に至大の増進を來し、綿業界の活躍特に顯著なるものありしのみならず、隣邦支那に於ても亦歐洲品の供給減少により、或は近く關稅引上の保護に依りて、紡績業進展の機運を煽り來れるものあるは、世間周知の事實なり、兩國に於ける斯業の趨勢が、如何に戦前と戦後とに於て其趣きを異にせるものあるやは、戦時中に於ける紡績錘數の大増加並びに今日に於ける新設擴張計畫の明かに之を指示する所なり、即ち戦前に於ける吾紡績業の總錘數は、二百四十一萬錘なりしもの、昨年末現在に於ては三百九十二萬錘となり、又支那に於ては戦前百六萬錘なりしもの、現時に於ては百五十萬錘を數へ、此外新設擴張の計畫に屬するもの確たる計數を得がたきも、蓋し豫想外の數字に達するなるべし。此急激なる斯界の發展と生産の増加の免がれ難きは蓋し當然の成行と云はざる可らず、殊に吾社が本邦の基礎的の一大工業たる紡績業の一機關として、其必要とする原料の供給に任じて遺憾なく、又其製品販路の擴張を計りて誤りなからむ事は、明治廿五年吾社創立の當時以來終始

一貫の方針にして、將來と雖も何等變化を來すべき理由を發見せず、偶々戦時中偉大の發展を告げたる紡績業の新舊關係を維持し、親善に努め益々其便宜を計らむとするに當りては、獨り原料品のみならず、其製品の取扱數量を増加を來すべきは洵に已むを得ざる事柄にして、資本金額の増加によりて之に應ずるの外なきは多言を要せざるべしと信ず。

第三 吾社取扱品目の増加

吾社は從來に於て既に雜貨類の取扱を避け、主として纖維工業品の大貨物に力を集中し會社設立の主要營業科目たる、棉花綿糸布以外に於て、近年新に生糸及羊毛の取扱を開始したり、就中生糸の如きは吾國輸出の大宗たる品のみならず、國家的事業中に於ても彼の紡績業と相並んで、最重要の地位を占め將來に於ては其現時の家内工業より更に大規模なる工場工業たるに至らむとするは、近時資本金五千萬圓を以て組織せられたる某製糸株式會社の一例に顧るも明にして、對外發展の能力も亦次第に多きを加ふるに至るべきは論なき所なり、偶吾社の之が取扱を開始せるは、此革新の機運に乗せるものにして日尙淺きに拘はらず、對外各取引先との連絡關係頗る良好にして、其價格の如きも戦前に於ける七百圓なりしもの、一時四千五百圓を唱へ其間我取扱數量は日を追ふて増加を來せるは最も喜ぶ所にして、將來更に一層の努力を此國家的事業の爲に致さんことを期しつゝあり、羊毛に至りては今日に至るまで未だ大なる取引を特に誇るに足るものなしと雖も、棉花、綿糸

生糸等に對して、亦貿易上主要の商品たるは云ふまでもなし、斯の如く取扱品目の増加せる一面、其品目たる生糸云ひ、羊毛云ひ何れも取扱に巨額の資金を要するものにして、増資により其目的を達するの外なき所以なり。

第四 營業諸設備の完成

大凡事業の發展進歩を圖らむに當りては、固より人の問題に重きを置かざるべからざるは勿論なれども、營業上諸般の設備を完成し以て遺憾なき活動に資するの要あるは言ふを俟たず、吾社は多年此點に關して最も深き注意を拂ひ、印度支那に於ては棉花壓搾荷工場を始め、數個の練棉工場を所有して、直接之が經營に當り、又内外各地に於て新に支店、出張所を増設せんことも、適當なる貸屋なく近來は概ね事務所社宅さへ自ら設備の必要有る有様なり、然るに諸物價諸材料の騰貴は一事務所一社宅の新設に當りても之に要する固定金額は、到底從來の舊設備と同一視すべからざるのみならず、往々にして數倍の費用を抛つにあらざれば以て充分に其目的を達し能はざるの状態にあり。

第五 外國と外國との取引

吾社が本邦紡績業の一機關として、原料の輸入製品の輸出に任ずる事は、終始一貫の方針にして將來も雖も

何等變化を來すべき理由を發見せず、されど苟くも世界の一大會社として克く其地位を保ち又豫て信用を維持せんことを期するに於ては、單に從來の如く日本對外國との取引に其存在を局限するを許さざるのみならず、設備の完成に伴ひ外國の取引に對して其手を染むることは最も有利にして時代の進運に添ふ所以なるを確信せり、殊に近年の成績に徴する時は、亞米利加に於て、印度に於て、將又支那に於て外國對外國取引を行ふことは必ずしも邦人に採りて困難の事業たらざるのみならず、單に日本向商品のみを取扱ふ場合に比し、外國に於て更に外國向のものを取扱ふ方却て日本向商品取扱上に資するの便宜あるを發見せり、吾社が主たる業務の一として其前途に矚目し力を注がんことを欲するに至れる所以にして、此目的を貫徹せんが爲には獨り世界の一會社たるに背かざる資金の充實を要するのみならず、其信用の維持擴張を圖るに就きても之を必要とするは言ふを俟たざる所なりと信ず。

第六 近き將來に對する金融界

歐洲の大戦は獨り交戰國に於ける多大の人命を喪へるのみならず、物資を破壊し資本の消耗を招ける事は、今日之等各國の財力著しく疲弊せるの一事に顧るも明なり、只我國金融市場にありては、不相變金融緩漫にして、昨今事業勃興するも今尙甚敷惡影響を見ず、されど獨り日本のみ此好況を永久に持續するや否や頗る疑問たるに共に、必ずや好況の反動又は世界的不景氣の襲來ありて近き將來に如何なる變動あるや測り知り難く、

現に是れを昨年十二月の事實に顧みるも思ひ半ばに過ぐるものあるべし、我社の如き斯る時代を豫想して今にして周到の注意に相當の準備をなすは蓋し當然の措置なりと信す。

第七 増資發表後の世評

上記の理由により會社當事者は其最も妥當と認むる成案を具して、之を臨時總會の議に附するに至れるなり、然るに増資案の一度び世上に流布せらるゝや、往々にして増資金額の突飛にして又脱税手段の意を藏するものなりとの世評を耳にするものあるは最も遺憾に堪へざる所なり、増資額に關し會社當事者は夙に慎重なる考慮を加へ且つ先輩並に取引關係先の意見をも聴取し、其賛同に依て決定なせるのみならず、増加資本金四千萬圓と雖も内一千萬圓の徴收を行ひ、其後に於ては必要に應じ拂込を徴するものなるを以て、必ずしも突飛の増資と見做し難きを信ず、或は米國に於ける同業會社にして、其資本金の割合少なるに不拘、克く多額の取引によりて發展を遂げつゝあるものなきにあらずと雖、こは各州各別の法律により拘束を蒙れる結果にして、一流會社たるマクフワードン其他の如き、何れも事實上裏面に多額の資本を擁せるを見る、況んや脱税手段としての増資云々の非難に至りては、妄も亦甚しく全く會社當事者の意外とする所にして、世上の誤解に出るものならず、只夫れ五百參拾七萬五千圓の振替拂込時期を三月三十一日とみなしたるは他意あるにあらず、昨年及一

昨年に於ても共に十二月卅一日を以て株金一部の拂込を徴收せるの事例を踏襲せるものにして、又何等不可思議にあらざるを信ず、國家の一人として發展し來れる吾社が、脱税によりて自己の責務を免がれんとするが如き、一點の野心を藏せざるは勿論、増資によりて眞に海外發展に貢献せんことを欲するに外ならざるなり。

一昨年巴里に於て媾和會議の開催せられんとするに際し、不肖大命を拜し媾和使節の驥尾に附して彼地に赴くに當りては、一切吾社及個人として不肖の事情を抛ち、滯歐九ヶ月の久しきに亘りて一に使命の重任に背かざらむことを念慮したり、若し夫れ單に吾社の利害個人の休戚よりすれば其任にあらざるの故を以て拜辭するに至當とするも、一意國家に對する奉公の念禁する能はざるものあり、喜んで命に應じたるは各位の多く諒せらるゝ所なるべく、固より何等貢獻の記すに足るものなしと雖も、日夜の努力を以て出來得る限り國家の爲め盡瘁せん事を期したりしなり、今日及將來と雖も居常國家發展の念頭を去ることなきに當り、偶々今回の増資案を以て脱税の手段なりと評し、或は増資金額の突飛を云爲し、種々の非難を加ふるものあるは最も遺憾とする所、希はくば各位に於て會社當事者の眞意のある所を諒察し、滿場一致今次の増資案を可決し、以て一面吾社の發展を圖り一面國家の進展に資するを得ば蓋し望外の幸ひ之に過ぎざるなり。

第八 増資の方法及時期

今次の増資方法に就ては既に世上周知の事柄にして、新株式八十萬株中四十萬株に對し、三月二十日現在株

主の有する株式一株に付新株式二株の割當を行ひ、殘餘四十萬株中三萬株は役員及社員の功勞株に當て、更に殘餘三十七萬株は額面以上の價格を以て一般公募に附し、公募の時期及方法に關しては取締役會の決議に一任することとし、舊株に對する割當新株四十萬株及功勞株三萬株合計四十三萬株の第一回拂込金は積立金及繰越金中五百三十七萬五千圓を以て振替充當すべく、振替及公募拂込も三月三十一日迄なすことせり。

- (イ) 舊株主が其所有株式一株に付新株式二株の割當を受くる事は世上其例に乏しからざる所、何等不條理の點なきを信す。
- (ロ) 功勞株三萬株に對して或は其多きに過ぎずやこの非難あるや知れざれども、其株式は僅に増加總株式の一割に足らず、吾社が二十五年十一月壹百萬圓の小資本を以て其創業をなして以來、三十九年七月貳百萬圓に、大正五年六月五百萬圓に、大正七年六月壹千萬圓に、而して今や五千萬圓に増資計畫を爲すに至るまで一浮一沈、時に會社の運命を疑はしめたるが如き悲境に遭遇せるに拘はらず、終始會社の爲め奮闘努力し以て今日の大成を致せるの功に報する必ずしも三萬株を以て多きに過ぐるに云ふべからず、殊に吾社々員間に於ては從來和親協同會社に生死を共にせんことを美風の維持發達を期するが爲め、此機會に於て功勞株を分與し之に報ゆる所あるべきは會社當然の處置なりを信す、獨り現在の役員社員に對し、其既往の功勞に報ゆるのみならず、更に前途獎勵の意味を以て新役員及社員にも及ぼさんとするの意嚮を有す。

- (ハ) 舊株主に對する割當株及功勞株四十三萬株の第一回拂込金に對し積立及繰越金中五百參拾七萬五千圓を振替充當することは只從來會社資本金の性質を有せざる財産が、資本金に變形せるに止まり會社の財産状態に於て何等不安なきのみならず、一般公募新株式に對するブレミアムを豫想するに於ては、新に相當の積立金を生すべきを信す。

- (ニ) 三十七萬の額面以上公募に關しては、幸にして總會の決議を経ば、之により取締役會に於て相當募集の方法を講すべく、會社當事者に於ては良好の成績を挙げ得べきを確信す。

- (ホ) 新株式第一回拂込は三月三十一日を以て徴收すべく、第二回拂込に關しては今日之を斷言し難きも、會社當事者としては今後滿二ヶ年内に徴收せんことを欲する意圖を有せり、第三回及第四回拂込に至りては、全然未定の問題にして必要に應じ將來徴收することあるべきを豫言するに止まるのみ。』

五千萬圓に大增資 (三)

大正九年一陽來復後の財界は、依然樂觀氣分横溢の無憂天地の觀ありたるに似たるも、事實幾多の反動原子は、内部に浸潤しつつあつたことは、他日に於て反省させられたのであつた、即ち我邦は對外貿易に於て驚くべき入超期に遭遇して居つたのであつた、一月より三月迄入超二億六千餘萬圓を算した、政府當局の物價對策も眞劍に

なつた、銀行業者は金利を引締め貸出を警戒し出した、歐米各國の財界にも警戒の聲漸く揚がるに至つた、支那市場は日貨排斥の爲めに輸出の不振を免れぬのみか、支那紡績に振興の機會を與へた、印度市場は關稅増加の爲めに壓迫を蒙つて居たのである、是等の事實は前年來の好景氣に眩惑して、有頂天になつて居た大多數の眼中には、不幸にして認識不足を免れなかつたのである、併し乍ら事實の前には遂に降服の外はない、世界的頽勢のうねりには、さうにも拮抗するこゝが出来ない、三月末に至つて遂に慘落崩壊の海瀟に襲はれたのであつた、市場は恐怖傍觀呆然として成行に任かすの外なかつた、株式市場や三品市場の立會停止は三月末より四月に及んで再三行はれるの破目に陥つた、銀行の破綻、商店の破産、事業家の失敗等陸續として曝露され、四月二十六日三品相場四月限三百九十圓に慘落、之を前年十一月十日即ち約六ヶ月前の四月限相場六百八十六圓三十錢の建値に比べるに、勿驚實に二百九十六圓三十錢即ち四割三分強の激落振を示したのである。

我社大増資の斷行が三月一日に於て決議され、其第一回拂込期が當時財勢の一大轉換期を劃した三月末日を期して實行されたことは、君の機敏に明察の賜たるは、素より疑なき處なれども、抑も亦天祐の然らしむるものありしを思ふべきであらう、若し夫れ拂込の時期にして二、三週間を遅れたらんには、或は大増資を水泡に歸せしめたものではなかつたらうか、長らく苦心經營を續けて育くみ來つた大きな事業の伸展に對し恐らく天の感應に惠まれたのであらう。

第一回拂込に應ぜず不得止失權處分に附したものは僅に二萬二千餘株即ち總増資八十萬株に對する二分八厘に

過ぎなかつたが、こは現物團の引受けによりて全部の拂込を完了し、五月三十日臨時株主總會を開いて募集及拂込完了の經過報告をなし、六月八日無事登記を終り、大増資の幕は閉ぢられたのであつた。

大増資後の感懷

大増資が以上の如き経緯を経て幸ひに成功に至つたことは、素より君の本懐こした處であつたが、増資後財界の餘りにも移り變り行く慘めさを靜かに眺めた君の感傷は一と通りの事ではなかつた。

君は大正九年六月二十三日社内講演會の席上で次の如く感懷を述ぶる處あつた、

「増資決行後我財界は急轉直下の慘落を現出するに至つた、今日より之を見れば我社の増資は時機の宜しきを得たのを幸と思ふのである、乍併纏て株主側を顧みれば甚だ御氣の毒千萬である、即ち七十七圓五十錢拂込の第二新株が最近二十五圓の安値に低落——尤も今日は三十五、六圓處に恢復——するに至つた一事で、六十五圓のプレミアム附公募に不拘、應募者非常に多數に上つた程の好人氣であつたものが、其後形勢一變今回の下落に遭遇し、多少とも利益を豫期した新株所有者は、却て反對に少なからぬ損失を招くに至つた結果となり、新株主に對しては一入同情に堪へない次第である、尤も今回の暴落は獨り我日綿株のみに限れるにあらず、都ての株式、證券類も同様の有様で、全く採算的眞價を無視した恐怖人氣の然らしむる處に云ふの外はない、或

る一部に於て我社の收めたプレミアム全額を此際株主に返却すべしとの説を爲すものありき聞いて居るが、一旦拂込を了し、既に會社の財産となり、登記を終りたるものを再び返却する如き事は到底實際に於て不可能の事で、株主の立場には萬々同情を吝まないが乍遺憾斯る希望に添ふ能はざるものである。

唯此際予輩の採るべき途は、一意増資の眞目的の貫徹を圖り、會社内容の充實と營利の確實性を期し、以て株主に報ずるこそ我々の責務なりと信するのである、此目的の遂行と好成绩の達成を期する爲めには申す迄もなく、役員社員上下一致一層の努力奮闘の效果に俟たねばならぬと思ふのである、吳々も我々は多大の責務を双肩に擔ひ居ることを銘記して今後善處せん事を切望する次第である。」云々

新陣容の整備と、社員への訓示 (一)

我社資本の増加、事業の擴張に伴ひ幹部の責任益重大を加へ來たつたので、大正九年六月十日の株主總會に於て取締役を九名に、監査役を三名に増加選定することに、五名の増員中四名は長く我社に在勤した功勞者中より拔擢したのであつたが、斯の如きは素より、社長たる君の方寸に出でたることには相違ないが、一面株主の當局者に信頼する所の厚きを證するもの云ひ得よう。

君は資本増加に伴ふ對案として先づ役員の新陣容を整へたが、之れと同時に、世界各方面に散在せる支店、

出張所の幹部を更迭し、代ゆるに新進氣鋭の適任者を拔擢して夫々要所に据へ、此處にも新陣容を整へて威風堂々、財界反動時代に善處すべく臨んだのであつた。

而して後、六月二十三日社内講演會に於て、君は其懷抱する處の主義理想を次の如く説いたのであつた。

『役員及社員幹部の異動は今述べた如くである、今後諸君の奮勵努力により所期の功績を挙げたいものも希望する次第である。』

此機會に於て我社の主義方針等につき反覆する事も徒爾では無いと思ふので、左に述べることとする、

豫て我綿花會社は漸進的積極主義を以て進み、單に會社のみならず、深く諸君の將來をも考慮し、現に昨年來採り來れる方針は、素より未だ十分なりとは稱し難いが、兎に角諸君の爲めに圖りて遺憾なきを期せんとするの意味を以て、其實行を爲し來つたもので、役員及社員間に、何等階級がましき、むつかしき區別を立てず相共に協力して會社の爲めに、又會社によりて活動しつゝあるもので、予等諸君は單に年齢と經驗とに於て、前後に相違あるのみの考へを有し、諸君と共に主義方針に従ひ、我綿花會社の存在を廣く社會に認めしむるに至らん事を期しつゝある次第、冀くば諸君に於ても能く此主旨を諒し、益々一致協力、我社事業の發展に寄與せられん事を望むで止まざる次第である。

或は世上我綿花會社が、一躍克く五千萬圓の増資を斷行せるにつき、兎角の批評を爲すものあれども、我社創立當時に於ける資本金は實に一百萬圓にして、次で二百萬圓となり、更らに五百萬圓に、次で一千萬圓に、

而して最近遂に五千萬圓になつたもので、其間實に二十有八年の歲月を閲し、悉く漸進的、積極的方針に據らざるはない、殊に其取引の如きに於ても、從來多く突飛の行動を避け、専ら健實を旨とせざるも、實に右の一定方針に則れる結果に外ならないのであるが、今次我財界の急激なる變動に際し、幸に我社が最も強固なる地盤、強固なる基礎の上に立ちて、大なる影響を蒙らざりし一事は畢竟右方針の庇蔭に因るこゝと思ふのである。

新陣容の整備と、社員への訓示 (一)

我同業者の多數は、從來相率ひて半年乃至一ケ年に亘りて長期契約を敢てし、或は買占を行ひて、一時大なる利益、大なる成功を収めたに比し、我社の着實主義が却て之に及ばざるの事實に關し、世上兎角の批難なきに非りしも、而も一朝財界の變動、相場の大暴落を來すに至りて以來、同業者の全部に非るも、一部に於ては非常の打撃を蒙り、窮狀を曝露せるものあるのみならず、又其大多數は現に多大の先約關係による損失負擔に堪へざらんとするの狀態に立至り、或は遂に既契約の棒引を行はんとし、團體若くば聯合の力を借りて之を強制せんとし、多數者の蔭に隠れて商業上商人の最も重んずべき信用道徳を顧みず、各自保護損失の輕減に、日も尙足らざるの有様で、之等は何れも平時に於ては堂々たる商人商賈として取引市場に潤歩せるもの、實に昨今の急轉驚くの外なき次第である。

元來長期に亘る放漫なる先約は、順調の際に於ては何等危険性を示さざるも、一朝波瀾の場合に際しては、

最も大なる危険性を實現するもので、我綿花會社に於ては從來勉めて斯る危険の取引を避け、同時に亦主義として、買ひたるものは絶対に引取り、賣りたるものは絶対に引渡すことを主眼とし、多年之を實行し來つたのであつて、今回に於ても紡績會社を始め、支那方面海外の賣物は買戻すことなきと共に、又嘗て買約解除の如き、忌むべき行動を採れることなし、是れ我社が紡績會社間に於て能く信用を博し且之を増進せる所以も亦茲に存する次第である。

會社の増資、内部役員及社員の充實は、現在及將來に於て、我綿花會社の地位成績をして、同業者間に一頭地を抜き、又之を維持しつゝある所以で、新設會社中曩きには帝國棉花の設立あり、最近に於ては三井棉花部獨立して東洋棉花の新組織を見るに至つたが、棉界に於ける我社の地位は、之等諸會社の設立により、何等脅かされるものに非ざる事を堅く信じて疑はないのである、されば一朝今次の波瀾を乗切れる後に於ては、洋々たる大洋に出で得べく、我社の地位は波瀾の裡にあるも顛覆の憂なく、又之を乗切り得べき事も疑ひなき所である。

然るに最近商業會社、貿易會社の狀態は實に慘憺たるもので、茂木氏失敗の如きも實に其大なる一例なるのみならず、支那各地特に上海に於ても、銀塊暴落の結果非常な恐慌狀態を演出し、日本人の支店引拂を爲すもの少なからざる有様である、大凡商業取引の盛んにして、世上の景氣良好な場合には、行く處にして職なきは無く、又求めずして來り得べきを唱へ、俸給額の多きを望み、勤務時間の短かきを求め、自然身分不相應の贅

澤を唱ふるものがあつたが、年内又は明年に於ては、大なる變化あるべきを想像せざるを得ないのである、現に最近の事實は、斯る状態に立至るべき一端を示しつゝあるのである、盛況時に於ては、一時新思想旺んに勃發し、職工の如き權利を唱へ義務を稱し、賃金の引上、作業時間の短縮等兎角過大な要求をなし、或は同盟罷工、サボタージュ等、各種の高壓手段に訴へて、資本家に迫り、又多く其要求の容れられたものがあつたが、一朝不景氣の到來するや、全國商工業界の解備沙汰頻々として行はれ、或は賃金の引下げすら之を見るに至るも、何等施すべき手段を知らざるものゝ如し、元來予は勞働問題の如き、一度不景氣襲來せば根本より解決を見る可しと信じて居たのだが、果して此想像を今日に實現しつゝある、其解備に當りても、熟練誠實なるものは、一概に之を解備せず、不熟練にして過去に無謀な要求を爲したものに多き有様なるに見て、兎角從順誠實を以て、克く自己に勤め、會社の爲めに努力するものこそ、結局最後の勝利を占むるもので、此點に於て一層諸君の注意を乞はんとする次第である、今日までは各會社共賞與及手當共少なくなつたが、下半年以後に於ては十分満足な賞與手當を給し得べき會社は、恐らく無かるべく、綿業界の現状も恢復頗る至難で、少なくとも今春の如き景氣再來は、全く望みなしと思考するのである、従つて各個人の家庭に於ても、相共に節約冗費を省き、經濟を引締め、以て他日の用意に具ふるこゝ最も必要なる可く、一言老婆心を開きて諸君の反省を乞はんを欲する所以である。

我社に於ては同人間に於て、常に綿花式なる言葉をを用ひて居る、綿花式の定義如何については、茲に新しく

述ぶるの必要なきも、要するに同業者の間に伍し、全體に於て、平均に於て、標準點高く、人格其他の點で最も尊敬すべきものある特色に外ならないのである、畢竟綿花社員の地位が社會に認められつゝあるも、之れに依るもので、從來特に此點に關しては、屢々諸君の反省を促したのであつたが、今次の如き財界大變動に際しては、殊に諸君の注意を拂はれん事を切望の餘り、茲に重複を厭はず蛇足を添へた次第である」

君が大増資に當り社員中より四名を拔擢して役員に昇任せしめた事は、君の平素の持論を實行せるもので、會社を思ひ社員を思ふの誠意を親切の發露に外ならぬ、其我社の健實なる漸進積極主義の高唱を其効果を現實に即して社員の注意を喚起するあたりは、君の最も得意させし處、殊に世間無謀の投機者流が一朝其計畫に齟齬を生じて多大の損失を蒙るや商業道德を無視して恬として耻づるなきの醜態を痛罵する如き、眞に士魂商才の君の全貌を彷彿せしむるものがあるではないか。

綿業界救済の對策に就て (一)

大正九年春の大恐慌の善後策につき、君は同年六月二十三日社員に對し其意見を吐露したのであつたが、其要點は左の如きものであつた。

『大正九年三月末以降五月にかけて、我綿業界は、實に驚くべき急轉直下の大慘狀振を現出し、昨秋七百圓以上を唱へた綿糸相場は、今や其三分二にも近き二百五十圓の安値に叩き落されたのである、前年十二月一時金

融の引締りと共に、一寸不況氣味を顯はし、先行懸念の氣配に見へしも束の間、一陽來復と共に、春期金融の豫想外に緩慢である處から、疑雲忽ち霽れて人氣持直され、事業界に於ても新設會社の計畫續々として發表、世人は大に之を歓迎して應募したが、之等所要の資金は、難なく金融界より供給せられて別に緊縮の狀なく、綿糸界にありては、依然として實需を呼び騰貴を告げたのであつたが、四月に入りて以來此狀態全く急轉直下的の大變化を招來し、金融梗塞、取引杜絶、相場下落、先物の損失加重し、全く恐慌的狀態を現出するに至つた、こは單り綿糸界のみの現象に非ずして、廣く一般財界の恐慌だつたのである、戰時戰後に亘りて紡績會社は勿論、糸布商人も、暴利まで見做さるべき巨額の利益を收めた餘勢を以て、旺に先物契約を爲し、現に某商人の如き二月當時に於ては先物の利益を見積り、資産一億圓を算するも速きに非るべしと豫想した程の、大成金であつたものが、四月に入りて急激の變化を免かるゝ能はず、六月末當時の計算を以てするに、七月以降の先物は、引取不可能たるは勿論、却て損失打撃の結果、資産は大部分消滅するに至るべき有様で、昨日と今日との間に於て、眞に驚くべき變化と云ふの外はない、斯の如き事情の下に於て、我綿糸界は目下最も重大なる大問題に遭遇しつゝあるのである、俗に相場は天井三日、底百日と稱せられ、百圓の騰貴を爲すには、百日の久しきを要するも、其下落は三日を出でずするの意味で、下落の全く急且つ甚しきを訓ゆるの言であるのである、故に商人は其順調なる市場に於ては特に大過なきを期し得るも一朝激變に遭遇するや周章狼狽の愚を演じて世間の哄笑を買ふものが少なくないのである、何事も平素萬一に備ふるの用意なくしては意外の不覺

を免れぬものである、假令ば茲に四、五十噸の帆船を以て南洋の航海に就くの一例を見んに、風波稀れなる順調の季節に於ては何等故障なく之を爲し遂げんも年中同一の結果を得べしと早合點して航海を續けなば、いつかは破船の憂目を見るの外なかるべし、商界に於ても之れに同じく平時の場合に於ては無定見による先物の買走りも、左したる危険なきも一朝市況激變の事情に遭遇せば何等救済擁護の用意を施し居らざる悲しさ、堂々たる店舗も忽ち破産の憂目を見るの例に乏しからず、現に今次大阪市場に於て斯る憐れむべき商人の多數を發見するに至りしは、上方商人の不名譽として深く遺憾と思ふ次第である。

綿糸界救済の對策に就て (二)

長期且つ世界に亘りて賣買取引を爲さんとするものは、今日斯る不注意、不用意にては到底成功を收め必勝を期することは困難である、最近新聞紙上に於て既に諸君の熟知する如く、賣手も買手も自己中心の無謀なる議論をなし、種々なるプロバガンダを試み、經濟界をして一層擾亂せしめ、又更に物價下落の趨勢をして益々大ならしめたるものは、悉く之等不用意なる商人の、行へる言動の自然的結果と云ふも敢て過言に非ずと思ふ、現に四月以降相場大暴落を告げ、當業者の困難狀態に陥るや、之れが救済策に關し操業短縮を實行せんとするも、社會的反感を恐れて十分徹底的に之を敢行するを得ず、僅に五月十日より六月十日迄一ヶ月間四晝夜休業の實行を爲すの外なかつたが、其後の形勢は何等之れが爲めに當面問題の解決に資するに足らず、形勢更

らに不良を加へ來れるを以て(五月十六、七日頃の事記憶す)紡績業者及營業商人の内交渉を機し、吾等同業者會合して善後策に關し協議する所あり、予は東洋棉花兒玉氏と共に、紡績業者の間に立ちて、本問題につき奔走したが、予等の意見では徹底的に操業短縮を實行し、且つ先物の總解合を斷行すると共に、豫想利益の半分を犠牲とする考へなら、或は救済目的を達成し得べしとせざるも、斯る極端論の世間に反感ある事を恐れて實行を躊躇したが、今日の實際は次第に予等の唱へたるが如き状態を實現しつつあり、相場は何等安定を得るに至らざるのみか、信用は破壊し、秩序は亂れ、全く底止する處なきの有様を見るに至れり、其間シンジケート組織の議を進めたるも、是れ亦或程度まで、相場の下落を支持し得るに過ぎずして、相場の安定又極めて容易ならざるものがある。

契約に基く荷物は、之れが引取を肯んぜず、商界の信用道徳は無視せられ、人道地を拂はんとするの際に當りては、之が救済方法として、先づ仲間總解合を行ひ、更に各紡績會社に對しては不穩當なる團體的一律的の交渉を避け、各自個別的に談合するを以て最も適當とすべく、蓋し紡績會社との間の契約は、糸商資産の厚薄、約定期間の長短、約定數量の多寡、約定價格の高低等により各相異なるものなるが故に、此差違の如何により個々に交渉を進めるこそ取引の本意にして、又紡績會社も諒解の餘地を存する次第也、然るに此相違を無視して一律的に團體の決議を以てするこは、却て紡績會社考量の餘地を減じ諒解を得る所以にあらずと思ふものである。

今日の状態は一日を緩ふし、一日を空ふせば、糸界は益々混亂し、遂に克く收拾する能はざる混沌状態に陥る可く、正に當業者の誠意、眞摯、熱心とを以て當面の解決を圖るべき最も緊急なる時機なりと信ず、東京に於ては今次糸界の動搖以來、大阪商人なるものゝ不誠意放漫なる事實に、今更一驚を喫したりこの惡評專らなるを聞く、自己の窮狀救済を訴へて、事實契約引取の能力なきを標榜する以上は、進んでバランスを作成し、相手方若くば銀行等の了解を求むるこそ、眞に商人たるものゝ採るべき正道なるに不拘、只徒らに團體的に之を公言して憚らざるのみか、道徳を無視する捨鉢的態度に出づる如き、惡意に解釋し皮肉に解釋すれば、自ら財産を隠匿せるものゝより思惟せられず、却て紡績乃至銀行の諒解と信用とを傷くること少なからざるもので東京人士の皮肉な批評も、亦決して無碍に之を排する能はざるは、予の深く遺憾とする處である。

凡て商人は平時順調の場合に於ては、何等故障、何等大なる過失なきを得ることも、一朝の蹉跌によりて、全く其生命たる信用資本を失ふが如き行爲を爲すに於ては、商人たるの資格全然皆無たるものにして、大凡人間窮狀の場合に於て最も露骨に、最も克く眞性格を表顯すに稱するも敢て不當ならざるべし。

相場下落の趨勢は、到底克く人爲の支持し得べきものに非ず、今後に於ても各種の問題、續々惹起すべきは疑ひなき所、諸君は目下の波瀾恐慌の場合に於て、十分なる研究を積まば大に得る處多かるべく、實に其研究の好機會今日の如きは又得難かるべしと思ふのである、云々

君が世相の面白からざるを痛嘆して部下社員を戒め、誘掖指導を怠らざるの誠意はいつもながら君の美しき

人格の反映として讚嘆の外ないのである。

綿業界の自治的救済と君の努力

歐洲大戦中の好況大反動が大正九——十年本邦經濟界に襲來した、絢爛花の如かりし我綿業界も一時に無常の風に襲はれて轉た變轉極りなき浮世を憾むと共に、此際何んか徹底的救済方策を樹立するに非ずんば斯界の破滅を招くの外なしと痛感せしめたのであつた、果然紡績業者、棉花業者、綿糸布商、銀行業者、商業會議所等夫々匡救善後策に眞剣ならざるを得なかつた、そこで各關係者から色々の提案を見たのであつたが、何分利害一致せざる諸團體の事であるから容易に公平一致を期し難いのは無理からぬ事であつた、甲論乙駁に時日を遷延するここは大勢上到底許すべきにあらずと見た君は、同業兒玉一造氏と共に必死となりて各關係業者の間に奔走説得に努め、眞に涙ぐましい忍耐と奮闘を續けたのであつたが、漸くにして一般の妥協點を發見するに至つたので『先約定綿糸布總解合の斷行』、『輸出シンヂゲート組織』の二救済案を樹立して鋭意當面の難局打開に邁進するこゝになつた、之れが詳細の事情と成行とは綿糸商同盟會發行の『大戦後に於ける綿業界動搖の回顧』に詳かなるを以て茲に略するが、以上の二方法の實行に就ては複雑なる手數と種々の困難に遭遇したのであつたが、幸に能く之れに堪へて當時非常の重大問題として憂慮された綿業界の大危機切抜けの大事業を完成し、斯業者の安定と幸福を招來させたこゝは素より斯業關係者の偉大なる自治協調力の實現の結果たるは申す迄もない事であ



大正九年九月・叙勳紀念
大正九年九月・叙勳紀念
喜多又藏氏

るが當時其代表實行委員として終始其善處に畢生の努力を吝まなかつた君の功績をたゞへるも敢て過當の事ではあるまいと思ふのである。

叙勳の光榮に浴す

君が巴里平和會議隨員として、國家に盡した功勞に對し、大正九年九月七日特に勳三等に叙し、旭日中綬章を賜つた、一介の實業人にして、一躍勳三等に叙せられた先例は、全く稀有である。如何に君の功績の赫々たるものありしやは、蓋し推知するに難くないのである。

大正九年十二月十日社内講演會に於ける
君の開會辭の一部

「本年の一般經濟界は三月に至りて惡化し、五、六月以降循環的に相場下落せり。中には遂に其三分の一、甚しきは其四分の一の價格を維持し得ざる状況にて、此現象は内地のみならず、米國、歐洲に於ても同様大商人は困窮の極に達し居れり。斯る間にありて我綿業界は空前の混亂状態に陥りたる爲め、彼のシンヂゲート團を組織し、解合解決等の方法を講じ救済に當れり。而して本邦商人中最も大打撃を蒙つたのは肥料、油、機械、鐵、等の諸商也。是等商人の蹉跌を生ぜし原因を仔細に考究するに、無暗に調子に乗りて専門以外の事業にまで業務擴張の結果、人員に不足を生じ、自然經驗と技術に乏しきヤング、マンを或は支店長とせ、主任とかに引上げて、全權を委任する状態にて、遂に財界不振に際しては、其整理すら爲し得ざるが如き、而も之が東京、大阪等に於て、堂々たる某々會社の内容なるに至つては、寧ろ寒心に堪へざるものあり。云々」

反
動
時
代

反動時代

(自大正十年
至昭和七年)

第五十七期不成績と我社の態度 (一)

歐洲平和解決翌年度の世界的反動不況にたゞられて、大正九年十月より大正十年三月末に至る、我社第五十七期の決算成績は、乍遺憾不良であつて、赤字參百三拾九萬六千餘圓を出すに至つたが、前期繰越金中より全部を償却し残り繰越利益の一部を以て結局二割二分の配當を發表したのであつた。之れに就て、世間種々の批評をなすあるを遺憾とし、君は綿業界の大勢ミ、今後に處すべき我社の態度ミを、我社員に説明訓示する處あつた。

『第五十七期に於ける我社の成績は、先般の株主總會席上で發表の通り、相當多額の缺損を發表し、而も其一面に於て二割二分の配當を發表したるについて、世間より種々の批評を聞き、又同業者間に於ても、兎角の風評絶へざれども、之等に對しては、先般の株主總會に於て、十分の了解を得た通り、全く當局者に於て、堅き信念を有するが爲めである。従つて諸君に於ては如何なる風説、如何なる批評の世上に流布せらるゝも、之が爲に迷はざるゝが如き事なく、予等當局者を信じて、諸君管掌の事務に對し、十二分の勵精を希望して已まず、固より多數株主を有する株式會社の當局者ミしては、苟も損失勘定を發表する程、不愉快なるものなきも、元

來商賣の事たる、利益を目的とするも必らずしも損失せずと限れるに非ず、我社も亦從來幾多の波瀾に遭遇し、新に入社の諸君は了知なかるべきも、會社創立第二年度に於て、又四十一年上海支店の蹉跌に於て各多額の損失を爲し、前後共に會社の存廢を云爲されたる程の苦がき歴史を持つて居る、上海支店缺損當時予は本社支配人として在職中であつたが、本社の資本金二百萬圓、内拂込百二十萬圓に對し、缺損八十三萬圓、外に爲替損失其他四十五萬圓、合計約百三十萬圓に上れる有様で、此非常な出來事に對して、當局者は如何にして此大缺損の恢復を圖るべきかに就き、一時殆ど其措置に迷つたが、兎に角會社員の協同一致による一大奮發を要請して幸に同情的共鳴を得たる外取引銀行及紡績得意先等に於ても深厚なる同情援助を咨まれず、其結果無事其難局を切抜け、以て今日に至れるもの、而して今日に於ける缺損は、實に當時に於ける損失金額に比し、約三倍の巨額なるに不拘、一面に於て二割二分の配當を爲し得るが如き、時代と會社基礎の相違の致す所は云へ、洵に今昔の感に堪へない、固より此配當に就ては、當局者として堅き信念の下に斷行せるもので、ソハ會社として既に多額の積立金を擁し、且財産収入も相當額を期待し得る事故、假令營業成績に於て、今後必らずしも良好なるを期し難しとするも、普通の状態に於て相當の利益を擧げ得る事を自信し、決算としては赤裸々に損失勘定を潔く發表したる次第なるも、畢竟右の自信に基き、繰越金中より配當を敢てした次第に外ならぬ。

然らば多額の缺損を發表せる我社の現状如何と云ふに、諸君も十分了知せらるゝ如く、此間に於て其實質は決して左して悪化せるなきを言明するに躊躇しないのであります。否或意味に於て我社は、日本に於ける綿業

者のリーダーとして、他の同業者の多く追隨を許さざるものあることを確信するのであります。現に昨年財界の反動以來、我綿業界は綿業史上未曾有の大混亂を呈し、之を自然の成行に放任せんか、全綿業界の秩序は益々紊亂し、信用は破壊し、獨り當業者のみならず、金融業者其他一般の大恐慌を惹起するの恐れがあつたのであります。予は多年綿業界に關係を有するの故を以て、挺身之れが救済の渦中に投じ、當業者間に於て第一に綿糸輸出シンヂゲトを組織するに同時に、五月六月限の解合を行ひ、次で七月限以降の先約全部の總解合を斷行し、聊か微力を致す所あつたが、同業者中には或は株式會社たる事を口實とし、或は本支店計算の全然別勘定たる事に藉口して、自己責任の有限を主張し、其結果解合値合金の支拂をすら、拒絶する如きものありしのみならず、或は地方の得意先よりは値合金を收め乍ら、自己の紡績に負ふ約定品に對しては、値合金支拂の延期を主張し、甚しきは多額の値合金切捨を要求する等、正義商人の信用面目を顧みざるが如き行動を敢てしたるもの少なからず、然るに我社は同業者間にありては、同業者間の申合に従ひたるも、關係紡績會社に對しては、毫も約定品の値段切下、取消、期日の延期等を要求するが如き事なく、約定品は全部約定通りに受取り、凡そ賣買契約にかゝるものは、總て其約定を履行するを以て當然とせる我社創業以來の傳統的方针を實行したのである。然るに一方に於て、船場、東京、名古屋の内地支店、出張所を始め、印度、支那各店の賣約定は相手方の損失を蒙りたる事情等により契約不履行となりたるもの、其額莫大に上りたるが、我社は不得止忍んで其損害の負擔に任じた。之れ我社が今回の損失を發表するの已むなきに至りし所以なるが、他方我社の紡

續會社間に於ける信用は、之が爲めに完全に維持せられ、又海外に於ける信用に就ても同様何等之れが爲めに傷けられざるのみか、却て寧ろ増進したる如く思はるゝ節なきに非ず、他の堂々たる商店にして其決済の態度に於ては、實に響盪すべきもの少なからざりし中に、我社が嚴然として約定品の受渡を斷行し、未だ嘗て値金の切下を要求するが如き不見識の態度を持せざりしは窃かに我社の誇りませし處、我社は如上の成行にて、缺損を招くの止むを得ざりしは吳々も遺憾とする處なれど、其間他に比して自ら慰むる處なきに非ず、予は以上の如き意味を以て株主總會に於ても説明し、幸ひに了解を得た次第である。素より當事者たる吾人にして、先見の明あり、萬事遺憾なく時局に善處する事を得たらんには、或は損失を輕減し、ヨリ、良好なる状態を以て諸君に相見ゆる事を得たるやも知るべからざれど、神ならぬ身の必ずしも方針的中する事を得ず、吳々も此見込違ひを生じたことは、當局者不明の致す處にして慚愧に堪えざる次第なるが、前に述べた如く、紡績業者間に信用を失はず、海外に於ても亦能く信用を維持するを得た事は、不幸中の幸として諸君の了解と考量とを煩はしたのである。兎に角相場は非常の勢で下落し、諸君の既に承知の如く七百圓云へる、空前の高値を告げた綿糸が、僅に二百圓即ち三分一以下に下れる有様で、綿布棉花等又殆ど同様の下落を來せる外、財界の前途尙多く樂觀を許さざるものあるが故に、來期も綿糸布共果して良好の成績を擧げべきや、聊か迷なき能はざるも、併し又他の一面より見れば、價格の安くなりたる丈け、假りに高値當時と同一數量の取扱を爲すことも、金額に於ては僅かに其三分一若くは其以下にて足るべき事情にあるが故に、今日の資本金を以てせば、取扱は

從來に比し、容易に行ひ得るに至るべきを以て、損失は損失として已むなき事と諦め、一日も早く之れが挽回を期するの賢明なるを信するものである、同業者間には今尙相當苦しき事情存在せる如く看取る故、我社は此間に處して何んぞか都合克く進展を期したきものと相當苦心考慮し居る次第、既に前にも述べた如く、會社が多額の損失を醸せる事柄につき、世間種々の風説批判を流布するに至りたれども、コハ、畢竟事情の真相を誤解せる結果にして、諸君にありては、如何なる批評、如何なる風説あるとも、會社當局者を信頼して、各其事務に勵精せられん事を切望に堪へず。

第五十七期不成績と我社の態度 (二)

尙特に一言せざる可らざるは、過去及今日の如き波瀾時代に於て、我社が兎に角其經營に、非常な困難を感じざる所以のものは、要するに昨年三月増資を實行し、プレミアム附にて株金を募集した結果であつて、若し當時我社にして此増資を實行せず、又プレミアムを收得するが如き事ならんには、果して如何なる困難に遭遇せしや、蓋し推知するに難からず、而も其増資の財界反動、波瀾時代に先ちて行はれたことは、實に我社の天祐とする處、世間に於ても之を認め、吾人も亦之を信じつゝある次第である。財界一ミ度恐慌時代を現出するに於ては、第一資金の一、二點に就て困難に陥るべしは、當時増資理由の説明に於ても吾人の明言せる處で、我社は幸にも此増資の御蔭で、資金難を免がれたのであつた。

將來の綿業界は是迄の時代は事情に於て非常に相違し居るが故に、到底樂觀を許さず、著しき収益は殆ど之を望み難きに似たれども、相互大なる決心と忍耐を以て精勵事に當るに於ては、必ずしも相當の利益を獲得するに困難ならざる可しと信するものである、我社は昨年來の時局に不拘、着々既定の方針に向つて、進みつゝある次第で、所謂多年我社の標榜せる漸進的積極主義の遂行に遺憾なからぬ事を期しつゝあり、同業者其他一般事業界に於ては今日の時局上不得止、其使用人の大淘沙を行ひつゝあるもの少なからざるに不拘、我社が今の處會社の事情を以て社員を解雇するが如き事なく、寧ろ補充の目的を以て新に少數ながら社員を採用せるは、畢竟右の目的遂行の爲に外ならざるが故に、諸君に於て須く其意を諒し、一大決心を以て事に當らん事を切望す。』云々當時君は相手たる紡績會社に對し何一つ無理な要求を爲すではなし、鏗一文負けて下さいなきの泣言一つ言ふではなし、其正直と諦めの良さと太つ腹の態度は實に見上げた人格として紡績筋の讚稱措かなかつたのであつた。實に君は自己の不明による損失を他人に轉嫁してまで金を儲けようなきと思ふような人ではなかつた、儲ける金なら堂々ミ商賣道を潤歩して誰れ憚からず儲けたい、ヂ、ム、サイ、事をして金に執着するこゝは上方商人の耻である、自分はそんな面汚しは眞平御免だ云ふ強い正しい信念の上に立つたのが君の男らしい本領であつたのである。

相談役志方勢七氏の逝去

明治二十九年以來我社の重役として、多大の貢献をされた同氏は、大正十年九月二十五日六十二歳の壽命を以て忽焉白玉樓中の人となりられた、君が先輩として畏敬し、恩顧を受けた社親として感銘した同氏の事であるから、痛く其死を悲んだのは當然である、君が氏の靈前に捧げた次の弔詞は、明らかに其心情を吐露して居る。

『維時大正十年九月二十五日相談役志方勢七氏病終ニ瘞ヘズ溘焉トシテ逝カル、哀惜何ゾ堪ヘヌ、悲矣』

君が我社ノ事業ニ關與セラレシハ創業後僅カニ四閏年即明治二十九年一月常務取締役トシテ就任サレシニ始マリ、當時業績頗ル振ハズ、既ニ其存廢サヘ論ゼラレタル後ヲ享ケ、社運ノ僅ニ絶ヘザルコト誠ニ縷ノ如キ際ナリキ、天性剛毅ナル君ハ、此難局ニ處シテ少シモ迷ハズ、縦横計策セラレタルノミナラズ、米國棉取引ノ未ダ不完全ナルヲ遺憾トシ、就任後間モナキ、多忙ノ際ナルニモ不拘、身親シク渡米シ、米棉我國直輸入ノ端緒ヲ開カレタルコトナド、今ニシテ考フレバ何等ノ奇蹟ナキガ如キモ當年ニアリテハ實ニ斯界ヲ聳動セシ一偉蹟ナリシナリ、其後故アリテ常務ノ職ヲ退カレタルモ尙且會社發展ノ爲メニ常ニ自己ヲ抛チ努力ヲ惜マズ明治三十六年二月上海支店ノ創設ハ全ク君ガ渡滬計畫ニカ、ル處ナリシ而シテ我社歴史中最モ艱難慘澹ヲ極メ其存廢ヲ危マレタル明治四十一年復タ起チテ常務ノ任ニ就カレ良ク堅忍精勵嘔心吐血一意社運ノ挽回ニ努メラレ僅ニ二年ヲ出デザルニ、サシモ致命傷トモ目セラレシ彼ノ大負擔ヲ恢復セラレタルノミナラズ、我社ノ信用ヲシテ一層ノ大ヲナサシメタルコト悉ク君ノ功ニ倚ラザルナシ、續テ社長ニ就任後年ヲ追フテ社運順調ニ赴クヤ、君ハ社礎漸ク成レリトナシ、後進ノ爲メ途ヲ開クノ故ヲ以テ大正六年五月自ら勇退セラル、其間實ニ二十有二年

我社ノ隆替ニ盡サレタル功績ノ大ナル到底蕪辭ノ盡ス能ハザル處、就中前後兩回ノ逆境ニ際シテハ能ク頼瀾ヲ未倒ニ回セラレシコト全ク獨リ君ノ功ニ歸スベキナリ而モ尙最大株主トシテ將タ相談役トシテ毎ニ親切ニ我社ヲ扶翼スルコトヲ惜マレズ後輩一同モ亦君ノ愷切丁寧ナル助言ヲ聞クヲ樂ミ一ニ我社ノ指針トシテ君ヲ仰ギ居タリシニ、突トシテ今此訃音ニ接ス、悲誠ニ之ヨリ大ナルハ莫シ、況ヤ君ガ本邦綿業界經濟界及海外貿易業ノ爲メニ遺サレタル偉大ナル事跡ヲ想フテ痛惜殊ニ極リナシ嗚呼悲哉

惟フニ君ト我社トノ因縁ノ如キ奇ニシテ且ツ深キハ多ク其例ヲ見ザル處、君ノ我社ノコトニ執掌セラレ、ヤ毎ニ我社存亡ノ危機ニアラザルハナク、而モ其泰キニ及ビテハ廻チ毎ニ去リ難キニ際シテハ又來ル因縁ノ深且奇ナルト共ニ君ガ天資ノ果敢剛毅機略縱横ノ才能ノ一難ヲ經ル毎ニ其志ノ益々銳精ヲ加フルニ非レバ爰ゾ如此ヲ得ン、不肖又藏、君ガ親切ナル薰育ノ下ニ社務ニ從事スルコト多年、遂ニ乏シキヲ以テ君ノ後ヲ享クルニ至リシ所以ノモノ一ニ君ノ庇護指導アリシヲ以テノ故ノミ、而カモ今卒然トシテ其長逝ニ會フ誠ニ嬰兒ノ慈母ヲ失フガ如ク今ヨリシテ後誰レヲ頼リ、誰レニカ倚ラム、吾人之ヲ想フテ慘愴ニ堪ヘザルナリ、噫英靈若シ知ルアラバ長ヘニ冥護ヲ垂レ社運ノ前途ヲ呵護シ賜ハンコトヲ、

大正十年九月二十九日

日本綿花株式會社
社長 喜 多 又 藏

石井某の失敗と君の迷惑

大正年間に於て久しく株式、綿糸、米穀等の取引界に其辣腕を振つた材木を本業とする石井某なるものがあつた、大正十年十一月期米の大買占をやつて、大分の見込外れをやつた後、翌十一年に入つて、株式界に綿糸界にも買占の手を延ばしたのであつたが、何れも大失敗に終り、遂に二月下旬破綻曝露、大阪經濟界に多大のシ、ヨツクを興へた、當時君は何か石井某と脈絡でもあるかのやうに、新聞紙上に誤り傳へられ、大迷惑を蒙つたのであつた。

君は此事に就て、大正十一年六月二十一日社内講演會で左の如く述べて居る。

『過般來大阪經濟界には石井問題なるものが起つて居るが、石井氏は家業の材木の外、株式綿糸米穀等あらゆる相場に手出しをして皆大迷惑をやつて居つた様だ、自分は豫てより同氏の名前は聞いた事はあるが、同氏を知つたのは一昨年始めて、夫れは綿糸の肩代りを依頼して來て、二度に二千枚程引受けた時である、之を除いて他に何の關係もなく、寧ろ我々に買玉を譲つて置きながら、直に反對に賣叩く事を平氣でやる位の人で、餘程我々も警戒せねばならぬと思つて居た、そして堂島に五十萬石の米を抱へて失敗に終り、五、六十の銀行は之に引かゝり、我々も亦何か關係でもあるかの如く世間から疑問視され、甚だ迷惑に思つて居る、吾々は隠れたる金貸によつても石井がやつて居ると思つて居る、豈圖らんや皆銀行から借りて居た事を知り、何故銀

行が斯かる事をやつたか不審に堪へない程で、堂島なり三品なりに於て、其額は随分大したものである、尙銀行に入れた擔保を欺き、空の證書を銀行に差入れて金を出させる言ふ風である言傳へられ、最近住友の支店長告訴事件の様な事が起り、或は今後如何なる方面に飛沫が散るやら知れない、而して銀行にしても石井に貸出して居る金額を隠して居る様な次第でズク／＼結末も付かない、又石井も銀行に對しバランスシートの提出を拒み、或は今半期待つて呉れれば元利を揃へて返還する、それ迄は出来難いと言ひ、銀行にしても何の爲す處もなく、荏苒時日を経過しつゝあるのは呆れ返つた次第である、或人が戯れに石井君に對して「銀行が困つて居るから何か整理せねばなるまい」と言つた處、石井は平氣で笑つて居たミか傳へらるゝが、斯ふなれば「ごちらが救済されるのか判らぬ、奇妙な世の中に變つたものだ、過日の大阪朝日新聞でも、之をレーニンに譬へて皮肉に賞めて居る有様で、こんな風では到底始末が付き相にもなく、銀行は益々泣寝入りミならねば仕合せである、尙之に關聯して種々なる事件が起つて來るに違ひない、即ち銀行は大に警戒する爲め普通商賣人は御蔭で迷惑を蒙り先達來或特殊銀行がさうミか、又大會社がつぶれるミか、噂されて居るものもあるが、若し周圍が斯かる風説に迷はされ、取付にでも遭ふことになれば、如何なる大銀行でも危険ミ云はねばならぬ。要するに暗雲は尙低迷せる有様で、我社としては心配はないが、さうかするミ一時の誤解を受けて其渦中に卷込まれないミは言へないから、此際お互に自重の必要がある、戦後の産物ミして諸君も注意研究されるならば、大に参考ミなる事があらうミ思ふ、」

無論或時期の後、君が石井某ミ策謀して思惑をやつたなきの荒唐無稽の噂が霽消したことは云ふまでもない事である。

支那巡察と日支親善に努む

大正十一年四月十八日鹿島丸で令夫人同伴上海に向つた、二十二日上海に安着後約十日間の滞在中、君は例より一日も安息せず、社務萬端の打合指導は申すに及ばず、關係事業に對する諸般の交渉の外、日華親善の途を講ずるが爲め、有力日華人の會合を催して懇親を結ぶ等、所謂形式一片の視察ではないのである、即ち東亞興業會社の華豊、大中華兩紡績借款も、此時君の斡旋に成つたものであつた、此結果ミして當時大中華紡績を主宰して居つた、上海商務總會々頭で、有名の排日派聶雲臺ミ握手交驩するの機を得たのであつたが、同氏は從來日支人の會合には、言を左右にして決して同席せざりし程の、排日巨頭であつたに不拘、今回君の上海に來りて支那紳商を招宴するや、珍らしく招きに應じて出席歡談したるのみならず、之れが返禮ミして彼れは他の有力華商ミ共に、君を招待したるなき、彼れが主賓及主人側ミして、兩度共快く列席して君ミ歡談に勉めた事は全く異例ミして、當時の船津上海總領事が、從來日支人有力者間の感情融和の目的にて、屢々彼れミ會合を企てたるも果さざりし程の難件を、君が日支經濟結合の搦手から、難なく平民外交に成功した君の手腕の程には全く敬服の外はない。

右の外、君は上海滯在中、豫て腹案せる日支人共營の棉花賣込機關設立につき、大いに策動したのであつた、其目的とする處は、此機關を通じて、支那人紡績に棉花の賣込を爲さんとするにあつて、兼ねて日支人間親善の具に供せんとの遠大なる理想の下に、立案されたのであつたが、最初の程は支那人紡績關係の有力華商も相當乘氣であつたが、中途此機關設立の爲め、彼等自身束縛される結果となりては、何かに不利益なりとの打算的利害から、尻込連中が出來た爲め、折角君が日支親善の一機關も立案したものが、不幸成立に至らなかつた事を惜しむものである。

君が上海滯在中、更らに骨を折つた仕事は、上海棉花同業會の事であつた、同會は既に組織されては居たが、單に同業者の寄り合ひ機關で、頓に權威のない團體に過ぎないのを遺憾とし、是非共之れは大阪の棉花同業會の如き、同業利益擁護機關たる有意義のもの爲し、行く／＼大阪同會の上海支部たらしめざる可からずこの見地から、同業諸子に談合する處あり、何れも異議なく賛成し、爾來寄り／＼協議の末、君の希望を實現するに至りし如き、同業者の均しく感謝措く能はざるころであつた。

當時偶々北清の平野に奉直の戰雲漲り、同方面の視察に便ならず、君は一時上海に於て其形勢を按じ、五月一日まで滯在せしも、日先解決の見込なきを知り、同日遼江、漢口に向ひ、數日滯在、此地に於ても武漢支那官憲及有力華商を招いて大いに日支親善の爲めに盡したのであつた。

君は奉直戰の爲め不得止漢口より上海に引返へし、青島より濟南に出で、再び青島に引返へし五月十八日嘉義

丸で青島出發門司を経て其月廿二日大阪に歸着したのであつた。

支 那 綿 業 觀

超へて六月二十一日、君は支那綿業觀を次の如く社内講演會で述べた。

『最近自分は支那に行つたが、日數少なく且奉直戰の勃發の爲め豫定の視察も出來ず、長江及山東沿線に行つた許りである、彼地綿業の發展せる有様は豫て我支店よりの報告で知悉して居たが、其實際を見て更に一驚を喫した次第である、日本に於てすら紡績の錘數は漸く四百萬錘を超へた位であるのに、支那は現在の紡績擴張計畫にして完成の曉は、三百五十萬錘に達するこゝなる、其主なる所在地は上海及其附近、(揚子江流域及上海南京鐵道沿線)、漢口附近、天津を中心とする附近で尙最近青島の如き日本人經營にして廿五萬錘に及ぶ有様である。紡績が支那に多くなる言ふことは、言ふ迄もなく印度又は日本からの輸入が制限せられる言ふ事になる。支那は原棉を自國に生産するが、昨年不作で米國印度又は日本にある棉花を輸入して供給を受け、殊に印度棉は五、六十萬俵を輸入された言ふ。斯う言ふ事は東洋の綿業史には未曾有の事である、又自國棉以外斯の如く、多くの棉花を使用するに至つたことは、驚くの外なき次第である。支那の紡績は今迄日本人及西洋人を雇ふて設計され、經營もされて居つたが、最近の營業振りは大抵技術經營共に支那人自身がやつて居る、一方工費は日本内地で製産したものより、一俵に付二十圓は安い爲め、日本で二十圓損する時でも、彼地では

採算が採れる位だから、多少は支那人の經營振りが下手でも、今後經驗を積み儲けた金で改良施設を行ふならば、畢竟我國の三十年の時日の差は段々なくなつて來るのである。日本では工費及税金があるに拘はらず、一概に支那人を競争上に於て輕んずる風あるは誤つた觀察であると思ふ。而も年々支那より英佛米最近に於ては獨逸にすら留學するもの多くなり、英語は勿論日本語にも堪能なるヤングメンが各修學の後歸朝して紡績其他の事業界に身を投ずるものが増加して居るから、愈々發展するに至るだらう。そうなるに之迄大阪神戸等にて支那から原料を得て、之を支那に輸出する工費の高い吾製品に比し、支那は原料は自國に産し、假令米印棉を輸入するにしても、日本と同じ運賃で輸入し得る便宜があるから、態々高い日本の品物を日本を通じて買ふ必要は全然なくなる道理である。マッチ、タオル、メリヤス、加工綿布、瑛瑛燒其他雜貨にしても同様で、特に日本人にのみ其スベシアリチがある理ではない以上、支那人も之を眞似して行くかも知れぬ。或は大丈夫だま高を括る人もあるかも知らぬが、事實上支那人の競争に於て、一歩／＼後に従はねばならなくなるのではないかと思ふ。此邊の事情は我々の考へねばならぬ當面の問題である、云々

棉花定期取引の提唱（一）

本來大阪の三品取引所は、綿糸棉花綿布の三品を取引すべく名づけられたに不拘、棉花も綿布も事實上取引を行ひ得なかつた事が久しく續いたのである。従つて綿糸二十手定期取引の外は棉花、綿布の現物、先物取引を、

自然取引所以外相ひ對で行ふ有様であつたから、保證機關のない取引の事であり、其不利不便は申すに不及、相場激變の場合、意外の害毒を流すを免れぬので、君の關係深かつた日本棉花同業會では、さうか駈りした取引所を作つて、其取引を保證し、安全ならしめたい云ふ考へであつた處に、農商務省の取引所法改正で、株式組織以外に會員組織のものをも認むるに云ふ事になつた事は、君の持論に合致する所以で、君は成るべく會員組織による獨立した一棉花取引所の設立を希望し、同業者と種々協議を凝らした結果、大正十一年六月日本棉花同業會の名に於て『吾國に於て完全なる棉花取引所を設立するの必要』てふパンフレットを發行せしめ、之を各關係方面に配付し其注意を喚起したのであつた、而して一方君は主務省に赴きて之れに對する意向を探つたのであつたが、當局者の意見として大阪には既に三品取引所が設置され、其定款には明かに棉花、綿布をも取引する事になつて居る以上、之れが今の處上場しないからして、別に單獨の棉花取引所の設立を認むる譯けには、一寸成り兼ねるに云ふのであつたから、不得止會員組織に諦めをつけて、株式組織の三品取引所に棉花上場の方針に改め、三品關係者等と種々懇談の結果愈々三品當局者の手を経て、棉花上場の申請を爲さしむるに至つたのが、大正十二年七月頃で、爾來君は三品當局者と密接の關係を保持しつゝ、主務省方面に對する諒解運動の勞を吝しまなかつたのであつた、併し乍ら内閣は頻々として交迭し、容易に其實現を見るに至らずして大正十四年に及んだのであつた。そこで君は同業者と更らに謀る處あり、前に記した大正十一年六月日本棉花同業會より發行した「吾國に於て完全なる棉花取引所設置の必要」なるパンフレットは主として紡績業者の立場より論及せる點多く、最も

密接の關係を有する棉花業者自躰の立場を閉却し、未だ充分に取引所設置の必要を盡さざるの憾みありし、新に大正十四年三月「棉花業者より見たる棉花取引所の必要」なるパンフレットを日本棉花同業會より發行せしめ、再び世人に問ふ處があつた。

棉花定期取引の提唱 (二)

同パンフレットの結論に曰く、

「之要取引所設備の完成を期するは、吾國綿業夫れ自躰必須の一要素たるのみならず、廣く國家的見地よりするも亦愷切喫緊の措置たるを失はず、隨つて産業獎勵に資するの効果偉大なるものあるべし。由來棉花業者が銳意之れが實現を期する所以のものは、據りて以て吾國保有棉花數の數量を豊富ならしめ、可及的に危険且つ不利益なる海外に於ける「ヘッチ」賣買を減少して本邦に於ける取引所賣買に移し、公平なる内地相場を發表して、獨り先物賣買のみならず、現物賣買をも統一且公正なる條件の下に、自由に取引する事を得せしめ、斯業の安固なる發達を期せんことを外ならずして、取引所設立又は棉花市場によりて何等特殊の利權を獲得せんことを非ず、吾人が曩きに理想案として、會員組織の取引所を計畫したるに不拘、敢へて大阪三品取引所の棉花市場に賛同せる所以、亦茲に存す、翼くは小異を捨て大同に就き、多年の懸案たる本問題の速に解決に至らん事を熱望して止まざる所也、」

斯の如く、君は同業者並三品關係者等と共に熱心に棉花再市場の認可につき、奔走至らざるなかつたのであつた。

主務省に於ても屢々官人を大阪に派して實情の調査に當らせ、慎重に考慮した模様であつたが、大勢の趨く處遂に三品申請の妥當なるを認め、大正十四年十一月を以て内認可を與へらるゝことに運んだのであつた。

斯くて同十五年十二月取引員が免許され、翌昭和二年一月十五日愈々再市場開市を見るに至り、爰に完全に取引所機能の發揮となり、爾來取引高年々激増、最近非常の商盛を呈し、關係方面の受くる利益の甚大なるを見るにつけ、棉花市場提唱者の一人たる君の功績を偲んで止まざる次第である。

社員の心得に就て

君は從來機會ある毎に、社員の處世上心得べき點を、屢々説示したのであつたが、兎角世間が思想界の動搖で青年諸子を迷はすのを恐れ、重復を厭はず、青年社員を善導すべく、大正十二年六月二十七日社内講演會席上で左の如く訓諭したのであつた。

「此頃段々思想が變つて來て、學校を出て來る人の一體の考へが、我々の古い考へと違ふ様ですが Business を遣るに云ふ考へから云ふに、何等違はないと思ふのであります。社員全體に巧く働いて貰ひ、役員も同様巧く働き、上下一致して働く事が必要であつて、夫れがなければ將來良く行かないと思ひます。社員になるには

相當の學歴、資格等種々の事があります。働くに就ても専心努力を要する事は、申す迄もありません。所が二、三感じた事があります、其は責任觀念云ふ事であり、官吏云ふものは、辭表さへ出せば、夫れで済みますが、實業家では左様に手軽に参りません、實業界に於ては、責任觀念が一番大切であります、自分が一旦引受けた仕事は、片を付けなければ動かない云ふ考へで居て貰ひたい、處が往々さうでも良い考へて居る人があるので、困る譯であります、種々の要求を聞くのも宜しいが、一方各自のせねばならぬ義務は立派に果して貰はねば困る。又一方各自に利なるものは爲し不利なるものは爲さぬ云ふやうでは不可ない。例へば出勤時間が何時に定めてあれば、夫れに後れぬやうにせねばいけません、又受持ちの仕事が、其日に終らない場合なき、早く歸るやうでも不可ない、是非夫れを仕上げてから歸らねばいけません、此様な事は先刻申上げた學校出身の方は、確かに出来るに信じます、實際自分の事が自分では出来ない云ふ事は、つまらぬと思ひます、尤も會社には營業規則がありますから、夫れを必ず遵奉して行かねばなりません、私が希望しますのは、少々自惚れに過ぎるかは知りませんが、今日の日本棉花會社の地位は、將來日本、否 World Trading Company として立つて行ける資格があるに信じます。外の會社はさうだなきに比較せず、他の會社に實質上何等異らない、模範會社であると思ふて居て貰ひたい。自分が此會社の人に願ふ事は出来るならば會社では個人云ふ考へを去つて貰ひたい、言葉を換へて言へば、奉公人根性をこつて貰ひたいのであります。等級の如何に不拘日本棉花を代表して行ける用意にして、常識判斷を誤らないやうに願ひたいのであります。御承知の通り會社

の株券は、棉花會社の役員、社員關係者は、殆ど凡てが之を有して居ます、棉花系に屬するもの、所有株は、總株數の半數以上に達して居ます、即ち社員の大部分が株主と思ひます、新規の社員の方も多少持つて貰ひたいのであります、そうするに一方資本家であり、他方使用人であり、つまり會社と個人との區別が出来ないのであります。

御互が仕事をするに云つても、互に離れて仕事をするのでありますから、離れて居る以上、互に相手方を信用して、行くやうにしたいと思ひます。仕事をして誤りをやつた時は、上の人に早速話すやうにしたい、此迄の事を考へるに、小さい間違が大きくなつて、仕末に困るやうになります、小さい誤りの内に、直ぐ打明けて善處するに云ふ風に願ひたいと思ひます。無論自分の知らない事は、遠慮なく聞き、上の人には知つて居る事は教へ、成るべく同じやうな積りで、御互利害を共にするのでありますから、社長以下小使に至るまで全部一致して、日本棉花を立派なものにしたいと思ふのであります。

社員採用の順序にして、各學校毎に初任給料の基準を内規で、決めて居り、先づ三年間は、同様の開きで昇給するが、其後は腕次第、力次第で、抜擢昇進の途が開かれて居ります。無論學閥なきは問題ではありません、大學出も、甲種商業出も、給仕から上がった社員でも總て同じであります。他の會社では往々學閥云ふやうなものがある處もあるやうですが、我棉花會社には、全然そんな偏頗なことはありません、僕は大阪高商出身ですから或は誤解される事があるかも知れませんが、事實さう云ふ事は一切認めません、此點を特に御承知願

ひます。

役員の申合せは先刻來申上げた通りで、私の申上げるのは、役員全體の代表としてであります、斯く云ふ以上は、自分等はせずにて、君等に許り云つても仕方がないから、自分達でも間違なく遣るこ云ふ事を申合せであるのであります、私等は年代が違つてゐるだゞ先輩云ふ丈けで、我々も Lower Class の Clerk から上つて來たのでありますから、能く下情に通じて居る積りです、自分等はせず、君等に要求するやうな事は、一寸も考へてゐませんから、此點は御安心願ひたいと思ひます」云々

關東震災と我社の損害

大正十二年九月一日午前十一時五十八分突如關東方面に大震災あり、我社東京、横濱支店共多大の損害を蒙つた、此事に就て君は同年十二月二十日第六十二期定時株主總會席上で、左の通り述べて居る、

「九月一日突如として關東を襲へる未曾有の大震災の結果、我社東京及横濱兩支店共事務所及諸帳簿類を全焼し、殊に横濱支店にありては、社員三名雇員八名の横死を出せる等、千歳の遺憾にして、申譯なき次第也、其他東京支店附屬倉庫所有綿糸、東神奈川棉花倉庫、横濱船渠倉庫及横濱稅關構内に於ける受渡未濟棉花、羊毛、蘭貢米、外横濱支店附屬倉庫及在庫生糸等亦全部燒失の厄に遭遇し、其整理恢復には、現に會社當局者も甚だ苦心しつゝある所也、勿論當時不時の震災を豫想して、其損害を賠償すべき、震災保險加入の方法を以てした

らんには、今日の損害を最少限度に止むるを得たらんも、不幸にして今日に至る迄、斯の如き保險を附するもの皆無、豫て其必要を知れるものも雖も、保險率の負擔高く、多くは之を附するを避け、銀行業者亦之を怪しまず、我社も事茲に出でざりしは、己を得ざる次第にして、諸君の諒承を乞はんご欲する所なり。

右の如く東京横濱兩支店共、帳簿書類全燒の結果、間接、直接の損害査定に關しては、頗る困難を感じたり、されど百方手を盡し審査の結果、東京及横濱兩支店不動産の直接損害を十四萬三十四圓六十三錢、又商品の直接損害として横濱東神奈川倉庫内の棉花損害百二萬四百四十一圓七十二錢、羊毛損害二十三萬二千六百四十五圓七十三錢、東京支店附屬倉庫綿糸損害三萬九千二百二十六圓二十五錢、横濱船渠倉庫内、蘭貢米四十萬二千七百八十圓、横濱支店附屬倉庫内生糸二百四萬圓、合計三百七十三萬五千九百三十三圓七十錢を見積れる爲め、不動産及商品の直接損害總計は三百八十七萬五千二百二十八圓三十三錢を計上するに至りたり、尤も之れに對し當時横濱港内にて積出荷役に着手せる生糸にして、積出前稅關構内にて燒失したる生糸は、當然海上保險の賠償を受くるも、之を除外し其他棉花、羊毛、蘭貢米にして、海上保險沿岸保險條項にて賠償せらるべき金額より我社負擔に歸すべき看貫濟代金未拂生糸にして、買入先に支拂ふべきものなき、總差引受取勘定を見得るもの、約八十七萬圓を存するが故に、今回直接損害を三百萬圓に見積りたり。

右の外間接損害として、米國得意先に對する賣約生糸、未積出數量二千七百俵は畢竟震災を云へる、不可抗力の結果、解約を希望せるも、米國得意先に於て之を肯諾せざる爲め、積出履行の事になりしが、而も買理に

際しては、糸價一割方の騰貴を來し、其値合金損失五十萬圓を始め、回收不能受取手形其他賣掛金切捨見積三十萬圓、所有有價證券中震災關係株式減價十五萬圓、救恤金其他臨時費五萬圓を見積り結局間接損害として金壹百萬圓を計上せり、茲に於て直接及間接の總損害見積額四百萬圓なる譯にして、予等當局者の甚だ遺憾にする所也、而も一面に於て火災保險支拂問題は、果して如何なる率に決定すべきや、議會を待たざれば知るを得ざるも、到底一割を超過せざるべく、而して其大部分は、生糸預り荷物に對し支拂ふべきものにて、大體に於て金額少なく、其算入を除外したり。

横濱支店に於ける多數の横死者を出せる如き、衷心同情に堪へざる所にして、當局者にありては死者及遺族に對して出來得る限り適切なる方法により、弔問慰安の處置に遺憾なからしめん事を期せり、之亦諸君の諒承を乞ひたき次第也』

右の如くにして震災損金四百萬圓の内二百五十萬圓は別段積立金中より振替填補し、殘百五十萬圓は、同期の利益金中より差引填補し、夫々始末をつけたのであつたが、不幸中にも大正九年増資後の出來事であつたので、能く其損害に堪へ得たことを幸ひした。

生糸二港問題に對する君の態度 (一)

大正八年度に於ける生糸生産額は、關東産三百七十四萬貫内外、關西産二百六十六萬貫であつて、關東産は約

六割、關西産は約四割の比例になつて居る。然るに關西産を遠く横濱に運んで海外に積出す云ふ事は、關西の生産者に取りては、運賃其他種々の不利が伴ふので、關西方面の製糸家は夙に關西製糸同盟會を組織し、關西側の利益を擁護すべく寄々協議したのであつた。大正十年四月二十六日右同盟會は大阪に大會を開き、

關西に生糸検査所設置、生糸取引所設置、生糸輸出港選定其他數件

を協議したのであつて、既に關東大震災以前より關西側は横濱に對立して、独自の地歩を開拓せんことを希望したのであつた。

君も其當時より本問題については、強き關心を持ち、關西の生産品は神戸港より輸出し、生糸取引所は關西の商工大都市たる大阪市に設置することが當然の勢なりとの意見を持つて居て、此理想の下に所信を貫徹せんを努力する所あつた、乍併君の理想に對しては横濱側の猛烈なる反對運動に政府筋の自重等により其實現容易ならざるものがあつた矢先、突如大正十二年九月一日關東大震災爆發、横濱の商業諸機關殆ど全滅、さしにも隆盛を誇つた横濱港の生糸貿易も、忽ち斷絶の悲況に沈淪したのであつた。

横濱生糸商人は止むを得ず神戸港に顯はれ、取引開始の外なかつたのである。我横濱支店も社員一同を神戸に移し、生糸商談を進める事にした。同年九月十一日に開かれた神戸港生糸輸出問題協議會には、君も出席して大々的に神戸に於て生糸貿易の進展に當り、以て持論の實行を期せんを堅き決心を示したので、集まれる關西側の關係者も、大いに其意を強ふしたのであつた。斯くて君は此方針の下に社員を督勵して、同年九月以降十二月迄

の四ヶ月間に、神戸港より二千九百十九俵の生糸を直輸せしめ、外商エー・シユウルチス氏の三千百三十六俵に次で取扱高第二位を占めた程であつた。

君は生糸二港問題につき、大正十二年十二月二十日社内講演會で、次の如く述べた。

生糸二港問題に對する君の態度 (二)

「震災により生じたる問題は頗る多端であります。就中吾社の立場に關係を持つ重大問題は生糸二港問題であります。

從來日本より輸出する生糸の全部は一應横濱の問屋に集まり、問屋から輸出業者に賣付け、輸出業者から海外得意先へ輸出する言ふ仕組になつて居りました。然るに震災に際しまして横濱市の全滅と共に在荷約六萬箱を焼失しました結果、紐育の生糸輸入業者に對しては不可抗力にある既約定の取消を種々事情を述べて申送りましたが、彼地法律では不可抗力と認めないから是非共積送する様子の事で、當方としても詮方なく、さればもて横濱の現状は到底積出不可能なるのみか新に代品の買付すら出來ず、止むなく神戸より積出すこととしたのが抑も此問題の起りであります。

而して神戸港より積出す時には、紐育の生糸業者としては約束の時に荷物を受取る事を得て都合もよく、又吾々關西に於ける當業者にしても至極結構であるのに、獨り横濱側に於ては市の生命たる生糸の輸出を假令一

時たりとも神戸に奪はるゝ時は、市に致命傷を與へ再び起つ機會なしと見做し、極力之が妨害運動を諸方面に試み、場合によりては暴力をも辭しまじき程必死的となり、其結果は農商務省を動かし、政府も亦横濱に媚びて神戸港を生糸輸出港と認めずこの言をすら發表せしむる様の始末となり、遂には神戸港積出の輸出業者も横濱側の熱情に動かされて一時其積出を控へ更に横濱に復歸するもの多きを加へたやうな次第であります。

併し大勢より觀察する時は關西に於て生糸を産せずせば即ち止まんも、御承知の如く滋賀、中國、四國、九州の如きは何れも關西有数の産地で、其産額は合して全國の四割に相當する數量をすら出して居る、夫れにも不拘何を苦んで横濱港による必要があらうか、殊に銀行としては容易に爲替を取組む外積出港に近く所在し、又米國行運賃も横濱同率の好條件を具備して居る、唯政府が生糸輸出港として認めずこの一事に原因するのでありませうが、政府のパーミットなき爲め輸出が出來ないと言ふ理由は毫末もなく、寧ろ之を發見するに苦しむ次第であります。恐らく政府は各地を通じて選出された代議士に媚びる爲め、斯かる理由なき聲明をすら敢てし、殊更に不便を忍びて信州生糸の如きすら一應清水港に送り、更に又横濱に廻航するが如き、煩雜なる手段を講じた次第であると思見すも謬言でありますまい。

尙商品は總て危険を負擔するものが其商品に對して絶対の權利を有して居るのが普通であります。獨り横濱に於ては然らず、問屋が輸出業者と製糸家との間に介在して而も當然製糸業者の作るべき蠶糸業中央會なるものを問屋側にて組織し、製糸業者の商品を全部問屋に持込しめ、品質の検査即ち所謂拜見と稱する方法に

よりに合格不合格を區別し、不合格品は之れをベケミ稱して製糸家に突返すが如き慣習を勝手に作つて居るので、兎に角生糸の全部は一應問屋の手を経ねばならぬ事になつて居ります。

又農商務省も機械検査を命令的に行はして居りますが、之れは恐らく製糸家の粗製濫造を防ぎ品質をして海外に信用せしめんとする爲であらうが、肉眼検査も雖も機械検査も、さしたる優劣區別の存在しないことも知らないであります。現に神戸に於ては輸出開始以來肉眼検査を實行し來りましたが、内地製糸家の注意により九月以來まだ之等商品に對して紐育より品質に對し苦情ありし事を聞きません、從來信州製糸家は悪い物を作るに於て上手であつたが、此等の人々も近來は大いに品質の向上に努め、其結果機械検査の必要は全くなつたのであります。

事情如斯地の利其他より見るも將來神戸は輸出港として最も適當と言ふべく、而も神戸側は最初より横濱側に同情して其運動も極めて穩健現に之が請願を臨時議會に提出せし位なるに、横濱側にては震災以來荷物を引取る事にのみ唯之れ熱中して、諸設備及整理の復舊を計らす、未だに燒失生糸の處分すらつき兼ねるが如き有様であります。

されば横濱としては、從來の生糸輸出港たる立場はあり、徒らに焦慮する事なく、神戸港をして一部の輸出をなさしむるも敢て差支へなき理にて、大阪が綿業の中心たるが如く横濱亦生糸の中心地として神戸を Follow せしむる事は容易なる事であり、近頃は製糸業者及問屋間に或程度迄神戸側の妥協が成立し、暫く神戸

側も沈黙の態度を取るこゝになりました結果、横濱側の運動も之にて一先づ落付く事と思はれます、若し最初より二港主義であつたならば彼の六萬梱の全焼も幾分免れ、國としての利益及便利も尠からざりし事と想像せられるのであります。』

生糸二港問題に對する君の態度 (三)

其後神戸港に於ける生糸輸出促進運動と生糸輸出機關設備完成運動等次第に其熱度を加へ、貴衆兩院に建議書を提出する等、關西側の活動に聊か怯へを感じた横濱に於ける斯界の巨頭連は、大正十三年に入つてから、大阪、神戸に顯はれて、頻りに神戸生糸買付阻止運動を試むる處あつた。一日右巨頭連は君を大阪に訪問して、新糸から神戸の買付を中止し、横濱のみに於て之を行はれん事を懇願したのであつた、君は此機に於て永年懷抱し來つた生糸輸出二港主義の主張を、大局上より説明縷述するに同時に先方の來意をも十分諒解し、にべなく蹴るやうな事はしなかつた。

『關西方面の生糸を神戸から輸出する事は神戸横濱間の汽車運賃を省き、製糸家は早く換金の利益あり、又荷物を一個所に集注するこゝは、昨年大震災の教ゆる如く、非常に危険率多き不利益あり、又荷物を散在せしむるの利は此外色々あり、故に我社は關西のものは神戸より輸出するを利益として、既に検査機械の据付其他の設備を了し居れり、併し横濱の事情を承れば、同情すべき尤もの點があるゆゑ、我社としては當分神戸に於け

る積極方針を見合せ、成る可く横濱に於ける取引の進捗に盡すことにしよう。』

君は生來自己本位の人ではない、相手の憐れな境遇には常に同情の念を忘れなかつた、横濱代表の大立者から親しく同地の呪はれた苦しい現在の立場を哀訴されては涙なしに居られなかつたのが實に君の美しき性格の顯はれであつたのである、横濱の巨頭連も君の理路井然たる二港論に傾聴するに同時に、至極同情ある應酬振りを感謝して辭去したと云ふ事であつた。

尙君は大正十三年十二月二十日左の如く社内講演會で述べた、

『生糸輸出港の問題でありますが神戸に生糸検査所を作り積出をすることに世人の議論の焦點になりましたので一時我社も不得止姑息にやつて居ましたが最早今日に至つては横濱に遠慮がなくなつたし、又世間の大勢も西部の生糸は神戸から積出す方がよいと言ふ風に傾いて來たので、吾社も神戸で買つて神戸から積出すことを實行して居ります。斯かる趨勢でありますから將來は私の持論の通り横濱神戸の二港主義なる事は最早疑ふ餘地はありません。』

其後神戸港に於ける生糸輸出に對する諸設備は着々進捗して、今や神戸港は横濱に對立して、何等遜色なき完全なる生糸輸出港として、世界に認めらるゝに至り、君の二港主義は遂に勝利の榮冠を得たのであつた、唯生糸取引所の大阪に來らずして、神戸に設置を見るに至つたことは、聊か君の持論に副はざりしを憾みとするのみである。

支那内地に棉花荷作工場を設備す

君は支那内地開放論者の先鋒であつたと同時に着々内地に事業の進出を企畫した、河南省鄭州に棉花コンプレックス工場を置いた如き其一例である。

鄭州は黄河によつて陝西地方よりの物貨集散地であるので、陝西産の棉花は多く鄭州に集まつて取引された、其品種は米棉種であつたので支那産の棉花としては其纖維細長の優良棉であつた、君は夙に此棉花の將來に着目し、社員を遠く陝西の内地に派遣し多大の苦心を以て詳細に取調を行はせたのであつた、其結果として大正十三年鄭州に完全なる洋式棉花荷作工場の建設を敢行するに至つて、取引上多大の利便を増したのであつた。

大正十四年君は洛陽地方で米棉種を栽培したら如何か云ふ考へを立てたが、(當時河南の米棉種年産額僅に七、八萬擔であつた)、間もなく内亂が激しくなり混亂模様になつたのでこの談も其の儘立消えたが、それより遙か後になつて米棉種が増加してから漸く支那紡績業者の注目するところとなり、昭和四年穆氏、榮氏等が主唱して米國から棉實を輸入し栽培を奨励してから産額大いに増加、品質向上の効果を擧げたやうな次第である。

現今米棉種の年産額廿六萬擔以上に上り支那に於ける最も優良棉産地として邦商のみならず更に支那紡績から重要視されて居るが、今日のやうに産額が殖える迄には邦商の買附が地方農民の蒙を啓いた點實に缺かないのであ

る、惹いて君は綿業家として優良なる陝西棉産出に間接的功勞者たる名譽を擔ひ得る一人であること云ひ得やう。又君は山東省の棉花にも着眼し大正十二年濟南府に大正十三年張店に棉花荷造工場の設備を整へたことも亦逸すべからざる事である。

泰安紡績開業式に參列す

君が大正八年巴里媾和全權隨員として佛國に滞在中、買約した佛國製の紡機を掘付けた漢口の泰安紡績が、其二萬七千錘の内七千錘を運轉するに至つたので、之れが開業式に臨席旁支那視察の途に就いたのが大正十三年十月十二日であつた。それは丁度十一日間の朝鮮旅行を九月二十一日に終へて、歸阪後未だ席の暖まらない廿一日のこゝであつた。之の精力絶倫には誰しも驚かざるはなかつた。十五日上海着後王正廷其他支那日本知名の官民との間に、例の如き日支交驛振りを發揮して後、溯江漢口に着いたのが十月二十四日であつた。漢水の上流沿岸に建設した唯一の日本人紡績工場、敢て大ならずも、風土に適應すべく、設備に力を入れし建築にて附近支那人紡績に見るを得ざるの特徴を存し、殊にアルサス製の紡績諸機能の優秀なる點は大いに誇るに足るべきものあり、君は社長として此開業式に列席し、支那九省の會に位する中原の商工大都市たる漢口に日本人として最初の紡績工業を打ち建てた快さを染々感じたのであつた。君は重なる支那官民及び在留邦人百九十二名を招待

して、大いに君の抱負意氣を示すと同時に、日支親善の爲めに力を盡すこと例の如くであつた。十月二十八日漢口出發、上海に下り、十一月二日上海より神丸にて青島に向ひ、五日青島着、九日同地出發原田丸にて日本に向ひ同十三日大阪に歸着したのであつた。

歸來君は支那視察觀を同年十二月廿日社内講演會で次の如く述べた。

『私は先般支那へ參りました。當時は動亂の末期で、京漢津浦兩鐵道が不通であつた爲め、同方面の實地を目撃するこゝが出来ませんでした。上海漢口青島三地方の視察をして參りました。それに就て言ひ度いこゝは之等の地方に於て吾社事業は着々として根底を固めつゝある一事であります。

御承知かも知れませんが、支那には動亂があつても流石大國丈で戰地外の鐵道や河運により商品は大きくして故障なく運搬せられ商賣が行はれて居りますので、日本に於て新聞の記事で想像して居る程商賣上に影響を及ぼすものではありません。

次に今度の旅行で痛切に感じたことは、支那紡績の發達に伴ひ、吾國綿業商人の立場は大いに變つて來なければならぬと言ふことであります。御承知の通り茲兩三年に於ける支那紡績業は非常な勢で發達して來ました。之れは支那は一大消費地にして又棉産地たり、加ふるに工賃非常に廉く、殊に近年支那人にて歐米に遊びしもの最新の智識を以て工場を經營し支那人自身にて生産するこゝが出来た様になつた結果に外なりません。

支那紡績業の發達は即ち吾國綿糸布輸出範圍の縮少を意味するものであります。既に一昨年以來此傾向は阪神兩港綿糸布の輸出の減少になつて現はれて來ましたが、尙今後支那紡績が發達すればする程、此傾向も愈々顯著になつて來るものも存じます。

此局面の變化に對しては吾々は從來大いに其の立場を變へて行かねばならぬも考へます。即ち私の見る所では、吾國綿業否大阪の工業を以て、なるべく加工品精巧品を製造し輸出することが必要であると共に、我綿糸布商は支那を他國と考へず、日本と同一圈内にあるものも考へ、支那に支店出張所を設け、日本の輸出品を取扱ふと同時に、進んで支那の製品をも取扱はなければ、悔を千載に残すかも知れませぬ。此點に關しては單に綿糸布商のみならず、我國銀行業者も保險業者も、皆一致協力して之等商人を援助し活動を遺憾なからしむるを要する事勿論であります。就中尤も緊要なるは銀資金の充實であるも存じます。從來支那に於て、事業としては成功したるものも、爲替關係に於て失敗せる例が多々ありますから、政府當局は此際宜敷銀資金の有力なる銀行を設立して、爲替の危險を政府が負擔し以て對支事業家を援助するを要するものも存じます。』云々

支那に棉花栽培を計畫す

君は世界の棉花を、最も廉く紡績業者殊に日本の紡績會社に供給する事が、我社の採るべき義務と心得て、常に如何にして此目的に添ふべきやを考究怠らなかつたのであつた。

隣邦支那には棉花栽培について指導其宜しきを得ば、紡績適品の増産而かも低廉に供給し得るの餘地綽々たるものあるを、君は屢々支那視察によつて、之を認識して居つたので、平素より此方面の開拓には相當の注意を拂つたものである。

日本政府に於ても同様であつて、夙に技師を南北支那に派遣し、棉産地域の調査に當らせたのであつたが、相當有望であるこの結論であつた。

君は政府の調査報告の結果を基礎として、大正七年三月二十七日我社の支那各店に宛て、『支那棉作奨勵及改良に就て』の題下に次の如く發信して居る。

『……………支那に於ける棉花栽培の奨勵普及、改良は當業者に取り最も喜ぶべき計畫なりと信ず、支那棉作奨勵事業の如きは二、三勲力者の小規模企畫を以てしては到底不可能にして、支那の現状は居留地附近以外に於ての事業を阻まれ居ることゆゑ、之れには是非共、先づ帝國政府の絶對的後援を與ふる方針の確立を前提とする必要有之、之れに對する政府の方針さへ決定せば、當業者は大に賛意を表し、經營に必要な經費の一部寄附を辭するものに非ずと思惟す。一説には支那棉作の奨勵は支那内地に於ける紡績業の勃興を誘致する直接原因たらしむるを以て、本邦同業の爲め、自ら墓穴を穿つに外ならずも、斯の如きは淺見素より採るに足らず。始め同論に左祖せしものも、近來覺醒して却つて支那に於て紡績企業を畫策するに至る、時

勢の推移は又如何にも仕難し、寧ろ宜しく自ら先鞭をつけて大いに外棉に備へ、且つ支那棉に對する優越權を收むるを賢なりと信ず。』云々

其後支那政界の巨頭梁某との間に支那棉花栽培を計畫したが、中途停頓の止むなきに至り更に大正十三年に至つて、支那政界の新人王某、崔某等と謀り、合辦組織による支那棉花栽培事業を起さん事を計畫した、其前提として技師を派遣し、其豫定栽培地域たる直隸省、山東省、河南省方面を實地調査する事に決つて、翌十四年春M技師に囑して實地の踏査を行はせたのであつた。其結果として山東、河南に相當栽培適地あり、有望なりとの結論であつたので、君は着々之れが實現に努力し、左の如き方針の下に先方と折衝に努めたのであつた。

一、山東省霑化縣下に數千町歩の耕地を集團的に買収する事。

一、河南省洛陽、靈寶間に數百町歩の買収。

一、最初資本金は拂込濟五十萬圓とし、事實上双方より出資せる合辦組織とし、各自出資額の割合を以て損益を分擔する事、而して漸次擴張の方針を採る事。

一、栽培の進捗に従ひ繰棉並に荷作工場を建設し、將來支那棉内地集散を米印式に改むるを以て理想とする事。此目的を達する爲め私立模範農場を設くる事あるべし。

一、棉花集散を便にする爲め、適當なる場所を多數選定して集散市場を定め且つ度量衡を一定するやう、政府の特許を受くる事。

一、本計畫は王氏、崔氏對喜多又藏個人關係を中心とし、絶對的に相互間信用德義を重んじ、凡て紳士的に裁定する方針を取る事を双方確約し置くこと。

一、現行中國法律は外人の支那内地企業を許さざるを以て、當分の内不得止適法なる支那會社又は組合とし、經營に當る代表者を崔氏とし、技師並に會計主任は喜多の推薦する日本人を採用する事。

一、表面支那名義を以てするも内實全部喜多出資又は貸金によるものなる場合は所有財産全部を抵當とし、毎期決算に當り先づ此出資並に借入金に對し一五%の割合にて利息の支拂をなし、尙必要の償却を爲すこと。而して此種經營に當り、喜多側出資に毫末危険損害なき事王、崔側より適當に保證すること。

一、計算は毎年五月末日を以て精算する事とし、總收入金より總支出並に利息、償却等を差引きたる殘金を以て純益金とし、其分配法は豫め定め置く事。

一、着手前の調査費用は一萬圓以内とし、喜多側に於て引受くること。

君は以上の如く、相當巨額の準備費用を自ら分擔してまで、是非本事業の達成を圖り、以て産業提携による兩國の共存共榮の實を示さん事を熱望したのであつたが、當時偶々排日問題擡頭して、到底内地開發事業に兩者の握手を許さざる事情に遭遇し、遂に君は憾みを吞んで本計畫の中止を爲すの止むを得ざるに立至つた、實に惜しみても尙餘りあることと思ふ次第である。

王正廷氏一行を歓迎す

大正十二年十二月當時の支露交渉委員長たりし王正廷氏は令夫人を始め沈外交部參事候補、劉衆議院議員外交



大正十二年十二月二十日於灘萬王正廷氏招待
 王正廷氏・印△喜多又藏氏

委員長、王衆議院議員、崔支露會議公署顧問、周同顧問、裴同公署秘書、胡國立法政學校教授、周交通銀行秘書、張華北大學教授等を隨へ、中華民國より或特種の使命を帯びて來朝した。君は年來の交友たるの故を以て、臘月二十五日、一夕盛宴を灘萬に張り、氏一行を大に歡待に努めたのであつた。

當時席に列つた日本人側は外務官憲及知事を始めとし、華城財界知名の士無慮數十名に及び、大阪としては其頃稀に見る盛大なる日支交驛會であつた、君が當日述べた歡迎の挨拶は次の通りであつた。

『此度王正廷閣下が中華民國より或使命を帯びて御來朝になり、既に御用も滞りなく済ませられて御歸國の途次、

本市へ御立寄りになりましたのを機會致しまして、嘗つて巴里平和會議の際知遇を得て居りました關係上、王閣下及同夫人並に御一行諸氏に粗餐を差上げ度く御都合を御尋ね致しました處、大阪御滞在は僅かに二日に過ぎず、種々御忙しい御要務を有せらるゝに拘らず、御快諾を得ましたので同閣下の御歡迎と同時に皆様を御招待申上げた次第であります。歳晚御繁忙の折柄にも拘りませず、中川知事閣下を始め斯く多數御列席を得ました事は誠に私の光榮とする所であります。

王閣下は中華民國浙江省寧波御出身で、我國には十七年以前僅か一ヶ年程滞在せられた相で、其後はアメリカール大學にて御修學、前後在米十數年其間、各方面の事情を御研究になつた様聞き及んで居ります。

先年平和會議の巴里に開催せられました際は、中華民國全權委員として重大な任務を帯びられて列國俊豪の間伍され、中華民國の爲め盡瘁せられたと同時に、其人格の偉大なること當時既に世界各國代表者の等しく認むる所でありました。御歸國以來或は外交總長として民國の樞機に參與せられ、或は臨時總理として國政を變理せられたのであります。近くは山東還附交渉民國委員長として多年日支間の懸案たる大事件を最も公平に處理せられ、又最近は支露交渉に督辦として對露交渉に樽俎折衝の任に就かれ、常に民國の對外政務には重職を帯びて居らるゝのであります。承る處によれば閣下尙未だ春秋に富まれて居る事でありまして、民國の現状將來益々同閣下の手腕に俟つべきもの多々ある事ご存じます。同閣下は博學多識世界事情に通曉せられて居り、政務以外實業各方面にも尠からず御關係を有せられ、豫て當市の實業方面にも意見を交換したい御希望を

有せらるゝ様で、小生は此好機會に各位と最も無遠慮に御歡談を得ましたならば相互に裨益する所も少なくはなからうと存じます。殊に茲に集つて居らるゝは華城各方面を代表せらるゝ方々でありまして、本夕會合は將來日支國交上に於て、聊かたりとも有意義のものとなる様でもあらば、小生の本懐是れに過ぎないのであります。乍併萬事設備なき不行届の上御席次等も整はず、御無禮勝の事多からうと存じます、其邊幾重にも御詫び申上げ置きます。

王閣下御來朝は二週間の短時日ではありましたが、慧眼な同閣下には日本の現状に付いて充分微細に御觀察濟みの事と存じますので、北京へ御歸國後は日支兩國の關係は一層親善の度を加へ、兩國の友朋關係の密度を益々濃厚に導く鍵鑰となる事は私の信じて疑はぬ所であります。

折角御來朝になりましたも、東京は震災後で諸事殺風景でありまして御滞在を慰むるすべもなく、京阪も亦短時日で御満足を與ふる事は到底出來ないので甚だ遺憾に存じて居る次第であります。本日は幸ひ他に御約束もない様承つて居りますので、誠に御粗末ではありますが大阪料理の粗餐を差上げて一夕の御清遊を願ふ次第であります。尙外に御一行諸氏並に列席の各位には、御多忙中御繰合せ御出席下さいまして感謝の外ありません。重ねて厚く御禮申上ます。』

王正廷氏一場の禮辭を述べた後、主客和氣霽々裡に歡を盡したのであつた。

斯くの如く、君は機會ある毎に私設支那公使の綽名に背かざる日支親善醞釀の勞を吝まなかつたのであつた。



和田豊治氏

和田豊治氏と肝膽相照らす

君の親分肌と和田氏のそれとは、東西の双璧であつて、兩者の意氣能く相投合し、互に相畏敬し、肝膽相照らすものがあつた。就中對支經濟政策に就て其意見の一致を見、紡績經營、棉花栽培等につき、相共に活躍し、國家の爲めに大いに貢獻せん事を期したのであつた。日華紡織會社の協營は其顯はれの一つであつて、和田氏は初代社長として、君と共に銳意其發展に努めたのであつたが、和田氏は勲業漸く其緒に就いた許りに、大正十三年春敢へなくも櫻の花と共に散り去つたのであつた。君が如何に其死を惜しんで哀悼措く能はざりしかは後出遺稿篇に掲げた『故和田豊治氏を憶ふ』の一文中に其

眞情が溢れ出て居るのを見るのである。

君推されて和田氏の後任社長に擧げらるゝや、和田氏の靈前に其遺業の大成を誓ひ、左の弔詞を敬しく捧げた

のであつた。

『日華紡織株式會社々長和田豊治君長逝セラレ、町々悲シイ哉、君ハ我國財界ノ重鎮トシテ、又綿業界ノ指導者トシテ、夙ニ支那紡績業ノ將來ニ着眼スル處アリ、我國紡績業ノ盛衰ハ、支那紡績業ノ消長ト相伴ヒ、兩者唇齒輔車ノ關係ハ、密ニシテ離ル可カラズ、相凭リ相扶クベシトハ、君ガ平素ノ持論ニシテ、此自信ノ下ニ着々トシテ畫策スル處アリシガ、時適々歐洲戰爭ノ勃發ト共ニ、我綿業界モ未曾有ノ活躍ヲ來スヤ、機ヲ逸セズ大正七年七月當社ノ創立ヲ見ルニ至レリ、君衆望ヲ負ヒテ社長ノ重任ニ就キ、爾後君ガ内外ニ於ケル重望ト、卓拔ナル識見トハ、克ク生等ヲ指導セラレ、幸ニシテ當社今日ノ基礎ヲ築クヲ得タリ、而カモ當社ノ將來ハ遠ニシテ使命ハ重大也、羽翼正ニ成リテ將來ノ飛躍ハ、實ニ君ガ靈腕ニ期待スル處多大ナリシニ、天斯人ニ壽ヲ假サズ、遂ニ溘焉トシテ遠逝セラレ、曷ゾ哀惜痛恨ニ堪ヘンヤ。

茲ニ日華紡績株式會社ヲ代表シテ、虔ニデ哀悼ノ意ヲ表ス、在天ノ靈庶幾クバ髣髴トシテ來リ饗ケヨ

大正十三年四月十八日

日華紡績株式會社取締役
社長 喜 多 又 藏

大正十一年十月和田氏が時の内閣總理大臣より滿鐵總裁就任を勸説されたとき、君は大所高處より見て、此際一身上の事情を排し、國家の爲め且つは日支兩國將來の爲め挺身快諾ありたき旨、極力勸誘につみめたので、和

田氏も君の熱情を深く感謝されたのであつたが、當時氏の健康上につき醫師の注意する所あつたため遂に辭退された。君は常に國家の大局上に立脚して、自分云はず他人云はず其出所進退につき善處するの觀念を忘れなかつたのである。

経費節約と能率増進に就て

大正九年以來の財界大反動に加へて、大正十二年關東大震災は、愈々事業界の不振を招くに至つたので、君は此間屢々経費節減につき、各店に注意を促したのであつた。大正十三年五月十六日附で、各店に警告した次の書面は、如何に君が本問題につき關心あつたかを雄辯に物語るものと思ふ。

『曩きに本社より各店に二割天引を提げて経費節減を要請せるに對し、既に回答に接せしもの又未着の分も有之候得共、察する所未答店にては目下種々御講究中のこゝろ、想像致居候、申す迄も無く経費の節減は前便敘述せし通り

一 は給料、雜費、旅費、借家料及諸税等の如き Office expense の節約
二 は運賃、保険料、倉敷料、電信料、及人足賃等の未済諸掛(附屬工場あらば未済工費)の輕減を意味するものに有之候、之を細説すれば Office expense は或る程度以上の節約は周圍の事情時に困難なる場合あるやも難計候得共、御承知の通り我社は各地に多數の支店、出張所を有し居り「塵も積れば山も成る」の譬の如く、

各店自發的に些細な御注意の下に、假令少額の節約たりとも之を全體合算すれば、中々馬鹿にならぬ節約額を産み出すは賭易き道理に候。

本支店經常費の内其最も多額を占むるものは、重役、社員及雇員等の給與也、左れ本支店當局としては輕々敷此給與に多少共斧鉞を加ふる如きは、各地を通じて物價騰貴の現狀に照らし又夫々身分相應の體面を保持すべき必要なご考へ此際可成相避け度存候、尤も近來財界の不況に連れ、内地に於ける一部會社の内には脊に腹は變へられず、不得止人員淘汰又は減給し以て經費の幾分を節約せんとするものもあり、昨今政府當局者の内にも行政整理の一端として、官吏の俸給を低減せん企てつゝあるやに仄聞仕候。唯吾人當局者にして是非社中一般の特に注意を喚起し反省を促がし度きは、給與問題を反對に研究して、役員は勿論社員僱員共各自の働き振り如何、切言すれば其能率如何の問題にて、果して本支店を通じて約四百六十名の社員は勿論、其外多數の傭外人の總てが積極的に充分の技倆を發揮せる哉否かを講究致度、米國、印度、支那、歐洲、濠洲等各店當局は部下社員店員平均一人前何程の經費を支辨せるかを算出せば、存外費額の高きこゝ判明し或は驚かるやも知れ不申、尤も本社としては從來在外勤務獎勵法を設け、在留者は年々共に多少貯蓄も出來得る様致居り、尙滞在申愉快に勤務出來候様、殊に衛生等にも格別の注意を拂居候結果、幾分日本人所要經費は使用外人に比し高率なるは免れず、是れぞ單に邦人を保護するてふ人情の然らしむる所のみならず、大きく申せば帝國殖民政策上否な國家的見地より緊要にも被思、多少の失費を吝しむるものに非るも、翻つて我等の最も注意すべきは、本社員にして支店內又は

海外奥地に獨立出張の何れを問はず、所謂綿花式に充分責任觀念を諒知し、會社本位に努力され居る筈は信じ居るも、現在以上心から社務に熱心忠實、傍ら語學を研究し或は刻々變化する環境の實狀を考査して、充分自己の能率を揚げ、一方巧みに使用外人を指導誘掖するの能力を發揮し居るや否や、若しや反對に力足らざる爲め使用外人より却て教を受け受動的に働き居るに非ざるやなき、杞憂ながら私かに案じ過候場合も有之、忌憚なく申せば結局日本人をして在勤せしむるよりは寧ろ經費の安き外人を使用する方、會社として一舉兩得ならずやこの懸念を抱かしむる様になりはせぬか痛心罷在候事にて、此點につき殊更ら各位の注意相促度存候。

目下内地一般事業界不振を脱せず、本支店當局は爲めに昨今難境に直面せるものこ謂ふも過言にあらず、自然其經營にあたり一方消極的に經費其他を節約し、他方積極的に事業の向上發展を企圖せざる可らざるの苦しき立場にあり、向後一層内外各員一團となり携手、渾身の努力を要する現狀なるが故に、茲に各店に對し經費の節約を高調するに共に、社員能率の増進を絶叫するは誠に止むを得ざる所、此點各店の誤解なき様能く本社の実意を諒しし効果の實現に層一層の御奮勵切望に堪へざる處也。

未済諸掛又は未済工費に至りては、前者に比し得る所の節約遙かに大なるものあらんこ信ぜらる、即取扱數の多量になればなる程、節約額を多からしむる所以にて、此點に就ては各店幹部の常に細密なる御注意を要求するの妥當なるを確信する次第、就中電信料の節約は本社を目指す主要部分の一に有之候、從來及現在に於て電信往復の實驗上、其成文の感服出來難きものを屢々見受け居るは勿論、「コード」改正の緊要なるを切に思はし

むるものあるも又一方に於て「コード」使用法の兎角杜撰なるに歸因することも其一原因たるに相違なし、就ては如何にして之を矯正改善すべきやは、目下本社に於ても考究中なるが、尙各店主腦者に於ても精々字數を節約して、而かも有効に電意を徹底せしむる様此上共充分御留意願度候。

次に運賃、倉敷料、保険料率等の値極め及割引の如き、又は人足賃等の支拂に對して充分輕減の餘地あるものは、絶へず調査考究を怠らぬ様御配慮願度候。

要するに本店の望む所は

- 一、社員の能率を増進せしめ、又使用外人に比し常に優逸ならしむる様仕向くること
- 二、極力經常店費の節約を計ること
- 三、未済諸掛又は未済工費の輕減に勉め、殊に冗費に流れ易き電信料の節約を念じること等

以上の主旨に外ならず候間、何卒貴方社員備人に對して充分其意味の貫徹する様御取計相願度、何れ各店より豫て本店要請に對する回答の出揃ふを俟ち、改めて一括詳細得實意度相期し居候も不取敢右申進め候也』

大正十三年末の所感

我社の幹部社員が歐米巡察を命ぜられ、當時米國に滞在して居つたのであつたが、君は年末の所感を次の如く書き送つた、

『……………來年の金融界は遊金多きが如くに見受けらるゝも、有力銀行は確實なる會社商店に放資せんことを考へ居り、偶々業績良好、取引振比較的確實に世評ある我社に對して資金使用の申込多く、我等は我社の信用或は過分に見られ居るに非るか感ずる程、樂にて誠に結構の事には相違なきも、翻て考ふれば此時こそ我等は大に考慮し、注意を拂はざる可らざるの時か存居候。換言せば此比較的樂な時に於て、曾て悲觀せられ、苦しき經驗を嘗めたる當時を追懷して、其氣分を以て各方面にも緊張、一層の注意と努力を怠らざるよう、即ち治に居つて亂を忘れざるの心掛け一層必要な事を眞底相感じ申候、此點は諸君も御同意に可有之、諸君は外國に於ける我社各設備を整頓運用し益々對外信用を増すよう、本社を十分各店に徹底せしむるよう御配慮願度候。

從來同業者の失敗せし原因は、他に種々あるならんも、主として本支店間連絡の不圓滑なりしと、一面盛時に於て前途を樂觀し過ぎたる不用意に歸因せしに非ずやと觀察致居候。若し夫れ貴我平素の間斷なき努力、自然外部の批評に上り、日綿は能く本支店、上下の意思疎通一致行動せる事實知れ亘らば亘る丈、社運の隆盛を意味するもの小生は相感じ申候。何に致せ、仲々油斷は成り難く、又當局者たる小生としては、今こそ日綿前途の爲め重大なる時機なりと心得居り、層一層緊樞努力の必要を痛切に相感じ申候、多分各位に於ても御賛成なるべく、旁々此意味を十分各店に御宣傳願はしく存候。

最近失敗會社の末路を見るに、會社對株主は單に株金の問題のみなるも、從業社員の苦痛困難實に意外にて

其影響する處、例へば其家族、使用人に與ふる苦痛なき、斟酌付度するに於ては、我々責任の重且大なるを痛感せずには居られず、殊に思想界の動搖し居る現代に於ては、責任者たるもの、終始細心の注意を怠る可らざる處に堅く信じ居り、當期總會前且年末所感を開陳し、諸君の御留神を促し置度存候。」

治に居つて亂を忘れざる心掛け、本支店間の緊密なる連絡の必要を縷述した外、多數の社員に其家族を賄へる役員及幹部社員の責任重大の自覺なきに、説き及ぼして層一層の決意を勸勵を希望した君の細心同情こそ將に將たる君の利器であつた云ひ得よう。

大阪商業會議所會頭立候補の真相

大正十四年四月四日の會議所議員改選期に際し、會議所刷新の意味に於て新會頭には新人物を推すべしとする一派、前會頭稻畑氏を推す一派との間に、稀に見る激戦を見たのであつた、新人物としての新會頭候補者は君であつたのである、君は會議所刷新の主唱者ではあつたが、敢て會頭を狙ふ野心はなかつた、だが周圍の事情に餘儀なくされて候補者たることをいや／＼ながら承諾したのであつた、白熱戦の最中君は母堂を喪つて選挙場裡に馳駈するを許さなかつた爲めか、君は不幸にして落選した、此時の消息を大正十四年四月七日附次の如く我社各店に申送つて居る。

『會頭選挙の問題なるが、當地商業會議所は從來事績遅々として擧らず、兎角の批難ありて識者の改造論を高

唱するに至らしめ、今後大阪の商業會議所として大に内部の刷新を圖り、對内的にも對外的にも充分機能を發揮せしめざる可らずとの輿論は、延いて會頭人選問題に及び、此度一級二級共新選議員の比較的多かりしを好機とし、是非共上述の目的を達成し、會頭には新人物を出さざる可らずとの見地により當地紡績、綿業者其他の有志により、我社代表者たる小生に是非會頭に立てて懲慙して止まず、小生個人としては最初斯る意志毫も無かりしのみならず、假令正式に交渉を受くるも會社としての立場をも考慮し、出来るだけ断る考になり居りしも、何分環境の事情無碍に素氣なく断る譯けにも行かず、且つ有志諸君の切なる希望勧誘もありて、事の成否は別として遂に會社立候補するの止むなき破目となり、去る四日會頭選挙總會にて開票の結果、稻畑氏の再選を見るに至りたる次第也。

右の次第にて會頭としては先方に一籌を輸するの止むを得ざるに至りたれども、小生としては今後一個の平議員として國家的の高處より大阪市商工業發展の爲め、同志諸君と相提携して、更始一新の實を擧げ大阪商工業會議所の改善を圖らんとの素志抱負を有し居候次第。』云々

尙當時雜誌『棉業』は左の記事を載せた、

『大阪商業會議所の會頭戦は珍らしい白熱を呈して結局稻畑氏の當選を見たけれども、其勝利は得票の多かつたのに比例した内容を伴つたものとも見られず、俗にいふ勝負には勝つたが相撲には負けたかの状態で、頗る今後注視的になつてゐる、其第一幕は會頭選挙に次いで行はれた副會頭以下の役員選挙であつた、喜多氏が

先手を打つた役員選舉の人物本位論と、中山氏等が提唱した其兩派均分論に引づられて、流石の多數派も役員独占の横暴を敢てする事が出来ず而して一方喜多派も當初の聲明たる會議所刷新の主張を一貫して公約を果すべく、役員選舉に關する交渉委員を擧げて相手方の協調を要求するに躊躇しなかつたので、爰に兩派協議會の開催となり、其結果として副會頭は兩派より一名宛、常議員は稻畑派五名喜多派三名となつて梟がついたのであつた(中略)喜多派は少數ではあるが、相互の了解完全なものに見られて居る結果、中立派の今後の行動にして果して當初聲明の如く公明であるならば、事實上多數派の横暴は行はれ難く、假令徐々ながらも會議所の刷新と其機能の發揮とは期せらるゝであらう、斯くてこそ喜多氏が周圍慫慂に應じて蹴起し、敢然會頭戰を争つた趣旨も達せられる譯けで、勝負には負けたが相撲には勝つた事となる、我等は此將來に多大の興味を抱くものである』

東阿弗利加への發展

君は夙に日本對東阿弗利加貿易の有望に着眼し、大正六年社員を同地方に派遣し、種々調査せしめた結果、孟買支店よりモンバサに出張員を派出し、棉花綿布の取引に従事せしめた。即ち我社は他の同業者に率先して出張員を出し、東阿貿易の先驅者たる名譽を擔つたのであつた。爾來同業者之れに倣ひ、日本對東阿貿易は漸次進展を見るに至り、久しく米國綿布の独占市場であり、綿布をアメリカニ稱する程、土人にポピュラーであつた米

國綿布を漸次市場より驅逐し、大正十五年頃には、米國綿布をして全く市場より其影を没するに至らしめたのであつた。

又ウガンダ方面産の棉花も、大正五、六年以後十年間に約十倍の増收を見る程の發展振りを示し、我社の印度及日本への輸出數量も逐年増加したのであつた。

我社をリーダーとして、同業者の東阿貿易開拓は、我政府に於ても大に重要視するに至つた結果、遂に大阪商船會社に年四十萬圓の補助金を交附し、大正十五年春期より月一回の直行航路を開かしむるに至つた。日本郵船も之に追従した。日本の大新聞も盛んに視察旅行記を賑はして、大に東阿弗利加熱を煽つた。日本の雜貨類が新に東阿への捌け口を見出したのはそれ以來の事である。

我社のモンバサ經營は、以上の如く當初孟買支店の一分店として出張員を出した程度に過ぎなかつたが、時代の進運に伴ふ擴張を爲すことは、本社將來としては勿論、國家的見地より見るも必要たるを認め、大正十五年に至つて、モンバサ出張所を昇格獨立の店として經營せしむる事に改めたのであつた。昇格後の出張所は益々東阿貿易開拓に努力し、大正十五年七月タンガニカのミケシ綿棉工場を買收し、同年十月にはウガンダに於ける六線棉工場(カムリ、ナマガンダ、ナムウエンドワ、カカブグー、ナミナゲ、イラバの六工場)を買收し阿弗利加内地に社員を配置して棉花の直買に當らせ、同時に綿布の内地賣込みに努力せしむる等、瘴癘蠻雨を犯して深く東阿の熱地に商權の確立を期せんことを試みたのであつた。

斯の如くにして東阿市場は益々世人の注意を惹くに至つた。而して昭和二年八月には政府側と綿業者側との協同視察團が同地に繰出されたのであつた。即ち外務省の委嘱を受けた元桑港總領事大山卯次郎、臺灣總督府技師梅本醫學博士、日本綿糸布同業會書記長入江鼎、大日本紡績會社原吉平、東洋紡績會社川口正雄及外務書記生飯田英二諸氏の一行七名は、約半年以上を費し、英領東阿弗利加、ケンヤ、ウガンダ、タンガニーカ、ザンチバル、葡領東阿弗利加のアビシニヤ、マダガスカル等を遍歴した結果として、我政府は民間實業家と協議し、對東阿弗利加貿易發展、販路擴張の具體化につき、相當力を入れることになつた。

我社は素より「バイオニア」として引續き東阿弗利加貿易の進展に努力を續けて居るが、傍ら棉花栽培の事にも着手したのであつた。偶々棉安時代に遭遇したのミ、地味の不良、土人勞働能率の擧がらざる等の理由で、昭和三年より二ヶ年間試培したまゝに終つては居るが、併し兎に角阿弗利加大陸で、二千疋の廣い土地の所有權を握つて居るのは、日本人としては、恐らく我社が其嚆矢であらうと云ふ事を、特筆大書するに足ると思ふ。

第六十八期決算と吾人の覺悟

大正十五年の四月より九月に至る第六十八期中は米棉大豐作、對外爲替の騰貴及支那動亂の頻發等、環境の頗る不利なる材料に累せられ、我社各店の協力奮闘にも不拘、業績の見るべきなく、配當も準備金より一百万圓を繰入れ、而かも一割二分に減配を爲すの不成績に終つたことは、君の苦衷察すべきであつた。君は昭和二年一月

二十二日附を以て各店長に宛て、次の如く感想を述ぶるに同時に、我等の責務と覺悟につき堅き決心を促し、一段の協力奮闘を希望する處あつた。

「當社前期即第六十八期決算は稀有の不成績に終り、配當準備金百萬圓を繰入れ流用して尙且つ一割二分に減配するの止むを得ざるに至りしは御同様誠に遺憾至極に有之、客月二十日拙者株主總會に臨み、來會株主に向つて營業の概況を説明し、併せて綿業將來に付て我社の抱負を縷述せし刹那、實に云ひ知れぬ感じ致し、人知れず無量の感慨に打たれたり。幸ひ總會は株主より何等六ヶ敷き質問もなく、無滯議事終了せしを思ふに付ても社外の一般株主は、能く我等當局に信頼して今後の業績を楽しみに、第六十八期決算を善解して呉れたるものミ深謝するに共に、我等の責務や更らに一層加重せしを痛感せり。

一割二分に減配せし前後の成行に就ても、實は主なる取引銀行及び現物團との圓滿なる諒解をも得たる上、會社將來の爲め敢て減配を斷行せし次第にて、彼の大正九年増資に對する德義上の責務あること決して忘るゝ所に非るも、時利あらず打續ける綿業界の不況に累せられたる結果に外ならず存候。

扱て翻つて惟ふに、我社の設備は今や各方面に完備し居るに不拘、近年一般物價指數の下落は機關の充實せるに反比例して収益減率し、努力の報酬一向遞増せざる世智辛き世の中となりたる故、只此上は尋常一樣の手段のみにては到底追いつかず、塵積りて山ミ爲るの比喩に鑑み、假令零細なる小利ミ雖も之を蓄積して前途氣長に餘力を涵養するに共に、他方萬事節約を旨とし徐々に時運の挽回を企圖するの賢策なるを確信するに至り、本

店にては目下凡ゆる諸點を講究し、經費の緊縮節減の研究に着手致居候間、各店に於ても机上の理想論を排し、實行可能に適する徹底的具體案によりて經費の節約御捨出願度候。

茲に歩一步進んで要望して止まざるは毎度繰り返す様なれど、此際人心の緊張、及各員の能率増進の二要件也。之れ人の和ミ相俟つて社運の基礎を作る所以にして、各員所管の執務に關しても決して陰陽表裏の弊に陥らざる様篤ミ部下を御督勵相成度、若し部下の内成績の著敷不良なるものあり、爲めに店內規律上貴意に添はざるものあらば腹藏なく御申越被下度、本店に於て適當に考慮可致候。

尙能率増進の問題に關聯して特に申上度事は、會社としては各員の能率を要望する一面に於て、之に酬ひんが爲め既に昨年六月會社業績の不良にも頓着せず、社員給料を相當に昇給、且又當期不成績にも拘らず社員に對してのみ普通賞與を支給せるなき、會社としては慎重に考慮し敢て他社に比較して甚敷遜色なき積りに有之、或は社員側より見て一部不平なるやも難計も、夫れは宜敷御説明相成度而して會社向後の盛衰興廢共に大勢により決せらるゝは勿論なるも、當分時代觀としては儲けるより蓄める、稼ぐと共に節約するを謂ふ消極的方策より道なく、唯此際當局者として頼みとする處は、從來外部より見て我社々員は内外店共に本店を中心として、唯一意社業の爲め協力一致和氣霽々の裡に執務せるこの褒許を受けつゝあることにして、是等の社員諸君が將來一層上下和衷、終始一貫健實なる努力を吝まざるに於ては、會社の前途は毫末も悲觀するに及ばず存候、就ては只冷靜一番、當分飽く迄相互自重し、所謂積極漸進方針の標的に精進し、實益を收むる事に奮勵する様



昭和三和五年五月旅順東冠北山壘砲に於て
向つて左より二人三人
喜多喜 喜多喜 喜多喜
氏藏又壽 嬢子

急務なすこゝを、各員に御傳達相成度切望仕候。

尙各位に於て營業上特に御意見も有之候はゞ何卒忌憚なく御申越相成度、改元の新春を迎ふるに際し多幸なる將來を祈り併せて卑望を披瀝して各位の御協力を希望するこゝ如此御座候」

支那への休養旅行

昭和三年五月六日滿壽子嬢を伴ひ、支那沿岸の休養旅行旁々先づ上海丸にて上海に向つた。數日の上海滞在中無論君は社務及關係會社事務にも執掌したのであつた、十六日天津丸にて上海を出發、青島を経て十九日大連に着いた。久方振りに南滿洲の地を踏んで、其變つた繁榮

振りに驚いた。殊に五月は南滿としては年中の最好時季であり、胡藤の花も咲き香ひ、なごやかな春らしい氣分の漂ふてゐる時であつたので、一層懐かしみを覺へたのであつた。社務の打合や訪問を終つての君は令嬢を伴ひ、

坦々たる旅大海岸のアスファルト大路を、旅順へミドライブしたのであつた。暑からず寒からず、肌心地好いばかりでなく、海沿ひの旅大風光の雄大さには一段の妙趣を感じ、旅の疲れを打忘れて面白く眺め入つたのであつた。旅順では先づ關東廳殖産課を訪ねて滿洲棉花栽培状況なきを取調べた後、日露戦跡廻りをなし、幾萬の忠勇義烈なる戦死同胞の爲めに、新なる涙を濺いで、懇ろに弔慰したのであつた。殊に東鷄冠山北砲壘の惨めな戦跡には一入の感慨を覺へ、其處に建てる露將コンドラチェンコ將軍の碑前に、圖の通り紀念撮影をしたのであつた。

二十一日大連發のアメリカ丸で歸東した、晩春の波靜かな支那海の船旅び、君に取つては無上の愉快ミ休養であり、潑刺たる元氣を養つて二十四日熱鬧の大阪に歸りつき、又も忙がしき生活を追つたのであつた。

社員を激勵す

君は昭和三年十一月廿五日、社員幹部會の席上で營業方針其他につき色々訓示を與へた最後に於て、『尙此機會に於て諸君の熟考を煩はしたい事は年來我々の唱へ來つた「綿花式」の精神が今尙充分に徹底して居るか、さうか云ふ事です、多少疑問の様にも思はれます、資本金一千万圓時代と比較して最近は、同一の努力が足りない嫌ひがありはしないか、我々の大に反省を要する所であります、會社によりては役員でも多くの株を持たず社員に至つては殆ど其會社の株式を持たぬ云ふのが普通であります、我社は御承知の通り普通の月給取りミ異つて役員も社員も相當に我社の株式を持ち株主になつて居り、我社ミ利害を共にする次第

でありますので、我々が努力すれば努力するだけ、多く報ひらるゝ譯であります、社内並に關係會社を通觀しますれば、各種事業に亘り全世界に羽翼を延ばして居るので、一部の人は我社を實質以上に買われるに非ずやとも思はれ、一層責任の重きを感じる次第であります、今回御大典に際し不肖に叙位の御沙汰を忝ふしたのも、日本綿花の社長である云ふ所より此恩命を拜した事ミ推察して居りますが、之れ全く我社が經濟界に重要視さるゝ所以であつて、年來諸君御奮闘の賜なりミ深く感謝するミ同時に我々も諸君ミ共に、一層努力社運の發展に盡し國家の爲め奮闘しなければならぬ考へます、』

右の如く述べ一層の努力健闘を切望したのであつた、而も自分が叙位の恩典に浴したこは諸子勉勵の賜なりミして感謝ミ激勵をなした君の至情には一同深く感激して今後一層の精勵を誓つたのであつた。

御陪食ミ御下問に奉答

昭和四年允文允武なる 聖上大元帥陛下には、畏くも攝河泉平野に行はせられた大演習御統監の爲め、大阪城に大本營を置かせられた。御滞在中阪神に於ける知名の實業家を召させられ 特に御陪食の榮を仰付けられ、君も此光榮に浴した一人であつた。

其當時の模様を昭和四年六月二十二日、社員に對して次の如く述べて居る、

『……………先般 天皇陛下が畏くも當地へ御臨幸に相成り、其節不肖も紀州御殿で御陪食の光榮に浴し、色々

結構な御膳部を頂戴致したのであつたが、其跡で陪食者を一人々々御召し出しに相成 陛下には畏れ多くも各自に對し、色々有り難き御下問がありました。不肖に對しては、東阿で棉花栽培をやつて居るそうだが其成績如何、將來の見込はさうか、

なまのいゝ有難き御下問を拜しました、私は恐懼措く處を知らず、一も通り思ふ處を奉答申上げたのでありますが、餘りに御聰明に渡らせられる御下問でありましたので、不思議に思ひ跡で懇意の鈴木侍從長に其御話を致しました處、それは前年大山總領事一行が、東阿地方を踏査して歸つてから、特に大山總領事を御召出しに相成り、畏くも御前講演を仰付けられたとき、大山總領事が日本棉花會社の活動振りをも詳しく御話申上げたので、御聰明におわします 天皇陛下には能く之を御記憶遊ばされ、今度の御下問もなつたものだと承つて、實に 陛下の萬事に御軫念あらせられる大御心を拜察し奉りて感泣に咽んだ次第であります。

諸君の中には、或は我社が東阿で棉花栽培をして居る事實を、未だ御存じない方が有るかも知れませんが、我社では「ダンガニカ」の「ミケシ」に二千噺の土地を持つて居るので、之れに昨年及び今年試験的に試植したのです、別に世間に吹聴する程のものでもないのですが、既に畏くも 天聽に達したのですから、我社としてはなんじかして其成績を挙げたいもの、切望して居る次第であります。」

君は大正八年ヴェルサイユ媾和會議より歸朝したとき、今度まで都合二回御陪食の光榮を擔つたのであるが、臣下としては實に無上の榮譽云はねばならぬ。随かに君の歴史を飾る一つの大きな事實である。

緊縮方針を力説

君は昭和四年八月八日附で次の如く各店に訓示したのであつた、

『現内閣は金解禁を使命と心得、緊縮政策を標榜し我邦現下財政經濟の危機を救ふには上下一致協調、緊縮節約斷行を必要とする旨高唱し、政府自ら率先して其範を示し、大は豫算案九千萬圓の節約より、小は各省官廳自動車數減少、宴會費節約に至るまで、諸事儉約を實行しつゝあり、前内閣の放漫政策に比し雲泥の差にて、公債株式市場始め一般物價下落、不景氣深刻となり、一部人士には怨嗟の聲あり乍併國家百年の安定を期せんが爲めには、此際多少の犠牲は不得止、徹底的緊縮政策の必要なるは有識者の等しく認むる處に候

翻て我社の現状を顧るに、現内閣の緊縮方針は徒らに他山の石として看過すべきに非ず、我社亦同様緊縮節約の必要に迫り居候、現内閣が上下一致緊縮を要望し而も率先して之を實行しつゝあるの時、我社亦緊縮節約を高唱實行する事何の不可思議か之れ有らん、されば各位に於ても此際徹底的緊縮節約方針を樹立し、着々之れが實行を期せられ度希望に不堪候、只茲に御注意申上げたきは、緊縮は萎縮に非ざる事に候、緊縮だ節約だ云ふが爲めに、手が縮んでは困る、事業經營は何處迄も勤勉に堅實に進取的に而かも其間能率の増進を圖り、無駄を省き、經費の節減を企圖する事が眞の緊縮に存候

節約方法については各店、各課に於て夫々御研究相願度、人件費事務所及社宅の家賃、社宅費等節約の餘地

なきや、交際費就中宴會費の如きは極度に儉約し、寄附金、廣告料、印刷物、文房具等の消耗品より電氣瓦斯炭水費等に至るまで、假令少額づつでも節約する方法を御講究相成度候、尤も各店長、各課長のみが如何に焦慮しても部下各員一致其心懸けにならざれば達成を期し難く候に付、部下各位の意見をも聴取し、上下一致協同、緊縮節約の實行を期せられ度特に各位の御研究を祈り候

尙本件は充分貫徹を期し度又本店の参考にも供し度候に付別紙請書に貴方御意見の概要を附記して御返送相成度候」

君が爲政者の緊縮政策に共鳴し、我社内に於ける經費節約の斷行を強調したことは、能く時勢に順應したものであつたのである。

大 缺 損 と 大 減 資

大正九年財界の恐慌に亞で、大正十二年關東の大震災突發により、日本財界の混亂と疲弊とは、一層の深刻味を加ふるに至つた、先是我社は大正九年の大増資により得た巨額のプレミアムを拂込金の運用は、事業の擴張を新規投資に投ぜられたのであつたが、經濟界の不況日を追ふて甚しきを加ふるのみであつたので、我社の關係事業も勢ひ多大の打撃を受けない譯には行かなかつた、従つて統率者たる君の苦心は、實に一息通りや二息通りの事ではなかつた、眞に臥薪嘗膽の苦勞を重ねた、殊に君が思ひ煩つたのは多額のプレミアムを拂ひ、深甚なる

信賴を聲援を吝まなかつた多數の株主諸氏に對する義理合ひである、何んをかして此苦境を乗り切り、一日も早く光明安全の域に達せしめでは、全く申譯がないに許りに、君は渾身の智謀と勇氣と努力を傾倒して、日夜寢食を忘れて大勢挽回に奮闘是れ勤めたのであつたが、何分にも大河を決するが如き滔々たる世界的不景氣の進撃には、遺憾ながら之を阻止するに堪ゆる武器の持ち合せがなく、物價の暴落は其蹂躪に委する外はなかつた、爰に手持商品の大損失、固定資産及び株券類値下りの大損失、約定品破約の大損失等、累々たる死屍は横はつたのである、斯くなつては最早姑息の糊塗手段ではさうにも仕様がな、君は爰に一大勇猛心を奮ひ起して斷然根本的整理に着手するの外なしと覺悟したのであつた、斯くて君は昭和五年三月末に終る決算に於て、之れが一大整理案を發表するの餘儀なきに至つたのである、我社の大膨脹後に於ける一大反動であるだけに、其結果も頗る重大なるものがあつて、一舉三千八百七十萬圓テフ巨額の損失を計上したのであつた、嘗て十割配當に株主を喜ばせた君にして今此大損失を株主の前に告白せざる可らざる立場に陥つた君の苦衷、蓋し血を絞るが如き痛苦と遺憾を感じた事は申すまでもない、損も得も商賣有り勝ちの慣ひは云へ、餘りの有爲轉變實に今昔の感に堪へないのである。

此決算の報告と諸整理案は同年六月二日の第七十五期株主總會に附議された、其席上君は悲痛の面持にて左の演説を試みたのであつた。

「株主各位 是れより第七拾五期定時株主總會を開催す、諸計算書並に議案は、既に各位に送呈せしを以て、

其に依り御承知相願ひたるべしと信するも、尙ほ一應、業績其他に關し説明申述べんごす。

當社主要取扱品の概況に關しては、株主各位の御手許に送達せし營業報告書に依り御承知願ひたる通りなるも、當期非常なる不成績を報告するの止むを得ざるに至りたることは、原因する處經濟界種々の變調に基き殊に最近吾國特殊事情たる金解禁に伴ふ深刻なる財界不況加之銀塊の大暴落等引續く世界的不況の影響に依る所多しと雖も、畢竟當局者が其營業方針を過りたるが爲めにして誠に恐縮遺憾至極陳謝の外なし。

當期決算は去る三月三十一日締切のものにして、例年六月二十日前後に定時總會を開催報告し來りたるものなるも、當期成績極めて不成績なりしを以て、一刻も早く株主各位に報告御諒解を求むべく、海外諸支店出張所よりの報告の如き、總て電信を以て至急取纏めたり、然れども全部集りたるは、去る四月二十二日にして、爾來懸命の努力を以て、漸く五月十日、參千八百六拾九萬餘圓の缺損を確定するに至れり、斯くて之が報告を最迅速に爲すべく、當社定款に依る定時株主總會開催月たる六月を俟たずして、臨時株主總會を開かんかとも思ひしが、臨時總會を開き數日後更に定時總會を開くは御迷惑かと思ひ、定時株主總會に諮ることとなり、但し特に六月二日（一日は日曜日に付き）を選定したる所以のものは、右に述べたる如く成る可く早く報告せんとの當局者の希望に出でたる所にして、株主各位に於ても此點當局者の苦衷を御諒察相願ひ度し。

却説今回發表したる多額の損失に就きては、役員として甚だ申譯なきこと乍ら、既に缺損を生じたる以上、斷然これを計上するは不得止と心得公表したる次第なり、乍併今後營業遺憾なく繼續し得る様にす可き事は當

局者としての責任の第一義と心得、將來に於ける事業繼續方法につき關係方面に極力交渉せり。

而して損失金處分方法を如何にすべきかの問題に就き、種々協議を重ね、株主各位よりも、新株式の未拂込金徴收のこまなき様との注文あり、旁々當局者として、此際拂込を徴收せず未拂込の儘整理せんご決心し、取引銀行たる横濱正金銀行にも交渉したり、初め半額減資の程度に止めんとしたるも、斯くては相當の損失金を繰越すこととなり、徹底的の整理ならざるを以て、遂に五分之三減資に決定したる次第なり、若し夫れ今回總會に於て本案通過の曉には新株に對する拂込を徴收せず而かも營業繼續何等支障なきなり。

當期に於ける當社の不成績善後策に對して、唯一の債權銀行たる横濱正金銀行が、減資其他につき終始好感を以て待遇し、必要なる資金の融通を諒解し下されたる爲め、當社營業毫も變らず繼續することを得るに至りたるは、全く同行ご多年取引の結果たるべきも、同時に同行幹部の深甚なる好意に出でたるものなる事を、株主各位に對して特に報告すべき義務ありと信するものなり。

省るに當社の諸事業たるや、國際的關係に立つもの多く、勢ひ今回大損失の發表が、内外に如何なる反響を及ぼすやの問題は、尠なからず憂慮したる所なり、然るに損失額發表せられたる以來、内外にける形勢は格別の悪影響を來たさざりしのみならず、却而内外共、事業其ものに對して、同情し呉れらるゝもの存外多數なることを聞知するに及び、先きの懸念が杞憂に過ぎざりしことを喜ぶものなり、之を以て觀るも、將來に於ける當社營業は先づ心配なしと確信するものなり、然れ共、當社として今後世人の同情後援に俟つこと多大なるを

以て、益々自重し、以て能く其目的達成に努力せんことを期し居れり。

當期多額の損失を來たし、株主各位に御迷惑を相掛けしことは、當局者として只管恐縮の外なし、今左に損失金處分案に就て述べんに、當期損失金參千八百六拾九萬九千九拾貳圓八拾錢より前期繰越金參拾萬九千九百七拾貳圓六拾壹錢を差引き參千八百參拾八萬九千壹百貳拾圓拾九錢に對し、別段積立金參百萬圓、配當準備積立金貳百五拾萬圓、退職社員慰勞積立金拾萬圓、準備積立金壹千六百九拾五萬圓、合計貳千貳百五拾五萬圓の諸積立金を以て填補し、金壹千五百八拾參萬九千壹百貳拾圓拾九錢を次期繰越損失金とせり、而して此繰越損失金は、本日の第參號議案たる資本減少の件、幸にして可決せらるゝならば、之れに依つて得る差金壹千五百六拾萬圓を以てこれを填補し、結局貳拾參萬九千壹百貳拾圓拾九錢の損失金、残ることゝなるなり。

退職社員慰勞積立金を以て損失金を填補するは如何との説あるも、準備積立金を以て損失填補に充當する場合には、其以前に此種積立金を先づ充當すること法律上必要事項たるを以て、これを填補に充當するなり。

第三號議案たる資本減少の件は、前述せる如く損失金填補の爲めにして、五分之三減資即ち資本金五千萬圓を貳千萬圓に減少することに於て、其方法として、五拾圓全額拂込濟の舊株式五株を併合して同五拾圓全額拂込濟の舊株式貳株とし、又金貳拾圓拂込の新株式五株を併合して同貳拾圓拂込の新株式貳株とし、其結果得る所の差金壹千五百六拾萬圓を以て損失の填補に充當するにあり。

第四號議案たる定款變更の件の中、第一の支店減少は經費節約緊縮方針實現の一にして、廢止せらるゝ支店

は東京、名古屋、天津、香港、甲谷陀、スーラバヤ、シドニーの七支店、繼續せらるゝものは船場、横濱、上海、漢口、大連、青島、孟買、蘭貢の八支店なり、尤も之等は支店なる名稱を廢止するのみにして、出張所又は出張員の形式を以て存續し商賣上何等變りなし、誤

解なからんことを乞ふ、第二は減資實行の結果、必要なる定款變更にして從來の資本金五千萬圓、壹百萬株を資本金貳千萬圓、四拾萬株に變更するにあり。

以上大體の説明を終りたるが、却説、當社營業の將來如何に就て申述べんに、從來は營業上就中金融上多少無理のあつた事は免れざるも、今回不良勘定を整理し、横濱正金銀行より徹底的援助の諒解を得たる今日、當社營業は却つて以前よりは樂になるものも考へらる、而して他方經營の合理化に全力を傾注し、只管無駄を省き、經費の節約を爲し、尙ほ現在所有の財産中不要なるものは整理す可く、今俄かに其が處分困難なる事

情に在るものは、今後適當なる機會に於て漸次整理實行し度き考へなり、取扱高の如きも、現状より觀て特に



昭和五年四月於紀州白濱網不知
喜多又藏・日置保彦氏
向つて右より

著しき減少を來たすべしとも思はれざるなり、然らば今後確實に何程の利益を擧げ得べきやと云ふに、そは四圍の事情に支配せらるゝこと多きを以て、當局者として斷言することを憚るゝ雖も、借入金に對する利息を支拂つて尙ほ且つ相當の利益を計上し得べき見込ありと申上げ得べしと考へ居る次第なり。

終りに臨み申述べ度きは、今回の損失に關する役員の進退問題なり、役員一同は其責任を痛感し非常に恐懼し、就中最大責任者として私個人は如何なる御叱りを受くることも只管陳謝の外辭なき次第なるも、損失の結末を着けずして其進退問題を云々するが如きは、會社並に株主各位に對し忠實なる途に非ずと考ふるを以て、當局者として最善と信ずる方法を案出し、本日の株主總會に之等議案を提出したる次第にして、提出議案に關しては勿論種々の御議論あらんも兎もあれ議案の可決を願ひ、本日の株主總會無事終了後に於て、役員一同の進退問題に關する株主各位の御裁斷を仰ぎ其御指圖に従ひ如何様にも致す決心なれば其點宜しく御諒察相願ひ何卒本日の株主總會を無事終了せられんことを切望する次第なり。』

緊張した株主總會、雨か風かこ心配されたのであつたが、損失の原因が君の怠慢や、無責任の行動の結果に出たものでない事は、君の平素の人格によつて、株主諸氏も、之を諒察したものが、單に將來の挽回を要望したのみで、諸提案も満場一致、平穩裡に決議散會したのであつた、君は今度こそは、如何なる非難攻撃、罵詈譎も之を甘受するの悲愴なる一大決心を以て壇上に立つたのであつたが、案外にも株主諸氏の態度が寛容であつたのに感激し、同時に層一層の大責任を痛感し、益々一身を犠牲にして、株主の辜負に答へなければならぬと、堅く

覺悟の臍を固め、涙ぐましく許りの熱誠と努力と忍耐とが續けられたのであつた。

寺田某の訴訟提起

我が第七十五期決算に於て巨額の損失を發表したことにつき、株主の一人寺田某は昭和五年七月末、社長たる君に對して商法違反、背任の告訴を大阪地方裁判所に提起した、司直の府は種々取調の末同年末起訴猶豫の決定を與へたのであつた、然るに寺田某は之を不服とし、直に大阪控訴院に抗告したので再び其筋の取調べを見るに至つたが、今回も矢張前同様昭和六年二月二十三日起訴猶豫の決定を與へられたのであつた、寺田某は其後病死したので訴訟事件は其儘結末を告げたのであつた。

右につき昭和五年十二月三日社員幹部一同に對し、君は次の如く感懷を述べた。

『此事件に依つて吾々は如何なる教訓を與へられたか、元々大株主會の策動が面白くないとか、寺田氏が餘りの仕打だとか言つて恨んだりする事は全然止めたい、要するに凡ては私が悪いのである、損をした事が悪いので、社の内外人達が怒るのが當然である、尤も私は最善を盡したので、私自身も共に大きな損を蒙つて居る一人であると言ふて見た處で、夫れは無論御氣の毒とは思ふが夫れと之とは別問題だと言ふ人もあり、中にはてんで同情も出来ないと言つて反對する人もある。兎に角全努力を傾注して飽迄奮闘する外ない、さうやつて取返へしが出来れば此上なく、假令出来なくても遣るだけは遣らねばならぬと感じた、無論他の多くの會社にも

似たような事をやつて居る、併しだから言つて吾々も遣つて可い云ふ譯には行かぬ、假令夫れが普通一般に行はれて居る事であつても、場合によつては法律に牴觸する事であれば、自然處罰せられる事があつても當然だと言はねばならぬ、故に今後は飽迄合理的に遣つて行く必要を認める、夫れには全く頭を變へ既往の失敗に鑑みて直して行かねばならぬ、本店各支店共數字を基礎として其數字を研究し、極めて違算を生じないようにせねばならぬ、大體の時勢を見るに、大正九年に景氣が反動して以來、物價指數も収益も何も彼も下る一方であるから、總ての數字を下けて損があれば出すだけは出してしひ、小さいが健全なものにして行かねばならぬ、四十一年の時も同様で矢張諸物價は下り、世間一般に數字が小さくなつたが、今では非常に大きくなつて居るので、兎角間違易いので、色々其邊を研究して會社の經營はさうしても合理的にやつて行かねばならぬ、其爲めには或は諸君にも種々御願ひする事もあるかも知れぬが、會社更生の爲めに協力を願ひ、一日も早く會社の恢復を計らねばならぬ、……(中略)……自分としては訴訟も無事に済んださなるに、私も此儘社長を續けて行かねばならぬ立場になる模様である、少し身體も弱つて來たし、果して重任に堪へ得るや聊か懸念ないでもないが、今日の場合私は出來ませんと言ふ譯に行かぬ、幸ひ訴訟が片付けば外部は日華紡位の關係で殆ど全く日本綿花の仕事に専念し得るから、出来る丈けやつて行く積りである、何れにしても當分配當は出來ないと思ふが、先づ出来る丈け内容の整理充實を計つて行きたい、そして諸君と共に出来るだけ働いて見たい、尤も吾社の前途に不安を抱いて嫌氣をさした人があつたら寧ろ此際退社して貰つた方がよいさへ思つて居る

併し明治四十一年の歴史を顧みても、日本綿花は此儘終るものではないと思つて居る、焦つてはいけない、堅實に根氣良くやつて行かねばならぬ、諸君もさうか此主旨に御賛成願ひたいのです。』

尙又昭和六年六月二十二日社内の講演會でも左の如く述べて居る、

『昨年來株主の一人寺田氏が、私を相手取り告訴したため、私は検事局へ十一回も出頭取調を受けました、併し今考へるに、此告訴の爲めに却て世間の誤解を解いて、よかつたと思つてゐます、檢事も此様な大損失を出した事は悪いが、其間何等不正な行爲が無いのであるから、却て之を援けて更生を計らしむるがよいと思ふ意見であつたようでした、控訴院に抗告されましたが却下され、大審院までは行かない様子で、其後一度の召喚も受けませんでした、最早濟んだものと思つてゐます、其前後の新聞等を書いてあつた事は、大分間違つた事がありました、告訴人は我社の株主として會社の爲めを思ふ云ふ熱意からでなく、或一種の目的であつたらしく、検事局の方でも其邊のこじが能く分つて居たらしく、謂はゞ自己の利益の爲めにやつたものよつたものであります。』

兎に角私の不徳の爲めに、かような問題を惹起し、役員、社員、株主其他知人等に色々御心配をかけたことを非常に恐縮に存じます。』

一時世間の耳目を引いた君の告訴事件は、君には甚だ氣の毒であつたが、又一面之れが爲め、君の公明正大何等疚しい點のない事を、證明し得るの機會を與へ呉れたことも見得るので、寧ろ君の爲め我社の爲めには、疑雲を

拂ひのけて仕合せになつた。

大減資と整理に就て社員に訓示す

昭和五年六月二十六日、社員の講演會席上で、大減資實行の事、諸整理の事、常務役員の減少、社員の人減し、社員今後の心得等につき、君は所懐を述べた、

『(前略)、昨年の暮から今度の總會までには、實に幾多の出来事がありました、去年の暮は、總會は濟んだが、金融の關係上荷物の受渡が甘く出来ず、年明けてからも、其通りで一向面白い事がないので、色々惱まされ通してやつて参りましたが、これではいかぬ云ふので、大整理に着手、其結果が二十日前の總會の提案となつたような次第です、御承知の通り去六月二日の總會で三千八百七十萬圓云ふ大阪では、未だ無い程の大損失を出したのでありますが、之れで諸君を驚かしたのみならず、一般財界に對しても誠に見苦しい譯けで、之れは役員一同殊にそれを代表する私は恐縮慚愧に堪へない次第であります、三千八百七十萬圓云ひますと、六ヶ月百八十二日、一日宛二十一萬圓の損云ふ勘定になりますから、之で世間の疑ふのも無理はないのであります、其所に吾社の株は下つて行く、一般株式界も悪いので株主も心配される、取引先でも行詰りを來しはせぬか、心配されて來ましたが、さて其間に處して第一の手段としては成行は成行として、損は發表するが、他方さうしても、營業の繼續はやつて行かねばなりません。

會社に金がなくなつたら、未拂込を取るの、當然であるから、新株所有の株主としては、心配されるのは無理も無いのです、併し私としては私達が間違つて損をして、それで金が足らぬから株主から金を出せと言ふことは、よしんば法律上取締役會に權能があるにしても、徳義上出来ませぬ、そこで不足金に對する金融を、正金銀行に御願した、正金では年來の關係もあり、最初より好意的態度で本支店出張所の詳細調査後、必要な金融を快諾されたので、同時に完全なる一行主義を確守することになりまして正金と本社との間も、極めて圓滑に参り、營業には全く心配は要らなくなりました、當局者の吾々より見れば、株主拂込金の一部並びに積立金が借金に變つたまでの事であり、先づ營業の方は之で心配はなくなりました。

次に株主關係は先づ大株主會、次に一般株主會と言ふ風に順序よく参りまして、株主側は損をしたと言ふ事は腹はたつが仕方がない、兎に角何とかして取返す方法を考へさせて行かねばならぬと言ふ意見に、大體一致しました、尤も一、二の株主には不平もありましようが、大體は承認と言ふ事になりました、其後財界一般環境悪しく殆んど小バニツクとも言はれる程で、大部分の株式は下落して居ますので、當社に對する風評も、最近餘り問題にならずに昨今を經過して居る次第であります。

大減資と整理に就て社員に訓示す (一一)

次に今後の會社方針であります、今後は本社を中心として、各方面に連絡を保ち、損をしないで確實にや

つて行く、他方経費をへらして行くと言ふ、健實方針以外にないのであります。株主總會に於て損失の承認、減資案の外に、支店廢止案を提出したのも、其結果に外ならない、從來餘り儲からずに、やつて来た店は、此際縮少する、何しろ儲ける事がむづかしくなつて来たのですから、なんぞか経費を減らすと言ふ事が、何より大切なので、之れには株主側や正金の方からも、思切つた整理をやらねばならぬと、言ふ注意もあつたからであります。

此間の重役會で先づ七十五期の賞與金に就て相談致しましたが、會社が損をして居るのに、賞與金を出すはさうか、他所でも最近は大損のしない會社でも一ヶ月や一ヶ月半云ふ風に減らして居る折柄にて、種々の議論もあつたが、社員諸君は同じく働いて呉れたのだからとて、乍輕少今日御渡した次第です、此點御諒承願ひたい。

それから定期増給は時節柄本年は中止と御承知下さい。

次に手當の方は、内地手當は物價も安くなりましたので現在手當の五分引にしました、海外手當では、從來の海外勤続手當は昨年少し減しましたが、今回は一旦中止と云ふ事にしました、それから各地を通じて、在勤手當、妻帯手當、任地増手當の三種共に内地同様百分の五減らす事にしました。

海外各店に於て経費の節減につき何れも苦慮して居ります、孟買の如きマラバール社の住宅をやめてダウンタウンに引越したと云ふやうな次第で、從來多少ゆつくりした生活をやめて、成るべく出来る丈の辛抱して色

々の種目に亘つて減するやうにしたい積りです、併し何をいつても一番金のかゝるのは人件費であります、一年前或部分の減員はやつたのですが、時勢上更らに減員の必要を認めますので、今回は役員、社員共に減らすと云ふ事に致しました、そこで役員側では副社長を廢し取締役五名の常務を三名に減らすことに致しました。

御承知の通り吾社の取締役は長く株主としてみても、名譽も財産も我社に投ぜられて来た。山田君も三十二年間中村楠本兩君も二十年以上何れも印度アメリカ本社に努力されて来て會社の今日あるは全く之等三君の努力の結果で、今後ドコ迄も一緒にやつて行けるものと思つて居りましたが、時利あらずして而も小生不行届不始末の結果此際別れて行かねばならない、之れは洵に衷心相濟まぬ心惜しく感じて居ります、今回當然私が退く方が自然であります、色々其間に先般來隔意なき意見交換の結果今回發表の事となつたので、三君もやめられても結局會社の爲めには従前同様盡くして呉れられる筈、其眞意はさうしても此際後進に道を譲り度い自發的に辭任を申出でられたので、己むを得ず拙者の外に山川、加藤、日置の三君で、及ばずながらやる事になりましたのです、そこで將來此四人でやつて行けるかさうかは疑問であります、此際さうしてもやつて行かねばならぬ立場になつて居るのであります、此處に特に御諒承を願つて置き度い。

大減資と整理に就て社員に訓示 (三)

それから不本意ながら社員の方でも減員をやる事になりました、多分本月の末には氏名を發表する事になり

ます。外に海外在勤の方もあり、大體約四十名の方が御退職願ふ事になります。現在の社員諸君は總て精選された必要な方許りで誰方が悪いと言ふ處はありません、がさうも己むを得ない。事實今回退職せられる諸君は全く會社の犠牲なられるので、中には自發的に申出でられた人もあり、家庭の事情差支ないからとて勇退された人もあります、之に對して會社の待遇であります、中には社友に推薦せられる人もある、而して一般に慰勞金は營業規則規定の最高を出すことに致しました、斯る場合營業規則による非職の規定を適用するのであります、非職期間を九ヶ月にして、その間月給の三分の一を支給する事に致しました、何分今日は破れた財産状態にある吾社の事でありますから、此營業規則に對して會社は此義務を負ふのは事實困難であるが、多年會社の爲め盡力せられた方には相濟まないから特に銀行にも事情を打明け、快諾を得た譯であります、今後に付ては同じ取扱に出来るかさうか豫想は出来ませぬ、若し今後利益でも出れば兎に角、今日の經濟界が一層悪くなり、會社の状態又悪化すれば慰勞金も出ない破目になるかも知れぬ、此際は特別のはからい御承知願いたい。

今度退職された方は長く社の爲め盡くした、惜しい方ばかりで愛社心から出られるのであります、又残る方も幾分の犠牲に立つて居られるのであります、送られる方も残る方も、さちらも事情己むを得ないのであります、此前の主任會議で或御質問に對し減員はせぬ積り、目下の處そんな話はないと私が申したに對し、此度の事は食言ではないかと言せられる方もありますが、その頃に私は當然退職すべきものと考へ居り、其折は何等そんな話はなかつたのであります、其後幾多の變化曲折があつて、只今では周圍の事情己むを得ない、

又社員の方にもさう言ふ意味を内々建言せられた方もある位である、何れにして今日會社の内情は役員丈の考へでは参りませぬ、株主や取引銀行の希望もあり、實に己むを得ません、それなら又この次第三回をやるのぢやないかと言ふ疑もありませんが、之は斷じてない、若しあつたら事業の成績が甚敷悪く綿花會社が再び立つ事が出来ぬと言ふ場合でありませう、兎に角今回出られる人は洵に同情に堪へませぬ、殊に今回唯一の責任者は小生です、其僕があつかましく残つて此宣告をするに、實にあつかましく感慨無量です、出来得るなら、永く一緒に Worst を經過し、多少の恢復の曙光の認められる様致し度いが事情斯る破目となり、申譯がありません、私から申上げるも蛇足と思ひますが、さうか行かれる人達も相變らず吾社の恢復する様御同情を聲援を願ひたい、残れる人も親切に色々御心添を願ひたい、そして従來同様會社にも時々御出でを願ひたい、永く御心安くやつて貰ひ度いと思ふのであります。

大減資と整理に就て社員に訓示 (四)

残つた社員諸君に申したい事がある、會社も五千萬圓から二千萬圓に減る、而して昨今の財界は銀塊は未會有の暴落、支那には戦争、印度にはトラブル、歐米も財界人氣悪しく、内地では生糸慘落三品綿糸も一〇〇圓割れで、棉花が漸くと言ふ相場、株式界も慘落又激落、多年好運に恵まれた紡績も受難期に入つたのではあるまいか、兎に角悪い事づくめ、之から先は少しも油斷出来ませぬ、金融界も半ば恐慌状態と言ふ譯で、此財界激浪

の中を泳いで行く事は餘程困難でありますので、吾々は今迄は頭の持ち方を別にして安全第一にして行かねばなりません、私は明治四十一年に吾社が今度と同じ様な危機に陥つた経験に遇つて居ますが、其節は資本金二百萬圓拂込百二十萬圓積立八十萬圓、それで損が積立金を零らし拂込資本に四十萬圓切込んだ、その時の財産は建築中の本社建物、漢口の工場位でありました、其當時大悲觀でしたが、案するより生むが易く、其時は一年半無配で、跡配當が出来ましたが、今後は果してどうか、同じ速力で恢復出来るか否か、見當が付きませぬ、或は之れから三年かゝるか、五年かゝるか、それとも十年かゝるか、判りません、お互に大決心がいらのです、併し當時綿糸が二〇で一〇〇圓、立馬十六番で一〇〇圓の相場でしたが、二十二年跡の今日、一〇〇圓を潜る言ふのは、非道い相場と思ひますが、併し却て之れで商賣がし易くなりはせぬか、何にせよ吾々は石に嚙り付いても立直して行く言ふ決心でやれば、之迄通りならなくとも、何んかなると思ひます、併し何分現今の状態は損をする金がないのだ、營業資金は正金よりの援助で全く従前同様商賣には差支ない、併し借りる金ですから利息が入る、又何時か返さねばならぬ、それにはどうしても人一倍働いて多少でも微利を見逃してはならない、同時に吾々は頭の持方を根本的に變へて行かねばならない、從來は東棉、江商と同格にやつて來たが、今日では吾社の地位は全く墜ちた、世間の見る眼も違つて來た、それは私も充分に知つて居る、貧乏會社の社長の積りで居りますから、自然諸君も同様、その氣持ちになつて貰いたい。

損を出した以上は是非共、元の明治四十一年同様の考になつて行かねばならぬ、それは恥でも何でも無い、吾

々は何物も犠牲として會社を立直して行かねばならぬ、株主や正金や紡績や、表向の外に役員社員の家族に對しても是非とも恢復せねばならぬ、如何なる困難でも忍んで貰はねばならぬ、今回の總會を機として六月二日から、吾等の地位は全く變つたのだから、其積りでやつて貰はねばならぬ、江商は江商、東棉は東棉、兩社は吾等以上の商社である、發表後の吾社は世間でも見て居る、否、吾等自身で思切り格を落して往く、それも所謂綿花式である、其積りで押通して行かねばならぬ、私は昔孟買でガダムの店に居た事があるが、其當時の支配人は威張つた暮しの様だつたが其創立者は、パンミバナナ言ふ極めて質素な生活で成功した話を克く聞かされた、今はお互の生活はドンナにケチになつても差支ない、總ての人の幸福の爲めに、又國家的にも必要である、會社更生の爲めに忍べる限り忍んで行きたい、今回は全く正金銀行のはからいのお蔭で、これは兒玉頭取始め同行役員諸氏、大阪では以前居られた乙竹氏、又今度の矢野氏等總て多大の御同情を寄せられた賜で、私人的に夫等諸君の御好意に對しても、言葉で御禮を申上げる代はりに一日も早く恢復したい、飽迄社内一般本支店出張所の區別なく、同じ大決心でやつて行き度いのであります、こ言ふ譯でありますから、若し残つて居る人の中にも、吾等意見を見異にして堪へ忍んでは行けない言ふ人があれば、さうぞ今の内に早く去つて貰いたい、要するに大阪に於ける代表的事業會社、國家的に見ても有意義な會社、少し言葉が大きい様であります、この意氣決心を持つて粉身努力願ひたいのであります。』

君は以上の如く、大損失の結果、減資整理の止むを得ざるに至つた苦衷を、次から次へ血を吐く思ひで縷述

した後、之れが更生挽回につき、石に嚙りついても立ち直し行くの堅き決心と意氣を示し、全社員の協力奮勵を切望したのであつた、満場水を打つた静けさで、初夏の宵をしめやかに息づまらせたのであつた。

最後の支那旅行と社員の代理旅行

昭和四年二月五日スフィンクス號にて神戸出帆、上海に向ひ、數日滞在の後上海丸にて歸途に就き十六日歸阪した。

又同年十一月十五日上海丸にて渡滬の途に就き、是又數日滯留後、長崎丸にて日本に引返へし、二十四日歸阪した。

何れも日華紡織會社の用向きを主としたのであつたが、君の支那旅行も昭和四年を以て其最終としたのであつた、尤も君は其翌五年に大缺損の決算を發表したのであつたが、大體更生挽回の方針と確信を得たので、昭和六年には自ら支那を始め南洋、印度等の各店を巡視し、親しく我社の現状を説明すると同時に、更生復興の指導激勵を爲さんご考へたのであつたが、不幸にして君の健康之を許さざる事情にあつたので、止むを得ず君は其所懐を幹部社員中井氏に授け、君の代理として中井氏を右各國に特派、各支店、出張所を慰問せしめたのであつた、斯くて中井氏は同年三月日本を出發し、支那、南洋、印度、緬甸等を巡訪し、其使命を果して七月歸阪したのであつた、之れが爲め各支店、出張所に於ても能く我社の内情を詳にし、勇氣百倍して益々社業の進展に奮闘する

ことになつたのであつた。

濠洲取引につき激勵す

濠洲羊毛取扱を主とし雜貨取扱を兼ねてシドニー市に支店を置いたのは大正十年十二月であつたが、爾來種々の事情で今一つ業務の發展を見るに至らなかつたので、昭和五年大缺損發表後に於て同出張員聊か悲觀の色ありしを見て取つた君は、更生挽回の意氣を吹き込むべく、當時偶々白濱に靜養中なりしに不拘、次の如き私信を親ら認めて出張員の激勵に努めたのであつた。

『其後は御疎音申譯無之候、貴兄愈々御健全御奮闘被成下候段感謝に不堪候、小生共昨年中は随分厭な問題に苦しめられ候得共漸く近頃一段落、而して其間多少の疲労も覺へ、宿痾腎臟再發の患あり、二月中旬以來當地に轉療中に御座候、段々輕快三月十五日過ぎ歸阪又もや社務に盡瘁致度存居候、

世界的不景氣、内地的不振まだ熄まず、物價は下がる、口錢は減る、商賣毫も増さず、旁々本社成績も兎角思ふに任せざるを遺憾に存候、但し内容に於て基礎も立ち、二、三年は無配當を辛抱せねばなるまいが、追々恢復は問題なきものゝ如く、其邊御安神被下度、幸に取引銀行が商賣に差支へなき資金の融通致し呉れ、否資金のみならず凡ての點に便利を圖り應援も致し呉れ居候間、吾等は此好意に對しても死守奮闘勉めざる可からず、小生は時間の繰合せさへ付けば、此際外遊諸君を慰問、實況も話し將來も激勵致度存候得共事情許さず、出浮

致兼候段御辛抱願度、唯一言申上度きは會社は御心配に不及御奮闘願度旨、店中一同に御申達願度候。

羊毛取引高漸減近頃の數量では貴店の收支氣遣はれ候得共、折角出した店、廢退は餘程考へ物、目下小生研究中多少、注文を増す工夫出來可申ミ考居候、尙羊毛以外綿布、人絹交織等本社獨特の新式()取扱なき出來不申候哉、近來日本より此種の輸出各方面に需要有之、段々組織的に具體化する様小生は想像、折角思案中に有之候間、貴方にも十分御研究願度候。〔昭和六年三月七日白濱にて〕

君は靜養中にも色々會社各方面に氣を配りて寸時も休養らしき休養を取らず、唯一心不亂に會社更生の途に精進したのであつた、それも恢復は問題なきものミ確信して一時も早く其時期に到達し、深甚の同情ミ後援を辭せられざる取引銀行を始め得意先、株主等各關係方面に恩義の萬分一を感謝したいこの一念に燃へて居つたことは、如上の書面の一端に充分推知し得らるゝのである。

更生に對する確信と努力

君は更生第一年の昭和六年六月二十二日社員に對して次の如く自己の所信を披瀝した。

『會社の方針ミしては、大損失をした後ミして、成る丈け健實主義で商賣をして居るが、併し要心仕過ぎて餘り小心にやつて萎縮しても困る、私は昨年來會社の現状ミ取扱商品、經費、取扱の點等を詳細取調研究したが、結論ミして強く感じた事は (1) 何れの事業も遣つて行かなければならぬもの許りである事、(2) 社員諸君も

此道に長らく従事して居られるし、之丈けの經驗者があつて遣つて行けない事はないミ云ふこと、(3) 又日本支那の現状からしても、日本綿花の盡した事を考へ、今更日本綿花を潰すことは外部的にも内部的にも絶対に出來ぬ事、(4) 紡績會社も無論援助して下さる事、(5) 取引銀行は十二分以後援して下さる事、(6) 収益の點は遣り方如何であつて、現在にはむづかしいが、其内に順調になれば必ず恢復出來ると思ふ事、等であります、それで、さうしても自分ミしては今日迄會社に與へた損失ミ心配ミに對し、一切私情を捨て一死を賭して最善を盡し、之れが挽回に當り度いと思つて居ります。

株主側から見れば拂込を取られはしないかこの不安もありませうが、未拂込は一切取らずに行く積りであります、取引銀行は非常に同情して必要な資金は貸して下さるし、日綿支店のある處には大抵正金支店があるのですから、正金から色々御注意をして貰つて、自分等の参考になる事を承つて居ります、正金銀行ではさうしても日本綿花を更生さしてやらうミ言ふ積りで、頭取を始め一同御好意的にやつて下さつて居るので大いに感謝して居ります。

今日の處吾社の失へるものは金であるが、熱心な諸君を持つて居ることは、即ち大いに會社の恢復力を持つて居る譯であります、同業者の一人の談によるミ多少御世辭かも知れませんが、日本綿花の回復は時の問題であつて、時機さへ良ければ案外早いだらう、それは何ミ言つても人材が揃つて居る事ミ、社員の融和して居るここであるミ言はれて居ります、正金の後援して下さるのも、吾社に人の揃つて居るミ言ふことが、大なる擔

保まなつて居る様です、自分みとしては自己の感情を捨て、銳意努力する考へであります事は前に述べた通りです、悪い點は直して行き、如何なる點も耐へ忍んで行く積りであり、各方面の取引の心配はないのであります、在外交店の通信に依れば、局に當つて居る人々に對し、眞に御氣の毒だと思ふ場合があります、例へば最近紐育出張所で生糸の賣込に際し、同業者が破格の安値やすと好條件こうを提供して居るに就て、或得意先の言ふには日綿から買つてやり度いが、こんな安値で好條件のものがある、その分を買はねばならぬ、さりさてお前方の方でそう無理な安値段で商賣をしなくてもよいではないかかと注意したと言ふ事で、之れは日綿の内狀を知つて同情の言葉でもあらうが『日綿は昔の様でないから餘り多數取引も出来ない』と言ふ意味で當局者の頭にピンピンと來たに違ひない、眞に當局者に濟まない次第です、併し何事も辛抱する事であつて、諸君も色々色々と交渉上迷惑を感じられるであらうが、會社かいとしても、個人こじんとしても、人生榮枯盛衰はある慣であつて、私は之を耻かたし思ふ事なしに、寧ろ一つの苦勞であり經驗であると思つて愉快にやつて居ります、明治四十一年の失敗しがいと比べますと、今日は舞臺も大きく損失も大きいが、内外應呼して行けば、二、三年又は五、六年の間無配を續けて行く内には、良くなる事ことと思つて居る、現在では餘程安全なる方法をやつて居るし、今後もそうして行かねばならない。』

實に言々句々悲愴ひ云ふより外はない、之を謹聽した社員しやくの兩眼には興奮きんと、感激の露を宿したのば言ふ迄もない、斯くて水火を辭せざる協力的勇猛ゆうの心は、日々我社更生の業務へ注がれて居るのである。

ラジオ放送と最後の獅子吼 (一)

君は昭和六年十月六日大阪中央放送局に於て、生れて始めての、そして絶後たつとなつたラジオ放送を試みたのであつた、問題は『英支關係と大問題と吾綿業界』と云ふのであつた、支那關係の問題の方は便宜上、『對支問題と其意見』の部に廻すことこととして、爰には單に英國關係の問題と吾綿業界に關する意見のみを紹介する。

『今日我國に於ける二大經濟問題と言へば、何と言つても英國政府の金本位制停止と支那事件とであらふと思ふ。先づ第一英國兌換停止問題より申述べる。御承知の如く英國政府は去九月廿日其財政的重大危機に鑑み突然金本位制の中止を發表したのです。夫れが爲めに磅爲替が一齊低落しました。而して英國と最も關係の深い印度迄、卷添を喰つて廿一日更に印度政府より留比貨を法定價格を以て磅貨若くは金に兌換停止の事公表され、俄然留比も暴落を來して仕舞つたのです。英國のこの思切つた處置が、直接間接に世界各國の人心や、經濟界に與へたショックは非常に大なるものがある。歐洲諸國は勿論、日本支那其他凡有る國々の株式取引所は休會を致し、又獨佛丁抹其他銀行の爲替賣買を停止した處も少くない。日本は廿八日から漸く株式市場を再開したが、歐洲では今尙無期休業の國があるといふ有様である。』

歐洲大戰當時金の輸出禁止した英國は、一九二五年四月其禁止を解いて、名實共に完全なる金本位制度に復つたのである。

爾來約七年五ヶ月を經過した今日、何故に其歴史的の金本位をば中止し兌換を停止して世界を驚かしたのであるか。其原因は遠因近因共に色々數へられようが、窮極する處英國財政の危機及之に伴ふ信用の失墜によるのである事謂ふ迄もない。英國財政の一大整理緊縮、



昭和六年十月六日
大阪中央放送局に於て

債までが一齊に暴落したので、益々以て海外の資金引揚げ内國通貨の逃避を増大せしめた事は言ふ迄もない。

るのである事謂ふ迄もない。英國財政の一大整理緊縮、財界建直しの爲に舉國一致内閣が出来ましたが、一部分に於ける不安は容易に去らず、永年世界財界の中心國として立つた倫敦の現状は、實に氣の毒千萬に申すより外はないです。英國政府の一九三二—三三年度の財政は約六千二百萬磅の歳出増加を必要としたに拘らず、歳入は却て五千七百萬磅を減ずる形勢で、都合約一億一千九百萬磅即約十二億圓の赤字を出す事になつて居る。英國の財政危機に瀕せり風評の裡に、九月十八日英蘭銀行副總裁が議會にマクドナルド首相を訪問して磅價の危機を訴へたといふ報道が傳へられてからは、獨り紐育に於ける磅爲替が低落した許りでなく、英國及歐洲の株式公

實に去七月中旬頃から倫敦を引揚げられ、尙又逃避した正貨金塊の總額は約廿億圓以上にも上るを稱せられるが、之に對しては

- 一、兌換中止前用意せられたる英蘭銀行が紐育及巴里に於ける五億圓、
- 一、最近英國政府が得た總額八億圓の米佛クレヂット

に依て支辨されたが、其クレヂットも今は殆ど無くなつて居る。一方英蘭銀行の金保有高は僅に約十億六千萬圓で、日本の約八億に大差ない状態で、之以上減少の危機を作る言ふ事は準備して到底許さない所であつた。勿論英國の對外投資は尙相當多額にある。尙又貿易外受取勘定の超過はあるが、此場合急に間に合はない。當面の危局を切抜け資金の引揚なり逃避なりを防止するには、歴史に於てか體面を拘つて居られない。思切つて兌換停止を行つたものも考へられる。何れにしても斯ふなるを、世界を支配して居た磅貨の光は消失せ、對外的に爲替の續落するのも當然の事柄ではあるが、それと共に印度は勿論其他英國磅の支配を受けて居る諸殖民地や阿弗利加の全部なども同様の成行に陥り、事態は益々錯雜を來す事になるのです。

愈々英國金本位の停止せられた今後、我國との關係は同國に諸外國との間に於ける貿易及各種貸借尻により算出せらるゝ、爲替相場により、凡て決済せらるゝ事になるので、九月十九日と廿六日の爲替相場を比較するに、如左下落して居る。

倫敦	十九日	廿六日
孟買	一三七	一七〇
シンド	一	二
孟買	一三七	一七〇
シンド	一	二
倫敦	一九%	二四%
孟買	一七〇	二二%
シンド	一	二

まだ實際相場が落着いて居らぬ、英米クロスレートの如き其間四弗八十五、六仙より最低三弗七十四仙迄低下、昨今三弗八十仙内外を往來して居る。果して之で落着くか、まだ向後波瀾を呈するか分らぬが、結局或點迄行けば落付くに相違ない。何にせよ磅、留比共に外國貨に比し價格が下る、下つただけ英印より輸出する商品は安價に賣つても差支なく、夫れだけ競争に堪へ得るのである。日本から見たら英印より買ふによく、英印に賣るに高くなる譯で、爲替相場が示した割合だけ物價を高下せしむるのである。日本と直接關係ある印度の如き、買ふ棉は安くなるが、賣る綿糸布の値段を高め夫れだけ不利に立つ譯である、こ謂ふのが理屈であるが實際爲替相場が安定せば其何れかに活路が出来、案外影響を受けずに済む場合多い。是等は當業者の決心一つで現に日本で金解禁せば輸出貿易激減するも、如く氣遣はれたが、結果は豫期に反し存外解禁後輸出數量が減らず、割合都合よく行つた最近の事實に於ても知り得るのである。問題は爲替下落の程度及安定の時期にあるのです。

ラヂオ放送と最後の獅子吼 (二)

序に申上げる、一昨年位迄は英國は一ヶ月に綿布の輸出量は平均して我國の三倍即ち三億平方碼を下らなかつたのですが、昨年来急激に減少して最近では一億三、四千萬に云ふ數字に下つて居ります。之に反し日本はさうかま申しますと、一昨年あたりに比べると多少は減つて居るが、夫れでも最近は一億二、三千万碼に云ふ數字でありまして、此數字から見ますと日本も英國も殆き違はない、曾つては世界に君臨して居た大英帝國綿業の位置は、現在のところ斯程にまで墜落して居る。我國が一昨年末迄金輸出禁止をして居た爲めに、綿布の輸出がきの程度に増加したか、又昨年解禁の爲めにきの程度に減つたか、之を考へます事は今度の英國の場合にも甚だ参考となるので、日本でもあの當時理屈から行けば、禁止中は大に輸出増加せねばならぬし又解禁後は大に減らねばならぬ道理であるが、事實は禁止中は爲替浮動の爲に却て商取引は阻止され、思つた程は増加しない却て解禁後は安定と共に昨年と同様な世界的大不況の際にも、海外諸國に比しては日本は健實に輸出促進をして居る。即ち歐洲、英、米國も何れも一昨年比して二割乃至三割三の生産力が減退した儘になつて居るが、日本だけは一昨年程度を維持して居る。之は金解禁を機として我國の紡績が思切つた合理化賃銀引下を圖つた結果に外ならぬ。結局生産費の低下に云ふ事が何より真正正銘の競争力であり、此力強い實力を持たなくては海外競争戦に結局の勝利は得られない。

現在日本では綿糸は月に平均二十二萬梱に云ふ事になつて居るが之が殆き綿製品となり半分が國內、残り半分が海外輸出といふ譯である。處がこの海外市場の中で支那が三分の一、印度が三分の一、残の三分の一を近

東、東亞其他も云ふ事になつて居る。今度の磅爲替の暴落で印度への輸出は今の處、爲替相場が建ち難いし近東、東亞市場も磅を中心とした通貨の國ですから、今の處英國からの商内は殆ど從來通り行はれるが、我國からは夫れだけ不利になつて居る。併し物窮すれば通ずで、此行詰つた状態は何時迄も続く譯ではなく、必ず近き將來に弗なり圓で以て取引を行ふこいふようになり、今より悲觀には及ばぬと思ひます。英國が豫期の如く向ふ六ヶ月以内に内部整理し得るか否か、次回解禁に際して平價切下げせねば出来ぬではないか、英國の如き既に然り何時かは日本又外國よりの事情に餘儀なくされ、再び金輸出禁止か、平價切下げの不得止なき無暗に前途を懸念しては、今日貿易の表面より見て何等心配なき筈なるにも拘らず、米國に電送を企つるものあり、政府も夫れが爲め正貨の輸送を餘儀なくせられたる模様である。是等は實に取越苦勞も最も甚しきもので、將來の事如何に變動するか分らぬが——大英國如何に衰運にありこは謂へ必ず存外早く無條件解禁する事、我等は種々の點より確信して居る。大英國の貸借バランスは今日でも充分に均衡が取れて居る。唯貸金は多少長期の固定的になり居る處に、一時に取付けに遭つた爲めのみで、内政整理さへ付けば立派に整理出来得る筈である、我國の對外關係も近頃餘程よくなつて居る。國民も互に輕舉を戒しめ自重せねばならぬ、徒らに餘計な心配をするに及ばぬ。昨今財界の一部に傳へられたる國內の投資家が、此取越苦勞の狼狽から米國に送金の計畫をした其金額存外多い様子、爲めに政府現送の不得止に至るこの風説眞なりとせば、實に怪しからぬ遣方と謂はねばならぬ。吾々は飽迄官民一致、この難局に當るべき筈を考へる。

目下我綿業界は英支二大問題の外に突如印度の課税が起り、誠に内憂外患交々到るの難境ではあるが、當業者は既に十分覺悟をして居り、愈々以て共同動作の必要を痛感して遣つて居るので、將來を悲觀する者は餘り無く必ず遣て行ける積で居る。』

ラヂオ放送と最後の獅子吼 (三)

昭和六年九月英國が突如金本位制の中止を公表した事は、全世界の政財界に異常のショックを與へたのであつた、我國でも早晩同様の運命を免れないものと見る悲觀論が、民間の一部に擡頭したした、資本逃避が始まつた、爲替相場の低落を誘導した、時の民政黨内閣井上大藏大臣は金本位制の維持に躍起となつた、爲替相場維持の爲めに巨額の現送を敢てした、爰に樂、悲觀の激しい闘争が続いた、此時君は樂觀論者として政府の方針を是認したのであつた。國家非常の場合に於て、國家の利益を無視して、資本の海外逃避を敢てするような非國民的態度に與みする君ではなかつた。君は以上の所説中暗々裡に斯の如き不所存者を膺懲反省せしめんとするの微意を仄めかしたのであつた。

君は此放送後四ヶ月を出でず幽冥境を異にしたのであつたが、君が終始一貫國家奉仕の正義觀を持し、死の直前まで國家經濟の大義を天下に呼號しつゝ大衆に呼びかけたことは、實に君の歴史の最後の頁を飾る輝かしきさであるまいか。

臨終と葬儀

君は豫て腎臓を病み、昭和六年春頃より醫師及周圍度々の勸請にも不拘、難局擔當の責任感と生來の剛氣を以て、日夜専心劇務に執掌し、稀に靜養の機を得ても復忽ち出社して居られた、此間蛋白は一進一退容易に減せず、糖尿之に加はり血壓は漸昂し心臓も亦衰弱を來すに至り、年立復る正月元旦、我社の年中行事たる拜賀式に參列後直に南紀白濱に靜養小康を得て、十日より出社されたが、症状は再び不良に返り、御自身にも其輕視し難きを覺つて終に二十五日より芦屋の自邸に引籠り養生に勉められたが、尙日々書齋に於て客を引見し事務を辨理され、別に特に變りたる様もなかつたのであつたが、三十一日未明突如急性尿毒症を發し、傍の令夫人を呼び苦痛を訴へられ、枕頭に常置された服藥の嚙下も心許なく、僅かに五分間許りにて心臓痙攣を併發、溘焉として長逝されたのであつた。

憶々我等が懐かしき喜多社長！ その風雲を叱咤するや雄姿颯爽、斯界の奈翁と推賞された一世の偉傑、今斯の如くにして館を捐てたのである、恨は長し甲南の野、雲低ふして、風寒く、疎林蕭條松籟孤り咽ぶあるのみ。

卒然として巨星隕つるの報一たび其筋に達するや、君生前の功を録せられ、特に位一級を進めて従五位に昇叙の御沙汰に浴するの光榮を擔つた、君死して餘榮ありと謂つべしである。

君が全生涯を擧げて三十有八年間、我社に捧け盡した忠勤と功勞を表彰すべく、社葬の禮を以て酬ゆるの議直



昭和七年二月五日
自宅御出棺前

ちに重役會一致の決議を見た事は素より當然である、斯くて南郷三郎氏を葬儀委員長として盛大なる社葬は、昭和七年二月五日午後三時を期して大阪阿部野新齋場に於て舉行された、西園寺侯、牧野内府、中橋内務大臣、徳川家達公、蜂須賀正昭侯、阪谷男、山本達雄男、中島久萬吉男、井上準之助氏、奈良原大將、兒玉正金頭取等計五百通の弔電と弔詞が當日靈前に供せられた外、法人及團體のみよりの靈前の供花三百の口數に達し、會葬者三千名に上るの關西稀有の盛儀であつた。

當日我社を代表して君の靈前に捧げた南郷三郎氏の弔辭は次の通りである。

弔辭

維時昭和七年二月五日日本綿花株式會社ハ清酌庶羞ノ奠ヲ設ク社葬ノ禮ヲ以テ故社長從五位勳三等喜多又藏君ノ靈ヲ祀ル

君ハ我社創立後僅ニ二歳明治二十七年十一月ヲ以テ入社セラレ、爾來星霜爰ニ三十有八年、君ガ生涯ノ歴史

ハ即又以テ我社ノ歴史タリ殊ニ明治四十一年上海支店ノ蹉跌アリ偶々當時ノ社長田中市太郎氏ノ易簣ニ遇ヒ社運危殆ニ瀕スルヤ故田中市兵衛氏老軀ヲ提ゲテ社長ノ任ニ就キ當時支配人タリシ君ヲシテ之ガ挽回ニ當ラシム君仍チ敢然トシテ起チ日夜寢食ヲ忘レ刻苦奮勵遂ニ克ク頽瀾ヲ既倒ニ回ラシ以テ其信賴ニ應ヘタリ尋テ四十三年取締役ニ就任大正五年副社長同六年社長ノ重任ヲ擔ヒ君ガ平生ノ抱懷ヲ縱橫ニ施ストコロアリ社業之ニ依ツテ日ニ進ミ月ニ隆ナルモノアリ内外齊シク之ヲ瞻仰セリ偶々大正三年歐洲ニ大戦勃發シ世界財界ノ大不況ヲ來スヤ君ノ慧眼ハ必ヤ其好轉ヲ確信シ徐ニ胸中ノ秘策ヲ傾ケテ我社内外ノ基礎、充實ヲ圖レルガ其先見ノ明能ク肯綮ニ當リ社運駸々トシテ興隆セリ。

大正六年大戦終了ヲ告ゲ翌年媾和會議開催セラル、ヤ君特ニ實業家ヲ代表シテ吾全權隨員ニ撰バレ渡歐數月克ク其重任ヲ完フシ君ノ聲望正ニ隆々タルモノアリ、爾來戦後財界ノ反動關東大震災昭和二年ノ金融恐慌等難局相踵デ到リ更ニ世界不況ハ益深刻ヲ加ヘ我社亦影響ヲ蒙ルコト尠カラズ、茲ニ於テ君ハ時勢ノ非ナルヲ知リ昭和五年悲壯ノ決心ヲ以テ敢然我社ノ大改革ヲ斷行シ捲土重來ヲ他日ニ期シ一身ヲ挺シテ内外ノ激務ニ盡瘁セラレ日夜不斷ノ勞苦ハ流石强健ヲ特ミシ君ノ心身ヲ傷メテ慮ラズモ二堅ノ冒ストコロトナリ遞ニ溘焉トシテ逝ク昊天爰ゾ無情ナル憶々悲夫

君天資英邁機略雄渾廣ク諸會社諸團體ヲ創設或ハ關與スルモノ其數幾十ノ多キニ及ビ殊ニ綿業界ノ爲メニハ常ニ率先努力彼ノ大正九年ノ大恐慌ニ際シ、シンヂゲイトヲ組織シテ救済ニ盡セルヲ始メ其偉大ナル功績ハ枚

舉ニ遑アラズ又君ノ國家ヲ思フノ切ナル深ク我對支政策ノ重大ニ鑑ミ輿論ヲ指導シ當路ニ献策シ粉骨碎身尙足レリトセズ寔キニ媾和會議ノ功ニヨリ一躍勳三等ヲ授ケラレ旭日章ヲ賜ヒ更ニ今上陛下ノ御大典ニ當リ正六位ニ叙セラレ簪ヲ易フルヤ特旨ヲ以テ從五位ヲ追叙セラル 聖恩洪大餘榮輝ク洵ニ宜ナリト謂フベシ 君ハ一面如斯國家社會並ニ會社ノ事業ニ心血ヲ灑ギ奮闘ヲ以テ聞ユルト共ニ又實ニ友情ニ厚ク信義ヲ重ンジ仁俠熱血能ク人ノ急ニ赴キ其恩顧ニ感ジ其德ヲ慕フモノ門ニ滿テルノミナラズ、常ニ吐哺握髮シテ客ヲ見一度ビ君ニ接セルモノハ悉ク其寬厚ト温情トニ心服シ内外均シク君ヲ信賴シテ已マザリシニ慮ラズモ遽カニ館ヲ捐ツ、生等茫然トシテ自失シ天ヲ恨ミ地ニ哭スルモ及バス此上ハタゞ君ガ多年ノ教訓ヲ徹底シテ長ク忘ル、コトナク役員社員一致協同全力ヲ竭シテ君ガ畢生ノ遺業ヲ繼ギ一意奮闘邁進センコトヲ誓フ 茲ニ君ノ偉大ナル功業ト多年ノ勞苦ヲ感謝シ又其人格ヲ追慕シ社葬ノ禮ヲ以テ君ノ靈前ニ捧ク庶幾クバ英靈彷彿トシテ來リ饗ケヨ

日本綿花株式會社

南 郷 三 郎

斯くて午後四時三十分悲しく痛ましき式は閉ぢられたのである。



高野山奥之院御墓所

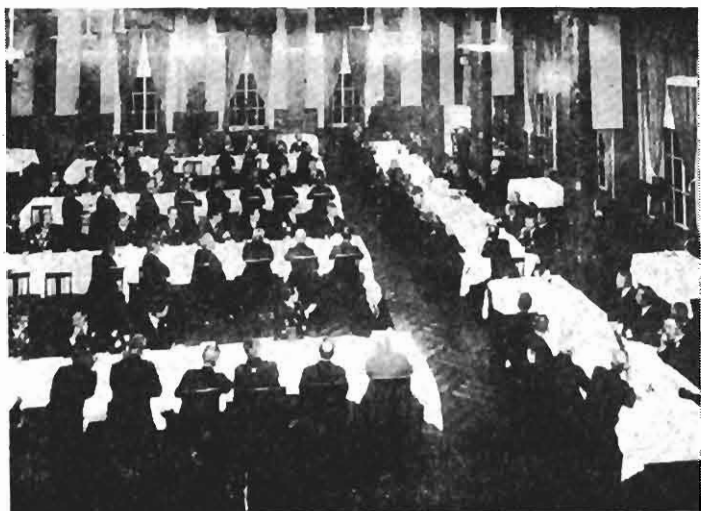
超へて三月二十七日朝、君の御遺骨は御遺族、近親、友人並我社關係諸氏に護られ、高野電車にて同山地藏院境内瓊川の邊、幽寂の靈域に移され、永へに静けき眠りにつかるゝこゝとなつた。

君の法名に曰く

眞光院興德隆範大居士

追悼會

君遠逝の報一たび傳へらるゝや、生前多數の友人知己を有したる事にて、廣く各方面に多大のショックを與へ、



東京工業俱樂部部に於ける追悼談席上

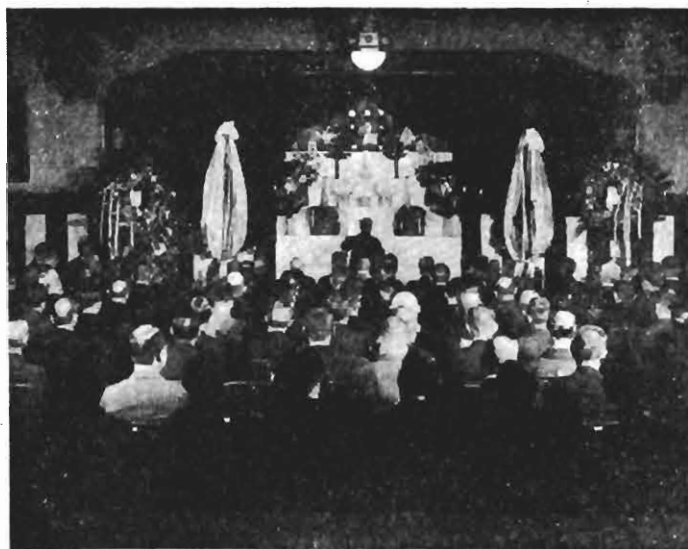
哀悼の意を表したるもの數千名の多きに達したのみならず、又地方々々に追悼の會が催されたのであつた、其内最も盛大に行はれた代表的ものは、東京と大阪に於ける夫れであつたらうと思ふ。

東京に於ては

兒玉謙次氏	日比谷平左衛門氏
白岩龍平氏	安川雄之助氏
宮島清次郎氏	鹿村美久氏
中村庸氏	

諸氏の發起を以て、昭和七年三月十八日午後五時半、日本工業俱樂部に催された。御遺族を始め知名の士約二百名の参拜者があつたが、其追悼會次第は先づ横濱正金銀行頭取兒玉謙次氏の開會の辭に始まり、弔辭——遺族御挨拶——追悼宴の順序に進んだ。追悼宴後、兒玉謙次氏、日清紡績會社長宮嶋清次郎氏、安田銀行副頭取森廣藏氏、秘魯棉花會社長井上雅二氏、三井合

名會社理事成瀬隆藏氏、東亞興業會社長白岩龍平氏、三井合名會社理事福井菊三郎氏等の追懷談あり。午後九時頃閉會した。



大阪有恒俱樂部に於ける追悼會場

頃閉會した。

大阪に於ても、大阪商科大学同窓會並有恒俱樂部の發起で、昭和七年四月二日午後四時半有恒俱樂部に開催された。参拜者約三百名の多きに達した。回向後先づ大阪商科大学同窓會委員長横尾孝之亮氏悼詞を捧げ、亞いで有恒俱樂部理事長飯尾一二氏、大阪商科大学長河田嗣郎氏の追悼詞あり、御遺族焼香後、發起人總代肥田熊藏氏の挨拶に次で、大阪商工會議所會頭稻畑勝太郎氏、松山高商業學校長加藤彰廉氏、神戸高等商業學校長伊藤眞雄氏、大阪商科大学教授玉木三郎氏、學友大岡破挫魔氏等有志の追憶談あり、遺族御挨拶終つて、午後六時四十分盛會裡に閉會した。

以上二追悼會を以てしても、如何に君の高徳偉業が廣く慕はれ、偲ばれたかを想像し得るであらう。

關係事業と團體

關係事業と團體

關係會社と諸團體

君は事業慾に富んでゐたので、色々の企業に關係し其怪腕を振つた外、種々の公共團體にも關係し、社會的にも献身的努力を致したのであつた、次に其重なものについて關係の経緯を叙し、以て君の平素の活動振りを偲ぶの資に供しやう。

一、泰安紡績株式會社

大正八年ベルサイユ媾和會議全權隨員の任を完ふして歸朝するに際し、世界平和結實の紀念土産として、佛國アルサシャン社製造、綿糸紡機二萬四千八百十六錘を購入し來つたが、之れが企業地を何れに求むべきや、君にして大いに熟慮する處あつた、其結果として選ばれたのが、中支那樞要都市の漢口であつたのである。蓋し君が如何に對支經營の熱心家で、積極的提唱者で、且つ實行家であつたかは、其半生の閱歷に見る通りであつて、國

家百年の大計から、對支商權確立の爲め、自ら此工場を以て、其所謂前進根據地をなさんづ見地によつたものであつた。

大正十二年春漢口市外漢水河岸の碼頭に一萬七千餘坪の地をトして、工場建設に着手した、冬寒く夏熱き漢口の大地的氣候に適應して、工人の能率を考慮した特殊建築は、翌十三年九月落成した、而して資本金五百萬圓内半額拂込の、泰安紡績株式會社の設立を見るに至つたのである、君は其社長に就任し、近藤宗治氏を専務として、爾來其經營に任じたのであつた。

支那で佛國製の器械を使つてゐるのは、泰安だけなので、其成績如何は大いに注目されたやうであつたが、其能率は君の期待に背かず、發電機と共に優良の成績を挙げたのであつた、又力織機三百臺を増設したが是亦好成绩を示した、果然大正十五年四月二十日に終る第四期半期決算には、早くも十四萬圓の利益を計上する程の好成绩を示した、當時現外相内田伯及び江口定修氏等中支視察の機に於て、長江の上流に、斯くも立派な此泰安紡績——日本人經營の一紡績工場が打ち立てられ居る事實を目撃して、一たびは驚き、一たびは日本人商權の伸張を喜ばれたと云ふことである。

爾來不幸にして排日運動頻發に累せられ所期の成績を擧ぐるに至らなかつたが、最近排日も漸く下火になつたので、前途に光明を認めつゝ今や必死の活動を續けて居る、君の雄圖が充分酬ひられるの日も恐らく遠くはないであらう。

二、日華紡織株式會社

本會社設立の由來は最初河崎助太郎氏が、英人レーナン氏より譲受けた鴻源紡織工場を基礎とし、君斡旋の下に

和田豊治氏外數名の發起により、大正

七年七月十九日創立總會を招集、會社

の設立を完成、社長には和田豊治氏を

押したのであつたが、併し事實上會社

の設立より其後の指揮監督に至るま

で、取締役たる君の努力に負ふ處が多

かつたのである。

大正十三年三月四日和田社長永眠さ

れたので、君は三月十七日重役會に於

て其後任に擧げられ、名實共に日華紡



日華紡織株式會社第三回株主總會時

前列つて左より

喜多又藏氏・和田豊治氏・河崎助太郎氏

後列左より

田邊輝雄氏・伊藤竹助氏・四目野村徳七氏

績會社の實權者になつた、爾來益々發展に腐心し、同年十二月二十三日には寶盛紡織公司を引受け、名を喜和紗廠と稱び、此十萬圓の大工場を日華の傘下に管理するに至つたのであるが、此経緯については、君の苦心大いに

見るべきものあり、用意周到なる計畫は流石に君ならではと嘆賞せしめたのであつた。

亞で華豊工場の委任經營を日華に於て引受くるに至りし一事も、君の創意に出でたものであつた。

斯くて日華紡績は創立當時の紡機五萬三千五十六錠、織機五百臺より漸次發展、今や紡機二十六萬三千三百八錠、撚糸機四萬八千六百三十八錠、織機五百臺を有する大工場として上海に活躍して居るのであるが、君は一身上の都合により、昭和五年五月七日社長を辭任するの餘儀なきに立至つたのである、然れども君は引續き陰に陽に指導を怠らず即ち外は金融並外務當局に對する交渉等、内は規畫經營等夫々援助を辭せなかつた。殊に滿洲事變突發するや、排日排貨の風潮を深く憂慮し、其善後策については日夜苦心を重ねつゝあつたのであつた。然るに七年一月上海事變を惹起するに際し溘焉他界したこゝは、日支關係益々紛糾し、前途幾多の難關打開の必要に當面せる同社として一層痛惜仰慕の念を深からしめたのである。

三、辻紡績株式會社

同社は始め京都の名家辻忠郎兵衛氏一家が、資本金二百五十萬圓（内百六十萬圓拂込）を以て創立し、紡機四萬五千七百八十八錠、撚糸機八百十六錠、織機三百二十六臺を有した小紡績であつたが、偶々大正九年財界恐慌に遭遇して經營意の如くならず、遂に大正十四年秋に至つて行詰りの止むなきに至つた。當時我社は原棉代の大債權者であつた事、君の仁俠的精神の持主たる事を聞知した事等の因縁により、辻家並其周圍の人々は遂に君

にすがりて其活路を見出さん事を欲したのであつた、又同社の重なる使用人も左の歎願書を携へて君の義俠的援助を懇願したのであつた。

歎 願 書

『方今我社ハ財政ノ窮乏ヲ告ゲ危急存亡ノ秋ニ迫リ居候、今萬一破綻ノ運命ニ遭遇センカ、二千ノ職工ハ其職ヲ失ヒ蜂巢ヲ破ルガ如キ状態ヲ呈シ、由々敷キ社會問題ヲ惹起スルハ自明ノ理ト考察仕候、會社ノ破綻ハ延イテハ京都ノ耆宿濱田光哲氏ノ老後ヲ傷ケ又積徳ノ名家辻忠郎兵衛氏ノ祖先ヲ辱メ、一面又將來京都ニ於ケル工業ノ發達ヲ阻害スルモノニシテ吾々ハ甚ダ之ヲ遺憾トシ一同座視スルニ忍ビズ、乍潛越茲ニ膏血ノ結晶ヲ醸出シ、會社負債ノ一部ニ充當センコトヲ希望致候得共、他ニ據ルベキ途ナク、幸ニ數字ヲ考查シ人情ニ立脚シ以テ工業ノ經營ニ其名噴々タル貴下ニ寄頼シテ救濟ヲ希フモノニ御座候、貴下幸ニ吾々ノ微衷ヲ御憐察ノ上何分ノ御盡力ヲ賜ラン事ヲ伏シテ奉懇願候 敬具

大正十四年十二月七日

辻紡績株式會社使用人

(十一名記名調印)

喜 多 又 藏 殿 貴 下

窮鳥懐に入る獵夫殺さず、況んや血あり涙ある君に於ておや、君は敢然立つて其希望を容れたのである、斯くて風前の燈火に似たりし辻紡績の破綻は救はれた、辻家の持株は我社に肩代りされた、亞いで大正十四年十二月二十七日臨時株主總會の結果、君は其取締役社長に就任して一切の經營に當ることになつたのであつた。

急場を救はれた辻家が其名譽を信用を維持し得た、感銘が如何に甚大であつたかは、同家より君に送られた左の禮狀によつて之を推知し得ると思ふ。

『拜啓 愈々押語り何か御多用の御事存じ候

扱今回は大英斷を以て、小生等の爲めに窮狀を御救ひに相成、誠に難有嬉しく、實に感謝の言葉も無之候、實際一時は如何成り行く事か少ならず心を痛め申候も、御蔭様にて、生等始め一同無事なるを得て先づ安堵致候、實は此度の御親切は肝に銘じて嬉しく、難有終世忘るゝ事能はず候、一應拜趨御禮申上べきの處、不取敢以書中御禮申上候 敬具

大正十四年十二月三十日

我社の經營に移つて以來、工場の内容改善に主力を注ぎ、能率増進のため新規の設備を施し、一般經費の節減を企圖する等、苦心慘愴、着々奏功して漸次成績向上、近かく諸設備の完成により所期の好成绩を擧ぐるも遠き非ざるべく期待されしに、君不幸病んで起たず、同紡關係者の等しく痛恨事とする處である。

四、裕元紡織會社の合辦

支那に於ける日支經濟提携による共存共榮は、君の年來の主張であつたので、一度模範的合辦事業に成功して、兩國經濟握手の好標本みなさんものま期して居つた矢先、大正六年天津にある支那人經營の裕元紡績が、其流資の缺乏を訴へ日本資本家に其救援を求むるに際會した君は、機乗すべしとなし大倉組を提携して支那人との合辦經營に當ることを應諾したのであつた、裕元紡は當時資本金二百萬元（半額拂込）錘數二萬五千の小紡績ではあつたが、此株式の部分は所謂北洋軍閥派の手に握られ、有力なる同派株主が多かつたので、此成績佳良を示すに於ては、日支親善の實を擧ぐるの楔機を爲し、國家的見地より見て頗る有意義なるべきを君は堅く信じたのであつた、それで大倉組と共に各四分一即ち五十萬元の出資を爲すこととなり、經營は主として日本側之れに當ることに定めて、爾來着々日支合辦事業の模範的完成に邁進する處あつた、幸に成績良好の曙光を見たのであつたが、之を見た支那側は持前の自己本位の我慾を露骨に振舞ひ始めたので、日本側の誠意ある會社本位を基調とする經營方針と相容れず、君が理想の模範的經營の遂行なき思ひも寄らざる有様に、流石隱忍自重を持せし君も到底之れに堪ふる能はず、憾みを吞んで斷然合辦關係より脱退するの止むなきに至つたのであつた、此苦がき跡驗は爾後再び君をして日支合辦の必須を説かざるに至らしめた。

五、東亞製麻株式會社

大正五年安部幸兵衛氏系統により資本金五百萬圓（内拂込百五十萬圓）を以て、ジュート紡績の目的にて上海に創設されたのであつたが、成績著がらず、偶々大正九年の恐慌に遭遇して金融難に陥り君に其救援を乞ふに至つた、君は本事業の將來相當有望なるを看破し、日清紡績と提携して之れが經營に任ずる事に決し、安部氏の持株を我社に肩代りしたのであつた、而して君が其取締役社長に就任したのが翌十年の事であつた。爾來君は部下を督して根本的に一大整理を敢行するに同時に、工場の改善に主力を注ぎ製額増進、品質の向上、販路の開拓等に當らしめて着々其實を挙げ、一方大正十三年四月資本金を半減して内容の充實を期したのであつた。斯くて數年來健實なる發展を遂げ、基礎の鞏固を見るに至りしこゝ、偏へに君の指導統率其宜しきを得た賜に外ならぬのである。

六、阪和電氣鐵道株式會社

大阪から紀州への陸上交通には最初南海鐵道の一線のみであつたが、將來大阪——南紀間の交通激増必然の形勢に鑑み、大阪——和歌山間に更に快速度電氣鐵道の建設を急務と認めた君は、故谷口房藏氏、故竹中源助氏、木村清氏、橋本喜作氏等の有志數十名と謀り、屢々其筋に向つて敷設認可申請を爲したのであつたが、幸に其認

可を得たので、大正十四年十二月阪和電氣鐵道會社創立の議を決し、君は其創立委員長として種々奔走、愈々十五年四月本社創立と共に取締役に挙げられ、爾來病没まで十有三年間、同社の發展の爲め努力する處あり、三年前全線開通、交通時間の短縮を得て沿線及紀州の發達上に多大の貢獻を爲したのであつた。果然昭和七年五月二十五日同社定時株主總會に於て、君在任中の功勞に對し謝意を表する爲め、金品贈呈の議案を可決した。而して同社長は左の如き謝狀を君の遺族に贈呈したのであつた。

「謹啓 故喜多又藏氏發起總代として大正八年本社鐵道線路敷設を企圖せられ同十二年七月之れが免許を得らるゝや徐々財界の推移を察し機熟するを見て同十四年自ら創立委員長となりて本社設立の衝に當り翌年四月其創立と共に擧げられて取締役に就任せらる、本邦綿業界の重鎮として日夜活躍膺暖まるの邊なきの間に在りて終始熱誠念を本社に興隆に注がれ社運の進展に寄與せられたる所甚大なるもの有之候處本年一月三十一日突如疾を以て長逝せられたるは寔に遺憾の極にして財界益々多難の際に在りて尙且本社の前途漸く光明を認むるに至りたるものは畢竟故人の卓越せる識見と眞摯なる熱意とに因るもの其多きに居るもの信じ追憶新なるもの有之候前後十有三年間に於ける御功勞に對し爰に株主總會の決議に基き深厚なる謝意を表し之れに酬ゆるの微衷を披瀝仕候

昭和七年十二月十七日

阪和電氣鐵道株式會社

社長 木村 清

七、旭絹織株式會社

君が人絹工業の有望に着眼し、本業に携はるに至つた成行は、大正十四年八月旭絹織會社の宣傳機關として發行の『旭光』紙上に載せた君の一文を見るに若くなしと思ふ。

『予が人絹工業を始めし動機、大正七年十二月巴里媾和會議に、日本全權隨員として佛國に赴き、滯歐する事半歳、大正八年九月其任務を終へて歸朝せり、當時歐洲に於ける化學工業の發達は、極めて顯著にして、就中人造絹絲が、商品として多望なる將來を有する事を看取し、我日本に之を移し、國家的事業として創設したき希望を考案を有し、好機の到來を期待しつゝありし際、知人上島氏戰時戰後に於ける歐洲化學工業視察の爲め渡歐に際し、予の意見を求められ、其舉に賛同せるが、同君滯歐一ケ年間の調査及研究の結果も人造絹糸及空室素兩事業の希望なる結論に到達し、期せずして予の意見と合致し、予の確信をして益々強からしめたるを以て、不取敢佛國里昂專家との間に議を進め、假契約を締結するの運なれり、時偶々友人日本窒素肥料會社長野口遵氏も歐洲を遍歴、伊太利に於て親しく人絹工業を視察し、同國事業會社と假契約を締結し、歸朝後其提携者を物色しつゝありし際、堀大阪商船社長は夙に予の人絹工業を企畫しつゝあるを知悉せる關係上、兩者提携しては如何との献策により、始めて野口氏と會談意見合致提携を約して、此新事業の組織的經營に發途するに至れり。

旭絹織會社の成立、當時吾國に於ける人絹工業なきに非ざるも、其技術極めて幼稚にして、製品亦劣惡、歐洲品に比し、多大の遜色ありて、皆失敗の歴史を重ね、成功極めて困難なる事業と思はれたり、豫て江州大湖々畔石山の地に、江州人數氏の經營になる旭人造絹糸會社の如き、經營所期の如くならず、逐年難境に陥り、氣息奄々たる狀を呈し、繼續困難なるに至りて、友人同社常務田村順吉君訪れて、予に工場用途なきかを諮れり、依つて同君を介し、同社株式全部を買収するに至りて、工場適所を得再び、野口、上島兩君の渡歐を願ひ、研究の結果、獨逸の人絹業最も優秀なるを認め、就中製品の優良を以て、聲價を博せる獨逸グラントストッフ會社と特約を結びて、新陣容を整ふるに及び、舊會社を解散新會社を設立し、舊會社株主に新會社株式の引受を恣意せるも、前轍を恐れ、引受の希望者少なく、酸口説けども應色なく、却つて予に中止を諫告するものすらありき、乍併予は予の自信に向つて邁進の志を堅め、夙夜工場の建設に營々没頭せり、當時予に何時煙突より煙を吐くやと揶揄的質問を發するものすらありき、

旭絹織會社と一大家庭主義、從來人造絹糸の呼稱は、イミテーション、若くば模倣を意味し、製品呼稱として相應しからず、適切なる名稱に變改せざる可からずと思ひ、社名を旭絹織株式會社と改め、石山工場を根本的に改築、獨逸より熟練技師を聘し、製造準備に着手せるが、常務上島氏を始め其他従業員一同の献身的努力と傭聘獨逸人の奮勵と相俟つて、豫想外の好成绩を收め、愈々大正十三年七月より、製品を市場に供給し得るに至り、幸ひ品質に於て、先進會社たる帝國人造絹糸會社製品を凌駕し、最もポピュラーなる名聲を博するに

至れり、曩きに其前途を危惧せられたる吾社が、而も世人の豫想を裏切り、短日月の間に今日の發達を成績を擧げ得たるは、上下渾然融和、一大家族を形成し、各自其分を守り、最善の努力を盡しつゝあるが爲め也。

事業は國家的也、今や我製品は前記の如く先進會社を凌ぎ一方輸入品を防遏して、一個の國家的事業を形成するに至れり、吾人の目的は單に金錢に非ずして事業其物也、吾人の希望は社員工員一同が、其事業を愛し、其愛する事業の爲めに哺育發達を念せせん事にあり。

人絹工業の前途は洋々たり、従業員諸氏が、秩序を統一を保ち、愉快に勞作し、ユニフォームの製品を擧げ、更に完全なる旭絹織會社を出現せしめん事を切に希望する所以也、(大正十四年七月、二十四日附)

君は旭絹織會社創立以來社長の任にありて本會社の爲めに、多大の努力を拂つた甲斐があり、業績年を追ふて見るべきものがあつた、斯くて同社は増産計畫の時期に進んだとき、君は其方針に就て技術系重役との間に意見の扞格を來たし、相當の曲折を経たのであつたが、結局昭和四年の春、自己所有株を日本綿花所有株全部を先方に譲渡し、潔く旭關係より身を引いて一件落着を見るに至つたのであつた。

君は夙に斯業の前途に矚目し、種々の苦辛を嘗めて日本人絹界に大に貢獻せん事を期したるに、事志を違ひ、金力の爲めに其立場を奪はるゝに至つた株式會社の儂ない運命を、行く春の悲哀と共に、つくづく身に沁みて悲しんだのであつた、併し君の正しき判断による創意的企業即ち人絹事業が今や黄金時代を現出して其惠澤に浴しつゝある同胞の喜び——國家の喜びを君は定めて泉下に微笑み、眺めて居る事であらう。

八、全南道是製絲株式會社

朝鮮に於ける天與の養蠶地としては、全羅南道に若くはない、産繭年額十萬石に達するも遠き將來ではあるまい、殊に製絲に必要な水の質が頗る宜しいと云ふ事は製絲工業の樹立に持つて來いである、そこで同道官憲は是非共製糸工業の發達を冀はねばならぬと云ふので、相當の庇護を條件として製糸家を勧誘したのであつた。

豫て同道木浦に棉花、製油、精米等の事業を經營して居つた君の手腕に白羽の矢を立てた、是非製絲會社を起して呉れさせがまれて、義俠氣の多い君は遂に斷り切れず大正十五年五月資本金二百萬圓の全南道是製糸會社を創設し、其四分之一を我社に引受け、自ら其社長として經營に任じたのであつた、敷地二萬坪、釜數四百五十、一ヶ年生産高十萬餘斤、爾來十期を経過し其間財界の不況期に際して、經營所期の如くならざるものありしも、君の熱心なる改善努力の結果、漸く其基礎も確立し、相當の成績を擧ぐるに至つて居るのである。

九、朝鮮棉花株式會社

本邦紡績業の發達に連れ、其原棉の幾分でも、之を我國の版圖内に求めたいとの慾求は、蓋し國家的に見て當然の事であつた、そこで其意味に於て色々調査した末、明治三十七年朝鮮全羅南道に於て、陸地棉試作をやつたところ、其成績が將來相當有望なる事を證據立てたので、明治三十九年十月十六日、大日本紡績聯合會員中、重

立ちたる有志者協議の結果、資本金二十萬圓の韓國棉花株式會社の創立を見るに至つたのであつた、其後明治四十二年韓國を併合し朝鮮を改めたときに、朝鮮棉業株式會社を改稱するに至つた。

世界主な棉産國には夫々買入設備を有する我社は、我領土内の朝鮮に陸地棉栽培の漸次増加しつゝあるに見て此處にも相當の設備を爲すの必要を認め、君は豫て懇意の朝鮮棉業會社々長谷口房藏氏に、君の抱負を告ぐる處あつたのである。谷口氏は君の意向を諒し、交渉數回の後、自己經營の朝鮮棉業會社の資産負債を共に營業全部を我社に譲渡すの相談整ひ、大正五年十一月二十五日を以て、包括財産の賣買契約を締結し、直ちに之を我社の木浦支店として、事業を其儘繼承したのであつた。

然るに朝鮮には從來他に木浦棉業株式會社、天平棉業株式會社の二社が存立し、我社を競争の状態であつたので、君は其合併により事業統一の必要なるを思ひ、種々交渉の末、大正七年三社を合併し資本金二百萬圓の朝鮮棉花株式會社を改稱、君は其社長として就任、爾後他人の持株殆ど全部を我社の手中に收め、我社の傍系會社を見做して、君の逝去に至るまで十有三年間、社長として能く其發展に努力したのであつた、朝鮮棉花は其氣候風土の關係上、其栽培區域の擴張は無制限に望む能はざる事情にあるも、猶五割内外の増加は必ずしも不可能に非ず、今や自給自足の國策上、之れが増加に就て當局者の熱心なる獎勵を見つゝあるを以て、恐らく數年後に於ては年額七、八萬俵の優良なる紡績適棉の供給を見るに至らんか、是れ實に君の功勞を多きすべきものと思ふものである。

尙君は鮮人向衣料の製織を兼營すべく、木浦に百五十八臺の織機を有する織布工場を設立し、之を同社の一事業として經營したが、可なりの成績を示して居る。素より小規模に過ぎざるも鮮人女工の爲めに良い仕事を與へた譯である。

十、秘露棉花株式會社

日本紡績業の發達に連れ、其使用原棉の一部にても之を我同胞の手によつて産出することは國策として大に有意義たるは論なき處である。

君は此意味に於て夙に支那の棉花栽培につき種々計畫を立て、又東阿弗利加に於ても棉花の栽培を試みた事があつたが、何れも色々の事情で中止の外なかつた事は前に述べた通りである。君は此外南米に於ても夙に各棉産地の状況を實査せしめたのであつたが、アマゾン流域の栽培には多大の困難ありて見て難色あつたが、秘露の方は施すに其法を以てすれば相當有望なりとの信念を持つて居た。偶々海外殖民に長き體驗ある井上雅二氏が大正十四年の頃、秘露に於ける棉花栽培企業案を齎らして先づ君に諮る處あるや、君は豫て腹案を藏して居つた事にて、直ちに之に賛成の意を表し、井上氏を援けて秘露棉花株式會社の成立に助力したのであつたが、當時棉業界に重きを爲し且つ棉花に造詣深き君が、發起人の一員に加はつて斡旋に努めたことが、如何に多く本企業の價値を裏書する事になつたかは、井上氏の追悼文中に詳かに記してある。

序ながら南米の太平洋岸秘露には、既に三十餘年前より沖繩縣民を主とし、我同胞一萬五千名の移住者があり、其南北地帯にも相當同胞の在留者あり、可なりの成功者を出して居る、日本との交通には夙に東洋汽船の定期航路開通し、邦人進出の機會を與へ居るに不拘、我資本の太平洋沿岸に進出したるもの、實に此秘露棉花株式會社を以て其先驅するのである、素より一百万圓の小會社ではあるが、現社長井上雅二氏の盡力で可也成績も擧がつて居る。會社の使命を其將來を期待して爲邦家其大成を望んで止まない次第である。

十一、日華製油株式會社

我社は夙に漢口に於て大豆及棉實製油工業に従事して居つた、又三菱合資會社は同地に於て桐油精製工場を経営して居つた、處で歐洲大戰後油脂工業は世界的に發展した一工業であつて、我國も其機運に向つて居たので、双方の當事者は漢口に於ける兩社の製油工場を合同して、新に一會社を起し、之を基礎として、大に油脂工業の發展に勉めよう云ふ事に相談一決したのであつた。此目的の爲めに大正六年三月資本金二百萬圓、兩社各半額宛を出資し、本會社を創立したのであつた。

君の考へましては、三菱の大資本閣下提携し、我社の手腕を利用するに於ては、事業の發展期して俟つべしとしたのであつた。

先づ七年六月天津茂昌棉實油廠を買收して、天津工場を設立し、次で同年八月福岡縣若松市に於ける日本油脂

工業會社（大豆抽油工場）を買收して若松工場を経営するに至り、資金の充實を必要としたので、大正九年九月資本金を二倍半の金五百萬圓に増資したのであつた。

當社の經營については、三菱と我社と交互之れに當つたのであつたが、歐洲平和後の反動時期に際會して業績擧がらず、大正十一年三月には、資本金を四百萬圓に減資したのであつた、其後缺損續き行詰りの状態になつた結果、何れかの單獨經營に移すべく意見の一致を見て、双方相談の結果大正十二年四月三菱側の持株全部を我社に買收し、爾來今日迄我社の傍系會社として經營を續ける事になつたのである。

大正十五年六月朝鮮木浦で棉實油製造をやつてゐた朝鮮製油株式會社（資本金五十萬圓、大正七年の創立で、君は創業以來其社長として苦辛其經營を指導し、大正十三年以來可なりの成績を擧げて居た、）が同じ系統である處から、經營合理化の意味に於て之を併合したのであつた、同時に資本金を四百五十萬圓に増資したが、同年十二月には、内容充實の爲め又々資本金を四百萬圓に減資し、爾來今日に及んで居るのである。

君は大正十二年四月以來社長として、當社成績の向上に、只管苦心慘憺たるものがあつた、君の意見として工場經營の奥義は、機械能率の十二分なる發揮、諸掛の極度切詰等により工費の低下を圖る事、品質優秀の適品製造を企圖する事が、最も緊要であつて、之を照應するものは、原料の安値仕入れ、製品の好値販賣を必須とするにあつて、此方針の下に、部下の督勵至らざるなかつたのであつたが、君の熱心懇切なる指導誘掖の結果は、次第に其効を奏し、一時非常に悲觀された當社も、數年來相當の成績を擧げ得るに至りしも、當分其内容充

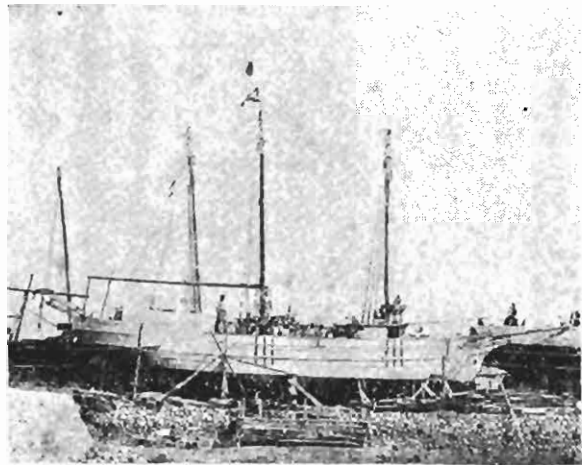
實を主眼に、専ら財産償却を行ひ其基礎を堅めつゝある現状にあるのである。

十二、遠州織機株式會社

日本紡績業の發達と共に、織布事業の將來益發展すべきを察知し、優秀なる織布器械に對する需要の激増を豫測した際、偶々濱松市に於て鈴政式と稱する特許權を有する小巾織機々械の製造をして居つた鈴木政次郎氏と相識るの機會を得て、其特許の特徴を認め、之を基礎として新に大巾織機的大量生産をなし、斯界の需要を満たさん事を目録んだのであつた、斯くて遠州織機會社の前身たる資本金二百萬圓の鈴政式織機株式會社を大正九年二月五日創立し、君は其社長に就任したのであつた。

處が創立後間もなく財界の大變動で、經營思ふに任せず、缺損は打續く許りの不振に陥つたのであつたが、君は大正十二年六月經濟界の多少小康時代に入るを見るや、此處に積極打開策に出づるの時期なりと認め、豫て研究の結果に得たる能率高き阪本式の大巾織機製作を開始し、之を廣く紡織會社の大工場に供給せんものと、社名を遠州織機株式會社と改稱し雄飛を試みんとした。

此阪本式特許織機は、遙に超歐米式高能率の優秀品であつたので、漸次紡績會社に認知せられ、其販路年々増加、近年は全能力を擧げて其製造に追はれ居る程の盛況を見るに至つて居るが、之れ偏へに君の指導方針其宜しきを得たるに因る事は當事者の等しく感激して忘るゝ能はざるものである。



南洋諸島即ち「マリアナ」群島、「東カロリン」、「西カロリン」群島其他附近諸島が、大正四年歐洲戰爭の結果、

十三、南洋の諸企業

我國の委任統治に歸したので、我政府は其中央の「トラツク」島に臨時軍政廳を設置し、軍政は勿論殖産、教育、通商等諸般の施設を司らしめ、各島に於ける發展の途を講ぜしめたのであつた、當時我れも々々押しかけたものであつたが、多くは雜貨賣込、物々交換の小商人の外、利權漁りの連中に外ならなかつた。

君は此時考へた、南洋群島は大戦参加の結果として我邦が其委任統治を受けた紀念的土地であるから、國家的見地から經濟的に見て、多少物になりそうな事業でもあるようなら、奮勵一番遣つて見るのも事業家の本懐であらうと、そこで君は自己の主宰せる喜多合名會社員を同島に派遣し一ヶ年間に亘つて、詳細に全島の經濟調査を行はしめたの

であつた、其結論として方の事業計畫に着手するに至つたのである、即ち

一、「マリアナ」群島中「テニアン」島(當時無人島)に於て椰子栽培、甘蔗栽培の爲め、三千町歩を借地し、五年計畫の企業

二、「ボナベ」島に於て海鼠採取業の計畫

三、同島に於て天産植物「カラヲ」樹皮を以て船舶用其他のロープ製造の目的の爲め、織緯採取事業の計畫、(是れは其樹皮を漂白し精練するに「マニラ」麻に稍々似たる織緯なる。)

處で右事業の内

第二の海鼠採取業は最初より支那地方に輸出したが、其産額多からざる爲め中途中止した。

第三「カラヲ」採取業は、約二年間採取して其織緯を内地へ送り、南洋織緯株式會社へ供給し、ロープを作り船舶用に供した、時恰も歐洲戦後マニラ麻輸入杜絶の時期に際會し、大に船舶界の需要に應じ得たるも、「カラヲ」採取豫期の如くならず、採算不出合の爲め「カラヲ」採取業の廢止と共に南洋織緯會社も原料難の爲め事業を廢止するの止むなきに至つたは遺憾である。

第一の「テニアン」島に於ける椰子栽培も、初年に於て不幸にも同島六十年來の旱魃に遭遇し、植付けたるもの悉く枯死し、椰子栽培は遂に失敗に歸したのであつた、併し君は之に屈せず、之れに代つて甘蔗の栽培を計畫し之を實行したところ、今回は幸に成績佳良であつたので、數年此植付けを續けて發展に力を注いだ

のであつたが、數年前都合により其全部を南洋興發株式會社に譲渡した、同社は今猶盛んに甘蔗の栽培を爲し、其産出の砂糖は相當莫大の額に達し居り、南洋廳收入の唯一の目的となり、外國輸入の一部を補ひ、國益に資するに少くない現狀であるのである。

君は以上の如く、南洋諸島の産業開發の爲め、諸般の企業を試み、占領諸島をして産業的にも國家に有意義なれがしむ、多大の出費に困難に堪へて、只管苦心經營に努めたのであつたが、惜しいかな其大部分は失敗に歸した、併し獨り甘蔗栽培のみは、南洋諸島の特産として大に榮へ君の遺業を傳ふる昔語として、相應はしい名残を留めて居るのである。

君が始め如上の諸計畫を進め、精密な實地調査書、目錄見書等を添へて、時の海軍司令部に提出したとき、東郷(正路)司令長官は、多數の渡航者が、單に眼前の利益を圖るに汲々たる間に、獨り君が超然として、遠大の志を立て、整然たる調査の結果に基き、國家的見地の下に、諸般の障害を打開して、有意義の産業計畫を樹立せんとするを知り、之れ誠に國家の爲め頼もしくも亦喜ばしき限りなりと、深く君の人格に快擧を賞讃措かざりしと云ふ事であつた。

十四、墨國興業組合

由來墨國低加州海岸は魚族の豊富なるを以て知られて居るが、同地方の事情に精通せる近藤政治氏は、魚族の

漁獲利用の大に有望なるに着目し、本國に於ける適當なる共同企業家を物色中、偶々喜多氏の手腕を仰慕して頻りに後援を求むる處あり、海外企業に熱心なる君は近藤氏の意見に共鳴する處あり、墨國海産開發に一臂の勞を盡さん事を決意し、阪神間有数の實業家十數名を語らひ、遂に大正七年八月十五日資本金米貨金二十五萬弗（内現金拂込總額十五萬弗）の墨國興業組合を創立し、近藤氏と共に代表社員として鋭意鮮魚貝類の漁獲運搬販賣、鹽魚製造、並に罐詰事業等の經營に任せしが、中途近藤氏との間に意思の疎通を缺ぐの事情ありし爲め、投資團は大正十二年七月を以て其持分全部を近藤氏に譲り渡し、君は本事業より一切手を引くに立至りしは止を得ざる成行は云へ、君の遺憾せし處であつた。

十五、中外貿易株式會社

君は日本綿花會社をして世界に於ける有数の一大貿易會社たらしむるは勿論、日本綿花會社に屬せざる諸雜貨類の貿易に就ても、同じく別個の組織による會社によりて、世界的に飛躍せんとの一大抱負を持つて居たので、之れが實現の段階として、大正六年七月資本金二百萬圓の中外貿易株式會社を創立し、自ら其社長に就任したのであつた、天産物其他の一般輸出品、金物、機械、肥料、天産物等の輸入品全般を取扱ひ、廣く世界に亘りて取引を行ひ、一時業績大に見るべきものがあつたが、大正九年財界反動によるショックは、餘りにも致命的であつたので、之れが更生の容易ならざるものあるに想到し、君は憾を吞んで大正十二年一月一先解散を斷行し、他日

を期して捲土重來を期したのであつた。

十六、金剛商會

中外貿易會社は前記の如く解散の運命を見たのであつたが、君は従業員を此儘解放するに忍びず、又一面には小規模ながらも中外貿易復興の意圖を有して居つたので、旁々大正十二年二月資本金十萬圓の合資會社組織の下に中外貿易の従業員を收容して輸出入貿易に従事せしめたのであつた、規模こそ小なれ、出資者は君を始め信用厚き出資者數名を網羅して居つた關係上、資本の小なる割に大きな取引を行ひ得て、相當の成績を見るに至り、大正十四年六月には資本金を二十萬圓に、昭和三年六月には金三十萬圓に、翌四年六月には金四十五萬圓に夫々増額し、漸次發展を見んごするに際し、不幸にして經濟界の不振續きに意外の打撃を蒙り、忽ちにして整理に没頭せざる可らざる破目に陥り、遂に其更生の時期に達せずして、君の永眠を見た事は、本人の遺憾實に察すべきものがある。

十七、丸喜商店と喜多合名會社

君は友人や知己に仕事を與へる爲め左の如き各種の個人關係事業を始めたのが大正八年頃の好景氣時代であつた、そして之を統率するに便する爲め君の姓の一字を取入れて丸喜商店と稱し、事務所を北區東堀川町に卜した。

- (イ) 絹メリヤス、絹織物、絹製品、其他雜貨委託販賣の雜貨部で所屬靴下製造工場を大阪府下池田町に設け、支配人橋本恭助氏を之れが經營に當らせた、資本金は六萬圓であつた。
- (ロ) サイパン、テニアン島(南洋群島)の産業開發の目的で南洋貿易に當らせた南洋部で、資本金十萬圓、支配人松井傳十郎氏(事業の要は前に記した南洋の諸企業参照)
- (ハ) 大和葛城山麓阿田峯にある二十五町歩の果樹園及牧畜經營で鍋島保之助氏に主宰させた。
- (ニ) 兵庫縣下川邊郡多田村新田(猪名川沿岸)に色染工場(資本金三十萬圓)を設け、支配人杉江琢三氏を經營に當らせた。

然るに翌大正九年他に多くの事業に關係の必要上、喜多一家中を以て一合名會社を設立し丸喜商店の仕事併せて廣く統率するの便宜を感じ、同年九月資本金五百萬圓を以て喜多合名會社を設立し、君は自ら其代表社員となつたのであつた。

其後和歌山縣妙寺町に設立した資本金百萬圓の紀の川製糸所(釜數八百五個)を始め猪名川染工場を擴張して之を猪名川染織所と稱し、紡織事業の直營をなし資本金を百萬圓に増額する等大に活動したのであつたが、不幸反動時代の難關に遭遇して晩年の經營には多大の齟齬を生じ、之れが更生策に腐心しつつ、永き眠りに就いたのは、氣の毒千萬の外はない。

十八、百貨店と貸事務所經營の齟齬

大正八年巴里媾和會議に出張中、傍ら君は歐米近代都市發達の狀況を取調べた結果として、デパートメントストア事業の、將來我日本に大に發展の可能性ありと感じたので、歸來友人等と謀る處あり、案漸く熟して、翌九年三月、君は其發起人總代として左の如き目録見書を發表したのであつた、

株式會社にはや目録見概要

- 株式會社にはや
- 一、商 號 株式會社にはや
- 二、本店所在地 大阪市北區中の島二丁目
- 三、營業の目的
- (イ)、百貨店の事業(歐米に於て行はるゝ「デパートメントストア」の營業)
- (ロ)、貸事務所の經營

四、資本及株式

- (イ) 資本金 三千萬圓
- (ロ) 株式 六十萬株

(ハ) 第一回拂込金 一株に付金十二圓五十錢

五、事業目錄見の概要

(イ) 金五百萬圓 土地費

(ロ) 金五百萬圓 建築費

(ハ) 金五百萬圓 流通資金

計 金一千五百萬圓 營業所建築完成に至る迄所要に應じ順次拂込金を以て充當

六、株式の分配引受

總數 六十萬株

内

三十八萬株 發起人並賛成人引受

二十萬株 久原房之助氏引受

二萬株 一般公募

七、設立費用 金三萬圓以内

以上

當時三越が吳服太物類を主として中産階級以上を相手にして居つたに慊らず、君は純西洋式に則りて、眞に大

衆向きの各種日用雜貨を低廉に供給しやうと云ふ抱負の下に計畫したもので、場所は大阪市中之島二丁目久原氏邸地を撰び、此處に東洋一の巍峨たる一大雜貨ビルディングを建設せんとする設計であつたのである。

處が折悪しくも、平和灼熱人氣の一大反動期に遭遇し、財界全く混沌に陥つたため、之を無視して計畫の遂行は、決して策の得たるものに非ずとの自重論から、君は斷然此企業を一時中止するに決定し、創業準備に使つた諸費用數千圓は、一切君の自辨として結末を付けた態度の公明さには、同志の人々も唯々敬服の外なかつたらしい。

近年各大都市に續々出現しつゝある百貨店營業の流行に其繁昌振を見るにつけ、そとろに君の先見の明敏さが偲ばれて、今更君の企業の頓挫を惜むの情に堪へないのである。

十九、其他關係會社銀行及團體

以上の外、君が取締役又は監査役として關係せし諸會社及び銀行は

大分セメント株式會社 株式會社 朝日精米所

日本無線電信株式會社 大阪海上火災保險株式會社

日本火災保險株式會社 日華生命保險株式會社

明正紡織株式會社 東華紡績株式會社

横濱取引所株式會社
 兩毛整織株式會社
 大正製麻株式會社
 南洋護謨拓殖株式會社
 日本絹撚株式會社
 日印紡織株式會社
 伊勢紡織株式會社
 滿洲棉花株式會社
 東亞興業株式會社
 大正製酒株式會社
 臺灣紡織株式會社
 内外精糖株式會社
 攝陽銀行

諸團體としては

商工審議會
 日本經濟聯盟
 日華經濟協會
 日印協會
 南洋協會
 國際商業會議所
 日滿經濟協會
 財團法人協調會
 日華實業協會
 大阪對支經濟聯盟
 日濠協會
 大阪商工會議所
 中日協會
 大阪經濟會

經濟更新會
 港灣協會
 日本綿業俱樂部
 大阪工業會
 印棉運華聯益會
 輸出綿糸布同業會
 大阪綿布商同盟會
 橫濱生糸輸出同業會
 日本海員掖濟會
 大阪教育會
 大阪商科大學同窓會
 工學會
 自由通商協會
 大阪汎太平洋クラブ
 日本工業俱樂部
 在華日本紡績同業會
 日本棉花同業會
 大阪綿糸商同盟會
 中央蠶絲會
 神戸蠶糸紡績同業會
 大阪軍人後援會
 大阪結核豫防協會
 有恒俱樂部
 大阪實業協會

等であつて、諸會社團體の重なるものには、何れも相當の關心を持つて、終始多大の努力に後援を吝まなかつたのであつた。君の精力絶倫さは推して知るべきである。

私
生
活

私生活

恩義を忘れず

君が明治二十七年十一月日本縮花會社に入社後、其最も多く恩顧に預つたのは田中市太郎社長と志方社長との二人からであつた、君が次第に其驥足を伸ばし、社會に認めらるゝやうになつたことは、主として右兩氏の眷顧援引に負ふ處大なりとして、君は常に其恩義の深く深きを感銘して措かなかつたのであつた。

斯くて毎年正月の年始祝賀には、先づ以て田中、志方兩家に禮廻りをなし、親しく年詞を述ぶるを恒例と定め、決して違ふ處無かつた事程左様に、君は澆季の世に珍らしく義理堅い人であつたのである。

又舊師に對しても常に報恩の念を忘れず、機會ある毎に感謝の意を表するに努められた、例へば大阪、東京に於て時々同窓生の小集ある如き場合、成るべく最寄りの舊師を席上に迎へ入れて、慇懃に禮を致し、色々の懷舊談に花を咲かし和氣霽々裡に一夕の歡を盡す云ふ風であつた。

君は直接教導に預つた關係はなかつたが、永年母校の校長として、人格高く、生徒より父母の如く仰がれて居つた名校長加藤彰廉先生が、市當局の都合で大正三年退職を餘儀なくされた事があつた。生徒や同窓生は留任運

動に結束し、程かならぬ雲行なつたとき、君は加藤先生の運命に深き同情を拂ひつゝも、無謀な引留運動に加擔する譯に行かなかつた、そこで生徒や、同窓生の輕舉妄動を戒めるに同時に、加藤先生の母校に盡された恩返へしの一端として、加藤先生を中央の議政壇上に送るの轉換策によつて、大勢の緩和を圖らんことを試みたのであつた。大正四年春の總選舉に當り、加藤氏をして堂々南區より出馬せしめた動機は右の次第であつて、當時君を始め同窓の諸先輩並に加藤先生の恩義に預つた同窓生及生徒等所謂同窓中心の一團は、蹴然立つて結束し、盛んに聲援の美舉に出たのであつた、熱烈火の如き猛運動は、數日間繼續されたのであつた、或者は政治運動に馴れぬ同窓生の無謀さを嘲笑つたのであつた、それがさうであらう、選舉の蓋を明けて見るに、加藤先生が三千四百四十票の最高點で、見事當選の榮冠を贏ち得たではないか、大阪市人は驚きの瞳を睜つて、如何に大阪高商同窓生一致團結力の偉大さを讃嘆せざるはなかつたのである。

君はリ、リ、リとして勇ましく陣頭に立つて采配を振つたのであつたが、一度び如上の大勝利の吉報を知るや、此輝かしい現實に、いたくも感激し、同窓生と共に暫し嬉し泣きに泣いたこと云ふ事である。

當時君の指揮下に活動した多數の同窓生は、長く此喜ばしい、涙ぐましい選舉の大勝利を紀念せん爲め、君を中心に美好會を組織し、春秋二回紀念會を催して當時の追懷に浸る事にしたこと云ふ事である、而して此會名こそ加藤先生の得點三四四〇に起源するは、何んぞ床しい、美しい話であらう。

寄捨數十萬金に上る

君は青年時代より、夙に金の値打を認めたことは、修養時代篇にも記して置いた、財力の偉大さを知つた君は、貨殖の方法について常に注意を怠らなかつた、君の地位の進むに連れて、君の財力も増加した、而して君の最も力を注いだ日綿の大株主たるべく、其財力の大部分を注ぎ込んだ、大正九年日綿大増資當時の君の資産一千萬圓以上と噂されたが、反動時代の昭和四年一月講談俱樂部の全國金満家大番附には四百八十萬圓の長者と記されて居る、昭和五年日綿大缺損發表後、君の資産は激減し、昨年の計算は無慮數百萬圓に上るの赤字と云ふに至つて、轉々人生の顛落常なきを悲しまざるを得ない。

君の一生は實に裸一貫より叩き上げ結局マイナスに終つた大浮沈の歴史であつた、其輝かしい時代に於ては、相當財貨の正しき運用について善處せん事を期した。

母校大阪商大基本金に十萬圓の寄附を始めし、郷里葛城村役場新築費に金五千圓、出身校葛城高等尋常小學校教育基金に金五千圓、郷里檀那寺なる船宿寺本堂改築費に金壹萬圓、其他何百圓と云ひ何十圓と云ふ小口寄附並に獻金に至つては、殆ど枚舉に遑有らざる數に上つて居る、其他逆境に沈淪する知己、友人其他に對し、心からなる同情を以て、救済資金を投げ出したもの亦擧げて數ふ可らずであつた。

殊に振つたのは、酸いも甘いも噛み分けた君の事であるから、時々甘いロマンスに絡んで、物質の提供を餘

儀なくされて、遂方に呉れ居る人達にまで、救ひの手を延ばすなごの、人の好い同情心を發揮するごも一、二回に止まらなかつた。大正八年巴里媾和會議の節、或一知人が、若き佛國一婦人との間に、結んだ戀の跡始末に惱んで居るのを憐れむで、一舉數千金を投げ出して粹の捌きを爲し、彼れを救ひ出したなごも、其一例に過ぎない。或は自分に非常に不義理をした一知人が、不幸なる病死をしたご聞いて、其靈に拜跪したのみか、過分の香資を匿名にて供へたなご、其心の廣きごご海の如く、其情の深き亦海の如しごも云ひつべきであらう。

終りに特記すべき一事は、苦學生に對する學資給與の事である。中には知人の紹介もなく、突如未知の青年から働きかけた切なる要求にほだされたものさへある、素より君は給與した學資の返還なご、始めから問題にしてゐないのであつた。

要するに君の寄附若くば救匡の金額に至つては、敢て大なりご稱する能はざるも、隨時隨處に貨財の善用を試みて、自己の道徳心を満足せしめた君の行爲は、常人の容易に企て及ばない崇高寡慾の人格の結晶ごたゝえ得やう。

親 孝 行

君は若年時代より親孝行心が強かつた、君が孟買に赴任してからは必ず月に三、四度郷里に消息を洩らして居る。殊に父君に對しては土地の風俗、人情、氣候、風景、名所、市場其他事詳かに通信した、又時々珍らしきもの

を集めては、之を汽船便に托して郷里に送るなごの心盡しもして居る、明治三十年の二月十一日紀元節の當日に、君は郷里の母君に宛て、金五十圓を爲替で送つたごの手紙に曰く

『定めしおかねには御不自由なごは萬々存入候得共私の心持だけ御取上げ下され度、誠に〜いさゝかながら、何かの御買物のたしにも致し下されなば、嬉しく存じ入り候』

何んご、やさしき親思ひの心根ではあるまいか。

御兩親は長く幸福な壽命を樂まれたのであつたが、君は終始渝らざる孝養振りを示した。

大正二年御兩親金婚の御祝ひには、君は兄弟ご共に、心からなる盛儀を營んで、大に御兩親を慰め參らせたのであつた。

大正六年九月君が支那視察に赴くの機會を利用し、長江一帯より北支方面の見物に、御兩親を伴つたのであつたが、之れを見た支那各地の中華人の知己までが、其孝養の篤き君の人格を、今更のように賞めそやし、當時の一美譚として、廣く話柄に上つたご云ふごである。



大正二年郷里鳥井戸に於ける御兩親金婚式場

兄弟思ひ

君は少時より却々の兄弟思ひであつた。君が最初孟買渡航當時、次弟正藏氏は高等工業に學んで居られたが、絶へず種々の指導訓誨を吝まなかつたことは申すに及ばず、學資の臨時補助までも氣を配つて居つた。處が正藏氏も何か思ふところあつて君よりの臨時補助を斷つて來た、君は之に對し明治三十年二月十日附で左の返書を與へて居る。

『近來獨立の習慣を養ふ爲め、金錢の心配無用の旨御來示、至極御尤感服の外なし、或は先般御歸郷の節修學費増加の許可を得られた結果かこ存候得共、修學中些々たる金錢に心勞し、目的たる遊學に支障を生じ候様の事ありては遺憾此上なく候間、必要の節は遠慮なく御申出相成度候、小生も故郷の事情熟知致居り、他日協同世界に處し、以て老父母を安定娛樂せしめ、傍ら我家の隆福を圖るべき自分の同胞に有之、出来る丈けは相扶助仕度、小生の微衷御諒承を得ば本懐の至り』

實に美はしき君の眞情ではないか、

正藏氏が學校卒業後愈々紡績界に乗り出すこの決心を聞いた君は、大に喜び、明治三十二年十二月十三日附で『貴殿が將來身を紡績業に委ね、小生こ實業界に手を携へんこの御決心相成候趣、拜承仕り小生も第三回着孟後、始めて愉快に且つ心丈夫に相感じ申候、我輩は生涯は申迄もなく、棉商人として終らん覺悟に有之、貴

殿左程御決心遊ばされ候事なれば、將來御心變りなき様且つは愚鈍の小生を、御補助下され候様の事のみ、小生畢生の願に御座候。

小生は不相變至極健全御安神相成度唯小生の前途の目的は至つて遼遠、父兄を安んぜしむる迄は永眠不致覺悟に有之其邊聊か御心配に及間敷候

御入用の書籍は、何時にても御遠慮なく被申越度、貧乏實に置いても屹度御用立可申候。』

こ申送つた。

翌明治三十三年二月二十六日附君は東都に在學中の次弟正藏氏宛てに

『先般郵送致置候紡績に關する書籍御入手相成候事こ存候、尙今便御注文の書籍も近日當地書肆に入荷の由に付其節買入御送附可申上候、當地發兌に係る織業雜誌三、四冊讀古しながら取纏め今便郵送致候、御參考の一助に相成候はゞ幸甚、

特に今後困難の起りし場合には、日本綿花の友人○○○氏宛てに送金申出被下度、今郵同氏に向け一度に二十圓以内なれば預金の内にて用達差支なき旨申遣置候間御承相成度、尤も無益の使途なれば御免を蒙り度候。本年は御卒業期こ存候、大藏兄の通信にて近頃御奮勵相成居候事丈けは承知致居候得共、尙此上共御勉勵最良の成績を得られ度、吳々も我等兄弟は今日安眠の秋に非るなり、御心懸願置候。』

又同年三月九日附で

『小生は本社の命令により來月中には出發歸國の途に相付可申筈。

紡績業には身倒るゝも相止めずこの堅き御決心拜承、小生も大に力強く相覺候、希くば其決心にて御前進相成度希望に不堪候、尙此上共卒業テフ、大節季を眼前に控へ居る貴殿なれば、無難に打超方今より御用心願はしく、御卒業後の就職先に就ては、小生歸阪後何處までも盡力可仕候、何卒卿が優等成績を得て芽出度御卒業期を今より折指相待居候、

住馴れし孟買を月後見捨つるご思へば、何んもなく心残り也、ホーム、シツクなき如何にして起るや小生等には實に不思議千萬。』

弟思ひの熱情が紙面に横溢して居るではないか。

正藏氏は君の斡旋で、上海の上海紡績會社に勤務したのであつたが、明治三十八年不幸にして、落馬命を致したのであつた、當時君が如何に落膽したかは、凶報を得て間もなく上海の友人に宛た左の書面で之を推知し得るご思ふ。

『愚弟正藏の凶報は、小生に取り近頃の一大苦痛に御座候、餘りの事にて、一時は事實を疑ひ候様の始末、御推察被下度候、同人死去の原因は、落馬重傷ご有之、或は豫て嗜好の乗馬月夜に駆け廻る内、荒れ出し、圖らず落馬、受傷部分頭蓋にて、遂に鬼籍に入りたるに非ざるか、詳報未達の今日、唯其不幸を嘆き、傍ら馬鹿をせしものよご怨居候事に御座候。

同人も近頃漸く人間らしく相成、將來小生の相談相手ご待受けたる甲斐もなく、今回の遠逝は、實に痛恨至極に奉存候。』

明治三十一年四月十六日附で、大和五條中學在學中の末弟邦藏氏宛に

『萬國地圖入用の趣、早速郵送すべきの處、豫て約束の如く、學期試験成績五番目以内の席次になりし場合、寄贈の約束に有之、夫迄は遺憾ながら貴意に應じ兼候、右の次第故、過般送付の曆付地圖一冊にて當分御用辨相成度候。

英語も追々熟達の様見受けられ喜居候、是非共英語だけは御勉強成し置かれ度候、最早内地雜居も目睫の間に有之候のみならず、漸次外國ごの交通頻繁ご相成候今日に有之、他日御苦學の効慥かに相見へ可申候、

Your task of every day is only to study and to take exercise. Don't care for household matters at all, my dear brother!

Early to get up, early to bed, makes men's healthy and wealthy.]

教へたり、勵ましても見たり、弟思ひの氣持が、漲ぎつて居るではないか。

邦藏氏が進んで早稻田商科に學んだのは、本文の始めに書いた通り、君の世話によつたのであつたが、卒業後間もなく早世したので、君には重ねぐの悲であつた。

次兄大藏氏に對しても、君の經營した紀の川製絲會社の専務に推薦するなきの厚意を示したのであつた。

又長兄長右衛門氏に對しては、家嗣として青年時代より最も敬愛の意を表し來つたのであつたが、晩年相互間意思の疎通を缺き、君の意に反するの事態に立至つた事を、君は深く遺憾として居つた。

東郷元帥の人格に私淑す

君は上方には稀に見る士魂商才の持主であつた、君は道德を無視してまで金儲けに無中になる如き低級の人物ではなかつた、義理も、人情も、酸いも、甘いも能く咬み別けた親分肌の男であつた。

東郷元帥は日本の生き神様と云ひ得る人格者である、日本人として元帥を敬慕しない人は恐らくないであらう、君が元帥に私淑したことは、別に取り立て、云ふだけの價値がないかも知れない、唯君が特に元帥を慕つたことは、皇國の興廢を一舉に決するに當つて、其沈着な態度と其膽力の閃めきにあつたかと思ふ、常に商戰場裡に馳驅して、勝敗を一舉に決せんとするに際しての心掛けは、大いに元帥に學ぶ處あるを思はしめたのであらう、果然君は熟慮商策を練るを常とし、其一たび意決するや、斷々乎として其所信に邁往するの度胸を示した。

大正十一年八月、君は懇意の某海軍將官に宛て、左の書信を出して居る。

『……………甚だ乍唐突小生儀豫てより東郷元帥の御人格に私淑景慕する事深く、せめて元帥の御揮毫に日々親しむを得ば幸甚と存じ候儘、甚だ御迷惑は恐察仕候も、何卒右御聽許被成下間敷候哉、乍勝手小生の希望は額面用として『熟慮斷行』の文字一枚と他に何か一枚願度と存候、幸に願意相叶候はゞ、何時にても絹地爲持差

上申すべく候間御一報願上候。』

右額面の残つて居らない處から見て、多分聽許のなかつたものかと思はれる。

社 交 に つ こ む

君が童顔温容の人懐づかい圓滿福徳の形良を備へたことは、多數の知己と崇拜者を作るに好條件であつたと思ふ。君は生來の能辯者ではなかつたが、座談は頗る其妙を得て居つたので、一度君に接した人は一種の魅力に打たれ、容易に離れやうとしない、君は如何に多忙の時でも、出來得る限り、多くの來客に應接するのを好んだのであつた。之れに君の事業好きと、義侠心とが拍車をかけたから、日々千客萬來の繁昌振りであつたのは當然である。

君は斯くして日々多數の來客に接し、人に誨ゆると同時に、君も亦各人各様の智識を吸集するの便宜を得た、君の智識の廣汎にして而かも實際的なりし事は蓋し此賜であつたと思ひ得やう。

君は又自ら進んで社交に勉めた、苟くも我社及關係事業の爲め、直間接に平素愛顧と後援を蒙り居る御得意先を始め、取引銀行其他諸會社、商店、個人等に對しては、毎年正月數百人を招待し、盛大なる新年宴會を催し、謝恩の微意を表するを恒例（尤も整理時代に入り中止したが）としたのは勿論、大阪來往の内外諸名士の交驛殊に中華民國人及外人等に對しては、國家親善の見地に於て臨機歡待に努めたものであつた。

其他國家的、社會的の集會より實業、學校、俱樂部等の諸集會に至るまで、勉めて出席、夫れ々其爲すべき盡すべき義務の遂行を、眞面目に執り行ふの常であつた。

君が社交的に最も力を盡した一事は、蓋し有恒倶楽部の創設であらう、本倶楽部は母校大阪商大出身者を中心、華城實業界の諸名士を加へた寧ろ少壯實業家を中堅として組織した社交機關で、大正十五年九月飯尾一二、横尾孝之亮、故代議士山邑太三郎、氏等母校出身諸氏數十名を謀り設立したもので、今や會員一千餘名を擁する一大有力社交倶楽部となつて、大阪目貫きの堺筋野村ビル内に其清楚な設備を整へて居る、君は創設以來の理事長として昭和六年四月まで六年間其發展に努力したのであつた、本倶楽部は時々西下の大臣、諸顯官を始め、あらゆる階級の諸名士を招聘して、政治、經濟、軍事、文藝趣味等に關する諸集會を開催して、智識の啓發を親睦和協の實を擧げるにつめて居るが、總て東京に於ける工業倶楽部の如く、關西を代表して經濟的方面に、大きな國家的貢獻を爲すに至るであらうと期待されて居る。

敬神と運勢判斷

日本は神なきロシアに反對に、昔ながらの神國である。眞面目なる日本國民が敬神思想の旺盛なるは蓋し當然の事である。君も常人に劣らぬ敬神家であつて、神明の加護の下に正しく、強く生きんしたのであつた。殊に君は天滿天神の神威を念拜した。昨冬ジュネーヴ會議に於て、聯盟各國の巨頭を向ふに廻し、大活躍をした松岡

全權も亦大の敬神家であつたらしい。我れには神様の加護がある、何をか恐れ何をか躊躇する處あらん、深く心に期して堂々我帝國の公明正大なる主義主張を強く高唱し、各國全權をアツク感嘆せしめた云ふ事であつたが、君も亦大正七年巴里媾和會議全權隨員として渡歐に際し、其職責の重大なるを痛感の餘り、天滿天神に只管其加護を御祈りしたのであつた。而して同會議に臨むや深く神の加護を信じて大に活躍し、偉功を建つる處あつたのミ、似て居るのも面白い。君は全く天神の加護の御蔭なりと深く感謝しつゝ歸朝即日御禮詣りをした程の敬神家であつたのである。君は昭和五年我社更生の大責任を双肩に擔ふや、常に神明の加護を心に祈りつゝ、必死の努力を續けたのであつたが、中道にして仆れた事は實に惜みても尙餘りある事と思ふ。

大正十四年四月一日に母堂を失ひ、八月二十五日に亦二女はる子嬢を失つたので、丁度故人が四十九の厄年に相當して居つた事から、いたく自分の氣を悪くし、こんな縁喜の良くない年は早くも去れがしと祈つた、愈々其歳も將さに暮れなんとする臘月二十七日の事、もう今年も大丈夫と云ふので心やすい友達十數名を招き縁喜直しの宴を張つて、乙丑の歳にサヨナラをしたのであつた、其夜一友人は左の戯作を作つて故人を慰めた、

喜多大人の臺換りを詠みて

まだトラぬ 歳にはあれぞ 戀しかり

ウシミ見し世ぞ 早くもたよなん

四十九は ウシトライトク 臺換り
(始終苦) (五十)

柔の仲間にも 光り比べん

人生の 關門突破 寅の歳

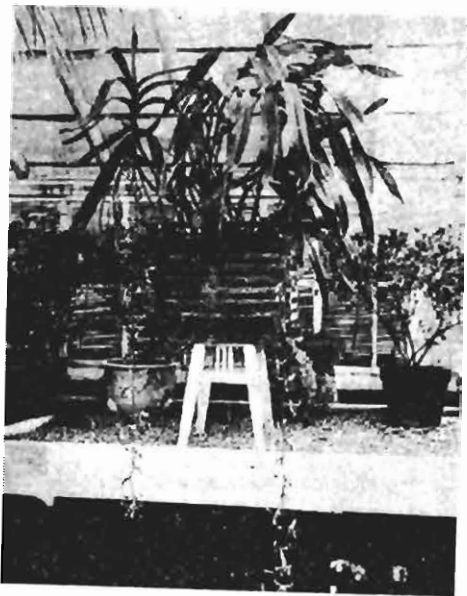
千里の藪を 駈けんこそ思ふ

晩年には時々易者を招じて運勢判断の占いから、商勢の歸趨なきも占つて貰つたやうに聞いたが、其心情を察するに、一掬同情の涙なきを得ないものがあるではないか。

異性に對する態度

君には青年時代より可なり多くの異性との交渉があつただけに、可なりロマンスの所有者でもある、又所謂支那式の精力絶倫者でもあつた、併し君は決して遊蕩兒的の忌むべき態度に出でず、何處迄も眞面目の態度で臨んだのであつた、従つて君は交渉のあつた彼女の最後まで面倒を見るの情愛を持合せて居た、君が晩年事志違ひ、事業の整理と共に、私生活の善處を必須としたとき、一親友は君に忠告するに、此際關係婦人の整理をも徹底的に敢行すべきを以てしたのであつた、君慨然として答へて曰く、予素より其必要を認めざるに非ざるも、今にして、繊弱き彼女輩を見捨つるが如きは、我れ情に於て忍び難きものあるを奈何せん、遂に情の君は此方面の整理を不徹底のまゝ、此世を去つたのであつた。

徳富蘇峯先生昨年獨逸文豪「ゲーテ」の百年忌に際し、彼れの素行を評して『彼れは遊蕩兒ではない、但だ其



愛 蘭 (君の室内に於ける)

趣味と嗜好のいろく

本能が未だ曾つて一日も斯君なかる可からざる如きものに、餘義なくされたものであらう、彼れは決して單なる遊蕩兒ではなかつた、此言移し得て君を評すべきであらう。

君には事業經營其事が趣味中の趣味であつた云ふのが、一番相應はしいこのやうに思ふ。

君は元來多趣味多藝の人であつたが、事業に没頭した爲め、他の趣味に耽る餘裕を持合せなかつたまでだ。

君は事業關係で、平素東奔西走、席の暖まるを知らず云ふ位の多忙さであつたが、幸ひの事には、二十貫以上の肥満した、堂々たる體軀(尤も背は低い)の持主であつたに拘はらず、旅行其者に趣味を持つて居たため一向之れを苦しなかつたことは、君の爲めに仕合せの事であつた、殊に君の好んだのは船旅びであつた、デッキの籐椅

子に大きな軒をかいて、涎を垂らしつゝ、のんびりと思ふさま熟睡に耽る君を屢々見受けたのであつた。旅行癖のある君は熱帯地方旅行中に蘭科植物栽培の趣味を感じたらしく、君は天王寺の邸宅に大きな温室を構へ、世界各地より珍しい蘭科數百種を集めて之を愛玩したのであつた。

圍碁は可なり好きであつた。明治の末葉頃には濱寺の別荘に其の先生を招じ入れて、定石の稽古を勵んだ事もあつた、それだけに君の腕前は先づ初段に五、六目位であつたようだ。

將棋も亦相當打つたが碁程の腕前は無かつたやうであつた。

弄花^{ハナ}をひくこは、孟買時代より能くやつた、今の三井物産の總帥安川氏なきも其時代の仲間であつたらしい、長い間の娛樂だけに相當の腕前を持つて、晩年まで時折美人相手の暇潰しにやつて居たのを見た。西洋カードも弄んだ、面白いのは、カードによる一人占いで、朝の出勤前に、エンヂンの音高く自動車を門前に待たせた儘、悠々運試しの一人占ひをやるのが、殆ど日課のやうになつてゐたらしい。

麻雀も時々家族團樂を樂む位の程度で樂んだ。

晩年には時々映畫見物に出掛けた、例の居睡癖でコクリ／＼とやりつゝ時々頭を上げて場面に眺め入るのであつたが、非常に感傷的な性質の持主であつたから、悲しい氣の毒なシーンが出て來るこ、いつもオン／＼聲を立てゝ泣くので、同行の人も、あたりに氣をかねて之には閉口したこ云ふこである。

晩年の君は文學趣味なき、餘り有りそうに見受けなかつたが、併し君の青年時代には輕文學趣味を相當發揮し

て居たこは面白いではないか。

明治二十九年の秋、君が孟買で一友人と寄合世帯を持つて居たとき、無聊のつれ／＼に、能く俗歌なきを作つて打興したものであつた、其折の作、二、三を擧げて見るこ。

『夕暮れに眺め見あかぬ「コラバ」の四階、霞の内には「マラバー、ヒル」いちんさんの「ドライヴ」するのが見ゆるぞへ、アレ、兵士が通る、兵隊さんの屯所が「コラバ」に有るわいな。』

『「コラバ」の名所を、あらまし云へば「コットン・マーケット」「アポロバンダー」に前「バック・ベイ」かすかに見ゆるは、チョイト「マラバーヒル」。』

『曙に眺め見飽かぬ「コラバ」の景色、月に風情を「マラバーヒル」、帆揚げた船が見ゆるぞよ、アレ、綿が着く、綿の名の「コラバ」に名所が有るわいな。』

なき云ふのが有る。

又君は歌本なきも興味を以て盛んに讀んだものらしい、孟買明治二十九年十二月一日附で、日本の一友人宛てに、

『夜分は無聊のまゝ、義太夫、端唄なきの朗讀を行ひ居候、昨今は文句は大抵暗誦仕候、乍我義太夫だけは越路そこのけの様に被考、獨り笑ひ居候。』

こ云ふて居る。

君の興味は大津繪自作にまで延びて、之を日本の友人に送つた見へ、大阪明治三十年十一月十五日附で、一友人より孟買の君に宛てた書面に

「貴兄の御自作大津繪未だ三味に合はすの機を得ず残念に存候。」

とあるにて知れる。

明治三十一年の春には、左のような俗歌を詠んで自分の境涯を呷つて居る、

「梅も無し、ソレ、櫻も咲かない孟買に、椰子の枯葉を眺めつゝ、サ、ホウカイ、三年の春をは、マゴ、ミ、チョイ々々々。」

明治三十二年末より三年正月にかけて埃及旅行から孟買に歸來、次の都々逸を同人雜誌「椰子の枯葉」に投書して居る。

○「エヂプト」を旅して

北胡羅山人 投

急に歸れぬ旅路のわけを書くも心はカイロから

みづにこがれて苦勞の旅に何を駱駝にのる沙漠

明治三十三年八月三日附で、當時大阪に居つた君は、孟買の一友人宛てに、

「目下大阪の棉界にはホウカイ變造サツサ節流行、小生も下らぬ作り替、御一笑までに爰に添へ置候

綿盡し亞米利加埃及印度棉、毛筋の良いのは海島棉、南市、北市はネ、義和團騒ぎで迎ても日本に來ら

れない。」

自作の歌を送つて、興がつて居るのである。

君は一見鹿爪らしくも見へたが、ア、レで中々剽輕で、無邪氣で、天真爛漫な朗かな氣質の持主であつたのは面白い、君が始めて渡孟して間もなく、明治二十九年の夏、阪神間に珍らしい洪水が出て、田畑に氾濫し一時大騒

ぎであつた事があつたが、當時君は孟買から一書を大阪の友人に飛ばして

「阪神間に大水が出たそう、御氣の毒様、併しそれが、僕に別れのつらさで、泣きの涙に暮れて居る彼女等の涙の雨のたよりである、御釋伽様が態々僕を御訪問あつての御託宜だから間違ひはない。」

何ん、おぎけた朗かな氣持ではないか、又明治三十三年十二月、左の手紙を大阪の友人に出して居る、



「當月は極月まで、大阪在勤なれば、掛りりか申す鳥に苦しめられ候時なるも、孟買在勤の御蔭には、鬼も

六千哩の海は難越、至つて平氣に暮され候、是等が孟買在勤の賜に可有之候。」

概ね此類の氣輕さであつた。

又君は氣の張らぬ會合や、宴席なきでは、チヨイ、駄洒落や、口合ひなきを飛ばして、愛嬌を振りまいたものである、兎に角君が、ユーモア趣味の持主であつた事は、面白い君の半面ではないか。

君の孟買在勤時代には、自轉車乗りもやつた、之れは明治三十一年四月頃の事だ。

『僕此頃自轉車を始める事にした、好いエキサーサイスだ。』

友人に書いて居る、其當時は大した太り方も、してゐなかつたので、さして不恰好な乗り工合でも、無かつた。見へる。

又、同じ時に友人に送つた手紙で、犬好きのこゝがわかる。

『僕近頃犬を飼つて楽しんで居る、随分可愛らしいものだ、僕は之れに徳ミ命名した、其謂れは云ふに及ばない、熱くて勉強も出来ないから、徳相手に目を暮らして居る、能く馴れて中々しほらしい。』

君は玉突の樂も孟買時代に持つて居た、又酒を飲むこゝも孟買時代に相當やつたらしい、慰安少なき海外獨身生活者には有りがちの事である、君の卒直なる、そんな日常生活を郷里に書いて遣つたからたまらない、眞面目な子思ひの嚴君は、御心配の餘り、明治三十三年二月一日附で、情けある親心を披瀝して、飲酒の弊を次のやうに戒められたのであつた。

『先般來書の末に、其許此頃は娛樂として玉突、讀書、飲酒等を爲し候趣、玉突も讀書も然るべく候得共、獨り飲酒の如きは餘り過度に相成候ては、大に衛生上害あるのみならず、殊に海外滞在の身に有之、一層攝生に注意不致候ては、萬一にも酒毒に罹り候様の事有之候ては、實に容易ならざる次第故、此邊屹度御慎み相成度候、節酒は誠に古人も行ひ難きもの見へ、下戸其樂を知らず、上戸其毒を知らずこの言も有之、自然其節酒行ひ難く候時は、寧ろ斷然禁酒するの外有之間敷、吳々も適度の量を極め候事專一に有之候。』

君も之れには恐縮した、つまらぬ心配をかけて相濟まぬ、君は早速親に詫狀を出した、君の酒は決して親心を裏切るような大量のものではなかつたのである。晩年には持病の關係で、眞の禁酒黨に仲間入りしたのであつた。

喫烟は君の嗜好の一つであつた、尤も君には、みんな種類のものでも吹かせれば良いと云ふ程度の喫烟振りであつたやうだ。

君は甘黨としても人後に落ちなかつた、餅菓子の五つや、六つは平氣で平らけた。

果物や西瓜類は中々の好物であつた、自らも大和葛城農園を經營して、梨子其他の栽培をやつた、所謂二十世紀梨の生産者として有名で、君は能く之を知人に頒ちて其味を誇つたものであつた。

西瓜の季節になる、毎日一つ位は平氣で平らけたやうだ。君が大正二年米國テキサス州に三ヶ月間滞在中、非常にテキサス、ウオーターメロンを賞味し、又桃をも愛喫したこゝは、當時同地社員間の語り草であつた。

君は日課として毎早朝朝衾を蹴つて直ちに書齋に入り、先づ紅茶一椀を啜るを慣例とした、此紅茶一椀の味こそ、君の最も好む處の一つで、而かも之れが其日活動の源泉となつて顯はれたものだ、即ち君は之を飲み了るこゝ

共に机上うづ高く積まれた書類に眼を通ふすのが常であつた。決裁ミ計畫は多く此時に行はれたのである。

最後に特記すべき一事は、君の日常の食事に、全然、好き嫌ひの撰り好みが無かつたことである、食膳に上る如何なる種類のものでも、悉く文句なしに平氣で平らける雅量の主主であつた、素より味の良否の鑑別は、敢

て人物に落ちぬのであるが、恰も君の人格が、清濁併せ呑むの寛容を持つて居つた如く、君の胃袋——人並優れた大きな胃袋が、甘いも不味いも一舉併せ吞まずしては容易に満たし切れぬが爲めの寛容さであつたのであらうか、君は普通二人前の食量を必要としたようであつた。

同窓會の爲めに盡力す

君は明治二十七年三月大阪商大の前身市立商業學校第七回の卒業生である、而して母校同窓會委員に撰ばれたのは、明治二十九年一月で、大正三年に至る間、數度委員に擧げられ、大正四年常務委員に當選、爾來同窓會の爲め献心的に努力する處あつた。



大阪商大同學會君に呈し奉る頌徳銀額

大正七年五月二十二日同窓會委員長に當選後、昭和四年四月まで、引續十一年間其要職に在つたが、此間大正十年三月、同窓會總會に於て、母校の大學昇格の達成及び之れに伴ふ基本金募集の件を決議する所あつた。其基本金募集趣意書並醸金方法は左の如くであつた、

市立大阪商科大學基本金募集趣意書 (大正十年三月廿八日 同窓會總會決議)

『我國ニ商科大學ヲ設置スル必要ハ夙ニ識者ノ唱道セル所ニシテ其主張ハ終ニ實現セラレ政府ハ既ニ東京高等商業學校ヲ商科大學ニ昇格セシメ尙神戸高等商業學校ヲモ近ク大正十二年ヲ期シテ之ヲ昇格セシムルノ豫定ナリト云フ從ツテ商科大學ノ必要ハ最早議論ノ時代ヲ過ギテ實行ノ舞臺ニ入レルモノト云フヘシ而シテ商科大學ヲ設置スヘシトセハ現今我國ニ於ケル商工業者ノ淵藪ニシテ尙且將來世界的通商貿易ノ一大中心タルヘキ運命ヲ有スル我大阪コソ最好ノ所在地ニシテ他ニコレト比肩シ得ヘキ都市ナシト云フモ敢テ過言ニアラス殊ニ我が大阪市立高等商業學校ハ當市ニ於ケル最高商業學府トシテ其創設ノ古ク且其内容ノ整備セル點ニ於テ之ヲ昇格シテ商科大學タラシムルノ最モ適當ナルコトハ蓋シ何人モ異論ナキ所ナルヘシ』

然ルニ今母校ヲ昇格シテ市立商科大學タラシムルニハ大學令第五條ノ障礙アリテ法令上困難ナキニ非スト雖モ政府當局ノ意嚮ヲ忖度スルニ母校ニシテ其内容ヲ充實シ且ツ大學經營ノタメ市ノ負擔ヲ著シク増加スルノ虞ナキニ於テハ大學令第五條ノ改正ハ敢テ難事ニハ非ザルヘシ其間ノ消息ヲ知レル母校當局者本問題ニ關シ熱心

飽迄目的ヲ達セントスル決心愈々固シ去レハ吾人亦母校ノ歴史ヲ尊重シ之ヲシテ市立商科大學ニ昇格セシムルノ希望ヲ貫徹セザルヘカラス

是ニ於テ吾人ノ先ツ盡スヘキ急務ハ母校ノ内容ヲ充實シ大學トシテ完全ナル設備ヲナスニ必要ニシテ且大學令ノ改正ヲ促進スル誘因タルヘキ基本金ヲ集積スルニ在ルハ吾人ノ多辯ヲ要セザル所ナリ幸ニシテ我大阪市内ノ當局モ母校ノ向上發展ニ關シ適當ナル施設ヲ爲スノ急務ナルヲ認メ種々ノ點ニ於テ其方針ヲ以テ進メルモノト認メ得ヘキ事實アリ然リト雖モ百般ノ市政上經費多端ナル市ニ對シ其悉クヲ期待スルハ決シテ吾人ノ希望ヲ速成スルノ所以ニ非ラズ故ニ此ノ如キ基本金ハ先ツ吾人同窓會員ニ於テ應分ノ醗金ヲナシ然後之ヲ一般篤志家ノ後援ニ訴フルノ至當ナルヲ信ス仍而吾人ハ我大阪市立高等商業學校ヲ昇格シテ市立商科大學トシ傍專門學校程度ノ商業專門部ヲ附設セントスル母校當局ノ提案ヲ承認シ此目的ヲ完成スル方策トシテ先ツ同窓會ノ全員ヨリ最低五拾萬圓ノ基本金ヲ募集セントス

同窓會諸君冀クハ母校ノタメ且大阪市將來ノ爲メ奮テ應募同時ニ此目的ヲ貫徹セシムル爲メ最善ノ努力ヲ致サレン事ヲ

市立大阪商科大學基本金並ニ醗金方法

一、募集金額 金五拾萬圓以上

- 二、募集範圍 市立大阪高等商業學校同窓會各種會員 在學生、並ニ縁故者
- 三、應募申込 大正十年四月一日ヨリ別紙書式ニヨリ申込ムコト
- 四、醗金方法 醗金ハ毎年拾圓宛五ヶ年拂込合計五拾圓ヲ以テ一口トシコレヲ以テ醗金單位トス
- 五、拂込方法 (イ) 期 日 毎年拂込ハ次ノ二回トス 第一回 六月 第二回 十二月

(ロ) 現金前拂 現金ヲ以テスル左記ノ前拂ニ對シテハ左表ニヨリ割引ヲナス

第一年 第一回拂込期ニ於テ申込金額ノ前拂ニ對シテハ 拾圓ニ付 七圓八拾貳錢ノ割

第二年 第一回拂込期ニ於テ未拂金額ノ全額ノ前拂ニ對シテハ

拾圓ニ付 八圓貳拾參錢ノ割

第三年 同 八圓六拾貳錢ノ割

第四年 同 九圓〇七錢ノ割

(ロ) 公債代納 基本金應募者ノ都合ニヨリ左記公債ニ限り其額面ヲ以テ代納スルコト得但五分以上利子附ナルコトヲ要ス 一、大阪市債券 二、日本政府圓公債證書

同窓會委員長並に商科大學基本金募集委員長として、責任の地位にあつた君は、財界不振に際し所期の目的を達成するが爲めには、非常の忍耐と努力を必要とするこゝを覺悟して、着手した仕事だけに、君の奮闘振りは全く涙ぐましきものがあつた。

君は若し此基本金募集が、失敗にでも終らんか、夫れこそ君自身の面目を汚すは勿論、母校同窓會並に母校の面目を權威を失墜する所以なりにして、君は先づ悲愴の決意を以て、同窓會員に謀る處あつた。

『拜啓

時下新緑の候貴下愈々御清適欣喜之至りに御座候

陳者先般開催致候同窓會總會は母校の大學昇格案を滿場一致を以て可決し別紙趣意書の如く基本金募集に着手致すここに相成候此基本金募集の事業たる特に今日の如き財界不況の時期に於てはこれが遂行上困難の存するは元より自明の事理に御座候へ共時勢の要求は事業の遷延を許さず自然同窓會全員の一致協同的大努力を熱望せざるを得ざる場合と相成候

既に基本金募集の舉を公表しこれに着手したる以上萬一失敗に終らんか我大阪高商同窓會の面目を中外に失するは勿論我等の聲名は社會的に葬らるゝの道理に有之吾人は飽迄協力其成功を期し度く捷徑として卒業年度を同くするにより又は内外同地方に在住在職の緣故により各自奮勵の必要有之候事は恐らく同窓會員全體の御同感せらるゝことと確信仕候

承候へば貴兄は 年度同期會の幹事として常に御幹旋相成候由甚だ乍恐縮至急貴年度生間に御打合せ最善の努力を致されんことを切望に不堪候萬一集會等有之候節御通知被下候はゞ本部より説明且御依頼旁出席可仕御含願上候

右基本金募集の首途に當り格別御高配を煩はし度如斯に御座候 敬具

追而萬一幹事御變更相成候節は後任者に此旨御移牒願度又本部との連絡の便宜上年度別委員中より代表者を御選定至急本部まで御報告願上候

大正十年五月十五日

市立大阪商科大學基本金

募集委員長 喜 多 又 藏

爾來君は日夜寢食忘をれて東奔西走、同輩と協力一致、あらゆる困難と煩瑣を忍び、所期の目的達成への本願に邁進したのであつた、官界各方面への折衝、前後七ヶ年に亘りて幾百回繰り返されたか又基本金募集にからまる幾多の故障を排除して、會員の激勵に努めたか、之を絮説するの繁に堪へないが、兎に角財界不況時に拘らず、能く六十萬圓近くの巨額を集むることに成功し、其結果として昭和三年遂に市立大阪商科大學昇格の勅令發布を見るに至らしめた一事は、母校同窓生一同の熱心と大阪市當局關係者並に大阪市に關係深き諸名士の熱烈なる後援等の結果たるは、素より言ふ迄もないことであるが、同窓會の主腦者たる地位にあつた君が、八方に心を配り、常に適切なる措置を怠らず、其指導宜しきを得たことが、目的貫徹を促進した上に君の多大なる功蹟を認め得るのである。茲に於て昭和四年十一月四千有餘の同窓會員は、君が委員長在任中の功績を紀念する爲め、特に君の肖像と頌徳文とを吉金に勅し、之を君に贈呈して以て深甚の謝意を表した所以である。尙君の大阪商科大

學昇格の爲めに盡した偉蹟については大阪市民にしても亦永く忘るべからざるものなるを信するものである。

財界の仲裁役を志す

君の一生を打込んだ日本綿花の事業が、不幸にして財界の大反動に捲き込まれ、數百萬圓の負債に呻吟する身となつてから、素より君としては、捲土重來願望挽回に努めたものではあつたが、天下の大勢俄かに君に利あるに至らなかつた。

君はつくづく往時を追憶して一種悲愴の感慨を覺ゆると同時に、自分としては近き將來に、物質的にさうすることも出来ない境遇に置かれて居る、せめて何か自分の手にあうやうな精神的の仕事でもやつて、聊か社會的に最後の奉公を努めたいものだと思ふ發心があつたやうであつた。

所謂精神的の仕事に云ふのは、詰り財界に屢々捲き上る同業者間の紛糾、其他一般的係争の調停役を買つて出やうに云ふのに外ならぬ。

關西の實業界にあつて、從來此役目の一部に當つた人とし云へば、故小山健三氏、故永田仁助氏等を挙げ得るのであるが、恐らく君の考へも是等の諸氏に倣ふの意味であつたものかと思はれるのである。

先づ其小手調べにも云はうか、始めて調停の舞臺に乗り出したのが、阪神國道バスを廻つて起された阪急對阪神電車間の係争問題であつた、君は勿論多忙の身であり且つ持病の惱みもあつたが、一度當局者の依頼を受く



向 つか
左 中 右
端 央 端
喜 孝 岩
多 橋 本
又 龜 榮
藏 郎 助
氏 氏 氏

相親會の由來

るや、猛然として之れに當り、圓滿解決への途を見出すに一生懸命になつた。君は先づ係争の歴史的關係から、今日までの經過について、詳細に其成行を究明した後、深思熟慮、公平無私の斷案を下したのであつた、其縝密にして熱心公正なる態度には、關係者双方等しく推服の外なかつたと思ふ事である。

若し夫れ君に假すに、更らに十年の壽命を以てしたらんには、或は關西の澁澤翁の異名を博して、幾多の係争事件に關與し、快刀亂麻を斷つての快手腕を發揮し得たであらうと思ひ、君の短命を惜むの情に堪へないものがある。

君の始め大阪商業學校に學んだとき、學友として親み深かつた人に岩本榮之助、孝橋龜次郎の兩氏があつた、此二學友は中途退學したのであつたが、併し親友として永く交遊を續けた、岩本氏は株式仲買業で大阪市公會堂の寄附者として、大阪市民の恩人である、孝橋氏は安堂寺橋通りの金物業者であつた、此三人は明治二十五年以來刎頸の友として往來

したが、明治三十五年に左の如き覺書を作つて居る。

『唐土の三傑は桃園に交りて天下を復せん謀りぬ、吾等三人元より豪傑ならず又さる大志を抱かざれども、同じ明治十年に生れて同生の交り、一入厚く、去る二十五年の春、月瀬の橋畔に袖を連ねて、梅の薫りを留めしより、早や十年の歳月を経ぬれど、其交り昔に變らずば、年々花同じく人又同じきの歡びを誇りぬ、然るにこゝに又縁あり機ありて今日都は嵐山の綠蔭に圍ひて追舊の語らい行先の望なき、盡きぬ話に一夜を更しぬ、大堰の清流逝けども、花は期を違へずして影を浮ぶ、歲月世態いかに移り行くも、此三人の交情長へに盡くる期なき事を祈るになん。

明治三十五年八月十六日

岩 本 榮 之 助

孝 橋 龜 次 郎

喜 多 又 藏

而して此時以來、相親會の名に於て、毎月三圓乃至十圓宛の積立を勵行し、明治四十三年八月まで八ヶ年間繼續したのであるが、同年八月二十日相互の同意により積立金合計一千五百餘圓を三人に分配して解散したのであつた。

其後岩本氏は事業失敗の爲め不慮の死を遂げ、孝橋氏も鑛山業に失敗して起たず、君亦晩年蹉跎した云ふ事

は、如何にも不思議の因縁と思はれてならない。

君 の 爲 人

君の人物如何は本傳に記述した閱歷と事業及知人から寄せられた幾多の追憶文や逸話等により大體明瞭にされたことと思ふのであるが、編者が曩きに偉人傳中に君の類型を見出し興味を惹いたことを、多少取入れて聊か所感を併せ記して見たいと思ふ。

徳富蘇峰翁は嘗て淺野總一郎翁を評して

『英國人には休憩云ふことがない、斃れるまで働き通ふす、自分の一生が仕事をする時間で、休憩云ふことを言はない、淺野君が宛かも夫れである。

淺野君の本領は、常に仕事を主に、利益を従とし、致々止まず、一生の努力から其仕事の上に捧げんとする處にある、子孫の爲めに計云ふ事は、淺野君に取つては附けたりごころと思ふ。』

云はれて居る、恐らく此批評は移して君一生の行動にも其儘あてはまるものではあるまいか。君は仕事の爲めに趣味に耽るを敢てしなかつたのであつた、即ち仕事其物が君の趣味であつたと言ひ得やう。

嘗て神戸香上銀行支配人英人某が、君と會食の砌、君好む處の趣味如何と問ふた事があつた。君は答へて何も無い云ふ、英人怪んで曰く何もないとはおかしいと、君答ふるに勿論やれば色々面白い趣味も解せざるに非る

も、之れに耽つてゐては、肝腎の商賣の妨げとなるから、一切手を附けざるまでの事だ、英人始めて君の眞意を諒解し、さても信頼に値ひする心強い人物かな、感嘆時を久ふしたこのことである。

先代の淺野翁は、人の揮毫を求むるあれば、直に筆を揮つて『努力と度胸』と書いたそうである、夫子自らの經歷を諷するは勿論であるが、非凡なる此翁の一句は、實に君の一生の歴史を簡潔に言ひ表はすに相應はしいものと思ふのである、實に君は事を決するに必ず度胸を据へて、押の一手で突張つた、中途に横はる難關を物の數もせずには押切つて進んだのである。

大分以前に滿鐵社長として令名噴々たりし人に、早川千吉郎氏があつた、奉天小學校で講演中不幸腦溢血で倒れたのであつた。團琢磨氏が嘗て早川氏の性格の特徴を列擧して、(一)度量が廣く餘裕があつた、(二)細心で忍耐力強く、(三)協調力に富み、(四)親切で能く人の世話をされた、(五)氣宇豪快にして大陸的の氣風あり、他人から迷惑を蒙つても厭はなかつた、(六)趣味が廣かつた、(七)奉公の念に富み、名譽を貴ばれ、圓滿な人であつた。

と云はれたが、其殆んそ全部が君の性格のそれに近似して居るのを認め得るではないか、唯君には氏の如き禪學や、哲學や、骨董類なきを缺いただけである。

嘗て徳富翁は西郷南洲翁を評して『力と徳と情の人であつた、細かい事に能く氣の附く人で、決して小事を忽せにしなかつた』と曰はれた、由來人傑は大膽にして小心であるのは、東西古今を通じて同一であり、君の性能

が南洲翁と多くの點に於て似通つて居たことは、注意すべき事の一つと思ふのである。

君の畏友であり、肝膽相照らした和田豊治氏の性格が、又多くの點に於て、君のそれに酷似して居つたことも注意すべきと思ふ、嘗て鎌田榮吉氏は和田氏を評して『和田氏は人格偉大であつた、偉大な人物は性質の兩面を持つて居る、即ち氏は大膽にして細心、聰明にして機敏、包容力に富み、事を決するに苟もせなかつた』と、郷男又曰く『和田氏は徹頭徹尾奮闘努力の人で、極めて眞摯で、一點の私心なく、恬淡水の如き人物であつた、そして事に當つては明快に決斷した』と、鎌田氏、郷男の和田氏を評するの言は、直ちに移して君の性格を評するに適當なりと信するものである。

中外商業新報記者が、昨年現陸相荒木閣下を批判して曰く

『會つた感じは此人が荒木と云ふ人かといふ氣持がするであらう、人に極めて人懐っこい印象を與へる、之れが荒木信者を作る處である。荒木は極めて氣の弱い人である、もつより一旦決意すれば、それを飽迄強情意地を通ふす人ではある、従つて人が白いと云ふも、何處かに黒い部分、或は青い部分もある事を發見する人である。』

『彼れは又自分でも認めて居るように、極めて人が好い、又従つて自惚れの強い男でもある、自信の強い處は頭腦の然らしむる處であらう、人の好い處は乾兒を作り、情に脆い處でもある、又却々の潔癖屋でもある。』其何れも君の性質其儘の類型ではないだらうか、併し乍ら之は素より荒木閣下の半面の似通ひであるは勿論で、

其蒲柳の體格や神經質や、劍道の達人である事や、熱烈の精神家である如き荒木閣下の他面の特質に至つては、君の場合に於て非類型の甚しいものであるのである。

要するに君の持つて居た性格の大部分が、南洲翁、早川千吉郎氏、和田豊治氏、淺野總一郎氏、荒木閣下なきの名士の持つてゐる良い特質に其類型を見出し得たことにより、如何に君の爲人が非常に優れた人物であつたかを證據立て得ると思ふものである。

尙君は或縁者の青年に次の坐右銘（口繪参照）

獨立自尊 細心大膽

誠實努力 仁俠報恩

の十六字を書き與へて居るが、夫れこそ君の一生を通じて實踐躬行し來つた處の全部であつて、以て君の偉大なる人格を偲ぶに足ると思ふ。

家 庭

君は明治三十八年五月二十三日當二十九歳の時、香村文之助氏長女てい子夫人を娶り二男三女を擧げた、君亡き跡の貞淑なるてい子未亡人は、専ら家庭にありて子女の成人を樂みつゝ、一切の家事向きに鞅掌されて居る。

長女登志子嬢（明治三十九年七月出生）は昭和三年一月山口勝藏氏二男慶治氏（東京商大出身）を養子に迎へ、

樂しき家庭を作り既に二子を儲け、賢母の譽高い。二女はる子嬢（明治四十二年一月出生）は、大正十四年八月十七歳にして不幸早世されたが、才媛として惜まれた。

三女満壽子嬢（明治四十三年十一月出生）は資性俊慧、清水谷高等女學校卒業後、家庭にありて母堂の手助けをされて居る。嗣子又太郎君（大正二年六月出生）は甲南高等學校高等科に在學、資性篤實、秀才の譽高く専ら學業にいそしんで居られる。

二男豊治君（大正六年十一月出生）も亦聰明、現に甲南高等學校尋常科に在學中である。

逸

話

逸話

社員の自尊心を尊重す

大正八年の頃、日本綿花の業績隆々として、社員に對する賞與金の如きも、相當纏つた金額を給與した。當時社長であつた君は、其部下一同を集めて訓示した。

『我社は諸君の勉勵に相俟つて、幸に好成績を擧げ得た事を喜ぶ。聊か諸君の勞に酬ゆる爲め、本日賞與金を渡す事にする。今回は例年に比して特別に多いので、重役中には此際若い人達に澤山の金を握らすことは、浪費を招くを恐るゝ故、寧ろ其大部分を會社に保管積立するの、安全なるに若かざる可しこの注意を受けたのであるが、自分としては、之れに反對の考へを持つて居るので、全部を御渡する事にする。其理由に云ふのは外でもない、自分の考へとしては、諸君が各自の働きによつて儲け得た金を、諸君自身の力で善處し得ないよ
うな、意氣地のない社員は、養成して居らない積りだ。賞與金を活かして使はうと、殺そうと、之れは一に諸君の胸三寸にある事だ。我々が天れに干涉する事は、諸君の自尊心を傷けるものと思ふから、斷然全部を御渡しする事にした次第である。』

居並ぶ社員全部は、君の訓示に感激して、流石は名社長なりと讃嘆措かず、賞與金の使途については、何れも君の信頼を裏切らざるよう、十分慎重に善處して過なきを期したと云ふ事である。

庖丁の腕の冴へ

大正八年五月一日巴里滞在中、労働爭議が勃發して、君の投宿した「ホテル、ミラボウ」の用人全部が、此渦中に投じたのであつた。

平常通りの食事が取れなくなつたので、自炊生活を餘儀なくされた。

君は同宿の大毎記者であつた加藤直士氏と、秘書の奥村社員の三人で、前夜豫め買つて置いた牛肉と日本米で、鋤焼の仕度に取りかゝる事にした。

君は肉を切る役目をつこめた。驚いたことには其手並の頗る鮮かであつた事である。加藤、奥村兩氏は互に顔を見合せて、驚異の瞳を睜りつ、いさも不可思議の思ひなしをしたのであつた。如何に實業界を切つて廻す大立者でも、マサカ、庖丁の切れ味の冴へは持ち合すまいと思ひの外、女人も及ばぬ手腕の程をマザ、眼の前に見せつけられたのであるから、驚くのも無理はない。流石に偉い人はかゝる事にまでも偉いものか、只管感嘆に浸つたのであつた。扱ても君がさうしてこんな庖丁の冴へた腕前を持つてゐたかの疑問であるが、恐らく之れは孟買の獨身世帯時代に苦勞した結果であらうと推測されるのである。

加藤氏は玉葱の切役を承つたが、いさも覺束なき手つきに、切つた玉葱から迸る液汁で眼をうるました顔付きの可笑しさは、時に取つての一興であつたと云ふ事である。

奥村氏は米飯焚きの役目を仰付かつたが、流石は生れつき萬事に器用なたちの君だけに、之れが生れて始めてのおさんごん役をつこめたに拘らず、上々吉の出来榮であつたので、一同久方振りに、巴里の真中で日本飯と鋤焼に舌鼓を打ち、ストライキの飛んだ儲けものをしたのであつた。

居睡料一千圓也

君の居睡癖は餘りにも有名であつた。精力家の君には寸暇を偷んで假睡し、頭を休める必要があつたに相違ないが、唯君の假睡が病的に原因して居つたことは氣の毒の事であつた。

君は居睡りの爲め、大事の用事を缺ぐなきの失策は殆どなく、寧ろ居睡りつゝ用事を辨じて居つたことによつて有名である程だ。

君が併し居睡りの爲めの日常の失敗は二、三に止まらぬ。煙草を啣へつゝ居睡りして衣服を穴だらけにするなきは珍らしからぬ失敗であるが、大正八年媾和會議で巴里に滞在中の大失敗には、流石の君も眠たい眼をバチクリさせたこと程左様に、珍妙至極でもあり、氣の毒でもある。

場面は床屋の仕事室である。登場の主人公たる君は、安樂椅子にもたれ、氣持良さうに居睡りつゝ散髪を終

つたのである。宿に引取つた。フ、ト、氣が付いて見るミ、ネ、ツ、ク、タイに挿してゐた筈のダイヤのピンが影も形もない。勿驚一千圓に値する見事なダイヤのピンだ。流石の君も幾分狼狽氣味だ。色々探しても見たが、遂に見當らない。扱ては先列床屋で居睡中に失敬されたものか氣付いたが、もう遅い。床屋を調べて貰つたが無い。其外心當りを内密に調べたが、之れも無駄であつた。斯くて主人公はダイヤの行衛を謎のまゝ、堅く心に秘めつ歸國したのであつた。

學者は跣足

君は學問に深き造詣あつたは云はない。併し廣く實際的常識に富んでゐた事は事實である。従つて君は常に事を處するに當り、理論を第二次とし、實際による常識的判断を第一義とした。

嘗て某社汽船が印度より棉花を運航途中、火を失して積荷の一部を焼失したため、共同海損に附せられることになつた。船會社は一荷主であつた我社に向つて、或金額の供託を要請し來つたのであつた。

君は即座に此供託を拒絶した。船會社は驚いて共同海損の講義までやり出して、是非承諾し呉れよ懇請到らなかつたが、君は頑として之れに應じなかつた。曰く

『貴社船の出火は、歸する處、船長の責任だ。而して船長の監督は貴社にあるのであるから、詰り貴社の責任ではないか。之れが爲め汽船は延着する。燒殘荷物の荷捌きには多大の手續を要するし、荷捌の終らぬ内に、

爲替の期限は到來するし、金利や藏敷の損も加重するし、荷主としては非常の迷惑を蒙つたではないか。殊に我社としては、被害の荷物は必ず補填して契約通り荷渡を履行することに定め居る關係上、假令保険金を受取つた處で、相場の居きころ次第では、保険金のみで到底カヴァー出来ない場合も少なくない次第で、斯る際に於ける値上り差損をも甘受せねばならぬ不利益の立場に置かれて居るのではないか。

斯る事情の下に苦痛と損失を負擔して居る荷主に對し、保険の通則なりこの單純な理由で、供託金を納付せよと迫るが如きは、所謂瘡馬に鞭つこ同然、餘りに實際的關係を無視したる不合理不人情の要求に非ずや。常得意先に對し義理にも、そんな仕打は出来ない筈ではないか。』

君は到頭此論法で相手を泣寝入りにさせたのであつた。

君は諸般の問題に對して其意見を定めんとする場合、常にこれ式の常識實際觀で突張るので有名であつた。

又しても床屋での失敗

大正八年媾和會議全權隨員として巴里滞在中の出來事である。日本の全權事務所は巴里の中心の「プラスバン・ドーム」(巴里の一番贅澤な店のある所)にあつたが、一日君は理髮屋に御洒落に行く事になつた。例の氣性なので御供も連れず、一人で巴里の此最も贅澤な一流の床屋に出かけた。其少し前に全權事務所を顔を出し、佛蘭西語の堪能な若い書記官連、談笑中に佛語で「イエス」「ノー」は何と云ひますかこの奇問を發したのが君であつ

た。其處で夫れは簡単な事で「ウイー」「ノン」です。答へたら、有り難う。君は一言いつたきりで外に飛び出した。後で分かつた事は、右一流の巴里の床屋で「ウイー」「ノン」の二つの佛蘭西語丈けで用足しをやらうとした事であつた。さて偶然にも君が此床屋を出た跡へ、巴里在勤の若い書記官が行つて、色々床屋の親爺と話をした結果、君は散髪一回に當時の爲替相場で、日本の金の八、九圓を支拂つて居る事が判明したのであつた。夫れが却々振つて居るのである。

床屋の親爺は君の散髪を終つてから、雲脂^{フカ}取りの上等の瓶を君に見せて、「是れは毛髪の榮養に持つて來いの品だが、御使ひになつては如何です」と聞いたのだつた。君は素より此親爺の生粹の巴里語が、何を云つて居るか、全く解らなかつたに相違なかつた。併し數時間前に全權事務所で覺へた佛蘭西語で「ウイー」を答へた。其處で床屋は其雲脂取りを、ふんだんに毛の薄い而かも大きな、君の頭に振りかけたのであつた。其次には上等の「クリーム」瓶を示して、「是れは鬚髻を剃つた後に使ふに、非常に氣持の良い最上品ですが如何ですか」と早口の佛蘭西語で尋た。君は又も「ウイー」を返事したので、床屋は最上等の「クリーム」の口をあけて、鬚髻剃後に塗つた。處で床屋は又々上等な小さな香水の瓶を出して、「是れは巴里一の香水屋の品ですが如何ですか」と聞いた。君の今回の返事も同じく「ウイー」であつた。其處で床屋の親爺は、又此上等香水を少し許り頭髮に振りかけた。扱愈々勘定を云ふ段になつて、「百五十法頂きます」とやつたので、流石の君も少し奇怪な感はあつたらしいが、例の通りの調子で、支拂ひを済まし歸りかけようとするに、床屋の親爺は先刻用ひた上等の雲脂取を、「ク

リーム」と、香水の残り三つを、丁寧に包んで、「是れは使用残りですから、御持歸り願ひます」と巴里語でやつたものだ。處が散髪料だけに百五十法も取られて居るのに、此上に品物を買はされ、更らに數百法の請求を受けるようでは、馬鹿々々しいと考へたらしい。君は此處で始めて「ノン」を答へた。床屋の親爺は、流石に日本の紳士は、寛大だと思つて、「さうですか大きに有り難ふ」と答へて其儘頂戴したと云ふ。巴里散髪代一回百五十法の由來は右の如し。何んぞ振つた失敗ではありませんか。(木村銳市氏寄)

支那顯官を居睡であしらふ

昭和四年二月君が上海視察に出掛けたとき、當時の國民政府外交部長王正廷氏は一夕其私邸に君を招待した。席に列するものに交通部長孔祥澂、財政部長宋子文氏等の諸名士があつた。君は食卓を開くときから、例の居睡癖を發揮して食卓を終るまで、徹頭徹尾居睡り續け、並居る支那大官連の度臆を抜いた。

流石に外交術に長けた王氏の事であるから、他の列席者が氣を悪くしないように、君の居睡を氏一流の外交術で取繕ひながら、河南督軍胡景翼の話なきを持出した。胡督軍は矢張大兵肥滿の偉丈夫であつたが、雄姿堂々駿馬に跨り劍を抜いて三軍に一令を下すに、其儘馬上にガウ、ウ、眠つたものださうである。

無論居睡癖は君の病的のものではあつたが、時の場合では之れが相手の度胸を抜くに役に立つたのも妙である。

火事と聞いて便所入

君は屢々大事に遭遇したが、膽大沈勇の君は、いつも周章狼狽の醜態を見せず、徐ろに適當の對策を熟慮して之れに善處するを常とした。

君が大正四年支那視察の際、偶々漢口滞在中副業として經營の、我社棉實粕工場が、火を失して將さに大事に至らんすこの急報を齎らしたとき、君は何等驚き騒ぐ様子もなく、靜かに用便所へ立つたのであつた。

數分後に出て來た君は、支店長に對し、失火の善後措置につき一から十まで、いとも行届いた指導を與へた外、一言半句小言の言葉がなかつたのに、責任者も痛く恐れ入つた。

君が失火の急を聞きつゝ、直に用便所入りをして、其善後策を練るの餘裕綽々たる態度こそ、度胸と沈勇の持主であつて始めて出来る藝當である。之を傳へ聞いた人々、流石は君であると嘆賞措かなかつた云ふ事である。

健啖アメリカ印甸人を驚かす

大正二年十一月二十四日耶蘇感謝祭當日、君は米國南部フォートウオース市の日本綿花社宅に於て、社員と晚餐を共にした時の事である。御祝ひの御馳走として蒸焼きの七面鳥が食卓に上つた。調理役の亞米利加印甸人の女コックが、御馳走分に君には特に大きな片腿一片を大皿に盛つて出したものだ。君は之れば結構と許り何の苦



もなく之を平らけて、更に其御代り頂戴をやつたのである。流石に大食のアメリカ印甸人も、之れには喫驚仰天暫しは開いた口が塞がらぬ體であつたきは、如何にも君の健啖振りを發揮して面白いではないか。

仆れた動物
に同情の涙

大正二年君が米國南部フォートウオース市に滞在三ヶ月に及んだとき、或眞夏の日盛りに、君は晝食を社宅に取るべく、事務所より馬車を驅つたのであつた。

處が運悪くも馬が途中で日射病の爲めに昏倒し、遂に起たなかつたのであつた君は眼のあたり此痛々しい

光景を眺め、いさゞ不惑の情に打たれたのであつた。動物愛護の尊い精神は閃いて君の瞳には露を宿したのであつた。直ちに乗用の馬車は廢止されて自動車に代はる事になつた。社員一同君の情け深い心持に感激する同時に、自動車の代換によつて大に利便を増したことを喜んだのであつた。

細心のいろく

君の細心で萬事に几帳面な性格は、一生を一貫しての感激すべき一つであつた。

君の書齋を云ひ、事務室を云ひ、いつも几帳面に整頓され、各々其品種に應じて置場所を違へず、一絲亂れざるの觀があつた。來信に附着せるピン、クリップ、バンド等も夫々區別して別々の小さき函に收められて整理され、再び利用に資したなき、平素細心の注意が傾けられて居つた。

之れが巴里會議へ出張中の多忙な時にまで、遺憾なく發揮された。

「ホテル、ド・ラ・ベイ」は君の平和會議事務所であつた。會議中事務の整理は凡て此ホテルで行はれたのみならず、亦氏の凡ての關係事業の策源地でもあつた。四月末日迄の會議事務は安井秘書の分擔、其他の事務は奥村秘書の分擔を云ふ事であつた。そして五月以降は奥村秘書が一切を擔掌したのであつた。

事務を云つても、重要な仕事は君自身で、片付けて行く、そして其執務振りの敏捷と輕快さは、實に驚異に値ひするものがあつた。尙且整理の天才的習慣には一層の驚異があつた。即ち君の机の上は鉛筆が何處、イ

ンクスタンドが何處に、毎日一寸一厘も違はず整理されてゐる。机の抽斗の中に收められてゐる、紙類の整頓も同様であつた。而かも此細心の整理慾は讀了後の、新聞紙にまで及んでゐた。ページ數の多いタイムスなきに至つては、埋高く積重ねられた横面が、名工の削つた木のように、眞直に直線を描いてゐる。其線が亂れるを、君自身で能く整理されたものであつた。

君は又青年時代より他人の往復文書なき、能く保存につこめた。御蔭で今度の傳記の資料も相當其中から見出す便宜を得たのは仕合せであつた。

君は公用を私用を問はず、苟も返事を要すべき書面に對しては、出来るだけ早く決裁して適當の返書を出すべく、常に細心の注意を怠らなかつた。又旅行中なき之れと思ふ人達や友達なきに能く繪葉書短信を認めた。大正二年の世界一周の時なき、到る處で盛に各方面に繪葉書を出した事は大評判であつた。

外に出ては豪膽山を呑むの概を示した君にして、以上のやうな色々の細心振りが、其内面的に潜んで居たこと云ふ事は、恐らく一般の想像しなかつた事であらうと思ふのである。

社員、喜多社長を隨行さす

大正六年君が御兩親を奉侍して支那旅行に出掛けたとき、M社員に隨行を命じた。M社員は棉花の學究的研究者で、相當造詣が深かつたが、未だ支那に行つた事がなかつたので、實際の支那を見せて啓發して遣らうと云ふ

思ひ遣りから、特に隨行を命じたのであつた。然るにM社員は支那事情に暗いので、世事に馴れないので、上海着後兎角間諜々々の體であつた。支那旅行には數度の經驗で萬事吞み込んで居た社長の事であるから、不馴れのM社員の手を煩はすより、自分自身始末する方が早く埒が明くので、自身の事は勿論御兩親の御世話萬端、M社員抜きにテキパキこやるので、M社員は殆ど手を拱した儘で、一ヶ月の支那旅行を終つた云ふ。之を聞いた同僚が社長の歸來を待つて、M社員の隨行振りを伺つて見るに、社長は即座に「丸で僕がM社員の隨行仰付かつた姿だつたよ」と何々大笑されたのであつた。

ホウカイ節が畫材となる

明治三十三年一月孟買在留の日本人即ち

日本領事館——野間領事、金満書記生

三井物産——間島、曾根、川畑、古郡、小牧、渡邊、市川の諸氏

日本郵船——楠本、高柳、石川、有地の諸氏

正金銀行——松尾、高道、宮川、横島、三木、西卷の諸氏

紡績聯合會——庄司氏

日本綿花——喜多氏

相謀り、相互間の親睦を圖る目的で「椰子の枯葉」と題する文藝趣味の同人雜誌を發行した。其編輯主任が現



東洋紡績副社長庄司乙吉氏であつた。同三月に三月號を發行して居るが、其題號が三井の曾根氏の書で其表紙繪は三井の川畑氏（號春翠）が書いて居る。椰子の葉に櫻花と梅花とをあいしらつたものだが、それが君が明治三十一年の春に作つたホウカイ節、

『梅もなし、ハ、ハ、ハ、櫻も咲かない孟買に、椰子の枯葉を眺めつゝ、サ、ホウカイ、三年の春をばマゴ、ミチヨイ々々』

の歌意から取つたとは如何にも面白いではないか。

戎さんとの奇縁

日露戰役後、日本綿絲の支那輸出は激増した。殊に雜牌二十手と稱する格落品が、支那奥地へ大に輸出の途が

開かれた。君が主として此産婆役を勤めた事は、傳記に書いた通りである。此雜牌の中で光つて居たのが岸和田紡の「戎」さんであつた。四川省や雲南、貴州の山奥までも行き渡つた。君は此事を大に痛快がつて居たが或日君は

にこくく支那の奥地を戎さん

釣るはこいかや機織娘

ミ一句やつたさやらで、之れに對し一友人が

體軀堂々布袋然 童顏豐頰愛嬌富

健啖凌駕相撲取 飲如長鯨吸百川

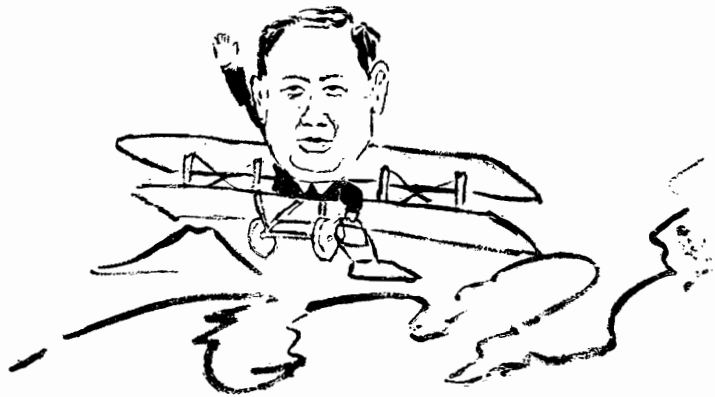
便々肚裏膽與智 奇策縱橫壓綿界

化黄紅戎眞財神 這個辣腕今奈翁

狂詩を以て之れに和し、君の微笑を博した云ふことである。

君は大正十四年末、故あつて辻紡績を我社に引受け經營に當つたが、同社の商標は「福福」を稱し、戎さんミビリケンさんのニコく姿であることは、能くく戎さんミの縁故者ではあるまいか。

更らに奇縁なこには、斯くも戎さんに好意を持つて居た君に對し、戎さんに縁の深い岸和田寺田家の、遠縁に當る同姓の人から、我社の大缺損當時、意外にも告訴を受くるに至つた事である。



社會の矛盾ミ皮肉ミを呪はざるを得んではないか。

飛行機の綽名

明治三十八年米棉の雨霽問題、陸揚荷捌問題其他運賃問題等のこで、當時バシフヒック、メール會社のエジエントをしてゐた W. W. Campbell 氏ミ屢々折衝した事があつた。利害の一致しない立場から勢ひ激論に亘る事も珍らしくなかつた。兩々相持して譲らざる内にも君の主張は理路井然として而かも熱意が籠り、眞劍の態度を持して居つた事は、いたくキャンベル氏の心線を衝いて、敵ながらも天晴れの戦士であるミ感ぜしめた。又君にしても相當話せる紳士であるワイミの感を抱いた事から、識らずくの間相互間に友情が芽生へて來たこは面白いではないか。言はず喧嘩が取持つ縁かいなミ謂ふこでもあらうか。夫れ以來キャンベル氏が横濱に移り住んだ後も、永く兩者の間に親交を結んだのであつた。そして君は上京のひまくには、チヨイく同氏を訪問して歡談に耽つたのであつた。君の東上が隨分

頻繁であり而かも神出鬼没の活動振を續けるので、キャンベル氏は君に綽名するに「フライイング、マシン」に稱して居つたのであつた。

眠りながら物を視る

母出て巴里の大路に風薫る。大正八年五月上旬の或日曜日のこと。君は奥村秘書に向つて、「フウウンテンブルー」へ行つて見よう云ひ出した。

其頃の巴里は、大戦の疲れに、ホット、一息付いた許りで、まだん、以前の豊艶な姿に復興していなかった。毒藥のような感じのするサツカリ、角砂糖の代用を平氣で勉めていた云ふ、今から思へば嘘のやうな戦時のグロ、振りが、残つてゐた時だから、街々には落付きのない淋れが流れ、一流の「リュド・ラ・ベイ」にすら、日曜日は云へ人影もない空虚が漂ふてゐた。其「リュド・ラ・ベイ」を眼下に睥睨して、ナポレオン塔が重々しく立つてゐる。「プラスヴァンドーム」の反対側に、平和會議日本事務所があつた。

其日の午後二時頃、此事務所から、「フウウンテン、ブルー」へ自動車飛ばした。

長い戦の憂鬱を、壁の煤けた色に見せてはゐるものゝ、底光りをする均整の採れた、街體美にフランス特有の審美觀を表現する「プラスコンコード」には、五月の晴れ切つた光線が擴がつてゐた。コバルト色の大空が、磨きかけたコンクリート路に映つてゐるやうだ。君と奥村秘書を乗せた「デムラー」の「リムジン」は、「リュリ

ゾク」から、この「プラス」を馳け廻つてゐるのだつた。

二ヶ月云ふもの、殆どホテルを出ないで、平和會議の事務に、煙ほつてゐた人に取つて、此ドライブは何も云ふ歡喜であつたであらう！

君を乗せた「デムラー」は「エトワール」から「オートイユ」に出て、「セイヌ」の河畔を走つて、自然美の郊外に移つたのであつた。

麗らかな春の陽氣に「デムラー」の微動に酔ふて、長い間の平和會議に疲れた身を、ウツラ、ミ例の駢聲をあけつゝ、君はいさ心地好きそうに首を上下に振動し始めたのであつた。

數分間此状態が續けられたのち、突然君の口から大聲に叫ばれた、

「君ア、翠の丘の上に塔が見えるよ、素敵ではないか」

奥村秘書がハット、氣が付いて向ふを見るに、「フウウンテンブルー」には程遠くない森の丘の上に、春に相應はしい美しい塔が首を出して居るではないか。

此時君は猶瞼を閉ぢたまゝ、ウツラ、やつて居り、ア、森の塔をいつ眼をすへて見たか、そんな様子の少しも無いのに、さても不可思議な君の眼！

眠りながら人の話を聽いて居る君は、餘りにも有名である。だが眠りながら物を視る君の頭の、微妙な構成こそ、眞に驚異に値ひするではあるまいか？（奥村正太郎氏寄）

生酔ひの本性を憐む

故喜多社長が棉花の常務時代の明治四十二、三年の五月頃のこと、當時支那各地巡視の途次、漢口へ着かれた一夕、支店長始め在勤社員を晚餐に招かれた席上當時年少血氣の若輩の私は「正直は心の奥を酒で言ひ」テ、川柳に倣つた譯でもないが、平素職責及給與の點に付多少不満を感じて居つた事を不遠慮にも、其席上酒氣に任せて管を卷いたことがあつた。處が其翌早朝私の勤務せる工場へ單身お越しになり、昨夜は大分氣焰を聞かされたが、自分も少し酔つて居た加減か、充分に聞取れなかつたから、今朝改めて素面で聞かうぢやないか云はれたのは、左らでだに前夜の非禮を自覺反省の折柄にて、今更乍ら赤面汗顔怒縮したのであつた。が一面酒に遁れて非禮のみ詫ぶるも男らしからず、厚顔乍ら前夜の事柄を繰返へしたら、首肯して居られた、何れは叱責を受くるものゝ竊かに覺悟して居つたが、其後何の沙汰もなく時日は経過し、人の噂も七十五日も過ぎし頃意外にも私の希望を悉く容認された吉報に接し、唯之れ感謝と感銘の外はなかつた。一若輩の妄言に對し些かの咎めもないどころか却つて尤も認められた事は何等感情の支配なく、公平無私に善處された其海の如き宏量と、部下愛撫の仁心とは、故社長の偉大なる人格の反映として、今尙感銘忘れ能はざる處のものである。(梅原徳三郎氏寄)

目刺で御飯七杯

大正十五年の秋といへば、武漢の政情は最高顧問ボロディンを中心とした所謂共産主義政治の最高潮の時代であり、〇〇工會〇〇組合は雨後の筍のやうに簇出して、爭議は隨所に起り共産恐怖時代を現出した。

當時支店の婦人小供は時局不安の爲め己に日本租界住宅に自炊籠城し、男子は事務所樓上に男世帯の生活で、炊事、風呂、石炭運搬、食料品買出等、各自分擔してドウ、ヤ、命は繋いでゐる様なものゝ、洋式竈の御飯焚には誰も經驗なく、一度こして満足な御飯は出來ず、大概が生煮か黒焦けで一汁一菜と云ふ始末。こうした中に社長が久振りに來漢され、吾々を食事と共にされることになつたが、俄仕立のコックでは、一同非常に恐縮して、その日はせめてもの御馳走として残して置いた、日本到來のメ、ザ、シを唯一の珍味として、例の黒焦御飯を一同恐るゝ御相伴して居るに、社長は案外平氣なもので、こうして皆と一緒に食べるに仲々旨い、なごご御世辭を言はれながら、二杯三杯、而かも男の給仕は格好が悪いから、勝手に食べる方がよいなきいはれ、御自分につがれて四杯五杯ト、ウ、ウ、七杯まで食べられ、一同は只社長の健啖と平民主義に驚くのみで、最初の恐縮はさへや、思遣りのある情深い好い社長さんとして、益々敬慕の念を強めたのである。(栗原富夫氏寄)

斯心ありて事業は育つ

大正十二年日華製油の社長に就任されて間もない時の事である。當時若松工場長をして居た自分を下關の大吉に招致されて自分を激励し、我社の面目一新のために一身を賭してやれ頼む、と懇請せられた場面は、今も尙耳に残つて居る。其時示された巻紙に書かれた改革方針の要點は次ぎの通り、

- 一、生産能率を増加すること
- 二、工費を安くすること
- 三、諸掛を軽減すること
- 四、工場内外の運搬人夫の悪習慣を打破し請負率を半減すること

社長の腹では、前記各項は若松工場を生かすに必要缺ぐべからざることだから、如何なる犠牲を拂ふてもやれといふことで、そこで私共は敢然これに當ることになった。第一項の問題は一年後に解決し讃詞を頂いたが、第二項の問題は中々困難で、これが達成には數年を要し、故社長をイラ／＼させたことは誠に慚愧に堪へない。第三、四項は主として人事關係だけに中々難問題で或は多少流血の慘を見ることを覺悟で、度胸をきめてやつたところ、幸に作業も休止すること無く一週間内に無事解決を告げ禍根を絶滅し得たことは今考へても愉快に堪へぬ。後日社長は「あの時あんな命令はしたが多少心配したよ、御蔭で無事解決して安心した」と述懐された。

故社長は事業を經營するに、事業が不振の場合はその禍根が奈邊にあるか、それを精査し指摘されるのが非常に早かつた。而して事業の向上改良の標的を定めて、これに部下を向はされた様に思ふ。又人間味はタツブリで「御蔭で」とか「頼む」といふ言葉、それは簡単な言葉だが、心の底から出る響で、社長の前には一身を捨て、奮進努力せねばならぬといふ氣持にさゝられた。(中森延一氏寄)

斃れて後止む

晩年故社長の健康勝れず、時々靜養を勧告するものがあるが、實業家も商戰場裡に馳驅する以上、軍人と同様、斃れて後止むの氣概が無くてはならぬ。殊に我社の現状と當面の國難を顧慮するに、一身の苦樂なき意に介する場合でないに容易に之を容れず、逝去される前日迄、社務を見られたのであつた。實に十八歳より五十六歳に到る三十有九年間徹頭徹尾努力奮闘の化神であつたこと云ひ得やう。逝ける社長も自分の主義を完ふされて最後まで戦はれたのであるから、恐らく御遺憾はなかつたことであらう。(中井榮三郎氏寄)

席を譲つて立ちん坊

五年程以前、日清紡績村田由藏氏を松竹座見物に案内されたことがあつた。其時僕も御相伴としてついて行つた。生憎空いたシートが二つしかなかつた。無論僕が立たうとした。處が故社長曰く、今日は己れが主人側ぢや

上下の別を彼是云ふべき限でない、當然己れが立つべきだに、頑として聞入れず、二人に席を與へ故人は定席が出来るまで立ちん坊をやられたのには、全く恐縮した。故人が客を厚遇された眞情は、概ね此類であつたから、一度其驚咳に接した人は、其知遇に感じ、交情長く逾らなかつた所以である。(中井榮三郎氏寄)

我身を抓つて人の痛さを知る

故社長は自分の今日あるは幼青年時代より相當人の世話になつた御蔭だに云ふ感恩の念が、強かつたので、世間の有爲の青年は出来るだけ世話したいとの御考へで、學生の養成については非常に同情を以て親切にされたのであつた。中には一面識も無い人から、手紙又は本人自身來訪して援助の依頼に接する場合、多忙の中にも本人に面接して人物の考察をされ、身元其他を調査の上、見込みありと推測された者には學費を給與し、援助されたのであつた。卒業後其學生に對しては何等束縛がましい事をせず、自由行動に委せた。若し何れへか就職希望者あれば夫々紹介の勞を採つて熱心と親切を以て最後まで世話を見られた。誠に立派な御人格で、實に感激敬慕の外はなかつた。(木下武夫氏寄)

風呂焚の役を勤む

これは君が敢て物すきにやつたことではない。部下愛撫のゆかしい心持の發露であつて、眞に涙のにじむ話で



ある。

時は大正二年の初秋、君が渡米して米國南部棉産地フォートウォース市に於ける我社々宅に滞在中の事である。米棉季節に入つて社員一同眼の廻る忙しさ、夜業は毎夜十時乃至十一時頃迄續くのが普通であつた。

君は夕食後一人ほつちの淋しさを、社宅の一室に送るのであつた。部下を愛するの敦き君は、事務所に夜業を勤んで居る部下の身の上に、情けの思ひを馳せずにはゐられなかつた。

君は恰かも戀人や愛こしい家族でも待つかのやうに、疲れた部下に一風呂浴びさせて、一日の熱塵を洗はせ、すがすがしい心持にしてやりたいと許り、君は部下の帰宅頃を見計つては、自ら

湯を立て、一同の歸りを待たせ、心から其勞苦を感ずるに努むるの例であつた。部下は此勿體ない君の親切に全く感泣の外はなかつたのである。

君は實に斯の如き人情味たつぷりの大将であつたのである。數百の麾下が君を慈親の如く敬慕し、君の統率下に水火を辭せず奮闘に努めたことは蓋し偶然ではないのである。

眞先に田中家へ年頭の禮

世人往々にして其身榮達の後は昔の恩誼を忘れ、或は忘れぬ迄も其謝恩の念が薄らぐものであるが故喜多社長には左様な薄情な行ひは無く、以前多少たり共世話になつた人々へは、機會有る毎に出来るだけ、恩報しをなされました。殊に故田中社長に對しては謝恩の御心持が非常に深くあられた様で、故田中社長の御寫眞を書齋に掲げて其恩徳をしのばれ、又毎年元旦には必ず眞先に田中家へ年賀の禮に赴かれ、夫れから親戚知己へ廻禮されるのが常で、一度も缺かされた事がありませんでした。其の度毎に吾々は感激に打たれたものでした。(木下武夫氏寄)

社員家族はドウして居る?

昭和六年九月漢口から賜暇歸朝した私は、挨拶の爲め本社々長室に罷出で、社長に只今歸りました。私は一禮した。社長は「こやかにドウダの一言だつた。」

私は六十年來の楊子江大洪水の災害状態だ。早合點して一寸切り出した時に、

社長は「イヤ、水害の状況でない、皆んなの社員が如何して居るか」即ち社員家族の健康状態や食物不自由な地にあつての給與状態を第一に心配して居られた模様で、次から次へ「泰安紡や日華製油の社員家族の健康等、ハロ、御尋ねになつて、それについて自分は見たま、聞いたま、御報告した。其の間に三社の損害状態或は商内状態の話には不思議に一寸も觸れず、只々社員家族の衛生方面病人はないか、ド、程尋ねられた。

即ち之が幾百の社員を御して行かれる社長の社長たる處で、世の常の平凡な人なれば、第一に財産状態が話題になつたのであらう。自分は歸つてからその部下が身を捧けて心服して行く所以は此處だ。な。思つた。(中川清治氏寄)

忙中、社員家族を見舞ふ

故人が如何にその部下に對して温き人情味を持つて居られたかを物語る實例は全く枚擧に遑がない。先年私の幼児が重態に陥り思案に暮れて居る時に、偶々その事が故人の御耳に入るなり、身體二つあつても尙足りない御忙しい中を、直に東京の町外れの茅屋に態々部下の子供の病氣を御見舞下された事數回に及び、唯々御親切に感激の涙を禁ずる事が出来ませんでした。

又色々御迷惑の事を御願致しましてもいやな顔一つせず、常に部下の爲めに勞をこる事をいやがられなかつた。

昨年未御上京の節、一夕態々御呼び下さいまして、何彼ミ將來の事に關し、心からなる御指導を頂き感激に充て御別れ致しましたのでしたが、夫れが最後の御別れにならうとは、夢にも想はなかつた事です。

故人の部下に對する溢るゝ如き仁愛ミ温情、それは全く私共部下たりしものゝ終生忘るゝ事の出来ない思出であります。(原田耕二氏寄)

偽宗教信者になる氣になれないよ

私は三十年近くも氏の知遇を受け、今も其徳を慕つてゐる一人である。氏は嘗て私に天満宮を信仰してゐるに申され、其の時私は佛教に興味を持つて居たので愚感を述べ、君の如き實業界に盡瘁せらるゝ活動家は、大乘佛教の教たる眞宗經義を研究せられたら、氏も氏に接する人々も、非常に幸福かと思ふに御勧めしたところ、氏は即座に答へて、「今の錚々たる宗教信者ミ稱する人々が兎角自己財産の利殖にのみ汲々たる淺ましい姿を見ては自分は偽佛教信者になる氣になれないよ、」と否定された。そこで私は何宗の信者でもほんまうに其の教の眞髓を體得せず、唯自己に都合の好い様にばかり解釋してゐる人が多いので困まる、然し淨土眞宗の開祖親鸞聖人は、大乘佛教の體験者で、百年後の今日益々盛に法義興隆人類に幸福を與へてゐる實に偉大な教である。一度我々が靜かに自己反省するべき、實際人生は不可思議なものである事を知る故に、此の解決をなさねば安心して生きてゐられない筈だ。然し此の教を聞いて正信すれば、自己生存の使命も、はつきりし安心して活動出來得るのである

ミ御話し申上げましたら、何れ一度ゆるゝ聞かうミ申され、遂に其機を得なかつたが、氏に就て深く考へさせられたことは、氏の如き偉大なる人格ミ包容力は、餘程確固たる信念なくては得られないであらう。氏は氏ミして動かざる一種の宗教信念に燃えてゐられたに相違ない。私は氏に眞宗經義を御勧めした時、既に氏の内省には凡夫の善惡を超越した信念に精進してゐられた事ミ堅く信するのである、此の尊い信念は、氏が残された事業や人々に依りて、今後必ず何物かを示現するであらう。今や我國は外交に、思想に、經濟に、又なき國難に直面したるの時、氏の尊い姿を追慕、憾みは綿々ミして盡きないのである。(梶井宅次氏寄)

故社長の口説き上手

大正三年甲谷陀に去つた僕は、孟買支店から故社長を同地で御迎ひして、印度内地の御旅行に隨行すべしとの電命を受けた。先づ蘭貢を視察して歸甲し、それより北印度を経て唐地に出で、船で孟買へ歸る旅程であつたが、「チャンドシー」へ着くミ、社長は俄かに旅程を變更して、「デリー」から「ラジプタナ」を通つて「カチャワル」を視察しやうミ云ひ出された。

「カチャワル」は、ドレラ棉ミマチャ棉の重要な産地ではあるが、當時まだドレラ棉は日本へは賣れず、従つて餘り日本人が視察したことはなく、僕等は「カチャワル」は炎熱燒くが如く、何年かに一度は必ず飢饉に襲はるゝ、半ば不毛の土地であると思ふて居たので、社長の旅程變更には聊か驚かされた。汽車が「メーサナ」より

南下して「ギラムガム」、「ラクタル」、「ワドワン」に進んで行く。沿道は一望なき棉畑である。數年間内地出張員として棉産地の旅行に馴れて居た僕も、斯程に廣漠たる棉畑を鐵道沿線に見たことが無かつた、故社長は吹き込む熱風を意に介せぬものゝ如く、車窓から此景色を眺めて居られたが、「君「カチャワル」は思ふたよりも大變好い處だね、丁度米國の大農式棉産地に彷彿たる壯觀だね」頻りに賞讃し、手提カバンの中から「テキサス」の棉畑で撮影された故社長の小照なきを出して僕に示し、米棉耕作の實況なきを説明して下さつて、頗る上機嫌であつた。

「バウナガー」に一泊して歸途に就いたが、汽車が再び此地方を走つて居る時、故社長は「カチャワル」は思ふたよりも豊饒で、棉作には持つてこいの土地だ。暑くはあるが大氣が乾燥して居るので、決して不健康ではない。「バウナガー」のバルチャ氏は、「ワドワン」に近き「ドラングドラ」邊は、肋膜炎や肺結核の療養所として定評ある處だ云ふて居つた、さもあるべきことだよ、ネー君」云はれるので御意のマニ／＼返答して居る。故社長は更に語を繼いで、

「實は今期「ドレラ」の内地買付を始め度いと思ふて、孟買支店と相談して居るのだが、適當な出張員が見當らぬ、孟買支店では君は既に「ベンゴール」に甲谷陀で働き、且旅行で疲れて居るだらうから、暫く休養させ度い云ふて居るのだが、君そう疲れて居ないだらう、特に「カチャワル」は熱いけれども健康地で、棉も非常な豊作だ、初代の出張員として腕を振ふは愉快だらう、獨り合點して居られるので、僕聊か面喰つたが、今更さうも

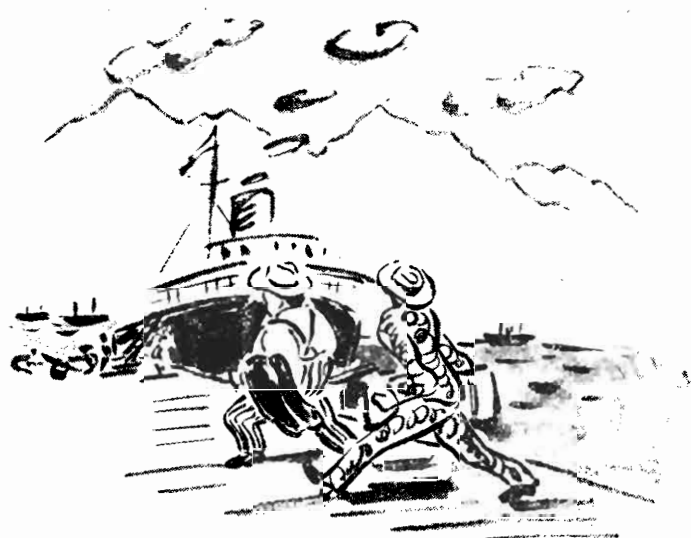
此暑さでは逃げも張れず、故社長の妙な口説き上手に、すっかり魅されて仕舞ひ唯々諸々命に服する外なかつた。

當時を回顧して苦笑を禁じ難いものがある。(木下清次郎氏寄)

動かざる事大盤石の如し

明治四十一年例の上海大缺損の際は、社運風前の燈よりも危ぶなかつた。予は丁度本社在勤中であつたが、重役諸公の疑念不安は監督責任者たる喜多支配人の一身に集中せられ、連日調査と善後策協議の爲め重役室に呼ばれ、自席の暖まる暇もなき其の傍ら、故社長は彼の有名なる三品綿糸買占を敢行して、巨損を一舉に回復せられたるは、良く人の記憶に存する處。當時本社は中の島現本社新築中一時今橋四丁目の日本家屋に在つたが、故社長は重役との協議が済むと、自分の机の在る一般商務課室に入り來つて、ストーブの傍の椅子にぎつかに腰を下ろし、一息休む暇もなく天井をにらみ付けて、三品買占の方策を廻らして居られた。全身の英氣は顔上に迸しり出で、満面朱を注ぎ深く考へて居らるゝ其容相態度、實に微動だも許さざる大磐石の如くであつた。正に三十有二歳の春。今も尙眼に見て居る様である。(青木嘉三郎氏寄)

振ったマラソン振り



私が日華製油下關出張所に勤めて居った頃、喜多社長は大分セメント會社の用事を濟まされ、別府から終列車で門司に着かれた時の事でした。御宿は下關の大吉樓に極めてあつたので、連絡船で渡られるには、唐戸の渡まで残す處僅に三分間しかありませんでした。之を逸するも一時間も待たねばならぬのでした。社長に此事を申上けるに、それは是非今度の連絡船で渡りたい云はれ、早速大きな體をフウフウ息せき切つて、四丁程離れた渡場指してヒタ走りに走られたのでした。恐らく社長としては空前絶後のマラソン振りであつたでせう。其走られる御格好は誠に、いたはしくもあり、又可笑しくもありましたが、幸にヤツミ間に合つて、社長も大満足されました。其後時々御逢ひしては此時の憶出話に、御互に微

苦笑を繰返したのでした。(入江房太郎氏寄)

門出の祝膳に心で泣く

大正七年十二月初め、社長は選ばれて歐洲大戰の巴里媾和會議全權隨員として渡歐される事になりました。隨員決定後出發迄約一週間程の日子より無く、色々準備の爲め全く目の廻る程の忙しさでした。當時社長の無二の親友塚口賸治氏は、病魔に侵され濱寺の御邸宅で御療養中でしたが、御病症は難症の胃癌の事で、社長も非常に心配されて居ましたが、愈々隨員も決定間もなく出發を決まりましたので、出發前に是非共今一度病床を見舞ひ、充分慰めて行き度いこの御思召から、其の繁忙の中を無理に時間を割いて早朝五時自動車で濱寺迄出掛けて行かれました。塚口氏は非常に喜ばれまして、今日は気分も好いからこゝで床上に起き直られ、早朝ながら祝膳迄も用意されて社長を迎へられ、國家の爲め健闘を祈る親友の榮譽ある門出を祝福されるれば、社長は病人自身は知らぬ事だが、何分の難症なれば萬一にも是れが最後の訣れとなるやも不計この御心持もあるので、こもすれば言葉も濡り勝なのを、チツト抑へて努めて快活を装ひ、僕は出来るだけ努力して来るが、貴君は充分の療養をされ、一日も早く、健康を回復され度い、そして今後御互に協力して我綿業界の爲めに大いに奮闘しやうと慰められましたが、側に居た夫人や小生共は塚口氏の御身上を思ひ、社長の御心中を察して暗涙に咽んだのでした。やがて惜しい別れを告げての歸路、自動車の裡で社長は今迄抑へて居た涙をポロポロと止度なく流して居られました。

其後塚口氏は病狀漸次重り、御氣の毒にも翌年一月遂に亡くなりました。巴里で此の悲報に接せられた社長は、もしやミ豫期された事ながら、非常に悲しみ落膽されたこの事でした。其年八月社長は立派に任務を果されて目出度歸朝されましたが、當用を片付るや、直に丹波なる塚口氏墓前に参拜され、今は亡き友の冥福を祈られ、感慨無量の面持で低徊去り得ない御様子を拜し、友情厚き社長の人格に感激しました。(木下武夫氏寄)

すき焼御相伴の受難

故社長が歐洲大戰の平和會議全權西園寺公の隨員として渡歐せられた歸途、孟買に立寄られた。予は同地支店在勤であつたが、孟買の「マラバビル」に在る社宅、彼の印度王妃の宏壯なる別邸のベランダで、故社長ミ中村利三郎支店長、太田猪太郎君及予の四人が牛肉すき焼にて食事を共にした事があつた。『君煮えたぜ喰はんか、喰い給へ』ミ頻りに親切に言はるゝも、肉は焚いても焚いても故社長が半煮の儘サツサミ引上げてしまはれるので追付かず、結局予等三人は半煮肉の數片ミ野菜ミで食事を濟ませた。肉は水牛の肉で三、四百匁もあつたと思はれたが、大部分故社長がベロリ、ミやられたのだ、故社長の健啖は誰れしも知る處で、一緒にすき焼をやればいつも菜食方針で臨む覺悟が必要であつた。(青木嘉三郎氏寄)

鬱蒼たる並木の由來

武漢支那人紡績の發展には喜多社長の力も少なくない。その中目に見えて残つて居るのは、第一紡績ミ裕華紡績の「バンド」の並木ミ、原動工場の外側を初め、工場四周の並木である。暑い漢口で工場經營の経験がない支那人は、並木一本植へずに夏は工場を休むものに極めて居つたが、これではいかん、並木を植へたら温度も低く、職工の能率も上り、甘く行けば夏期も休業せずすむからミ、社長が忠告されたら、そうですかミ早速植へた。

ブラタナスや、アカシヤが星霜十餘年、現今では鬱蒼ミ繁茂してゐる。これを見る度に社長の面目が躍如として眼前に去來する。(友永藤三郎氏寄)

支那名士の御兩親招待

はつきり記憶はしてないが、大正六年前後頃の事だつたか、喜多社長が御兩親を御連になつて來漢された事がある。

日本商界の巨星で有る大人が、御兩親の御伴して旅行されるのは、喜多社長が初めて有るミ、支那人は其の孝養の厚きと感じ、智徳圓滿實に立派な人だミ、支那人間の評判は殊に甚だしかつた。

そして其の當時の第一紡績の總理李紫雲氏は、わざ／＼私宅で社長御兩親初め御一行を招待して、人間ミしては成功の曉には喜多社長の如くに有る可きだミ挨拶した事が有る。

對支問題と其意見

故人は綿業に次いで支那問題では有名な位い熱心に我邦と支那問題の關係を研究し、其有効適切なる對策の樹立に努力された。

故人が初めて支那を視察されたのは明治卅五年、氏が廿六才の夏印度よりの歸途中、翌卅六年上海に出張して同支店を開設し、續いて卅七年には漢口支店を、四十四年には支那各地を視察して香港、青島、天津各出張所を、大正二年に大連支店を開設し大いに對支貿易の振興を策したのであつた。

尙又大正六年天津に於ける裕元紡績を合辦經營し、七年には上海の日華紡織株式會社の創立に従事し、又東亞興業株式會社創立に参加し、中華企業株式會社、中日實業株式會社、中華滙業銀行、次で日華製油株式會社、東華紡績株式會社、東亞製麻株式會社等に關與し、大正十三年には漢口に泰安紡績株式會社を開設した。如斯して獨り日本綿花の各支店のみならず、各種の在支企業に參劃投資し、經濟上より着々其抱負實現を期するに同時に曩に大正七年巴里講和會議に全權隨員として渡歐し、支那問題の外交政治上の世界的重大意義を覺知した等から我國の對支政策を研究するに至り、大正九年日華實業協會創立以來評議員常任幹事として劃策し、昭和二年南京

漢口兩事件起るや驟然奮起して東西の實業團體を糾合し對支商權擁護聯盟を組織し、專務常任實行委員となつて奔走し、翌三年には大阪に日華經濟協會の創設に當り濟南事件後の對支外交に貢獻し、昭和六年の滿洲事變には大阪對支經濟聯盟の組織を斡旋し幹事として努力された。

此間幾回もなく支那各地を視察し絶えず各方面の材料を蒐集して熱心に研究を重ね、問題ある毎に實業側の對策樹立に外務當局の鞭撻に盡瘁された次第である。

二

惟ふに大正八年の巴里媾和會議は實に近代支那外交の革命的一大轉機をなせるもので、支那は從來の消極守勢の態度を一擲し、大戰後の自由的新思潮に乗じて敢然として奮起した。支那全權中陸徵祥、施肇基、魏宸組の三氏は比較的穩健であつたが當時三十才そこ／＼新進氣鋭の顧維鈞、王正廷兩氏の華々しい活躍は全世界の耳目を聳動せしめ支那問題は忽ち時代的色彩華やかなる國際的重要問題となつた。同會議で支那側の主張した

一、二十一箇條々約廢棄

一、山東直接還附

の二大案は我國の國際的地位に其公正且つ條理整然たる主張の爲に終に貫徹されなかつたけれども、而も二十一箇條廢棄に山東還附は支那國內の猛烈なる輿論となり、同時に列強殊に米國の熱心なる同情に支持を得るに

至り、巴里會議後十三年昭和六年の滿洲事變に至るまでの日本の對支外交を全く消極退嬰受難屈辱に追込んで了つた最初の喊聲であつた。恐らく故人が單に經濟的見地からだけでなく、國家的外交的な方面から支那問題の重要性を痛感して熱心なる其研究者、先覺者となり、國論の喚起指導に努め更に其對策實現に奔走されるやうになつたのも、此會議が一轉機をなしたのではないかと思はれる所以である。

三

事實支那國內に於ける輿論は澎湃として勃興し、大正八年五月九日の國耻紀念日には有名な北京の排日大デモンストレーションが起り親日派(段派)の要人數氏は群衆の襲撃に傷き段内閣は瓦解し、排日運動全國に滿蔓するに至り、巴里の全權も勢の趣く處終に調印保留を執行した。同時に又ウィルソン氏の哲人的理想が全世界を風靡して居た時ではあり、米國はこの支那の勝手放題な要求を其儘覺醒せる新興氣運だとして同情支持し或は煽動さへ敢てし、兼て日本の鬱勃たる興隆を牽制せんを試み、英國初め他の列強も大戰中に失つた支那の經濟的地盤を日本より奪回せんこの野望に米國に附隨せざるを得なかつた實情から米國の政策に協調するに至り、支那問題を中心として日本は茲に國際的孤立に陥つて了ひ、國內に於てさへ米國の假面たる人道主義、自由主義、國際主義に心酔し、デモクラシー謳歌と共に頻りに時代順應、大勢順應を説く人が多くなつた位である。

如斯き景團氣の裡に大正十年米國の招請に依つて斯の華盛頓會議が開かれたのである。會議の主題は軍備縮小

であつたけれども寧ろ其副題たる太平洋問題及極東問題即ち支那問題に於て列國の外交政策は最も露骨に展開された。多年東洋平和の保障となり之に依つて我日本は大戦中英國の爲めに印度東洋の忠實な監視役さへ勤めて來た日英同盟を日米國交緊迫の空氣さへ漲つて居た此時に、英國は廢棄を宣明して米國に媚び日本を裏切つた……後年英國が廣東漢口事件に苦境に陥つて日本へ協調を求めたときいかな穩健の幣原外相も此時許りは此人好しになれなかつた、自主外交の名の上に英國の提議を體良く拒絶したのであつたが、蓋し此時の恨みを復したのだから……免に角會議の總委員會は軍縮の十九回に對し太平洋及極東即ち支那問題の夫れは三十一回も開かれ、支那の十箇條提案からルート四原則となり、終に翌十一年二月有名なる「支那に關する九ヶ國條約」の成立を見るに至つた日支兩國の外に英米佛伊白和葡の七ヶ國で條約は九箇條から成つて居るが其要點は、

(一) 支那の主權獨立並に其領土的及び行政的保全の尊重援助

(二) 支那の門戶開放機會均等主義と特權排除

にあり……滿洲事變にこの九ヶ國條約が喧ましく言はれる所以である……更に同時に、

(A) 支那の關稅に關する條約

が締結され、一九二五年北京特別關稅會議を豫約し後年如彼な面倒な關稅問題を惹起する端緒となつた。更に又

(B) 支那に於ける治外法權に關する決議

が成立し、是又後年如彼の重大問題となるに至つた。此外にも外國郵便局、無線電信、鐵道統一、軍隊の削減、現存容認、東支鐵道、諮議院等の諸決議が作された。

要するに支那は巴里會議に於て初めて支那問題を國際的に上演したが、夫は華々しいものではあつたが、實果は得られなかつた、而るに華盛頓會議に於ては支那の法外な要求が主義としては殆ど皆採擇せられたのみならず前述幾多の實質的要求が皆其第一階梯を築造された、加之米英兩國の日本制壓が露骨に議定された。我國外交の慘敗であり、以來十餘年我對支外交の彼の悲憤に堪えざる不振は茲に基礎付けられたのである。

四

曩に大正九年日華實業協會成り、故人が其評議員常任幹事として對支外交の爲めに強硬政策を提けて大いに朝野の間に奔走したのであつた。

山東問題は先づ支那側が巴里會議に提議して容れられなかつたが、當時我國内殊に外務當局の意見が戦後の思想激變に眩惑して即時還付の軟論流行の際でもあつたし、我國は大正九年一月對獨平和條約効力發生し、山東の利權我國に歸すると共に直に其還付並に善後措置の交渉開始を支那に求めたが、支那側は圖に乗つて恣まに廿一箇條廢棄及び山東問題直接交渉反對を唱へ、同時に猛烈なる排日排貨を煽動し、毫も誠意なく我國は恰も駄々子子をなだめる様に度々其反省を促し交渉開始を求めたが、支那は依然として悟らず益々無法な排日を續け、非理

非禮な拒否的回答をなすのみで紊りに國際聯盟提議を策する等暴漫の限りを盡し、遂に十年の華盛頓會議に提案解決を圖つたが英米の直接交渉勸告に會ひ、先づ華府に於て兩國全權間に交渉を重ね十一月協定の成立を見、次で同年十二月北京に於て山東細目協定が成立した。

時代順應論によれば如斯して日本が何の野心もない事を證明し、折角獲得したばかりの山東を惜氣もなく支那に還付したのであるから支那の對日空氣は忽ち緩和し排日排貨も終熄する筈であるが、事實は全く之に反した、支那人は決してそんな甘い人種ではないのである。

五

山東細目協定の成立したのが、十一年十二月で、明けて十二年一月十七日支那の國會は一方的宣言を以て廿一箇條々約無効宣布案を可決し、支那政府は直に之を我國に通告し、旅順大連の還付を要求して逆も物にならぬと思つた山東還付を要求して見た處案外容易く之を還付した。國際的空氣は益々支那に有利であり、日本の對支政策は一步一步退嬰の外なき情勢を看取した支那は、所謂醜を得て蜀を望み忽ち旅大還付を叫ぶに至つたので、何の事はない山東を還したから旅大を求むるに至つたので、前衛が破るれば本陣に迫るのは當然の事で、山東還付の恩に感じて排日を止めるだらうと思ふのは日本人の考へで、支那人は之に反し山東を還へす位だから日本はよく弱つてゐる日本を與し易しと見て圖に乗つて來るのである。故人が山東還付に反對したのは茲を洞察して

居た爲めである。無論我國はその要求を拒絶した、茲に於て支那側の輿論は日本が二十一箇條に籍口して旅大租借期を延期するは支那の主權を侵害するものなりと、偶々直隸、奉天兩派間に勢力争ひあり、直隸派は敵本主義的に排日を利用し排日を好餌とする奸商と相俟つて所謂救國運動と稱する排日示威運動が行はれ、排外思想、利權回收運動と結んで、遂に經濟絶交のテロ手段によつて猛烈なる全國的日貨排斥運動の火の手をあげたのであつた、京津地方、上海地方、武漢地方何れも従前に比して排日手段巧妙を極めたが就中漢口方面の遣り口は當時漢口の商工會議所報告文書の一部に記せる如く(イ)所謂經濟絶交の認識が秩序整然として完全に組織されて居る事(ロ)従前は日貨を買はざる同盟であつたが今度は同時に賣らざる同盟でもある事(ハ)従前は學生が主動者であつたのが今度は總商會と一般民が参加し然も熱烈に運動して居る事(ニ)經濟絶交から更に彼等の所謂國民絶交に高潮した事(ホ)排日により利益を受ける支那人が多くなつた事は排日運動を助長し又將來此運動に深い根柢を與へた事(ヘ)今回の排日が學生商民一般人民の一致的運動であるのみならず支那官憲は明らかに之を援助獎勵して居た事等で頗る深刻を極めたのであつた。そこで漢口に於ける我社及び我社關係の事業は少なからず迫害を感じたので、故人は時局に痛憤の餘り左の如き書面を日華實業協會々長澁澤子に致して時局の挽回につき最善の努力を乞ふたのであつた。

大正十二年十一月七日

日華實業協會

會長 子爵 澁澤榮一閣下

貴會愈々御隆昌邦家の爲め益々御活躍之段奉欣賀候

日本綿花株式會社
日華製油株式會社

社長 喜多又藏 印

○支那湖北省に於ける排日運動に關する請願

曩に支那各地に頻發せる排日運動は日支共存の基礎を破壊し、遂に國交を危殆に陥れしむこなきやう深憂せし當時、貴會に於ても之れが對策を聲明せられ、我政府を鞭撻し以て國民外交の有力なる警告を與へられたるは、最も機宜の御處置として吾人の大いに感謝措く能はざりし所也、爾來我官憲の努力に支那官民の覺醒により一部排日熱の融和を見るに至り、殊に先般關東地方未曾有の大震災に際しては、世界の同情翕然として我國に集り、支那各地に於ても物資其他の救恤義捐を以て善隣の好意を表示し、排日熱は爲めに一轉機を見るべしと私かに樂觀を以て囑望せしに不拘惜しむべし獨り武漢の地に於ける「湖北全省商界後援會」の組織的排日運動は、益々其旗幟鮮明となり排日の色彩を濃厚ならしめ「震災救援」に「排日」は全く分離すべき別箇の問題なりと高唱宣傳するに至り、依然として何等の緩和を見ざるのみか、却つて惡化の兆候を實現せり、日支

に經濟の發展を阻害するは謂ふを俟たず、我等彼地に支店を有し、多額の資本を固定せしめ、幾多の機關を充實設備せる商人によりては實に堪へ難き痛撃にして、直接間接に享くる被害の大なる前途寒心に堪へざる所也。抑々過般、支那に於て排日熱發生以來長江一帶に於ける我同胞は或は陳情委員を特派して歸朝上京せしめ、具さに當路者に稟議し、又漢口に於ては帝國總領事に請願して支那官憲に交渉の勞を煩はし、更に北京に我公使を訪ふて排日實情を陳述する等、百方手を盡して之が解決に苦慮努力せしこ再三に止まらず、肅督軍の如き是我當該官憲に約するに

近く排日取締を布告し、警察署長をして運搬荷物の差押取締の訓令を發せしめ、又總商會長をして平和手段に出づる旨を勸告する等

を明言せしに不拘何等實行の跡を見ず後援會の跋扈は益々其銳鋒を逞ふるに至り、我「日本綿花會社漢口支店」に於ては

(イ) 後援會の監視嚴重を極め支那棉花商との接近取引を妨害する爲め原料棉花の買附をして不能ならしめ事實上營業を阻止し居れり

(ロ) 支店附屬の漢陽棉花壓搾工場にては湖北省内地に於ける原產地買附品の陸揚に對しても妨害至らざるなく我雇傭支那人亦後援會の脅迫を恐れ就役せしむる能はず

(ハ) 輸入綿糸布商内に於ても排日團調査員の監視熾烈にて日本品荷捌不能爲めに華客は支那商又は外國商

に走りて取引し邦商としての營業を持續する能はず

又我「日華製油會社漢口支店」に於ては添附別紙の如き迫害を受け操業上甚大なる打撃を蒙り居れり

以上は單に我社支店に於ける一例に過ぎず、之を數へ來らば殆んご枚擧に遑あらざる所にして近着所報によれば近く又第三期排日煽動策として湖北全省外交協會成立大會を舉行し經濟絶交擴大を叫び

- (一) 經濟絶交の範圍を可及的に擴大すること
- (二) 絶對秘密裡に經濟絶交の方法を改むること
- (三) 違反者に對する處置は嚴重を加ふることに
- (四) 既存の貨物に對しては罰金の方法は用ひず
- (五) 當該官憲に督促し外交行政に注意せしむ
- (六) 本會は元より是れ對日外交團體にして政治問題に干涉するに非ず
- (七) 全省對日經濟特別機關を組織すること
- (八) 全國民外交協會を發起すること

の八箇條を議決せしものゝ如く、而も支那官憲の無誠意なる取締は暗に排日團の行動を默認、是認せるが如きの觀を呈し、現状を以て推移せんか多年築き上げたる我國中部支那に於ける地盤を喪失し、英、米、其他に好餌を與ふるの憂目を見るに至らんを恐る、若し地位を換へ排日に代ふるに排英、排米を以てせんか、英米は必

然是れ條約の破棄なりと怒號し、重大問題として取扱ひ一刻も猶豫せざるは暗易き道理にして、我外務省も決して等閑に附し居るに非ざるならんことを察するも、奈何せん、從來の態度に徴すれば隔靴搔痒の感あるは深く恨事とする所也

夫れ帝國の外交は國是の大方針より畫策せらるゝものならば吾等國民は國家の爲め或程度の犠牲を甘受せざる可からざるも、支那人及び歐米人のみ自由に濶歩して有利に取引をなし得るに反し、獨り邦商のみ迫害を受け商賣の束縛を享くるに至りては日支親善の情誼に背くものこと謂はざる可からず。我外務省も之が根本問題接觸し其根原を除去し之が緩和の途を考慮するの要あるに非ずや、若し夫れ現状を以て我帝國の國是方針なりせば、吾等亦何をか謂はん只黙して成行に委せんのみ、然れご思ふに漢口方面に於ける排日熱の淵源は利益の打算により生じたる結晶にして煽動者の裏面には支那人紡績業者あるを看取するに難からず、彼の地に於ける支那人紡績は原料棉花と製品糸價との利鞘關係に於て日本紡績業者の夫れよりも遙かに優逸の地歩を占め居り、其豊富なる利潤の一部を割きて之を排日團の運動費に供し居るは最早隠れなき事實にして、今日の排日團は自己の糧食を斷たるゝ杞憂なき故現状の儘推移せんか排日の緩和は當分見込なしと斷言して憚らざる所也、既に然りせば我社の如く多年漢口方面に幾多の設備機關を有するものにありては徒らに成行に放任して隱忍自重するも、前途に何等緩和の光明を見出す能はずせば、場合によりては涙を吞んで我社總ての機關を支那人に讓渡し、店舗を閉鎖するの寧ろ賢策なるを考慮せざるべからず、我社素より渺たる一會社にして未だ鼎の

輕重を論ずるに足らず。雖も他の諸會社亦恐らく同一の運命に到らん。信ず、願はくは若し能ふべくんば、我國運の消長に鑑み又我等邦商の苦境を斟酌せられ、我等をして意を安んじて永遠に營業を繼續し得るの道を講ぜられん事を冀ふて止まざる所以也

茲に非禮を顧みず貴協會の御清鑑を仰ぎ時局挽回に御努力御援助賜り度暴言多謝及請願候也

六

惟ふに排貨は一回毎に實質的に深刻化し普遍化し、且つ長期に亘るに至つたが大正年間の夫は極めて一時的で不買實行は普通一ヶ月位で終熄し、而かも種々の便法で抜道が講ぜられ、其前に見込買付が行はれ其後に補充買付が行はれるので聲勢盛んだが事實我國の貿易には殆ど實害はなかつたし、排日が熄めば夫れでお仕舞であつたが、而も排日より遙かに根本的に永久的に我國の對支貿易を脅かしたものは國貨運動で、關稅増率と相俟ち排日氣運に乗じて紡績會社を主とし各種の事業が支那に勃興して來た事であり、其後我國對支貿易の漸減的不振の基礎は茲に築かれたもの。謂ふべきである。

國產獎勵は地味ではあるが支那に工場が出來、製品が生産されるだけ我國からの輸出は夫れだけ殆ど永久に販路を失ふ事になるので抜本的永久的であり、一時的の排日貨に比して遙に恐るべき事である。この内地工業が度々の關稅増率を楯とし度々の排日貨を鋒として其都度勃興し發達して來た、而かも支那の關稅と國權恢復排外熱

とは今後とも愈々益々其度を加ふべき。こゝ火を賭るよりも瞭かである。關稅が我國の對支輸出を阻止した事は無論で、之は後にも度々詳述するが兎に角さらだに如何に支那と雖も何時迄も粗製品まで外國の供給に仰がねばならぬ譯はなく、漸次經營容易で高級技術を要せざる粗工業の發達し來るべきは自然の趨勢であるのみならず、我國工業の生産費が税金高、物價高、工賃高に依つて急激に増高し來り、勞働問題は益々五月蠅くなり、加之運賃は昂り支那の關稅は増す一方であつたのであるから運賃關稅を要せず低廉なる工賃と、その頃までは柔順なる職工とで樂に安い生産費でやれる支那内地に工場を進出せねばならぬ事は當然過ぎるほご當然な我實業界の進路だつたのである。尤も後年支那の動亂頻發、利權回收、勞働運動惡化等のため支那投資は極めて不安に陥りはしたが、大正時代に於ては前記の進路が取らるべきかは餘りにも當然な事であつたに。而して機敏にして明察ある故人は我國實業界一般が此進路を採用するよりも遙かに早く此の大勢を看取し主張し、實行したのである。

七

故人は既に大正六年には天津の裕元紡績を合辦經營し、翌七年には上海の日華紡織創立に參劃し引續き漢口日華製油、上海の東亞製麻、東華紡績等を起し大正十三年には實に邦人唯一の紡績業としての漢口に泰安紡を創設した。同時に故人はその印度に於けるに等しく支那に於ても進んで内地各地の開發に努力せねばならぬとの意見で、濟南、鄭州等に繰棉荷造工場を設け、又石家莊、老河口より遠く陝西にまで人を派して棉花の買付に従事せ

しめた。更に進んで前國務總理で支那の財神と言はれた梁士詒氏も支那内地に棉花栽培事業を起すべく企畫を進め、其後外交部長王正廷氏も棉花栽培の共營を計り殆ど實行する許まで漕付けながら折悪く起つた排日の爲め中止した事もある。故人は常に斯く言つて居られた。「外國人は居留地では兎も角支那内地に入つて仕事は出来ない、其處に行くに日本人は同文同種で生活程度も簡便であり支那人も親しみ易いから、いくらでも内地に入つて働く事が出来る、此點支那に於ける外國人との競争で我國の明かに有利な特權であるから、大いに其特權を擴大しなければならぬ。又居留地に於てならば場合によつては紡績自身でも棉を買ふ事が出来る、だから一步内地に踏込んで少しでも安く良い棉を仕入れて来て供給する事が大事なお華客である紡績に對する吾等の義務である」其爲め故人は當然支那の内地開放論者で場合に依つては猫額大の租界又は治外法權を交換にでもこの内地の居住營業權を獲得せねばならぬとして、當局並に營業の間に強く主張し來たのであつた。大正時代の所論としては租界や法權に嚙り付く外策のなかつた邦人中に在つては全く出色のものであつた。此問題は後述するが兎に角昭和時代に入つて支那の事情が激變してからでも尙ほ故人は頑として此持論を堅持して居られた。

八

王正廷氏號は儒堂、浙江寧波の人、エール大學に學び博士號を受け夙に國民黨に入つて出色あり、弱冠よく支那最初の國會に衆議院副議長となり、巴里媾和會議の支那全權として一躍世界的花形外交家となり爾後北京政府

に幾度か外交總長に任じ、國務總理署理となり、殊に山東交渉の督辦として我小幡公使との間に流石の難問題を解決した。馮玉祥を擁して北京に國民黨の政府を樹立した事もあり、南京政府になつてから國權恢復の爲めに所謂革命外交を以て如何に華々しく活躍したかは我國人の未だ耳目に新たなる所である。故人は王氏は巴里會議の時以來、特に、相互に非常に敬愛信頼し合ふやうになり、其後實業方面では華豊紡績や棉花栽培其他に協力し、王氏が大正十二年關東大震災後支那人被害調査に來朝した時なご廿一箇條や旅大問題で排日風潮の盛んな時分であつたが故人は彼我朝野の間に斡旋して王氏の使命を圓滑に達成せしむる事に乍蔭大いに努力された事もあり、十四年の北京の北京特別關稅會議にも王氏が支那側の代表委員長だつたので彼我の實際的諒解の爲めに種々盡力せられた。そんな譯で故人が渡支された時は王氏は如何に激務多端な時でも必ず故人と肘を執つて歡談したものである。昭和四年の二月濟南事件から排日問題、關稅問題、通商條約改訂に繫争して日支交渉が既に半歲餘に亘つて解決せず、偶々故人が上海に行かれた晩、支那側代表王正廷氏、日本側芳澤公使が徹夜の大激論に交渉は殆ど全く決裂し王氏等は憤然席を蹴つて物別れとなり、委員達は一眠りした跡でも尙ほ崔君の如き卓を叩いて昂奮して居たのだが、其晩王氏は故人の招待に喜んで出席し極めて愉快に語り且つ飲み——王氏は非常な酒豪である——北京以來のローマンスまで再演するこいふ高興であつた。王氏からも亦故人を招待するなご度々會見したが、夫れは兎に角幸ひ日支交渉は再開され纏て圓滿なる解決を見るに至つたのであるが、二三の新聞紙が殆ど決裂して了つた日支交渉再開の裡面には故人の貢獻せる處尠からざるやに傳へたのも萬更ではないかと思はれる

次第である。王氏が近代支那の革命外交殊に濟南事變後の日支問題の衝に當つたため我國人中には王氏を亂暴無理解な排日家のやうに思つて居る人が多いが、故人は何時でも王氏の事だき極力辯護して居られた、支那最近の國情に於ては政治家は寧ろ輿論の先に立つて之を指導する位でなければ遣つて行けないので、其行動を表面からのみ律するのは氣の毒だ、無論王氏は支那人であるから支那の國權伸長を衷心熱望し其達成に努力するのは當然であるが、同時に又王氏は世界の大勢に通曉し、東洋永遠の平和にも定見を有し、我國との關係もよく理解して居る、腹では何も彼も判つて居るのであるが餘りに其外交技術が巧妙な爲めに世人に此の眞意が判らないのだといふのが故人の王氏觀であつた。

九

大正十四年には在華日本紡績同業會委員となり、次で自ら上海に渡つて支那人紡、外人紡をも説得糾合し印棉運華聯益會の設立に盡瘁されたが、一方支那問題は愈々益々多難に向ひ、北京には華盛頓會議による北京特別關稅會議が開かれ上海には五卅事件の猛烈な排日黨運動が繼續された。關稅會議には故人を代表にこの議もあつた様だが之を辭して庄司乙吉氏を推し、自身は實業家側の對策講究、政府當局との折衝並に裡面に於て支那側との諒解運動等に盡された。會議は劈頭我全權の主義上關稅自主權承認の提議に依つて各國を驚倒せしめ、次で暫行附加稅問題、釐金稅撤廢問題、無擔保借款整理問題等漸次具體案を得つゝあつたが未だ其成果を得るに至らずし

て馮玉祥のクーデターの爲め段執政内閣崩壊し會議も從つて頓挫して了つた。故に法理上から言へば此會議で議せられた事項には何等の權威もない譯であるが、支那側は其後議案の義務的方面は全然之を顧みず單に其權利的方面殊に關稅自主權を恰も既得權なるが如く振舞つて、終に之を獲得するに至つた。關稅問題に就ては更に後述するが、此會議は今一つ我對支政策上に劃期的な重大轉機をなした。それは從來我對支外交が稍もすれば英米追隨に終始したのを、此時初めて斷乎として所謂自主的外交に出でた事である。會議劈頭支那の自主權承認聲明を敢行し、事毎に毫も英米との協調を圖らず北京外交團は事實上解體するに至つた。

一〇

幣原外相は自主外交の名を誇りし其後廣東漢口事件に於ても英國の協力提議を拒絶し單獨主義を明かにしたが、其次には我國の對支外交が非常な苦境に陥つた際全く孤立無援今更ら協調外交に復へる事も出来ず自主か協調かは事毎に論議の的なるに至つた。從來北京外交團は特に團匪事變後は非常によく結束協調が保たれ交民巷は看方によつては支那政府以上に重きをなし支那は外交團の諒解なくしては外國關係は何事をも爲し得なかつた而るに巴里會議後支那を環る國際關係が漸次重要さを加ふるに共に動々もすれば外交團の足並も亂れ勝ちであつた、大事な時期、恐らく協調を鞏固にすべかりし機會に反對に之を破壊し、歴史あり權威ある北京外交團を事實上解體に至らしめ、其拔駭的媚支政策は各國の競争を惹起し全く支那の思ふがまゝに以夷制夷の各個擊破に蹂躪

せられた近年受難外交の端緒を開いたものである。

十一

北京に關稅會議を開いて居る間に、南では國民革命軍が廣東に旗擧をし上海では年初から邦人紡績工場の大罷業が起り、赤化分子の活動に依つて漸次悪化し、五月内外棉工場の殺傷事件が起つて猛烈な排日排貨が行はれ、次で有名なる工部局の南京路に於ける五卅事件となり、排日英運動を主とし打倒帝國主義、不平等條約撤廢運動となり、排貨は九月迄続けられ、其間日英貨の検査沒收から船積運搬不能に迄徹底された。故人はいたく此形勢を憂へて朝野に奔走しその日華實業協會に提出した意見書の如きは詳に原因を探究し、大勢の趨く所を究明して對策を述べた堂々數十枚の大文字であるが、餘り長文であり、同時に白岩龍平氏に致した大正十四年六月八日附の手信はよく右意見書の大意を要約して居るので茲には夫れを掲げ度い、

大正十四年六月八日

喜 多 又 藏 圃

日華實業協會

白 岩 龍 平 様

拜啓

○日華實業協會幹事會

今次の上海暴動事件に關し來る十日正午幹事會開催當日木村亞細亞局長臨席時局に對する御話旁々實業家側意見も聽取御希望の由當日は是非出席の上小見申述度存候得共事件發生以來日々其善後措置講究其他要務有之乍遺憾此度は上京覺束なく被存候儘出席に代へ拙見左に略記致置候間貴臺より協會幹事諸氏及木村局長に御傳達の上充分なる對應策御講究の程願上候

○國權回收運動

今次の上海暴動事件突發以來形勢重大暴動化し其範圍も擴大各地に傳播し、諸工場罷業接踵租界は擧げて危險状態に陥り事態誠に憂慮に堪へず過日對支關係紡績業者の代表委員として外務省及各政黨本部を歴訪し其措置に付機宜の對策懇請致し置き、上海紡績聯合會と連絡を保ち善後策連日講究中に有之候

暴動も一昨夕來漸次平靜に歸しつつある旨入電に接し居るも夫は全く圓滿なる解決の結果に非ずして嵐の前の靜寂の觀有之候抑も今回暴動の素因たる各種の原因未だ解決せずして其儘存在せることを思惟せば向後の對策こそ極めて重大にして慎重の考慮之に對する覺悟こそ肝要と存居候

元來此度の騷擾は全然勞資爭議と其性質を異にし其根底は深く反帝國主義思想に胚胎し標榜する主義、列擧せる諸要求は凡て政治的問題の範疇外に出でず裁判權行政權の回復即不平等條約を廢棄し國權を回復して完全なる行政權を欲求しつつあるものにして暴動の餘波を受け上海所在邦人紡績の罷業は勞働團の同情的に敢行せる

あり又工場自體暴徒の亂入を防ぐ自衛上の手段により工場閉鎖せるものにして工場經營者は事態の悪化を懸念憂慮一致協調を持續對策を講じつゝあり、暴動の素因單に勞資爭議に發せば賃銀、待遇條件等を考慮事件の解決收拾は比較的容易なるも在支邦人紡績の職工は英支人經營工場に比し其待遇條件等有利にして職工は満足して勞働しつゝあるこゝ贅言を俟たず李某の發表（日華實業協會翻譯）にても明白なる事實に候乍然官邊有力者及實業家中暴動を目して勞資爭議の轉化せるものこ皮相の觀察を下し誤解せる諸士亦尠からざるは甚だ遺憾至極にして殊に在支紡績業者種々政府に對し後援を懇請する場合勝手な事のみ申す様曲解せらるゝは甚だ遺憾に候殊に今回の如き場合に於て尙且其感あるは我國將來對支經濟發展上誠に嘆かしくは近く關稅問題等眼前に横臥せる際平素より之が對策を發展を講究するこゝの緊要なる事言を俟たず。抑も今次の運動は當初より全然勞働運動に非ずして勞資協調に依り解決すべき外にあり。形式は暴動なる非常手段により發現され一見勞働爭議の形式を存すれども其基調の原因及關係を顧慮せば國權回收及政治的運動を加味する暴動たる事の真相を闡明し得べしと存候

○向後の對策政府に對する要望

政府側は「ワシントン」會議以來支那に對しては内政不干涉主義を標榜し徒に支那の御機嫌を伺ふの觀なきに非ず。若し萬一暴動の飛沫を受け暴徒の襲來により工場占領、破壊、火災等の不祥事勃發せんか斯かる場合に處する我政府の對策如何、外交的交渉により支那政府に賠償要求の手段を採るも支那政府は財政窮乏果して其好

果を得べきや疑問なる旨外務當局は洩し居り寒心に不堪遂には對支關係者は安んじて經濟的投資を爲こを遂巡するに至り退嬰の止むなきに至らん、小生の憂ふる主點は此處にあり現に這般上海罷業に際し豊田紡社員中死亡者二名に對する賠償請求の如き外務當局は震災時の問題を顧慮逆抗議を恐れ之が要求を遂巡遂に交渉するに至らざりしと聞知す。事實の眞否は兎に角小生の我政府に要望するは徒に左顧右眈英米の鼻息を窺ひ之が追隨する事なく、我國將來の經濟的發展に對し密接の關係を有する隣邦に對しては是非共自主的外交を樹立し居留地内の邦人諸工業に對し又邦人生命財産に對し假令支人暴動を惹起したる場合我政府としては國家の權威を以て一步たりとも假借せず嚴然として彼等を染手せしめざる様の勇氣を決定を有する事こそ向來度々發生すべき騷擾に對する準備として樹立し置く事は對支發展上最も緊要を思惟致され候儘日華實業協會に對しても充分御協議の上當局に御談合の程特に御願申上候 勿々

十二

革命以來廿餘年の民國史は對外的には驚異的飛躍を遂けたが國內に於ては全く軍閥の争鬪に終始し、動亂兵火相次いで寧日なき有様である。殊に民國十三年第二奉直戰後は馮玉祥のクーデターとなり、段祺瑞の臨時執政府成つて間もなく孫文入京せるも統一未だ成らずして客死し、國民黨は段政府に反對を表明し西山會議派は中立態度を執つた。此間奉天派の專横も久しからず十四年秋孫傳芳の楊宇霆驅逐次で郭松齡事變、馮軍の李景林驅逐戰

等を経て十五年初め馮派の第二回クーデター段祺瑞下野となり再轉して張作霖吳佩孚提携馮玉祥驅逐となり、次で張作霖の大元帥就任に依つて北方政局は一先づ安定の形勢を示したが、既に龔之廣東に於ける國民黨は容共政策を探りボロチン以下勞農共黨指導の下に實權全く左派に移り兵權は蔣介石の統率に歸し、蔣は十五年七月自ら革命軍を率ひて湖南に入り、一舉にして武漢の吳佩孚を屠り轉じて江西に孫傳芳軍と對戦、九江奇勝後は破竹の勢を以て長江一帯を席捲し、十六年一月江蘇に張宗昌及孫傳芳の聯合軍を撃破して北上し、山東に入つて終に濟南事變に遭遇頓挫したが、閻錫山、馮玉祥との合同成り張作霖を北京より逐つて終に北伐に成功し、張の爆死も其嗣學良の入黨により全國統一の大業は成つた。蔣の勢威は洵に旭日昇天とも謂ふべく天晴れ華々しき限りにて内外謳歌絶讃を惜まなかつたが、而も故人は尙ほその決して眞の統一安定に非ざる事を憂へて居られたが果して國民黨と共產黨との衝突、南京武漢兩政府衝突、蔣介石、唐生智戦争、蔣介石馮玉祥戦争、廣西廣東戦争、蔣對閻馮戦争等相次で起り軍閥地盤争の舊態依然たるものがあり、其間對内對外の重要問題は續出し國政頹廢し財政紊亂し人民は塗炭の苦に呻吟した。

十三

革命軍の長江進出と共に早くも民國十五年冬には國民政府及中央黨部の武漢移轉となり翌年一月、ボロチン徐謙等主として共產黨に依つて武漢政府が樹立された。彼等は全く第三インターナショナルの對支赤化政策に従て

「支那革命の現状は民主革命であるが將來は更に之を廣義の社會運動とせねばならぬ、支那革命は資本主義を倒し社會主義を建設する一般的闘争の一部であらねばならぬ、革命に依て建設さるべき國家は労働者農民及其他の被搾取階級の民主的獨裁制たるを要し社會主義の政府を造らねばならぬ」をなし、四月蔣介石の共產黨彈壓に次いで南京政府樹立となり七月武漢政府は共產黨と分袂し八月には國民黨の團結成つて、極めて短時日ではあつたが其間共產黨は武漢を中心として思ふ存分暴虐を恣にした。

彼等は先づ労働運動の共產化を計り、十五年末黨部武漢進出の際には既に工會三百餘、會員約三十萬人に達し到る處に不當なる同盟罷業を勃發し、利益分配及び工場管理等の極端なる要求をなし、武裝を整へて暴行私刑等を敢行し、恐怖時代を現出せしめた。同時に一月には漢口の英租界を奪回し、四月には有名なる四三事件を惹起する等狼籍到らざるなく、五月漢口に於て労働組合赤色國際（プロフィンテルン）指揮の下に總工會主催の太平洋労働會議を開き共產系労働運動の促進と支那の革命運動に就て協議した。彼等は又農民運動の共產化を圖り、十六年三月の農民協會員は實に湖北湖南江西廣東の四省だけで四百萬と號せられ、彼等は鄉村自治腐敗官吏土豪劣紳の嚴罰逆産沒收から進んで土地沒收を強調實行し、焚火殺掠を恣にした。更に南京攻撃に参加した共產系の程潛等の軍隊は三月廿四日全世界を驚倒せしめた現代に有り得べしとも思はれぬ彼の南京事件の暴虐を敢てし鬼畜に等しき慘行を演じた。

支那の實情如右、舉國憤激の極に達したにも不拘、又英國が非常な窮地に陥つて協力を求めて來たにも不拘、我幣原外相は依然として「支那の主權及領土保全の尊重」「内政不干涉主義」「支那の新興氣運を認め其國民的希望に同情し好意を示す」の方針を採り、漢口事件並に南京事件に對してすら無抵抗主義不干涉主義を稱して無爲傍觀を續けた。而るに日本綿花會社は漢口には其支店の外に泰安紡績會社及日華製油會社等を経営し、邦人中最も重大なる利害關係があるので故人は十五年末自ら漢口を視察するに共に歸來、其對策に腐心し、偶々我國に於ては若槻内閣退き田中内閣成立し對支外交強硬化の傾向あるを幸ひ日華實業協會に諮り同委員會は如左覺書を作成して田中兼攝外相に陳情した。

(一) 支那長江一帶は現在反共產派の擡頭により、一時的小康を保つ地方多きも只武漢の一圓は依然共產的暴民政治の下にあり、各種の暴令嚴存せるが爲め我在留民は條約上の權利を蹂躪せられ、居住の安全も通商の自由全然破壊せられたる結果、擧て本國に避難する外なきに至れり、依て條約上の權利を擁護し、居留民を復歸せしむるが爲め左の措置に出でられん事を切望す。

- (イ) 武漢政府に對し各種の暴令就集中現銀條例の如きを撤廢せしむる事
- (ロ) 總工會を改編して勞資協調的の組織とし從來の暴力による契約を改善せしむる事

(ハ) 共產的過激派は支那の産業を破壊し、大多數支那良民の他郷に避難を餘儀なくせしめたる結果、我債權を不安ならしめ、通商工業の復興を全く阻止するにより、速に此一派を驅逐し、以て我商工業者をして復業する事を得せしむる事

(三) (略之)

(ホ) 船舶航行上絶對の安全を要求する事

(ヘ) 前五項の要求は武漢政府の難しきする處なるべきにより、普通外交上の折衝により目的を達成し難き場合には之が交渉に際しては非常に處する覺悟を有する事、本件は多年排日を隱忍したる結果失墜したる我國の威信を恢復し一般支那暴民の心理を匡正する上に於て最も有効なるべし。

(ニ) 當面本邦避難民の窮狀を救濟するが爲め相當の措置を執られ度き事。

(三) 武漢政府の決議に基く減水季の暴舉再發に備ふるため戰鬪艦又は巡洋艦を漢口に碇泊せしめて居留民保護に任ずる事。

併乍ら我對支政策は毫も進展せず更に各種の不當課税、關稅自主權、出廠税等の問題續出して我對支商權の前途憂慮に堪へざるものあり、茲に於てか故人は各方面に奔走し、大阪を中心として京神堺和並に東京に於ける日本安全燐寸同業組合、日本棉花同業會、日本船主協會、日華實業協會、大阪貿易同盟會、大阪貿易協會、大阪工業會、大阪綿布商同盟會、大阪綿糸商同盟會、大阪商業會議所、大阪實業組合聯合會、大日本紡績聯合會、神戸

貿易同業會、神戸海陸產物貿易同業組合、神戸商業會議所、堺商業會議所、在華日本紡績同業會、京都貿易協會、京都工業同盟會、京都輸出絹業會、京都商業會議所、京都實業組合聯合會、輸出協會、輸出綿糸布同業會、時事研究會、兵庫縣護謨製造同業組合、和歌山商業會議所の二十八實業團體を糾合して、八月八日對支商權護謨聯盟を結成し如左決議をなした。

近年支那に於ける内亂の頻發に伴ひ條約違反の事例續出し、殊に南軍の支配下に於て最も甚きものあり、而かも彼の南京事件、漢口事件の如き不祥事に對し今尙何等解決を與ふるの誠意なきのみならず、最近南京政府が列國の抗議を顧みず各種の不當附加税を附加し、又近く九月一日より擅に關稅自主權を行使して通商貿易を妨害し、出廠税を設けて外人の企業を撲滅せんとするが如きは、故意に通商條約を蹂躪し國際信義を無視するの暴舉を謂はざる可らず、之に對し若し列國にして從來の如く徒に隱忍自重唯一片の抗議をなすに止めんか、南京政府の外人に對する侮蔑的態度は益々増長して殆ど阻止する所なかるべく在支外人は遂に支那より全部撤退するの已むなきに至るべし、之れ實に對支通商及び企業上最も重大なる關係を有する我國民の斷じて忍容し難き所なるのみならず、同時に又支那國民の福利を増進せしむる所以に非ず。帝國政府は宜しく進んで列國と協同して先づ南京政府に對し強硬なる態度を以て其反省を促し條約の規定を尊重せしむるの方法を講ずべし若し夫れ列國の協調にして不可能ならんか帝國政府は日支兩國の政治的經濟的特殊關係に鑑み、斷乎して單獨自衛の方法を講じ以て破壊せられんことを我商權を擁護すべし。

十五

曩之大正十四年廣東に猛烈な排英運動が起り、對英經濟絶交を強行した。由來國民黨は孫文時代から英國を惡く英國は單に八十年來最も支那を壓迫し來つたといふ歴史があるのみならず、現實に國民黨の運動を制壓した恨がある。それにボロヂンが勞農の對英本國政策から排英を指導したので反帝國主義の血祭に上げられた譯であるが、革命軍が長江に進出するや先づ十六年一月三日漢口に於ける英租界を襲撃し、暴力を以て工部局及び税關を占領し、終に英租界を奪還して了つた。英國は頻りに我國に協力を求めたが、幣原外相は之に應ぜず、不得已英國は海波萬里本國から壹萬五千の大軍を上海に派遣したけれども最早や大勢を奈何ともする能はず、之を前後して英國の新任駐支公使となつたラムプソン氏は大勢の歸趨する所を洞察して驕然八十年來傳統の對策を一擲し國民運動迎合の新方針を樹立して先ず漢口に陳友仁を會して昭和元年十二月十八日の第一回聲明を發し、次で翌二年一月廿八日第二回の聲明書を以て所謂七箇條の原則を明かにした。この英國對支策の急轉回は自發的とは言ふものゝ全く轉回せざるの不得已事に至つたものと言ふべく、夫れには我幣原外相の非協同主義が與つて力がある。當時國民黨の外交方針は左記十五年十二月十二日於武昌聯合會議席上ボロヂンのなした訓示に最もよく表はれて居るから之を摘録する。

數月來中國革命勢力の迅速なる發達を遂ぐるや帝國主義者殊に英帝國主義者は確に驚異措く所を知らず、中國

に對するの態度大に變化せり。雖も、彼等が今中國の要求に聽從するや云ふに決して然らず、是れ吾人の容易に看取し得る形勢なり、特に注意すべきは英日帝國主義者の態度なり、彼等は一面厚顔にも國民政府に向つて好意を賣らん。努むるも同時に裡面に種々の手段を廻らし、中國目前の比較的力量ある奉天系軍閥を幫助し革命軍及革命民衆に向て進攻せしめん。虎視耽々たり、蓋し是れ帝國主義の殘餘軍閥の最後の妄動にして我勞農露の革命行程にも親しく實驗せし處なり、然り而して中國革命勢力の反革命勢力の避く可らざる最後の決戦壇場なり、民衆は英帝國主義の抵制に飽迄協同策進せざる可らず、張作霖は日本帝國主義の生産せるものなり、然も日本は過去數年間の中國民衆の聯合戦線に投降せり、小島帝國の生路は大陸の經濟交通あるのみ狡猾なる小島帝國主義者の態度もこれ注意を要するものなり。吾人の聯合戦線は英日佛米等所有せる帝國主義者を網羅するものなるも、其標幟は總理の達眼により指示せられたる如く、一英帝國主義を倒せば足る他は風を望んで投降すべきものなり、特に知るべきは英日帝國主義者の中國に對する經濟上の立場なり、吾人は先に英日帝國主義の野心の結合たる聯盟關係を打破せり、彼等の經濟上の地位は競争關係にあり今英帝國主義の經濟的野心は愈々吾人に好意を寄せ來らん、日本帝國主義は飽迄「打倒英帝國主義」の堅決巧妙なる運用に依て之を操縦するを要す。斯くして英日佛米の個々の利害に順應して對外策略を運用する事に依て中國の所有する不平等條約は撤消せられ、軍閥幫助を阻止し得らる。共に帝國主義者相互の提携を牽制し、各個に打倒し得らる。ものなり、農工商學を打て一團をなし帝國主義者及殘餘軍閥の最後の決戦を爲すべく共同戦線に起たし

むる。この刻下の急務なり云々。

要するに日英兩國が提携して革命運動に對抗する事になれば彼等の旗印たる打倒帝國主義及不平等條約撤廢は到底貫徹出来ないのみならず恐らく革命その物さへ達成出来ぬかも知れぬ。だから當時彼等は何よりも日英兩國の提携を一番怖れて極力其離間策を圖つた。英國は八十年來の敵であり日本は唇齒輔車の關係である故に吾等は排外運動を單に對英一國のみに止める事に折角腐心して居る此際切に日本の自重を望む。いふのが彼等が日本の各方面に窃に私語した阿片の如く甘くて毒のある誘惑の言葉だつた。それを其儘受入れて好い氣になつたのが我々當局だつたのである。尤も多年英國追隨の型を破り大正四年廿一箇條を以て初めて自主外交の美名を嬴得たのは加藤外相であり、大正十四年北京關稅會議の劈頭自主權承認を聲明して列國は元より日本自身及び支那自身をさへも驚倒させた幣原外相の自主外交は加藤伯からの傳統もいふべく、道途説くが如く日英同盟廢棄の報復さか、支那に於ける英國勢力の驅逐さか、巴里會議以來愈々益々窮難に陥つた我對支外交の打開策さかいふ事よりも幣原男ほごの人だから恐らくこの自主外交さかいふ大理想樹立の爲めであつたかと思はれるが、惜哉實際は浮かしくボロチンの手さ陳友仁の口車さに乗つた事になつた外の何物でもなかつた。自主外交元より結構であるがそれは列國協調をリードする行方でありたかつた。交民巷時代北京外交團の嚴存は支那が奈何さもするこの出来ない權威であつたが、一旦其協調結束が破れるや支那は吾意を得たりさばかり附加税問題、鹽稅問題より關稅租界法院問題、其他の各方面に亘り所有る非違不法不當を敢行し而も各個擊破の戦法を以て朝に一城夕に一城

こ着々其目的を遂行して来た。列國の足並は益々亂れるばかりで、恰も崩落相場に向つて競つて投げ崩すようなものであつた。故人はこの必然的な情勢を夙に觀破して極力列國協調を唱導されたけれども、遂に朝野を動かす事が出来なかつたのは洵に遺憾なこゝであつた。

十六

此年（昭和二年）の夏には早くも豫定の如く……然り全く豫定の如く、少しく支那を知る者ならば先づ英國を孤立せしめて之を敗り、英國を破つたら次は日本をこいふ事は餘りにも當然な既定の筋書である事を信じて疑ふ者はなかつたのである……果然排英は終熄して猛烈な排日に轉向して来た。續いて翌三年濟南事變後の排日の悪化、重大化解決難を我國人の未だに忘るゝ事能はざる大受難になつたので、其時は既に幣原男退き田中内閣であつたが何さかして再び英國との協調を恢復しなければならぬとの議論が起つた所以でもあるが、最早や此時に至つては恨骨髄に徹した英國が今更ら日本の提議に應ずる筈もなく、又英國は既に對支政策の急轉回により日本を置き去りにして遙に遠く前進して居た時で、協調困難なるのみならず、又其爲に英支國交は頗る順調に恢復して居た時であるから國交極度に悪化し非常に不利な苦境に陥つて居る日本の道伴になるの愚を演ぜざる事は明々白々の事で、此時列國の腹は日本は飽迄頑張るに違ないから自分達は主義上の好意で好い顔をしながら實質的には最惠國約款で日本の頑張りに均霑しようといふにあり、獨りつまらぬ破目に陥つたのは日本であるが、夫れが所謂

自主外交の當然の結果なのであるから詮方がない。

十七

三百年の清朝が倒れて國體が革まつたのは民國元年であるけれども實際は一君から群雄割據になつたに過ぎなかつた。それが曲りなりにも革命の達成を見たのは昭和二年國民黨覇業の時にありと謂ふべく、その長江進出時代こそは實に支那の國情を我對支關係を決定的に左右すべき一大轉換期だつたのである。元より大勢の趨く所を達觀して之に順應せねばならぬけれども非違を助長し、脱線より脱線への横道に向く事は制御して正道を進むようにしなければならぬ、夫れを當時の當局は前述の如き行懸りもあつたが、一方に於てウイルソンの理想論に心酔し、米國の假面、明かに假面に過ぎざる正義人道に眩し、他方にはボロチンの共產主義をさへ支那國民の覺醒だまし、如何なる不法暴戻をも新興氣運の大勢なりとして我權益を蹂躪のまゝに委し、南京事變の惡虐にさへ屈辱して何等爲す所なく空しく内政不干渉の高閣に坐して居つた觀があつた。實に此時代こそは前述の如く支那の國情を我對支關係の針路を永久に決定すべき重大時機に際會して居つたのであるから克く其真相を把握し認識して百年の長計を樹つべきであつたのに、惜しいかな事茲に出でずしてたゞ大勢に順應すべく措置を誤つたが爲めに條約上の諸權利を次々に不當に奪取されて終に昭和六、七年滿洲事變上海事變の如き不祥事の勃發を必然ならしめ、而かも尙容易に難局の打開が出来ないようにして了つたのは返すくも殘念な事である。故人は度々

支那の實情を視察し又絶へず研究を重ねて居られたから之等の情勢を當初から看抜いて熱心に朝野の間に奔走し對支強硬外交策を強調されたのであつたが、惜哉大勢を動かすに至らなかつた。

當時日本の所謂輿論なるものが極めて淺薄であつて、相當の人物さへ大勢順應論を吐いた位なのに其間に立つて故人が終始一貫強硬論を堅持して孤軍奮闘された一事は先見の明洵に偉きするに足り、其主張の用ひられなかつた事を國家の爲め深く遺憾と思ふ次第である。

十八

流石に對支關係業者を中心して漸次一般に幣原外交に愛想を盡かして、貴族院から決議案まで突付けらるゝに至り民政党内閣は倒れて政友党内閣が之に代つた。國民の新内閣に期待したものは當然對支強硬外交でなければならぬ、田中外相は先づ東方會議を開いた、併し之は單に懸聲ばかりで何等の實行策もなく徒らに支那の民心を刺戟したに過ぎなかつたが、聽て五月三日濟南の大事變が突發した。之は世人周知の通りで一時は支那の上下を震撼せしめ狼狽せしめたが、聽て又夫れが單に胴喘手段に過ぎない實情にあり見取つた支那は、一方執拗なる排日排貨で持久策をこり、一方對列國の同情を求むる巧妙なる外交戦を相俟つて我を苦しめて來た。田中外相は又北方に對しては不用意な五月十八日の聲明書を發したり、又突發した張作霖爆擊事件の對策なき、何等信賴すべき方策を樹立せず、濟南事變の解決は益々困難に陥るばかりで排日排貨は愈々擴大惡化し、其中に日支通商

條約の滿期問題が喧ましくなり、臨時辦法まで飛出すようになり、列國は先を争つて關稅自主權や治外法權撤廢を承認し形勢はズン／＼進展する中に日本だけが深泥に踏込んだように同じ所で何時迄も藻掻き苦しんだ。

十九

民政内閣の軟弱外交が支那當時の實情に即しなかつた事は前述の通りだが、幣原外相には理想もあり政策もあつた、之れに代つた政友内閣は勢ひ支那に對して強硬策に出づるの外に途がなかつたので一見強硬らしき態度を示して山東出兵を敢てした、然るに田中外相は其始末に行詰つたのであつた、畢竟一定の確固たる方針を十分なる準備に欠けてゐたからであつた、目先の早い支那は之を見透かして輕侮の念を強めた。

當時故人は支那人の國民性から見ても現に濟南事變突發當時支那側當局の恐怖、排日貨一時閉息の實狀から見ても又大勢順應、内地不干渉主義の行詰り、支那對内狀勢の不安等から見ても爰に日本の一貫した確乎たる強硬政策で押し通ふす勇氣の持合せさへあれば形勢の有利展開敢て難事に非ずと強調したのであつた、そこで故人は關西實業界を奔走して昭和三年八月日華經濟協會設立に竭し、其副會長となり關西の輿論指導に努むるに同時に東京の日華實業協會其他を提携して、當局の後援鞭撻、國策樹立の爲め熱心に運動を續けられたのであつた。

二十

濟南事變そのものは比較的簡單に濟んだが、其善後解決は非常に紛糾し、不平等條約撤廢と日支通商條約問題

が絡み合ひ、執拗な排日排貨が續けられて一年以上に亘つた。排日は既に前年から我山東出兵反對のため起つて居たが氣勢昂らず濟南事變によつて激化され、更に其解決及び條約問題を有利に導かんとする國民黨の煽動によつて擴大持續された。尤も濟南事變直後は支那側は我斷乎たる態度に懼れて一時屏息し、殊に北方は反國民黨の關係から嚴重に取締つたので五、六月は左したる事もなかつたが支那側の事變慘狀に對する逆宣傳功を奏し民衆の憤激次第に昂り恰も前述の如く我國の確乎たる方針なきを見縊り、一方北伐完成と共に活氣を呈し來り、七月二十一日總商會に於て上海各界抗日軍暴行委員會は全國反日團體代表大會を招集し、支那全國に亘る關係團體代表百餘名出席し、全國反日會組織大綱を決議した。八月に入り南洋方面及漢口方面も氣勢を昂け來り、九月上旬の全國反日會は對日經濟絕交計畫大綱を議決し、更に奸商懲罰條令及び救國基金徵收條例を制定した。越へて昭和四年一月漢口水杏林事件に依り氣勢を添へたが三月末濟南事件解決と共に鎮靜に向ひ、四月廿日付國民政府は人權保護會を發布し微溫的ながら取締るようになって一段落を告げた。

二十一

併乍ら排日運動は其後も一張一弛四年八月末迄續けられたのみならず今回の排日は全國的に極めて組織的に行はれ、例へば輸出品を其性質に従ひ絶對禁止、相對禁止、不禁止の三種に類別し、輸入品も亦生活必需品、工業原料、文化品、醫藥等の相對し其他の絶對禁止品に分ち、金融及交通等の各方面まで徹底的に抵制の方法を講

じ、且つ救國基金を徵收して運動資金に充て、私刑を設けて裏切を防ぐ等、所有る暴虐にして而かも最も巧妙なる水も洩さぬ手段を講じた。め克く一年餘に亘る如彼大規模の排日貨が永續出來た。尙ほ此機會に國產獎勵、國內工業振興策が政府並に各地各界の熱心な研究努力に依つて着々進捗した事も注目すべき大問題である。更に又從來支那の一般國民は單に時潮に逆ふ譯に行かず乍ら本意表面だけに附和して居た者が多かつたが、今回の排日に依つて或程度迄眞に排日思想を抱くに至り、從來寧ろ親日傾向を帯びて居た北支人、相當年齢者、實業家等まで漸次排日傾向を帯ぶるに至つた。同時に排日を持久さへすれば日本必ず降参して來るこの信念を持たしめた事も將來の爲め面白からぬ結果を來したもので洵に不得已る事ではあるが、我對支經濟策上の由々敷重大事として故人は寢食を忘れて熱心に研究し運動された。

二十二

濟南事件の解決は執拗なる排日排貨及び日支通商條約問題並に各種の不平等條約撤廢問題と絡み合つて紛糾に紛糾を重ね、約一年の長きに亘つて折衝されたが、之を説く前に先づ其一年間に於ける支那の國內情勢を略述する必要がある。

國民黨は蔣介石の共產黨彈壓に次ぐ清黨と同時に、其赫々たる戰勝の結果、國民黨の實權は殆ど全く蔣介石の掌中に歸した。昭和二年四月南京に國民政府を樹て、九月國民黨の大同團結成り、次で五院を設立して政府の基

礎も漸く出来た。尤も党内の紛糾離合は容易に収まらず、迂餘曲折を重ねたが、明けて三年二月兎に角南京に中央執行委員第四次全體會議を開き、中央黨部並に國民政府の陣容も漸く整つた。茲に於てか蔣介石は四月七日國民革命軍總司令に就任して北伐の征途に上り、破竹の勢を以て北上、五月三日彼の濟南事變を惹起したのであるが、曩之馮玉祥及閻錫山は既に國民軍に加はつて居たので蔣は道を京漢線にこつて進み、流石の張作霖も時運の非なるを悟り北京を退いて奉天に還る途中爆死したので、六月八日革命軍は易々北京に入城、十二日には天津に入り、九月直魯軍も潰滅し茲に歴史的な北伐は完成した。

二十三

茲に於てか國民政府は七月六日北京西山の碧雲寺に孫文の慰靈祭を舉行し、孫文遺訓建國大綱に従つて軍政時代の終末と訓政時代の開始とを宣明した。其前に堂々たる宣言書を發して法治の勵行、吏治の澄清、匪賊の肅清、苛税の免除、兵額の裁減を誓つたが、無論空念佛で今に至るも毫も實行されない。が兎に角八月には第五次全體會議を南京に開き、統一完成最初の意義ある會議として訓政期開始の大綱を議し、國民政府組織法を制定公布し、國民政府の正式樹立と共に堂々數萬言の訓政期施政宣言を見た譯である、併し會議は開會前から紛糾を重ね、辛ふじて決裂は免れたけれども内外の期待に反する事甚敷く、却て幾多の禍根を蒔いた。にも不拘表面形式的の統一は追々進行し、十二月廿七日には張學良の國民黨旗揚、三民主義遵守、國民政府服從の通電が發せられた。

れた。

明けて昭和四年一月一日には國軍編遣會議が開かれ、各軍首腦悉く南京に集つて國軍編遣大綱を議定した。茲に多年内外の翹望した裁兵の基礎が出来た譯だが、其實行は殆ど困難で却て其爲に度々の大戦を惹起するに至つた。が兎に角局面は曲りなりにも進行して三月には前年來の大問題たる統一最初の第三次全國代表大會が開かれた。幹部派(右派)は所有る手段を盡して豫め左派を抑壓排斥した結果、會議は順調に幹部派筋書の通りに「國民黨總章の改正」「編遣進行程序大綱の追認」「訓政時期に於ける經濟建設實施綱要方針」「新中央執行委員及監察委員の選舉」等を議決した。廣西派及び左派が此機會に排斥されたこと勿論であり、依例堂々數萬言の立派な宣言書の發せられたことも無論である。又この代表大會によつて選出された中央執行委員會の新全體會議が其後引續き開會されて其都度不平等條約撤廢等を高調したのも當然の事である。

二十四

斯くて革命の大事業は着々として進行し、一見洵に華々しいものであつたけれども内部に於ては左右兩派は元より幹部派と青年派、又は西山派と共產系、或は浙江派と廣東派と廣西派と並に他の軍閥各派間の暗闘明闘は終始絶へず行はれ、三月には終に南京の蔣介石軍と武漢に於ける廣西軍との戦争あり、豫て惡辣周到なる準備により戦は蔣の勝利に歸したが、續いて五月には蔣介石對馮玉祥の戦争となり閻錫山の懷疑等のため之又蔣の勝利に

歸し、其後唐生智石友三等の擧も不幸にして敗れたが、明けて昭和五年春より夏にかけ閻錫山馮玉祥の提携成り國民黨左派の總帥汪兆銘も之に參して廣西派も遂に之に呼應して北平に反蔣派の大同團結を見、兩軍は山東、安徽、湖北、河南四省の大廣野に數ヶ月に亘る大戰を交へたが軍費彈藥の欠乏等のため最後の勝利は終に蔣介石に歸し、茲に蔣は初めて名實共に統一の大業を完成したるやの觀があり、昭和六年五月五日の國民會議に於て約法を公布し全くその外形を整へた。

二十五

國內の實情が斯の如く紛糾に紛糾を重ねながら、理論的形式的革命行程は又如斯着々として進展し來り、其間全國人心の一致結束に最も無害有益なる對外的國權恢復運動が異常な勢で遂行された事は極めて當然の事と言はねばならぬ。濟南事變の交渉は實に如斯く内政關係の複雑微妙なる變遷の間に行はれたのである。

濟南事變當時我福田師團長の蔣介石に對する要求は蔣の回避によつて有耶無耶に過ぎ、蔣は一時總司令を辭職する等の芝居を演じ、外交部長黃郛も辭職して王正廷之に代り、其間支那は猛烈なる逆宣傳をなし特に伍朝樞を米國に派したり國際聯盟に訴へたりしたが、漸く七月に入つて我矢田總領事と王部長との間に外交交渉が開始され日本は先づ事件當面の解決條件を提示したが支那側は之に應ぜず専ら排日排貨を煽動して持久對策を講じ、撤兵先決を固持して下らず剩へ日支通商條約滿期問題、一般不平等撤廢問題等を提起して益々事態を紛糾せしめ、矢

田氏數回の會見交渉も殆ど徒勞に等しかつた。其間英米等列國は競つて支那に好意を示し日本は益々孤立して窮境に立ち、終に日本に於ても硬軟兩論に岐るゝに至り、流石強氣一點張の故人の如きも場合に依つては排日取締と撤兵とを交換條件として解決するも可なりとするに至つたようであつた。明けて昭和四年一月芳澤公使南下して自ら王部長と交渉に當る事によつて漸く問題は軌道に乗り、二月初旬早くも解決に垂んじたが、二月八日突如逆轉して徹宵の大談判も殆ど決裂の外なきに至つた。此日恰も上海に赴いた故人は早速王部長に會つて意見を交換されたが、果して新聞に傳へられた如く其裡面の斡旋が役に立つたか怎ふかは判らぬが幸ひ間もなく交渉は再開され、三月廿八日さしもの難問題も圓滿解決を見るに至り、一、日支共同聲明、二、保障及撤兵に關する交換公文、三、損害問題に關する議定書に調印を了した。引續き芳澤公使と王部長との間に日支通商條約廢棄問題に關する覺書が四月廿六日交換されて解決し、南京事件及漢口事件とも五月二日解決公文書を交換して落着し、茲に全く兩國三年越の重なる不祥事件は解消された譯で國民政府は早くも四月人權保護令を發して排日を取締り晩夏には排貨も全く終熄するに至つた。

二十六

日支通商航海條約は昭和元年十月第三回の滿期になつたので芳澤公使と北京政府との間にその更改交渉中北京政府は倒れて國民政府となつたのである。而るに王部長は不平等條約撤廢革命外交を眞向に振翳し、濟南事件交

涉の牽制策として條約滿期失効を叫び、昭和三年七月十九日正式に之を我國に通牒して來た。而して、豫め國民政府が七月七日宣言した「中華民國舊條約既に廢止せられ新條約未だ成立せざる各外國との間に於ける臨時辦法」に依つて兩國との政治及經濟關係を維持すべしと、我國を無條約國視しようとした。帝國は直に日支通商條約が法理上嚴然有効なる事を主張するに同時に一方的な臨時辦法を拒否し、正當なる條約の改訂ならば交渉に應ずる用意あるも支那が飽迄不法を貫かんとするに於ては權益擁護の有効なる手段を執る事あるべきを警告した。國民政府も聊か之に反省する處あり第二次通牒に於ては臨時辦法不適用の意を示し來り、明けて四年一月我國も支那の改訂關稅々率を承認し、三月の濟南問題解決に引續き四月廿六日の覺書に依て國民政府は改めて日支通商條約の有効なる事を確認し茲に條約滿期失効問題だけは解決した。

二十七

そこで漸く本筋の日支通商航海條約の改訂交渉に入るべき順序になつて來たが、右條約にある關稅自主權、領事裁判權（治外法權）内河航行權其他支那側で所謂の不平等條約として一律無條件撤廢を高唱して居る租界問題、軍隊撤退、租借地其他の問題を包括交渉するも到底解決の見込がないので、條約全體の改訂でなく先づ最も切實で支那側でも最も切望して居り我國に於ても最も重視して居る關稅問題から一つ宛切離して交渉して行く事になり其後關稅問題だけは解決したが次で治外法權の交渉中に滿洲事變が勃發し、其儘になつて居る次第である。（關

稅問題と治外法權問題に就ては別項後述。）

二十八

所謂不平等條約の撤廢に就ては支那は先づ大正八年の巴里平和會議に之を提議し「勢力範圍の拋棄」「外國軍隊及警察官の撤退」「外國郵便局の撤廢」「領事裁判權の撤廢」「租借地の還付」「居留地の回收」「關稅自主權恢復」の七項を叫んだが物にならず、次で大正十年、十一年の華府會議に主權尊重領土保全以下所謂の十大原則の提案をなし九條約及附屬決議に於て原則的には概ね之を承認された。而も大正十年には戰敗の爲め無條約國となつて居た獨逸も、十三年には露國と相互平等の新條約を締結して漸次氣勢を昂むるに至り、大正十四年には五卅事件による澎湃たる國論に促がされ終に北京政府は七月廿四日不平等條約修正の提議をなし來つた。

併し何と言つても其本家は赤露の指導原理に依て高く「反帝國主義」と「不平等條約撤廢」の二大旗幟を標榜する國民黨で、大正十四年廣東國民政府成立宣言に於て「國民政府が力を悉し以て其實現を期するものは國民革命の最大目的たる中國を獨立、平等、自由に致すにある。故に其最先に着手すべきは即ち不平等條約の廢除に存す、惟ふに不平等條約を廢除して後以て統一を云ふべく如斯ならざれば統一は不可能のみ」と述べ之を革命の第一使命とし昭和二年南京國民政府の成立宣言に於ても「最短期間に不平等條約を廢除す」と述べ最初の外交部長伍朝樞は就任の翌日其方針を聲明し、同年十一月廿三日南京政府の名を以て「最短期間に不平等條約を廢除す」

「條約満期のものは無効とす」「國民政府が參與せずして訂立又は許可せし條約は一律無効とす」「支那に關する條約にも未だ國民政府の參與せざるものは支那に對し約束の力なし」を宣言し、北伐完成せる昭和三年六月十二日再び對外宣言を發表し、七月七日一方的意志を以て突如不平等條約廢棄を宣言し、臨時辦法を公布した。

二十九

曩之七月六日米國は逸早く列國に率先して新關稅條約を締結し、八月には獨逸との暫定通商條約成り、秋には白耳義、伊太利、丁抹、葡萄牙、西班牙各國との通商暫行條約成り概ね「關稅自主承認」、(但し最惠國待遇)「治外法權撤廢、但し條件附」「相互平等の通商條約改訂の約束」をなし諸威、和蘭、英國、瑞典、佛蘭西等も相次で關稅自主權を承認した。最も最惠國約款に依つて夫等はみな名のみの自主權であつたが、昭和四年二月我國の差等稅率協定に依り之が施行を見、翌五年五月我國との關稅協定成立に依て初めて完全なる關稅自主權を獲得した。尙ほ波蘭、墨西哥、和蘭、諸威の四ヶ國に對しては完全に領事裁判權の撤廢を見、英國より漢口租界、鎮江租界並に威海衛租借地、及び白耳義より天津租界等の返還を受け着々として目的遂行に進みつゝある。

三十

關稅自主權の恢復は早く清朝に於ても之を試み、民國元年(大正元年)關稅率改訂提議の際も其意を表し、三

年以來研究準備に着手し、大正六年には國定關稅條例を發布し同八年の巴里平和會議には大いに之を主張し、同年、十一年の華府會議に於て終に九ヶ國の支那關稅に關する條約成立に奏功し、稅率改訂、附加稅設定及び之が協定のため特別關稅會議を開くべき對策を得た。右約束に依つて大正十四年十月から翌年七月迄北京に特別關稅會議が開かれた。この會議に帝國の實業家代表として故人出馬の聲があつたが、故人は庄司乙吉氏を代表委員に推し故人は裏面に在つて日本實業界の對策研究、當局との聯絡並に支那側との聯絡等に當られたことは前に記した通りである。

會議の最大眼目にして且つ最難關と目せられた關稅自主權は既に述べた如く意外にも會議劈頭に於ける我日置全權の聲明に依り内外を齊しく驚倒さしながら呆氣なく解決した。尤も其決議文は

支那國以外の締約國は茲に關稅自主權を享有する支那國の權利を承認し、支那國と締約各國間の現行條約中に包含せらるゝ關稅上の制限を撤廢するに同意し、且つ一九二九年一月一日より支那國定稅率法の實施せらるべきことに同意す。

支那共和國政府は釐金は支那國定稅率法の實施と同時に廢止せらるべきことを聲明し、更に右釐金廢止は支那共和國十八年一月一日迄に有効に實施せらるべきことを聲明す。

後來之に依つて列國側は關稅自主權は釐金廢止の條件附であるから後者が有効に實施されねば前者も効力を發生しないを唱ふるに對し、支那側は釐金廢止は單に關稅自主權に對する支那任意の附帶聲明で交換條件ではないを

主張するに至つた、事情は表面明かに交換條件とする事は支那の對内政策上困難だから事實上條件たる事の諒解を形式ミを取つたのであるが、支那の實情ミ釐金廢止實行不可能なる事を熟知せる支那側委員の事故初めから例の策略を弄したミしか考へられない。

三十一

尙今一つ日本は率先自主權を承認する交換條件として互惠協約を結ぶ諒解があつたのであるが、之も支那側委員の偽瞞策で其後毫も誠意を示さず、ヤツミの事に協約交渉の意志表示をしたゞだけで會議は中絶し其後南京に於ける交渉でも相手が北京の當の責任者たる王部長だつた爲めスツタモンダで妥協點迄漕付けたが相手が代つて居たら到底物にならなかつたかと思はれる。

更に又北京特別關稅會議は最後の協定調印に至らずして支那政變の爲に有耶無耶に立消えたのであるから關稅自主權承認も正式には何等の權威もないといふ外國側に對し、支那は兎に角列國が自主權を承認し前記の決議を見たのであるから有効であるが主張し、結局事實上列國も承認の不得已に至つた基礎をなした。

いづれにしても最も頑張るミ見られた日本が突如率先して之を承認したのは、巴里會議華府會議以來日本の陥つて居た對支外交の拔差しならぬ難境の打開策だつたのか、幣原外相の例の自主外交の理想の現はれたつたのか、或は又單に王正廷氏に一杯甘々喰はされたのか判らぬが、要するに多年堅壘を誇つた北京外交團の協調を一掃

に破壊し去り、爾後特に最も關係深き英國との間に對支外交が事毎に喰違つて御互に非常な不利に陥り、延いて列國をして支那の欲するがまゝの安値で投賣外交を止むなからしむるに至つた端緒を爲したのは遺憾千萬である。

三十二

同會議で自主權の外に華府條約附加税を議し、普通品二分五厘、奢侈品五分の協定成り、北京政府は昭和元年未發令、二年二月一日より實施する事となり、之が又後々まで種々の面倒を惹起した。尙ほ同會議では所謂七種差等稅率が協議され、之が後に昭和四年二月の日支協定の基礎となつた。關稅增收に對しては尙ほ其使途を明かにする問題並に無擔保外債整理問題（殊に我國は後者を重要視して居た）が議せられたが惜しい哉會議中絶の爲に其成果を得るに至らなかつた。

國民政府の第一旗幟は前述不平等條約撤廢である、併し如何に革命外交ミ雖も……共產派の英租界奪還の調子で行けば兎に角清黨後の國民黨殊に漸次軍閥化し資本主義化した南京政府ミしては……所有る不平等條約を一時に撤廢しようミすれば徒らに事態を紛糾せしむるのみで到底解決の見込なきのみならず、一步を誤れば國民政府自ら瓦解の因をなす虞も十分ある事を熟知して居た彼等は、聲を大にして所謂聲勢を般にし内外を聳動せしめつゝも實は最も堅實な方法ミして、先づ關稅問題を解決し、次に治外法權に移り、其解決を俟つて順次其他の問題に及ぶ方針を樹てた。夫れには國民政府焦眉の急たる軍費の財源ミして關稅が最も緊要であつたのみならず自主

權及附加税共既に「確認」を残すのみで最も成功の可能性に富んで居たからで、日本初め諸外國も此の情勢に應じ兎に角先づ關稅問題を議する事にした譯である。

而るに我國は時恰も濟南事件突發、その交渉に加ふるに日支通商條約滿期失効臨時辦法問題に攔座して一步も進む事も退く事も出來ず、其間列強は米國の七月六日自主權承認廿五日調印を初め、英、佛、伊、白以下關係國全部我國の窮境に更に一個づゝの重壓石を加ふるかの如く先を争ふて承認調印し、支那は之に勢を得て愈々益々高飛車にかゝり排日排貨は澎湃して猛威を揮ひ、我國は全く四面楚歌の重圍に陥つて了つた。そこで我國は己むを得ず抗議附のまゝ二分五厘及五分の附加税を納付しつゝ矢田總領事必死の努力も先決問題たる濟南事件及び條約効力問題に停頓したまゝ毫も進展せず、漸く翌四年一月、即ち北京特別關稅會議の決議によれば支那が自主權を獲得して國定税率を實施すべかりし時に至り、支那は自定税率の名を得、我國は互惠税率の實を得……と言つても双方も半端な妥協案だが……國定税率でもなく互惠税率でもなく、又關稅自主權に觸れざる二ヶ年の過渡税率として北京會議の七種差等税率を實施するといふ實際的な案を我國が承認し（一月卅一日）曩之芳澤公使が南下して局面打開の任に當り、三月廿八日濟南事件を解決し、四月廿六日には日支通商條約滿期問題を「有効なり」に支那に承認せしめ、序に五月二日南京漢口兩事件まで解決して主なる懸案を一掃し、茲に初めて改訂通商條約の一部として本筋の關稅問題交渉に入るべき順序となつた。

三十三

於茲乎我國は朝野を擧げて通商條約改訂の對策を講ずるに至り、故人は先づ日華實業協會を聯絡して、日華經濟協會の樹立に奔走され、外務當局も屢々意見の交換を行はれたが、昭和四年六月十八日右兩協會は共同して左の決議をした。

- 『(1) 條約交渉に當つては出來る限り關係列國との協調に努められ度きこと。
- (2) 條約改訂交渉に入るに當り先づ排日其他形式の如何を問はず事實上通商條約上の精神に反する一切の行動を責任を以て取締るべきことを條文に明記するの條件とせられ度き事。
- (3) 治外法權の撤廢は時期尙早なるも法典制度及設備の完備實行せらるゝに至らば其實蹟に徴し地域的部分的
其他の方法により漸進的撤廢方針を採られ度き事。
- (5) 支那に於ける各種通商企業の設立經營に對し其資本又は經營者の内外に依り課稅其他一切の差別的待遇を爲さざる事。
- (6) 内河並に沿岸航行及貿易權は現状を維持せられ度き事。
- (7) 最惠國條款を留保する事。』

尙ほ日本經濟聯盟會、日本商工會議所、在支各商工會議所を初め各々主張並に決議を發表し、中には強硬論も

あつたが、大體要約すれば前記兩協會案と大同小異のものであつた。外務當局に於ても吉田次官主催の下に東西實業家（主として右兩協會幹部數氏、無論故人も之に加はり）數回の懇談會を開いて朝野の意見も略々一致しつゝあつた折柄、七月田中内閣辭職して濱口内閣成立したのであつた。

三十四

幣原男は濱口内閣の下に再び外相の椅子に就いた、而して芳澤公使駐佛に轉じて佐分利氏支那公使となつたが幣原男も佐分利氏も其後彼我の情勢に種々研究考慮する處あり、幾分心境の變化を來した様で、八月廿六日日華實業、日華經濟兩協會幹部（故人も）を官邸に招待して懇談會を開き相互に胸襟を開いて意見の交換があつたこの事である。夫れから間もなく九月六日日華經濟協會は如左意見書を決議した。

『日支通商航海條約の改訂に關し當會は慎重審議の結果左の通り意見を決定したり。偏に當局に於て其貫徹を圖られん事を望む。』

第一、關稅協定に關する件

支那の關稅自主權を認むるも國定稅率の實施に先立ち互惠稅率を協定する事とし而して互惠協定は左の方針により決定すべき事。

一、互惠協定の有効期間は十箇年とする事。

二、厘金其他類似の内地稅を全廢せしむる事。

三、互惠協定の稅率は現行の七種差等稅率を標準とする事。

四、互惠稅率の適用せらるべき商品目の總價格は無論可成多額なるを可とするも其内に包含せざるべき商品目の選定は大體左記の標準による事。

イ、其重點を必要品に置く事。

ロ、將來支那工業發達の爲め又は關稅引上の爲め著しく我輸出の阻害さるゝ惧れあるもの。

（理由）我國は一九二五年の北京關稅會議に於て列國に率先して支那關稅自主權承認の聲明をなし各國共其主義に於て之を承認したるを以て、其實行は當然の事なるも唯之に基きて實施せらるべき國定稅率は現行の七種差等稅率に比し著しく高率なるべしと豫想せられ日支間の貿易は大いに阻害せらるゝ惧れあるを以て一定の期間互惠稅率により之に備ふる必要あり。

第二、治外法權撤廢に關する件（省略後記）

第三、河江、内河及沿岸航行に關する件（省略）

第四、條約の實行に關する件

通商條約が現存せるにも不拘條約上正當なる我が在支企業及對支貿易が屢々不法不當なる壓迫を蒙れる事實に鑑み條約を實際に有効ならしむる爲め特に左の二項に付確實なる保障を要望す。

一、日貨排斥嚴禁の件　日貨排斥は總有る不法不當の手段を以て公然通商條約を無視し正當なる我が取引を妨害して憚らず之を禁止することに能はざれば通商條約は殆ど無意義なりと謂ふべく、今回の改訂に當り特に其禁止明文の訂正を要望する所以なり。

二、在支企業保障の件　近年支那が官民一致我が在支企業の壓迫を策せる事は一九二七年出廠稅率條例及び其對外聲明書並に國貨獎勵委員會特殊工業獎勵法等に依つて明瞭なる如く、總有る手段を以て目的の貫徹を期しつゝあり、故に此際我在支企業に對する課稅及保護に就ては現行條約による外人の權益を留保し資本又は經營者の内外により差別的待遇を爲さざる事に關する保障を確保するに同時に又治外法權等の狀勢に鑑み租界外に在る事業の安全遂行の保障を確保する必要ありと認む。』

三十五

如斯絶えず條約對策は講究を續けられたが、彼我の諸懸案は解決し排日は終熄して颱風一過の感あつた際、芳澤公使——佐分利公使——重光代理公使と我對支當事者の交渉があり、七等差等稅率といふ過渡的なものは出來て居るしるので關稅問題は容易に進捗せず、其間我が在華紡同業會と支那財政部長宋子文氏との間に出廠稅——統一稅問題が四年四月頃から商議され初めた。在支事業にまつては關稅問題にも劣らぬ重要問題であるから、故人も在華紡同業會委員として熱心に之が研究と對策とに従事され、商議は四年秋に初まり五年中繼續して足掛三

年目の六年一月に至りヤツと解決協約成り、二月一日から實施された。この出廠稅——統一稅も其歴史、双方の主張對策並に交渉の顛末を記せば随分長いものになるが茲には唯々故人が終始非常な熱心と努力とを以て其對策を講ぜられた事と、外務當局の外交々事に依らずして、民間當業者たる在華日本紡績同業會と支那財政部との間に交渉して最も實際的なる契約成立に到達した事を故人が機會ある毎に、さも愉快氣に語られた事だけを記して置き度い。

三十六

尙國民政府は昭和五年一月十五日突如政府命令を以て、

國民政府は銀價暴落のため外債支拂に非常の損失をなすを以て茲に輸入稅は金貨を以て收稅することにす、金貨は值六〇・一八六六センチグラムを以て純金標準として計算し財政部をして辨理せしめ、二月一日より全國海關に於て實施す。

旨を公布した。所謂全單位問題で、ケメラ―委員會の建議案一部の着手だとも言はれるが、兎に角列國は例に依つて認容の外なかつた。

此間關稅問題は新に重光代理公使と王部長との間に交渉が續けられ、終に昭和五年三月十一日付假調印、五月六日正式調印を以て日支關稅協定は成立した。茲に於て列國の最惠國約款の條件も解け、千八百四十二年の英支

南京條約以來八十八年目に支那は芽出度く名實共に關稅自主權を恢復した譯である。我國にしても前述の如き多年の困難なる懸案を根本的に解決し得た譯で此關稅協定は將來締結せらるべき日支通商條約の主要なる一部を形成するものである。尙ほ附屬書に於て所謂互惠協約が結ばれたが、之は日本實業界の熱望した十年間の期限はは大凡そお話にならぬ一年及三年の短期間で辛うじて其名を得て當面を糊塗し得たに過ぎない。更に附屬書は陸境關稅の協定、釐金、常關稅、沿岸貿易稅の廢止、不確實擔保借款の整理等の諒解を明文して居る。

三十七

領事裁判權は一八四三年英清五港通商章程に初まり其後會審權に關する條約等により漸次擴張確保せられ、租界の行政權、警察權と相俟つて國際法上の所謂治外法權と其意義を等分するに至つた。而して其撤廢要求は一九〇二年の最終議定書にも現はれて居るが極めて輕い主義上のものに過ぎず、歐洲大戰參戰の結果初めて獨乙、埃國、露國から之を回收し、巴里會議では物にならず大正十年十二月華盛頓會議で「支那に於ける治外法權に關する決議」成り、其結果大正十四年支那司法制度調査委員會が開かれ、翌昭和元年十一月廿九日有名な其報告書（勸告書を含む）が公表された。而して支那が右勸告に指摘された各項目を實行しなければ各國とも法權の撤廢には應じなくとも可い譯で、斯くては萬年河清を待つ如きものであるが、支那は自國の爲すべき改善は毫も之を爲さず、無暗に不平等條約撤廢を高唱した。蔣介石は昭和元年十一月早くも其第一聲を揚げ、三年七月南京政府は

堂々たる廢棄宣言を發し、臨時辦法なるものを設け上海の法院問題を惹起する等の革命手段を以て臨み、四圍情勢が、不平等條約及關稅の項に述べた様なものであつた爲め、早くも同年末には白耳義、伊太利、丁抹、ポルトガル、西班牙との新條約で條件付撤廢の承認を得、其後も機會ある毎に宣言、聲明等を發し、昭和四年四月には正式に英米佛和諸伯六ヶ國に撤廢要求の通牒を發した。英國はラムブソン公使の新任と共に其對支政策の急轉回を敢行し、既に昭和元年十二月及二年一月の聲明書に於て讓歩の意を示し、四年十二月には「支那に於ける領事裁判權の漸進的撤廢の道程が一九三〇年（五年）一月一日を以て開始せられる事を承認し、國民政府が右趣旨に依る聲明を爲す事に對しては毫も異議なく、支那政府の安定次第領事裁判權の漸進的撤廢に關する商議を進むるの準備あり」と通告し、米國は元來好意を表明して居たので國民政府は四年十二月廿八日一方的意志を以て翌五年一月一日より撤廢の政府令を公布した。尤も英國の眞意は假令へ租界を放棄することも治外法權を維持せんことをあつた様で、我國が反對に法權は讓歩することも租界は維持せんことを先づ法權交渉開始の氣運にあつたのこ、前述四圍の情勢に動かされ好意折衝は續けながら迂餘曲折容易に解決に至らなかつた。

三十八

我國の方針は大體漸進的承認で、昭和四年六月十八日日華實業協會と日華經濟協會との共同決議は「治外法權の撤廢は時期尙早なるも法典制度及設備の完備實行せらるゝに至らば其實績に徴し地域的部分的其

他の方法により漸進的撤廢方針を採られ度き事。」

と言ふにあり、同九月六日日華經濟協會の意見書は

『支那の治外法權は主義上之を認むるも其實行に先ち一九二六年開催の各國法權審査會に於て決定したる勸告事項を履行せしむる事。』

(理由) 各國法權審査會の勸告事項たる法典の完成、司法警察及監獄制度の改善、新式の法院其他全國に劃一的法律制度の整備等に關しては今尙何等實蹟の見るべきもなく、殊に暴戾なる排外運動の熾んなる今日に當り治外法權を撤廢するに於ては在留外人の生命財産は極めて危殆に陥るは必然なるを以て其實蹟の略擧るを俟ち地區を分ち、又は部分を定める等の漸進的に之が實施をなすべきを適當とす。

三十九

其後昭和五、六年にも引續き故人は外務當局並に日華實業協會と聯絡し、日華經濟協會に於て研究對策に腐心し勸告事項實行の外に、

- 一、英米佛と協調すべき事。
- 一、上海、漢口、廣東、青島、天津五港を除外する事。

- 一、外人特別裁判所設置。

- 一、刑事は之を保留、又は移審權を保留。

- 一、警察事項の保障。

- 一、工場治安、通商自由、財産權の確保。

- 一、課税の不當及差別待遇の保障。

- 一、内地開放を要求する事。

等の對策を講じ、特に谷亞細亞局長の來阪を請ふて日華經濟協會で忌憚なき意見の交換をした事もある。而して故人は右諸條件の中特に最後の内地開放の場合に依つては之丈け唯一の交換條件として可いといふ程熱心に主張された。當局も略同意見のやうにも察せられたが、併し此問題には大いに反對意見もあり隨分厄介な問題だが故人は殆ど夫等の凡ての議論を超越して「支那で仕事をするにはドシ／＼内地に進まねばならぬ、之が支那に於て西洋人との競争に勝る日本人の何よりの強味だ」之前にも記した如く頑強に主張し通して居られた。

治外法權撤廢交渉並に夫以下の問題は滿洲事變で中絶したまゝである。

四十

反蔣大同團結が頓挫して、閻馮の軍閥は一時屏息し、汪兆銘等の左派も又復破れたが今度は胡漢民監禁問題か

ら反蔣熱再燃し、廣東派の分裂を來し、廣東派及左傾派其他の反蔣各派は廣東に獨立政府を樹て、對峙するに至り、一方共產黨は益々猖獗を極め數年に亘る討伐毫も奏功しないのみか、昭和五年秋以來政府の基本軍隊を以てし蔣自ら全軍を指揮しての大規模の討伐も頓に進捗せず、依然として湖北、湖南、江西、福建、廣東各省の過半は其蹂躪に委する状態で、支那の國情は何時になつても安定せず、加ふるに財政の窮乏愈々甚しく流石の浙江財閥も悲鳴を揚ぐるに至り、蔣の聲望昔日の如くならず、偶々昭和六年春長江一帶稀有の大水災に會し、死者數十百萬に號せられ、其慘狀は未だ世人の耳目に新な處である。當時支那は復もや排日運動をやつて居たし、元來支那人の背德忘恩な點からも我國が救済に赴く必要なしの議論も多かつたが、畏多くも我 聖上陛下に於かせられては廣大無邊なる御仁慈を以て御内帑金拾萬圓を御下賜相成つたので、内外齊しく感激し、日華實業協會率先奮起、支那關係諸團體を初め國內各團體悉く競つて之に和し、東西合同して支那水災同情會を設立した。感激性に富んだ故人が東奔西走して熱心斡旋された事無論であるが、支那側は「小惠の爲に大仇を忘るゝ勿れ」等き勝手な熱を吹き終に深尾特使の糧食船を拒絶するの無禮を敢てするに至り折柄國交の緊張と共に救済中止の已むなきに至つた。

四十一

大正六―七年の第九回排日排貨は濟南事變前後の夫れ以上猛烈普遍的で、深刻徹底的で、其暴狀は言語に絶す

るものがある。六年七月上旬の萬寶山事件に端を發し、次で朝鮮事件が起るに直ぐ上海各界は起つて反日援僑會を組織し忽ち漢口、天津を初め各地一齊に呼應して起ち各種商工業諸團體を初め市聯合會、教育會、國貨會、納稅華人會、萃僑團體、農會、工會、辯護士會、婦女團體、新聞團體等總有る團體を結束して、反日會、外交援會、對日經濟絕交會、排日總聯盟、抗日會等を組織し永遠對日經濟絕交、打倒日本帝國主義を高唱し、日貨排斥大綱、日貨處置辦法等を定めて日貨の取引を嚴禁し、甚だしきは懲戒條例を設けて恣に違反者を私刑に處し、實業基金と稱する不當課税をなし、我邦商所有の貨物までも續々抑留沒收する等、言語道斷の暴狀は益々猖獗に赴くのみであつた。

排日の度に故人が力説されたのは「通商條約が嚴存するのに日貨排斥は何事だ、之を有効に禁止せしむる事が出来ない様ならば何の爲の通商條約だ」といふので、成程排日は國交を阻碍するものであり、通商條約の精神に違反するものではあるが、條約の明文には何等適切な規定がなく、條約は單に我國人の通商權を認めただけで支那人自身の自由意志を束縛し得るものでない云ふやうな理論は百も二百も承知の上でありながら、之を超越して飽迄前記の説を頑張られるのが常であつた。又支那側はいつも排日を國民の自發的愛國心の發露だと言ふが決して自發的でも愛國心からでもないといふ反證を枚擧に違なき程強要の實例を一々列擧しては力説された。支那として邪道の排日を寧ろ正道に導くところの國產獎勵でも實業基金等を振向けるに、假令へ慈善でも盗んだ金でやるのは怪しからぬ憤慨され、實業基金が罰金か貨物沒收かの不法徵收は泥棒強盜である、糾察、體

刑等の不法行爲は暴動である、法治國が白晝公然その横行を許すといふ法が何處にあるか、何故直ちに之を禁止せしめぬかといふのが毎度繰返へし強調された事で、獨立國が其國民の行爲を如何に處理するかを他國から指圖出来るものでないといふ理論などは丸で受け付けられなかつた。結局外務省の内政不干涉が氣に入らぬので或國際法學者の

干渉は實際に於ては政策問題に過ぎぬ、例へは自國の重大なる利害が危険に瀕するや否や又自衛の爲に必要なる場合が生じたか否かを決定すべきものは各國自身である。

この説や、米國有数の國際法學者ハイド氏の

一國が國際社會の一員としての通例の義務を履行する事の出来ない慢性的状態に陥つた場合は右の亂行により損害を受くる外國は干涉の權利がある。

この説なきを何時の間にか調べて居られた。要するに排日貨が初まるに世界の趨勢も支那の趨勢も顧みぬかの如く躍起に強硬論を唱へ、排日の實害に堪へ難くなるに妥協論を唱へたりした爲め、大阪の實業家は餘りに自己の利害ばかり考へる言はれた所以であり、又法理論なきは全然之を辨へざるが如く常識論を振舞はした爲め素人觀だに見做されたりした所以でもあるが、實は故人は各關係條約の内容からその法理論なき十分研究し盡し、百も承知の上で一種の超越的大局論をやつて居られたのであり、又机上の抽象論も時代の趨勢も十分辨へて居ながら努めて實効的對策を講じ、同時に世人に問題の真相を把握せしむる爲め實情の闡明に努められたのである。

四十二

尙故人が特に昭和六年の排日及時局に就て特に強調せられた二大要項は「支那問題は愈々最後の一線に到達總決算を要す」といふ事と「滿洲問題と排日問題は不可分にて同時解決を要す」といふ事であつた。

支那問題は革命以來二十餘年支那の主潮をなせる國權恢復と毎時その目標とされる排日、及び國民黨制覇による所謂新興氣運と革命外交と相俟つて愈々益々多事多難を重加し來つた。頻々たる我權益の蹂躪、朝に一成夕に一成の我が退却外交、我國の國威は到處で幾千百回もなく無禮なる彼等の汚辱に會ひ、彼等の不法暴慢は益々増長し來り我國の權益は愈々窘窮するのみ、山東問題を譲り、關稅問題を譲り、二十年間大小數百の問題悉く讓歩を餘儀なくされ、而かも其度に之に代る問題と排日とを以て追撃され、終に敢然起つて殘壘を死守するが、支那を斷念して放棄するか最後の一線に起つに至つた。而も支那は如何に國內亂麻の如く變動して居る時でも國權恢復、不平等條約撤廢、打倒帝國主義、反日排貨の對外方針だけは終始一貫官民一致結束して力闘を續けて居る殊に反日の如き中央政府、地方各官公署、各政黨部は元より商工業各團、軍界、學界、工界、農界、新聞、辯護士、婦人其他全國の總有る機關を總動員し、舉國一致澎湃して奮起し、一旦鋒を納むるにも機會ある毎に再起し、平時不斷と雖も小學中學の教科書を初め新聞雜誌は固より、苟しくも字を書するに足る紙、講演、講義、集會、結社等排日の色彩を帯びざるは無き程に組織的計畫的に、何時かは日本を打倒し終らざるば止まずこの信念

を以て必死苦闘を續けて居る。而るに之に對する我國は如何にいふに國民は久しき泰平に狎れて、苟安を偷み、我國現在の繁榮が幾度か國家の運命を賭し、數十萬先輩父兄の血によつて購はれた事を忘れ、浮華輕佻淫風蕩々として頽廢に赴き、對支策の死活に關する國家百年の大問題も殆ど對岸の火災視し、風馬牛相關しない。而も國民の代表を稱する政黨は此大問題をさへ政權爭奪の具に供し、黨利に没頭して國家を顧みない、國民が支那問題を民政黨と政友會との繫争問題に過ぎざるかの如き觀念を抱くに至つたのも所以ありと謂ふべしで、無論時代の趨勢でもあり、支那の覺醒の爲めでもあり、幣原外交の失敗もあらう、田中外交の失敗もあらう、新聞や言論指導者の無定見無責任の影響もあらう、最近十餘年我國對支外交の不振眞に所以ありと謂ふべく、所謂羅馬は成るの日に成るに非ず其依つて來る處ありて、滿洲事變は決して萬寶山事件や中村大尉事件から突發したのではなく懸案五百餘件、條約問題、排日問題、鐵道問題、商租權問題、不當課税問題、學良の反日政策から多年鬱積した地熱の爆發したものである。吾等は最早や支那に讓るべき何物もない、敵襲を擊破するか陣地を放棄するか、二者其一途を擇んで廿年來支那問題の總決算をなさざるを得ざる最後の一線に立つたのである。政黨などは問題でない、起つて國民、全國各界上下一致國を擧げて奮起せよ。故人は早くも之を七月の排日擡頭當時から熱心唱導されたのであつた。

四十三

更に故人は滿洲問題が餘りに重大でセンセーショナルな爲め、我國人が較々もすれば排日問題を輕視する傾向あるを憂へ躍起になつて滿洲、排日兩問題不可分合一解決論を強調された。何となれば滿洲問題は畢竟支那多年の反日政策の所産で、反日は實に滿洲問題の根本である。根本の反日問題を解決せずして滿洲問題のみを地方的突發的のものとして解決せんとするも支那問題は何うにもなるものでない、又滿洲が我國の歴史上及存立上の絶對的意義を持つに比すれば相對的ではあるが支那本部の經濟關係も之に劣らぬ重大さを持つものである。滿洲問題のみを地方的に解決すれば、殘る排日問題は益々惡化するに相違なく、滿洲問題が其性質上到底短日月に解決しないものとするれば排日も従つて永引き且つ重大化するに違ひない。兎に角排日は前各項に詳述せる如く我國對支問題の主潮をなすものであるのみならず、最早や最後の一線に逢着して來た、是が非でも根本的解決を爲さざるを得ざる立場にあり、滿洲問題延いて支那問題夫自身が總決算期に直面せる事も前述の通りであるから、此際我國は非常の決心を以て全支那問題の徹底的根本解決に當らねばならぬ。今度有耶無耶に終るやうでは今後益々惡化し、全然支那を放棄する外なきに立至るであらう。○當局が上海の邦商所有貨返還を以て能事終れりとし只管り責任遁れの消極態度を持するが如きは以ての外で、既に支那側は我を仇敵と呼び、國交斷絶に等しき方法で非武装ながら開戦に等しき手段を以て對抗し來つてゐる以上、吾も亦敢て開戦を辭せず斷乎として排日の即時禁止實行を強要すべしと主張された。

昭和六年九月十八日滿洲事變突發、終に來るべきものが來たのである。故人は事變前から前記「時局の徹底的根本解決」に「滿洲排日不可分合一解決」の必要を力説して居られたが事變勃發するや先づ日華實業協會は

『支那官民の我國に對する言動は逐年著しく常軌を逸し、友好國として恕す可からざるものあり、絶えず國民に對して排日の思想を鼓吹し、甚だしきは多年國民教育教科書を以て排日思想を涵養し、全支に亘り不法なる排日排貨を行ひ、或は暴力を以て日貨を掠奪し、或は邦人の生命に危害を加へ、其他總有る不法暴戾の行爲を敢てし、遂には經濟上の絶交を標榜するに至り、明白なる敵對的行動を以て挑戰的態度に出で、顧みず、今や我國に對する權益の侵害、名譽の毀損は其極點に達したり、就中支那政府の首班者が排日思想の主たる煽動者たるのみならず、公然我國に對し侮蔑又は挑戰的の言動をなすに至つては到底黙過し難き處なり。

殊に滿洲地方に於ては我權益の侵害、在留邦人居住生命財産の不安日を追ふて増大したるに拘らず、我國の上下は常に善隣の誼を旨とし寛容を以て之に臨みたる事は適々以て彼の侮慢を増長せしめ、遂に今回南滿鐵道線路の破壊及襲撃の如き暴舉を敢てするに至らしめたり。

茲に於てか我國は條約上既得の權益を確保するため、自衛的應急手段を採りたるは當然の措置なりと信ず。吾人は當面の時局が支那側の反省により兩國間直接の折衝を以て一日も速かに收拾せられん事を望むと雖も

此際多年兩國間に累積せる諸懸案を徹底的に解決するは勿論、排日行爲及排日思想を根絶する方法を講じ以て將來永久の平和を確保するは、絶對的に必要なりと痛感す、之が爲め對支關係事業及貿易等の上に蒙るべき犠牲は固より之を忍ぶの覺悟を有するもの也。』

五に相聯絡して略々同意義及以上の強硬なる意見書決議書を公表し、全國各團體齊しく之に倣ひ故人は又大阪十
二實業團體聯合會を發起して同様趣旨の決議をなし、續いて其運動を強化する爲め九月廿八日大阪に於ける

日本棉花同業會、日華經濟協會、大阪貿易同業會、大阪經濟會、大阪工業會、大阪銀行集會所、大阪商工會
議所、大阪實業組合聯合會、大日本紡績聯合會、在華日本紡績同業會、輸出綿糸布同業會

の十一團體を合同して大阪對支經濟聯盟を組織し、幹事に就任、十月初め如左決議を關係當局各方面に致した。

治外法權撤廢反對意見

『支那に於ける排日排貨運動は日支條約を蹂躪し、國際法を無視し、國際信義に悖り人道に反し、正當なる通商貿易を阻害するものにして殊に現時の排日運動は私設團體の暴力的強制による蠻行と云ふべし、而も支那政府は何等の取締を爲さざるのみならず、陰に陽に國民黨をして之が指導に當らしめつゝあり、此の如き事態は支那が法治國たるの實質なきを曝露せるものに外ならず。

吾人は從來支那政府の治外法權撤廢の要求に對し同情を惜しまざりしも、現下の状態に於ては法權撤廢の曉

在支本邦人の生命財産の安全を期し難きこと明かなるにより、支那に於て排日運動を根絶し、學校教科書より排日の章句を抹殺し、將來の保障を爲さざる限り政府は斷じて治外法權の交渉に應ぜざらん事を望む。』

同時に國際聯盟事務總長ドラモンド氏、同次長杉村陽太郎氏並に日本代表芳澤謙吉大使宛如左長文の電報を發して支那問題の正當認識に資した。

『本聯盟は今次滿洲事變の突發を兩國々交上頗る遺憾とし、兩國間の外交談判により成るべく速に其解決せられん事を望む。』雖も、支那に於て下記の如き排日排貨の蠻行が續行せられ事件の解決を困難ならしむる事情につき貴下の考慮を仰がんと欲す。

今回の滿洲事變の突發は日本が條約に基き滿洲に於て經營する國際交通上の幹線たる南滿洲鐵道の線路を支那軍隊が計畫的に爆破した事に由るものなり。雖も其根本は支那官憲が多年日支條約及國際法を無視して日本の正當なる權利を侵害し、且軍隊及一般國民に排日思想を鼓吹し、日支關係を極度に惡化せしめたる結果に外ならず、支那政府は一九〇八年辰丸事件以來多年排日運動を煽揚し、現今に至るまで九回に及びたるが殊に一九一五年以來排日運動は殆ど全國的に擴大し其手段益々惡辣となり、左の如き組織方法により全然國際條約を蹂躪し、國際信義を無視し國際貿易を阻害する蠻行たるに至れり。

(一) 日貨排斥を行ふに當り表面は各市商業會議所、國民黨支部等の主唱により反日會なるものを組織して排日の宣傳に日貨の抑留に努むるを常とし、一般商工業者の同意する否かは其問ふ所に非ず。

(二) 反日會なる私設團體は勝手に規則を制定し、無賴の徒又は學生より成る検査隊を組織し、暴力を以て日貨を掠奪沒收し、又は日貨を取扱ふ商人より不法の税金手数料を徴して日貨の流通を阻害す。

(三) 日貨を賣買する支那商人を私刑に處し、甚だしきは其額に賣國奴と稱する烙印を刻し或は之を捕へて監禁し、若くは檻の内に入れ市街に曝すが如き暴行を爲す事あり。

(四) 支那國有鐵道に於て日本よりの輸入品及び在支日本人工場の生産品に對し同種の支那商品よりも高率の運賃を徴しつゝあり。

(五) 滿洲に移住する朝鮮農夫を迫害し、終に本夏萬寶山事件の如き日支人の衝突を惹起せり。

(六) 支那の各種學校に於ける教科書に排外及排日教材を掲げ就中排日教材は其數三百章に上れるが何れも日本を永遠に敵視するを目的とす。

(七) 在支日本人の郵便物の取扱を拒絶する地方あり。

更に最近上海の抗日會は國民黨(國民政府)の密會に基き本月三日如左不法なる對日經濟絕交の方法を決議したり。

絶交方法 (一) 日貨を買はず、賣らず、運ばず、用ひず。(二) 原料及一切の物品を日本人に供給せず。

(三) 日本船に乗らず、積荷せず。(四) 日本の銀行紙幣を受取らず、取引せず。(五) 日本人と共同せず。(六) 日本人を雇はず。(七) 日本新聞に廣告せず、支那紙に日本貨の廣告を登載せず。(八) 日本人と應對せず。

懲戒方法　懲戒委員會を組織し、違反者の罪重きものは賣國賊として極刑に處す、其他の懲戒方法としては
 (イ)貨物沒收。(ロ)警告。(ハ)財産沒收。(ニ)拘禁して公衆に示す。(ホ)町を引廻す。(ヘ)賣國賊の衣服を着
 せて曝者とする。

施行方法　(一)日本貨検査。(二)七月内に日貨を賣盡し、七月後賣殘は全部倉庫に入れて以後賣るを得ず
 (三)日本人に原料を供給する者も日貨同様に處分す。(四)見張人を埠頭に派し日本船の乗客及び積荷を阻止す
 (五)埠頭苦力に日貨の積卸を禁ぜしむ。(六)日本の銀行より預金を引出し其他清算を三日以内に行ふ。(七)日
 本會社工場住宅の一切の使用人は三日内に辭職し職工に速に退去の準備をなすべし。(八)支那人の使用せる日
 本人は三日内に全部免職すべし。

支那に於ける排日運動は今や商工業者の經濟的運動即ち所謂ボイコットに非ずして暴民團の暴力行爲なり、
 而して現下の排日運動は益々深刻化し、在支日本人の生命財産を脅かし現に香港、九龍、北滿等に於ては日本
 人の慘殺せられたるもの多數に上り、在支日本人は續々として上海及日本に引揚げつゝあり、而かも支那官憲
 は何等排日運動の取締をなさざるのみならず其一心同體たる國民黨を通じて之を煽動指導しつゝあり。

此の如き事態は實に二十世紀に於て他國に類例なき驚くべき蠻行と云ふべく、支那政府が今回の事變に付き
 無抵抗主義を標榜し盛に日本に對し惡宣傳を爲しつゝあるに拘らず、内に於て上記の如き排日運動を煽動する
 は事實上日本に對し武器に依らざる戰爭行爲を行ふものと云はざる可からず。」

四十五

即ち故人は獨り國內に於ける輿論喚起、國論統一、外交後援の爲め寢食を忘れて東奔西走されたのみならず、
 國際聯盟の形勢重大化し、日本の立場が不利に陥つたのは支那側の宣傳と列國の認識不足とに基くのだから之を
 是正せねばならぬとの見地から斯くは聯盟に對しても大いに努力を拂はれた次第で、尙ほ十月六日には大阪中央
 放送局に於て「英支關係二大問題と吾綿業界」と題しラヂオによつて大衆に呼掛けられた。其の中支那問題につ
 いて述べられた部分は左の如し。

『第二に申上げ度い支那問題とは現在民國各地を通じて盛んに行はれつゝある排日排貨の問題である。九月十八
 日の晚支那官兵が我滿鐵線を破壊した爲め起つた所謂滿洲事變は、我軍の神速機敏なる行動によつて直に秩序維
 持が出来ましたので、我國は事態を滿洲に局限するに共に其禍根を絶つべく持久して年來の懸案全部解決をなさ
 んとするものである。然るに支那は逆に凡有る惡宣傳と共に之を國際聯盟に訴へ、列國をして我國を牽制せしめ
 んご試みて居るが、我國は自衛權の發動に外ならざる事變の真相を公明正大なる方針を聲明し、従つて直接交
 渉に依つて事件の解決を圖り、第三國の容喙を認めざる態度を明かにしたので、列國も相當我主張を諒解し支那
 の虫のよい計畫は成功の見込みが薄くなった。そこで支那は彼の常套手段である排日排貨を猛烈にやり出したの
 で、今回の排日は七月上旬萬寶山事件に端を發し當初は微温的部分的であつたが、右様の經緯から最近長江一帶

殊に上海で行ひつゝある遣方は實に亂暴狼藉で殆ど武装せざる敵對行爲に等しきものがある。

元來支那に於ける外貨排斥は對外政策上唯一の武器で、是迄も幾度もなく何か一言へば直に其武器を用ふる。今回も支那全國を通じて排日排貨を遣つて居り、上海に於ける最近の事實を申上けるに、上海各界を網羅せる代表に依つて反日(援僑)會——昨今抗日(救國)會と呼んで居るが——を組織し宣傳、検査、登記、保管其他の各科及各種委員會を設け、一種の私團體に過ぎない其反日會は我等が合法に税金を拂つた商品も不當にも取引運搬を嚴禁し、又は勝手に實業基金なる一種の税金を課し、白晝公然貨物を検査し抑留し押收し掠奪し不當課税し、更に罰金を課し、取扱支那商を體刑に處するの暴狀を敢てし、所謂永遠對日經濟絶交を高唱して居り、只今では全く武力砲火を用ゐざる戰鬪行爲に謂ふも過言でないのである。而も支那政府は如斯く通商條約を蹂躪し國交を破壊し、非法の私團體が公益に等しき暴虐を恣にして居るのを愛國心の發露だから押へられぬと言つて毫も押へないのみならず寧ろ裏面に於て之を煽動して居る。尙最近抗日會は愈々徹底的に經濟絶交實現を期するため、所謂買はず賣らず運ばず用ひずと言ふので、日本人工場の職工及銀行會社の買辦を初めボーイに至るまで日本人の使用人は全部辭職し、日本の銀行も取引せず日本船に乗らず積荷せず荷役せず、日本人の賣買契約を履行せず日本人には食料品さへ賣らずに決定、違反する者は財産沒收其他種々の亂暴な刑罰を定め、甚だしきは放火、暗殺を以て脅かす、郵便、電信、電話の妨害をするに似ふ有様で、こうなつては我在留邦人は立退くより外ないかと思はれる。

無論輸出獎勵とか國產愛用とか内地工業保護とかいふ事は各國にも遣つて居る事で苦情を言ふべきものではないが、支那の排日排貨は前述の如く不法不當、全く敵對行爲に等しきものであつて、而も所謂軍事上には不抵抗を標榜し、經濟及生活の方から凡有る非常手段を以て日本人を撃退しやうといふ陰險なものである。而も一方では無責任極まる宣傳を以て國際聯盟に哀訴して居るが、斯くの如き支那の實情を知つて居るのは嘗て香港で苦い經驗ある英國だけで、他の歐米諸國はまさか現代國家に斯様な非常識な事が行はれて居ると思はない、否我國内でさへ能く其實情を知らない人が多いのは遺憾な事で、最近聯盟理事會で兩國政府は形勢の重大化、事件の擴大を防ぐべく凡有る必要なる手段を探るべしに決議したに拘らず支那は全然之に反對に、必死に形勢の重大化、事件の擴大に努力して居り、爲めに我在支事業及邦人は正當なる生命財産及居住營業の保證さへ危險に瀕するに至つて居る。尙支那が我國に對して排貨をやつたのは九回目であるが、假令へ排貨をやつて居ない時でも排日は絶えず遣つて居るので、廿年來常時、不斷、事毎に排日を宣傳し、小中學校の教科書で日本を不倶戴天の仇敵の如く教へ込んで居り、殊に現國民政府になつてからは打倒日本帝國主義をモットーとし排日を煽る事に依つて國內統一を計つて來たのであるから、今や支那の排日は其國是にも謂ふべき大方針になつて居る。にも拘らず我國は認識を誤つて寧ろ支那の革命運動に同情する穩健外交且つ隱忍自重は、却て彼等をして益々増長し排日は益々暴虐となり、終に暴慢無禮なる侮日になつて今日の狀態に立至り、滿洲問題が起つたのもたしかに此處に一因したのである。故に此際險惡なる當面の排日排貨を絶滅すべきは勿論、同時に根本的に此排日方針排日思想を芟除

して將來の禍根を一掃しなければならぬと思ふ。

由來日支兩國の經濟關係は歴史的地理的に離る可からざる密接なもので、吾等は常に共存共榮を旨とし公明なる國際通商の本義に則つて彼我利益の増進に努めて來た。現に我國は支那に紡績だけでも約二百萬錘二億圓の資本を投じて居り、殊に長江一帯は我阪神と貿易の主要取引地で、滿洲が歴史上其他種々の意味で重要な様に長江は經濟上極めて重要であるが、吾等の通商上に於ける希望は何も特殊の利權ではなく、支那人又は外國人と同様の負擔は喜んで甘受すると共に同様の待遇を主張する所謂門戸開放、機會均等主義のフェアプレイにある。然るに支那は無謀にも全く筋違の敵對的排斥に狂奔し、國を擧げて我經濟施設の排撃に猛進して居り、若し吾々が此際退却したならば恐らく永久の敗退を意味するであらうと思ふ。

そこで上海、東京及大阪の對支關係各團體は蹶然として一齊に奮起し、新聞所報の決議をなして、在留邦人の生命財産及居住營業に對する支那の責任を匡し、現地保護の必要を唱へ、更に滿洲問題と排日との不可分を説き將來の禍根を一掃して永遠の平和を求むべく根本的解決を主張して居る次第である。而るに我國の一部官人は大阪の所謂硬論が何時迄續くか冷眼する向もあるこの事であるが、無論一時支那向の貿易は杜絶し經濟上甚大の打撃を蒙るべきも吾等は此際の犠牲は忍んでも將來の爲に飽迄根本的の解決を希望して止まないものである。』

四十六

今や此放送が好個の而も悲しき記念となつた譯で、翌昭和七年一月卅一日上海事變が突發するに直ぐ渣焉他界されて了つた。

我對支問題の愈々益々重大に赴く際斯人を喪つた事は實に邦家の爲め惜しみても餘りある遺憾事であるが、併し爾來國論の主潮が翕然として故人が多年熱心高唱し續けられた『對支強硬外交』の方針に傾き、全く其統一を見るに至つたことは聊か以て君の英靈を慰むるに足るであらう。

喜多又藏先生贊並序



二十世紀之世界一實業競爭之世界也惟棉與鐵更佔實業界之重要位置、

喜多又藏先生爲遠東棉業界之先覺亦實業界之巨擘凡所經營規模宏遠屈指計之蓋已數十寒暑矣有無之懋遷邦家之利濟其裨補於世者豈淺鮮哉故歐美各都市間咸目爲東亞商場第一流人物而尤與我國棉商之情感爲更洽以其目光遠大非斤斤於淺近者所可同日語緬憶

典型曷勝景仰爰爲之贊曰

偉哉喜君 才華卓越 智圓行方 地靈人傑

遠矚高瞻 豐功駿業 衣被衆生 利民裕國

廣廈千萬 遐邇戴德 道範堪欽 懿型是則

皇華奉使 壇坫蜚聲 爲代議士 妙緒縱橫

生而爲英 歿而爲靈 千秋萬歲 永享令名

漢口前紗業公會總薰孫志堂撰贈

（志堂）

講演と遺稿

講演と遺稿

埃及紀行 (明治三十三年二月)

Three days in Cairo.

The Jewish physician in the story of the Humppback says, "He who has not seen Cairo has not seen the world; its soil is gold; its Nile is a wonder; its women are like the black-eyed virgins of Paradise." It was my long-wished-for intention to visit Egypt once in my life, to seek the antiquities and ruins in one of the oldest civilized countries in the world. Fortunately this was accomplished at last. Leaving Bombay on the last day but one in December, 1899, I first aimed to give a minute description of all things I have seen there, when I was asked by the Editor of the "Withered leaf of Cococanut", but I changed my mind

afterward as it would become too big a volume. I relate now a brief itinerary of my short stay in Cairo of three days; yet, I am assured it may suffice to show the readers the beauty of Egypt.

First day.

On the 2nd February this year, by the morning express, I left Alexandria behind to visit Cairo. The distance between the two worldly known cities is 131 miles by rail, which can be travelled very comfortably in 3½ hours only. Soon after leaving Alexandria, a salt lagune called Lake Marcotis is skirted to the right, where every sort of waterfowl's may be seen. In the back ground, Pompey's Pillar and other well known objects of the town are sighted, scattering here and there are many magnificent red walled villa of Egyptian grandees. Generally these are enclosed within beautiful courtyards. Their doors are always closed, and each have a lattice outside. There are what natives call "Harems" where well-to-do Egyptian keep women for their pleasure.

Running along Mahmoodeah canal, by which Alexandrians get their supply of fresh water from the Nile, the train proceeds into the Delta at Kafr-Zayat after crossing Rosetta branch of the Nile. In the Delta, the precious alluvial deposit, washed down annually by the flooded Nile from its mysterious reservoirs in the Abyssinian mountains, nourishes cotton plantations, sugar fields, and grains of every kind abound, thus rendering the use of any other manurings entirely unnecessary. The inundation of the Nile can be seen at Khartoum in March, at Dongola in May and commences in Egypt about the end of June. It reaches its greatest height towards the end of September, remaining for about fifteen days at about 24ft. above low water level, after which a gradual subsidence takes place. If it rises to 30 ft. great damage ensues; if less than 18 ft. famine results in many parts. In the Delta nothing could be seen except everlasting green fields mingled with plenty mud villages with their little white mosques and minarets. The divisions of the land are not, as in Japan made by hedges or walls, but by countless canals, running like a net work of the spider nest over the vast plain.

Watering the land from these canals is done by the "Shadoof" and the "Sakieh" which are both very primitive implements but seems to one's eyes interesting. It is funny to far strangers that black veiled country women filling water into the rude, great earthen pitchers,

which they bring back afterward to their separate houses balancing them upon their heads so skillfully. Palm tree grows very flowishingly throughout the Delta and farmers seem to be busy for their fields using numerous camels or small clever donkeys. Such characteristic picture realizes the thought which we always dream in younger days at school.

Passing Tantah, one of the greatest towns in the Delta the train crosses Daniietta branch of the Nile at Benha.

Famous barrage, or dam, constructed originally by a French engineer to hold up the water of the river at High Nile and distribute them with more equality during the Low, is situated at a distance of 3 miles from Benha. Approaching Cairo the sight of Pyramid on the right hand side, and numerous miners and domes grizzling with sun shine on the left, become visible, every mile of nearer approach increased my wonder exceedingly by its splendid, charming scenery of the neighborhood. The trains reached the terminus of Cairo shortly after noon and I drove to Hotel de Bristol. After lunch, taking with me a dragoman (*guide*) by the courtesy of the hotel conductor, I went to Gizeh by a carriage, where marvelous, biggest Pyramid stands. The journey to Pyramids passes first the new guarder of Cairo, called

Ismaileryah, to the big iron bridge over the Nile, known as Kasr-el-Nil, which was built by late Ismail Pasha, an extravagant former Khedive. Hence the road runs straight to the Pyramids on a broad firm embankment, constructed by the Government for the use of the Prince of Wales and his party in 1868. Distance from Cairo to the foot of Pyramids is ten miles or an hour and a half drive.

Alighting from the carriage at the front of the Mene-House Hotel I proceeded to the Pyramids.

Upon a rocky plateau of limestone, about forty feet above the surrounding field, are situated the three great pyramids, several smaller ones, many ancient tombs, and the colossal Sphinx. From the vast immensity of the desert landscape and absence of object for comparison, the Pyramids seem scarcely larger on approaching them than when seen two or three miles off, but when actually reached, a sence of their immensity comes over the mind with most appalling effect. The best way to get an idea of their immense magnitude, is to stand in the centre of one side and look up to the summit, or to watch down from the apex. In Japan the Pyramids are mistranslated as "Triangle towers"; but the visitors will discover

this is mistaken. Pyramids really are square sided structures. We can't find out the true figure from anywhere as they are so large as an ordinary eye-sight can't be reached.

Sir Gardner Wilkinson gives the dimension of the Great Pyramid, or Pyramid of Cheaps as follows:

Base line, formerly 765 ft; Present 732 ft.

Perpendicular height, formerly 480 ft., Present 460 ft.

Area, formerly 571,536 sq. ft, Present 535,824 sq. ft.

The usual process in Egyptian Pyramids building, it seems to me, has been to leave a nucleus of solid rock, and enclose it in a series of steps, formed of huge blocks of stone. Fresh series of steps were added to the outside, till the required dimensions were obtained. Then the steps were filled up with smooth polished stones, covered with sculptures and inscriptions.

From most of the Pyramids the outer polished stones have been removed, to furnish materials for the edifices of Mohammedan epoch.

So that now there remain in most cases the series of Colossal steps by which visitors

are able to climb to the summit. The weight of the Great Pyramid will amount, if calculated, to seven million tons and its materials would have built over 20,000 eight roomed cottages, capable for residence for 150,000 people. To ascend and visit the interior of the Great Pyramid, a payment of two shillings will furnish every visitor to take up by two or if desired, three strong muscular bidwins. From the top a glorious view is obtained stretching over the vast green river valley and beautiful town of Cairo just underneath of the visitors' eye, and to see the moon rise and sun set over the splendid prospect in a never-to-be-forgotten sight.

The writer, however, thought it was too hard a work for his extremely short legs to ascend to the top, surpassing colossal blocks each of 3-4 feet or over broad and high. Subsequently, he reconnoitered only the interior of the structure. The interior of Great Pyramid was forcibly opened to view, a thousand years ago, in 820 A. D. At the present day, the visitor enters at about 40' high from the base of the northern side, and descends in to Subterranean Chamber, about 90' below the base of Pyramid. It is arranged by an officer that the builders intended this chamber to be mistaken for the principal chamber of the Pyramid, and conserve the real resting place of the royal mummy unrevealed. At rather more than 60' from the

entrance an upward passage, once carefully closed with an immense block of stone, leads towards the centre of the Pyramid. At a distance of 125' it reaches what is called the Great Gallery. Before ascending the Great Gallery, a horizontal passage is seen, 110' in length, leading to a chamber 18' X 17' and 20' high known as the Queens' chamber. The Kings Chamber, the chief chamber of the Pyramid, 34' 3" in length, 17' 1" broad, and 19' 1" in height is further up from the Queens' Chamber by 151'; it contains the remains of lidless sarcophagus of red granite. If the mummy of King Cheaps, who is supposed builder some 5,000 years ago, ever rested in it; the Pyramid must have been originally built to guard that mummy. It cannot be said that the idea has been successfully worked out. The Pyramid is there but the great King's remains have disappeared how or when, none can say. Above the Kings chamber there are two or three other rooms, evidently constructed to lighten the immense weight of the upper part.

These can only be traced by the assistance of two strong Arabs, over proceeding ahead with a candle. In the chamber they burn magnesium to show the visitors clearly its magnificence. Each chamber is piled up by the great granite stones, each bigger than the stones of such huge stones can't be inserted even the finest transparent paper. What the Pyramids really were intended for, and who built them are questions over which there has been an enormous argument and conjecture. Egyptologists are generally agreed that they are royal tombs, the entrance of which was closed up after the royal mummies were put in. There are over fifteen pyramids in all at Egypt though the rest are smaller than the Great Pyramid which I had visited.

On the camel back after the pyramid I saw the colossal mystery, the Sphinx. In the vicinity, there are many old temples or tombs. Some of these are chambers excavated in the solid rocks.

At the front of Sphinx, it may be very interesting for the strangers to take photo for their memoirs of the visit to Egypt.

Second day.

It may not be out of place to write about the general views of Cairo before I proceed to the observation of the day. At or near the present site of the city, Cairo stands from the time immemorial. Modern Cairo, the biggest town in whole Africa, is situated about 20 miles southward from the Delta, on the east bank of the Nile, and contains a population of over five lacks. Unlike Alexandria, it possesses a character of its own; and at every step the travellers will feel probably as if they were in the time of Arabian nights.

The city is divided by two great divisions of Old and New, in the latter it embraces the Egyptian Government and many other public buildings, and the town is greatly Europeanized. Except many portion of Old Cairo, the streets are broad and fine, through which electric cars, horse carriages and native omnibus are seen passing. As it is a capital of Egypt, the Khedive, viceroy of the Turkish Government, has his palace in the place. Legitimately speaking, Egypt belongs to the Turkish; but all political affairs are at the mercy of other European powers. There are inhabitants of over 15,000 of European nations, English being most influential among them; and in ordinary time about 6,000 British soldiers are stationed,

as the result of the war of 1882. Wherever we go the Turkish colors, tinged with white new moon and a star in the red, are displayed, but everything does not possess the sign of the independent country. We must exceedingly compassionate the pusillanimous and inactiveness of its people. From the point of commercial view, Cairo is the great distributing centre in Egypt, having the best situation, coupled with the good connection with different districts by rails or waterways.

Soudan trade seems to be most prominent one. In the Nile, steamers of over 500 tons navigate up to the interior over 1,000 miles and it may not be wrong to guess from the present that the great collapse in trade will come forward after the railroad to Soudan, which is now under construction of the English, is completed. At present the traffic is chiefly done by caravans and Nile waters.

Cairo, now-a-days, however, is well known throughout the world by its good, dry, health yclimate and full of famous antiques, and is visited by Europeans and Americans at all times.

Cairo season lasts from the month of November till next March and during the interval so many fine Hotels, some being able to meet 300 guests are all occupied by the tourists.

This day early morning, I was on a visit to different mosques in the town. The mosques are the buildings in which the Muslim rites of worship are conducted, each having very magnificent looks from the outside. In the mosques are found no pictures, no statues, no representations of living creatures. Inscriptions from the Kur'an, a single chair, a pulpit and numerous paving mats, are all that adorns the interior of these immense edifices. Every mosque, in the middle of the wall which is the eastward of the building, that is the direction to Mecca, is curved, using this part marbles, in the front of which the prayers worship sitting on matings. "There are innumerable mosques in Cairo. The writer only has seen three of them, namely Mohamed Ali, Sultan Hassan, and El-Azhar. Mohamed Ali mosques is on top of the Citadel. The Citadel is like a little walled town, built on the flank of a hill overlooking the town. Mosque El-Azhar, or Splendid, is very fine and is the chief University of the Mohammedan world. The number of students ranges from 10,000 to 12,000.

The street running through the very heart of the City is called the Moosku. It forms the French Quarter, and well provided with shops. Near the Moosku are numerous bazaars, which are amongst the chief curiosities of Cairo. Many of them have specialities; for instance,

cloth, porcelain, carpet, embroidery, jewelery, glass and brass works, etc. There is one curious bazaar, where boots, shoes and slippers are almost the only articles for sale.

The customs and manners of Egyptians are quite peculiar to the strangers, especially that of women. The Egyptian women at out-of-doors are enveloped in a huge, black gown, and the face veil, reaching from the head to the feet is put on. Nothing can be seen except two eyes and this kind of dressing may be very good for pock-marked girls or one who has deep black color like Soudanese. All streets are crowded with such women, and peoples of different nations with their own costumes. The scene is simply just like what we call "Night procession of a hundred fiends".

There are remains of the church of Abou Sirgeh, said to have been the resting places of Joseph and Mary and the child Jesus during the flight into Egypt.

Opposite Old Cairo is the pleasant island of Roda with pretty gardens, a favorite place of resort from Cairo. From Roda there are interesting views of the Nile and its banks. The celebrated Nilometir is on the extreme south of the island. The erection of this Nilometir was in very remote years, and in ancient times it was used by the government for measuring the

rise of the river. Government taxes was levied according to the height attained in this metre. I was attracted very much in my mind at this place, conjecturing the relation of the Nile with the country from many thousand years back. At night I visited a public dancing hall of the native girls. There many well figured Egyptian girls, ornamented with gold and precious stones, were dancing. Strangers may visit only for curiosity, but it is not the place to go often for ladies and gentlemen. I could not bear to watch them till the end; the reason why, I leave it to the imagination of the readers.

Third day.

Awakening very early this morning, the writer went out to take a Turkish bath. The bath house I went is told to be the best in the city under a European management and is richly decorated with brick and stone edifice. At a payment of five piastre tariff, one native waiter took me to a room in which I changed the dress; then I was lying on a table in a vapour room for about 30 minutes. Underneath and inside of the wall of this room, many steam pipes pass, keeping up the heat temperature over ninety degree Farenheight. It was very hard work

for me to lay half an hour there. In adjoined room the natives with soap and sponge, rub throughout the body, and I wondered seeing how such enormous amount of dirt came out. After that process finished, to wash with fresh hot or cold water, or to swim in a small pod, or to be rubbed by shampooers, afforded to visitors very pleasant and delightful. Egyptian way of shampooing is just like Japanese style.

I drove afterward to the Museum at Gizeh. The Museum is in the palace of the same name, close to the Nile and contains the remarkable collection of Egyptian antiquities. No doubt, it surpasses every other institutions of the kind by reason of the number of monument sit contains. Doubtlessly, this will form the great reference to the people who are in the line of the science as there are collected, according their dynasties, numerous stone sculptures, idols, sarcophagus; wooden carvings; ladies ornaments, clothings, kitchen utensils, etc., all used in Egypt many thousand years ago. They are mostly excavations from the tombs, temples, and pyramids. In one room, hundreds of old mummies of Egyptian royal families are exhibited, and I was shocked with the great astonishment when I found the mummies of dogs and fowls among them.

The present Government contemplates, as soon as finances are available, to build fire proof building to protect such priceless collections. I am extremely sorry at the inability to give a complete descriptions of the principal objects displayed.

Passing along the Palace of present Khedive, at a distance of five miles from the town, there stands the remains of the wonderful Oberisk at Heliopolis. It is one piece stone of colossal granite 68' high above the pavement and bears the name of the founder on its front face. Very close to the Oberisk, a big ostrich farm is located in which more than 1,400 birds can be seen. Some tamed ostriches do the native loading.

The above is the rough account of my short stay in Cairo. It may not be sufficient to the visitors should they want to see thoroughly within a fortnight. As I had some urgent business to do in Bombay I hurried to leave such fine place promising to revisit in another day. Most of our glove trotters pass without seeing Cairo and they complain the heat and monotonous view of Suez canal. I shall not hesitate to recommend very strongly for such travellers to break their journeys in Egypt, which doubtless repay the time they spared, though itself is rather expensive. I have many other interesting things to write which I expect to con-

tribute some day in future. In conclusion, I thank heartily to the editors of the Journal, who were so kind to spare me valuable space for this poor and lengthy contribution.

歐 米 視 察 談

大正三年七月七日・於本社

此度の旅行で見聞した大體を御話したいと思ふてゐましたが、歸國後日も淺し毎日種々の用に追はれて、未だ手帳も調べる餘暇がありませんので或問題を捉へて委しく御話することは出来ませぬ。今晚は昨年より行つて來た道中の概略を御話することにし、或特殊の問題につきましては更めて後日に譲つることに致します。

昨年七月廿二日に日本を立ちまして以來、諸君に種々御世話になり、殊に米國なり印度なりでは非常に迷惑を掛け衷心大に感謝してゐることを先づ第一に此席で御禮を申し上げます。

昨年七月廿二日安井君と一緒に神戸から「エムブレス・オブ・ルシア」に乗船しました。「ルシア」は「カナデアン・パシフィック・メール」の新造船で第二回の航海でありました、却々立派な船で船體も云ひ、設備も謂ひ蘇土以東に比なしに信する位です、凡て最新式のものを用ひてゐますから誠に便利です、而て速力も非常に早く、横濱「ビクトリア」間を約九日半位で走りました、「ビクトリア」から「バンクーバー」に着て一泊しました、次で「シヤトル」から連絡船で「タコマ」に行き桑港に着きました、其沿道は入江で中々風景に富むてゐるま

す、周囲には大きな森林がある、何れの所でも「パーク」は天然の山林に道をつけたものが多い、其邊は氣候も寒し、殊に私の参りました時分は寒い時で、高い山々には雪が積つてゐました、「バンクバー」は加奈陀太平洋鐵道の太平洋岸に於ける終點です「ヴァンクーバー」から「モントリアル」に達する英領加奈陀横斷鐵道があります、「シヤトル」は近頃急速進歩した港で小麥、材木等の輸出港殊に「アラスカ」の金礦發見以來其方面の沿岸航路頻盛で之より以前から發達した「タコマ」港等も其繁榮を奪はれる様になりました。「タコマ」は丁度私が行つた時分には薔薇が一面に咲いて居りましたが、遙か彼方には邦人の所謂「タコマ」富士と稱ばれてゐる山を望み氣候も良く、風景も殊に宜しい所です。桑港は合衆國を横斷する三つの鐵道の發着點で、連絡も能く出來てます、御承知の來年一月から巴奈馬記念大博覽會ができるのですから熱心に準備中です、此地は先年の大地震で殆んど全部破壊されましたが、却て跡がよくなつてゐます、此邊は例の排日問題の中心で、在留日本人の爲めに御氣の毒な感がしました。排日問題に就ては先日此講演會で日置君が委しく話されたのですから重ねて申しませぬ、桑港には三日の滞在で堡都に行きました其間には「コロラド・スプリング」を通り「テキサス」に入りてからは段々熱くなりました。

堡都に着いたのは八月の十五日で、山川其他の諸君に迎へられ三ヶ月程居りました、堡都滞在中は先には山川君に案内せられて南「テキサス」方面の「アピリン」「ヒューストン」「ガルヴェストン」「サンアントニ」方面等に行き、次には小林君に案内されて北「テキサス」「オクラホマシチー」「ホバート」等を旅行しました。

「オクラホマシチー」には上島君が居られました、「ホバート」は先には小林君、後には塚口君が行つて居られた所です、堡都は「テキサス」の西北に位して三十八哩を隔て、「グラス」を兩立してゐます。堡都は鐵道の中心で且工業地であります、將來は堡都の方が商工業の方から上にならうと思はれます、かゝる所へ我出張所の根據を置かれたのは實に地の利を得た譯で山田君なり安井君なりが大變に宜しき地を撰ばれたこと、喜んでおります。

「テキサス」全體は大きなもので東西一千哩もあり棉等は非常に澤山作つてますが、勞働者が却て不足で、勞働者さへあればまだまだ作る餘地は廣いものです、併し餘り人口の多い町はありませぬ。「テキサス」では「サンアントニオ」を云ふ町が最も大きいのですが、之でさへ十五萬位しかありません、新開地で元「メキシコ」人の占領して居つた所を其後米人が乗取つたので今猶昔の「メキシコ」の俵ばれる跡が所々あります、「ガルベストーン」は合衆國を通じて棉の港としては最大の輸出港です、昨年は約四百萬俵の棉を輸出しました、金額に於ては合衆國中紐育に次ぐ港です、人口は五萬に足らず従つて勞働者も少ない、私の行つた時には勞働者の「ストライキ」があつて四十何艘かの船が動かなくなつたことがあります、一旦動きだすに大したものです。十一月五日に堡都を立ち小林君に案内されて「アーカンソー」の「リッフルロック」(首府)や「メモフェイス」に赴きました「メモフェイス」は「テンネッシー」の「ミシッピ」河に沿ひ時物が盛に出る所で取引所もあります、私は「ミシッピ」河は非常に大きいと豫想しておりましたが、鐵橋の架つてゐるのを見て揚子江よりは小さいと感じました、此所には非常に大きな荷工造場があります、其から「ニューオリンス」に行きました、之も大きな港で今は棉の出る數

では「ガルベストーン」に敗けるが兎に角大きな港です。巴奈馬の運河が開通する様になれば「ニューオリンス」は非常に盛んになること、思ひます。棉、砂糖、米等が最大の貿易品で又「バナ、」も非常に澤山来る。毎船青い「バナナ」を船一杯に積んで来るのを特別列車に積替へて内地へ送ります。其荷役は有名なもので私も一寸見ましたが、數時間によつてしまひ、あざやかなものです。其れから巴奈馬運河は中々の問題でありまして、之は安井君が委しく御話になつて居りますから、其方から御聞きになるがよからうと思ひまして此所では略します。「ニューオリンス」を走つて「メリディアン」「セルマ」「モンゴメリー」に行きました。此邊は所謂「アップランド」棉の産地で、蘇士經由で来た棉は「モンゴメリー」邊の棉です。「サバナ」は東海岸では最大な棉港です。「サバナ」河を十八哩溯つた所にありまして、船と汽車との連絡は非常にうまくできてます。「シャロット」は南部紡績の中心で澤山の紡績工場があります。「ワシントン」は諸君の能く知つておられる所ですから略します。紐育で日置君に迎へられて「ホテル・ヴァンダービルト」に宿をこりました。紐育は兎も角大きな町で、金に飽かせた町である。人間は皆忙しく活動しておる。米國の大は紐育に代表されてる。商業も紐育を中心にしてゐる。大きな船渠が數知れずあるが、皆大洋航路の汽船で充ちておる。英、獨、佛、伊等の大きな定期船が皆紐育をめぐけて来る。之が紐育の港に帆柱を並べて停船し皆此船渠を利用してゐる。見るさへ實に壯觀なものです。紐育は綿の取引所としても米國第一であります。其取引は實に盛んで殊に農務局の發表の出る時等は最も盛んです。其他委しいことは略しまして兎に角亞米利加は歩いて見るに非常に大きな國であります。堡都から紐育まで三

週間で其は忙がしい。途中には汽車の窓から見ても山野許りで、家の一軒も見えないことが度々あります。あの大きな米國が鑛物なり農産物で充ちてゐる。日本の如きから見れば誠に羨ましく思はれますが日本人等も「エシアチック」にして排斥せられてゐるから仕方がない。只亞米利加は見ただけのことだらうと思ひます。棉の商賣は紐育を中心として鐵道の便、電信電話の連絡充分なることは實に驚くの外ありません。堡都の「オフィス」は「エキスチエンヂ」の二階に在ります。其三階に「エキスチエンヂ・ルーム」がある「エキスチエンヂ・ルーム」は寄合場所で紐育の取引所で開かれる相場が刻々にやつて来るから、全く紐育の取引所に居るのと同じ様である。其傍に電信局がある。紐育へ五分乃至十分で返信がされる。電話でも日本の様に相手の人が居ても居なくても料金を取るの違ひ、相手の人が居なければ料金はこりませぬ。こう云ふ風に通信機關の便利なのは一は之等の機關が私設であるから充分勉強して出来るだけ便宜を興へております。電信でも「ナイト・レッター」云ふもの即ち暗號を使はぬ。普通語で書いたもので時間さへそう急ぎさへしなかつたならば、其晩の通信の少ない間に打つてくれる。其れで翌朝先方に届く様になつてます。之を利用すれば料金は半額で、翌朝相手の人が事務所へ來れば「テーブル」の上に乗せてある。誠に便利なものです。近頃歐州でも時間が少し遅くなつてもかまはなければ料金の安い便利なものが盛んに利用されてゐます。殊に「オーシアン・レッター」の如きは大洋航海中途中で互に行違ひになる汽船の名を調べて置いて掲示してある。而して途中で會つた時に郵便物を托するに先方の船が着港後直ちに其れを宛名の人に書留で届けてくれる。無線電信では料金が高いし向ふへ着陸してから發信する

ミ遅過ぎるミ云ふ様な用向の通信には至極便利である、事務所で電信を發送するに際し室内に常設せる「スイッチ」を一ツ押せば直ぐミりに来てくれる、何事も此通り、會社員でも椅子に寄りながら總ての用向を達せらるゝ様に器械の利用は普及されてます、殊に堡都の「エクスチェンジ」等は「シーズン」になれば電信局員が出張して呉れるのであります、米國では機械の利用が進歩してゐるのみならず、自分の言葉ミ文章ミが一致してゐるここは愈々機械を助けるのである、言葉天自身が即ち文章である「アツデングマシーン」や「タイプライター」のみならず近頃は蓄音機まで其用向に利用されて居るので、自分が手紙に書かうミ思ふミを蓄音機に吹き込むで置くミ「タイプスト」が之を暇な時に出して手紙にするミ云ふ風になる、加ふるに一般に「コムモンセンス」が發達してゐる、内地の何れの場所からでも海外貿易の往復通信ができる様に出来てゐる、日本では貿易でもしたいミ思へば専門學校へ入學して大に勉強せねば不自由である、英語も學ばねばならぬ、語學だけでも二通りも三通りも習はなければ困る、彼等は其必要がない、其丈け習ふ時間が儉約できる、日本では手紙の文章ミ云ふもの迄も一通り稽古しなければならぬ、實に不利益な地位にあるミを切に感じました。

紐育滞在中は「ナイヤガラ」の瀧や「シカゴ」の町等を見たいミ思ふて日置君に案内を頼みました。市俄古は合衆國全鐵道の中心點です、鐵道ミ湖水ミの連絡がこれて盛んなものです「ミシガン」「エリー」「オンタリオ」等の湖水には一萬噸以上の船が随分あります、湖上保險ミでも云ふのでせう。其保險だけで随分よい顧客だミ云ふミです、倫敦あたりの「マリン・アンダーライター」等はよい「レート」を附しておるミです。「ナイヤガ

ラ」は風光を主ミして居るミ思つてゐましたが殆どおしけもなく水力電氣に用ひられてゐる、日本人が見れば文明は風光を破壊するミでも嘆ずるでせうが其周圍には工場が實に澤山あります。

「ボストン」は古い「タウン」である歐州直通航路がある。其近傍は北部紡績の中心地です。米國最大紡績「アムスキーグ」ミ云ふ大きな工場を目宛にして拜見しようミしたが、中々見せてくれませぬ、一體に此邊の大工場は秘密主義を採つて居ります、「ボストン」で或人の曰ふのを聞きましたに「ヤンキー」ミ云ふのは米人の一種の誇稱の様に聞きました、或は私の聞き違ひかも知れませぬが、私は確かにそう聞いたミ信じてゐます、吾々は「ヤンキー」ミ云へば何だか侮辱する様に思ふて居ましたが、其所の人達は「ニューイングランド」の固有の稱號の様に思つて居るらしい、其れから「ホテル」の「ボーイ」等も日本人の客を見て時々「ジャップ」等ミ平氣で曰ふてるのを見ます、之は別段惡意で曰ふてゐるのではない様である、寧ろ「ジャップ」ミ云はれて立腹する等は野暮かも知れぬミ思ふたミがあります、米國は又鐵道の盛んな國で、大に最新式を發揮してゐる、紐育「シカゴ」間に亘る「ツエンチー・センチユリー・レール」等距離九百哩其間十九時間で走る、設備も行届いて株式の相場等も汽車中に發表せられます。

十二月廿四日紐育を「ルシタニア」に乗込むて歐州に向ひました、此船は「キューナード」線で最も早い船で一時間廿四哩位走ります、各汽船會社が速力の「レコード」を競つた時、此船が大西洋を五日で横斷するミ云ふので此船が出来た當時は實に威張つたものであつたミです、造船業も今日は速力ばかり餘り早くなつては航海の

趣味がなくなる云ふので此頃は却て設備に重きを置いて競争する傾向になつて來ました、其後には「アキタニア」が出來又「ハンブルク・アメリカン・ライン」の「イムペラトール」等、五萬噸以上の大きな船が出來、其食堂、喫煙室、水泳場等色々な設備に善美を争ひ實に贅澤を盡して居ります。

李浦に上陸しましたが印度の方から早く來る様急がれたので倫敦には十二月三十日に着き、正月元日朝十一時「ドーバー」から「カレー」に渡りました、其連絡は實にうまく行きます、船の速力も早く税關も簡易で慣れれば非常に容易であります、倫敦には一日半居ただけです、丁度其時分は日が短かく晝でも瓦斯を點し實に不愉快であつた、佛國では雪で一面に白い間を眺めて通り過ぎ「マルセーユ」から「ビーオー」の船で地中海を横切りました、地中海は思つたよりは大きな海で「マルセーユ」から「ポルトセード」まで四晝夜半かかりました「ポルトセード」では伊國「プリンジツシ」港經由大英國、印度東洋、濠州及東部亞弗利加行郵便物を連絡船より轉載致します、僕は其郵便物の多量なるに驚きました。英國より東洋濠州は彼阿郵船便で二週一回、印度行は毎週一回で、毎船印度行七八千袋、夫れは航海中仕分けて各地方に本船着後眞先に發送するので、大英國の殖民地も母國運鎖を巧みに維持せる事は實に行届いたものを感じました。

蘇士運河延長八十六哩、本船は徐行で其通過に十六時間を費し紅海を南に亞丁に寄港、更らに「サルセツト」號に轉乘、一月十六日孟買に着きました、冬の印度洋は實に波の穏かなもので、水面鏡の様です、尤も「モンスーン」の頃には多少荒れることありますが、平素は池より靜かな氣がします、孟買では楠本君等一同に「ビーオー」

の「ランチ」で迎へられ十日間孟買に滞在しました、此前孟買を去つたのは明治卅五年の春です、丁度其から十二年半目に孟買に行つて見ます、其間の孟買の發達は又一しきり進んで居ました、特に目立つて感じたのは全體の日本人が殖へ、日本商船の盛んになつたことです、棉にしても百二十萬俵を日本に送り實に立派な商賣をやつてゐる、而も充分土人の尊敬を受けて土地に勢力あることは恐らく世界中孟買に若くものはなからうと思はれる。全體から見れば日本人の立場として斯くの如く堂々たる威嚴を保ち商賣に従事してゐるのは孟買が第一でせう、或處では賤業を營むで日本人として爾餘の同胞の體面をけがしてゐる様なことも間々あるが孟買では夫れがない。

一月廿六日孟買を出發して杉山君ミ一所に「アコラ」に太田君、「アコート」に「カラシヤ」に嶋田君、「ウムラオチー」に八木君、「ダマンガム」に中井君、「ワルダ」に出口君を順次訪問「ナグプアー」迄行きました、此邊は所謂「オムラ」棉の産地で、其等の土地に於ける我社の勢力は非常なものです、殊に「アコラ」に於ける太田君の勢力は實に偉大なものです、此邊は印度人の所謂 Θ の商標を知らぬものは殆んどありません、本年は取分け内地の買付け多く各店共一箇所で一萬俵以上の買付けがありました、全く内地に行つて居らるゝ人達の御盡力に依るのです。

杉山君ミ「ナグプアー」で分れ「カルカッタ」で青木、木下兩君に迎へられ其翌日本下君ミ一所に「カルカッタ」から蘭貢に行きました、蘭貢には四日程滞在して甲谷陀に引返しました、蘭貢は有名な米の輸出港です、一體印度方面の大きな港は大抵蘭貢の米、甲谷陀の麻、孟買の棉花ミ云ふ様に一、二の特殊な貿易品をもつておるこ

です、蘭貢の市外小高き丘上に、黄金塔にて金むくの堂があり、夕陽に照り返された時なごは實に美觀です、佛敎國ですから其横には大なる石像の涅槃があります。

蘭貢は「イラワデー」河口を二十哩程溯つた所に在つて内地からの米の集散地です、此邊は一體に女の方がよく働きました男子は勞働を好まない人種ですから年々印度人が稼ぎに来るのです、蘭貢から「イラワデー」河に沿ふて鐵道がある、英政府は「マンダレイ」から「バーモ」經由支那雲南省騰越に入り四川に通ずる鐵道敷設權を得んごして内々運動して居る、他日此線路で陸上交通が一層の便宜を與へるごご思ひます。

甲谷陀は「ガンヂス」分流から八十哩溯つた所にあります、其河流中には「ジエームス・マリー」にて極めて急流で航海者を困らせる所があり、出入船は河流八十哩、其外に河口より海上四十哩の處まで水先案内をこるの満潮時を利用して通航します、日中でなければ航海は出来ませぬ、此邊の印度人は「ベンガリー」ご云ひ伶俐で麻の輸出、綿布の輸入貿易中々盛んです、將來は日本の華客場ごして大に見込みのある所です、甲谷陀市には有名な動、植物園があります、茲に三日間居つて「ダージリン」の方へ行きました、印度の東北西藏の國境にある「ダージリン」に往くには面白い輕便鐵道によるので、高い山をぐるぐる「ロープ・システム」で上つて行くのです、前に「ヒマラヤ」の大山脈を控へ、遠くには世界最高山なる「エベレスト」山も見える、其鐵道は遊覽線であるご思つてゐましたが、遊覽交通の外に軍事上の意味を以て架設せられてをる、此高地に英兵三個聯隊が駐屯して居ります、此地は西藏に對する英國の重要な地點になつてゐます、其れで外國人が之から西藏に入るの

は餘程關所が六ヶ敷いのです、前は西藏が危險な所だご云ふので入り難かつたが、今は外國人に英國の抱負のある所を看破せらるゝのを恐れて中々通行させぬ様にしてをる、現に先年日本の探檢家が西藏の古跡を探檢するのに變裝して漸く通過したごごさへあります、「ダージリン」の周圍は茶園が多い所謂「ダージリンチー」は價も高く品質も良しい、更に甲谷陀に引返し其次は「ブダガヤ」に行きました、此地は釋迦が菩提樹の下に悟道したご云ふ所で一時埋没して居たのを英人が發掘したのです、之は「ガヤ」停車場から六哩位馬車で行了た所で、靈地ではあるが高僧が洗足で錢を食ほる所等は何だか難有味が薄らぐ所もあります、次いで「ベナレス」「アラハバツド」「ラクノー」「カンボール」「エタワ」「アリガ」を経て「チャンドウシー」に行きました、此邊は「ガンヂス」及「ジャムナ」河の流域で豊饒な地方です、「ベナレス」邊は印度人が信仰心で年々川に浴する爲澤山來ます、「ラクノー」はミューチニーの有名な古跡があります、「カウンボール」「エタワ」は「ベンゴール」棉の中心です、「チャンドウシー」は「ベンゴール・スーパーフアイン」の産地です。

次で「アグラ」から「デリー」に行きました、此邊は印度に行く人は一度見なければならぬ所で、「モーガル」帝王時代に建立した立派な堂宇が數多あります、總て大理石で寶石をちりばめた壯麗なものです、「デリー」は現今印度の中央政府のある所です「ゼーブル」は土人王國で殺生禁斷の地であります、孔雀ごか猿ごか人間を恐れず平氣で遊んで居る、之から「ピラムガム」を通り「ドレラ」方面へ出ました、此邊は随分暑くありました棉圃は鐵道沿線兩側に渡り殊に「ワドワン」附近が最も盛です、丁度「テキサス」に往つた氣持がしました、「ア

メダバヅド」は紡績の盛な所です、此所に紡績工場を見て「ブローチ」に出で中井君、松井君「シユラット」で杉山君と再會し、其邊を視察して孟買に歸り更に約一ヶ月滞在しました、要するに此旅行は印度の北部を視察する爲でありました、印度に於ける我社勢力の盛なるを諸君に報告するのは實に愉快に堪へないので、印度人は一體に日本人を「アジアチック」にして歓迎し尊敬します、殊に一方英人の威壓を受けますから一層日本人を慕ひます、商賣も日本人とするのを愉快にしてゐる、日本も向後は印度を非常に好顧客場とせんければなりません、又「ビルマ」及南洋諸島等も未來ある有望な日本の商業地です、曾て或印度の有名な紡績社長の所で話したことがありますが、其紳士の語る所を一寸かいつまんで話します、日本は實に宜しい國である、東洋の先覺者として吾々の敬慕する所である、さりながら僕は氣の毒に思ふことが、日本は資本に乏しい國である大戦以後借金は増へた、國防には備へなければならぬ、一等國の體面を保つは誠に苦しからうと思ふ、之迄の日本は歐米の「コツビー」であつた併し向後の經營については聊が寒心する所もないではない、英國は世界の一等國である之は後に大きな「コロニー」を持つてゐるからである、其他佛、露、獨、伊等皆可なり領地を持つて居る、殆ど世界の取れるだけの領地を歐米文明國が取つてしまつた時日本は覺醒した、日本は之から何處を取つて發展しようとするか云々、之は考へ様によつては参考になることと思ひます。

四月四日佛國郵船で孟買を去て蘇士に上陸し「アレキサンドリア」より「カイロ」に行きました、埃及には十五年前行つた事がある、其當時は佛國の勢力が盛んで殆ど佛語又は希臘語でなくば通りませなんだが今日は英

國の勢力が盛んで、總督の方針良かりしたため英國が埃及を感化した力は實に大きなものです、英語だけで殆ど用を達せらるゝ迄になつてをりました、運河を開き到る處埃及固有の「ローカル・カラー」が段々薄らぎ歐風くさくなりました、「カイロ」邊は年々避寒の歐米客が多いので「ホテル」でも客に食ほる風があります、再び歴山に戻り伊太利の「ネーブルス」に出ました、「メツシナ」の海岸は風光の明媚な所でした、「ネーブルス」は古來から綺麗な所と聞いていましたが、横町へ入ればやはり醜い所もあります「ボムベイ」は三十四五哩南です、昔有名な「ヴェスピアス」火山の噴出に埋れたのを發掘した古跡です、羅馬は一日で見物しました、歐州の古い都で見物すべき場所は一日や二日では見切れませぬ、何分日が足りませんが残念でした、兎に角綺麗な町で面白い所で、法王宮「ヴァチカン」だけでも中々の見物です、近頃米國人は伊太利を好み此地に遊ぶ人が非常に多い、彼の「モルガン」等は此所で死にました、之から「フローレンス」に行きました、美術の盛んな處として有名なものです「ゼノア」は南獨逸の風を受け佛の「マルセイユ」に抗して將來有望な所です、「ゼノア」から地中海南岸延長六十哩に渡る別荘地「クヅエリヤ」に「モナコ」、此處は歐州に有名なる賭博場の在る處、「ニス」なごを見て「ミラン」を経て「コモ」より伊太利湖を横ぎり「ルガノ」「ルサーン」「ツリーツヒ」「ウキンタツール」なご瑞西各所を巡遊しました、此國の周圍は「アルプス」の高山である、其間には深い湖水が所々にある、小さい町でも「ホテル」の設備は行届いてゐます、流石歐州の遊覽國と云はれるだけに客を遇することに至れり盡せりである、一寸日本の中禪寺を大きくした様の格好で青い湖の上には美しい遊覽船が走り、大きな山には索

道が架してあり、其山上には「ホテル」を建て、ある一面に草花が咲き實に美麗でありました、「ウインターツール」で「ヴォルカート」商會の本社を訪ひました、「ツォリツヒ」より「ボール」を経て巴里に直行しました、三日間滞在して「ハーブル」に行きました、此所は佛國の第一の棉花集散地で取引所もあります、進んで「ザンプトン」から倫敦に亘り、倫敦見物を八日で済ませ「マンチエスター」から「リバープール」に出ました。

李浦では紡績工場や、棉花集散の状態を視察して更に倫敦に引返し「アントワープ」に上陸「ブラッセル」「阿姆斯特ルダム」「ロッテルダム」「ヘーグ」なき歴遊、漢堡に行き「ブレメン」に返り「スタットガルト」から南獨「ミュンヘン」見物、夫から伯林に赴きました、歐州全體は文明な國、綺麗な國だ云位で留めて置いて伯林から「モスコ」に出で「サイベリヤ」鐵道で歸途に着きました、莫斯古は純然たる「ロシア」式です、歐州は大抵旅行券も要らなければ關稅も容易い、所が露國は一風變つて却々六つかしい、旅行券を單に所持してただけて役に立たぬ、最寄の露國領事館の證明が要ります、夫れも六ヶ月経てば又改めねばならぬ、「ホテル」に泊つてる間も旅行免狀は警察へ預け其都度手数料をさるゝ日ふ風に中々面倒です、六月の十日に「モスコ」を立ち「サイベリヤ」鐵道で歸りました、「サイベリア」鐵道普通我等總稱して居るが、露國流に謂はゞ其間には幾つもの線路が連続してゐる「モスコ」より「チェリビンスク」まで烏拉爾鐵道「チェリビンスク」も「イルクツク」間は「シベリヤ」鐵道、滿洲里まで「バイカル」鐵道、滿洲里以東が東清鐵道になります、此鐵道は「ゲージ」五呎半吋で歐洲大陸鐵道より二吋廣い、滿洲以東は石炭の代りに薪をたきます、近頃全線の内約半分以上は既に

複線が出来てゐます、沿線中「イルクツク」が尤も繁昌なる都會で他は實に詰らない處です、移住民の過半は無教育者で下等生活に甘じて、昨今では少許の農業、主として牧畜です、現今でさへ「バター」の歐州への輸出中々盛んで、開けた後の西比利亞は驚くべきものと思ひます、此線には「トンネル」は少ない可成迂回しても大工事を避けてゐる様です、大工事としては先づ「バイカル」湖邊に「オビ、レナ」なきの鐵橋位に過ぎませぬ、「バイカル」以東は樺の木が多く全く開けて居らぬ、「モスコ」「ハルビン」四千七百餘哩一時間廿四哩半平均速力で八晝夜半を費し「ハルビン」に着したは、六月十九日午前八時廿五分、同所にて谷口君の歓迎を受けもう日本に歸つた氣になり、長春、鐵嶺を経て大連に着きました、大連より天草丸便乗門司より汽車で此二十七日午前八時梅田に安着したのです、こうして、づつ一週した所で、日本は實に小さいと思ひました、前にも申しました通り一、二の特殊問題については他日の機會に譲り、今日は申上げませぬ、今夜は大體を御話して私の責を免がれたいと思ふて、ざつと概要だけかいつまんだ次第です。

ロイド 保險 に 就 て

大正三年九月十日・社内講演會にて

先般海外視察の際倫敦に於て Lloyd 保險に關する調査をしたと思ひまして、丁度昨年末米國より渡航の途次同地に立寄り大晦日一日中を重なる保險會社の訪問に費し、又印度より再び渡英の節更らに調査を重ねまして

略々要領を得るに至りましたから其梗概を御話ししたいと存じます。Lloydとは如何なるものか、ロイドの保険は Underwriters 個々別々に責任を負ふ事でありますから萬一の場合に信用され得るが如何か此等の事が始終疑問となつて居りました、孟買支店の取引先で Lloyd Broker たる G. A. Hardman & son Ltd. 取締役 Mr. Gill 云ふ人、此の人は日本にも來た事のある人で——其の人や其他幾多の關係同業者につき彼地で色々調査した結果「ロイド」は理窟上は個人の責任となつて居るけれども、從來の慣例より見るに、萬一の場合決して不拂等不安心のこころはないと云ふことに歸着しました。本日は未だ十分「ノート」を纏めて居らぬので、其詳細は次回に今一度申述べることにして、唯今晚は其緒言として先づ歴史上の御話しを致したいと存じます。

倫敦の中心に Exchange Square 云ふ場所があつて爰に Royal Exchange Building がありまして、其横には所謂英蘭銀行と倫敦の市役所の三大建築物があつて City of London の中心を形作つて居ります。此の Royal Exchange Building は一八四二年(天保十三年)に Queen Victoria が開場式を擧げられました所で随分古い建物丈けに今日では古色蒼然として居ります、此建物の入口には Royal Exchange Assurance Corporation がありまして其奥の多數の壁畫のある廣々とした室で Stock Broker が集合して Stock Market を開いて居ります。

此 Royal Exchange Building の二階に在るのが「ロイド」であります。爰には狭隘の場所に多人數が雜踏して居りまして能くあれで事務が執れると思はれる位です、事務室は二分せられ一方は海上保険及最近に始めたる火災保険各會員詰所、一方は仲買人詰所に分かれて居ります、會員は保険者即 Underwriters で夫れから右の

保険者に對し外部を廻はつて仕事を取つて來る仲買人即 Broker が相分かれて席を占め、多數大男が小机に寄つて仕事をして居るのは奇觀であります。

其入口には昔の Coffee House 其儘の制服を着した門衛が居りまして外來客は一切埒内に立ち入ることを許さない、會員に所用あれば門衛が其會員の名を高聲に呼んで呉れます、そうするに其人が埒迄出て來て客話をすることになつてをります、斯くして此の混雜の内に保険相場が毎日立つのであります。

「ロイド」は固有の保険事業の外に Maritime Report を發行して居りまして此れに依れば世界の隅々に至る迄船舶の所在發着の様相が明細に分るのであります、尙其外に Casualty List 云ふものがありまして海難事故の詳細なる報告を集めてあります、尙此の外に船舶が豫定の日迄に到着せぬ時は Overdue Market と稱へて又別に此れに對する保険の相場があります、船名噸數等は Lloyd Registry に依れば詳細が判りますし、又船長の技能の優劣に關しては英國船の船長に限り Captain List と云ふものがありまして其身元、免狀停止の有無等の閱歴が詳細に判ります、丁度私の居りました時には孟買より日本向臨時船 Cheltronian 云ふ船の Over due まで仲買人等が Registry に依り其船の詳細を調べ Captains List に依り船長の優劣を判断して直ぐに相場が建つて居りました、勿論此 Overdue risk を reinsure するのことも出来るのであります。

右の次第で此の「ロイド」に居りますれば世界の船舶の Movement が詳細に判りまして、實に世界に於ける海運の中心と云ふて差支ないのであります。現今英國では Lloyd の Member 云々 Ist class gentleman

で通るのであります。丁度米國の Stock Exchange Broker 云ふの社會上同じ尊敬を拂はれて居ります。昔は「ロイド」の仕事としては Boxing の勝敗やら旅行の盜難に就ての保險を致しましたけれども、今日ばかりは一切せず専ら海上に新たに一九〇八年（明治四十一年）開始したる火災の兩保險を營んで居ります。尙別に Lloyd Avenue 事務所を特設し、海事に關する一切の報告を蒐集して居ることは前述の通りであります。抑も此の海上保險に申すものは英國にて最初始めたのが伊太利人で Lombard 云ふ人が初めたので「ロムバード」街は其名残だ相です、其後十七世紀の末の方 Knig James, の治世に至つて Edward Lloyd 云ふ人が Tower 街の附近に Coffee House を開きましたが茲は何分 Thames 川に沿つて便利がよいの英國人だ云ふので知らず船乗集會所になりました、先の「ロムバード」の方は衰へたのですが此の亭主はなかく利巧な人物であつて船舶に關した話を集めて自身で新聞を發行したりして遂に此處で Mutual Insurance が出来ました。即ち世界保險界の中心としての「ロイド」保險協會の鼻祖が生れたので、此れは一六九六年（元祿九年）の事であり、其後貴族院で絹織物の課税問題が討論された時「ロイド」發行の新聞が非常に其の議案に反對したことが時の有司の忌諱に觸れて遂に其發行停止を命ぜられ爾後三十年間顔を見せなかつたのであります。

此の間に Lloyd で營んで居る仕事は追々投機賭博的の種類に傾いて大分に柄が下落して來た、其後一七五六—一七六三年（寶曆六—十三年）の所謂七年戦争が起りまして、相手たる佛國を倒した結果、今の Canada の British India の地を英國の手に收めることになりましたが元來英本國には食料不足の爲め自然に其國民が海外へ遠

征する様になつたもので、七年戦争中にも食料は相變らず不足、外國に仰がねばならぬ、此の時始めて必要上 War-risk なる危險擔保が初まつたのです、此の戦時保險で Lloyd の連中は大分に損をした、併し戦時保險があつたればこそ食料品の輸入が行はれたのであつて此の時に於て英國人は保險の有難さ、も一つは制海權の尊さを知つたのであります、時の宰相は有名なる William Pitt であつて、彼れは熱心に此事を主張した一人であります、英國の政策としては制海權を保險を尊重すべし、保險は決して Gambling に非ず云ふことが一般の頭に入つた次第であります、今日の Lloyd の仕事云ふのは第一、會員により擔保せらるべき海上保險、火災保險等、第二、會員の保險したる船舶、貨物及運賃に對する會員の利益保險、第三、船舶に關する各種報告の蒐集、刊行、三つであります。現在普通平時海上保險の目的物は Ship, Cargo の三つである、萬一の場合には戦時保險を致します、昔は此外に種々なものを保險の目的物としたもので、甚しきは人間を商品に見做して保險を付したることもあつたのです、即今の北米の Negro は元 West Africa からの商品として積出し New Orleans で市が立ちまして牛馬同様賣買、内地では極めて虐待扱ひをし、使役に立たなくなると追放したもので、此 Slave Trade では奴隸たる「ニエグロ」を商品として取扱ひ保險を付したものです、其當時天然痘が能く流行するため保險條項の一に此惡疫流行の結果は保險者死責の事があつた、夫れ故或時航海中 Small pox が「ニエグロ」中に發生しかけた、此儘にして置けば荷主の損となる、其「ニエグロ」全部を不惑にも海中に投込んで Lloyd に對しては共同の利益の爲めに Jetison したその理由で其賠償を請求した様な恐ろしい例がある。Lloyd

は勿論それを拒んだが夫より人道問題を惹起して、中々やかましくなつた、一方北米では例の奴隸開放問題が起つて遂に Slave Trade が終熄した動機の一つになつたのです。

Lloyd Underwriters は皆 Lloyd Membership を得なければならぬ、會員に入らぬには Committee が其身元を調査撰擇の上で是れを許すのでありまして、一人に付きは 500 の身元保証金が必要なのであります。Risk の引受は個人が裏書に依り負擔する制度になつて居る、倫敦の各保險會社の役員に重なる人は大抵 Lloyd Underwriters の資格を持つて居ります。

前に申述べました Royal Exchange の二階に在るのは海上保險の方で Lloyd Registry の發行所は Lloyd Avenue の事務所で發行して居り、Committee も Staff も裁然に分かれて居ります、Lloyd Surveyor や通信員が世界到所に居るのは御承知の通りであります。

Lloyd が今の Royal Exchange に移つたのは一八四四年(弘化元年)であつて此時始めて保險業の報告部が分立したのであります。

Lloyd Underwriters は七年戦争後保險が盛んになるに連れて非常に儲けたのであります、一七二〇年(享保五年)に至り Lloyd の Monopoly を調査して此獨占力を殺ぐ爲めに別に Charter を與へて興したのが今でも現在在る Royal Exchange Assurance Corporation の London Assurance Corporation の二會社であります併し其成績は Lloyd に及ばなかつたのであります、其後一七七五年(安永四年)の北米獨立戦争、續いて一七八

九年 France 革命戦争及一八一五年(文化十二年) Napoleon 戦争が續發しました爲めに以前の利益を吐出して終まつて支拂不能の人数が増加して來て遂には最後の一人が(其名を逸す)踏留まつて支拂に應じて Lloyd 支拂停止の危厄を免れしめたのであります、今でも其人が最後まで小机の上に使用したる謂ふ Snuff Box が紀念品として保存せられてあります。

一八一〇年(文化七年)に至りまして、更に保險會社の特許數を増加するの建議案が提出され、調査委員が任命されましたが研究の結果更に保險會社の數は増加しましたけれども、此の調査に依り、其時迄に於ける Lloyd の功績も一方で認められ Lloyd Act が通過したのであります、此の時出來た十會社は新たに Joint Company's Act によつて法律に依り組織されたのであります、併し再保險に至つては結局 Lloyd に集まるのでありまして畢竟 Lloyd は危險なものを人は Lloyd に直接に申込みれば自己の Commission が取れなからうであつて、何處で保險をしても其再保險は皆 Lloyd に集まるのであります、Lloyd へ保險を申込みば Broker がありまして、客の Underwriters の間に立して丁寧な斡旋の方法を探るのであります、且下 Lloyd Member 一人の保証金は 5,000 に過ぎなからず、£ 35,000,000 の Cash Deposit がある譯であつて、一人が拂ふなければ此積立からさしづへ賠償して行くので今日 Lloyd は全く信用すべき性質のものであつて、世界の海上保險業を支配するのも亦故なきに非らず、一八七一年(明治四年)に至つて Lloyd Acts 稱する法律が發布せられ、此れに依り愈々 Lloyd の組織が Confirm せられた譯であらう、只今では Lloyd Member 中の Committee を互

撰し、保険部と報告部と兩方に Committee がありまして直接の事務は Secretary があつて各々 Committee の命に依り執務をして居ります、斯く兩部分立してから事業の範圍が廣くなつた、是れは前述の通り一八三四年(天保五年)以來のことであります。

爰で御参考迄に申して置きますが英國の Lloyd 外に Norddeutsche Lloyd つか Austrian Lloyd つか云々 Lloyd が有りますが、此れは元來 London Lloyd agent として保険の代理業をして居りましたのが何時かはなして Shipping の方に商賣換をしたのでありまして Lloyd 云々名は矢張り本家の London Lloyd から derive して居る譯であります。

今日は未だ全體に亘つて調査する時間がありませんので唯其 History の大體を申述べたに過ぎませんが、其他詳細に亘りましては後日折を見て申上げることに致します。

對支貿易事業に就て

大正四年十月一日・於大阪高等商業學校

此間校長及伊藤先生から諸君に何か話して呉れよ云ふ御注文であつたが、昨今會社の仕事が非常に多忙を極め殆んど席の温まる暇もなき有様で、纏つた調査も出來ず數字上の説明は他日機會を見て申上げることに致し、伊藤先生からも支那方面の事に關して話せよ云ふことであるから二三見聞した處を申上げる積りであります。暫

くの間御静聽を願ひ度い、私は永年棉花又は綿糸布の仕事に従事して居りますが、諸君の内には夙に此事に就いて御研究の方もあるだらうと思ひます。日本綿糸の最大得意先は申す迄もなく、一衣帯水の支那であるが、私は今日迄度々社用で支那方面へ旅行する、本年も彼地へ参りまして、三ヶ月前に歸朝しました、丁度日支交渉が斷絶せんした時で、彼の地に於ける居留民も弗々時局の前途を慮りて引上最中であつて、私も其筋の注意もありしこと故一先づ天津行を見合はして上海に出で、香港、廣東、汕頭、臺灣へ参り更に上海に引き返して南京漢口より京漢線にて北京に赴き最早大丈夫を見たから天津に至り、營口、大連を見物して歸阪した様な始末であるが、四年前に見た清朝時代と今日の中華民国とは民度、風俗、文明の程度、思想の變化等に於て多大の相違を來して居るには隔世の感概を催しました。民四億を有する支那の將來を色々想像して多少啓發した積りであります、清朝時代は言論の自由を欠き、政府の専制を以て民權を壓迫し來りしも、今や彼等は覺醒して支那人の民國なりとして非常に自重し來り内に團結し、外侮を防ぐに云ふ思想到る處に充滿して追々健實なる發達を助長しつつあるは誰しも最近支那に旅行せしもの一致する觀察であらうと思ひます。

先づ話の順序として青島に就て聊か申上げ度い、御承知の通り青島は日獨戰爭の結果租借權を繼承することになりまして、國威を發揚せし上に於ては大に喜ぶべきことでありますが、一面吾々商賣人の見地より見ますれば青島の現状を見て大に悲觀の念を起す次第である、換言すれば獨逸時代の青島は非常に良好なる成績を擧げて居たのである、即ち山東省からは落花生及花筵等の土産が出て獨逸本國及歐洲各國へ盛んに輸出され、貿易地とし

て多大の囑望をされ居りしも、一朝日本が占有するに至りし以來、秩序の回復に手間取りしは云ひ乍ら、言語道斷の有様で三千人位の居留民で充分であるに拘らず日本人の新に入り込みたるものは約二萬人で、而も何等の資本なき人々が多數流れ込んで一攫千金を夢想し、事志違ひ遂に馬賊の仲間入りして横行を逞しうするものもあり、商賣しては全く日本人のみを相手とするばかりで發展するものは質屋のみで、支那人相手の商賣は段々減少し、從來我國輸出品の大宗たる綿糸、燐寸を取扱ふ代りに味噌の如きものを輸出するに云ふ憐むべき状態で、一向國家の利益にならざるのみならず、却て亂暴を働き支那人を苦しむる場合ある故、寧ろ獨逸時代の生産的なるを追想して日本人は支那人を苦しむるものなりとの觀念を増長せしめて獨逸時代を憧憬せしむるに云ふ有様に於て誠に残念の至りであります、尤も目下尙軍政時代であるから追々秩序の回復と共に前途相當發達を期待するも恐らく舊態に復し支那人をして安心せしめ世界的貿易地となすには尙長き年月を要することにありしは私は自信する次第であります。

次に日支外交に於ける結果に就て少しく卑見を申し上げんに、兎に角あれ丈けの結果を收めた事故支那人の立場より見れば日本は成功したと申す様なれど、公平なる判断より見て、日本の外交は決して成功せしものに非ず、後日に至りて直接間接に不勦惡果を齎したものと云はねばならぬ、日本が最後の通牒を發した時は各省を通じて排日思想瀰漫して遂に「ボイコット」になり、彼の地の新聞紙は日本は歐洲各國の戰亂に乗じて好機逸す可らずとなして支那に對し野心を遂行する者である故此際極力舉國一致の實を擧げざる可らず、大に民心を鼓舞し

又日支交渉の内容に就いても日本政府が秘密に付し居るに拘らず、支那の新聞は忌憚なく其間の消息を指摘して民國人の注意を促すに勉めた結果、非常に支那人の覺醒を促進せしめ、日本人を嫌忌する事甚しく、殊更らに交渉するの要なき彼の漢治萍合辨問題の如きも、無用のことにして徒らに排日の念を助長せしむるに過ぎざりしは深く日本外交の爲めに惜しむべき處であるに確信するので、袁世凱は己れの立場の苦しきに鑑みて輿論を巧みに利用して自己の安全を計るに腐心し、日本今次の交渉は民國の威權を損するの大なるも、國力の充實完からず誠心誠意を以て自分は憂國の餘り日本と折衝して居るが、若し日本の要求を容れずんば民國の前途悲心すべき者あり、曾て日本が日清戦後遼東半島を三國干渉に遮られて還附し、永き間臥薪嘗膽の苦痛を忍んだ事もあるから支那も今回多大の屈辱を一時忍ばざる可らず、是れ自分が今回日本の要求を承諾する所以なりとて、己れの地位を安全に保つことに腐心した、左れば支那人は一般袁總統の意に迎合して益々日本を疎外するに至り、一方上海其他に於て憂國儲金を募集し次いで「ボイコット」の實現となり、大に日本の輸出品を苦しめたことは諸君の熱知せらるゝ通りであります、此「ボイコット」をやる當時、支那上下の民は非買同盟に非ずして實は國貨獎勵であるに云ふて居る、誠に宜き口實で如何にも名分が立派である、内憂外患交々至る支那では此際國產獎勵に云ふことは誠に立派なる言ひ草で人氣に投じてゐる故、各地到る處日本品を買はない様になりました、人氣の向背に云ふものは恐る可き者に云はねばなりません、袁政府は外交上に於ては支那の國威を傷くるの止むを得ざるに出でたるも、之が反動として非常に有利な地位を占むるに至り、之が結果としては充分なる成功を收めたものと云

ふて差支ない、之に反して日本の外交は形而上多少の成功を得たことは云ふものゝ、多大の悪化を來すに至つたのは大に悲しむべき現象と云はねばなりません。楮支那人の愛國的なるは清朝時代には見る事能はざりし次第で、民國になつてから各自の思想上大なる變化を來したに起因するもの云はねばならぬ、從來も米國も排貨で苦しめられ、日本も辰丸事件で一時困つたが、皆之れ局部の出來事であつた、併し今度は一般内地に瀰漫して日本品の受けたる貿易の損失は有形無形實に莫大なるものである。近時は大分薄らぎ來りしも漢口の如き一時は日本商品は絶對に買入れず、四川省重慶等にては日本品取扱者に強迫状を送り、日本商品を焼く云ふが如き有様で勢ひ甚だ猛烈であつたが、昨今漸く下火となり必要品は日本の商品を買ふ様になりまして、上海地方の如きは多數の紡績會社がありますが彼地の製品のみにては需要を充たすこと能はず、又支那の綿布は割高で日本綿布の安價なる爲め大分買ふ様になり、香港では印度綿糸が騰貴して來た結果、人氣は日本糸に集りました、左れ茲に注意すべきは雜貨類の賣行で、齒磨、燐寸等の如きは彼地で材料もあり、直ちに製造出來る爲め餘り日本品の需要を喚起せないかの様に私は思ふ。仁丹の如き賣藥も支那全土到る處に販賣され印度地方でも多額の廣告をし多數の店員を特派して益々販路の擴張に勉めて居るは誠に感心の至りであるが、之れにて最近紅丹と云ふ名稱の下に仁丹の模造品を作つて競争して居るが如きは著しく直覺的に感じた所であります。

話が多少脇道に入りましたが、從來日支兩國間に於て感情の行違等が度々あつたのは、支那に Anti-Japanese Feeling なるものがあつて、其感情が重なり重なつて兩國々交を侵害するのであるからである、爲めに兩國の國

際貿易に多大の支障を來し思はざる損害を日本の貿易に與へた事は誠に残念に堪へません、抑々此の Anti-Japanese Feeling なるものは源を尋ねれば皆此れ兩國政府が意思の疎通を欠いて居る事が原因で、一日も早く此障壁を除去するに勉めざれば將來恐るべき惡果を來すならんことを考へるのである。元來此排日感情は歴史的關係より胚胎するもので、換言すれば日本は古來支那の分家である、古代の日本の文明は支那より輸入されたもので其後巧みに西歐の文明を輸入して今日の日本を形成せしものであると云ふ觀念が、終始支那人の念頭を去らない、之等の思想を支那人より取り除くことに注意するは兩國政府の將に採るべき道である。又近頃支那に於ては英米佛獨等へ留學せし者が多數歸朝して中央政府に相當勢力を占めて居る、又日本から歸る留學生も多數居るが之等は今日の處歐米への留學生に比すれば地位が低い、此等も日本に於ける支那留學生教育方針其他をも大に考慮せなければならぬ、此れ亦當然日本政府の大に鑑むべき點である。而して支那の新聞紙の如きも此頃大抵日本新聞を翻譯し居るもの多き故、日本の輿論其他は大體彼地の人民に紹介し得らるゝ故此勢力ある國家の言論界を指導する點に於ても充分日本政府として注意を拂つて貰ひたい。

茲に特に申上げて置きたいのは、支那に於ける鐵道であります。支那に於て敷設する日本人經營の鐵道は遅々として振はないのみならず、徒らに聲のみ大にして實績の見るべきものは稀れである、英米人等の經營する鐵道は所謂不言實行主義で着々良好なる成績を擧げて居るのは吾々の常に見て感心する所であります。最近自分の驚いたのは彼の京漢鐵道と津浦鐵道の連絡線なる東西の徐州—鄭州間の鐵道である。英國人の經營であるが、最早

運轉開始して其完成の早きこと只々感心の外はない、凡そ支那に於ける鐵道の發達は申す迄もなく日本人が畢竟利便を享くること云ふ結論に達するからして、常に支那に於ける交通機關の推移變化を注目するの必要はあるまいか。

夫れから人々の能く云ふ事であるが、支那に於ける日本の貿易業者が今日迄の處大した利益を挙げ得ざるのみならず、失敗して居るものが多い、我社の如きも棉花、綿糸布其他雜貨の商内を營業して居るが、平均概して不成績である、之が原因として多々あるべきも、大體支那商人には大なる資本がない、日支貿易は仲々有望であること世人は云ひ亦左様あるべき筈なるも、肝心な相手方の商人が豊富なる資本を缺いて居ては安心して取引が出来ないのは自明の理である、支那は天惠の物産稠密なる人口を有し國土が大なる丈け之を研究するに充分なる機關の完備せざるは、元々支那政府の内政未だ整はざる爲であらうと思ひます、今少し大なる支那資本家が貿易の衝に當つて貰ひたいと常に希望して居るのであります、又支那人は先天的に投機心が強く、又爲替を利用することに一生懸命、日本の綿糸等を買う場合には日本の「圓位」で買入れ、米國よりは「\$」で、又印度より「留比」で買入れて自ら爲替の危険を負ひ爲替相場の上下を利用したがるのみならず、地味な商賣が嫌ひで思惑買をする、即投機的に先物を買ひ爲替相場を利用するからして二重の投機をやる勘定になります、危険此上もない次第云はねばならぬ、一朝市價が下落すれば商品の引取りをせぬのみならず、爲替の決済を遅延して不測の損害を招くことが往々あります、先年漢口に於ける革命戦争當時にも數多の約定が不履行となり、又先達の日獨戦争

前後にも随分損害を蒙つた様な譯で、斯る場合には支那政府は直接損害のみを支拂つたが其實非常なる損害を受けた此種の間接損害は一向辨償して呉れない、此等の如きは其實兩國政府にあるもの云はねばならぬ、即兩國政府の *understanding* が不充分なる結果であること云はねばなりません、斯る不安の間に立ちて日支貿易の發展を望むものは縁木求魚と同じである、支那の商賣は内地に入る程危険の度を増すので日本の對支貿易業者が往々専門以外の商賣を爲す爲めに意外な失敗を招くことが往々あります。假へば雜貨商(日用品屋)が棉花や胡麻を買入れる等であります、之等は根本的に間違ひであつて大に注意すべき事であらうと思ひます。尙又失敗の原因として見逃がすことの出来ない一事は、生活程度が高い爲めである、之は大なる日本人經營の會社の二、三が如斯風習に知らず知らず陥つた結果一般に感染した惡風だと思ひます、日本に居れば煙草の如きも敷島、朝日で結構な處を彼地に行けば上等の舶來煙草を喫すること云ふ有様である。此處に至ること流石は上海の同文書院の卒業生は感心である、多年支那にて養成せられた結果、極めて質朴で贅澤しない處は大に美點で諸君の手本とすべき長所と思ひます。

最後に申上げたいのは、日支兩國間の貿易振興策の一として日支銀行の設立である、凡そ事業をなすに先立つものは金融である、殊に前に陳べた通りの事情にて支那人相手の商賣は中々一通りで行かぬから、圓滑なる金融を司る銀行の必要を切實に感するのである、正金銀行はあるけれども而も爲替銀行ではあるが、今少し有利なる内地銀行を望む次第である、經濟上の連絡に便ならしむる爲め如何しても *Local Bank* を新設せなければなら

ぬ、支那内地に於ては爲替期日に荷物が受取れぬ場合は往々ある、その時には満期日の延期又は貸付になりますので此間の調節を十分計る上に於ては一段の進歩したる銀行を要するので、正金銀行はあるけれども未だ十分な便益を感じない、支那には錢舖を云ふて兩替屋に過ぎぬ者がありますが、之れは十萬兩の資本もあれば三つも作ることが出来るに云ふ位で、現銀を支拂ふに非ずして鈔票(Native Bank note)を發行するのであります、此んな頼りなきものを相手として安心して商賣は出来ない、近頃大阪の銀行は遊金が多く紡績會社に投資するは從來危険視され鐵道株が安全なるものに見做され居りしも、時代の變遷と共に漸次紡績等の適確なるを認め投資される様になつたので、大藏證券出でざる時は紡績手形を多く買取り割引率を低くして便宜を計つて居るのを見て隔世の感があります、由來銀行家には石橋を叩いて渡る人が多く活用の道を講ずる事の少きは深く遺憾とする所であり、而して之が設立は此機會を尤も時機を得たるものと思ひます、各銀行が遊金に苦しんで居り金融の緩慢にして昨今銀塊相場の安き際なれば、此機を逸せず此種の銀行の新設を見るなれば大なる國家の利益にして將來日支貿易に關する影響は蓋し莫大なるものと思ひて疑はない。

今一つは支那に對する研究であります、「ポイコット」以來商業會議所は貿易業者をして眞面目に支那を研究せしめんとして居るのは誠に喜ぶべき現象で、元來支那通を稱せる所謂浪客は往々無責任なる言議をなして眞面目なる社會に害毒を流布したことは識者の深く恨事せし所で、實際家の今後大なる覺悟を以て着實に研究する

の必要があらうと思へます、諸君の御承知の通り英國の「マンチエスター」は英國最大の棉花市場であり、否斯界に於ける唯一の棉花市場であります、英國政府は「マンチエスター」の建議案を重視するが如く當大阪が支那及朝鮮の爲めに爲す建議案に對しては吾政府は大に尊重し實行する様に願ひ度いのである。

終りに臨み此話を結ぶに當り今一度私は反覆致しますが、要するに今後、日支兩國間の貿易を振興せしむるには支那人を尊敬し、排日思想の除去に勉め一方眞面目に支那を研究して兩國政府の意思疎通を計るに共に一面日支銀行の設立を實現せしむる様にして益々從來の短所を補ひ、圓滿に貿易を伸張するに努力せなければなりません、諸君は有望なる未來を以て此學園に學んで居らるゝが、終始時世の變遷に注目し成る可く實社會に接近して他日の大成を期せられんことを希望します、一向纏りたるお話しも出來ず御靜聽を汚したことを深く謝する次第であります。

故和田豊治氏を憶ふ——僕の觀たる和田氏

大正十三年八月

故和田氏の歴史及成功等の経路に關しては、古き縁故ある他の友人各位が知悉し居られ、本傳記中にも細大掲載さるゝことと思ふから、僕は別に敘するの必要あるまいと思ふ。

和田氏は僕に取りては友人と云ふよりも、得難き先輩として畏敬師事したものであるから、今茲に同氏を紹介

批評するの資格はないが、匪文以て卒直に書いて見たいと思ふ。

同氏と初めて識りしは、確か明治三十年前後の事で、謂はゞ取引上の關係で同氏の知遇を享けたのである、爾來公人として將亦私人として、生前啓發された所誠に甚大であつて今更ら大に心謝し深く敬慕する所である。

和田氏は人の知る如く近代稀れに見る偉材で、其勢力の絶倫なること、其情熱の敦厚なる事、常人の到底追及を許さない特色、美德が備はつて居た、明治三十四年苦境にあつた富士紡を引受けて小山工場にありし當時、躬親ら工場に出入してあの詰襟服を着流し長靴を穿いて、工場整理に餘念なかりし姿は今尙髣髴として僕の記憶を喚起する次第で、富士紡の光輝ある歴史は當時より胚胎したものと謂はねばならぬ、僕が初めて同氏と言葉を交はせしは前記の通り取引上の關係、即ち原棉供給の緣故によるもので、相識後色々意見の交換をもち、教を受け又相談にも接し、時に議論を申せば語弊があるが、自分として若年乍ら一通り理窟を云ふた事もあつた、併し和田氏は僕の説をも一蹴せず能く容れられ時に互讓の精神をも發揮された事は、僕の深く畏敬せし所で美はしき人格の持主であつた。

大正七年七月日華紡織が上海に出來た當時、最初河崎助太郎氏が上海で英人經營の鴻源紡織を「レーナー氏」より買収し更らに之を譲り受けて今日の日華紡を創立せし次第なるが、先是和田氏は友人を集め東京に支那纖維工業組合を組織して居られた、同氏は持論として常に日本内地のみならず纖維工業は支那、印度殊に邦人の立場として是非共支那に羽翼を伸ばさねばならぬと終始支那に着眼して居られた、夫れを知れる河崎氏は鴻源買収の

當初、和田氏に相談せられたので夫れが縁となり果となり、日華紡は和田氏を中心として出來上つたのである。其創立當時一波瀾が起きたのである、それは最初和田氏は自分は富士紡の社長であるから日華紡の社長は兼任出來ない、相談役として就任したいとの話であつたが、周圍の人々は其れを肯んぜず此際是非共社長に就任願ひ度しと懇望せし處、富士紡の重役會で承認を得遂に社長に就任された次第で、其處迄は宜かつたが、扱て他の役員詮衡に際し常務取締役二名として自分が詮衡するに云ふて、其内の一人は現在の常務取締役田邊輝雄氏で之れは誰しも異議なく賛成したが、他の一人は和田氏と關係あり又支那纖維工業組合の幹事として居られた某氏で、人格技能共に申分なき人だつたが、棉業に何等經驗なき人を推薦された故僕は其不可なる所以を力説して之に反對した、和田氏は然らば其人を平取締役か又は監査役にせよと云はれたが之れにも重ねて反對した時、和田氏は然らば暫時一先づ空位として他日機會を見てこの話にも有つたが僕は頑強に夫れにも反對した處、和田氏は遂に堪忍袋を破られ大に憤慨せられて喜多は頑固な奴だ左程強く云ふなら僕は参加を止める、實に怪しからんこと云はれたが、僕の心中は支那に模範的の會社を造りたさに一歩も譲らなかつたのである、其場は破裂の儘辭去したものの、何と云ふ一策を案じ某有力銀行頭取某氏を其夜大阪側の發起人伊藤竹之助氏と共に訪問して前後の成行事情を打ち明け相談しに行つた處、同頭取曰く

「君達は和田氏の爲人を熟知し居らずや、如斯事は同氏の善い處で亦悪い缺點だ、如何にも君等の云ふ所は一理あるには相違ないが、和田と云ふ人は一旦云ひ出したら仲々退かぬ男だから其呼吸で萬事應對しなければ飛

んだ事になる」云々

この注意を受けた故願はくば貴殿より和田氏に宜敷申入れて貰ひ度いこ依頼したが、某氏は一應謂ひはするが成功覺束ないよ、却て逆襲せらるゝだらうこの事で落膽した、其夜遅くまで凝議、其翌日の朝叱られるのを承知で再度河崎、矢野兩氏が和田氏宅を訪問せられたが、客人の有る様子永く待たされ兩氏は案じて或は和田氏が過日來の鬱憤尙解けやらずブー怒つて居られる様子でないか話し合ふ内奥に通された、處が、御主人は案外上機嫌でニコニコの態、側に一老紳士あり、夫れは麻生太吉氏で、和田氏に此際大阪側の云ふ通りに承諾するの得策なるを慫慂された結果、和田氏も翻然として悟られた様子で遂に我々の主張を容れられたので、日華紡は僅々一週間に拂込を了し、上海にある工場の受渡も無滞濟んだ事は今尙快感に堪えないと同時に、和田氏の互讓の精神に富んで居られ、偉い云ふ事も當時僕の大に感動した所である。

其後某々セメント會社の合併當時和田氏は僕に一應兩社の内容取調の爲め出張して呉れこ依頼され、色々取調べて歸來僕は忌憚なく意見を吐露したる報告書を差出したが、非常にお氣に入り言下に僕の私案を採用されて都合に合併も出来上つた、自分としては和田氏の名譽の爲め大に働きしこみを愉快に感じたものである、斯るこ一度重なり年月の経過と共に多年親交を受けた次第である、和田氏に深く敬服した事は他に澤山あるが、試みに其二、三を擧ぐれば

○記憶力の強かりし事

○根氣克く各方面に喜んで事業其他何んでも世話をされた事

○言葉数は少ないが肺腑より湧き出づる其熱情と親切心とを遺憾無く發揮され立處に難事を圓滿に取り纏められたる事

○何處もなく魅力に富んで居られたので此の人の爲めなら水火の裡をも厭はぬと思はしむる程、美德の備はつて居た事

等であつて、晩年或る場合に於て随分勝手な仕打と思ふた程叱責を受けた事があるが、決して不平を云ふ事が出来ない位に、潔く同氏の小言を甘受せざるを得ない云ふ感じを起さした云ふ有様で、此邊は同氏の福德でも謂ふ可きもので、之れ即ち同氏特有の魅力の然らしむる所であつたと思ふ、未來の二世世澤澤子なり世間から謳歌され先きに南滿社長に擬せられ、亦震災復興委員に擧げられたのも誠に宜なる哉で、同氏は終始世の中の事は理窟計りで通らぬものなりこの事を能く呑み込んで居られ、官民の間に介し何か蟠まりの事件でも起る場合には巧みに、能く調停して双方を満足せしむるこみを樂しみこして居られた、同氏を目して政商等と評せし人もあつた様だが、之れ一部人士の誤解に基くもので、元來和田氏は清濁併せ呑むの概あり、極めて抱擁力の大きな器で、亦互讓の點を見出すに妙を得て居られたから、何事も結果は良好で終始本末を結び付くるこみに獨特の才を持つて居られた、富士紡が今日の大をなせしは全く同氏不斷の努力の結晶であつて、凡ゆる方面に國家的に貢献されたる處實に莫大なもので、藉すに尙十年の歲月を以てせば邦家の爲め一層多大の功果を實現せしは必然

なりしに、天命は申すものゝ遂に黄泉の客となりしは御本人も定めし残念であつたであらう、左り乍ら死生命あり人力の如何をもする能はざる所で、天壽を知りし和田氏も功成り名遂けられたから満足して瞑目さるゝより外ない謂はねばならぬと思ふ。

和田氏に最後に面晤したのは實に大正十二年十二月廿五日飯倉片町の御宅で御目に懸つたので御病床に居られた、色々御親切の御話も有つたが僕は遠慮して成る可く御病氣に觸らぬ様匂々御暇した、其節

「君が蘭花を愛作して居る相だ、自分も向島の自宅で培養して居たが此處へ轉宅後手が行届かぬ、全部君に差上げたから持つて歸れ」

この事で辭する譯にも參らず難有御請して歸つたが、其翌日奥様から態々電話で御通知を受けたから御好意に甘へ貰つて歸つた様の次第で、此れが今日唯一の形見ならうことはつゆ思はなかつた、時々妍を競ふて咲き、賑々として窓外清香を送るあの蘭花を眺めては、ありし昔を偲び坐ろに追慕の情に堪へないのである、最近御遺族より頂戴した尊影を高く書齋に掲げ日夕偉大なる風貌を拜して音容尙在世の佛を偲んで居る、同氏が吾人に貽されたる深刻なる印象は永く心肝に銘じて忘れず、只管故人を辱しめざる様心懸くる積りである。

以上僕の尊崇追慕の誠意を披瀝して此一片を誌す矣。

惜 春 記

——父の日記の一節——

大正十四年八月二十五日、二女春子嬢十七歳を以て白濱の別荘に永眠せらる、一周忌に際し父君の當時の日記より抜萃。

「春ちゃん、判つてゐるか………」と書いて見た、「わかつて居ます」と勢ひのない口調で答へながら、周囲の人々を見廻はし、なぜ大勢の人が集まつて居るのかと不思議そうな顔つき。

又してもこみ上げて来る咳をじつこらへて、いさ苦しげに肩で呼吸しつゝ、兩眼はパツチリ生れつきの可愛らしさ其儘、顔は永の患ひでおもやつれして居るも、血色は蒼白き中に薄紅ひを潮し、慾目かは知らざれどもこれが旦夕に迫れる人とも思へず、たゞひ駄目でもせめて今宵は樂に過ごさせたしなき思ひ案じてゐる内、意外！！春子のその苦しげな口元から突如

「左様なら………」

こ一言ハッキリ云はれた時僕はグワンと強く頭を打たれたやうだつた、するこ又

「いろくお世話になりました……左様なら」

續いての言葉に、あたりの者みな顔を見合はせたまゝものをいふ者もない。

三たび春子の唇は動いた。

「永い間可愛いがつていただいてありがたう」

心の底からあふれ出るやうな詞でかく言ひ放つたのは、最早そのいのちの絶望なのを自ら覺悟して居るものに確に認められた。

そのモーメントの悲惨な光景は、あはれもいじらしも、人の親としての最大悲惨事で、僕等の胸中はかきむしられるやうだつた。

附添ひの平山醫師は絶へず病人を凝視め、脈膊を計りながら少し不思議そうに

「御病人の心臓は餘程お丈夫です」言はれた。平山醫師の顔を見上げた春子は

「先生私はもう死ぬるのですか？」

心には覺悟をきめながらも、平山先生「八月十七日この白良濱別荘に着かれてからは毎日朝も晝も晩も、或時は夜ぎうしに病側に付ききりで叮嚀に診察して貰ひ、苦しみも痛みも救けてもらつて来て、今では唯一の命綱を頼みきつて居る平山先生」への質問だ、先生はすぐ勢ひよく

「ナーニ大丈夫。死ぬるのですか、心臓が強いから大丈夫と言つたのです」

春子は再び眼を閉ぢ眠れるものゝ如く見えたが、吸ひ込むのは力なく、吐き出すだけに見へる呼吸の度に、咽喉元のいたく動けるは、苦しいのではないか、周囲は凡て無言、たゞ心配そうに春子を見つめ片唾をのみこむのみ。

やがていくらか安らかさうに見ゆる故、此儘朝まで靜かに眠らせん、室内の電燈を暗らくして「靜かにおやすみなさい」を穩かにいひささす。應ふるは濱邊に寄する波の音、梢吹く松の聲のみ。

しばらく休息せよとの醫師の勧めに、枕許を離れたくはなけれど、覺えず疲れもしたり又餘りこゝに集りて病人に氣遣ひさすも心なし、登志子を連れて階下の客間のソファーに凭れしばしまごろみしと思ふ間もなく、又「危篤」を呼び覺まされ、すぐ病室に馳せ上れば、室内は前にも増して緊張し、電燈のあか／＼に輝く下に平山先生は右手に春子の手を取り、左手にその睫毛に觸れられても何の感應なきを見給ひ「この上の注射は無益」を言はれた。

セコンドの一つ一つが春子を死に誘ふ足音のように思はれ、既に疾く期したる事にはあれど、尊き御佛も見られる。春子の安らかに眠れる如き顔を眺めては、正に斷腸の思ひなり。

「春ちゃん、確かに……………」を聲をかぎりに替る／＼呼び叫べども、應へんとするけしきなきに、呼ぶ者の氣力も失せ果て、たゞ氷に浸したる脱脂綿をみなの手から春子の口元や齒の根に與へて、せめてもその乾きを和けやるより術もなかつた。

妻や登志子や看護婦の、聲こそあけぬ、暗涙に咽べる又眠りより覺まされて眼を擦りつゝ姉の「臨終」を悲しげに見まもれる二弟又太郎、豊治なきを見廻した僕の胸はまこみ張りさくばかりであつた。

春子のいきは一呼吸ごみに力なく、遂に午前六時五十五分いふに、哀れ十七歳を一期して、人の世の春に

も會はで、永久の眠りに入つて仕舞つた。

其瞬間の春子は、かねての覺悟のほごも見えて、少しの苦悶も見せず、皆への別辭もハッキリ濟ませ、もはやうつし世に思ひ遺す何事もなく、あたりの人の心づくし温かきみこりに充分の感謝と満足をもつて、いこやすらかに、天國に上つた姿は、さうしても死なねばならぬさだめならば、此れのみが親にしてのせめてもの慰安こそねばならぬ。

僕は心の中で……春子、此不幸な運命を、お前に負はしたのは、たごへそれが天命だごは云へ、親として誠に濟まぬ、勘忍して頂戴、天國では先きに逝かれた大和のおぢいさんやおばあさん、御影のおぢいさんも居られる筈だ、尋ね會つて可愛がつてもらひなさい、いつかは往く僕等を待つて、お呉れご、南無阿彌陀佛の稱名ごごもに念じて居つた。

支那問題に就て

昭和二年二月十六日・○社内講演會にて

最近に於ける支那の事情は、國民黨が武昌漢口を占領してから非常に以前と相違して居ます。之と共に吾國の官憲又は國民の對支感情も大分かはつて來て居る様であります。元來支那ご云ふ國は秋から春にかけて南部か又

は中部支那で戰爭を起すのは毎年の慣例の様になつて居まして、中には戰爭を營業の様心得て居るものもある。まるで何ごも思つてゐない様であります。従つてこんな國に乗出して商賣をするからには、さうしてもさういふ事情は書入れて置かねばなりません。事實今迄は戰爭が起つても、「又か」ご思ふ位が關の山で大した驚きをさへ與へなかつたのであります。それが今度の北伐軍の武漢占領にあらはれたごころを見ますご、今迄の見解では之を知るに苦しむ程すべてがかはつて居ます。國民黨はご孫文がその三民主義を根據にして廣東に旗擧げしたのがその起りでありますが、始めの中はさうもうまく行かない。幾度か失敗を重ねて居たのであります。最近に至つて國民黨の運動は漸次効を奏し始め、一昨年でありましたか香港で General Strike を敢行致しました。英國は始めの程は多寡をくくつてゐたのですが國民黨の勢力漸く強大になり、それがため昨年の如きは香港の商賣は八割も減つたご云ふごころであります。これには流石の英人も胃を脱ぎ、妥協的に出ようご試みましたが、反對に國民黨は態度を益々強硬にして盛んに英人に楯をつき始めたのであります。その間に廣東の河口黄埔に軍官學校を建て、ソヴェエツトロシアご提携して士官を養成する、國民黨の將校教官なごは全部共產黨に屬するものを任命する等、甚だしい赤化振りを見せて居ます。

始め孫文の考へは穩健にやる積りであつたのですが、穩和主義ではさうしても目的を遂行するごこの出來ないごごを知つて、ロシアご提携した、それが今日國民黨に右傾左傾の二派を生じた原因であります。共產黨の後援があつたため、廣東に於けるストライキの勢は益々猖獗を極め、それに勢を得た國民黨は一時に税金を取立て、

軍資金を作り次第々々に北上して、武昌襲撃といふことになつたのであります。處が一般の人々は北伐軍なるものがどれ程の力があるものか云ふことさへ知らない。一體支那の軍閥には日本の豫備將校などが或は参謀となり或は顧問となつて多少入つて居ますが、この國民軍には日本人は居ません。露西亞の軍人は百名以上も居る云はれ、又軍隊を指揮する者は軍官學校を卒業して彼等の主義の洗禮を受けたもの許りであります。更に朝鮮人が二百名餘も参加して相當の働きをしつゝあることは、注意を要することだと思ひます。そして彼等の目的とする處は何か申しますと、帝國主義打破であります。殊に日英の資本主義的帝國主義を根本から覆へせよ主張するのであります。支那は形式上は一の獨立國になつてゐますものゝ、各外國からは侮辱せられ不平等條約を強制せられてゐる、これらの不平等のものゝ一切を除去し、例へば税關と租界とかの利權はすべて回収し、完全な獨立國にしたいと云ふことも彼等の目的の一であります。

而も此國民軍が武漢を占領した時の態度は、今迄の軍閥の態度と全然異なつてゐます、これまでの支那の兵隊は勝てば徵發、敗ければ掠奪、まるで言語に絶したやり方でありましたが、國民黨は必要に応じて徵發することにはあつても必ず金を拂つてやる、老人や婦女子などはなるだけ鄭重に勞はると云ふ具合に、出来るだけ民心を攬する様な行動に出たため、今迄軍閥に虐げられぬいた地方人の熱烈な歓迎を受けたのであります。武漢占領後の國民軍は青天白日旗を押し立て、盛んに各種の宣傳を行ひ、百姓、工人等を糾合して總工會を組織し、外人資本家に對して今迄冷遇されて居たのだから、今後はもつと待遇を改善せよと、その他色々各種な要求を提出せしめて居ます。

私は昨年十一月に長江沿岸を視察に参りましたが、支那に行く前東京に行きました時の外務省あたりの御話では、國民軍なるもの大いに注意を要する、彼等はヤング・チャイニーズによつて組織されて居るのだが、今迄の軍閥のやり方は全然その趣きを異にしてゐる。若い者達が自分の命を惜しまずに働く態度は賞めても差支ないこと云ふ様な、大變立派な御話でありましたし、それ迄に、支店から來てゐた報告で見ても、國民軍を寧ろ歓迎してゐる様に思へましたので、その積りで上海に参つた譯であります。所が漢口の土井支店長に會つて話を聞くこと、事實は話と大分違つてゐる様であります。更に漢口で實情を觀まして、外務省あたりの觀測がまるで事實に遠いものであることを知りました。

一昨年上海で紡績職工のストライキがあり、半歳に涉つて紛争を續けてゐたことは皆様御案内の通りであります。このストライキは紡績業者を苦しめたことは多大ではありましたが、孫傳芳あたりが高壓手段を取つたため職工側の敗北になつて、その主領連は漢口、廣東に走りこのストライキは結末がついたのであります。が此際にも工會を認めるか否かと云ふ問題が起りましたが、之は日本人の主張通り認めることなしに解決がついたのであります。ところがそれが武漢の場合について見ますと、今度は上海の様な具合には参りません。丁度私が支那に参りました時、泰安紡績の泰安紡績工會、日華製油の日華工會等が種々の要求條件を提出し幹部に迫つてゐましたが、その要求を見ますと随分勝手なことばかり列べてゐます。上海では工會を認むるか否かと問題と

り、結局工會側の敗ちなつたのですが漢口では工會を認むるか否かはテンデ問題にして居ない。先づ始めから給金を上げる、日曜は休日にしてそれに對する賃銀を拂へご主張する、而も日曜でも工場は運轉させ、日曜日に働くものには賃銀を倍増せよ、時間外の労働には割増金を支給せよ、一月中に數日の公休を設け年末には賞與金を與へよ其他、工會に屬せざるものは一切備ふべからず、一旦備つた者は工會の承認なくして解雇すべからず、負傷、病氣に依る缺勤者には日當を與へよ、等々日本に於ても見るここの出来ない程勝手な要求を提出してゐます。斯くの如き工會を認めるのは不都合であるなご云ふ人もありますが、先程申しました様にそんなごは問題ではありません。總工會を牛耳つてゐるのは李立三ごいふ、曾ては上海のストライキの折のリーダーをしたごもある男で、却々過激な共產主義者でありますが、此男が主ごなつて漢口でも廣東ご同様糾察隊を組織させてゐます。糾察隊ご云ふのは各工會から選抜された青年によつて成立し、巡查ごもつかず憲兵ごも見られない様な仕事をしてゐる、國民軍によつて認められたもので、隊をなして市中を横行し種々の宣傳や要求をしてゐるのであります。先頃泰安紡績が非常に不利な状態に陥つた時、婦女子を安全地帯に避難させようごしましたら、之を見た彼等は吳佩孚が攻めて來て、また戦争が始まるのではないか、或は又工場を全然休業するのではないかご思つて、日本人を工場の外には出させない様にしてしまつた。日本の新聞に監禁云々ご云ふ報道が出てゐましたが、事實は監禁ではなくて前申した様な有様であります。此糾察隊は淺黄の服を着用、六尺棒を持つて町中を歩きまはつてゐますが、却々の威力を有し場合によつては死刑を行ひ得る権限をもつてゐます。これらのやり

方はロシアの第三インターナショナル主義を Apply したものだご思はれますが、同様の方法で廣東でも成功を収めてゐます。漢陽のプレス工場でも運轉の準備をしてゐる處へ、二、三十人の糾察隊が乗込んで來て運轉を差止める、職工は恐れて逃げて了ふ有様であります。糾察隊は更に日本人の料理屋、雜貨店等の使用人に勸めて罷業を強制する、日本の居留地は糾察隊にあらされ惨々な態であります。彼等は又洋務工會罷業の際未参加のものなきやミ家に亂入して押入其他隅々を探し廻り Elevator Boy でも普通の Domestic House の傭人でも隠れてゐるものがあれば引張り出してひぎい目にあはす、私が参りましたのは斯うした矢先でありましたから、工會を認めるごか認めないごか云ふごは頭から問題にしてゐません。今になつて考へるごあの時の要求も時機が早かつたので、却つて良かつた位であります。最近 Bankers に備はれてゐる支那人の工會が各銀行に提出した要求書を見ますご、轉勤は本人の承諾なくして行はないご、家族があれば家族の轉勤手當も支給するご、病氣の時は何論公休、ストライキを行つたため銀行を休んだ時にも日當を支給するご、年末賞與を與へるご、毎期相當の昇給を行ふご等、亂暴を極め共產主義の最も甚だしいあらはれご見られるのであります。斯う云ふごで正金銀行あたりも大いに驚いて居ましたが結局 Native Bank は之を承諾しなければならなかつたさうであります。

武昌、漢口だけで工會なるものは二百以上もあるご云はれてゐますが、何故こんなに澤山あるかご申しますごプレス工場、料理屋、砂糖屋、鐵屋に至る迄各々各自の工會を組織して居て、大體同じ様なごを目的として行

動してゐます。そしてそれが總工會なるものに編入せられて、全體の統制を保つてゐるのであります。

英國が漢口の租界を回收せられたことなごも、考へて見ればその事情は随分馬鹿らしいものであり、英國もよく辛抱したものだと思はれる位であります。多勢のものが寄つてたかつて奪取したと申しても過言ではなく、全くそのやり方はあきれ外はありません。

陸上に於ける有様は以上述べた通りであります。長江の航運に於ても同様なことが行はれてゐます。長江は漢口を中心として日清汽船も運行を止めてゐます。船をやつても軍人が只乗して自分等の勝手な方に動かさせること云ふ有様であります。昨年十二月九日に日華製油の石川君が萬縣に用件があつて赴くため、雲陽丸に乗船して居たところが、沙市で二千名程の支那兵が乗込んで來ました。石川君は沙市には出張員も居るし、上陸の意思があつたのですがさうしても降ろして呉れない。云ふのは船長、一等運轉士は日本人で支那語を使へない、石川君は支那語がうまいので通辯として留め置かれたのです。途中で南軍の攻撃をうけ、支那兵數名が負傷したさうであります。萬縣行きも諦め領事館で下船命令を貰つて漢口に歸つて來たのは十二月卅日で出發の時から三週間も經つてゐました。歸つてからの話によれば、面白くもあつたが随分苦しい目にあつたさうです。

日清汽船の人々も如何に國家のこころは云へ、こんな状態で船を動かすのは極めて不愉快であること云つてゐる様であります。以前は支那人も従順であり、よく云ふこときいたものであります。若し又無禮なことがあれば國家が捨て、置かなかつた。所が今日ではごころにもその尻の持つて行き處がありません。列國は一様に對支不

干渉を聲明し、従つて日本もやはり同様の主義で臨んでゐます。だからその間の交渉がさうも思ふ様に参りません。日露戦争の前なごには若しも支那人が問題を起せば大變でありました。例へば獨逸の宣教師を殺したために膠州灣を取られること云ふ有様で、英吉利、佛蘭西等も同様な手段で各利權を取つてゐたのです。即ち支那人が打てばそれだけ支那に於ける列國の勢力が増加すること云ふ次第で、最近に到るまで滿洲は日本、長江は英國、廣東廣西は佛蘭西、福建省は日本が他國に貸すことを許さないこと云ふ風に、夫々勢力範圍が決つてゐたのですが、その當時と比較することその違ひの大きいのに今更驚く許りであります。支那が今日の様に條約も何も無視する様になつたのは、歐洲大戰以後のことでありまして、歐洲大戰に支那が参加したところから非常な變化を起したのであります。支那が戦争に参加したことは云ふものゝ實際は山東から十五萬の苦力を送つただけで實戦に参加した譯ではない。而も平和會議では豫ねて恨みを抱く日本攻撃の宣傳を盛にやつたのであります。平和會議に於ても華盛頓會議に於ても各國が支那の御機嫌を取り結ぶことに腐心する有様であるから、そんなごころから調子に乗り列國を侮る様になつたのだと思はれます。

然らば國民軍の將來はさうか云ふことは頗る重大な問題であります。今迄毎年の様に争鬪を重ねて來た軍閥のやり方は不埒千萬であるが、國民軍は戦争のすんだ後なごでも一錢一厘の金も私しない、而も皆筆も立てば言論も達者、その運動方法も仲々巧妙であります。先に香港、廣東間に折衝があつた時でも、前々からの英國の悪い所をならべ立て、随分英國を苦しめたものであります。彼等はまた宣傳が極めてうまい、彼等のやり方を見る

こまるで宣傳の戦争である云つて差支ない程であります。そして此の國民黨の將來云ふ問題になるに我國でも意見が一致して居ない様であります。或人々の意見によれば「國民黨は一種の見識を有してゐる立派なものである。一體革命なごを行ふ時には多少の無茶は之は仕方がないことであつて、我國でも維新當時はまるで騒動がなかつた譯ではない。彼等だつて自分のやつて居ることが良くないことは分つてゐるのだ、だが彼等の目的を達するためには多少の無茶な行動は恕してやらねばなるまい。」云ふのであります。又或人は「成程國民黨は最初の程は日英反對であつたが、近頃では單に排英だけであつて日本は少しも心配は要らない、却つて排英によつて日本の利益は増加こそすれ、日本が不利な立場に陥る様なことはあるまい。」云ふ納まりかへつてゐます。更にまた國民黨の行動はなるべく之を寛大に見て、不平等條約の廢止、ヤング・チャイナの成功を援助してやれなご云ふ人もあります。日本政府の方針も先日外務大臣の演説なごで見ますに、出来るだけ寛大に不干渉主義で進むにある様であります。その趣旨は誠に結構であつて、寛大にやるに云ふことに異存はありませんが、然し私達の考へてゐることは當局の考へは幾分相異があると思ひます。國民黨は前申しました様に右傾派だけでは成功が難かしいから云ふので、ロシアを提携し、ロシアから兵器、資金及多數の士官の供給を受けてゐます。その中で大將になつてゐるのが御承知のボロヂンで、ボロヂンは國民黨では大した勢力を有してゐます。所で國民黨が目的を果した後でロシアを完全に手を切り、左傾派に分れることが出来るか否か、これは随分困難ではなからうかと思ひます。北伐軍は香港に兵を擧げて以來、瞬く間に武漢の地を取り、更に九江を落してゐます。孫傳

芳は今日の所では南京を本據とし、其のあたりの小地方に勢力を漸く保つてゐるに過ぎず、こんな有様では上海もあまり安心は出来ません。元來上海は共同居留地即ち英米日を主とした International Town であり Municipal 也も出来てゐます。これが若しものことがあつたら云ふので英國は兵隊を出すことにしたのですが、さうするに支那側から猛烈な反對が出る、英國は近頃は何をしても支那側から揚足をせられ、表面の交渉は支那にシテやられた形であります。然し上海の安寧は現在各國の準備もあり、孫傳芳の統治區域ではあり、先づ心配ありません。それに孫傳芳の方は工部局にも連絡あり、最近は又二分五厘の附加税で大分軍資金も出来た様でありますし、一方國民黨の方は軍資金缺乏のため寒いのには夏服でふるへて居る様な始末ですから、眞逆上海がムザムザ南軍の手に渡る様なことはないと思ひますが、先程の電報によりますに杭州附近で孫軍が敗北し、鐵道も止つたにありますが、若しそれが眞實であり聽て上海にも来るものであるに、重大問題であります。英國はすでに五十年の長きに亘つて對支貿易を行ひ、英國があつたからこそ今日の上海、香港、漢口其の他の楊子江の River Port が出来たのだ云つても敢えて差支ありません。その他列國が支那に對してなした所は莫大なものであります。それが例へば膠州灣の如く立派にこしらへさせて置いて後から回收するになつたら、列國もたまらないだらうと思はれます。上海に對しては英米も大決心をしてゐるし、日本も武力の用意も出来てゐる様であります。私の考へる所では上海だけは先づ安全だと思ひます。尤も楊子江沿岸でも生命には心配は絶對にありません。近頃は支那人も却々賢くなつてゐて、人を殺したら後が煩いことをよく知つてゐますからその

方の心配は無用です。

國民黨の宣傳する所によりますと、外國人の企業は全然之を倒して了つて自國の事業をもつて盛んにせねばならない、現在工會を作つてやつてゐるが、行く行くは大事業は全部之を國家事業にしよう、又楊子江は黒龍江、松花江の様に支那船以外のものは通過せしめない様にして、出来るだけ外國に取つて替つて自國だけで何もかもやつて行かうと云ふのであります。それと同時に、朝鮮とか臺灣又は安南なき支那も同様な境遇にある弱小國を救済してやりたい、こんなことまで彼等は宣傳してゐます。日本と支那との關係は貿易の方面で見ましても、最近に於ては英人六十年の努力の地である長江に於てさへ、日本の商賣の増加は著しく、昨年中の出入船舶數は日本の方が多かつた様に記憶してゐます。我國が長江一帶殊に上海に築いた基礎は極めて大切なものであり、中部支那に對する我國の貿易額は北部、南部、兩支那よりも遙に多いのでありますから、今日國民黨に對しても十分の觀察をして措置を誤らない様にならなければなりません。正義、人道、若しくは民族自決、自由平等の言葉に捉はれて、外交の立場としてはなるべく支那の云ふことを聞いてやらねばならない等の議論をよく見、聞きしますが、この觀察は私達の觀察と稍異なつてゐる様であります。更に英人の立場を見て痛快視する人も往々見受けられる様ですが、これなきは至つて淺薄な誤つた見方ではないかと思ひます。正義人道も結構には違ひありませんが、あまり同情してゐるゝ重大な間違ひを生じはしないだらうか、そのために折角築いた地盤を捨て、段々退却のやむなきに至りはしないか、あまりに軟弱な外交政策のため多年に亘つて作つた基礎を覆し、將來の事業か

ら全然退却して了ふ様な結果を招來することは、我國に取つて極めて不利な場面を展開することになりはしないか、私の心配するのは此點であります。各人各様の見方のあるのは仕方がないとして、今迄の國民黨の宣傳、主義より觀れば決して樂觀は許されません。大いに考慮を要する處だと思ひます。

最後に吾社の在支事業に就て申しますと、我々は長江沿岸には相當の設備を致して居ります。昨年漢口に参りましたのも其ため、忠實に働いて下さる諸君に同情し慰問のために行つたのであります。工場等に行つて見ますと銃彈の孔がある所もあり、一時は危険でもあつた様であります。生命には別條ありません。泰安紡績でも今後はストライキは起らないだらうと思ひます。色々な要求はしますが、こちらからロックアウトすることは工人會の方で承知しない、従つて織布の如きも引合はないのですが、工場の閉鎖が出来ないから、たまつたまゝにして置く様な有様であります。紡績の方はさうやらかうやら算盤が取れて居る様であります。只困つた問題は職工が働かないことです。上海の罷業の時もさうでありましたが、泰安でも以前千八百個位生産してゐたのに、罷業後の生産高は千三百個に激減してゐます。最近では千五百個位になつてゐるさうですが、賃銀は上つたのに能率は却つて低下する有様であります。泰安紡績は居留地外にある關係上、今迄は總領事館を経て間接に交渉してゐますが、これは直接交渉にした方がテットリ早い様に思ひます。

漢口支店、漢陽のプレス工場も仕事はしてゐますが、大體今迄の主客が顛倒した有様であるのは残念に思はれます。それと今一つ心配なことはさうも在留日本人の氣が弛んでゐる様に見受けられますが、こんなことは注意

したいものだと思ひます。然らばこれが轉回策如何、果して將來はさうなつて行くのか、云ふことは大體が支那の政情が何時もかはつてゐるのでから、今から推測することは困難であります。諸君も仕事の上で色々御心配もありませうが、その心配は無用だと思ひます。研究すればする程分らなくなるものが支那問題であります。又最も研究を要するのも支那問題であらうと思ひます。

御研究の上有益な御意見が伺へれば結構だと思ひます。

重要視すべき日印貿易

昭和二年六月五日・日印協會々報所載

緒言

日英同盟が存在して居た間は、此同盟を通じて吾國は特殊の政治的關係を印度に持つて居た様に思はれる。歐州大戰後此同盟が英國側から廢止を提唱され消滅を見るに至つたので、自然かう言ふ特殊の意味に於ける政治關係も失はれた事は勿論であるが、併し一方經濟的通商關係は益々増大し、取別け吾國の大市場である支那が終始政治上の紛争や軍事上の動亂に禍せられ、兩國間の在來貿易に非常の影響を及ぼすようになったので、益々密接の意味を加へて來た様に思はれる。従て印度を正當に了解し通商を發達せしめ日印の經濟的親善を進める言ふ

ことは、之まで支那に對して日支親善や共存共榮が主張された如く、若しくはそれ以上にも必要になつて居る。勿論何れの國に對しても貿易關係が存在し經濟關係が成立つて居る以上は、相互利益の促進上右の必要はあるに相違なく、又吾國の如く市場範圍の狭いものは成可く其範圍を多數に擴張して、例令ば一市場に於ける不況の影響なり危険なりを他の市場にて補つて行く言ふ、所謂危険分散の必要もあるのであるが、併し此等の必要ある諸市場の中でも、其市場の大小が有望の度合が開拓の難易さか、若しくは種々な事情によつて輕重大小の差あることは言ふまでもない。印度は近頃例令ば彼の綿業にも見るが如くに、種々經濟上の對外問題を惹起し、且古く英國の勢力範圍にあつて競争上開拓の困難は絶無ではないが、確に吾國としては米國、支那に次ぎ、寧ろ支那を凌駕せんとする大市場で、約三億二千萬の人口を持つて居る上、段々文化向上の傾向があるので、有望の度合も亦非常に大なるものがある。さればこそ日本を起點として支那、近東、阿弗利加、南洋の上に描かれる圓周上の吾貿易圏に於て、印度に大なる發達をなしたのと思ふが、之は將來も發達するであらうし又是非とも發達されなければならぬ必要責任の分擔を吾々國民は感じなければならぬと思ふ。

印度の觀念

普通印度を云へば餘程漠然と理解され、宛も總てが英國によつて若しくは英國皇帝陛下下の統治權によつて統轄されて居る如くに考へる向もないではない。此考へ方は英領印度 British India を云ふ言葉が先入主になつて一

般の頭腦を支配して居る爲めではないかと思ふが、其原因が何れにあるにせよ全く間違つた考へである事は言ふまでもない。定義によるこゝ、

英領印度は英國皇帝陛下の領土内にあつて印度總督若しくは之に隸屬する知事又は其他の官吏により皇帝陛下の統治し給ふ地域を言ふ

と言ふことになつて居り、

印度は英領印度總督若しくは之は隸屬する知事又は其他の官吏により行使さるゝ英國皇帝陛下の宗主權の下にある土王侯に屬する地域を總稱する

と言ふことになつて居るので、明に印度なるものが印度總督及之に隸屬する官吏の直轄して居る英領印度を、英國宗主權の下にはあるが併し各獨立の形態を有する世襲土王侯の管轄して居る土侯國を包括するものであることを證して居る。土侯國と言ふのは英語の Native States で、英領印度即 British India に對して土人州とも言はれて居り、中にはカシミールとかハイデラバッドとかの如く面積八萬平方哩以上、人口も前者の約千二百五十萬後者の三百三十萬人と言ふように大なるものがあるが、一方には多數の小國があつて土人州の字義が果して適當か否か疑問である。尤も土侯國と言ふ字義が全く適切であると言ふ譯ではないが暫く之に従へば、之等大小國は千九百二十一年の國勢調査によるに、約七百合して七十一萬一千平方哩の面積を七千一百九十三萬九千人の人口を持ち、英領印度の十四州面積百九萬四千平方哩人口二億四千七百萬三千人合して全印度の面積と人口と

を構成して居るのである。

	面積	人口
英領印度	一、〇九四、三〇〇 <small>平方哩</small>	二四七、〇〇三、二九三
土侯國	七一一、〇三二	七一、九三九、一八七
合計	一、八〇五、三三二	三一八、九四二、四八〇

即ち印度の面積は合して百八十萬五千平方哩、人口三億一千八百九十四萬二千人で、之を日本の面積及人口に比較すれば、前者に於て六倍九、後者に於て五倍三四の大を示して居る。支那の人口は三億と稱せられ四億と言はれて居るが、之にも劣らざるもので支那と等しく尙農業國であり、又國が廣い丈けに地理上北部ヒマラヤ地方中部平原地方、南部高原地方及緬甸等、氣候風土を異にする天然資源が乏しくないのであるから、工業國として發展しつつある吾貿易國たる印度の價値と地位とは非常に大なるものがなければならぬ。

貿易上に於ける印度の地位

果して然らば吾海運の發達航路系統の完成によつて發展した日印貿易の状態はさうであるか、又其貿易が他の國に對する貿易に比べて如何なる地位に立つてあらうか、之を數字の上から見るに、(單位千圓)

年	本邦商品		米		支那		印度	
	總輸出入額	對米輸出入額	對支輸出入額	對印輸出入額	對支輸出入額	對印輸出入額	對支輸出入額	對印輸出入額
明治十年	五〇,七九六	六,六六九	一〇,六九〇	五,三三	二,〇五	二,〇五	一,〇一	一,〇一
明治二十年	九六,七三三	二四,八三三	一八,九五五	九,〇六	九,〇六	五,七四五	五,九	五,九
明治三十年	三六,四四六	七九,四七七	四,九五一	一〇,七	一〇,七	一五,三六	九,〇二	九,〇二
明治四十年	九六,八〇〇	三二,七六	一四,八〇二	一五,六	一五,六	八七,六一	九,五	九,五
大正六年	二六六,八六六	八八,三四五	四五一,六三	七,一	七,一	三五,三〇五	三,三	三,三
大正十五年	四,四三三,二二	一,五四一,〇九五	六六一,二七	三,八	三,八	五七〇,〇七	三,四	三,四

(支那は關東州及香港を含ます)

昨年(明治四十年)に於て對印輸出入總額の總輸出入額に對する割合は一割二分四厘で、明治十年の一分一厘から非常な發達を示した事が認められる。勿論米國は明治十年の一割三分七厘から昨年の三割四分八厘となり第一位を占め、又支那は第二位を占めては居るものゝ、明治十年の二割一分五厘から昨年の一割三分八厘となり、割合に増加の認められないのに對照するに、印度は正に支那と伯仲しさうな状態を示して居る。即ち對印度の貿易は米國及支那に次で第三位を占め、吾國全貿易の上に重要な地位を示す許りでなく、其割合が支那と伯仲するに至つたと言ふ意味に於て一層然りと言はねばならぬ。尤も右は輸出入總額に付て見たものであるが、輸出及輸入別々に見るに

輸出及輸出割合 (單位千圓)

年	吾國商品		米		支那		印度	
	總輸出額	對米輸出額	對支輸出額	對印輸出額	對支輸出額	對印輸出額	對支輸出額	對印輸出額
明治十年	三三,三四八	五,三三四	五,〇一五	三三,〇	三三,〇	三三	一,四	一,四
明治二十年	五三,四〇八	二,三三九	一〇,九七〇	四一,〇	二〇,九	四五五	〇,九	〇,九
明治三十年	一三,一三三	三,四三三	二,三三三	一〇,三	一三,一	五,五三三	三,四	三,四
明治四十年	四三,三三三	三,一〇一	八五,六六	一三,〇八	一三,〇八	一三,〇八	三,〇	三,〇
大正六年	一,六三三,〇〇五	四八,五五七	三六,六六一	一〇,三六四	一〇,三六四	一〇,三六四	六,四	六,四
大正十五年	二,〇四四,七七	八〇,八〇〇	四二,八六一	一五,九五	二〇,六	一五,九五	二,七	二,七

輸入及輸入割合

年	吾國商品		米		支那		印度	
	總輸入額	對米輸入額	對支輸入額	對印輸入額	對支輸入額	對印輸入額	對支輸入額	對印輸入額
明治十年	二七,三三〇	一,七三三	五,七四	一九一	一九一	〇,七	〇,七	〇,七
明治二十年	四四,〇〇〇	三,三三三	七,九六六	二,九二	二,九二	二,九	二,九	二,九
明治三十年	二九,一〇一	二,一〇一	二〇,三三	九,〇二	九,〇二	二,九七五	三,六	三,六
明治四十年	四九,四四七	八〇,六七	五九,一八	七四,五三	七四,五三	一五,一	一五,一	一五,一
大正六年	一,〇五八,八一	三九,七六	三三,七	三三,九四	三三,九四	三,六	三,六	三,六
大正十四年	二,三七八四	六八,八五	二九,四三	一〇,七	一〇,七	五九,一三	三,三	三,三

即ち重要輸出入品中の重要品中に於て、輸出にありては綿織物、綿絲、綿莫大小、三者合計金額が其主位を占め、輸入品にありては棉花之に次では米及粃が其大部を占むるこゝが認められる。而して棉花は戦前から見るこゝ約二倍強に上つたが、綿絲布及莫大小製品は約十一、二倍に達し、特に其發展が顯著である。若し右の外綿ブランケット其他總ての綿製品を精算するならば、さうした傾向が一層明になると思ふ。従つて印度貿易の中心は一方に棉花及米粃、一方に綿絲、綿製品と言ふこゝになるのであるが、之等は何れも吾々本業の取扱品であるに其取扱品中に於ても亦最も大なるもので、利害關係が密接であるだけ、其向上發展に對しては初めより非常の苦心を拂つたものである。そして今日では之等總てのものが吾國の汽船により吾國の商人によりて扱はれ、輸出は言ふまでもなく輸入に於ても、例へば棉花の如き昨年度八月三十日に終る一箇年間孟買及カラチ港から日本に輸出された總額百九十一萬九千俵中、日本商の取扱は百三十九萬二千俵即ち約七割二三分に當り、他の二割七分が印度商其他の外商になつて居る。加之支那も歐洲もかの輸出に對しても邦商の取扱は段々増加して、昨年度の支那輸出額四十九萬二千俵中二十八萬俵即半額以上を取り、又歐洲輸出額百三萬四千俵中十八萬三千俵を扱ふに至つて居る有様である。

孟買カラチ兩港印棉輸出額 (自一九二五年九月一日起至一九二六年八月三十一日)

對 日 本	日 商 取 扱	外 商 取 扱	合 計
一、三九二、九七七	五二六、六六一	一、九一九、六三八	

對 支 那	對 歐 洲	合 計
二八〇、三五四	一八二、五五八	一、八七七、八八九
二二一、八七四	八五一、六四一	一、五六八、一九六
四九二、二二八	一、〇三四、一九九	三、四四六、〇八五

勿論此外に忠竹林、甲谷陀からの輸出もあるが、其額は小さいのみならず、之亦大概は邦商の取扱を見て差支はない。吾社が明治二十六年に直接買付の先鞭を開いてから長い年代は經過して居るが、而も當時悉くが外商の手により品質の選擇なり受渡なり其他種々の事情悉く外商に左右され、需要者として満足の出來なかつた許りでなく手數料其他の諸掛りに少からぬ損失をして、綿業に國家經濟の上から格別遺憾の點が多かつたのに比べるに、隔世の發達をしたものであると言ふ感を深ふるのである。如斯印度棉花の取扱をなす日本商社中、東洋棉花株式會社、江商株式會社、日本綿花株式會社は其主たるもので、幸に吾社の如きも今日では全印百八十箇所に繰綿工場及出張員なごあり、精々努力をして居る次第で、前に述べた昨年の印度棉對輸出額中吾社の取扱は約五十萬八千俵、又支那歐洲向にても夫々約七萬から十萬俵を扱ひ、聊か國家的に貢獻して居るのである。尙重要品たる蘭貢米は年産額六、五〇〇、〇〇〇噸、輸出額三、三九〇、〇〇〇噸、其輸入國は印度一、〇〇〇、〇〇〇噸、日支五〇〇、〇〇〇噸、歐洲八〇〇、〇〇〇噸、爪哇、新嘉坡五〇〇、〇〇〇噸、其他五九〇、〇〇〇噸たる數字を示し、其米及粃の取扱に於ても、段々邦商の勢力範圍が擴大しつゝあるこゝは言ふまでもない所で、吾社の如きも蘭貢に精米所を持ち、蘭貢支店經營の下に相當の成績を擧げて居るのである。尤も吾社の此經營は尙日が浅いの

であるが、之を始めた當時に於ては所謂 Big Seven を言つて七大精米工場が存在し、プールを組織して獨占的に市場價格なきを左右して居た爲めに、日本の買付なり輸入なり格別苦心もあり不利益を蒙つて居たが併し吾國の人口問題に關聯して食糧問題は一日を緩にするこゝの出来ないもので、なるべく安く又なるべく便宜に外米を輸入する道を開くこゝが急務であると言ふ見地から、多少の困難はあつたが兎に角 Big Seven 中の一つを買収することに成功して、段々基礎も固まり經驗も出來、日本への輸出を初め印度歐洲への取扱をもやつて居る。日本政府の入札なきに對しては残れる Big Six に對抗して、出來得る限り廉價を方針として進むで居る爲めに、プールも餘程迷惑を感じ維持が出來難い姿になつて居るが、併し吾々としてはこゝまでも日商たる立場に國家的の見地からして正道を進み、日商の勢力發展に國家の利益を圖りたいと思つて居るので、恐らく之も今後一層實現され得るだらうと期待して居る次第である。

綿絲布發展の現状

最後に吾々綿絲布取扱業者として同品の對印輸出の現状及將來に就て見たいと思ふ。今日吾綿絲布の對印度輸出は綿絲布總輸出額の約二割見當を占むるまでになつて居るが、戦前までは尙六分見當に過ぎなかつたのである。戦時中英國品が航路の危險、輸送力の減少、工業の非常動員其他種々の事情から輸出に非常の減少を來した爲め吾製品の需要に急増を告げ、大正八年即ち戦争終了前の投機時代には、戦前に比し約十四五倍する金額にまで達

し、其後世界的の不景氣に依つて激減はしたが、近年又復段々回復傾向に向ひ、英國に次で第二位の地位を持續して居る。印度の綿製品輸入表に付て見るに、(綿布單位千碼、綿絲單位千封度、綿絲は加工綿絲を含む)

	一九一三年度		一九二五年度	
	數量	割合	數量	割合
綿布總輸入額	三、一五九、三〇〇		一、五四〇、〇〇〇	
内 英國	三、〇六七、六八〇	九七・一	一、二六七、四二〇	八二・三
内 日本	九、四七八	〇・三	二一四、〇六〇	一三・九
綿絲總輸入額	四四、一七一		五一、六八八	
内 英國	三七、九八七	八六・〇	一六、〇二三	三一・〇
内 日本	八八三	二・〇	三三、五九七	六五・〇

綿布に於て英國は戦前の九割七分から八割臺に、綿絲に於て八割六分から三割臺に減少し、日本は綿布に於て三厘から一割以上に、綿絲に於て二分から六割臺に増加をして居る。又綿絲布の主なる内容に就て見るに、

(綿布單位千碼、綿絲單位千封度、綿絲は加工綿絲を含まず)

	一九一三年度		一九二五年度	
	數量	割合	數量	割合
綾及細綾總輸入額	二一、二八八		一六、八〇一	
内 英國	九、六一〇	四五・一	二八二	一・七
内 日本	一、七五一	八・二	一六、一〇六	九五・八

粗布總輸入額	一五一		六〇、七四二
内 英國	一三三	八八・〇	五三三
内 日本	一六	一一・〇	五四、〇三五
金中總輸入額	五四五、三八八	九九・〇	一一九、〇三六
内 英國	五三九、八三九	九九・〇	九二、七五一
内 日本	五、三四一	一一・一	二六、二八二
晒布總輸入額	七九三、三四五	九九・〇	四一五、三五七
内 英國	七八一、四〇七	九九・〇	四〇三、三一〇
内 日本	五八	!	二、三〇七
捺染布總輸入額	八三一、七七〇	九二・七	三四七、四九三
内 英國	七七一、五一〇	九二・七	三〇六、五三五
内 日本	一、七三四	〇・二	二二、四二二
綿絲二〇手以下總輸入額	六五一	七八・一	六、五八六
内 英國	四九九	!	三六〇
内 日本	!	!	六、一〇六
綿絲三至乃〇總輸入額	一一、九〇四	九九・一	一四、〇六七
内 英國	一一、七四五	九九・一	一〇、五六六
内 日本	!	!	三、四八一
綿絲四一以上總輸入額	六、五三二	九八・三	七、一六七
内 英國	六、四二一	九八・三	六、九八三
内 日本	一〇七	二・〇	一八四
			九七・四
			二・六

綿布に於ては金巾、晒布、捺染布は兎に角だが綾、細綾及粗布は全く吾國の獨占となり、綿絲に於ては四十手以上は兎に角二十手以上四十手は殆んぞ英國の三分の一となり、二十手以下は全然吾國品を以て占めて居る。元來英國は絲布共に精巧品に傾いて居り、日本はさうでないものであるから、右の様に發展経路の差違が生じたのも不思議ではないが、併し印度には印度それ自身の紡績業があり、而も他國同様に近年非常の發達をして居るのみならず、英國品は精巧品である關係から、比較的印度と競争の地位に立たないのに反し、吾國はそれを受けるに言ふ事情から考ふれば、假令其増加發達が比較的に精巧品であるにもせよ、兎に角我綿業の成功であつて、今後とも出来る限り一層伸長せしめなければならぬと思はれる。

綿製品發達の原因と英印紡績業者の日本品攻撃

日本綿絲布の發展に言ふことは、歐洲戦争に言ふ様な偶然の事件が起らなかつたならば、決して未だ今日の様な數字を見ることは出来なかつたであらうと見る見方も確に一觀察であるに相違なく、吾々も全くそれを否定するものではないが、併し發達原因の全部ではないと言ふ事をも認めなければならぬ。周知の如くに吾國は悉く原棉を海外に仰ぎ、殊に前にも述べた如く印度棉は最も多いのであつて、之を輸入するには運賃諸掛がかゝり、之から製品を作つて輸出するにしても同様の負擔増加があり、印度が直接に自國棉によつて製品を供給するの之餘程差違がある。之は戦争の有無に關せず同一であつて、さちらに不利があるかも明白であるが、それにも拘は

らず發達をして居る云ふことは、そこに何等か有力の原因がなければならぬ。一兩年來印度紡績が不振に遭遇し、孟買紡績業者は種々日本の不正競争呼ばはりまでして、畢竟日本の侵入は華府會議の勞働規約を實行せない上に、政府が汽船會社に對して航路助成金を交付せり。臆測し、又マンチエスター紡績業者は漸次彼等の販路を侵略せらるゝ爲め、特惠關稅の待遇を提唱し、孟買紡績業者は日本に輸出する棉花に輸出稅創設を建議する等、極力日本品を排斥し自己防衛手段に汲々たるも、棉花に輸出稅を賦課するは第一位の輸入國たる日本が最も苦しむ様見ゆるも、現在印度棉花貿易は殆んど邦人の手中にあり、課稅の結果他に原棉を求むるに至れば、結局印度多數の農民を困惑せしむることになり、孟買、アーメダバット兩都市の紡績業者を利する事なる理由により、印度政府に於て實行の意思なく、又マンチエスター製品に對する特惠關稅は、却て印度内地の事業を壓迫する結果を生ずる恐あり、加之印度にも民族運動擡頭し、英國に對する反抗の聲も中々盛んで印度の自治が切りに呼ばれて居る際、印度國民の利益に反する行動は困難なる事情も存在し、マンチエスター紡績業者の陳狀を却けて居る状態である反面、日本紡績業者の製品投資若しくは不正競争の行動の有無に就ては、昨年印度總督は孟買紡績業者に命じ其取調を懇願せしも、彼等は唯自己防衛の宣傳に不正競争なる言辭を弄するに過ぎず、實情の相違せることは充分熟知し居る關係上調査をせざりしかば、英國政府は大阪駐在領事に實情調査を命じたる結果、日本の紡績は國家より何等補助を受けず不正競争行爲なきこと明白となつた。如斯不正を見做される程に不思議な力を持つた原因は何であらうか。吾々から見れば頗る簡單明瞭で、

第一、運賃の如きは負擔たるに相違ないが、之を輸入棉花百斤宛りから見れば非常に大なるものではない。

第二、混棉の技術が進歩して居るから、品質價格共に自由に又適度に按配する事が出来る。

第三、印度が委任經營といふ様な舊時代の方法を採つて居るに反し、日本は何れも直接經營であり、且經驗も深いので無益の費用を省略することが出来る。

第四、右の外に、英印其他競争品の研究を怠らない結果、歐洲戰前までは外品模倣と言ふやうな嫌もあつたものが、模倣時代を経過して品質に於ても組織に於ても獨特の統一ある製品を供給し、一般需要家の嗜好を認識を得たること。

にあるのである。現に之までしても、日本綿絲布の商標なり番手なり却て歐洲に於て模倣されるものがあり、又あつたと言ふ事實を持つ様にさへなつて居るので、若し日本がさう言ふ特質を失はないならば、今後共尙相當の發達の餘地はあるものと思はれる。少くも日本の紡績優越性が認められるのであるが、今日日本の紡績の錘数は約五百萬錘、それに支那に於て在支紡績の錘数が約百三十萬錘合計約六百萬餘なるに對し、印度は約八百五十一萬錘云ふ錘數を持つて居るのである。併し昨年における孟買紡績六十五社の成績のみに付ても、拂込資本金一億一千九百八十萬留比、内配當せるもの十九社配當金計三百五十五萬九千留比、年均配當率二分九厘七毛、繰越益金三百十三萬四千留比、繰越損金千三百二十萬四千留比と言ふ有様となつて居り、吾紡績の成績なり配當な

りに比べるに非常に相違がある。此相違は經營其他種々に述べた日本の有する優越性を印度が缺くことを示し、自然生産費等も高くなつて日本品の競争を免がれ得ない有力の原因であり、此原因は一朝一夕にして除くことが出来ないものである以上、そこに吾國の絲布發展餘地も少からず存するであらうと思はれる。

因に吾々の注意しなければならぬ事は、印度に輸出するものは勿論必ずしも印度のみに供給されるものではないこと、換言すれば印度を通ずる所謂通過若しくは仲繼貿易と言ふものゝ存在すること、而してそれが如何に重要であるかと言ふことではなければならない。元來孟買、甲谷陀及蘭貢は印度に於ける絲布輸入の最大なる港であつて、孟買は勿論其他地理的關係から第一位を占めては居るが、併し又カラチ港を経て波斯灣に至り、或は亞典阿刺比亞に至り、或は東阿弗利加のスーダン又はチブチ若しくはモンバサ乃至デラゴア等の沿岸諸港に輸送せらるゝ分量が甚だ少くないのである。尤も最近に東阿弗利加に對してはモンバサ航路が開始された爲めに、日本よりの輸出は直接此航路によつて輸出されることになり、又其傾向が認められるから、それだけ從來に於ける孟買の仲繼貿易は或は段々減ずるかも知れないが、併し何と言つても孟買は其金融關係若しくは商人の聯絡なりに於て傳統的地位を持つて居るのであるから、今日雖も相當の數字を有することは言ふまでもない所である。モンバサを除いては波斯灣諸港其他の航路に金融設備がない爲めに、此方面に對してはさうしても孟買なりカラチなりの仲繼を要する事でもあり、殊にカラチ港は地の利からさうした發達の可能性があり得る様に思はれる何れにしても印度諸港の航路に金融を介して行はれる商賣で、言はゞ印度貿易の一大延長を見て差支はない

のである。現状綿布の如き此仲繼貿易はシャーチングは少いがシーチングなどは随分ある様で、何れ努力次第では印度に適應した吾製品の需要と販路とは、結局印度を通ずることによつて増加をなし得るだらうと思はれる。

記憶すべき孟買航路と綿業

茲に吾人は對印貿易及綿業關係の進歩を今日に至らしめた記念すべき孟買航路の開設と言ふ事を一言したいと思ふ。之は時代がさう言ふ傾向に向つて居たと言ふ點もあり、又開設當時非常に旺なつた朝野識者の海外航路擴張論に負ふ處あるは勿論と思ふが、併し最も直接的な大動機は吾綿業及吾々綿業者として最も關係の深い印度棉花運送に關聯する特殊の事實を中心にして起つたと言つて差支はない。明治二十六年は丁度日清戰爭の前年で明治十五年に今日東洋紡績の前身である大阪紡績が、英國に倣つて全然近代の工場組織によつて設立された以後約十年を経過し、錘數の如きも二萬八千七百九十二錘から四十七萬三千五百五十八錘と言ふ大數となり、棉花の需要も驚くべき増加を告げ、例令ば明治十六年に於ける内地棉及輸入棉から輸出棉花を差引いた額三千六百六十九萬五千斤を、紡績のみならず他の需要を含めた總需要高を見れば、二十六年には其額は一億二千七百二萬九千斤に増加し、其中六割三分は洋式紡績の消費と言ふ有様を呈したのである。從て内地産棉の多くない吾國としては、輸入も明治十六年に支那棉二百十萬六千斤から、翌年には四百四十萬六千斤に、印度棉の十三萬一千斤其他不詳四千斤計四百五十四萬二の斤となり、十九年には米棉四百十三斤が輸入されて印支合せ四百六十四萬三

千斤となり、爾來印支米其他も段々増加して、二十六年には總額九千三百八十三萬五千斤と言ふ數字を示すに至つて居る。明治十五年十月二十日決議の紡績聯合會規約中には、其第八項に原棉は日本棉を用ゐるは無論だが棉花が非常に騰貴するか或は己むを得ない場合には、聯合若しくは各自一己の都合に依り支那棉を用ゐる時には全用或は幾分雜用の標印を賣捌目標たる商標の傍に明記して、日本棉全用を區別しなければならぬと言ふ様な文句まであつたのであるが、其れが全く無用のものとなり、却て着々外國棉に向つたと言ふのであるから、如何にも隔世の感にさへ堪へない事柄である。而して印度棉は二十二年頃から急激の増加を告げ、假令ば二十一年の四萬四千斤は翌二十二年の三十二萬斤、二十三年の七百五十萬斤、二十四年の二千六百五十六萬一千斤となり、同年に於ける支那棉の千八百五萬五千斤を凌駕し、二十五年には更に三千六百二十一萬三千斤、二十六年には三千六百五十九萬二千斤、となつて居るが、丁度二十二年頃は支那棉が不作で價格が非常に騰貴し供給を得ることも仲々に困難であつたのこ、其結果二十二年七月に故農商務書記官佐野常樹氏が政府の命で當時大阪紡績の支配人であつた川邨利兵衛氏を同伴して印度棉事情取調に赴き、益々輸入の道を開いた爲めである。吾社創立は明治二十五年十一月であるが、佐野氏は當時の創立委員長で且初代の社長であり、十二月には社長として印度、埃及方面の棉花業視察をなし、二十六年初めて孟買から印度棉を輸入するに至つた前後の事情を考へるこ、如何にも奇縁の如く感ぜられるものがある。何れにするも斯の如くに印度棉の輸入は増加の道を開き、將來も紡績業の發達に伴ふて増加すべき事明白であつたが、一般の輸入貿易が外人の手にあり、且吾國として遠洋航路を有しない

結果として、船舶は外國船によるこいふ有様で、印度棉の輸入なり廻漕なりが此例に洩れなかつた事はいふまでもない。外人及外船によるこいふこが、其獨占的壟斷からして如何に綿業に不利益であり國家經濟上の損失であるかは明白な事柄で、畢竟孟買航路の開始は此外船による不利不便を排除せんとする熱望に基くこ同時に、吾社の如く直接買付を開始したのは、外人の獨占による不利不便を除かんとする希望に出でたもので、何れも國家的見地に其端を發するは言ふまでもあるまいと思ふ。

孟買航路の開設

獨占が横暴なるこは蓋し免れ得ざる處であるが、日印貿易上此獨占を逞ふして居たのは英國の彼阿社であつた事は言ふまでもない。之は其基礎が一番古かつたと言ふ事の外に、其結果長い間吾國人の信用馴染となつて居た爲めに、其後に來た他國汽船會社の割込みも格別差支を惹起さなかつた結果の様に思はれる。事實英國は早くも明治元年頃に其東洋航路の内から日印航路の獨立を斷行し、彼阿社の横濱孟買間の定期航路を開いたのであつて、埃甸のロイド社、伊太利のルパチノ社等其後に現はれ一の同盟を作り、彼阿之の牛耳を採り運賃の協定をして居て、假令巨額の荷物でも値引は絶對にせず安い運賃を得られぬ有様で、郵船の孟買航路開始以前は、印度棉花一噸十七留比ミ言ふ高率を見て居た許りでなく、積取の如きも例へば一月積の契約をしても、自己若しくは船腹の都合によつては四月、五月に至るも尙積まないと言ふ様な場合が少からずあつて、精々一箇月一萬俵位が關

の山であつたから、吾紡績業としてさう言ふ獨占的の運賃を負擔するはまだしもこしても、作業上にも非常に差支を生ずることとなり、又孟買棉花商にしても積月の約束を果す事が出来ないと言ふ譯で、汽船會社を中心として彼我双方の間に著しく不満と反感とが高まつたのである。之は最も至極の事柄で、丁度二十六年五月には孟買棉花商組合員である孟買の豪商ジェー・エヌ・タタ氏の來朝となり、吾澁澤榮一氏及當時の郵船社長吉川泰次郎氏に面會し、同盟船運賃の高率且獨占横暴的なるを憤慨し、種々商議が進み、澁澤氏は又紡績聯合會と日本郵船會社との間に立つて種々交渉をした結果、一方には郵船會社とタタ商會との共同經營共同計算に於て、兎も角孟買神戸間に郵船二隻タタ一隻合せて三週一回の航路を開くことになり、一方聯合會と郵船との間には聯合會員の使用する孟買棉の引取五萬俵迄を保證し、運送は一切を舉げて郵船會社に托し、他船によつて輸入された棉花は全然買入れないこと、又運賃は之まで一噸に付き彼阿に支拂つて居た正味十七留比を一舉十二留比とするこゝ、但し棉花積込の際は表面運賃十七留比を支拂ひ、五留比の引下差額は、毎半期末計算の上割戻すと言ふ形式を採る事になつて、愈々彼阿社と競争を開始する運となり、廣島丸は同年十一月七日船長マクミラン氏の下に神戸を出帆して遠洋航路に就いたのである。

故人岩崎彌太郎氏が『我航權を擴張して旭旗を太平洋上に翻し日本帝國の郵船航路をして地球を横行せしむるに至らざれば止まない』と言つた精神と理想とが實現の端を聞いたものである。之は郵船外交史の第一頁であると言ふよりは、廣き意味に於ける吾國の對外海運史、貿易史の第一頁と言ふ方が適切であるかも知れない。蓋し吾

國の遠洋航路と貿易とは此航路に端を發して着々發展を見たが爲めである。

孟航の基礎益々固まる

此航路開始に依つて吾綿業の利益を受けた處は蓋し少からぬものがあるが、それは又協定運賃こそなければ印度の一般貿易にも押及ぼすことが出来るであらうと思ふ。併し郵船に採つては航路の基礎を立てることは可なり骨の折れた事柄で、随分貴い犠牲をも拂ふた様に見受けられる。それは郵船の航路開始に對する彼阿の猛烈な競争から來たもので、今日から見ればよくもあゝ言ふ競争が出来たと思ふ様な、其實馬鹿々々しい競争をしたのである。尤も郵船が航路を開始した當時には、彼阿の重役三名が東京に來て、若し郵船が即刻無條件に此航路から撤退しなければ、斷然郵船の上海航路に斬込むと言ふ猛烈な抗議を申込み、又澁澤氏にも談を持たんだが、郵船が到底應じないために、結局從來十七留比の運賃を八留比とし、更に一舉一留比半と言ふ空前絶後の法外な引下げを行ひ曾て明治八年横濱上海航路に於ける郵船の前身三菱會社對太平洋汽船及翌九年の均しく同航路に於ける三菱會社對彼阿以來の大競争を始めたのである。此間若し郵船と聯合會との特約協定が守られなかつたならば、恐らく郵船は彼阿に對する屈服によつて遂に其航路を撤退し、吾海運史上不幸なる歴史を残すの已むなきに至つたであらうと思ふが、幸にして郵船對聯合會の特約は文書の上許りでなく、精神上の確固たる保證の上に立つて居た爲めに、双方の信義に壞裂が來ず矢張り十二留比と言ふ郵船の運賃に満足して居たので、彼阿は滿二年に互り競争

を續けたが其目的を達する事が出来なかつた。併し何れにするも此航路に當る郵船の計算は利益がないのみか毎船共多少の損失を見たので、タタ商會は遂に二十八年二月共同經營の持分である一隻を撤退する事になり、其後は郵船に於て三隻共配船し全く獨立自營言ふことになつたが、獨立自營言ふことになつて更に一隻を増加した丈け損失恢復の見込は容易に立たない。實は明治二十七八年の第八議會には航路助成、船舶保護、海員養成の三建議案が提出されたが決議を見ず、第九議會には政府自ら航海獎勵法案、造船獎勵法案を提出し、兩院通過を見た外、別に特定航路助成法案も可決されたもので、孟買線は濠洲線、浦潮線、コルサコフ線と共に特定命令航路となり、一定の補助金を受くる事になり、二十九年三月公布、十月一日から實施されるに至つたのである。其補助期間は二十九年十月後四年六箇月間、補助金額は十九萬二千八百八圓であつたが、丁度同年六月には郵船三隻彼阿外二社との間に聯合協定が成立して、棉花運賃一噸十二留比、運賃取高に對しては合同勘定を以てする事となり、其結果棉花の積取船は之まで郵船側の三週一回發船が三社船を合せて二週三回の定期に増加し、且聯合會員は四社何れの汽船に積込むも勝手次第言ふ事になつて居たが、郵船の配船は又特定航路補助法實施によつて總噸數三千噸以上平均速力十海里以上の船舶三隻を用ひ、毎月一回横濱孟買間の双方を發船し、往復航海共神戸、香港、新嘉坡、コロomboに寄港する（但し往復共チューチコリン、ネカバタムに又往航門司に寄港することを得）ことになり、一番船として和泉丸が十月十一日に横濱を出帆就航したのである。宛も日清戦後運輸の振興と共に海運膨脹の氣運が熟した時であつたので、旁旁孟買航路の基礎は愈々促成され、棉花の如き滞貨を免れ紡績業の進歩に長足の

發展を來さしめ、一般貨物の輸出入にも非常の刺激を與へ、其後二十九年三月には同航路の補助も廢止されるまでに立至つたのである。

其後大阪商船も日印航路を開始、同盟に加入し、今日の盛運を招來するに至つた。尙支那紡績も近時異常の發展を來したが、從來其運賃は日本向運賃に比し上海揚一噸七留比高く、其不合理なる點を船會社へ交渉し、一昨年秋國籍の如何を問はず上海紡績棉花業者全部を一團として印棉運華聯益會を組織し、日本同等の運賃に下げしめ割戻金も日本同様とし、當初疑懼して應じなかつた西洋人、支人共に漸次其有利なる事實を認め、國際的機關を組織するに至つたのである。

甲 谷 陀 航 路 の 開 始

日印航路に於て更に吾々の記せなければならぬのは、明治四十四年十月郵船の甲谷陀航路開始で、之にも亦非常に激烈なる競争があつたのである。實際から言へば、此航路の如きは孟買航路に次で開かるべきであつたので、四十四年に其時期が來た譯である。當時此航路には英印汽船會社、印度支那航業會社並にアブカー線が同盟を作つて支配權を持つて居た際であるから、郵船の割込が競争を受けるであらう言ふことは豫期しなければならなかつたのである。郵船としては其割込に就ては初め辭を低ふして提携を申込んだのであるが、果して三社は此申込を拒絶した許りでなく、一個の荷物一人の旅客も日本船に積ませない言ふ意氣込で、孟買航路に劣らざ

る競争的態度を採つたのである。郵船が如何に苦しい立場に立つたかは、其後同盟船たる印度支那航業及アブカ―線さへ遂に撤退してしまつたと言ふ事實によつても想像が出来るのである。二社は撤退したが、英印汽船は英國旗の面目に關するものとして依然競争を繼續はしたが、實に二社の撤退によつて背景が弱められて居たので、前後四回妥協を申込んだ程である。併し郵船としてはそれが毎度不對等のものであつた爲め拒絶をした許りでなく、寧ろ孟買航路に於ける經驗を以て何處までも競争に應ずると言ふ強い態度を示したので、英印會社は最後の手段として日本が其沿岸貿易を外國船に禁じて居る以上、英國も亦英國領土の沿岸貿易地である甲谷陀蘭貢間の貿易及航海を日本に禁止すべきものであるとして議會まで運動を試みるに至つたのであるが、斯の如き運動は識者に依つて容れらるべきでない事は自明の理で、議會は之を採用しなかつたのである。殊に英印汽船は印度人船客は甲板乗言ふ様な同盟船以來の差別待遇をして居たので、郵船の無差別待遇諸設備に非常の好意を持ち、之を歓迎したと言ふ事は英印汽船に採つては甚だ皮肉な事柄であつたと思はれる。彼是する内大正三年の世界大戰が開始されて、其れが爲めに英印汽船も一時配給を中止しなければならなくなつたので、郵船の地位立場は偶然にも非常に有利になり、越えて大正七年の三月には郵船は甲谷陀蘭貢間の旅客貨物輸送を撤退する代りに、甲谷陀蘭貢間の航路權を得る言ふことに妥協が出来て全く競争の終焉を告げ、同航路の基礎は確實に築かれたのである。斯くして孟買甲谷陀蘭航路が完成したが、其後之等の航路はカラチに及び蘭貢に及び、印度重要港を網羅することに成り、大阪商船も亦大正二年孟買航路を、大正十三年甲谷陀蘭航路を開始し、其他社外船も續々寄港

を開始する言ふ有様になつた。加之印度を中心として郵船の甲谷陀航路は紐育、シヤトル、南米に、商船の同航路はニューヲリンスに及び、非常の發達を示したが、吾對印度貿易は實に孟買、甲谷陀航路の貴い歴史的發達の結果であることを記憶しなければならぬと思ふ。

印度より見た日本の貿易

何れにしても貿易上印度の價値は重要であるが、支那の現状が周知の如くである以上、今後共一層親善關係上に發達せしめなければならず、又發達するであらうと思つて居る。それは印度それ自身から見ても日本が英國に次いで印度の主要貿易國となつて居る言ふ意味合からしてさうであると思はれる。事實印度の輸出入貿易を見るに輸出に於ては英國が第一位で日本が之に次ぎ、米國、獨逸、佛蘭西と言ふ順序になつて居り、輸入に於ては矢張り英國が第一位で日本が之に次ぎ、米國、爪哇、獨逸と言ふ順序になつて居るので、印度としては日本と言ふものを除外して貿易を考へられないのと同じである。而して日本からの輸入は總輸入額に對して六七分に過ぎないが、日本への輸出は一割四五分の上つて居る。尤も印度の重要輸出入品は前に述べた日本の重要輸出入品と全く同一ではなく、輸出品としては棉花、米、種子、黃麻、麻袋、黃麻布、紅茶が最も金額の大なるものであり、輸入品に於ては綿絲布、機械、鐵及鋼、砂糖、鐵道建設及運轉材料などが最も大なるものではあるが、綿絲布と言ひ棉花、米と言ひ、第一位を占むるものは吾重要輸出入品と一致して居るのである。殊に棉花の如き吾國は一箇

年百五、六十萬俵即ち印度年産額の約三割を需要して居るので、若し日本が之を使はないと言ふことになれば、忽ち捌口がなくなり一億圓以上に上る金額は失はれて、直接には耕作者たる農民、間接には國家經濟にも大影響を及ぼすものとなるので、日本の地位が印度自體の貿易に取りて動かすことの出来ない重要なものであることを示して居るのである。従て日本が印度を重要視する如く印度も亦日本を重要視しなければならぬもので、茲に双方の一致があり聯絡があり普通他の國と異なつた意味がある。即ち一方的の重要と言ふ譯ではなくして、印度が其重要な輸出を維持し發展し伸長せしめやうとするには、一方に輸入をしなければならず、吾國は又必要によつて輸入をなす以上、一方に輸出をして増加發展せしめなければならぬことは理の當然で、少くも此一致した合理状態が特殊の事情に依つて破壊されない限りは、今後努力次第で益々貿易の發達を見るこゝが出来はしないかと思ふ。殊に之れまで印度は支那同様銀貨國で、銀價の變動によつて爲替及貿易に影響を蒙り、吾國にしても取引上常に不安危険が存在して居たのであるが、目下議會の提案となつて居る幣制改革案が晚かれ早かれ實現されて、金地本位の制度中央準備銀行制度なきも確立される時期が来るならば、餘程商賣も仕易くなり貿易の發達も出來得るこゝになるであらう。

貿易と印度經濟の根本——農業

斯くの如く重要な印度の貿易が發達し邦商の勢力が共に増加した事は、至當の事柄であるが喜ぶべき現象と言

はねばならぬ。近年印度の工業は段々發達して殊に紡績工業の如きは長足の進歩を示しては居るが、矢張り古からの農業本位即ち農業國たる域を脱しないことは、人口業態別を見ても分明である。一九二一年の調査によるこ

業	人	口	總人口に對する割合
農 牧 業	二二九、〇四五	千人	七二・四%
漁獵及狩獵業	一、六〇七		〇・五
工 業	三三、一六七		一〇・五
運輸及通信業	四、三三一		一・四
商 業	一八、一一五		五・七
其 他	二九、七九〇		九・五
總 人 口	三一六、〇五五		一〇〇・〇

全人口三億千六百萬人の中で約二億二千九萬人即ち約七割二分が農民に依つて占められて居る有様で、印度の國家經濟は勿論其貿易は一方に農産物を輸出して工業品を輸入するこゝの上に成立つて居る。従て農業の消長盛衰は直接にも間接にも印度の國家經濟多數農民の購買力及貿易に重大の關係を有つと同時に、印度と關係ある他國の貿易も之に依つて支配される分子が少くないのである。農業の主要條件は言ふまでもなく土地と氣候である事は吾國と雖も異なる所はないが、印度は東西南北廣大なる面積の中に種々な氣候の物産が出來、種類が豊富である許りでなく、インダス其他河川流域の平原に恵まれて居るので、世界に於ても稀に見る天恵の豊かな國であるから、例年の雨期が良好である限り收穫も懐合も良好である譯である。雨期即ち普通モンスー

ンシして知られて居るものは、大概六月の初め遅くも十日前後から吹き始める南西風と共に印度に降雨を招來するもので、十月に至るまで繼續するのであるが、年によつては雨量に大小があり、又地方に依つて過不足は現はれるので、此モンスーンの経過が順調でないに、植付及生育が妨げられ思はざる不作となつて非常な悪影響を生ずるにこそなる。併し之は人力を以て如何にもなし能はざるもので、農民が常時の灌漑設備を耕作方法の改良に依つて補足する以外積極的に夫々適當の方法を講じ農業の進歩を期するの外はない。只今日不幸にして印度の地租制度が非常に不良で統一がないと言ふこと、及農民が保守的で進歩的改善に努力の氣風を缺いて居る言ふことのために、モンスーンの経過は良好であつても、他の諸國に比べれば單位當りの收穫量を少なからしめて居るのは如何にも遺憾の次第である。例令ば之を地租に就て見ても、大體に於て古くからライヤットワリー・システムとザミンダリー・システムと言ふ二制度があつて、何れも肥料と種子其他の經費を除いた純收穫を標準として徵收する事は同一であるが、徵收割合は非常に異なる許りでなく、恒久的のものもあれば永い一定年限後に多少の改正をされるに過ぎないものもあり、且ライヤットワリー・システムは耕作者直接に政府に對して納税するが、ザミンダリー・システムでは、政府と小作者との中間に地主があつて、此地主が小作者から小作料を收め政府に對して納税することになつて居り、殆んど組織的統一がないのである。税制に必要なものは體系と統一と負擔を安からしめると言ふことであるが、印度には之が缺けて居る。勿論久しい間には多少の改良も加へられては居るが、尙非常に高いもので、殊にザミンダリー・システムの如きは、小作人の利益は極端に傷はれ土

地との利害戚が少いので、地主は有利であるが土地の改善耕作の進歩が疎漏に流れ易くなるのは已むを得ない事柄である。況んや印度農民の大多數が保守的慣習的であると言ふ關係もあつて、事實天恵に依つて進歩すべき印度の農業も比較的進歩をしない遺憾はあるが、それにしても印度は農業國である以上、矢張り農産物を輸出して工業品を輸入しなければならず、又政府民間でも近年印度の國産就中農業に付ては多くの注意を拂ひ改善策を講じて居る模様も見受けられるので、假令一消一長はあるにしても、吾國としては貿易上印度の價值を見過つてはならぬと思ふ。

結 論

斯く見るに對印度貿易の前途は樂觀許りである様に思はれるかも知れない。併し何と言つても英國の舊勢力は近年其輸出の減少したに拘はらず大であり、日本などは増加發展はしたものの、總體の上から見れば英國との間に尙非常の懸隔がある。加之印度それ自體の紡績業も戰時戰後を通じて發達し、錘數の如き戰前に比すれば約二百萬錘を増加し、綿絲製産高は百七十二萬俵（四百封度俵）を左して増減はないが、綿布製産高は十一億六千四百萬碼から十九億五千萬碼を殆んど倍加の状態を呈して居るから、假令其經營の技術なり方法なりは拙劣であらうとも、日本は一方に英國一方に印度の競争裡に其發展を維持しなければならぬ立場にある。加之一昨年印度では其綿業が非常の不振に遭遇して以來、恢復振興に對して孟買紡績業者の躍起運動が開始され、同年十二月には意

外にも久しい間の歴史的課税であつた印度綿布國産税の永久廢止に成功し、一方日本綿布の不正競争及特別輸入課税を唱へ、遂に昨年には第二特別關稅委員會の組織及調査を見るに至らしめた程である。尤も委員會は本年に入り既に調査を終つて居る模様であるが、尙之が結果を發表しないし恐らく實行されるまでには至るまいと思ふが、何れにしても一旦斯う言ふ様な行掛りが生ずるこゝ、いつ又右と同様若しくは類似の事が繰返されぬかは限らない。旁々之等の諸點から見ると、對印度輸出の前途は可なりにも面倒な骨の折れる事の様にも思はれるかも知れないが、併し之を支那の現在殆んど無條約國に等しき状態に比較し非常の相違のあるのを認める。印度も年々人口は殖え日常諸用品も漸次贅澤になる傾向があり、印度人も日本を以て東洋に於て亞細亞人を代表する強國なりとして敬慕好感を持つて居り、支那人の一種變つた性質は雲泥の差があるので、吾々は決して悲觀退嬰すべきではあるまい。取別け綿業立國言ふこゝは吾國の様に立國産業の乏しい國柄では、是非ともそれを理想とし實現するこゝに努力しなければならぬので、棉花の輸入は何處までも必要であり必要である限り、製品は何處までも輸出を増して行かなければならぬ立場にある。幸にして國民が此意を諒解して他の諸貿易品に對すると同様、若しくは以上の研究努力後援を以てするならば、廣大な面積三億以上の人口を有する印度の貿易が衰退に陥る言ふ筈はないので、吾々としては何處までも積極的に印度を大市場とし、印度は又日本を重要な顧客として双方の利益増進貿易の發展を日印親善の間に求めねばなるまいと思ふ。

世界的綿業都市としての大阪

昭和四年・大阪商大に於ける講演

皆様、私は喜多であります。今日の講演會は昇格後第一回の講演會であります。就きましては私にも出て何か話をせよ云ふこゝにありました。私は誠に演説が下手で、又皆様の前に出て話をするだけの知識も有りませんが、併ながら昇格に付きましては、曾て此の學校の御厄介になつた一人に致しまして、非常に欣んで居る次第でありますし、又是非出で、皆様のお話も伺ひたいと思つて參つたのであります。

偕て私は何を話さうか云ふこゝを村本先生に相談したのでございまして、まあ私は綿屋であるから、綿屋の立場から色々なこゝを話して貰つたら可からう云ふこゝで、甚だ大きな演題を掲げた次第でありますけれども、果して諸君に御了解を得る程度にお話が出来るかどうか自から疑ふて居るのであります。兎に角暫時の間御清聴を煩します。

西にマンチエスター、東に大阪在り云ふこゝは、今日能く大阪人の云ふ所であります。成程東西の綿業都市にして、マンチエスターと大阪は好い比較であります。果して大阪が世界の綿業都市にして、或は商業都市としての資格があるや云ふこゝが問題になるのであります。それには將來の大阪は世界的の都市としての資格がなければならぬ云ふのこゝ、現在の大阪が既に世界的の都市として十分なる資格を有つて居る云ふのこゝ、二つの見方があるのであります。私は現在既に世界の綿業都市として大阪は十分なる資格を有つて居るものを見

差支ない云ふ自信を有つて居るのでありまして、其の立場からお話を申上げたいと思ひます。

日本人は兎角歐羅巴や亞米利加のものは日本のものに比較して優つて居るものと考へ、政治、經濟、その他種々の方面に於て日本人は歐羅巴人や亞米利加人に劣つて居る云ふ様な感じを持つて居る人が多いのであります。又同じ日本國內に於ても大阪贅六云つて之を蔑視し、大阪の物は東京の物なきに比較して悪いものゝ様に思ふ人が多いのであります。例へば此の大阪の高等商業學校即現在の商科大學の如きも東京のそれに比して劣るものゝ様に考へる。或は大阪人にして自からさう云ふ間違つた考を懷いて居る人が往々あるのであります。私は之に反對いたします。私は寧ろ大阪人たることを自慢にして居る。私が此の學校を出したのは明治二十七年でありまして今より三十四年前でありますから、學生諸君のまだお生れになつて居なかつた時分であります。さう云ふ古い時代の學校にお世話になつたのでありまして、其の教育の程度も今日から見れば非常に幼稚なものであつたに違ひないのであります。而も私は此の大阪の高等商業學校の出身である云ふことを常に誇りまして居ります。世間では能く大阪は商業都市である云ふ申しませんが、實際大阪は現在日本に於ける商工業の中心都市として立つて居るのでありまして、又大阪以外の土地に於ては世界の商工業者として立つだけの知識を得るこゝが出来ない。少くも私はさう云ふ確信を持つて總てのこゝに當つて居るのであります。

それで大阪は日本に於ける商工業の中心都市であります。其の對外的商工業として最も頭角を挿んで居るものは、自分等の従事して居る仕事を自慢する様で、甚だ恐縮であります。綿業でないかと思ひます。尤も其

の投下せられて居る資本額から申しますれば、現在樟腦が一番多いのであります。併ながら商工業としての活動力に於て樟腦は綿業に及ばない、仍ち或は内國的に或は國際的に商工業都市として大阪の大を成すに與つて最も力のあるものは私は、綿業である云信じて居ります。

其の綿業の今日迄の發達の歴史を見ますと、甚だ不思議な位でありまして、明治の初年に、時の政府が初て若干の紡績機械を輸入し、之を無償で人民に貸與して、全國數箇所紡績工場を置いたのであります。現に堺に在る岸和田紡績の分工場の如きも其の機械を借りたものゝ一つでありまして、曾て明治天皇があの邊へ行幸になり、紡績機械云ふものは珍しい云ふことで、御立寄になつた場所も其の工場内に在る譯であります。今日は倉庫になつて居る様に思ひます。其の後明治十六年に大阪の三軒家に大阪紡績株式會社（今の東洋紡績）云ふものが出来まして、漸次發達を致し、明治二十五、六年頃には大に組織的の紡績工場があらちちらに出来たのであります。日清戰爭の爲に一時非常な打撃を受けたのであります。併し間もなく回復して、段々紡績會社の數も殖へて來ました際、明治三十三年の義和團事件の爲に又一時日本の紡績業は非常な悲境に陥つたのであります。爾來日露戰爭或は歐洲の大戰爭を経過する毎に我國の紡績業は著しく發展を致しまして、今では單に日本内地に於てのみならず、支那に迄進出して、支那に於ける紡績業の大半は日本人が之を經營して居る云ふ譯で、詰り東洋の綿業云ふものは即ち日本人の手に依つて居るものだ云つて可い様な有様であります。支那には初め印度から綿糸を送つて居りましたが、日本の紡績業の發達と共に之を驅逐し、殊に義和團事件の

當時非常に困つた日本の紡績業者が何ぞか綿糸を輸出しなければならぬ云ふので、盛に投資をしたのが動機となり、彌々支那に入っている日本の糸が殖へて、印度の糸は自然に驅逐される事になつたのであります。所が歐洲大戰後日本の内地に於ける紡績業は各種の膨脹、勞銀の騰貴等の爲に非常に生産費が高くなり、一方支那に於ては種々の條件が有利なる關係から、支那に於ける紡績業が發達いたしました。従來日本から支那に輸出して居た綿糸は支那内地に於て造られる事になり、日本よりは綿糸に代ゆるに、段々加工品若くは綿布等の精巧なものも輸出する云ふ傾きになつて來たのであります。仍ち最近に於ける支那の紡績事業の發達は上海を中心として非常に素晴らしいものがあるのであります。支那には日本人經營の紡績會社を始め、支那人の經營するもの、印度人の經營するもの、英吉利人の經營するもの等がありますが、近時其の各國人の經營する紡績會社の間に於て紡績聯合會を組織致しまして、共通の事項に對しては、成べく會議協調して行かう云ふことにして居ります。日本の紡績事業が今日の如く發達したのも、色々原因もありませうが、要するに日本の各紡績會社の間に於て日本紡績聯合會云ふものを組織し、成べく無用の競争を避け、互に協調して其の發展を圖つた所に在るのであります。

日本と孟買の間に初て直航船が出來たのは明治二十五年でございます。それまではホワイト・エンド・ピーター會社が獨占的に棉花の輸送に當つて居たのであります。運賃は高いし、取扱は非常に不親切なので、是はさうしても競争會社を拵へなければならぬ云ふ所から、紡績業者と郵船會社の間に話が出來まして、明治二十

五年に初めて廣島丸云ふ日本船が孟買に行つたのであります。當時日本の航海業は甚だ幼稚なものであります。漸く上海若くは香港と日本との間に定期航路があつた位で、香港から先に、定期航路の開かれたのは此の明治二十五年の孟買航路が初であります。而も猶ほ其の船長或は機關長云ふ様な高等船員は總て西洋人でありましたが、明治三十年に初めて日本人が船長として彼方に行つたのであります。其の時廣島丸は三千百噸の船でありましたが其の積荷に對する海上保險を附けるのに倫敦の保險業者が非常に危んでなかなか之を承諾せず、種々運動して、漸く保險を附けて出航した云ふ様な有様でありました。其後色々な點に於て西洋人の船長より日本人の船長の方が非常に良い云ふ譯で、段々保險の率も下り日露戦争が終つて、歐洲航路が初めて出來た際にも日本人によつて支障なく船は運轉され、歐洲の大戦争に當つては日本船が非常に活躍をしたのであります。其の外國航路の一番初に開けたのは孟買航路だ云つて差支ないのであります。兎に角斯う云ふ譯で始めはピーター會社と非常に競争をしましたが、日本の紡績會社は其の約束に依て一切外國船に積まなかつたのであります。而して此の二十五年の孟買航路開始に當つて、日本の紡績業者が郵船會社と約束して、お前の方の船に必ず積むぞ云ふて積んだ棉の數量が五萬俵でありましたが、紡績業の發達と共に漸次其の數量を増し、今日は印度全土から百五十萬俵、亞米利加から百萬俵の棉が入いつて來て、猶不足を告げる年があるのであります。此の日本の綿業の發達の跡を考へて見るに、非常に面白いものがあるのであります。紡績聯合會の組織が完全になるに、又是と對應して、一方には日本棉花同業會と、或は綿糸綿布の同業組合若くは輸出同盟會と、色々組織

立つた團體が設けられ、是等のものが海外各方面に亘つて努力を致しました結果、今日の如く日本の綿業云ふものが發展して來たのであります。

紡績會社の方は先づさう云ふ風でありますが、更らに綿業者、綿屋ミか糸屋ミして此大阪を見ますミ、大阪は昔から綿業の中心であり、又棉作地の中心であつて、中河内の平野ミ云ふ所は紡績事業の發達しない時分には、日本の綿糸の中心地でありました。日本の棉は今日から見ますミ、甚だ微々たるものでありますミ、攝河泉を中央産地ミして、三河、大和、安藝、伯耆、常陸等に産したのでありますミ、主ミして大阪で出来る棉は坂上棉ミ稱へ、最も良いものであつたのであります。それで此の地方の棉を使ふ積りで、あの平野紡績が出来たのでありますミ、迎も全部地方棉は使へないので、止むを得ず支那棉を使ひ又印度棉を使ふ様になり、世間もそれを認める様になつて今日の發達を見たのでありますミ、初は支那棉を使ふミ、弱いミ云つて買手がなかつた、それで三軒家紡績の如きは支那棉を使ふので、夜間内密に造つたミ云ふ様な譯であります。所が最初神戸に入つた支那棉は主ミして支那人が扱ふて居ましたが、支那人は普通に賣るのはさうでもありませんが、先物を約束して、相場に負けたならば、棉に水を入れて必ず賣値に合ふ様にして置く、是では甚だ困るミ云ふ所から、確か明治二十三年頃ミ記憶しますが初て西洋人の手から印度棉が入る様になつたのであります。而も印度棉は粗い俵で中にホコリが多くて使へぬミ云ふ時代もありましたが、技術が進歩するミ共に段々殖へて、神戸若くは横濱に於ては倉庫が足りないので屋外に積んで置く、所が港内設備ミ云ふものは十分でない爲に、度々大きな火災を起して、

非常な損害を蒙つたミがあります。今日大阪の港には殊に棉花が非常に澤山入る様になりましたが、是も日露戰爭の揚句に於きまして、神戸では倉庫が足らぬ爲に、何十ばいミ云ふ船が入いつて、荷物を始末するミことが出来ず、居留地の空地の様な所に二月も三月も雨曝しにして置いてあつた、さう云ふ次第で甚だ困るから、さうしても大阪に輸入する様にしなければならぬミ云ふので、當業者が運動した結果、大阪に入らざる様になつたのであります。近頃は又關東の大震災の結果、横濱に入らざる荷物を露天に積んで置いては危険であるミ云ふことからも名古屋が盛んに使はれる様になりました。恰度大阪の築港が發達したのミ同じ様な歴史を辿つて今日名古屋港が段々發達して來て居ります。私は近き將來に於て名古屋は商工業の非常な大都市になりはしないかと思つて居ります。何れに致しましても今日、日本に入らざる棉は神戸、横濱、大阪、門司、長崎、四日市、名古屋ミ云ふ方向に向つて輸入されるのであります。又支那に於ける紡績が多く日本人の經營に在るミ云ふ關係より致しまして、支那の紡績は支那棉も使ひますが印度棉も使ひ、又亞米利加棉も使ひます。それ等は殆ど日本人の手を経て輸入されて居るのであります。直接輸入せられたものも矢張り大阪若くは神戸の港で積替へて輸入されたものであります。又日本の紡績會社は南は鹿児島から北は仙臺まで各地に分布されて居りますが、それ等の會社は殆ど總て其の營業所ミ云ふものは之れを大阪に設けて、原料の買入或は製品の賣捌ミか云ふやうなことは全部大阪でやつて居ります。即ち各地に於ける工場は唯原料を受けて之を製品にするミ、其間の工賃を拂ふだけであつて一切のことは大阪を中心ミしてやつて居るのであります。支那に於ける日本人經營の紡績會社も日本の大會社の

支店紡績云つて可いのでありまして、無論上海に原籍を有する日本人經營の紡績會社もありますが、それぞれ内地と連絡を有つて居るので、總ての金融、總ての經營云ふものは大阪が支配をして居るのであります。従つて日本及び支那に於ける紡績云ふものは全部大阪が持つて居るに申しても決して過言ではないのであります。

東洋に於ける日本の紡績の地位は右の通りであります。之を世界的に見るに、何うであるか云ふに、紡績の大勢は無論先づ錘數に依つて見るのであります。歐羅巴に於ては最も多い英吉利の七千六百萬を首め、次で獨逸佛蘭西、露西亞、伊太利其他全部を合せて一億二千九百萬、亞細亞に於ては印度の八百七十三萬、日本の六百六十八萬、支那の三百四十七萬、合計千八百八十八萬、亞米利加に於ては合衆國が三千八百三十四萬、加奈陀が百二十二萬其他を合せて四千百萬、即ち世界全體の錘數は一億九千八百八十八萬程あるのであります。それに對して日本の錘數は六百六十八萬で、此の外に支那の三百三十七萬の約半數は日本の所有と見て間違ひはないのであります。此の錘數と消費する棉の數量とを比較して見ますと、驚くべき事實があるのであります。世界に於て一番餘計棉を使ふのは亞米利加でありまして七百三十二萬俵であります。英吉利は錘數に於ては七千六百萬云ふ世界の第一位を占めながら、棉の消費量は三百一十一萬俵であります。日本は六百六十八萬の錘數に對して棉の消費量に於ては二百九十三萬俵云ふ數字を示して世界の第三位に居るのであります。何が故に日本の紡績は其の錘數に比して棉の消費量が斯く如くに多いのかと申しますと、從來日本では十六番手と二十番手と云ふ太い糸を紡いで居るので、糸が太い丈けそれだけ棉の使用量が多くなる譯でありますし、又日本に於ては一週間の運

轉時間が他國に比して多いの、各織機の能率がなかなか進んで居る云ふ様な、色々な關係から斯うなるのであります。何れにしても日本の紡績は是だけ多くの棉を消費して居るのであります。

斯の如くにして産出される綿糸綿布は單に内地の需要に應ずるに止らずして、今日では支那は勿論海峽殖民地、南洋、印度、近東、阿弗利加、濠洲から、最近に至つては南米のブラジル、アルゼンチン邊まで出て居りますし、或は倫敦を経由して、亞弗利加の西海岸のナイゼリアまで出て居る様な次第で、日本の綿業は全く世界的になつて参りました。唯茲に懸念するのは支那の紡績の發達でありまして、從來支那に行つて居た日本の製品は段々支那に於て生産される様になつた爲に、日本の紡績としては從來のものよりも非常に精巧な品物を造るか、若くは加工品に向つて行く云ふ傾向になりました。支那の紡績が恰度會て日本の紡績が進んで來た後を追ふて來る云ふ様な形になつて居るのであります。即ち今日は場合に依りましては日本の紡績が開拓した販路に向つて支那の製品が上海若くは滿洲から輸出されて居る様な傾があるのであります。

日本の紡績事業の發達の歴史を眺めて見ますと、是は紡績業者の諸君にお聴きになれば、能く分りますが、日本に於ける多くの事業にして政府の特別の保護を受けないものは無い様でありますけれども此の紡績事業のみは殆ど政府の保護を受けて居りません。即ち他の事業に於ては相場の暴落した様な場合には直ぐ農林省と工商省或は日本銀行等に駆け付けて、其の救済を仰ぐ云ふ様なことをするのでありますが、紡績業者と云ふものは未だ會てさう云ふことをやつた事がない。又今日世界的に働いて居る關係から、自然紡績業者の間に於ては自由通

商論が盛に行はれて居るのであります。而して現在紡績業者の中堅になつて居る人々は日本の紡績事業の發達に付て色々御功績のあつた人には違ひありませんが、種々苦心して日本の紡績を造り上げたのは主としてもう一代前の人達であります。其の後を繼いで非常に熱心なる努力を以て益々之を發展せしめたのが即ち今日中堅になつて居る人達でありまして、それには一面十年目毎に起つた戦争も云ふものが非常に其の發展を助けたのであります。更に他の事業に於ては利益があれば、直ぐ其の利益を分配してしまふも云ふ風でありますのを、紡績業者は十分に之を蓄積して、一朝不時の場合に備へたも云ふことが又大に此の事業をして發達せしめた所以であらうと思ひます。

従来私は生糸の事業にも關係して居りますが、御承知の通り生糸も云ふものは日本の輸出品中最も大事なものであつて、一方に於ては棉花も云ふものが輸入の上に於て一番多いのであります。所が此の棉花も生糸の商業としての發達の跡を辿つて研究して見ますと、私は其の間に非常な違ひがある様に思ふのであります。最初外國人が日本に来て、是等の商賣を始めたのを、段々日本人が代つてする様になり、今や日本棉花業者の主なものも支那、印度は勿論のこと、亞米利加、阿弗利加の内地に迄行つて、直接棉花の買付に従事し出来るだけ低廉に原棉の供給を圖り、而して其棉花がござは綿製品もなるや之を世界の各市場に供給するの任務に當つて居るのである。所が之に反して横濱の生糸の商賣は今猶ほ從來の舊式を脱せず、何か困つた際には政府に嘆願する、政府も輸出は大事であるし、生糸が一番可愛いも云ふ點から、相當無理を聽いてやる。場合に依つては助成金を貰ひ、

帝蠶會社の如きものを起すも云ふ譯で、割合に進歩はしたのであります。綿業に至つては政府の助成を頼まぬのみか却つて一時は棉花の爲替資金を政府に斷られたも云ふ事もあつて、殆ど政府から見捨てられたやうな事もあつたが當業者の忍耐も奮闘の結果能く難關を打開するを得て遂に今日の進歩を見たのであります。それに付て段々研究して見ますと、英吉利は御案内の通り本國に於て棉花が産出する譯ではなく、遠く殖民地からランカシヤに持つて来て、更に其の製品を自分の殖民地を首め世界の各マーケットに出して居るのであります。棉花の生産から申しますと、印度、亞米利加、若くは支那でありまして、殊に亞米利加棉が一番多いのであります。所が其の亞米利加棉を買ひ、殊に印度若くは支那の原棉を輸入するに付て日本は英吉利より遙かに優つた點があり、又製品を輸出する上に於ても有利な地位にありまして、さういふ點は東洋に於ける特殊地位として、日本の紡績事業を發達せしめた事に少からず關係があるのであります。その他日本の風土も良く、相當優秀な織機を備へ、低廉な石炭も十分にあり、熟練な女工を持ち、最近に於ては資本も豊富であるも云ふ様な事が斯業の發達を助けた事は言ふ迄もない事でありまして。

斯の如く、日本の綿業は非常な進歩を致しまして、英吉利若くは印度の紡績業者をして頻りに脅威を感じしめて居るのであります。それに付て印度の紡績業者は、初め日本の紡績の進出は政府の助成に依るもので、印度市場にダンピングをやるのであるも考へ、日本品に限つて輸入税を高くしようも云ふ議論があつたのであります。併し段々調査の結果、日本の紡績は決してさう云ふ不正競争をするのでもなく、又特に政府の補助を受けて居る

ものでもない云ふ事が分つて来た、又最近まで大阪に居た英吉利の副領事のカンニングガム云ふ人は年は若い
が非常に日本語の達者な人でありまして、此の人が殆ど一年間かかつて日本の紡績事業を研究し、其の結果を本國
に報告しました、それに依て、又英吉利の有名な雑誌記者であるポーカーク云ふ人が日本の紡績事業のこゝを盛
んに書いて居りますが、其の中に日本の紡績業の進歩に付ては互に聯合して、棉花の買入等に對しても非常に特
徴があり、又日本には三品取引所云ふものがあつて、其機關として働くに便利である云ふ様な事も書いて居
ります。近頃英吉利に於ては支那に對する綿製品の輸出が減つた、綿糸の減つた、原因は分つて居るが、綿製品の
減つた原因はさう云ふ譯かミ段々研究して見るに、大阪で製造して居る云ふこゝが分りました、日本で商務官
をして居たクロウミ云ふ人が數年前英吉利に歸つて、日本人の技術に就いて尋ねられた時に、到底英吉利人には
及ばぬ、心配はないといつた事がありますが、豈圖らんや、日本の紡績會社の加工業はなかなか進歩して、色々
なものが出来る様になり、支那若くは南洋に向つてマンチエスターの製品に代つて供給する云ふこゝになつて
段々英吉利の製品は驅逐されて行く、それに驚いて、是は何ミか考へなければならぬ云ふので、英吉利に於て
は先達で紡績會社の合同論が行はれ、或は東洋に向つて一仕事始めたらい可い云ふので、マンチエスター・プリ
ンタース・アツソシエーションの如きは立派なる製品を集めて、上海に於ける製品と共に日本品と競争しよう云
ふ風に進んで居るのであります。最近には英吉利の紡績聯合會の會長が我々の敵は大阪神戸である云ふ様な
演説をして居りますが、さう云ふ風に英吉利の紡績業者及び印度の紡績業者なきが日本に於ける綿業の進歩に付

て脅威を感じ、如何にして之と競争して行くべきか云ふこゝに對して苦心慘愴して居るのであります。
斯ふ云ふ次第で、私が先に申述べた通り、我大阪は今日既に世界的綿業都市としての十分の資格を有つて居る
のであります、我々は大阪人であり。大阪の素町人であるこゝを誇りこし、今後も世界を對手として活動して
行く決心を以て進まなければならぬと思ふのであります。尙ほ支那の問題に付て色々お話ししたい事もあります
が、お約束の時間が参りましたから、是で御免蒙ります。

追

憶

哭喜多又藏君

庄司乙吉

煙月樓臺記游跡

江湖把臂約鷗盟

故人一去無由見

寒雨淒涼滿暮城

追憶

喜多君を憶ふ

阿部房次郎

一昨年秋、英國からトムソン卿を團長とする綿業使節なるものが、我國に來朝し、我國の綿業の長所について種々調査し、その報告をしてゐる、その要旨は畢竟するに労働者の効率多き事、當業者の經營方法宜しき事に歸してゐるが、それ以外に、殊に日本の綿業が他國のそれに比して特色あり、又彼等の以つて異になして居る事は、我國には所謂大棉花會社なるものがあり、これが原棉の七割迄を安價に供給し、一方紡績の製品たる綿糸綿布の大部分の輸出にも當つてゐる云ふ事象を掲げてゐる。そうしてこの事が日本綿業の發達にされ丈け寄與してゐるか云ふを報告してゐる。

成程、この事は、日本綿業にまつては、獨特の長所でないか云ふ自分にも考へさせられる。而もこうした事は、他國の直ぐに眞似しやうにしても出來ない事であり、又日本にしても始から之を計畫的にやつた云ふものでな

い。自然にこう云ふ發達を遂げたものである。出来るだけ安く原棉を仕入れ、さうして又一方出来るだけ海外に輸出を計る云ふ、この商人道の發揮し得る人達のある事によつて始めて可能であつたのである。

私は故喜多又藏君を憶ふにつけて、いつも、彼が如何に、この商人道の權化であつたか、如何に我綿業が、彼の努力によつて世界的に活躍するを得たか、感謝の念を起さざるを得ないものである。私は次に若干想ひ出づる儘に、この商人道について、彼についての出來事を記して見たいと思ふ。

印度棉の買付並びにその回漕について、その最初は澁澤翁始め政府の御盡力によつたものではあるが、こうした良き計畫が長きに亘つて實行され發展されるには、そこに實際の衝に當る人物がなくてはならぬ。當時聯合會なり棉花商からそれ〴〵人が派遣せられたものだが、何れも廿歳臺の若者に過ぎなかつた。よくも當時これらの若き人達が我國商權恢復の爲めに、異邦萬里の域にあつて奮闘し得たものだと思ふ。喜多君などは、その中にあるが、最も年少氣鋭の方であり、潑刺なる意氣と明透な考察力を以て、如何にせば安く原棉を仕入れられるやについて懸命の努力を續けられて來たものである。その當時から既に聯合會の船積方針について或る批判を拂はれてゐたやうであり、又棉花買付にしても、土商代理人を排して自己買付とし、又單に孟買のみならず進んで奥地に入込み、そこに繰棉工場を經營する等次ぎ〴〵に進取的に經營方針を樹てられた。これは印度のみでない。米國、支那、埃及と君は倦まざる研究心を以て世界各棉産地にその計畫を波及して行つた。東阿弗利加にも先鞭をつけたのは君である。かうして日本紡績業者にまつて如何なる種類の棉でも手に入れられる云ふ便宜が提供

され、所謂混棉の技術と云ふものが、日本に獨特な發達をするに至つたのも、又偶然でない。其後君は日本にあつては神戸に於ける棉花陸揚荷捌諸費用の節減に盡力した如き、又米棉運賃の省減に力を致した如き、要之、如何にして安き原棉を日本紡績に供給するかに向つて拂はれた君の努力は實に偉大なるものである。

他方紡績製品の輸出と云ふ事に、目をつけ且之を實行に移すについても、彼は先驅者の一人である。即ち明治三十年代逸早く雜牌綿糸の大量を清國に輸出した如き、降つて歐洲大戰後にはアフリカ、南米等と世界を跨に、日本綿布の進出に努力した如き、殊に大正九年より翌年にかけて我綿業界が未曾有の大混亂時代に遭遇した時、卒先之れが救済の大任に當り日夜各關係方面に奔走し遂に能く難局打開、斯界安定の基礎を確立したる如き實に君に負ふ處多大なるものがある。其他何につけても、君の生涯は、日本綿業に於ける最も純眞な奉仕をした第一人物である事を認めずにはおられない。獨立自主、創造力に富んだ商人道は彼に於て完全に見出されるのである。

日本の綿業は最初之を英國より學んだものであるが、却つて出藍の譽を獲ち得た。さてランカシアが十九世紀を通じて世界綿業の中心となり得たものは、一つにその當業者に進取的自主獨立の精神があつた事に因るのである。我日本綿業にも夙より當業者が自覺して、政府の力を依頼せず飽く迄自己の力によつて邁進する美風と特色が見出される。紡績經營については山邊丈夫氏を始めとして數多の力強い經營者を得た。が一方原棉の買付、製品の販買については、喜多君の如き士魂商才に恵まれた偉大なる商人によつて、よく我國獨創的發展が出來得たものと信する。喜多君が十八歳學窓を出でて以來五十六歳幽明境を異にせらるゝ迄卅八年の生涯は、全く我綿

業の發展惹いては我商權の恢復進展に貢献せられたもの云つて好い。今や我綿業は既に世界類比なき隆盛を示すに至つてゐる。月額二億碼の綿布輸出は、我國にしても記録的であり、英國に比しても斷然上位になつた。逝ける喜多君を憶ふにつけても、今日我國綿業の盛況を知らし得れば喜ぶ次第である。

喜多又藏君を追想して

安宅彌吉

僕が喜多君と相識るに至つたのは随分古い事で、確か明治廿九年か三十年の頃であつたと思ふ。當時僕は一橋の高商を出て、大阪日下部商店香港支店に勤務して間もなかつた頃で、君は日本綿花株式會社の孟買出張員として赴任せられる途中、上陸來訪されたのであつた。僕はもう廿四五歳の壯年であつたが、君の年譜に據るに、君は二十歳か廿一歳の青年であつた。随分早くから活動されたものだ、今更思ひ出して、敬服の念禁じ能はざるものがある。商賣の方面が違ふので、其後は永年親しく相話す機會もなかつたが、僕が卅七年に一小商店を獨立經營し波瀾重疊たる創業の難境に營々刻苦しつゝある間に、君は既に大會社を双肩に擔ひ、關西有數の實業家として、縦横に其の手腕を揮はれてゐた。僕は蔭ながら君の英風を望見し、春海の如き其の洋々たる前途を祝福してゐたのであつた。

君と親しく交際するに至つたのは、其後大正六年に僕が大阪商工會議所の議員に當選してからである。何時か君は昔香港で僕に會つたこゝの記憶を話され、若き日を思ひ出した事もあつたが、今や君逝いて既に八閱月、永へに雄姿に接する期なきこゝを思ひ、人生は眞に露の如く、又電の如しこゝの念、轉た切なるものがある。僕は生來無性の質で、友人との私的交際甚だ疎に、自然君の個人的方面を知ること、極めて少きも、僕が會議所に關係して以來、既往十五箇年の間、諸種の會合に於て、屢々君に接するの機會を得、暗々裏に啓蒙の益を受けしこと決して少くなかつた。君は偉大なる體格の持主にして、一見茫乎たる風手であつたが、思慮周密、事を處するに苟もせず、その話さるゝ所は、多くは結論のみであつたにしても、常に大所高所より達觀して、能く大局に通ぜられたことは、我等の敬服措かざる所であつた。若し夫れ彼の鈍重な偉軀を以てして、機敏にも此の劇忙の財界に東奔西馳され、活動其物の如き生活をせられたことは、何人も驚異する所で、君の如きは實に典型的大實業家の素質を有せられたもの云はねばならぬ。

君は又我實業界中稀に見る篤實の紳士で、殊に友誼に敦く、人の依頼を受けては、懇切丁寧、吾事の如く世話をされて居たやうに見受けた。君は大阪高商出身者中第一の先輩として、個人的にも公共的にも敬慕の的と爲り居られ、他面實業家としては、世界的の活動舞臺に馳驅して、華城財界の重鎮、否な我國貿易界の最も重要な一人として、押も押されもせぬ存在であつたに拘らず、最近數年來、我經濟界未曾有の不況に加ふるに、世界的反動時代の影響を以てし、君が事業上に受けられたる打撃頗る甚大なるものあり。君は日夜苦慮、心肝を碎き居

られたが、我等は君が平生の手腕に信賴し、難境を打開し、再び駘蕩たる一陽の來復を迎へらるゝ日の必ず遠からざることを期し居れるに、尋で大に健康を害され、不幸中道にして永眠せられしこと、返へすゝも残念の至りである。

今や我國は經濟上にも、思想上にも、將又政治外交上にも、國難荐りに臻り、我等實業界に在る者も雖も、帝國の前途及び國家百年の長計に關し憂心措く能はず、我等の責務も決して尠少なからざるの秋に當り、君の如き財界の有力働手を喪へることは、啻に君の爲めに不幸弔すべきのみならず、亦た此の非常時局の一損失として、深く其の死を惜まざるを得ぬ。聊か所感の一端を述べて、之を追想の辭とする。

故人を憶ふ

忠 田 嘉 一

私が始めて故人の知遇を辱ふしたのは今を去る約三十年前即ち明治三十六年渾大防福島紡績會社々長の麾下に在りたる交からである。當時故人は年齒漸く二十七歳、氣鋭年少の新進で俊髦既に驥足を展ばし日本綿花會社の支配人として綿業界に活動して居られた。同社には故人よりも遙かに先輩が數人居られた筈なるに、夫れ等の人々を凌駕して一躍榮進せられたので異數の拔擢として一時世間に膾炙せられたものである。之は即ち故人が既に

青年時代より天稟の才識勝れて居られたに因るは無論であると共に關西實業界に聰明の聞え高かりし故田中市太郎社長の英斷が兩々相俟つて玉成されたものと思はる。宜べなるかな故人も亦田中社長を大に徳として居られたものに見へ、後年故人が社長に累進せられ、名聲愈々高く隆々として一世を風靡するの概があつた或る靜かな夜、偶々懷舊談が始まり故人は感慨無量の面持にて余の今日あるは全く田中社長に負ふ所大であること述懐せられると同時に、先人を偲ばるゝ其の至情切々なるものあるを親はせられた。以て如何に故人が先人に對する情義を須臾も忽にせざる眞に純情の士であること私かに敬服したのであつた。

故人は溫厚にして圓滿なる人格者であつたことは申すまでもなく、人情に頗る厚く、而かも性來任俠な所があつて人を容るゝこと大海の如く、所謂清濁併呑云ふ大雅量を有して居られたことは萬人の等しく認むる所で、先輩に對しても後輩に對しても洵に親情溢るゝやうな親しみがあつた。従つて社内にも自ら其風を爲し、日本綿花會社の社員は上下を通じて萬事親切で、何んもなく品格が在り凡て氣持の好い感じがするとは一般の定評であつた。

故人は又後進を導くことに最も意を注がれ、其のお世話を受けた人は必ずしも後進に限らず殆んど大小數ふるに違のない程であらうと思ふ。私も數人の青年をお願ひして今は立派なる地位に在る人もあり、其恩澤の深きを衷心肝銘して居る次第である。

私は明治四十五年渾大防氏が大阪莫大小紡織株式會社（今の明正紡織）を設立せらるゝに際し入社して今日に

至りたるものであるが、故人亦從來渾大防氏に親密の間柄なるを以て此の設立を贊助せられ、後ち取締役又は監査役に就任して同社の發展に盡くされたことは同社の最も感謝して居る所である。従つて私は爾來引續き直接間接に故人の庇護指導に與かりしこと尠ならず、常に其の深厚なる情誼に感激して居た次第である。

故人は私共から視るに殆んご席の温まる隙にては寸時もない位繁忙のお身でありながら、所謂英雄閑日月ありごでも申すべきか、何時の間に練習せられたものか團碁の趣味があつたのには聊か奇異の感がした。技倆は私ごにも兄たり難く弟たり難しご云ふ所から俱樂部や其他で出會ふご一ツ、ロウカ、ご必ず挑まれて能く戰つたものであつたが、流石碁面にも故人持前の太ッ腹な所が自から戰術畫策の上に躍如として居り、其時に於ける故人の面影は全く天真爛漫で今もなほ彷彿として忘れるごが出来ない。今や幽明處を異にし再び親しき温容に接するごに能はざるは轉た追憶の念に堪へざる所である。

近代的 ビズネスマン

福 井 菊 三 郎

私は喜多君ごは永年の交際はありながら、餘り一緒になる機會はありませんでしたが、ベルサイユの會議に私は喜多君ご一緒に隨行員として参加し前後九ヶ月間寢食を殆んご一緒に致して参りました。

我々は全く方面違ひの條約の事なごを研究せねばならないので船中でも毎日の様に卓を一所にして研究して居りましたが、喜多君は直きに居睡りをされる。かう居睡りをされて居つてはよく御判りにならないだらうご思ひました所がそうではありません。仲々よく判つて居られる、我々以上に御判りで要點々々はちやんご御判りである。殊に歐洲滯在中にも諸々方々から電報が参り是れを一刀兩斷に裁決せられ居る御様子でありましたが、その多忙の間に於て平和會議の種々複雑なる要點を充分に呑み込んで居られたのには私も實際近代的の所謂ビズネスマンごはこの人の事であるご思ひました。

向ふに居ました時は我々は終始一所に居りましたが、只喜多君は旅行する時に限り何んのためか我々より何時も遠ざかりすつご離れた室を御取りになる、初めは何んの爲めか判りませんでした。が夜分になるご大變に大きな駭をかゝれるので我々に迷惑をかけはしまいかご氣遣はれて居つたのであります。(於工業俱樂部追悼會)

追 憶

藤 山 雷 太

喜多又藏君ご相知つたのは何時頃で有つたか、能く記憶しないが、予は曾て日本火災保險株式會社を經營して居る中、其大株主である田中市兵衛翁が君の人物を推奨して居たから、其頃から君ご相識つたご思ふ。

君は實業家中では、比較的年齢が若かつたが、今君の年譜を見れば、年齢十八歳、始めて眇たる一社員として日本綿花株式會社に入社して以來、二十七歳支配人となり、三十四歳取締役となり、四十歳副社長となり、四十一歳には社長となり居る、非常なる躍進振りである。

○
是れは勿論、君の天資秀發なるにも依るが、君が精根を日本綿花會社に打込んだ爲めである。否、嘗に日本綿花會社云はんより寧ろ、我國紡績業の發展を期せんとする熱誠が迸つた結果に外ならない、君が在世中、日本綿花會社は、東洋棉花、江商棉花を鼎立して、覇を稱して居たが、其中でも、日本綿花會社は、嶄然として頭角を擡んで居た。

○
英領印度では英國人が日本人の企業を歓迎せず、却て之れを排斥するのは當然である。然るに君は能く英人の諒解を得て、實棉産地を有する印度の練棉工場を手に入れた、紐育の棉花取引所でも亦我邦では日本綿花會社のみ其會員となり居る、是等は同社の信用よりも、君の個人の力が外人の信頼を得た爲めだ云ふに至つて、君が非凡の才能を併せて立派なる人格者で有つた事を、證據立てるものである。

○
君の志や單に一個の日本綿花會社の隆盛を計る許りでなく、日本の綿布綿糸を如何に發展せしむるかに在つた事は、亞弗利加モンバサ港の奥地、その頃では實に瘴煙蠻雨の地たるウガンダに原産地を獲得したり、埃及のアレキサンドリアに卒先して、支店を設けたのでも、其志を窺ふ事が出来る、君は苟も斯業に關係ある世界の各地には、何處にでも網を張らうと心掛けて居た。

○
大正七年ヴェルサイユ會議には、君は媾和特使の隨行仰付けられ、我國の實業界を代表して、其帷幄に參し、歸朝後、牧野媾和副使と共に、破格を以て、參内拜謁の光榮に浴したのは、恐らく君の生涯中でも最も華かなる場面の一で有つたらう。

○
媾和會議に於て、各國の使節が、何れも智能を傾けて、樽俎折衝する光景を見、廣く世界の形勢を揣摩洞察するや益々、實業報國の念を堅くした、從來殆ど一身を紡績業に没頭したる君が、我が國の委任統治に歸したる南洋群島テニヤンに於て、椰子や麻や砂糖の栽培を試み、該地方の事業に先鞭を付けたのも、之れが爲めである、現に同島は南洋興發株式會社の經營に移つて居るが、君が茲に、着眼したのは、決して自己の利益を計る爲めではなく、國家的見地から事業の舞臺を擴ぐると共に、過剰に苦しむ内地人口の捌け口として、青年を導いて海外に雄飛せしめんとする、用意に外ならなかつたと思ふ。

歐洲戦後に起つた世界經濟界の滔々たる頽波は、何れの國、何れの事業も其影響を蒙らざるものはない、日本棉花會社も亦、非常なる打撃を受け、君は悲壯なる決心を以て社運の挽回に當り、晝夜奮闘の爲め、遂に病を得實業家としては正に中年にも云ふ可き、僅に五十六歳を以て易賣したのは實に惜みても、餘りある人生の悲惨事である。

君の一生は奮闘的精神を以て一貫したるのみならず、資性篤實にして情に脆く、義に勇み、誠に尊敬す可き紳士であつた、關西屈指の實業家として、未だ身後の計をなすに遑のなかつたのも、専ら故舊に盡し友誼に濃かであつた事がある原因を爲して居る、予は前途尙ほ有爲の實業家を喪ふた事を國家の爲めに悲しむ而已ならず、一個敬愛せし友人を少くしたるは哀惜に堪へざる處である。

追　　憶　　の　　記

福　本　元　之　助

小生の喜多又藏君を始めて識りしは明治廿八九年の交なり、爾來事業を同せしこももなく利害を共にせしこも

もなく、唯喜多君は商界敏才の人なりと認識せしのみ。然して其尤も能く喜多君の識量と努力を認めしは大正九年に於ける綿絲布業界恐慌の時代です。大正九年の央に到り綿業界の情勢急に變轉し、非常に激化し、商品の價值暴落に繼ぐに暴落を以てし底止する所を知らず、恰も將棋倒しの傾向あり、茲に於て東洋紡績の庄司君と小生一日綿絲商務所の二階に會合し之を解決するには解合の方法を取るに如かず、之を決行するには容易ならざる難關あり、法律家毛戸博士を招請し同君の意見を聽き略ほ所見を定めたり、然れども之を決行するには其の人を得ざる可からず、其の人を得ざれば事功達し難し、之を行ふには紡績業者と綿絲布業者孰れにも偏傾せず、而して利害の關係は切實にして且十分事情を知悉する人始めて之を行ふを得可し、之には東洋棉花の兒玉一造君或は喜多又藏君に限れりと思ひ、兩人之を兩君に懇懇したり、兒玉君も之を是なりと自ら立つこもを稱せられたれども立場の上に於て考慮せらるゝこもあり、茲に於て兩君相議し奮然先づ喜多君之に當面し立たるこもなりたり、此時に當り喜多君は己を捨て利害に超越し颯起勃々甲を談じ乙を議し、百方説道遂に圓満境裏に斯事業を成功の域に至らしめられたり、憶ふに綿業界の激浪狂瀾は纔かに紡績業者の防波堤にて之を支へ得たりと雖も若し喜多君の機宜を得たる畫策斯界の物論を説破し、當業の英豪を協和するの努力微せば此の業界の安定は得易からざりしなり、故に當時斯界の安定今日の盛況を觀るは喜多君の挺身之に當られたる賜にして同君に負ふ所最も大なり、小生は此の一事を以てしても我綿業界延て大阪財界日本の財界に寄與貢獻せられし事は歴々として後昆を照すこ謂ふも過稱に非ずと思量せり之を追憶の記と爲す。

震災、當時の思出

原 富 太 郎

私が故人に親しく御目に懸つたのは、大正十二年九月の大震災の直後でありました。當時横濱は生絲貿易復興の最中で、未だ草鞋を握飯で僅に形ばかりの取引を始めて開いた頃であつた。扱て取引はさうやら開けたが各輸出商は横濱の復興が當分困難を見切りを付け皆神戸にて夫れ々買入れの準備中であつた。そこで自分等は親しく大阪へ行つて事情を打明け援助を請ひ神戸にて買入れの計畫を斷然中止して貰はねばならぬ必要があつた。其中止の成否は直に復興の成否に關係するのである。則ち震災突發の月の末頃であつた、自分は斯る重大な問題であるから、井坂孝君を頼んで二人で清水港から上陸して大阪へ行つた。勿論主として喜多君に會つて一切の事情を打明け其任侠の一諾を請ふ爲めであつた。早速大阪の旅館から電話で君の都合を問合はすに吾等の行くを待たずして君は直に車を馳せて先づ吾等の旅館に來訪せられた。そこで吾等は災後の窮状を計畫の一切を赤裸々に打明けて此場合の援助を懇請した。君は聞き了つて衷心同情に堪えぬ面持にて暫時沈黙せられたが、何か決心せられた様子で口を開いて、來旨は能く了解しました、此場合如何なる御申込にも萬障を排して同意します、神戸へは向後一年間は決して支店なきは出させぬと明言せられた。尙江商會社の方にも自分から克く相談しまして同一歩調を取る様にしたいと思ひます、尙自分をして此地方に關する事は何事にも應分の努力をしますとて新聞記

者にも日綿會社にて會見の運を取り計らはれ又誰を訪問するがよいと誰に紹介しようかと巨細懇切なる御世話を受けて君の高義を親切に忘る可からざる印象を残して歸つた。そして生絲市場の復興も一段落を告げた譯である。後にて聞けば君は最初神戸の諸親友より生絲市場開始の相談を受け其援助を約し且生絲買入のため支店を設置するの約束もされたる事にて君の此際の立場は甚だ困難なる事情が有つた譯であるが、當時夫は一言も自分等には云はれなかつた。左様な苦境や賣恩的の言葉は一言も聞かなかつた。此れが君の人格の高い處で尊ぶ可きは此點である。自分は君が快く一諾を與へられた高義は勿論だが此苦衷を一言も語られなかつた點に於て一層感激したのである。而して復興事業の最中に東京へ來らるゝ毎に必ず見舞はれて復興の進捗を喜ばれ温情を披瀝せられた。自分は其後帝國經濟會議で數日間机を同じくして度々精彩ある意見を聞いた。爾來久しく御目にかゝる機會がなかつたが突然遠逝の報を聞いて當時を回想し痛惜措く能はざる次第であります。

噫 喜 多 君

橋 本 喜 作

喜多君は誰が見ても實に太つ腹の大事業者であつて、同時に何事にも積極進取的の偉い人であつた。併しその間に十二分の調査と研究を積み、且つ大勢的に財界の趨勢を洞察して、緩急その宜しきを得てやられる方であつ

た、それであつたから囊に大敗して居つたあの綿花會社をして九鼎より重からしめ、本邦第一の綿花會社とせられ中外にその名聲を博せられたのであつた。

自分は喜多君には多年の親交を受け淺からぬインチメートルにして御交際を願つたのであつた、喜多君がみんな忙しい時であつても自分が尋ねて行つた時は直ぐに會談時の移るを忘れる位で、それが會社の用事であつても亦プライベートの用事であつても、色々その胸中を打明けて自分には話されたのであつた、そして何時でも進取的で殆んど消極的の話はなかつた。

これは一つは自分と喜多君とは、能く意氣が合つて居つたにも依るのであらう、自分はどんな場合でも世の中を悲觀した事はなくみんなに自分が失敗した時でも、濟んだ事は仕方がない之れからは注意しやうと、失敗そのものは自分に對する大なる教訓のみ思つて居るのである、だから何時も何事にも樂觀論者である。樂天論者である。

喜多君も慥かにそうであつたに違ひないと思はれる、一つの事業をやるにしても財界の大勢を達觀して之れならやれるに違ひないと思つたら必らずやる、前途財界が悪くなつたらさうしようとか、五年も十年も先きの事を心配する人ではなかつた、而して之れが喜多君をして天下の喜多君としたのであつた、之れが喜多君をして成功せしめたのであつた。

それは事業の上で失敗をせられた事もある、併し之れは天運が喜多君に不幸に見舞つたのであつた。此の運

いふ奴は小さい人間の如何にもする事の出来るものではない、此敵對不能の不運命といふ奴に見舞はれたのであつたから、それが喜多君であつても、亦喜多君で無かつても此鬼神に勝つ事の決して出来るものではない。

それは跡から考へてみれば、あの時にあゝしなかつたら好かつた、あの時にこうして置けば宜ろしかつた、思ふのは人間の弱身であるが、過ぎ去つたあの時の事を跡になつて、彼是れ云ふのはみんなでもない間違ひで男子の執らざる所である、だから自分は喜多君は一生懸命に眞實にその身命を賭して會社のために盡されたのであるから、假令ひその結果がさうならうと喜多君としては快心の笑みを洩らして居られたのに相違ないと思ふ。

唯、惜しいと思ふのはあれ程努力せられて居つた喜多君が、會社の再度隆昌をみるに至らずして、長逝せられたことであつた。

大正九年あの財界の好景氣に乗じて日本綿花は事業の大膨脹を企てその資本金を一千萬圓から一躍五千萬圓に増資した、丁度此時であつた、或る日の事喜多君は自分に内密に會見したいとの事であつた、自分は喜多君の事務室に行つて、此度の増資に際して三十七萬株をプレミアム付きで一般に賣出したいと思ふがさうであらうかとの自分の意見を聞かれた、自分は此好景氣時代だからその企ては至極結構だらう、プレミアム丈けでも會社には二千三、四百萬圓の金が入る譯だからさういふので、談判忽ち成立して自分共が當時やつて居つた株式現物團で、此三十七萬株全部を一定のプレミアムで引受けて市場には一株のプレミアムを六十五圓均一で賣出して一時大變な好況を謳はれた事もあつた、こんな老大な増資なんかは喜多君でなければ迎ても企ての出来ない相談で

ある。

大正十五年春の事であつた、吾々共が豫て大阪以南の郊外に、今一本是非共なくてはならぬと思つて居た電鐵を、此際建設したいが、君はさう思ふかとの相談を喜多君から自分に持ちかけられた、自分は豫ての希望を満たすは此時ミ、直ちに賛成した、間もなく今は故人になられた谷口房藏氏や木村清君、林安繁君、太田光熙君、和歌山の竹中源助君等ミ相談して愈々大體に於て、之れを建設する事になつた、そして自分は谷口氏や喜多君、木村君等ミ自動車で、小栗街道を大阪から和歌山までドライブして實地の踏査をやる事になつた、此時喜多君はあの肥滿の體軀に至る所で自動車から出して踏査せられたのであつた、喜多君のあの體軀としては實に可なりえらかつたに相違ない。併し喜多君はそんな相貌を少しも外見に出さななくてこつこつミやられたには自分にも實に驚いたのであつた、御蔭様で今日では大阪以南の郊外に住んで居るもの、並びに和歌山から大阪に通ふ人々が、此電車の出来た爲めにこれ程便利を得るこゝミなつたであらうか、此電車も全く喜多君の如き大事業家があつたればこそ出来たミいつても決して過言ではないのである。此點からいつても喜多君はこれ程多くの未知の人々に便宜を與へて居らるゝ事であらう。

其の他プライベートに喜多君ミ色々相談した事もあり、又御互ひに援助し合つた事もあるがそれ等は茲に書くべき筋合のものではあるまいからまゝ此位で筆を擱くこゝにします。

願はくは此偉人を出した喜多家御一族の上に幸福の重ねて多からんこゝを。

追 憶

貴族院議員 今 井 五 介

予の喜多氏ミ始めて相識りしは大正八年巴里にて開催せられし平和會議に氏が西園寺公の隨員ミして活躍せられたる當時にありき。

當時の感想を追懐するに初對面の予に對しても其の説くこゝろ極めて卒直にして城壁を設けず、温顔の裡膽力の偉大なるものあり獨り關西實業界の重鎮たるに止まらざるものあるを印象せしめたり。

其の人ミ爲りを聞くに、少壯夙に拔擢せられて日本綿花株式會社の支配人ミなり印度棉及び米棉の本邦輸入の端緒を開き、爾來累進して社長の要職に在るこゝ多年、その間本邦紡績業は異數の發達を成し今日遂に其業績に於て世界各國に冠絶するに至りたるは一面喜多氏の棉花輸入の功績に負ふこゝろ大なるものある可し信ず。而も氏は獨り本邦紡績業に棉花を供給せるに止まらず更に進んで國際間の棉花取引にも貢献せしこゝ少からざりしを以て見れば其の抱負の大を知るに足らん。

斯くの如く氏は本邦棉花輸入貿易の第一人者たりしが其の偉大なる精力は單に之を以て足れりせず、他面本邦貿易の大宗たる生絲輸出業に携はり海外販路の擴張に努力せられしこゝ多年、本邦に於て最も重要な産業たる我が蠶絲業の發展に多大の貢獻を致されたるは斯界のため洵に感激に堪へざるなり。

惜しむらくは鴻鵠の壮志を懐いて早世せられたるは斯界の爲め長嘆に堪へざるころなり。唯本邦の紡績業並に蠶絲業は歳々共に益々隆盛に向へるは以て聊か氏の英靈を慰むるに足らん乎。

敬慕する先輩

今 西 興 三 郎

私の大阪高商在學中には毎年本科二年生數名を暑休中、學校から旅費を貰つて支那旅行をしたもので、之に對し日本綿花は奨勵のため補助金を密附して下さつたのですが、私も廿歳の時右の旅行に参りましたので其時御挨拶のため御目にかゝりましたが、之れが御會ひした初めての機會でした。私は昔の棉花商に生れて其上學生時代に右の様に日本綿花の御厄介になつたにも關はらず高商から大學へ入學したため遂に船會社の社員として其後を送り又大阪在住の折が少かつたため暫く御目にかゝる機會が少かつたのですが、父の没後大阪に在住する事になつて以來は度々御目にかゝつて居りました。

其後杉村倉庫の改革が主に綿業關係者中心で行はれる時に、私が谷口社長の下に常務取締役として入社しましたのは喜多さんの御推薦で、一體紹介者さか推薦者さかの先輩は大抵入社してしまへばあさは單に口添へをして下さる位なのですが、私の體驗した所では喜多さんの御親切振りは全く徹底的で面白さうな得意先でもあれば

直ぐに電話で知らせて下さり又御自身も其得意先へ自分の仕事の様にして頼んで下さる等如何に無神経なものでも御親切をひしひし感ぜないで居れぬ涙ぐましき程度のもので、此點は恐らく日本綿花の社員諸氏及喜多さんの御引立に預つた方が痛感して居られる所だと思ひます。又喜多さんがあの様な大をなされた事は偏へに此のためであの様な御境遇の時の御最後に對し本統に男泣きに泣いて御葬儀に列した者の多かつた事は最近殆んど例がなからうと斷言したいのです。

私の關係して居る阪神電鐵に阪國バス株係争事件云ふものがありました、相手方の黒幕は某大會社で相當巨額の出資の多大の策謀を傾倒し之に依つて一舉に阪神電鐵を蹂躪しようとしたもので、此調停には要路の大官其他非常に多數の人が苦心慘澹して尙且つ不調に終つたものでしたが、甚だ失禮ですが當時不遇時代の喜多さんによつて見事に解決せられ兩當事者は總ての行き掛りで恨みも忘れて居る如きは全く喜多さんの絶大なる御熱心と公明なる御人格に兩當時者が感銘して此方ならし掛引なしに眞實を吐露したためであります。

喜多さんの御辭を申しますと、これは誰れもが御經驗になつて居ると思ひますが、用談中ウト／＼として船を漕がれお仕舞にはイビキの聲さへ聞こえますが、話の要點になるミカット目を開かれ又質問等をなさいます、之れは初対面の誰れもが必ず面食ふ所です。

私は終りに臨み此の如く多數の敬慕する先輩があのような環境の下に逝かれた事はわれ／＼特に御眷顧を受けたものゝ悲憤に堪へぬ所である事を呉れ／＼も申して置きます。

ペルー棉花の恩人

井上雅二

私が喜多君を知つたのは喜多君のベルサイユ會議の歸途船中で一緒になり知合になつたのでありますが、同船の牧野さんも喜多君は大阪の實業家で近代稀に見る事業家である云はれてをりました。私は農業を經營してをりますが、喜多君その他今晚此處に御出の方々にも御後援を願つて南米に棉花の栽培をやつてをります。此の南米棉花栽培に付きまして最初ブラジルに於ける棉花栽培を喜多君に相談を持ち掛けました所、喜多君は大西洋岸に於ける棉花栽培は賛成出来ぬにて絶對に反對されまして太平洋岸に於ける棉花栽培なら大いに賛成する云ふ御話してペルーに棉花栽培を始めたのでありまして、喜多君の方では既にこの方面の研究が出来上つて居つたのであります。その先見の明によりましてこの棉花栽培は當初から成績がよく始めより利益を擧げ得たのであります。私は六種の農園を經營してをりますが始めから利益を得たのは此農園だけであります。(於工業クラブ追悼會)

感謝の言葉

加藤彰廉

私は喜多君に對して大いに感謝しなければならぬ事がある。其れは大正四年衆議院議員選舉の事である。私が大阪高等商業學校長の職を辭するや同校卒業生一同は折柄衆議院議員臨時總選舉に際したるを以て相謀つて私を衆議院議員の候補者に擁立せんとしたのである、私は其の任に非ざるを以て再三固辭したるも一同は私の意向如何に拘らず選舉運動に着手したので、私は諸氏の此の熱誠なる好意に背くは道に非ずと思ひ遂に意を決して立候補を宣言する事となつた。此の選舉は全く彼等諸氏の熱誠なる好意に出でたるものにて其の運動は所謂眞の理想選舉であつたのであつて其間種々の麗しき又涙ぐましく挿話さへあつたのである。此の選舉は私の終生忘るゝ事の出来ないものであつて其の當時の事を憶ふに洵に感慨無量である、私の彼等諸氏に對する感謝の念の誰に厚く彼に薄しき云ふ様な差違のある筈はないのであるが、而も私は喜多君が多忙に社會に於ける重要な地位にありながら選舉委員長となり此の重大なる責任を身に負ひ而して私が第一高點を以て當選したるは卒業生一同の努力に熱情によるものであるが又喜多君が委員長として全責任を以て其事に當られたるに因るものにして私は君の勞苦を思ひ感謝措く能はざるのである。

尙他に君に謝し又私の喜びに堪えざるものあり、私は大阪の學校に在職中三つの希望を抱いて居つたのである、即ち其の一は大阪に商科大學を設立する事、其の二は卒業生等の社交の爲に俱樂部を作る事、其の三は卒業生等の相互扶助の爲に銀行の如き金融機關を設くる事であつた。而して其の第三の金融機關の實現は今日も尙見る事が出来ないが第一に第二は喜多君の努力によつて其の實現を見たのである、勿論之等の事は喜多君一人の力によ

つて出来たのではなく他に多くの同窓生の協力と熱心によつたものである。喜多君が其の中心になつて大いに努力したる結果なる事は同窓生一同の認むる處である。斯の如く私が多年希望せる商科大學及び俱樂部の設立せられ私の希望の達成せられたる事は私の喜多君に感謝するに共に又私の大いに歡喜する處である。

以上の如く私は直接間接に君に負ふ處のもの少なからず今や君亡し、茲に一言を述べて君の靈に感謝せんとするのである。

巴里平和會議に於ける喜多君

木村 銳 市

喜多君の實業界に於ける功績逸事は同君の經歷に徴し数千頁を費しても尙盡きないものがありませう、然しながら同君が最近の世界の政局に一大轉機をなす有名なる國際會議即ち巴里平和會議に關係せられたる功勞と逸話に到つては同君の傳記中の異彩ある一頁をなすものも考へられます。私は同會議中喜多君と約八ヶ月起居を俱にし「ベルサイユ」條約の締結に到るまで特別の懇親を受け苦樂を俱にした特殊の因縁がありますから喜多君と巴里平和會議の關係につき一言したいと考へます。

御承知の通り世界大戰後の萬國大會議に日本が五大國の一員として西園寺公を首席全權とし牧野伯、珍田伯、

伊集院男、松井男の諸公に加ふるに特に實業界より閑歴高き代表者を關東、關西より選抜して顧問格の隨員とするこゝになりまして東京に於ては現日本銀行副總裁深井氏、三井合名會社福井理事、大阪より日本綿花社長喜多氏を巴里に派遣せられる事になりました。當時喜多氏は關西實業界の麒麟兒として廣く世に知られては居りましたけれども割合に歳若く世間では異數の拔擢と評して居りましたが、以下述ぶる所を以つてみれば如何に同君がこの特別の詮衡に値する有能の士であつたかを知り得べしだと思はれます。

さて私は巴里平和會議日本全權事務所總務課長として最近まで中華民國駐劄日本公使たりし重光君、現在の紐育總領事堀内君、英吉利大使館一等書記官澤田君等の如き霞ヶ關の少壯俊秀の士の援助により會議の一切に關する事務の總括に當つて居りまして二六時中事務所に頑張り内外の諸報告はもとより會議に列席せらるゝ諸全權各委員諸公の間に奔走して諸公の意見を全權に取り繼ぎ全權の命令を委員諸公に傳達するの役目を引き受けたる關係上各方面の先輩諸公と親しく往復するの機會を持ちました。當時實業界よりの諸君も平和大會議中の經濟的部門を各自分擔せられて居り、例へば深井君は森賢吾氏と共に財政、賠償兩委員會に列席し福井君は一般經濟委員會中金錢債務の面倒なる問題に當たられ、喜多君は棉花紡績の専門知識には通じて居られたが分擔の關係上稍々専門を離れたことも申す可き經濟委員會中の「パテント」委員會、物的賠償委員會に日本を代表して出席せられた譯であります。甚だ失禮な申し分で恐縮に存じますが實業界の諸公は餘り國際政治會合の席には馴れて居られず又國際會議が主として佛蘭西語にて行はるる關係に鑑み、それぞれ外務省に於ける少壯外交官にして外國語に堪

能なる且萬國會議に經驗ある人々を書記官として各顧問に隨行せしむる事になりました。こゝにいふ關係から私は各顧問隨員諸公より直接會議の大勢を聞き取るのみならず、右少壯隨行外交官より詳細な報告により會議の模様はもよりの各委員の一言一行をも知り得る機會を持ちました。最初喜多君の擔當せられたる「バテント」委員會に就いては事餘りに法律的専門事項なる爲、當時巴里滞在中の末弘嚴太郎博士、青木得三氏の如きその道の専門家の意見を聞き又喜多君も會議前後に於て會議の驅引或は日本の利害得失に就き論議研究せられました。同君がかゝる煩瑣なる専門的事項に就いても僅々數十分の談笑の間に要領を得、大綱を取つて誤られなかつた事は今尙私が他の關係諸君と共に敬服して止まない點であります。更に會議中に就いても喜多君の特癖として有名なる居眠りはこの世界各國の代表者の緊張せる會議席上に於ても斷然發揮せられたる處でありまして隨行せる若手外交官もこの居眠りには稍々憂慮の念を抱いたさうであります。さて肝心要な場合に達するに喜多君はかつみ眼を開き日本の利害關係について簡潔明白なる答辯を述べられたさうであります。従つて何時でも隨行の若手外交官は私に「喜多さんは本當に睡て居られるのか又睡た風をして盡く聞きこつて居られるのかわからない不思議な人」と評してゐた位であります。巴里平和會議の成果並あの浩瀚なる經濟事項の諸規定を御覽になれば會議の内容並に喜多君の平和會議に關する功績を一々述べる必要はありません。今此所で詳細なる會議の経緯について述べる事は故意に差控へますが「ベルサイユ」條約の内容を御覽下されば識者は充分お判りになる事と思ひます。

翻つて會議中の喜多君に關する笑話の一つを紹介させよう。それは如何にも同君の性格を表はす様な失敗談であるからであります。(編者曰く、之れは床屋での失敗譚で便宜上逸話中に編み入れたり)下らない笑話であります。如何にも喜多君の性格の一端を表はした面白い失敗談として又巴里平和會議秘史の一部としてこの機會に御披露する次第であります。

爾來十數年私はかゝる因縁の下に親交を續けて來ましたが私も大阪に行く度毎に同君の事務所に顔を出さねば氣が濟まない様な感じがしますし、又その後支那の「ボイコット問題」殊に漢口の暴動事件等に關聯しまして喜多君が東京に出られる度毎に舊交を暖める爲に外務省の私の事務所へ尋ねて來られるのみならず或は日華實業會或は工業俱樂部或は首相官邸に於て屢々相會する事がありまして時に同君は支那問題に關し口角泡を飛ばして議論をした事もあります。同君の暖い友情には終始變りがありませんでした。私が昭和三年病を別府に養つて居つた時にも親切にも同君は我々夫婦をワザ／＼同君の紀州白濱温泉の別荘を開放して靜養の便宜を與へられ日本綿花の雁治郎總見物の時にも會社外の私共夫婦並びに友人までも仲間に入れて招待して戴いた程でありました。

同君がこれから最も働き盛りと言ふ可き時に俄然他界せられました事は獨り我實業界のみならず大きく我國家のためにも一大損失であります。私個人にしても上に述べた様な事情で一層哀悼の念に堪えないのであります。

ウイスキー・ソーダの想出

兒 玉 謙 次

私が孟買に居りました時に喜多君が来られました。それ以来親交を厚うしてをりますが、今晚は孟買時代の逸話を話したいと思ひます。

喜多君が未だ二十一才で私が二十六才の時であつたと思ひます。東洋紡の庄司君が孟買に來られた機會に晚餐を共に致しました。その時に喜多君がウイスキーソーダの飲み競べを致しました。私はこれ迄相當ウイスキーソーダをやつてをった積りでしたが、喜多君はその時分から大變にウイスキーを御あがりであつて、私が二三滴のウイスキーを注ぎ、サアヤロー、と申しました所、喜多君は「それはウイスキーソーダではない」と云はれまして、何んでも可成りのウイスキーを入れ「ウイスキーソーダは此位のウイスキーにソーダを加へたものを云ふので、君のはウイスキーソーダではない、それはウォーター・ウイスキーだ」とか申されました。只今はつきり覺へてをりませんが、兎に角そこで二人でウイスキーソーダの飲み競べを致しました。その時も喜多君は大變に御飲みになりましたが至つて元氣でした、私は終に身體が苦しくなり、何でも二階のベランダに出まして冗談に此處から飛び降りたら樂になるダローなき話したやうな具合で御座いました。

私はこの喜多君がウイスキーソーダの飲み競べを致しまして、その時始めてウイスキーソーダの本當の意味を

綿 業 界 の 大 恩 人

宮 島 清 次 郎

本質を解した様なわけで、それ以來ウイスキーソーダの飲み競べに云ふ様な馬鹿な事は致しません。

喜多君がウイスキーソーダの如何なるものかを私に教へて呉れまして、それ以來云ふものは私はウイスキーソーダを無茶に飲む様なことを致しません、自然酒の上の失敗もありません。この意味に於て喜多君は私の大恩人であります。(於工業俱樂部追悼會)

喜多君は吾綿業界の大先輩でありまして、私なきが喜多君喜多君と呼んではならぬ。喜多さんとか喜多様とかと呼ばねばならぬ人なのであります。先きに一昨年一月三十日に兒玉一造君を失ひ、今回又一日違ひの一月卅一日に喜多君を失つたのは何んもなく妙な感じを抱かざるを得ないのであります。喜多君と私の間は切つても切れない間柄でありまして私は喜多君から非常に御世話になつた事が二度御座います。一度は明治四十四、五年に記憶してをりますがその時分は丁度昨年の暴落のあつた時分と同じ様に、棉花の相場が非常に激落しまして、當時この紡績も三十五、六圓に云ふ高い原棉を持つて居たのが十七圓に崩落し何れの紡績も四苦八苦でありました。私はその時今は大日本紡に合併されてをりますが東京紡績の支配人をしてをりました。東京紡績は極く貧弱

なる會社ではありましたが、やはり原棉の思惑をやつてをりまして、米棉の暴落で二進も三進も行かなくなり運轉がつかなくなつて來たのであります。その時に私は大阪の喜多君の所に走り内情を打明けて救を求めたのであります。喜多君は直ちに承諾して呉れまして米棉約定の半分を解約しその代りに紐育の定期をその倍數だけ買ひまして而してその場の窮を逃れた次第で御座います。

又その後御世話になりました事は大正九年の恐慌時で御座いまして、當時米棉の暴落で紡績が非常に苦しんだのであります。その時も喜多君の援助を得て難を逃れたのであります。實は當時私は手形を出しまして日本綿花に裏書きして貰ひましたのでした。その額は何んでも百萬圓以上ありました、斯くして一時の難關を切り抜け工場の運轉も滞りなくいつたのであります。こゝう譯けて喜多君は友人には涙もろい友情に厚い義侠的人でありました。

又私は今日印度方面の輸出に大いに努力してをりますが、これも私が研究したのではなく喜多君から勵まされてやつた様な次第であります。

又喜多君は生糸の方面にも御奮闘されました、生糸を今日の様な手數の掛る繭からではなく何んかかしてもつゝ天然な蠶から生糸を取る方法を研究せねばならぬ云ふので、その研究に毎月千餘圓宛某専門家に研究費を出してをられました。即ち柞蠶絲の研究でありまして一年以上繼續して出費されてをりましたから壹萬數千圓の研究費を出してをられたのであります。

喜多君の様な大人物を失つた事は甚だ残念で御座いまして國家的にも非常なる損失と思ふのであります。

(於工業俱樂部追悼會)

明 朗 玉 の 如 き 喜 多 君

貴族院議員 森 平 兵 衛

大正四年三月、大阪商業會議所議員改選の時、喜多君は日本綿花株式會社代表として當選し、次で常議員に就任せられた。私も其末席に連れる爲め、屢々同君に會談する機會が多かつた。

大正七年山岡會頭の推薦で、同君は歐洲大戰の媾和會議特使隨員仰付られ、十二月歐洲へ派遣され、其使節を完全に了へて、翌年八月歸朝、其勳功を以て勳三等に叙し旭日中綬章を賜つたのである。

大正九年任期満了にて退任されたが、同十四年三月、再び商業會議所議員に當選さるゝと共に、會頭選舉に際し、同君は會頭候補者として、稻畑君と茲に激烈なる争奪戰が演出さるゝに到つた。

私は明治四十五年、商業會議所議員になつて以來、終始稻畑氏等と行動を共にせる關係上、必然稻畑氏を擁立して喜多君と陣頭に見えなければならぬこゝになつた。

政戰旬日、旗鼓堂々として正々の陣を張つた結果、凱歌は遂に我軍に揚つた。

我等の歡呼に引換へ、落選された喜多君は、實に御氣の毒である。殊にその會頭獲得が喜多君の眞の意志でなく、全く他の策士等の煽動により、その傀儡なられた様子で、而も數年間、議員の職をやめて居られたから、會議所の内部の事情を充分詳悉せず、この舉に出られ敗戦を餘儀なくせられた。然し個人として恩怨なき喜多君に、この不幸を味はしめた事は、頗る遺憾の極みであるが、公人としての立場上、これも實に止むを得ない次第であつた。

その年の秋、貴族院多額納税議員改選に當つて、自分は揣らずも先輩諸氏の御推薦によつて立候補することゝなつた。最初は田村君と二名で、無競争の状態に推移したが、八月中旬頃、突如、梅原氏が立候補を宣言するゝと共に、疾風迅雷的の猛運動を開始されたので、今迄の無風状態は忽ち修羅場化し、金を燉く如き烈々たる炎帝の下に、接戦又接戦、各自奇策謀略を盡して、投票の獲得に全力を傾注した。

此場合、實に意外の感に撲たれた事は喜多君の態度である。數月前、會頭戦に敗れ、創痍未だ癒えざる同君は曩の政敵に對して、此絶好の機會に於て復讐すべく、爪牙を磨き、以て他を援助するか、又は妨害を試むかど兎角感情に支配され易い世人の常である。

然るに光風霽月、明朗珠玉の如き喜多君は、その事に對して一片の私心もなく、昨の仇敵たりし予を非常に庇護して、推薦状は云ふ迄もなく、夫子自ら出馬するのみならず、社員を督勵して有權者を説得せしめる等殆んどそれが自己の選舉である如き熱狂的態度で、終始一貫、極力援助されたその雅量、その襟度は今尙忘れんとして

忘れ得ざる事で、これを思ふ時、いつも感激の情に堪得ないのである。

洪大無碍のその誠意、熱情！恩を仇で返す人の多き現代に於て、仇を恩で返さるゝは、實に喜多君一人でないかミ痛感せしめられるのである。

噫、余がこの恩誼を酬ゆる機會を待たず、氏が溢焉として逝かれた事は、實に予にこりては終世の恨事であり無限の怨痛である。

喜 多 君 を 憶 ぶ

天 津 森 川 照 太

喜多君に關する私の思ひ出を語るためには勢ひ私ミ紡績聯合會及棉花同業會との關係を語らざるを得ない。私が始めて喜多君を識つたのは明治三十二年末か同三十三年の始めて、私が東京の學態を出で、廣岡商店棉花部に入つた時からである。併し其三十三年の九月には私は紡績聯合會に轉じて孟買出張員として同地に出張、明治三十五年一月に歸朝、翌三十六年の十月水氣棉花検査所設立の調査を命ぜられて上海に出張、其歸途又印度に赴きチンネベリー棉花輸送方法を確立するため孟買及忠竹林に出張し日露戰爭の最中三十七年の五、六月に歸朝したのであつた。

其頃大阪の綿業界（日本の綿業界云ふてもよい）で紡績界の新人と言はれたのは攝津紡の塚口賄治君、紡績聯合會の庄司乙吉君、棉花商側では三井の安川雄之助君、藤野龜之助君、棉花の喜多又藏君、内外の横尾孝之亮君の諸君でありました。

當時孟買棉花輸送契約で、紡績聯合會と日本郵船會社と毎年契約の變更毎に猛烈な争ひをしましたが、孟買棉花輸送の實情に就て紡績界の先輩は精通されて居りませんでした、唯た聯合會書記長たる庄司乙吉君は嘗て孟買出張員として自ら其衝に當つた事ではあり特に非常に輸送困難の際に苦い経験もされたのですから勿論オウソリチ、一でありました。同君は温厚篤實で『物事は無理をしても通るものでない、手前勝手ばかりを云ふべきでない、公平正當の處に落付け可きものである』と云ふのが平素の持論であつた。

そこへ往く喜多君は精悍敢爲『何、ビオー……や外國汽船に甘い汁を吸はせたり、勝手な言ひ條を通させるな』と是亦多年孟買で苦しんだ丈に何でも知つて居るのであるから谷口房藏君あたりを敲き附けて毎度強硬一點張りの主張をさせるのでした、時の郵船大阪支店長原田金之祐氏があれだけの圓満滑脱振りを以てしても話は何日も容易に纏らない、屢々契約期限が切れ、時としては次年度の中頃過ぎになつて調印したと云ふ様な例は決して少くなかつた。之は主として喜多君と云ふ強い人が蔭で釜を焚いたためであるが、此ために聯合會即ち日本の紡績業者は輸送契約の締結に己の位利益したかわからない。之は確かに喜多君が裏面に於て日本綿業の爲めに實に多大の貢献をされた一例であります。

其後私は明治三十九年主として喜多君の推薦で紡績聯合會を辭して棉花同業會に轉じ同四十二年まで御厄介になつたが其間の事情を申上ぐるに自然喜多君の面目と成績が明かになると思ふので此話を申上げたい。

明治三十八年綿業界好況の後を承けて多量の米棉が神戸に輸入された、多分急激に不況に陥つたためと思ふが他方一方に約定品はごんごんに到着するのに其引取は兎角捗々しく運ばない、其處で税關や神戸棧橋の構内は棉花の山を築き海岸近くの空地と云ふ空地には是亦棉花が積み上げられて居た、處が其年は降雨の多い年で積み重ねた棉花の重量で下積みの棉花は軟かい土の中に埋れて仕舞つた位であるからこうなるマーク分けは愈困難となり受荷主はそれをよい口實として愈引取を遅らせ二進も三進も往かなくなつた、棉花に茸が生へたと云ふ有名な珍談は此時の事で、洋傘を背景にして棉の俵の上にニヨ、ニヨ、ニヨ、ニヨ、生へた數本の茸の寫眞が撮られました、之が神戸港の設備の不完全を最も雄辯に物語る絶好の資料となりました。折悪しくも此時例の米國鐵道主ハリマンが南滿鐵路買収の案を提げて視察に出掛けて來た時で『之はいかぬ、米國の資本で神戸港に陸揚收容の設備をしてやつてもよい、バシフィック・メールにやらせよう』と云ふ騒ぎになりました。其處へ割て出たのが三菱でした、此頃三井は既に小野に大倉庫を持って居ましたが三菱は東京に倉庫を經營して居ながら兵神間に於ける倉庫業は比較的小規模であつた記憶して居ります。其處で早速和田岬に在る所有地を利用して倉庫を建設しようとする事になつた。而して此處に輸入棉花（主として米棉）を收容しようとする話棉花業者と三菱との間に成立したのであります。其事業を遂行するには外國人相手に種々の困難があると思ふので私に來いと思ふのであります。

た。
 此頃の米棉の陸揚げは一切汽船會社と特別關係ある外國人のステヴェドア則ちライオンズ商會とクリステンセン商會の手に握られて居りました。各外國汽船會社の支店、出張店又は代理店の主人、支配人乃至店員は必ずや此ステヴェドア（株式組織でした）の株主でありました。従て兩者の關係は極めて密接で利害全く一致して居りました。

神戸入港の汽船から陸上倉庫までの陸揚賃は米國から神戸迄の棉花運賃に比して幾割かに當る云ふ不當の高率でありました、つまり受荷主の懐から不當に搾取した陸揚賃をステヴェドアと汽船會社員との間で分配した云ふ有様であつたのです。此不法な提携を打破しようとして外商ではサミュエル商會、邦商では三井物産がやつて見ましたが孰れも負けて仕舞ひました。則ち是等の受荷主は自分で陸揚げをする云ふのでやつて見ましたが船中でマーク別けをする事が出来ません、さうしても同種類の荷物全部を一手で陸揚げして陸上でマーク別けをして各荷主に引渡さねばなりません。之は各荷受主が一致しなければ出来る事ではありません、本船が他人に屬する荷物を渡す譯がありませんから出来ない相談です、サミュエルの勢力、三井の強大を以てしても之をさうする事も出来ませんでした。然るに我棉花同業會は之と異り棉花の受荷主全部を代表して着荷全部を引取る云ふのですから其點に於て先づ多大の強味を持って居りました。

併しかくするには棉花商全部の同意が必要でありました、然るに棉花を取扱ふ外國商館の中には汽船會社の代

理店をして居たのも多數ありましたし、又汽船會社やステヴェドアと密接な關係を持って居る向もありましたから仲々相談が纏りません。それに棉花同業會の會員は三菱に對して其棉花を税關、神戸棧橋及新設の和田の三菱倉庫以外には入れない云ふ約束をしなければならぬ義務を負ふて居りました、三菱に和田の倉庫を造らせることにするには此條件が必要であつたのです。棉花同業會々員は御承知の通り邦人以外に支那人、印度人、米國人及歐洲各國人を包含して居ります、中には自家の倉庫を持って居る人もありますから之が又容易に纏りません、特に支那人を説得するに骨が折れました、之も漸く纏りましてステヴェドアをして米棉（印度棉は多く神戸棧橋でしたから問題ではありません）を當方の指定する陸揚賃（従來の半額）で而かも距離の遠い和田の新倉庫へ陸揚げせよ云ふことをステヴェドアに交渉しました。彼等は當然之を承諾しません、樽俎折衝數ヶ月に涉つて仲々話が纏りません、其中に和田の倉庫は略ぼ落成した。遂にビーオー汽船の東洋總支配人で神戸外人聯合商會會議所會頭をして居た某氏が仲裁に這り、聯合商議に仲裁を一任せよと申し出られました、私はもう閉口して居ましたので之を相談しようと思ふた處が當時の棉花同業會委員たる喜多、藤野、横尾の三氏も朝鮮及支那に旅行中でした、電報で意見を求めた處孰れも『承諾するな飽くまで戦へ』と云ふ返電です、特に喜多君が最も強硬でした、一方綿花の山田穆君に相談しました、之も喧嘩腰です、唯上京中であつた當時の三井大阪支店長藤瀬政次郎君だけは『君の裁量に任かす』との返電をよこされました、仕方がありませんから商議の仲裁申出も一蹴して又喧嘩です。而していやならば米棉は向後一切本船から沖取りするに申出たのでした。

而して同業會委員の三君の中で喜多君が一番早く歸て来て盛んに強硬な態度で私を激勵されました。

當方は棉花商全部を代表して荷物を沖取りするに云ふのですから先方も之を拒む譯には行きませんが、結局沖で渡す事になりましたが當方には其時分に荒天でも沖取りをするに堪へる高舢船（鐵製の大達磨船）がありません『メール船の碇泊時間は限りがあり荒天でも豫定發着時間を變へる譯に往かないから御前の方で引取らない場合は陸揚げせずに上海なり香港なりへ持て往つて仕舞ふから左様心得ろ』と威嚇されます、事實當時カナデヤン・パシフィック・メール船などは恐ろしく發着時間が嚴重で大概の荒天では豫定を換へませんでした、之は郵便積込に對する補助金下附の條件が嚴重であつたためでした。さうも仕方がないので『よろしい、必ず引取る』と無鐵砲に引受けて仕舞ひました。而して三菱と相談して棉花の積取を兵庫運輸會社に頼みました、和田の倉庫はたしか日本で始めての鐵筋コンクリート製の建物で三菱の木村さか云ふ技師が米國で學んで来た許りの技術を應用して極めて迅速に出來上りました。ハリマン氏の乾兒で何か云ふ米人も『神業だ、實に早い、流石に三菱だ、魔術の様に飛び出した』と云ふて感心した程早く出來上りました、之からは棉花を入れる許りになりました。そこで此棉花の積取りに云ふ一段になつたのです、最初に着いたのが榎かバシフィック・メールの船だと思ひます。ライオンスがステヴエドアでした、ライオンスのおやぢは船員上りで何時も海軍帽をかぶつて居たキャブテン・ライオンズです、此日朝私がメリケン波止場に出て往くも彼も既に波止場に来て居て沖を見て居ました、着荷は僅かでした、其僅かの荷を大きな達磨船の中へ投げ込んで沖にかゝつて居ます、此處迄取りに來いと云ふのです

兵庫運輸の小さな木製の船で取りに往ても達磨船の底から棉の俵を引上げる事は殆んど不可能に云ふてもよいのでした、こう云ふ意地の悪いことをするのは、私は三菱の東京倉庫支店に飛んで行き三菱造船所のフローチング・クレーンを借り受ける事にしました、ライオンスは『ザマ、を見る、此方の舢船で海岸迄持て往かずばさうする事も出來まいがな』と呷へ、バイブでバフバフやつて居ます、兵庫運輸の舢船は何隻か揃ふて和田の方からやつて來ます、同時に造船所のフローチング・クレーンが動き出して徐々に沖を目掛けて出て來ます、刻一刻クレーンが舢船が達磨船目がけて近づいて往きます。驚いたのはライオンズでした、いきなり飛んで來て『ヨシッ！和田迄三十錢（當方の提議した通り従来の陸揚賃の半額）で運ぶ、港内なら何處へまでも三十錢で届ける、俺の方が扱はして呉れ』と手を握つて奇麗に降参しました。フローチング・クレーン則ち三菱の設備、換言すれば此力が遂に吾々を勝たして呉れたのです。クリステンセンも降参しました、而して棉花同業會は最初に持ち出した條件を一項も譲歩せずに完全な勝利を占めました。

斯くして米棉は易々と和田の倉庫に入るこゝになり陸揚賃は半減（或は以下）されました。

之に依て當業者に云ふよりも日本の棉花消費者が年額數十萬圓の利益を得たこゝになりました、之も偏に喜多君の強い意思と強い態度の賜物であります、其翌日でしたか喜多君と私とで神戸俱樂部で外國汽船及ステヴエドア側と立會ひ當方主張通りの條件で契約に調印したのでした、其時ドッドウエルの支配人がシャンペンのを舉げて『汝のインデスクリミネート・セクレタリーの勝利を祝す』と云ふて呉れました。私は此の賞めた様な貶し

た様な祝杯にそれでも多大の満足ミを感ぜながら甚だ快く乾杯したのでした。

喜多君は實に進取の氣に富み明察果斷、機智もあり膽略もあつた方ミ思ひます。従て決して愚圖々々して居ない、一寸米國風の大實業家ミ云ふ型の人であつたミ思ひます。私が天津に參つて後數回北支那へも見えました。大倉組ミ日本綿花ミの出資して居た裕元紡績が大戦中大に儲かるので支那人株主(王鄭隆の如き)が日本側の借款を返して仕舞つて利益を獨占しようこの慾望を起し勝手な條件を出して難題を吹つけました。大倉組は唯々諸々ミして之に應じましたが、偶々來津した喜多君は一議に及ばず其話を撥ねつけてさつさミ貸金を返して貰つて關係を絶つて仕舞ひました、私は喜多君來るミ聞いて屹度此結果になる事を豫期して當時同紡績の商務主任の小嶋楠吉君(元日本綿花社員)に『喜多君は屹度蹴るぞ』ミ話して居りましたが果して豫想通りでありました。而して其後間もなく休職ミなり、此紡績は爾來引續き一向儲らず困て居りますが喜多君の果斷の御蔭で日本綿花は損失を免れた次第です。

喜多君はかく『強い人』でした、併し同時に優しい處もありました。故舊友人に仲々親切であつたこゝを私は承知して居ります、私もえらい御世話になりましたが孟買で郵船支店副支配人であつた高柳敬男君などは終始非常に懇意にされ喜多君は同君に對して實に親切にされて居ました。孟買關係で喜多君の推舉で綿花に入社し紐育支店で疾を獲て後數年にして逝去された竜田森吉君、同窓同期で而かも同時に綿花に入社し日露戰後に應召從軍中疾に罹つて數年後に長逝した中橋達太郎君是等の兩君に對する喜多君の厚い友情は一通りのものではありませ

んでした。

最後に一笑話を申し上げます。長い間併し多くは離れた土地に居りまして餘り接近する機會は多くありませんでしたが一度だけ私は喜多君を驚かした事があります。

私が孟買在勤中明治三十四年に喜多君は社用を帯びて孟買に來た事があつた、同地一流のエスベラノード・ホテルに投宿して居たが一夕在孟日本人全部(ミ言ふても正業に就いて居る日本人の男子全部で二十餘名であつた)を招待して盛宴を張つた、宴終つてからいたづら者の私は喜多君ミ三井の古郡良介君ミを誘ふて附近のカフェへ押しかけた。

『表面公式に日本の國威國光を輝かすは別に其人がある、僕は暗黒面で日本のために氣を吐くのだ、一ツ俺の豪勢振りを見てくれ、若し米國に四、五人の森川が居れば加州であんなに日本人が嫌はれたり馬鹿にされない、要するに暗黒下層の間の外交に努めないのは日本外交の缺點だよ』ミこゝう云ふ馬鹿な理屈を捏ねながら兩君を忙しして私が時々出掛けるカフェへ往つたのでした、私は此カフェへ一日に一度位出かける、其都度威勢よくボンボンシャンペンを抜いてさつさミ歸て來るのでした、間違々々して居ては非常に金が要るからです、そんな浪費をする人は妙くないのですから私は此カフェで大持でした、同夜も這入つて往くミ店中のバア・メードが各自の客を振り棄て、一齊に私の周圍に寄つて來て『オー・プリンス』『ハロウ・プリンス』ミ云ふ騒ぎです、之は私が戯れにサイアミーズ・プリンスミ自稱して居たからです。五、六のテーブルにメートルを上げて居た異人さへ孰れ

も呆れ返るゝ同時に嫉妬羨望の眼を私達一行に投けるのでした、そうでしょう店中の女給は皆私達のテーブルに集つて仕舞つたからですもの、而して例の通りボン、ボン、抜かれました、先方が求められるに先立ちずんずん抜かせるのです、女給を相手に抜いた酒は賣價が倍額になり其半分を女が取る、之が女給の収入なのです、彼等が暗黒面國威發揚係りの私の周圍に寄つて來るのは當然です、流石の喜多君も之には驚き『いや、大したものだね』と呆れて居ました、之が長い御交際の間につつた一度喜多君を驚かしたに過ぎないのですから少々なさげない次第です、併しそれも是も今は幽明境を異にし昔の馬鹿話を繰り返すよしもなくなつた事は如何にも心寂しく思ひます。

故喜多又藏氏に就て

武 藤 山 治

私は嘗て喜多氏を評して綿業界のナポレオン云つた事がある、之は私が先年ナポレオン傳を愛讀しナポレオンに關する書物は手當り次第に耽讀した事があるので其當時何かの事で喜多氏の話が出た機會に、偶然私の口から轉び出た言葉であつたのである、少し大袈裟ではあるが、萬更らの不適評も思はない。

喜多氏の額が廣くて身長が比較的倭小であつた點が、ナポレオンに似て居る云ふのではなく、又喜多氏の性

格が必ずしもナポレオンに酷似して居た云ふのではない、ナポレオンは一晝夜に三時間しか眠らなかつたといふが、喜多氏は朝晝の區別なく、對談中にも居眠りをする癖があつたから、此點から云ふニ兩者正反對であつたとも云へる、併し唯喜多氏の商賣の遣り方、乃至綿業界に對する平素の態度なきを考へ、一方に歐洲の野を蹂躪したナポレオンの事を想ひ出して見るに、大ま小の區別はあるが、何んもなく其間に聯想を以て繋ぎ合せ得る點がある様に思ふ。

商賣は往々戰爭に喩へらるゝのであるが、殊に波瀾の大なる綿業界に於て、喜多氏が時々大商戰を試むる其商賣振りは誠に花やかなものであつたので確かに業界の一偉觀であつたのである、喜多氏の精力の強盛なりし事、機略縦横、八方に其勢力を揮ひし事は人の皆知る所であるが、就中其生涯を通じて浮沈の比較的多かつた點なきを考へ合すに、近年の綿業界に於て若し幾分ナポレオンに似た人物ありとすれば、それは恐らく喜多氏の外にはない事と思ふ。

喜多氏の生涯の最後の一二年間は誠に御氣の毒な點があつたので吾々は同情に堪へないのであるが、これも彼は考へるにウオーターロー敗戦後のナポレオンによく似て居る點がないではないので兎角此種の人には其末路の同情に堪へないものがあり勝ちなのは誠に悲しむべき事である。

尙此機會に私が大正八年第一回國際勞働會議に本邦傭主側代表として出席した事、喜多氏がヴェルサイユの平和會議に西園寺公の隨員として佛國に遣せられた事との間に多少の關係があつた事を附言したのである。第

一回國際労働會議に我國から政府、傭主、労働三方面の代表者を派遣するに就て、其代表者の撰定方法に關する政府の方針は、愈其時期の切迫する迄一定の考へがなかつた様に思はれた、それは我國には當時未だ完全なる労働組合が極く少數であつた事にも依るが、兎も角民間に於て之を放任して置けば、全然政府の指金による官選代表となつたのであつたと思ふ。然るに偶々喜多氏が巴里から平和條約中労働會議に關する部分を原文の儘紡績聯合會に急送せられ、聯合會は政府を略ほ同時期に其條約の正文を承知して居たから、傭主側代表は産業團體の推薦する「レプレゼンテチーブ」であらねばならぬ事を承知し、確信を以て政府に迫るに共に、新聞紙に大々的の廣告を出して、産業團體の公選すべきものである事を主張し、其結果當時の農商務省内に、産業八團體が集合し、投票の結果計らず私が當選したので、此公選方法は全體今日も尙繼續して居るのであるが、此公選方法を取るに立至りし直後の主張者は實に紡績聯合會であり、又た同會をして斷然右の手段を取らしめたのは、喜多氏であつたのである。

私は餘り多くの頁を塞ぐ事を遠慮したが、右の労働會議に關する事は喜多氏に關する隠れたる事實として附言して置く。

追 憶 (來 信)

奈 良 武 次

(前略) 小生大正七年十二月、巴里媾和會議全權委員隨員として、牧野全權以下同僚諸君と共に米國を経て巴里に参りしとき、喜多君も福井菊三郎、深井英五兩君と共に實業家隨員として同行せられたる爲め、始めて御目に懸り、爾來旅行中は勿論、巴里滞在間屢々會合、公私の談話を交換するの機會を有し候、喜多君は性質圓滿玲瓏能く人々交り、而も頭腦明晰、大局の判斷を誤らず、一旦決心すれば萬難を排して斷行する剛健敢爲の氣性を藏せられ、媾和會議間も終始大戰後經濟界の趨勢を洞見して卓逸の意見を立て全權委員に献替し、經濟問題に關する條項の決定に貢献せらるゝ所多かりしを拜見致し、大いに敬服したる所に御座候、小生は元來喜多君の仕事の方面を全然異にし居る爲め、其後餘り邂逅の機會無之、唯毎年一二回の音問を交換するに過ぎざりし所、昭和四年六月大阪市に行幸在らせられ、一夕同地實業家を召させられ御陪食を賜りしとき、喜多君も勿論其間に加はり居り、小生も供奉致居候爲め久振りにて御目に懸り、講和會議當時の懷舊談なき試み大いに愉快を覺へたる次第に御座候、當時君は言ふ迄もなく尙春秋に富み健康佳良元氣潑瀾たる様見受けられ候へしに、圖らずも本年一月末突然其計に接し驚き入り候、經濟時局多端の際我邦貿易の大宗たる棉花事業に關西の覇權を握り居る君の如き

有爲の實業家を喪ひたるは國家の爲め多大の損失にして誠に残念に堪へざる所に御座候。(後略)

有 恒 俱 樂 部 と 君

成 瀬 隆 藏

私は喜多君の青年時代から知つてをりますが、その時分から喜多君は將來有望な青年であると思つてをりました。喜多君の事業方面に於ける御話は只今色々御話しになられましたから、私は事少なるものではあります喜多君の同窓間にも色々御盡力された事を御話し度いと思ひます。

大阪に有恒クラブがありますが、この有恒クラブ設立にも喜多君は非常に御盡力して下さいまして、これにも十萬圓の私財を御寄附して下さいました。これは極く一班の御話しに過ぎませんが、喜多君は事業方面以外にもこうした同窓間にも御盡力して下さいました事は非常なもので、情に厚い俠氣に富んだ人でありました。

(於工業俱樂部追悼會)

喜 多 君 を 懷 ぶ

野 村 得 庵

嗚呼近世の英傑大西郷南洲翁にも似通へる喜多君、其の魁偉なる相貌の中に湛へられたる溫容は、自ら犯すべ

からざる風度ありて、何人も一見その偉丈夫たるを知るなり。

彼の征韓の論議廟堂に容れられずして西南の役となり、君の抱負經綸未だ我が財界に用ひられずして驥足は自ら海外へ伸ぶ。就中隣邦支那と北米大陸とは君の雄志を伸張せしむべき最適の地たり。惜しい哉、戦後世界を襲へる財界の疾風と猛惡なる支那の排日とは、遂に彼れ大喜多氏をして戦線に異狀を呈するの己むなきに至らしめたり。

彼れ南洲は城山を死守し、刀折れ矢盡きて従容死に就き、君は孜孜として狂瀾を既倒に廻さんここに努力精進せしかども、而も回天の志半にして不幸病を甲南に獲、復た起つ能はず、あゝ薩南の山野、攝北の麓丘、英魂空しく今何處、墓邊の幽花影薄く、烏鵲の鳴聲徒らに長し。

想起す、某日知人同窓の三、四、中之島に適所を得て、贅六趣味に徹底せる百貨店を創立せんとする計畫既に成り、其の名稱も浪速屋と決せり。後數月、財界の形勢倏ち一變す、機を見るに敏なる君は斷然解消を宣し、而して之に要せし創立費數千金を自辨して、復た他に語らざりき。

昭和五、六年對支問題愈々紛糾するや、君は我對支外交を軟弱なりとし、認識不足を絶叫して當局に進言する處あり。而もこの間、君の蒙れる損害莫大なるものあれども毫も訴へず、偏に邦家の前途を憂ひて止まざりき。其の局量の寛廣推して知るべき而已。

君常に東馳西奔、業務の爲には身命を擲つても敢て辭せず、嗟乎、滿身之れ熱誠の君に假すに時日を以てせん

か、必ずや風浪を凌ぎ、險礁を越え、回天の業を全からしむべきを、惜しい哉。況んや今や世界的大不景氣、金解禁政策の後を享け、積極進取の氣風跡を絶ち、唯徒らに保守退嬰か、然らずんば石橋主義の消極者流天下に充滿すれども、一度眼を歐米の天地に開かんか、黎明將に近づかんことをあり、且つ時恰も滿洲新國家の獨立確認せられ、時局亦將に財界の一轉機を促さんとするものあるの際、吾人は偉材わが喜多君の出現に待つもの多からんも、君は已に亡し。

連日秋雨蕭々として、唧々たる蟲聲聞くに堪へず、君を懷ふて感慨轉た切なり。於戲惜しい哉。

昭和七年九月中秋無月の日碧雲莊にて

述 懷

岡

實

喜多君と私は同縣で、多分明治六年生れの私より四年程御若いかに存じますが、私は學校も異つてゐるし若い時代には交際して別に無かつたわけで、御互に社會に出てから交際したと云ふ様な譯で、取り分け同君と深く交際する様になつたのはバリー平和會議の時からです。

バリー平和會議が開催されるに云ふので、實業家方面から民間委員として實業界有識の士が出席する事になり

日銀の深井君等も委員となつて出席する事になつたが、私は其の時迄商工省の商工局長をして居たので、バリーに行つて呉れと云ふ事で西園寺公の先發として牧野さん深井さん、其の外、外務省の人々と同行でバリーに行つたわけです。

バリー滞在中は日々喜多君とは行動を共にして戴いたわけで、彼地に於ては同君の行動は實に謹嚴其のもので私共も會議の責任を感じ、又御互に緊張して居つた様なわけであります。

バリーへは私共は桑港から亞米利加經由で参りましたが、旅行中始終戦後の經濟に就て夫々蘊蓄を傾倒して話し會つたのですが、船の中では研究会を作つて經濟問題を研究致しました。私の知つてゐる範圍では喜多君の考へは學理とか理論とかでなく經濟界の實勢に付て實に端的に極めて透徹明朗なる意見を持つて居られ、私は常に敬服した次第です。

バリーに行つた時の同君の逸事でも云つて好いか、同君は時々方になる少量の「ウイスキー」を飲んで居られた様です。勿論澤山ではないのです。又同君は旅行中すつと勉強や讀書もされたが私の氣付いた事は、よく人の話の間に眠つて居られるのを見かけて、話の序の時なき同君には酒について少しタシナメた事もあつた様に記憶しますが、同君も私の言葉には感謝して居られた様に思ひます。

平和會議では特別委員會が出来て、喜多君は工業所有權法の條約委員として出席された。同委員會は比較的専門的の委員會でありましたので、斯の様な問題では同氏よりは私の方が専門的な譯ですから同君の御相談によく

與つた次第です。私の秘書をして居つた郷敏君と共に同氏の仕事を援助もしたわけで、喜多君は同委員會の外に他の委員會にも委員として出席御活動になつた様に承知して居ります。

バリーの生活は實に多忙ではありましたが、喜多君は委員としての活動の餘暇には美術展覽會等を訪れて居られた様に見受けました。同君は展覽會では相當なものを買取つて居られ、私が大阪天王寺の御宅へ參つた時にも拜見致しました。

時には又同君と共に餘暇を散策に出で談笑の内に共に食事をした事もありました。

前に御話した様に、バリーの生活は極めて多忙であり、又國際的使命を痛感して居たので、御互に日常の生活は極めて嚴格なものであつたのは勿論ですが、責任も大いに感じ、世界大危機の時でもあつたから皆んな大いに緊張して居つたわけでありませう。

バリー會議も恙なく終り、私は引續き國際勞働會議準備委員に任命されたので會議に出席の爲め「倫敦」に行き亞米利加を廻つて歸りましたので、喜多君はバリーで惜別したのです。同君は印度を経て同君の専業とする日綿の綿業及精米業等を視察して歸朝された様に記憶して居ります。

私が歸朝したのは大正八年の末でありましたが、其れ以來昵懇の交際を續けて來て兎に角に同君が上京の際は二ヶ月に一度二度は私の家が會社で遇ひました。遇へば經濟界の推移が話題になりました。

同君は始終強氣であつた、バリーから歸られた時には日本では經濟界が沸騰して居つたからであらうが、増

資をされたり、又各方面へ事業の擴張を實行された、私は戦後の經濟界の前途には悲觀的の考へを持つて居つたから、同君のやつて居る事はあれでいゝか知らんこ心配して居つたのであつたが、其れが不思議に同君のやつていつた事は成功して居つた。精米所の方も綿の方も勿論同君の目論見通りになつて行つたを聞いて居つた。

又對支政策に就ても非常に強硬で政府の腰が弱いので駄目だから政府の腰をウント押さねばならん云つて居られた。

同君の考へはマア天才的の考へで、學究的でなく物の一端を見て大體を視る云ふ様なわけである。

併し戦後の經濟云ふ事では、私は意見が異つて居つた、私は極めて弱氣的であつた、これは私が學究的であるから云ふ様なわけではなく、私が平和會議からの歸朝に際し亞米利加を廻つて同國に於ける有識者に會ひ此の問題に就て意見を敲いた、所が殆んこ大部分の有識者が一樣に戦後の經濟は慘澹たるもので、何うして手付けていゝか判らない云ふ程の弱氣であつた。私も此の意見に充分根據があり私の抱懐する意見も一致して居るので私としては共鳴したわけでありませう。喜多君の強氣は亞米利加を廻らなかつたからだに同君に能く笑ひ話をした事もあります。

兎に角、私は私の此の意見を率直に社會に公表して社會の反省を求めたのですが、其の頃は環境の故もあらうが、餘り共鳴する人もなく、よく人に笑はれた事もあつた。併し御互に不幸であつた事は私の意見が時の流れと共に刻々として裏書きされて行つて、戦後の經濟界は眞に慘澹たる情景を展開し始めて奈落に轉落したのであり

ます。

其の後大毎の本山氏に迎へられて四年半云ふものは隨時に論説を書いて世論に訴へて來た譯であるが、實際問題なきに就ては喜多君の御注意を指導を受けた事が多々ありましたが、同君はよく私の學理的痛にも傾聴され、私の意見も受け入れられた、同氏は又、よく人々に岡を政治家として一つ「レベル」の高い上に出したいと云つて居られた事を聞き及んでますが、私には度々奈良縣には政治家がないから政治家として出て呉れないか自分は何處迄も援助するからミマア是れは御世辭にしる私には機會ある毎に云つて非常に勧められたのであつたが、私は「岡は學究的で議政壇上に於て清濁併せ呑む云ふ様な事は出來難い」云つては自分の政治家としての不適である事を話せば「イヤ現今の政治家に其れは必要ないのだ」云つて極力勧められたが、私が餘り問題にしなかつた爲めに問題はならず終つた。

同氏の亡き後、追憶も云ふ可きものは多々あるが、同氏を衷心より憶出す事は同氏はバリーに行つた關係かも知れないが、バリー特派員であつた大毎の高石君も御昵懇で私が大毎の社員となつた時などは、大阪では同社の重役諸君を皆んな御宅に招んで私の爲めに特に披露の勞をこつて下さつた。又特に奥さんや御嬢さんにさへ御引合せなさして下さつた。

同君は故郷の大和の農園に出來た梨だから云つて毎年季節には送つて下さつた事は私は勿論家中君の御眞情を感謝して居つた次第で、今更ながらに同君の殊の外に深い友情を憶ふわけである。世相も遷り經濟不況で同君

も専念仕事に日夜没頭せられて居られる頃でも、季節には梨だけは毎年同君の許から故郷の秋を私共にも傳へて下された。

斯して同君の晩年に於ける苦境の時も絶えず交際を續けて來たのであるが、其の後私の下阪の節同君をあの日綿本社に訪ねた事があつたが、あの薄暗い社長室に聊か淋しそうな同君を窓際で泌々話した事もあつた。

私は役人であり學究であるが、同君は實業界に於て未だ爲す可き事の多々ある事を想ひ、邦家の爲め十二分に攝養する様機會ある毎に注意して居つたのであるが、今日君が先きに逝き岡が残された事を考へるに、一抹の淋しさを感ずるのである。

今にして此の國際的多難の時にあつて君の逝つた事は返すも残念の事と思ふ感を深くするのである。

同君の爲めに冥福を祈るに共に御家族の前途に祝福あれ祈願して止まない。(文責在編者)

新聞記者を良く理解した人

小 川 壽 夫

私が喜多さんを知り合になつたのは、大正四年十一月以來のことで、それは私が大坂朝日新聞の記者生活に入つてからのことである。由來、新聞記者といふものは世間から敬遠され勝の立場にあるもので、其の當時は殊にさ

うであつた。それなのに喜多さんは誰でも知つて居る様に輪廓の大きい人物であつたから所謂清濁併せ呑むの雅量をもつて新聞記者なるものをよく理解した人であつた。であるから當時日本綿花會社のものは財界に大した勢力を持つて居なかつたに拘らず、喜多さんそのものに對する親しみも期待をもつて各社の新聞記者は毎日毎日おしかけて行つたものだ。吾々の仲間では「新聞記者がおしかけて行くやうな人物は必ず偉くなる」といふ言葉があるが、當時吾々のおしかけて行つた財界の人物といへば小山健三、平賀敏、片岡直輝、中橋徳五郎、土居通夫、山岡順太郎、永田仁助、鈴木馬左也等の諸氏であつた。これら大阪財界の巨頭連にまじつて年齒當時僅かに四十歳の喜多さんが一般人以上に新聞記者から歓迎されて居たことは偉きべきであつて、當然大阪財界の將來に於ける中心人物たることを期待されて居たものであつた。當時喜多さんがいかに一般から期待されて居たか、同時に新聞記者なるものゝ社會的價値が如何なるものであつたかを示す一例を申すに、時は大正七年の十月であつた、巴里に於て開催される媾和會議に派遣される特使隨員の選定に就て當時關西側の隨員選衡方は主として小山健三さんが當つて居られたが、この小山さんが其人選について大いに新聞記者を利用されたことがある。小山さんは吾々に會ふ毎に「誰が一番適任であらうか」と尋ねられ、吾々は殆んど異口同音に喜多氏を推舉したものであつた。私は小山さんから直接に「喜多氏を推舉することに決定した」との話を承るや直ちに喜多さんを會社に訪ねて報告するに、喜多さんはまだその事實を知らず私からそれらの事情を聞き取り、私も極力應諾するやうに勸告したことがある。爾來喜多さんご私ごは公的にも私的にもかなり深く語り合ふ仲になつた。喜多さんが巴

里の媾和會議に行かれるについて口辯に「フランス語が出来ないで困るが誰か彼地で世話して呉れる人はないだろうか」といはれるまゝに私は前駐支公使重光葵氏宛の紹介狀を渡し喜多さんも非常に喜ばれたことがある。

喜多さんが日本綿花會社をもちたてた功績については誰でも知つてゐるが、喜多さんとしては寧ろ社會的に大望を達成したいとの念慮が旺んであつたやうに思はれる。そのことは喜多さんごの會談の内によく現はれて居た。

私が曾て大正八年の暮北新地のあるお茶屋で喜多さんご快飲した時のことである、喜多さんは「大阪が我國の經濟の中心地であるといふ風に云はれて居るが、まだ〳〵そこまで誇稱するまでには行つて居ないと思ふ、大體大阪の經濟界は少しも統制がされて居ない、誰か大人物が出てこれを統制しなければならぬ」と云はれて暗に自分が今後この方面に活躍して見たいとの氣概を示されたことがある。同時に喜多さんは私に對して「君も個人的には随分苦勞したやうだが今後社會的に苦勞しなければ一人前にはなれない、この社會的の苦勞といふやつは非常に注意をしなければならぬ」と論された。私は喜多さんの此訓示を深く心に銘して時々想ひ出しては自らを慰め且つ發奮して居るわけである。私は其時喜多さんに對して「あなたが今後社會的に活躍される上に於て新聞記者なるものをよく理解し、さらに東京の實業家ご提携されるごことが最も必要である」と忠言したことがある。

喜多さんは要するに大膽にして小心、小心にして大膽の人であつて、典型的の事業家であつた。新聞記者で喜多さんに御世話になつたものはかなり多く恐らく此點は大阪では他にあまり例の少ないことであらうと思ふ。いづれにしても喜多さんが大望半ばにして夭折されたことは浪花財界の爲めまことに遺憾至極である。これ全く打

ち續く財界の不況過勞による不健康の然らしむるころであつたと思はれる。大阪財界混沌として人物上に特色なき今日、痛切に氏の死が惜まれる譯である。

故喜多社長とB主義

山東圓次郎

働くべく生くる哉、生くべく働く哉、蓋し偉人、凡夫の岐るゝ點であらう。故喜多社長の御生涯を追憶せば正真正銘、只是れ奮闘の結晶であつた、誠に偉人稱すべきである。

私が始めて故人の溫容に接したるは丁度二十一年の昔であつた。當時、會社重役云へば安樂椅子に坐つて眼鏡越しに見下すものだき考へて居つた自分に支配人室を右往左往に歩き廻りつゝ統裁して居られる元氣一杯の故人を眺めて我一生を托すべき、正に斯人にあり感じ入つて了つたのであつた。

爾來十九年間、親慕ひ、子愛せられ、親しく御指導を忝ふした。今靜かに過去を追想し、而して忽焉として幽明境を異にせられたる男性的御最後を偲ぶ時、B主義鼓吹者の面目躍如たるものを覺ゆるのである。

私共入社當時の日本綿花會社は又故社長を筆頭として百五十餘名の社員何れも二十歳、乃至三十歳迄の若手揃ひで自分會社の區別無く随分よく働いた。云ふ迄も無く故人の感化である。今日は時間利用を稱して會社の門

を出すれば社務等一切念頭に無きものに比すれば三十八年間の故人の御奮闘は正に一百年に必敵すべきものであらう。

故人を追憶して今一つ感新なるものは情誼濃やかなりしこみである。嘗て私共孟買支店在勤中故人の御來遊があつた。其節故人は十數年前嘗て孟買出張中、英人棉會社にて共に机を並べて働いた印度人の友人を探し廻はして一夜親しく昔を語り合はされたこみがあつたが一寸常人の眞似し得ない所である。

一面には岩をも貫かん勇猛果斷の故人にして他面路傍の草花にも心寄する人情味の人であつた。

商傑喜多又藏君を追悼す

錦華紡績社長 佐藤曆次郎

蓋世の英雄も時に利あらず空しく雄圖を抱いて瞑する者、古來其例に乏しからず、我商傑喜多又藏君の如き蓋し又た此類乎。君は若冠日本綿花の支配人となり瀕死の同社をして忽ち一流の會社たらしめ、勢に乗じて海外各地に支店、出張所を設け、又た支那、南洋に將た朝鮮に棉花、生糸、米、羊毛、ジュート等苟くも白きものは殆んど網羅して諸會社を起し、之に投資し、我國資本の海外發展に先鞭を付けたるのみならず、商賣としては佛蘭西白耳義、伊太利、獨逸等の支店、出張所にて歐米人を相手に歐米の商品を賣買し、全く國際的の商賣を爲せるが

如き、東洋の一孤島より出たる日本人にして日本の商品を頼らず歐米人を相手に輸贏を争ふが如き、其放膽辣腕尋常商人の企て及ばざるものあり、世人財を積めば之を稱し失敗すれば之を貶するが常なるも財の多少は其人物の大小高下に關係なく、其人の事蹟が國家に貢獻するの多少によりて品評すべきなり、君や其筋より位階勲等を賜りて表彰せられたりも雖も如斯きは未だ以て君の功蹟に報ゆるに足らざるなり、華城財界君の如き人物を失ひたるは轉た寂寥の感なきにあらず。今回同君の傳記編纂ある由、後進子弟をして發奮努力せしむるの功多かるべしと思惟す。

支那通の實業家

澤村幸夫

喜多さん私には、年齢においても同輩ではないが、故人に對する親しさの情を傷はないために、さうぞ喜多さんと呼ばしていただきたい。

喜多さんは、私の職業の新聞記者といふことから、特に長い間大阪毎日新聞の支那課長であつたところから日支の經濟關係に紛議が生じたり、日本の國論が沸騰したりするごとに、事務的な交渉を生じ、接觸する機會を繁かつた。大阪毎日で、今日でいへば坐談會——そのころは懇談會といつた——を開くたびに、稻畑さんや、

高柳さん等にも出席を請ふた。ある時は強要に近い横暴をさへ私は敢えてした。かゝる時、あの大きな圖體をやつて、やつて運んで来て、さざり椅子の上に腰をおろされたものである。本山社長が東亞調査會をこしらへられる時にも、亡くなつた兒玉一造さんあたりと共に缺くべからざる人物の一人として喜多さんを推薦して、快き承諾を得た。

南海線のどこかの別荘に靜養してゐられることを豫じめ承知してゐて、迷惑であらうとは百も二百も知つた上で、大阪からわざわざ電話をかけ、對支問題の意見を問ふたこともあつた。亡くなられて見れば、こんなことを初めとして、相濟まないことばかり。

喜多さんに關する私の最後の新聞關係事項は、昭和四年の夏、私の上海特派員となつた後、日支兩國人の事業にたづさはるのは好いが、あこは野さなれ山さなれ、コミッションにさへありつけば、それでいふ支那人の手合が、上海のある土地に投資を求めため、喜多さんを昇がんとしてゐるこの噂を早耳に聞きこんだ際、これは日本のためにも、喜多さんのためにも面白い。若しそんなことをされたら、排日熱瀾漫の折柄、結局兩國紛争の材料となるにしまり、喜多さんは甘い汁をすはれるだけだ。考へたので、私は本社にも内報を送り喜多さんにも再考慮を請ふたことだつた。

露骨にいつたら、喜多さんの對支經濟意見は、高飛車な、名論卓説といふやうなものではなかつた。しかし、よく事情に通ぜられてゐたので、實際に即する意見として私をも傾聴させた。そして、やはり喜多さんの意見を

聞いたのが良かったと思せしめるのだつた。あゝ、眼をこぼるゝ、あの布袋さん然たる我等の支那通の恩人喜多さんの温容が浮びでる。——六月二十四日上海にて——

中支開發の偉勳者

白 岩 龍 平

喜多氏は印度米國を對象とし世界市場に馳驅された。併し最も多くの興味を企業は支那中部に注がれたと思ふ。紡織、棉花、製麻、絹絲、等諸工業及其製品の賣買は其中樞であつた。而して將來の計畫としては棉花栽培に日支合作の大經營を試みんとするにあつた。日本綿花、日華紡織の社長として多忙の時間を繰合せ年々渡支親しく業務を董督された熱心と献身的努力には感服せずには居れなかつた。對支貿易の極盛時楊子江の商工業は喜多氏に依つて代表せらるゝ觀があつた。其企業には一々周到なる計畫と細心なる注意が拂はれて居り普通で成し遂げ得ない事業も喜多氏の手によりて難關を切抜け立派な成績を擧げて居る。漢口の泰安紡織の如き其一例である。該紡織工場は條約港の區域外に位置し、日貨排斥には最前線の受難者である。且つ普通困難を失敗させまつて居る日支合辦組織であつた。喜多氏は現在の専務近藤宗治君を抜いて此事業を委せた。私は人を看るの明ある喜多氏の鑑識を之を擔當して支那南北の對支事業界に異例の實績と模範を示しつゝある近藤君の手腕に推服するも

のである。支那人と共同して支那内地に事業を營むものに取りての多大の教訓が含まれ居る此泰安紡織の經營は蓋し喜多氏苦心の傑作の一つであらねばならぬと思ふ。

喜多氏の對外經營は常に公的觀念を離れなかつた、或は其方が勝つた場合もあらう。故和田豊治氏を誘導して支那に遊ばしめ對支工業及棉花栽培の上に一大國際的飛躍を試みんと計畫された如き以て其片鱗を窺ふべしである。喜多氏は東京に來る毎に必ず外務當局を訪ふて彼地の實情を報告された。故澁澤子を主盟とした日華實業協會も最初より喜多氏は發起人である。氏は又同志と共に大阪に日華經濟協會を創設し東西一致の聯絡を取り輿論の趨向を導く事に努力した。最近數年間對支關係の尤も重要な排日の高潮した時機に國內經濟界の意見が常に一致して内外を指導した事は實に空前の偉觀と謂ふべしだ。曩に滿洲事變の突發に際しても民間經濟界の統一したる意見が發表され政府の當路者も多大の強味であつた事は争はれない。私は之等は喜多氏の没すべからざる功績だと思ふものである。

喜多氏は冷靜籌畫の偉材であつた半面に情熱の人であつた。私は自分の事業上の援助を受け協力を受けたが會て之に酬ゆることを得なかつた事を遺憾とする。事業上の不如意より失意の境遇に立たれてからも氏が上京の度に必ず面會して互に胸懷を吐露した。最後の機會に兩人で墨堤にドライブして黙々として例の氏の假眠の様子を見て心を動かさずには居れなかつたが遂にそれが永訣となつた。今日一年を経て氏の温容は眼前に彷彿として偲ばれる。

喜多氏が生前私を介して澁澤子爵に求められた「細心而大膽」の五大字は思ふに氏が坐右の銘させられたもので以て其人の性格を窺ふに足ると思ふ。

喜多又藏君を憶ふ

副 島 八 十 六

喜多又藏君の逝去されたのは、つい昨日のやうに思はれたのに、早くも半年以上の月日が経つて仕舞つた。

私が初めて喜多君を知つたのは、大正三年春、即ち私が日印協會の理事に就任して表向き會務に携はるやうになつてから以後の事である。最初の會見は多分私の方からステーション・ホテルに止宿中の同君を訪問した時と思ふが、或は君の方から其の當時日比谷の一角に在つた日印協會の事務所に訪問されたのではなかつたか、今は判然たる記憶が無い。

私が喜多君と初対面の印象は非常に好かつた。何となく寛つたりした、大きい所のある、丁度大家の主人公でも評したいやうな人柄に見えた。「此男は近頃の實業界中の掘出物だわい」を直感した位であつた。

其後君と私との交際は約二十年間に亘つた。其間日本と印度との關係は益々密接になり、従つて相互の親善増進を企圖する日印協會の事業も次第に擴張の必要を生ずるに至り、大正七年に入り關西支部を大阪に設置する事

に決した。其處で先づ第一に君の盡力を煩はさねばならぬので、其の相談を持掛けるに、君は即座に「宜しい、私の管理して居る日本棉花同業會の事務所で萬事御世話致しませう」にて、大に氣前を見せられ、私は非常に力強く感じた。其の機會に於て君に日印協會の理事に加はつて貰ふ事になり、爾來君は幹部の一員として最後迄其の職責を全うされたのである。

大正七年の秋歐洲大戰愈々終了を告げ、ベルサイユの平和會議となり、西園寺公が特派全權大使に任命され、同時に政界、財界、學界等各方面の代表者が隨員に加はり、喜多君は關西方面代表の經濟隨員に擧げられた。君は出發に臨み私を介して經濟隨員としての使命達成上の心得に關し、當時尙健在であつた大隈老侯の意見を求められたので、私は早速老侯に取次いで其の口述を筆記し、之を巴里滞在中の同君宛に郵送した。大隈侯の意見の内容は今一々覺えて居らぬが、何でも其の骨子は「大戰後に於ける世界平和維持の根本義は、通商の自由即ち關稅障壁の撤廢と人種差別待遇の全廢」にてあつたやうに思ふ。君からは右に對して折返し禮狀を寄せて來た。多分君は大隈侯の論旨を參考にして裏面に於て活動した事と察せられた。平和會議に際して私の知人も數名彼地に出張してゐるが、是等の人々は滯佛中は勿論歸朝後に於ても、該會議の形勢や日本使節並に隨員に就て種々私に傳へて呉れ、其中に人物評も可なり澤山あつたが、不思議にも異口同音に一致した意見は、日本使節の經濟隨員中で喜多君が一番能く國際經濟上に於ける日本帝國の立場を諒解して居ると思ふにあつた。夫れを聞いた私は、私自身が褒められでもしたやうな心地がして、大に君の爲に喜んだ事であつた。纏て君は無事使命を果し

て歸朝せられたので、東京では紡績界や綿業界の主なる人々の發起により濱町の常盤で歓迎會が催された。其の席上私は列席者達から指名されて僭越ながら代表的に歓迎の辭を述べ、續いて君の挨拶があり、簡單ながら平和會議の真相に就て頗る要領を得た觀察を下されたので、會衆一同大に感心した事であつた。回顧するに既に十有四年の星霜を經過してゐる。人生は實に梭を轉ずるが如くである。

其頃綿業に關する一工業會社が創設され、私も創立委員の一人に加はり、東京は勿論大阪に於ける紡績界其他實業界の有力者多數の贊同を得て、比較的短時日の間に成立を告げた。夫れ迄になるには喜多君の裏面に於ける後援が與つて多きを爲した。こいふのは、君は平和會議に出席前、私の依頼に應じて既に發起人になつて居られたので、新に發起人に加はつた關西方面の主なる實業家は、一々在佛中の君に對して電報を以て意見を徴し、其の熱心な支持を受けた結果であつたのだ。君が信義に厚く然諾を重んずる人であるのは此の一事でも能く判るのである。

楮て右の會社は幾多の波瀾曲折を経て漸く成立の運びになつたが、其後經濟界は所謂反動時代に入つて、經營頗る困難を極め、搗てて加へて會社の内部に於て感情や利害の衝突が起り、大正十二年春遂に解散して他の會社に合併さるゝ羽目に陥つた。其間私が特に君に感心したのは、君が其の會社設立の趣旨に對する信念の確乎不拔なる點であつた。君は會社の事業遂行の爲には自分自身の利害を打忘れ、或は全く利害を超越して何處迄も會社本位、事業本位であつて、終始一貫少しも其の態度を渝へなかつた。そこで私は君が當時の一般實業家は大に

肌合を異にし、一種の模範的紳士である事を確認し、爾來一層君の爲人を尊敬するやうになつた次第である。

元來東京の實業家と大阪の實業家は何となく其の氣質が違ふやうに感ぜられる。勿論箇人々々に就て見れば十人十色で、一概に評する譯には行かぬが、大體から觀察するに、東京方面の實業家は國家或は社會に對する觀念が比較的濃厚で、公益事業に關する理解が早いのに反して、大阪方面の實業家は兎角勘定高くて打算に長じ、天下國家の問題は常に後廻しになる傾向が多いやうだ。然るに喜多君は一面から見ると關西的で、頗る利害の打算にも長じて居たが、同時に可なり國家社會に對する觀念にも富んでゐた。君の此の特長は、君が絶えず關西以外の各方面の人士と接觸し、又廣く世界各國の人物と交際する間に次第に感化を受け、其の人格を練磨された結果でもあらう。併し人間は何うしても附焼又ではいかぬ、矢張り君の天稟が自から然らしめた所であると思ふ。

尙私が箇人として關係した事業、殊に外國と交渉を有する問題に對して、終始君の示された厚意は今尙感謝に堪へぬものがある。其間に君の太腹の點が能く現れ、又私の請を容れ、苦學生に對して快く學資を補助する杯君の人間味に饒かな點に就ても述べたい事は多々あるが、餘り長くなるから省略する。

先年私は三人の女兒中の長女を失つた際、君は心の底から私を慰めて呉れられたが、間も無く君自身も令愛を失ひ、纏て其の追悼録が出版され、一番先きに私に之を見せて呉れられた。私は君と互に手を取つて慰め合つた事であつた。

喜多君の生涯は其の大部分を通じて多方面に互る事業上の活動に費されたが、其の晩年は財界不況の影響や諸

種の事情に由つて一方ならず苦勞された様子で、特に其の本業たる日本綿花株式會社は非常の難境に陥り、君の煩悶焦慮は實に傍で見るとも能く映する程であつた。併し内外から如何程批難攻撃を受けても、君は毅然として節操を變ぜず、不撓不屈益々其の責任を果すべく惡戰苦闘を續け、大に男子の眞骨頂を發揮せられた。斯くて君が必死の努力は幾分其の効果を奏し、同社の整理も一段落を告げ、茲に漸く曙光が認め得られるやうになつたのに、不幸病魔に襲はれ、突如逝去さるゝに至つた君の無念さを察するに、實に斷腸の思ひがある。

喜多君は先年來何さなく健康に異狀があるらしく、何時も對談中こくり／＼居睡りを始め、遂にグウ／＼高駈をなし、同席者を驚かせる事があるので、私も蔭乍ら心配して折々注意を促した事もあつたが、此時既に病因が潜伏してゐたのであらうか、斯んなに早く逝去されやうとは實に思ひまうけぬ仕儀であつた。

今や我が財界の前途は愈々多事多難である。此の難局を打開して我が産業を振興し、國民生活を安定せしめ、以て國運の隆盛を企圖するのは、固より國民總掛りの努力に俟たなければならぬのは言ふ迄も無い事であるが、凡て事業の振興は其の究竟する所人物の活動に在る。殊に事業の中心たり代表者たり率先者たる人物の如何は、其の振興の過程及び效果に於て甚大の關係がある。即ち識見あり、力量あり、手腕あり、且つ膽力あり、勇氣ある人物の輩出を要する所以である。併し以上の資格だけならば、如何に人物拂底の我國に雖も、必ずしも其人に乏しく無い。只今日此際最も翹望するのは、識見や力量や手腕や膽力や勇氣の外に、更に偉大なる徳性を具備する人格である。此の人格こそは實に國家發展の原動力である。茲に於て私は喜多君を失つた事を愈々國家の爲に痛

恨せざるを得ないのである。

序に喜多君の本業たる棉花取引に就て一瞥を試みよう。元來棉花賣買は一種の投機的事業である。調子能く行けば非常に儲かる代りに、一旦形勢が悪くなるに大變な損失を招く、頗る六ヶ敷い商賣である。君は多年波瀾重疊を極むる斯界の闘士として第一線に立ち、悲風慘澹たる激戰場裏を馳驅し、一勝一敗、幾多の實驗を重ねつゝ専ら膽力を養ひ、手腕を練り、立派に男を上げ、遂に代表的實業家としての選手權を獲得するに至つた。併し一面から觀察するに、君の後半生は餘り潮流に乗り過ぎた傾向がある。人間は運ばかりではいかぬが、運も大切だ。同時に運命の神に見離されぬ用心が肝要だ。君は一時餘り運命に恵まれ過ぎてトン／＼拍子に飛躍してゐる中に調子を踏み外し、幾分自重心を缺いたやうにも見える。併し其處は免る可らざる人間通有の弱點だ。必ずしも君一人を咎めるには及ぶまい。

兎に角潮流に乗り合せた者には其の反動が怖い。喜多君晩年の不運は畢竟其の反動に出會つたのだ。之は避く可らざる運命であるかも知れぬが、併し夫れよりも更に恐るべきは反覆常無き人情の危険だ。君が順境に立つて居た時代は、喜多君、喜多君、喜多君でなければ夜も日も明けぬ位に君を煽て上げた喜多謳歌黨の人達が、一旦君が悲境に陥るに、まるで掌を反したやうに打つて變つて喜多排斥黨に轉籍したのだ。此處は畢竟君が人を信賴し過ぎて、對人的に必要な警戒を怠つた爲であらうが、所謂過を觀て斯に仁を知るで、私は寧ろ之を以て君の人間としての偉大さを物語るものゝ信する。若し君に假すに歲月を以てし、向後更に幾多の修練を積み、人情

の機微、社會の表裏を尙一層能く體驗せられたならば、十分難關に善處する事も出来たであつたらうものを、中道にして倒れた事は返すくも残念至極である。

君の晩年の悲境は實に君自身の爲に頗る氣の毒ではあつたけれども、君の關係された事業が繼續する限り、其の功績や感化は決して消失するものではない。國家の進運と共に君の魂は必ず永遠に生き存ふるであらう。君以て瞑すべしである。

仄に聞く所によれば、君は借財の外何等遺産を貽されなかつたので、君の遺族は甚しく生活難に悩んで居られる様子で、目下生前君の昵懇の人々の間に於て遺族慰安の方法が計畫され、著々進捗してゐるこの事である。之は固よりさうあつて然るべきである。日本人は決して國家の功勞者や社會の恩人を忘れるやうな健忘症や無情漢では無い筈である。

四十有餘年間の親交を追懷して

杉 山 金 太 郎

國際的觀念を基調とするマルキシズムは、今や國家的觀念を本流とするファッシズムに轉傾し、各國を通じて此の思想の下に個々の安定を追求する一の特殊的運動が擡頭して來た。所謂左より右に世界を擧げて、特に我が

日本に於て急角度の旋廻が行はれんじつあるに際し、現實性を有する高遠なる理想に乏しく、且つ遠大なる國策に缺くる所多き我が國の現状としては、政治的方面に於て又經濟的方面に於ても、所謂超人の出現を待望する最も重大なる非常時であらねばならないと思ふ。即ち各般に亘り汎く世界の大勢を達觀し、國民を叱咤誘導して心靜かに中道を歩ましむる事が最も必要であると思ふのである。

世界的經濟動亂、思想動亂の此の非常時に際し、私は若し喜多君の如き人が世に在つたならば、其の卓越した手腕を見識に期待する所が多であつたらうと思へられ、逝きし同君を追懷する事の一層切實なるものがある。親交四十有餘年間の長きに亘る私の觀た喜多君の信念、理想を云ふものは、實業界に處しても亦社會の各般に亘つても終生微動もしなかつた様である。

然も晩年に於て其の人格、品性は共に一層玲瓏として珠の如く、圓熟せる卓見と共に正に至人の域に達してゐた。回顧すれば正に四十有餘年前、明治廿四、五年の頃であつたと思ふ。喜多君は大和の國より、私は紀州から、共に現在の大阪商大の前身である所の大阪市立商業學校に在學してゐたのであつたが、丁度喜多君の御令兄の奥様が私の村から嫁がれてゐた事が縁になつて、當時北區中之島常安橋北詰、現在の神戸海上大阪支店の附近であるが、森川屋に云ふ下宿屋に同室し、江戸堀南通三丁目の學校に通學してゐたのである。

當時の下宿料は食費共に一ヶ月三圓であつて、勿論電燈等のある可き筈もなく、三分芯のランプを點じ、當時校内第一の嚴格家で、よく生徒を叱る教頭下野直太郎先生の英語を特に孜孜として勉強したものである。其の當

時の校長は板原直吉先生であつたが、明治廿五年に一ツ橋の教頭をされてゐた成瀬隆藏先生が其の次の校長として來任されたのである。私共は勿論其の當時は十五、六歳の少年であつて、小倉の袴に肩揚げのある飛白の筒袖を云ふ扮で立ちで、夕食後はよく二人連れで散歩に出掛けたものである。又私共の下宿屋が貸ボートを兼業してゐた關係上、時には二人でオールを握り、土佐堀川や堂島川に漕ぎ出したものであるが、喜多君は散歩に出た時でもボートで乗り出した時でも、必ず川口に行く事を主張して、何云はうこ私の言ふ事を聞かない。

當時、川口からは大阪商船株式會社の所謂蒸汽船が黒い煙を吐いて内地沿岸は勿論、東洋各地に向つてゐたのであつて、現今より考へて見れば、大したものでもない様にも思はれるけれども、當時は其の出船入船の堂々たる事は實に素晴らしいもので大阪見物に來阪する人々の瞳を見張らしたものであつた。

喜多君は常に此の状況を靜かに見詰めてゐる事が何よりも大好きであつた様である。歸りを促しても少しも歸らうともせず、或時は薄暮から御互に約束してあつた自習時間が來ても動かうもしなかつた事が時々あつたのである。

今日是れを考へて見るに、喜多君としては船の行く先々を心に描き、既に業に世界雄飛の大理想を當時の幼な心に抱いてゐたものと思はれる。川口に輻輳する汽船を眺め、心ひそかに日に焦けた紅顔を更らに紅潮させ、雄心勃勃として胸の鼓動の高鳴りを覺えてゐた事と思はれる。

幼ない時の此の理想、深く刻み込まれたる此の堅い信念が、將來喜多君をしてあの大をなさしめ世界を股にか

けて我が日本の爲めに萬丈の氣焰を揚げしめたものと、堅く信じて疑はないのである。

此の大理想も、堅い信念の下に進んで來た喜多君は、實に偉大なものがあつた、晩年、盤根錯節に遭ふて益々其の利器を磨き、我が國實業界の中堅として重きをなし、自他共に將來に對して多大の期待を囑望を有してゐるに拘らず、無慘にも天は壽を藉さず、成すべかりし多くの事業を遺し第二次の躍進にスタートを切つたまゝ空しく逝かれた事は喜多君としても嘸かし無念至極であつたらうと思はれる。

然し乍ら一方我が國の目覺ましき經濟的躍進に貢献したる偉業を想ふ時、喜多君にしても莞爾として地下に眠し得る事考へられる。

在りし日の喜多君の面影を偲び四十有餘年間の親交を追憶する時唯胸迫り涙を新たならしむるのみである。

茲に喜多君が少年時代より終始一貫堅き決心を以て勇往邁進し、グレート喜多を建設した一挿話を略述して同君の靈に呼びかくると共に江湖の御清覽を仰ぐ次第である。

パリで會つた喜多さん

高 石 眞 五 郎

喜多さんにはじめてお會ひしたのは一九一九年一月パリに於てであつた。それは偶然會つたといふやうなこゝではなく、喜多さんが大阪を出られる時、私の勤務してゐる大阪毎日新聞社から、同君に對して講和會議に關し

て、公私ともに私を助けるやうに依頼されたからといつて、わざわざ私をホテルに訪問されたのであつた。社からの喜多氏紹介の書面は、私の方においても喜多氏のために爲すべきことがあれば、犬馬の勞を取るやうにこの注意があつた。それも喜多氏が特に私を訪問された一つの理由であつたと思ふ。

喜多氏の名前はもちろん私はよく知つてゐる。しかしお目にかつたのは始めてである。その時の印象を卒直にいへば、まづ年輩において私よりヅツミ上見、押しも押されぬ實業界の重鎮たる風手は確かに備はつてゐると思はれた。人を見て、腕のある人、頭のするぎい人、またこれに反對の人なきといふことは、よほど話をしてないで分らないもの、私は常に考へてゐるが、凡そ人柄といふものは、話をせずとも、その人の前に座つただけでも感じられる。私はまづ喜多氏に相對座して、なるほゞこの人は大阪財界の巨頭の一人である人柄の人だ、さすが肯かれた。そんなことは喜多氏に取つては、さうでもないといふことであるに違ひないが、私はその印象を受けてまづ満足を感じた。これも餘計なことであるが、さか外國にゐて、日本人の有名な人に始めて會ふ場合この「人柄」において缺けてゐるやうに思はれる人であれば、會ふ我々が何だか一種の物足らなさを感ずるものである。それが喜多氏の場合には、私の胸に起らなかつたといふことの意味が、右に書いた「満足」といふことなのである。

その時の談話は、互ひによろしく頼むといふ、今後協力の精神において、喜多氏は私を用ひ、私は喜多氏から便宜を得る諒解の成立を表現するところの挨拶が交換された程度のものであつた。

さて、私は大阪毎日新聞の特派員として講和會議の種取りに當つてゐたのであるが、當時、私の部下には二人の同社員が居た。そこで、はなればなれに宿を取つてゐる私達三人は、我全權の本部になつてゐるホテルの附近に、集合所を持つ必要があつた。オフィスといへば、オフィスであるが、特派員の仕事にはこれぞといふべき事務はない。たゞ打合せをするにこゝに、電報發信のためにタイプライターを叩くらるものである。従つて大きな場所の必要もない。けれども當時バリのホテルはさうも超満員といつてもよく、殊に各國全權の泊るやうな中心部のホテルに至つては、あき間なきは絶対にない。かういふ事情は、遂に喜多氏の許を得て、同氏の借られた室のスイートの一つを私達が使ふことになつた。さういふよりも、喜多氏の親切で同氏の室の一部に居候をすることになつたといふ方が早い。それはホテル・ミラボーであつた、この一事は私達に取り心から感謝せねばならぬ喜多氏の厚意であつた。かく喜多氏の有する一室を私達の集會所と定めてから、毎日いやでも私は喜多氏に會つてゐたのである。否、私達は殆ど喜多氏のセクレタリのスタッフの中に入つたも同じで、一室に會しては同じやうに話をしてゐたのである。そして私は、もちろん自分も出歩いたけれども、その間々にはそこに居て、同僚の持つて来る、情報材料なきを詮衡するのを策としてゐたから、喜多氏と顔を合せてゐる時間が特に長かつた。

かゝる日事が數ヶ月続いたのであるが、さて喜多氏に就て語るべき多くのものを持たないのである。何されば喜多氏と私との間には仕事において共通するところがなかつたからである。たゞこの間に喜多氏といふ人について私の感じたところを断片的に書いて見る位が精々である。しかしそれは一種の人物評になるのであらう。

喜多氏は太つ腹の人である。これが私の受けた印象の一、喜多氏は細事に拘泥しない、何事でも大綱をつかんで、その是非を決する底の態度が、常にありくゞ見へる。従つて喜多氏は饒舌家ではない。否、その點においては兀々として訥辯であり、寡黙の人であるやうだ。尤も喜多氏の演説は、堂々として用語も適切であり、且つ見かけによらない熱を多分に持つてゐるが、茶話の席における喜多氏は決して話上手なまごはお世辭にもいへないやうである。これは喜多氏を知る人の何人も知つてゐるころであらうが、喜多氏は人話をしながら、よく居睡むりをしたやうである。それがたゞの居ねむりではなく、いびきをかくのである。時には眼を半眼に開いてゐて、厭の方がさきに聞へるころがある。まにかく普通人の厭を解するころの聲音が聞へるのであるから、眼の方はごちらにしても、誰でも睡中の人と思ふのである。喜多氏が本當に睡つてゐるのか、居ないのか分らないが、かういふ姿態を對話者は喜多氏において屢々見出すのである。それが喜多氏を豪傑のやうに見せたころも少くないであらう。恐らく喜多氏は鼻が悪かつたのではないかと思ふ。しかし鼻が悪いころでも、居睡りの近所まで来てゐたころも事實のやうだ。かんじんの話の場合にかういふ姿態を示したかごうかは、私の知り得ないころであるが、世間話の場合には、よくそれがあつた。これは喜多氏の人物論をなすに當つて、閉却するころの出来ない一場面である。しかし私は當時ひそかに思つた。喜多氏の脂肪に富んでゐる點に考へて、喜多氏の健康は正常ではない、何ミかして瘦せる工夫をしなければ、壽を全ふし得ないのではないか。

喜多氏は仁俠の人である。これも私の受けた印象に外ならないが、一體、喜多氏はいはゆる商賣人臭くない。

少しいひ過ぎかも知れないが、古武士の風がある。それは喜多氏が折に觸れ物に觸れ、吐露するころの意見や批評を聞くに、喜多氏には關東人なまごのいふ大阪商人の癖は殆ど見られなかつた様だ。困つた人に對しては、直ちに同情し得る男氣を多分に持つてゐたやうである。當時バリに居た或る日本人が、ロンドンである外國婦人マ黎ろになり、夫婦約束までしたらしい、ミころが切れ話になつたらしく、その女がバリに出かけて来て、芝居のやうな數幕が演ぜられたやうであつたが、結局、手切れ金その外若干の條件で、和平解決するころになつた。けれどもその日本人には手切金の調達が出來ず、ミと喜多氏に泣きついたらしく、喜多氏はそれを出してやつたやうである。その金高は二千圓であつたやうだ。これは私が保障する事實談である。喜多氏は私にそれを話さないが、私はよく知つてゐる。その後數年、その日本人は忘恩の人に見え、金を返へさなかつたらしい、しかし喜多氏は依然それを人にも語らず、またその人に對して督促なまごしなかつたやうである。その外、バリに居る日本畫家の繪なまごも、ちよいと買つてやつた。

喜多氏は剛直にしてまた正義を好む人であつた。これも私が喜多氏との談話の間に受けた印象であるが、喜多氏はたしかに剛であつたやうだ。自分を信ずるころがかなり強く、自分がやればやり抜くといふ意力を持つてゐたやうだ。だから世間の事に就ては、相當冷評を下してゐた。喜多氏は曲つたころが嫌ひであつたやうだ。喜多氏の行路はだから正義を目かけてゐたのだらう。私は見てゐた。そこで總締めをして見るに、喜多氏の最も大きな性格は、剛といふころであらうと思ふ、ひき口にいへば、氣の強い人である。たゞその次は人の風采が茫洋ミ

して脂肪質なところに大きな矛盾があつた。まことに惜しい人であつた。

喜多又藏君を憶ふ

武居綾藏

私が初めて喜多君を知つたのは、明治二十五年の事で、當時私は今日の大阪商大の前身である市立大阪商業學校に赴任して参つたのであります。其時君は同校の本科生として在學中で、村田由藏、宮本清三郎等の諸氏と同級であつたと思ひます。

君は天資穎邁なりし上に、温乎たる風貌と友情に厚かつた點等で、當時から能く人心を收攬し、他日財界の重鎮たる可き萌芽を既に在學中から認められて居りました。

明治二十七年十八歳で同校を卒業するや、直ちに日本綿花會社に採用せられ、間もなく孟買に出張、數年間は同地に在つて棉花の賣買に従事して居られました。當時同社の社長であつた田中市太郎氏の信任殊に厚く二十七八歳で支配人となり、益々棉花の輸入及綿糸布の輸出に盡力して居られました。

當時、邦商中棉花輸入の大會社と云へば三井物産、内外綿、日本綿花の三社で、吾國綿業の發展は是等三社の競争的努力に負ふ處誠に大なるものがあつたのであります。就中君が經營の任に當られました日本綿花會社が最近に至る迄斯業の發展に甚大なる貢獻をなされた事は世間周知の事實であります。

君は事を爲すや一身一家の利害のみを顧慮せず、常に同業者及國家社會全般の進歩發展を企圖せられたと言ふ

事は、特筆す可き點でありまして、之に關して君が明治四十三年日本綿花會社の取締役に就任せられて以後の活躍振りは一般に人々の記憶に新なる所であります。故に暫く擱き、其以前の事を擧げて見ますならば、君は棉花本船直取りの創設者であると言ふ事實があるのであります。大體日露戦争頃迄の外國人の日本人に對する横暴振りと言ふものは、日本の國力が貧弱であつた爲めに當然と言へばそれ迄の話であるけれど、兎に角非常なもので邦人は之が爲めに不當な壓迫を蒙つて居た事實は枚擧に遑がない位であります。例へば棉花の輸入に際しても當時の外國人船長等は吾々輸入商の荷主たる地位を無視して勝手に陸揚を爲し、其間斤量の多寡等に付いても有無を言はず荷埃棉等は全部勝手に處分して居たものであります。君は之等外國船の不當なる處置に憤慨し、遂に棉花本船直取りの制度を確立してマーク別け荷埃等を完全に整理し、外國船舶の不當侵害を退ける事に成功したのであります。之は三井の福井氏、内外綿の横尾氏等との協力的努力の結果ではあつたけれど、君の盡力特に大なるものがあつた様に思はれるのであります。此事は一見事小なりと雖も、外國人の勢力が非常に大なる時代にあつて克く吾等の主張を貫徹し、而も之より以後は米穀、銑鐵等を初めとして萬般の輸入商が之に倣つて直取りを爲すに至つたのでありますから、仲々大きな問題で、本邦貿易史上に特筆する可き一事であると思ふのであります。

次に大正十四年に在華日本紡績同業會並に印棉運華聯益會の創立せらるゝに當つて、君が谷口氏と共に大いに盡力せられた事は今尙世人の記憶に新なる處であります。

特に此印棉運華聯益會の如きは、獨り在華日本人綿業者に止らず、廣く支那人並に其他の在支外國人同業者をも包含して能く其の利益に均霑せしむる組織にして大國日本の襟度を示した點等も君の抱負の一端を語るものでもあります。又此會は單に運賃割戻によつて同業者の利益を圖つた言ふ事に止らず、此會の成立に因つて從來外國船舶が絶對的優位を占め勝手に運賃の取極をして居た所の印度上海間の航路に日本船舶を登場せしめ、外國船舶を後へに墮若たらしめたもので、新興日本の意氣を中外に發揮するにも與つて力あつた言ふ事が出来るのであります。

斯様に君は單なる一事業家たるに止らず、正しき意味に於ての政治家的風格を備へ、常に國家社會を念させられたる點誠に偉き可き處であつて、今日國事極めて多端天下に人材を求むる事極めて切なるものある時に當り君を憶ふや切なるものあるを覺ゆる次第であります。

在 鑑 照 於 神 明

瀧 川 儀 作

不肖、明治三十六年漢口に至り歸途九江にて喜多又藏君に會し、來意を語りしに氏も亦不肖と同様の或る企を有し渡清せしを以て、偶々長江方面に於ける燐寸販賣を日本綿花に委せられむ事を求めらる。依つて直に決し舉げて同君に一任す。數年ならずして中清に於ける燐寸の大半は綿花會社の勢力下に歸せり。

明治四十年日露戰後の波動を受け、上海支店事件の發生に伴ひ、日綿死活の大問題を惹起せり。當時氏の決心

容易ならざるものあり拮据懸命の努力空しからず、遂に世界屈指の大綿花會社を作り上げ、自他共に其存在を認めらるゝに至りし功績其苦心は到底筆紙の盡すべきに非らず。

豊太閣の大智を以てして証明の意を果たさず、ナポレオンの豪を以てしてモスコの大敗に遭遇せり。不幸圖らざりき、歐洲大戰關東大震災の影響は遂に吾が又藏君喜多氏をして豊太閣、ナポレオンの轍を履むの不止得境地に立ち至らしめたるは實に遺憾千萬なり。然るに剛直清廉なる氏は遂に意を決して引責辭職の臍を固むるに共、病を冒して茅屋を叩き來意を告ぐ。不肖之に反對し大綿花會社生死を共にし再舉を圖らん事を力説す。更に又同士先輩の激勵もあり、再び意を決し躍進せんしたるも健康許さずして遂に起たず嗚呼。不肖自ら揣らざる關西に於ける某二大會社の競業激甚にして、其弊座視するに忍びざるものあり、當局並に兩社の希望に副ひ之れが調停を試み、更に進んで兩社を一團として斯業の發達を計らんとして成らず、反つて不肖と兩社間に不慮の紛擾を惹起し、久しきに亘りて解けず、偶々喜多氏此間の消息を探知して周到なる調査を遂げ、公正明快なる裁定書を作成して兩者に示せり。時恰かも綿花會社の更生整理等之れ日も足らず加ふるに氏の健康思ふに任せず、到底他を顧みるに暇なき混亂時に拘らず、斯く複雑なる事件を精査し得たる其頭腦の明晰なるに一驚せり。又公人として事業界に忠實にして犠牲心の深き又親友に對する友情の厚き未だ曾て其比を見ざるなり。

喜多又藏君を失ふは獨り吾が財界の損失に止まらざるなり。特に世の毀譽褒貶に耳を藉さず、一に鑑照神明に在りて至誠事に當りたる其人格は後進者の龜鑑すべきなり焉。

孟買時代の交遊

高柳敬勇

喜多氏が孟買に渡航せられたるは確か明治二十九年八月と思はる。同行者山崎知遠氏（紡績聯合會出張員）と共に日本郵船會社備船「オスボルン」號に乗船せられ、當時小生事務長として同船に乘組み居りたるを以て日夜一行と共に談論を交はし、四週間内外の遠航海を面白可笑しく経過して同年九月中旬無事孟買に着港せり。

喜多氏は直ちに「ガダム」商會内に事務所を開設し、棉花買入れ並に船積等の事務を開始せられたり。

同年十一月、小生郵船會社孟買支店長代理を命ぜられ同地赴任と同時に喜多氏も喜んで郵船「バンガロー」に同居する事となり、日々店務に従事し、退店後はウイスキー・ソーダ水に渴を慰し、雑談裡に炎熱の夜を過すを常とせり。

當時氏は二十歳の一青年に過ぎざりしも、常に業務に忠實にして何事にも研究的に努力せられ、自ら満足せざれば已まざる底の勇氣の持主なりき。則ち左に同氏の言行要點を掲げて在りし日の面影を偲ぶ事とせり。

- 一、喜多氏は喜怒哀樂を外に現はされず大人君子の風を備へ居られたり。
- 一、喜多氏は友誼に厚く仕事に忠實なりし。

一、喜多氏は事業を起すに當り必ず國家的觀念を痛慮せらるゝ方なりし。

一、喜多氏は善く部下を可愛がられ、氏自ら大綱を把握して其向ふ處を示し、一に度部下を信ずれば一切を委して其力量手腕を十分に發揮せしむる度量を有せられたり。

一、喜多氏は克己自裁大に努力するの勇者なりし。

其後明治四十一年の初め頃なりしが、故喜多氏より上海支店大損失事件に關し、熱淚決死の御書面に接し、小生も大に驚き衷心感激に堪へざりし事あり。當時小生は郵船臺灣基隆支店長勤務中に有之感激の餘り左文の如き電報を發し激勵申上げたる事あり。

「決死は如何なる難問をも解決する最後の手段なり、損害恐るゝに足らず奮勵努力せられよ。」

當時氏は必死の努力を試みられ、僅々一年経つか経たざる中に損失高以上の回復を爲され、偉勳を擧げられたり。其吉報に接し、小生は喜び極まつて男泣きしたり。氏の事を思ひ出すと小生は何んもなく情けなく感じ出来るものなら小生身代り、更に十年計り氏の生命を延ばして遣りたかりし、何んとして氏の早死は残念でたまらず、君を惜むの情更に切なるものあり。

述 懷

田 中 久 吉

故喜多又藏氏は拔群の能力あり、市立大阪商業學校卒業後直ちに棉花業に志し、日本綿花株式會社に入り、若年にして頭角を顯はし、衰退せる同社の商勢を挽回したり。棉花の營業は價格の變動甚だしき關係上、頗る六ヶ敷き業務にして、多年熟練を積みたる營業者ニ雖も、屢々蹉跌したることは、遠き以前より余の再三耳にしたるにころなり。

氏は資性懇切にして他人の爲斡旋するの勞を惜まず、實業界に於ける成功者にして名聲高く信用厚きにより、各方面より引張り風となり、隨分多くの重職を兼務せらるゝに至りたり。

氏に就て多くを知らざるものは、氏を批判して徒らに新事業を好みたるものと云ふものあらんも、この批判は當らずと思ふ。氏は事業界の爲開發者となり、又指導者となりたるも、日本綿花株式會社を中心として終始一貫したるものなり。同社の資本金が大正七年の五百萬圓より同九年の五千萬圓に達したるに拘はらず、爾後十年を経て六割減資の悲境に陥りたるは、一般的財界不況の影響にして、已むを得ざることならんも、氏は深く自己の責任を感じ、種々の兼務を辭退し、一身を忘れ、一家を忘れ、只會社の爲奮闘せられたるは、誠に氏の心情を察

知するに餘りあるものにして、この犠牲心たるや拔群であると思はざるを得ず。

氏は實業界に在つて寸暇なきに拘はらず、母校の爲盡力せられたること實に尠しせず、母校昇格の爲奔走せられ、率先して、富裕時代は云へ、巨額の金錢を母校の基本金に寄贈し、遂に其目的を達せられたることは、余等の善く記憶し且深く感謝するにころなり。

人間の生命は、素より如何にもする能はざるにころなるが、氏の如き偉業家を突然現世より取去られたるは實に痛惜に堪へざるものなり。然りながら在世中盡すべきを盡し、晩年、實業家たるもの、無制限に業務を擔任するの不可なるを悟り、後世に龜鑑を示されたることは、美事なりと信ず。

故喜多又藏氏の追憶

上 田 彌 兵 衛

故喜多又藏氏は大阪商科大學の前身——大阪市立の商業學校が生んだ實業界の偉人である。故人が我實業界に遺された幾多の事業ニ國家社會に印せられた巨大な足跡を私達は今更の如く感嘆して眺め入る。そして多くの人々と共に、その功績を稱へ偉業を偲ぶべき、其所にはこの巨人不滅の生命が永久に躍動して止まないことを深く感ずるものである。これ等故人の事業や勳功に就ては、炳として氏の尊い傳記に詳載され、又同時に幾多知名

の士に依て審に懷述されることゝ信するので、私は寧ろ氏との永き私的交遊につき、今も目に鮮しい感激の追憶を綴つて故人を偲ぶことゝ致したい。

一

同窓の先輩喜多氏には、學校卒業以來三十年の久しきに亘つて知己を忝ふした間柄であるが、殊に懇親を重ねるに至つた動機は大正四年大隈内閣當時、第十二回總選舉に我等同窓會員を擧げて一大結束が行はれ、恩師加藤彰廉先生を候補に推薦し、見事に素晴らしい大捷を博した時からであつて、彼の當時の記憶は私達の腦裡に何故か未だ生々しいものがある。當時大阪高等商業學校長加藤彰廉氏が突如辭任せられたことが、慈父の如く先生を敬慕する學生達に對して、如何に強いショックを與へたことであつたらう。先生を慕ふの眞情はまた決して當時の在學生ばかりではなかつた。我々同窓會員の總てが更に一層の仰慕を累ねて居るところであるから、その驚愕は一通りではなかつた。而もそれが〇〇〇の壓迫に因るものだとの消息が傳はるに及んで、在學生間にも同窓會員間にも果然一大センセーションを起したことは當然であつた。然し同窓會側では、マサカ、在學生と一緒に騒ぎ立てることも大人氣なしとして、兎に角同窓の先輩、飯尾一二、横尾孝之亮、喜多又藏、肥田熊藏諸氏の斡旋に依り學生側を慰撫して事なきを得たものゝ、斯處で我々同窓の中堅組、少壯組が納らう筈もなく、その鬱憤は何時如何なる動機に爆發するやも知れぬ狀勢で、此所を喜多氏は深く憂慮されたのであつた。それは何と言つても華城實業界に重きをなす同窓會の人々、〇〇〇〇の間に斯言ふことゝから溝渠を深くして行くことゝなれば、

それは纏て大阪市——關西實業界の爲に遺憾多きことゝなる……と言ふ點であつて、喜多氏がこの出來事を以て些々たる學校爭議でないことゝされた見識には洵に敬服の他はない。其所で何ぞか善後策はないものかとの相談を受けたので、私は言つた——〇〇の故實に暗い〇〇が、光輝ある學校の歴史に、偉大な加藤校長の功勞に同窓會の實力を認識しないが爲に斯處のことゝなつたのであらうから、これは何としまも此際、我々同窓會員が如何に實社會に潜勢力を有して居るかを如實に示す必要がある。それには此機會を以て加藤先生を吾々同窓會員の力に依り衆議院に送ることゝ出来るならば、吾々が先生への謝恩の一端ともなり、同時に我々同窓の團結が如何に堅く、その潜勢力が如何に強きものであるかを汎く世間に表現し得る次第である。然し、この企ては實に我等同人がその信を天下に問ふの擧であつて、事の成否は一に貴下を始め二三先輩諸氏の決意と努力の如何に繋ることゝ、何卒熟慮御裁斷を乞ふ——と進言したところ、喜多氏は沈思黙想稍暫くの後、「宜しい、行りましやう」と唯一言、それは實に決然明快な應へであつた。其後一兩日ならずして、飯尾、横尾諸氏とも相談があり、加藤先生の御出馬も承諾を得られたので、同窓會としては嘗て無き大仕事を決行するに至つたのであつた。喜多氏の巨軀が寂しめて沈思黙想の數秒又數秒、「宜しい、やりませう」と唯簡單な一語の中に、何物の障礙をも排除して斷行せんとする決然たる力を私は犇々々感受した。その力、迅速明快なその決斷、續いて息もつかせぬ仕事の進展、私は此時程氏の實際に觸れ得たことゝはなかつた。そしてその大仕事を爲すの偉材である所以を知つて心密に敬服したのである。

斯うして我同志會は殆ど全會員を動員した様な勢を以て選舉戦線の真只中へ乗り出して行つたのであるが、當時同志の誰もが識らない裡に同君の苦心と憂慮は實に切なるものがあつた。殊に一ヶ月程を経た或る夜同君が横尾氏と同導拙居に來訪された時の如き、流石事業界に馳名を馳せられた氏であつても、政治運動には由來餘り經驗を持たれない點を切々として説かれ、餘程心配された模様で、それが何れも、萬一事の成らなかつた場合、同志會と同志後進者の爲に永く累を遺す様なことがあつてはこの心配からで寧ろ餘り事の深く進行せぬ間に斷念しては……までも思はれたことであつたものらしい。私は氏がまだ事に當つて如何に細心綿密であり、同時に如何にその責任を感じらるゝことの強きかに心服しながら、強ひて語を勵まし、詳に選舉區の狀勢を述べて、吾等の運動はその技の巧拙ではなくて、唯熱又熱を以て進むの一途あるのみと説いたのであつた。兩君は私の説くことに耳を傾けられ、早くも選舉運動の何であるかを會得せられたと見へて、爾來猛然同志の結束を督勵された。時恰も嚴冬稀有の寒威を冒して同志少壯の連中は脚絆鞋穿き、手辨當を腰にブラ下けての訪問戦に、恩師を想ふ涙ぐましい情景を描き出し、美しい話題は華城の巷に流れて行つて、社會の同情は翕然この美舉に集中した。斯うして同志會員の殆ど全員を擧げての一糸亂れざる結束の上に、加藤先生は歴倒的な最高點——それは次點者得票の倍數に近い高點を以て芽出度當選せられたと言ふ實に大阪市選舉界の新記録を作つたのである。

二

斯うして我同志會の眞價は一層世に認めらるゝこととなつたのである。處で從來學校には大阪實業界の巨頭と

されて居る人々の内から商議員を囑託され來つたのであるが、其後此等商議員の内に同志の先輩數氏を交へて推薦さるゝこととなつた、勿論其等先輩諸氏は同時に大阪實業界に重きを爲す人々であるから、同志、市當局、學校の三者の間が爾來極めて圓滿に推移し來つて今日に及んで居る、これが爲に大阪市としても、學校としても、また關西實業界としても多大の利便を得たことであつて、全く喜多氏始め同志先輩諸君の指導宜しきを得た結果であり、その功績に歸すべきものこそなければならぬ。また從來同志會は歴代の校長を以て會頭に推載し來つたのであるが之れ以來自治制とし、最初の委員長として喜多又藏氏衆望を擔つて就任されたのであつた。ところで喜多委員長がその就任早々、恰度待つて居たさばかりに——氏の双腕に寄りかゝつて來た事柄、それは即母校の大學昇格問題であつた。喜多氏はこの重大な仕事を擔はれることとなり、爾來數年の久しきに亘つて洵に繁激そのものゝ様な氏の業務の傍、立派にそれを爲し遂げられた次第である。當時私は同志の友、故山邑太三郎氏と俱に衆議院の議席に列して居た關係上、この問題に就ては屢々喜多氏の上京鞭撻に預つたことであつて、幾度か難關に逢着し波瀾を濤り、眞に不撓の意氣で漕ぎつけた譯である。此間喜多氏が私共を督勵された言葉は常に母校愛に燃へ、また同時に同志會の鼎の輕重を世に問はるゝ重大な意義を以てせられ、氏の肺腑より湧き出る如き激勵に依つて、山邑氏俱々東奔西走の幾年かを續け得たことを感謝しなければならぬ。この問題は種々の事情で随分行き悩んだので、それが打開には市當局は勿論市會議員、市實業界有力者、學校當局、同志會員擧つて多大の盡力あつたこと勿論ではあるが、その熱心な協同動作を提身リードされた故人の徳ミカミは慥に偉大なものである。

殊に昇格の一大要件とされた基本金の募集に當つて氏が率先躬行、巨萬の財を提せられた一事は氏没後の實狀に照し見て何人か故人の犠牲的大精神に感激せざるものぞ眞に敬服の他なき次第である。

三

大正八年氏は西園寺公爵に隨行、ベルサイユ平和會議に參列の爲佛蘭西に派遣せしめられたことは氏の輝かしき傳記の中に一段の光彩を放つ一頁であらねばならぬ。氏がその大任を果されての歸途、恰度衆議院議員南洋視察團に加はつて居た私と新嘉坡で落合ふこととなつたので、俱に關係ある南洋護謨拓殖株式會社經營の蘭砂護謨園を視察したのであつたが、時恰も馬來半島の八月中旬炎熱焦くが如く、殊に喜多氏は長途の航海中印度洋の大時化に遭はれ想像以上の大難航だつたさうであるが、氏は上陸早々半日の休養もなく、直ぐその脚でジョホール河を遡つて護謨園を視察され些の疲勞をも見せず、盛に護謨事業に就ての經綸を吐露せられたには、その事業に對する眞劍味とその精力の絶倫なるに驚いたのである。惟ふに氏の生涯を通じて此の當時が最も働き盛りであり、所謂油の乗り切つた時——同時にまた最も得意の時代——であらうことを思はせる程の元氣旺盛振であつた。

南洋護謨拓殖株式會社の創立に就ては故人と私は甚だ深い因縁を持つ譯で、この事業は最初藤田男爵家の奨めで故高倉藤平氏が計畫されたのであるが、喜多氏は常に同窓會員のみで何か事業を起したならば、その親密の度を加へ團結を強くする上にも大きな効果があらうと考へられて居た、私もこれには深く共鳴するところで、此

の事業を高倉氏から譲受け、同窓會員の仕事にしてはと相談を持ちかけたのが初まりで、爾來私が創立委員長として會社の創立に着手してからは、巨細多大の援助を與へられ其結果同社の重役には、横尾孝之亮、喜多又藏、瀧川儀作、野村元五郎、奥村幸二郎の諸氏に私を加へ、殆ど同窓の友を以て組織せられた觀があつた。(尤も濱崎照道氏と故井上徳三郎氏の二重役は同窓ではないが何れも學校には關係の深い方々である) 其所で同窓の長老横尾氏を社長に推した様な譯であつた。それが測らずも喜多氏と彼地で落合つて共に經營護謨園視察の機を得たのも奇しき因縁とせなければならぬ。

四

喜多氏の追憶——と申すよりも、それは私が故人への朝暮の感謝であり、故人から與へられた深き同情と精神的援助とに對する終生の肝銘——としては是非語らせて頂きたい一事がある。故人の傳記中に一語の私事を述ぶるさへ許さるべきでないことは能く辨へても居り、また編者に對しても洵に相濟まぬ次第ではあるが、私の最も親しき友として、先輩として、否無二の恩人として、當の私が故人の世に隠れたる徳を稱へ、高風を仰慕するの眞情に免じ特にお察し願ひたい、地下の故人も亦必ずや莞爾としてこれを容れらるゝであらう。それは大正十一年末日本積善銀行の破綻に連座した私に對し喜多氏の與へられた無邊の友情——汲めども盡きぬ感激の昔語りである。それが爲に私は私の恥を露け出さねばならぬ。當時世人は私と高倉氏との事業關係、又私の政治上の立場等から速断して恰も共謀者の如き見方をされ、新聞紙等にも盛に誤傳された爲か日頃親しき友人は素より、親戚

さへも寄付いて呉れぬので、殆んぎ策の施しやうもなく徒らに楚歌重圍の中に天の時を俟つべく私は靜に眼を閉づるの他はなかつた。その時であつた、その重圍の眞只中へ雄々しくも飛込んで来て呉れられたのが我敬愛する親友、故山邑太郎氏であつた。氏の親しみ深き温容は曇りを帯び、和やかな聲は凜然として——「今日君を訪へるは喜多氏の旨を受けたのであるが今回のこゝ新報紙等の傳ふるこゝろを以てすれば君も亦共謀者なるが如く見ゆる、併し君の平時を識れる我等同人はその誤傳なるこゝろを確信するも萬一不幸にして事實なりとせば遺憾ながら社會の一員として我等も亦君を攻撃するの位置に立たざるを得ぬであらう、若しまた吾々の信するこゝろに誤りなくば一日もこの誤解の渦中に君を置き得ない、我等如何なる難事をも排して君を救ひ出さねばならぬ、因て男らしく有の儘を應へて貰ひ度し」このこゝろであつた。私は言下に「僕は故高倉藤平氏が僕を實業界政治界に引出して呉れた情義に感じ、同家の事業として之れを援助し來つたに過ぎぬ、さりながら事茲に至つた上は潔くその責任を負ふべきこゝろは充分覺悟し居るも共謀云々の如きに至つては以ての外にて心中何等一點の疚しきものなきは天地神明に誓ふこゝろ」に應へたのであつた。山邑氏は釋然喜色を漲らされ「諾、洵にさうであらう、さうなくばならぬ、これは一刻も躊躇して居るべきでない、兎に角喜多氏に復申して直に世の誤解を解くべく努めねばならぬ」に急遽辭去されたが、暫くの後喜多氏より電話あり、「山邑氏より詳細を聞けり、我等全力を盡して君の救援に當るへし、決して落膽する勿れ」このこゝろであつて、それ以來非常の努力を以て世の誤解を釋くに奔走して呉れた結果、却て俄然各方面から同情を寄せらるゝこゝろとなつたのである。私はこの時程友人の有難

味を満喫したこゝろはない。當時私の胸中凡ての世人に見捨てらるゝこゝも、唯この知己を得れば正しく百萬の味方を得るにも勝るこゝろを思ひ、密に光風霽月の心境に陶醉し得たのであつて、喜多氏に言ひ山邑氏に言ひこの友情は寧ろ私が再生の恩人して終生忘れ得ぬこゝろである。

五

其後重役の私財提供問題が暮々たりし際、喜多、山邑の兩氏は年末多忙にも不拘、連日會合協議せられ、忘れ得ぬその年十二月三十一日の夜更くるまゝに、午前二時三時を過ぐるまで喜多氏邸にて正月の養を馳走されながら、眞劍に私の前途に就て協議を重ねられたが、その時喜多氏は私の財産目録を熟々眺めながら「君は世人が見て居る以上の資産を有せらるゝは之れ君の堅實なる實證にして正しくその性格を表はし居るも、今の場合洵に残念ではあるが、財産の全部を提供する他に策なしと思ふ、然しこれ聽て君が再生の道なりと信する」に斷案を下され、山邑氏亦これに同感の意を表さるゝこゝろがあり、私も既に覺悟をして居たので茲に協議一決、私は親戚家族にも相談なく、この友人の判斷が正しいと信じて遂に全財産の提供を決定したのである。當時不動産中には未だ他人名義の儘登記變更の済ませてないものもあつたが、喜多氏の注意に依つて凡てを投げ出し、男らしくその責任を果すこゝろを決心したのである。私は今も尙當夜喜多氏の佛が瞭然と記憶に蘇つて來る。故人は何時もあり人々對談中に居眠をされる癖があつた——尤もこれが爲めに話の要點を逸する如きこゝろになつたのを人々は不思議として居るのであるが——然しその當夜は三時になつても左様な風は些も見えず、實に眞劍に私の前途

を心配して呉れられて居た。その後、於ても何くれもなく私一身上に就ては洵に無二の相談相手であつたが、曩に山邑氏を失ひ、遂にまた喜多氏逝かれて私はたゞ呆然、轉た心淋しき限りであり、懐しき極みである。

その後或友人がこの私財提供に就て、其人独自の見方から、私のこの舉を馬鹿正直の甚しいものとして方角違ひの同情を以て批判を加へたことがあつた、これを聞かれた故人は、其人に向ひ諄々としてその謬見を匡し、現にこの眞摯なる義舉が私の再生に如何ばかり重き役目を果して居るかを指示され一旦投げ出したる財物を惜しむの愚を力説されたことがある、是等は故人の性格を如實に表現されて居るものと思ふのである。

六

大正十三年私が東京に在任することになつてからは、喜多氏はその在京友人諸氏に私を接近せしめる機会を與へられ、上京する毎に晚餐會とか暮會などを設けては能く私を慰め呉れられた。また不斷私に對する世評——と言つたことまでも注意深く調べられて、良きにつけては俱に欣んでくだされ、惡きにつけては其誤解を釋くに盡力され、其他随分面倒な交渉にも自ら當つてくださったこともあり、實に兄弟も雷ならぬお世話を受けたのである。氏の在京友人としては日清紡の宮島氏、村田氏、三井物産の故友野氏、富士紡の宮本氏、豊年製油の杉山氏等特に親しき間柄であられた様に見受けた。

昭和三年田中内閣が米穀調査會を設置の時、喜多氏も私は其委員に任命されて、共に會議に參列することゝなつたが、同じ委員に三井物産の安川雄之助氏、農林次官の松村眞一郎氏あるを見て、故人は我同窓より四人の委

員を該調査會に出したことは甚だ愉快であるに欣ばれた。當時財界多難、日本綿花株式會社も亦此間に處して事多く、氏はその多端なる社務に没頭中であるにも拘らず、不得已して會議に列席されぬときは必ず私を招致して、調査會に提出すべき意見を述べ其傳達を託せられ、又議案に對しては一々意見書を提出される等自己存亡の重大時に臨んでも能く公の任務に奉仕されたことは只々感服の他はない。

七

晩年日本綿花の難關に當り責任を一身に負はれ、社長を辭任すること村田、杉山、宮本の三氏も私に其決心を示されたのであつた。そこで四人が會合して相談をした結果、由來日本綿花會社をあれまでに大發展せしめたのは即喜多氏である。今日世界經濟の難局に處して遂に立て直しの己むなきに至つたのは甚遺憾ではあるが、喜多氏の責任は單に社長を辭任されたからと言つて解消されるものではない、寧ろ氏がこの難關を今一度突破されて後徐ろに勇退を遂げらるゝこそ、その責任を全うする所以であるに信じて、その旨を進言したところ故人は他にも同様の勧告に接し居るに於て豁然これを容れ、實は債務者や株主中に誤解の點もあるので凡ての責任を一身に引受け、辭任することゝが平和に事を治むるものも考へたのであるが、諸君が却てそれは責任を果すの道にあらずとさるゝならば踏み止まつてこの難局に當らう、素より會社將來の恢復には從來に幾倍せる努力を要すること勿論ではあるが、責任を果す爲には一身の勞苦の如き敢て厭ふところではない。また自分の胸中相當の成算ありて其抱負の一端を洩らされ、社長辭任を思ひ止られたのであつたが、果せるかなあの見事な整理を斷行されたの

である。世間は區々の批評を爲すものもある様だが、あそこまで徹底的の整理を遂げるには喜多氏ならでは到底出来るものではなく私共はその苦衷と努力に對し深甚の敬意と同情を寄せるものである。

八

懷顧するに故人がその逝去の一ヶ月程前、私が大阪に來たと言ふので態々訪ね呉れられ久々に今夜こそはゆる／＼晚餐を共にしやうではないか誘ひをうけながら、折悪しく當夜は先約のため残念にもその儘袂を別つたのであつたが、それが喜多氏の永遠のお別れにならうとは夢にも想ひ得やうか、私は今更に天の無情を恨み仰つ。

靜に故人の佛を偲ぶ時、懐しき追憶は遂に果つべくもない。親分肌で——仕事好きで——活動家で——努力の人で——細心で而も豪放な、そしてまた血にも涙にも豊かな巨人の溫容は、今も尙私の心にはほ／＼笑みかゝり、君を慕ふ多くの後進の上を見護るかの様にも思はるゝ、茲に私は故人への盡きざる感謝の誠をこめて筆を擱く、窓外秋雨蕭條、悲しみは更に新たなるものがある。

所 感

八 木 與・三 郎

故喜多又藏君と私は私交上では深い御交際はありませんでした、同業の關係上、同君が日本綿花會社支配人

御就任以來よく存じ上げて居りました。自然色々の場合に於て親しくお目に掛り、同君の人格、特に斯界の爲めには私心を捨て、御盡力せらるゝ點に就いては常に尊敬を致して居りました次第であります。

殊に大正九年綿業界大恐慌の折には寢食を忘れて日夜御奔走下さつた事は今日でも思ひ出して深く感謝致して居ります。尙現在將來共に斯界の爲めに同君に俟つべき事が多くあるものと期待して居りましたが、不幸にして早世されました事は斯界の爲め一般經濟界の爲めにも非常な損失であります。同君は公人としても社會の爲め御盡力なさつて居りましたが殊に、大阪市立高等商業學校が今日の商科大学に昇格したに就て同君の御努力の結果として出來上つた事を承りまして、一層同君の人格をゆかしく御慕ひ申して居る次第であります。

同君は未だ春秋に富まれて將來期待する所が多く色々御考へもあつた事と存じますのに、卒然不幸天壽を全うせられずに逝去せられた事をかへす／＼も残念に存じます。

偉 大 な る 人

山 崎 一 保

私と喜多君とは同じ事業に携つて同じ舞臺に立つてゐたものである。併し私は舞臺こそ同じかつたが居場所が違つた。従つて直接折衝する様な事も尠なく遠方から其の風格を望んでゐるに過ぎない立場にゐた。けれども何

を言つても綿業界では大先輩であるから疾くから非凡な精力家であること、熱心な事業家であることは承知もして居れば敬意も表してゐた。然るに喜多君は直接折衝の役者であつた、私から言へば恩人でもあり先輩でもある兒玉一造氏の早逝に會ふたがために私はゆくりなくも喜多君は直接應酬し折衝する地位に置かれ茲に始めて親しく人爲を知るに至つたのである。が之れもまことに短い時間であつたのは私の今尙残念に思つてゐる所である。

如何なる苦境に立ち難局に處しても其の操志を更へぬと言ふことは餘程傑出した人でなければ出来ぬことである。私は先づ此の一事に於て已に喜多君を傑出した人であると思ふ。君の晩年は其の中年の華々しかつたのに比して餘りにも寂寥であり、又餘りにも苦艱であつたか御察し致す次第であるが、かゝる難局に處しては大抵のものなら逃げ仕度をする。喜多君の場合は他から引退静養を勧めたにも拘はらず、常人なら勿怪の幸ひとして勸説に應ずべきであるのに、斷じて之れを斥けられた。思ふに喜多君は自己の健康の甚だ可ならざることを承知してゐられたであらう。身神も疲憊してゐることも自覺してゐられたに相違ない。殊に大抵の努力では容易に挽回し能はぬ程の創痕を蒙つてゐることをも、萬々知つて居られながら一意専心即ち身魂も一所に打ち込んで何處までも奮闘し、何處までも責任を完了せんせられた。眞に斃れて後ち止むの概を以て起たれた精進力と熱意と眞面目さは涙なくしては見られぬ眞剣さが籠つて居た。此の點は私共が學んで以て範とすべく、仰いで以て師とすべきである。只管畏敬の念に堪へぬ所である。又赤心を吐いて人に城府を設けぬといふことも普通人には出来難い處であるが、私は喜多君に會つて始めて其の偉大な非凡な器であることを知つた。世には風袋のみ大きくて

内容の空虚な人も少くはない。又内容はあつても妙に尊大な人もある。併し喜多君にはそんな點は少しもなかつた。會ふ度毎に非常に明るい愉快な感じと大きな包容の力を見た。夫れは城府を設けない明け放しと言つてもよい態度で商賣人には有り勝ちな懸引や商略やトリックなきと言ふ嫌な分子が微塵もなかつた爲めである。信じ得る。

人による著の倒れたやうなこまで秘密にして見たり、妙に隠蔽して見たり或は他を顧みて言ふと言つたやうなこをするものである。唯獨り故人に限つてそんなこは殆んど無かつた。或ひは性來そんなこは知らぬ人であるかとも思つた。之れは故人の度量の宏大と人の腹中に赤心を置くといふ勝れた所を多分に持つてゐられた爲めであらうと思つてゐる。

夫れから私が故人に心から感服したこは、人と對話してゐる時にも、時々眼をつぶつて居眠りをするやうな恰好をして居られるが話の要點は悉く頭の中に收めて居られて、夫れに對する意見を一言はれたこである。

人の話といふものは大抵聞かなくてもよいこが半分以上はあるものである。喜多君が若し苦勞人でなかつたなら相手構はず「話是要點だけにし給へ」を遣るべき所であらうが、じつと言ふだけを言はせて無用なこも必要なきを自分の方で取捨してゐられたのであらうと考へるこ、あの居眠り學は劇忙に處して行く中に最も妙を得た修練であつたこ、つくづく今更自分の忙しい身體に比べて感服するのであるが、私共は逆も眞似の出来ぬ境地であらうと思つてゐる。

何分にも私が故人を親しく願つたのは、前にも申し上げたやうに極めて短い間のことであつたので、詳しく其の全貌に亘つて申し上げる丈の資格の無いことを遺憾とするが、片鱗を見て己に異常の人であつたこと云ふこと、丈けた充分に感知したのである。故人が多くの春秋を前途に残して、自己の責任を解消すべく努力し、中途にして長逝されたことは、獨り故人の周邊の御悲痛に止まらず、我が綿業界のために悲しむべきことであつて、今更ら哀悼の念を切ならしめる。

謹んで尊靈に對し衷心から敬悼の意を表して僅かに私の申上げたい一二點を申上げたことを御許し下さい。

人情美の喜多さん

山本 願 彌 太

喜多さんは私の最も尊敬せる先輩の一人である。そして今も深き敬慕の情に燃えてゐるのである。大正六年の夏頃、私が日綿の社長室に訪れた時しみじみした調子で「君は御兄弟協力してやつてゐられるのか、いゝね」さか「君の所の週報には俳句がのつてゐるが君は好きなんだね」さか言つて下さつた、それから綿布の總解合の時には不幸にして喜多さんご意見を異にして正面衝突をした事があつたが、虚心坦懐な氏はその後も不相變愛し

て下さつた。

大正十年私が初めて商業會議所議員に推薦された時も、豊島、伊藤萬、丸永各店の外同氏の後援が力強かつた事も勿論である。大正十年の商業會議所會頭戦には御私宅に招かれた時に卑見を問はれたので思ふ所あり反對したのであつたが、同氏及周圍の闘志の盛なりしにより立候補され私もあの激しい會頭戦に参加して御手傳をした。それからその年の秋であつたかと思ふ、中華民國の關稅自主を認める北京會議に日置全權の實業家隨員として庄司氏が赴任さるゝに就て私も行つてはこの御薦めを受けた、私は直ちにその器にあらずと御辭退したが、「君は對支企業反對論者であるが、そうした國際的の檜舞臺に出て一流の人物と交歡をせられると大いに見解も廣まり改論さるゝだらう、殊に外務省の方面からも君に行つて貰ひたいとの私に内交渉があるんだし折角だ是非奮發したまへ」といふ懇ろに諭された、私は氏の知己の情に感激したのであつた、が當時内外の情勢、身邊の多忙がそれを許さず遂に御辭退したのであつた。

またある年の夏、塚卯の宴席で御同席した時に御挨拶をした私は氏の健康を御喜び申した時に氏は、「山本君 Health is my only resource.」なんだよ」といふ内に深い悩みをもたれた御言葉が出たので、何か知ら御氣の毒にさへ思つた、當時私の立場も全く同一であつた。

それから昭和三年の春まで綿業界の問題がある毎によく御目にかゝり御意見を拜聴したが、その四月十八日私の會社は神戸本社の蹉跌から共倒れになつて支店も整理を餘義なくされた、既に滔々たる時勢の悪化の浪に捲き

込まれた店は再起は六ヶ敷私は潔く綿業界を退くか或は又浮木に縋つても再興するかの瀬戸際になつた。整理のやゝ進捗した五月二十四日丁度上海から御歸宅の同氏に豫め御打合せして早朝に拜芝したが、天王寺小宮町の宏壯な御宅を訪れ氏の應接間につゞく書齋に通された時に、日本間からつゞいて青芝の庭が廣く展開されてゐたのを今も記憶するが、肥大なる氏は私の話を聞かれて、實に言々肺肝よりほこばるる熱情をもつて、まるで氏の魂をなげつけるやうに力強く私を激勵された。

君は幾つだ、君は今までに幾ら儲けた、君の借金は幾らあるんだ、その位の金が君の一生に返されぬと思ふのか、大會社の經營をやつてゐた君が腰辨になれるか。

當時先輩の田附氏、横尾氏及思想家として敬慕してゐた賀川氏、別所氏等に説を叩いた、ある人は今更君は小股をくゞる様な小さな商賣は出来ぬであらうし、官界に身を投じて商務官にでもなるか、相當な會社の重役にもなるか、或は支那紡績の經營でもやつてはゞ皆様から、それぞれ好意ある御勸告をして頂いた、その内で賀川氏に喜多氏の二人が全く同一の御意見で、更に再舉を謀れこの御激勵であつた、私は喜多氏の此の激勵の御言葉について

「このおれを見い、俺は君よりづつ辛い立場だが必ず乗切つて見せるのだ云々」
 事實に時餘に亘りいろいろ内輪の御打明け話もあり、そして何くれに御注意もあり優しくも有難い力強い御言葉を受けた、その時の思ひ出に

頼みある交りうれし夏座敷

ご拙句を案じたのであるが、私には同氏の熱心力に、友人を思ふ至情に深い感激を覺へたのであつた。

星移り年代り今は私も細々乍ら理想的に綿布直輸出を目的として小さい店を經營してゐる、その時に受けた氏の迫力は實に名狀すべからざる強いものであつたと思ふ。

昭和五年六月同氏より大株主會に出てくれよとの御勸めを受け出席した時、あの大減資の動議が何の異議なしにすらすら運んだのを見て之れ全く氏の至誠の然らしむるものある爲めと思ひその人格に輪廓の偉大さを讚美せざるを得なかつた。

同時に氏の御やつれになつた壇上の姿は心から御慰め申したい氣持で一ぱいになつて目頭の熱くなるのを覺へたのであつた。その年の某月某日、某所へ旅行し同氏の心境に心邊の御多忙を祭して一書を呈し粗品を送つた。氏に其後御逢ひした時に私の眞心の通じたか、そのさゝやかな贈物を心より喜ばれた、私は此の偉大なる人を綿業界より喪へる事を惜しみても惜しみても猶餘りある事だと思つてゐる。

終りに私が同氏打出の御宅に御訪ねした最後は御亡くなりになつた日の夜であつた、同氏華やかなりし頃を思ひて私は萬感交々迫るのであつた。

冬百花君を圍みて君ぞなき

卒然ご散る驚きや寒牡丹

恩人喜多氏の思出

潮崎喜八郎

初めて喜多さんの風貌に接したのは明治三十四年頃であつたが、丁度孟買から歸朝された氏が、大阪高等商業の講堂で在學生に挨拶された時であつた、何でも其時の氏は耻かしそうに眞赤になられて小さな聲で何を云はれたか分らなかつたように思ふ。

其後明治三十七年の三月に加藤彰廉先生の紹介状を持つて、日本綿花へ就職を頼みに行つた時、親しく面接して下さつたのが支配人時代の喜多さんであつた、爾來星霜二十七年随分長い間恩顧を蒙つた。

喜多さんは一面非常に剛腹で敵意としては飽く迄強い半面に非常に情に脆く、慕ひ寄るものには多少の失策があつても決して捨てられなかつた、自分等も随分激しく叱られた事もあつたが決して氏に背く氣にはなれなかつた。晩年止を得ざる事情で日本綿花の社員を整理されたが其時の氏の胸中は恐らく泣くよりも辛らかつたらうと思はれる。

自分は支那に縁故が深かつたので、氏の支那行には能くお供をしたが、氏は支那の有力者にも知己多く流石に私設公使と稱せられただけに随分裏面に於て日支の國交に努力されたものであつた。又旅行中は非常に多忙で

あつたに拘はらず關係會社の工場はあの肥大せる身で非常な汗を流しながら、隅から隅まで視察されるのが常でこう云ふ事には特に能く努められた、又船中では書類や色々の調査に忙しかつたが其隙々には自分等に能く甚のお相手を仰せ付かつた。甚はお好きではあつたが仕事の息抜きに云ふ風で、取れる云ふ事はなく大抵二、三番でやめられた。其甚風は全局の勝敗よりも局部々々の石の取りやりに特に興味を持たれる様であつた。

喜多さんは精力絶倫で、少々の病氣には頗る無頓着で随分亂暴な様に見へた。働き盛りで早逝されたのも或は此無理押しが祟られたのでないかと思ふが、嘗て上海滞在中の或る夜激烈な齒痛を起し醫者も手の施し様なく夜通しウン／＼唸られて隨行の一同大に面喰つた事もあつたが、氏が病苦を訴へられたのは自分等の知る範圍では只此一回限りであつた。

感激の旅の憶出

近藤宗治

大正三年の交、自分がまだ當時の攝津紡に勤めてゐた頃である。會社の使命で、印度の棉花事情調査の爲孟買に出張してゐた。當時喜多大人は丁度世界一週旅行の途次印度に立寄られて居り、歸路は埃及歐洲シベリア經由歸朝される事になつてゐた。自分は大体印度の調査も終へたので、歸路若し喜多大人の御伴をし得て、未知の先

進路國事情をも知り得れば無上なる幸であるを考へ、大人に伺つて見たところ、

「それはいさ易い事だ。自分も好路伴が出来個人としては何より結構だ、併し君は、會社の命令で印度迄來てゐる、君はまだ春秋に富んでゐる、君が歐米を見る機會は未だ先に必ずある事であらう。君は君の會社から印度の調査を云ふ使命を受けて來てゐる、が歐洲迄の視察は命令を受けて居らぬ。成程僕から君の會社の竹尾氏に依頼をすれば、之れも出来ぬ事はあるまい。併し、これは僕の考へであるが——恐らく、攝津紡にした所がそれを希望するであらうが——君には歸路佛領印度支那安南を視察して歸つて貰ひ度い事だ。それなら僕から君の社宛依頼電報を出して置いてやる。」

云つた譯を懇々話して、當時何故日本の紡績から見ても佛印安南市場の開發が、最も大切な事であるかを切々論ぜられた。自分はこの大人の親切と熱心に動かされた。そして、當時殆ど未知の儘棄てられてあつた佛印市場の視察こそは、この若き自分に與へられた使命でなければならぬと云ふ事を痛切に感じ、是非共決行せねばならぬと云ふ決心に燃へた。

其儘孟買で大人は西と東に分れた自分は、歸路香港迄辿りついた。會社の方からは案の掟佛印視察の命令が來てゐた。ところが生憎自分はこの地でチブスに胃された。其後社の方からは病後の事でもある故右視察は中止せよとの同情的命令がやつて來た。併し、自分には今更乍ら自己一身の事情で右の使命を左右すべく孟買で受けた喜多大人の激勵と熱誠はあまりに力強く樹えつけられてゐた。自分は本社に、「健康は完全に恢復した、佛印

視察決行の爲め出發した」この置電報を打つと同時に、その日海防行の船にのつて香港を立つたのであつた。

總ては熱誠、意氣、親切——これらは、孟買での僅かの間であつたにも不拘、喜多大人から受けた最初の偉大なる感激であつた。そうしてその感激こそ、自分にこの使命を決行させた唯一の原動力に外ならなかつた。

x

x

x

それから半ケ年の月日は立つた。自分は首尾克く右の視察旅行を終へて久し振りに故國の土を踏む事が出來た。喜多大人はそれより先に北シベリアから恙無く歸朝されてゐたが、態々大阪驛頭に自分を出迎へられた。自分を見つけるや否や大人は、誰よりも早く先づ自分に近寄り、いたわるやうに

「よく行つて來た、さうだ、身體は」

云つて熱き々々握手を交された。孟買での感激——大人は西から北へ、自分は南へ、そうして數ヶ月後のこの熱き握手こそは、以後喜多大人が、幽明境を異にせられる迄私に注がれた指導と薰育の起縁である。

自分は今、故人の偉業の一部を受繼いで中支の奥地に孤影獨立、その經營に親しんでゐるが、製品の喜鵲は遠く四川、雲南の境を経て佛印にも行つてゐるさうだ。佛印！さう思ふと云ひ知れぬ若氣の感激が一度に蘇つて來る、さうして今更乍ら故人の人懐っこさが沁々込み上げて來るのである。

朝鮮製油と社長の憶出

牛 丸 喜 一

僕は正七年朝鮮製油會社創立以來社長の指導下に之が經營に任じたのであつたが、小事業ながら數年間の苦難時代に處せられた社長の苦心が如何程であつたかは自分が朝鮮から歸阪する毎に

「君が来るに社長は君の方の會社の打合せに多くの時間を割かれるので閉口だ」
 「綿花會社の營業當局が戲談半分に言はれた程で、以て如何に社長が朝鮮製油の爲めに精神を使はれたか此一事で想像に餘りある事と思ふ。十三年になつて處女配當をなし愈順潮に棹す事になつたが當時既に綿花會社の一手經營に歸して居た日華製油と合併する事となり、茲に朝鮮製油の名は世上から消滅する事になつたが此九年間社長と共に喜び共に苦勞した過去を追想するに、云ひ知れぬ感懐を覺ふのである。而して自分が此間に特に社長の人格に感じた事は部下の仕事に對し心からの欣びを天眞に表現される事で所謂「部下の失を責める事には至極寛宏で其得を賞しては餘す所なし」と云ふ全く主將たる人の仁徳で故社長は天性此徳を十二分に具備されて居つた様に思ふ、之れが各方面有爲の人士に社長の爲めには水火も猶辭せずこの感念を自然に涵養させた所以で誠に天賦の將帥の大器であられた事を痛感する次第であります。

追 憶

袁 蔚

余識 社長二十年惜天各一方會晤日淺未克久沐薰陶斯爲遺憾耳 社長精力絕倫手腕邁衆社運之蒸蒸日上正可計日觀成曷期噩耗傳來遞歸樂土老成凋謝人哲云亡天乎天乎殊勝慟哉猶憶 社長蒞漢數次每接溫容愛逾骨肉今雖騎鯨西去其偉大事業之彪炳人間其和藹笑貌之浹人心際將不能窮其所屆孰謂 社長已死哉謹綴軼事一二以誌景仰而爲紀念焉大正甲子年 社長手搦之泰安紗廠告成開幕之日中外來賓畢至 社長致詞余任翻譯其演詞爲加藤取締役所作洋洋數千言余先悉心誦讀始得梗概而 社長僅登壇時略一過目即滔滔不絕口如懸河甚至首尾不遺一字其頭腦之明晰與夫記憶力之過人殆世所謂過目成誦之神人者矣宜乎其生前之事業浩繁數十年每以一身而兼繁劇之數職仍遊刃而有餘也又昭和戊辰年余承 社長特許得作東瀛之遊至則款洽殷勤訓誨懇摯且爲洗塵於大阪第一之料亭及抵東京適 社長因公留比又囑東京支店支配人武富先生爲余設宴其對區區一社員之情誼尙如是篤厚旋知 社長愛社員之深至今猶耿耿在懷不忘其盛情也伏憶 社長平日待社員訓誨之時有如嚴師而愛厚之處又儼若慈母是以社員同人莫不翕然樂從其指揮而社中上撫下敬之風實非他社所可企及良有以也

社長邈矣山高水長典型猶在余願與社中同人秉承其遺志努力社務以求無負其創業之苦心與夫優渥之德惠庶幾 社長雖死其精神事業尙永垂於不朽

In Memorium.

Mr. Kita, the late President of The Japan Cotton Trading Co., Ltd., (Nippon Menkwa Kabushiki Kaisha), first came out to India about the beginning of the twentieth century, as an agent of his company. In those days Messrs. Gaddum & Co. used to work for Messrs. Japan Cotton Trading Co., Ltd. Mr. Kita returned to Japan after about five years' stay.

I first had the pleasure of meeting Mr. Kita in about 1913 when he had come to India as Managing Director of Messrs. Japan Cotton Trading Co. Ltd., who had since 1907 their own offices in Bombay. Subsequently in 1919 Mr. Kita came to Bombay on his way back from France, as President of Messrs. Japan Cotton Trading Co., Ltd. with whom my firm have been connected for nearly a quarter of a century.

Mr. Kita struck me as a live person, belonging to that category of men which every country must have, before it makes big strides in the sphere of commerce abroad and in domestic industrial development, on a substantial scale. During my several interviews with Mr. Kita during his stay in Bombay, I found him commanding a broad outlook in industrial

and commercial matters generally, and particularly regarding Japan's progress in commercial and industrial matters both at home and abroad.

Mr. Kita combined with a most amiable personality, the rare power of impressing persons with whom he came in touch with his great desire to live and let live in business enterprise. The phenomenal development of Messrs. Japan Cotton Trading Co., Ltd., was under the general guidance of Mr. Kita either as General Manager or as President of the Company; and although his many engagements did not permit him to visit India again, when I heard the sad news of Mr. Kita's death I felt that in him had passed away a great Japanese and friend of India as far as India's commercial connection with Japan was concerned.

Sir Purshotamdas Thakordas

Late Mr. M. Kita - an appreciation.

The death of Mr. M. Kita which took place on January 1932 at Osaka Japan has removed from our midst one of the foremost men of business, to whose energy and foresight

the recent developments of the trade and industry of Japan are mainly due. Mr. Kita was up till the last day of his life President of the well-known firm of Nippon Menkwa Kabushiki Kaisha (Japan Cotton Trading Co. Ltd.) of Osaka who established its office in Bombay in 1907 May and which is one of the most prominent firms connecting India and Japan in business relations having many branch offices in many parts of the World. It was during the Presidentship of the late Mr. M. Kita, that Menkwa reached the high mark of its success and prosperity, when once it declared a dividend of no less than 100 percent to the shareholders. The success of the Company in earning its profits and in spreading its activities in the various fields of commerce was largely due to the energy and the foresight of its President who appreciated the growing importance of Indo-Japanese trade with the result that at one time his own company alone was able to handle an export of half a million bales of cotton to Japan from India and an import of piece-goods worth more than thirty million Rupees in a year from Japan to India.

Besides being one of the foremost men of business in Japan, Mr. M. Kita had much public and political service to his credit and was considered one of the prominent politicians of Japan. In the year 1919 the Japanese Government had sent him as a delegate to the Peace

Conference in France where his services were greatly appreciated.

The present writer remembers with pride his association with him when he came to Bombay in 1914 and 1919, and the contact he kept up by a friendly correspondence for more than twenty years from 1907 to 1930. He was indeed a noble and a generous hearted gentleman, who impressed each and every one who came in contact with him once. During his life time Mr. Kita had travelled in almost all the chief business centres of the World. In him Japan has lost a distinguished son and the world a great business man.

Dwarkanadas Tribhovandas.

J. P.

Bombay.

My Memories of A Great Man Mr. M. Kita

A number of years ago it was my privilege to meet and know Mr. M. Kita personally.

It is quite difficult to describe my impressions of this truly great man without generalizing to a large extent, however, the Writer will confine his remarks to just a few major impressions he left with me.

Mr. Kita possessed a most pleasing personality in business; his bearing was quite imposing, portraying firmness of unquestionable recognition, however, one felt quite at ease in his presence.

Like all truly great men, Mr. Kita was retiring and modest, but back of all this, there was a brilliant master mind, a face beaming with intellect, a character without a blemish. His unquestionable integrity stood out in every phase of his life. Mr. Kita was not only a power in private life, but has to his credit many outstanding accomplishments in the business world. The Writer knew Mr. Kita, as Managing Director of the Nippon Menkwa Kabushiki Kaisha, in which institution his unerring hand and master mind played a major part in the unparalleled success of the firm. The Writer esteems it a great honor and privilege to have served the Company during the life of Mr. Kita.

May I give you now something else that impressed me very much about Mr. Kita-

he loved art. I was somewhat amazed to find this sturdy man of the business world with a highly developed knowledge of the artistic side of life. He happily told me of his beautiful flower gardens which surround his lovely home in Japan, and rank as the most gorgeous in his native land. They were designed and completed under his personal direction. This work of art will live in his memory as one of the beauty spots of his native land. The Writer has in his possession a beautiful photograph of these gardens, which I treasure most highly.

I also found Mr. Kita quite fond of music. It was my privilege to have him in my home. He requested my daughter to play the piano and sing for him. I was delighted to find how highly appreciative he was and the keen interest manifested, as he remarked "Music is the greatest source of relaxation and pleasure I have. Will you please play more for me?" I thank you for the privilege of contributing these recollections of our good Managing Director and friend.

B. F. Rowe

In Memorium.

To come within range of Mr. Kita's outstanding personality was a great pleasure to me when I visited Japan in 1923 as the Company's Woolbuyer in Sydney. While typifying to a marked degree that innate courtesy characteristic of his Race, Mr. Kita struck me as a man possessing a most acute mind, sound judgment, and as one who was ever ready to favourably consider any suggestions which might lead to expansion in the Company's activities or improvement in its business relations. As the head of a huge trading concern, Mr. Kita appeared to me to personify efficiency, and I should say that sincerity was the keynote of his character. I much deplore the passing of this great Captain of Industry.

Harry B. Webber

In Memorium.

As lustrous gems in an ever enduring crown of immortality, Matazo Kita must have

foundall of his good deeds, his gentle kindness, his charity and brotherly love for his fellow man, when he crossed the Great Divide, where time blends with eternity.

I shall always regard it a privilege and an honor to have met and known this good and great man during his sojourn in the United States. While I was with him only occasionally, and then for only brief periods of time, the charm and sweetness of his personality won my heart. As a keen thinker and observer, an able and efficient business executive who was master of his trade, he was admired and respected by me and by all who knew him. As a good man, filled with the milk of human kindness, he won a place in our hearts, and that place now feels the pain of his loss.

Mr. Kita impressed me as a strong, brave and courageous yet gentle and kindly man. As a man of dignity, great powers of intellect, possessed of great knowledge and wisdom, yet having, with these, the graces of modesty and humility. One felt that here was a man to whom Providence had been good, and upon whom He had bestowed the wonderful gifts of wisdom, understanding, counsel, fortitude and knowledge. Here was a man of whom it could truly be said that "he could walk with Kings nor lose the common touch."

His heart was in helpful intercourse with his fellow man, and those who served, in subordinate capacities, the organization of which he was the head, regarded him more as a Father or a big brother than as their superior officer. He merited their devotion, for he always took a kindly and helpful interest in their welfare, and made them feel that they working with him and not for him.

The success and growth of this organization is due to his fine intellect, devotion and untiring energy. With these he also ably served his country and the world. In his passing, not only this organization, but his country and the world has lost a great, good and noble soul. News of his death brought pangs of regret to me and to all who knew him. Long after he is gone from us, memory like a tender vine will cling around his name and proclaim him truly great.

May he rest in everlasting peace.

A. Mayhew

In Memorium.

My first interview was one never to be forgotten. It was during the great congestion of cotton in Kobe, cotton was stored everywhere, on the beach, in the fields, in the open and delays in delivery were very serious indeed, in fact I had a photo of bales of cotton with mushrooms growing thereon. It was a serious time, Mr. Kita with one of the Japanese gentleman from your firm, I forgot his name, came to my office (Pacific Mail) and introduced themselves and explained that they wished to see what could be done.

The fair minded manner in which Mr. Kita spoke and the splendid upright way in which he invited suggestions, struck me at once, and from that moment I felt that I had made a friend. He bore his share of the troubles, instead of trying to throw all the blame on the S. S. Co. We sat quietly like old friends and discussed the situation and inside of an hour or so a friendly and honorable conclusion was arrived at, all entirely due to the ability and fair and square manner in which Mr. Kita received and made suggestions.

From that moment I felt that we were friends and it was always a pleasure to call upon

him, whenever I visited Osaka where I always received a warm welcome.

When my son was wounded in the Great War he wrote me one of the finest letters which I have ever received. I treasured that letter but it was lost in the great earthquake.

I enjoyed visiting Mr. Kita's home in Osaka and looking at his treasured Orchids. He always took me right into the family and made me feel entirely at home.

W. W. Campbell

悼弟

商工報國畢生望
 遮莫九原魂應瞑
 魂今一去隔幽明
 老憶更加寥落感

未果忽焉中道僵
 勳三位五聖恩長
 健弟豈圖先病兄
 同胞我獨保餘生

三月念七日葬亡弟遺骨於高野山

幽居占得碧山巔
 三寶之聲朝夕聽

靈侍大師瓊水邊
 何疑佛果永生天

つきくにうせてむたりのはらからの

われひみりこもなれるさびしさ

大藏

あとがき

私の畏友であり且大恩人である喜多大人の傳記編纂につき、拙らす我社より指命を受けたのであつたが、不才素より其器にあらず、況して文藻に乏しい素人の事であるから、美辭麗句を列ぬるの技巧なく、唯率直に、有の儘の史實を、忠實に平凡に拾ひ書きしたに過ぎなかつたので、讀者の感興を惹くに足らない事は勿論である。而も俗務の傍、數月の短時日間に匆忙筆を採つたのであるから、勢ひ粗製濫造の誹を甘受する事も亦覺悟の前である。唯幸に喜多家を始め油谷恭一氏、粟飯原健三氏、岩本榮三郎氏、喜多大藏氏、河野次郎氏、河村重一氏、加藤義親氏、木戸兼次氏、村田由藏氏、松井傳十郎氏、松原肇氏、鍋島保之助氏、長野勳氏、尾崎庚氏、奥村正太郎氏、庄司乙吉氏、高柳敬勇氏、和田種之助氏、山田穆氏、安井豊太郎氏（ABC順）並に社内及傍系會社諸君等より多大の御厚意を以て資料其他の御援助を辱ふした外、又御多忙中の大方諸賢が色々の感銘すべき追憶辭文を特に御執筆下さつたことによつて、私共の記述の足らない處を補足するに十二分であり、本傳記上に光彩を添へて下さつた事を深く感銘致す次第であります。爰に擲筆するに臨み謹で厚く御禮申上ます。

編纂委員主任

昭和七年師走月

大岡破挫魔敬白

昭和八年一月二十日印刷
昭和八年一月三十日發行

【非賣品】

編纂兼發行人

神戸市須磨區離宮前町百五十一番地

大岡破挫魔

印刷者

大阪市西淀川區海老江上二丁目六番地

木下正人

印刷所

大阪市西淀川區海老江上二丁目三十七番地

木下印刷合資會社

電話土佐堀七五七七番

大阪市北區中之島二丁目十番地

發行所

日本綿花株式會社